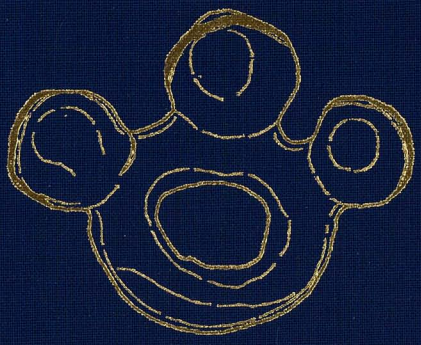
埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書2

千代遺跡群

―弥生・古墳時代編―



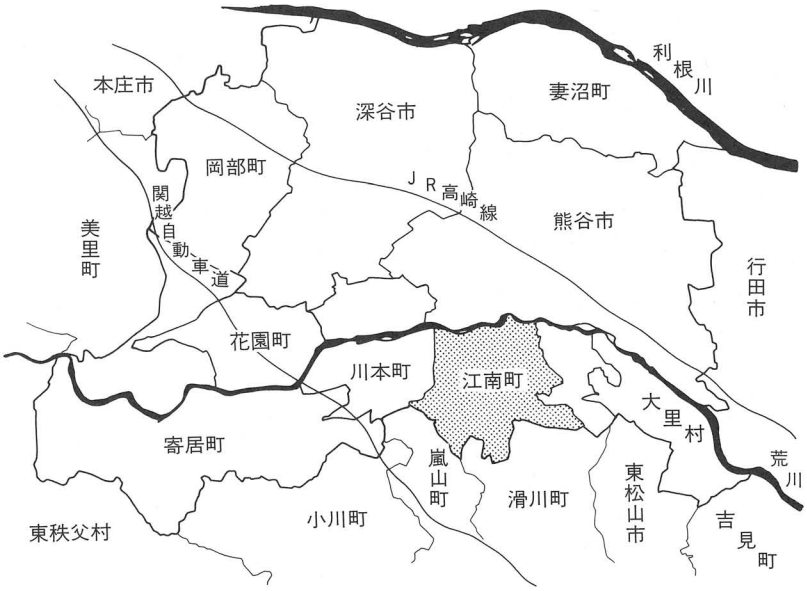
1998

江南町教育委員会
江南町千代遺跡群発掘調査会

埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書 2

千代遺跡群

— 弥生・古墳時代 —



1998

江南町教育委員会
江南町千代遺跡群発掘調査会

題字　岡部　進筆



千代遺跡群遠景（1992年11月撮影）



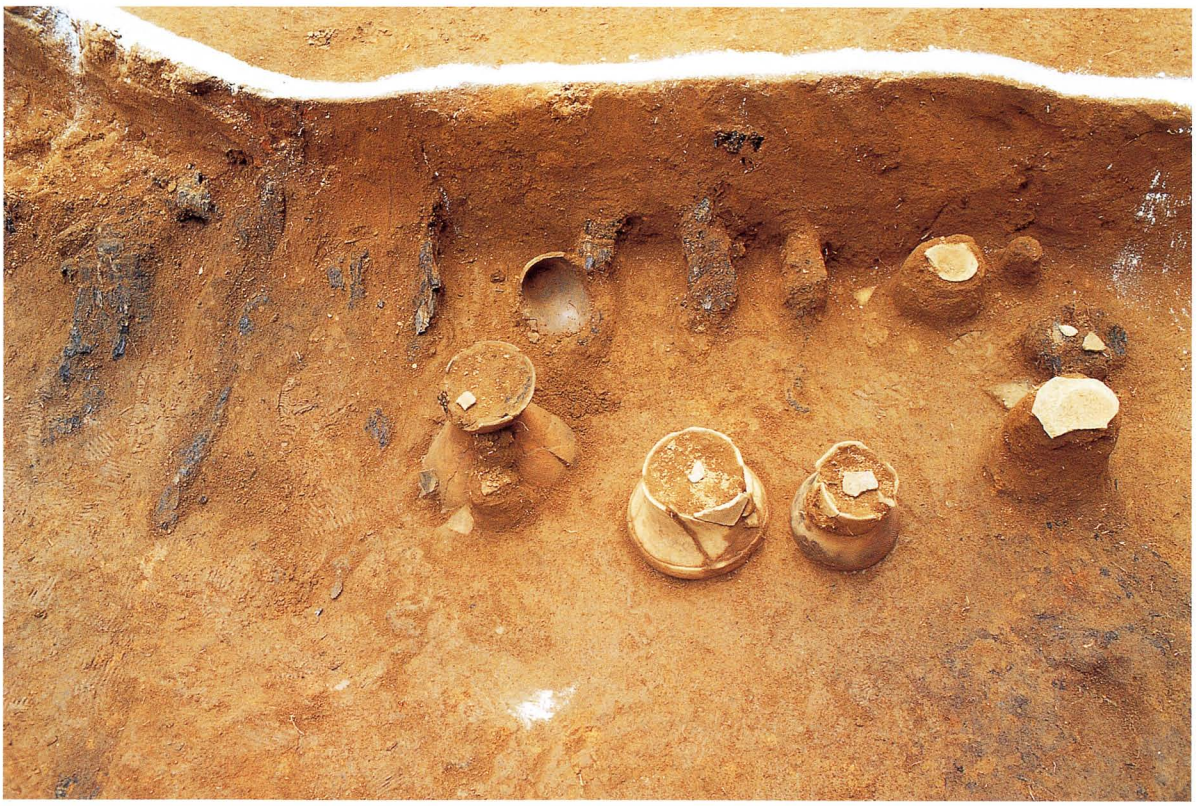
姥ヶ沢埴輪窯跡群（1990年12月撮影）



権現坂埴輪窯跡群（1990年12月撮影）



姥ヶ沢遺跡第1号住居跡遺物出土状態



姥ヶ沢遺跡第5号住居跡遺物出土状態



富士山遺跡第25号住居跡遺物出土状態



富士山遺跡第26号住居跡遺物出土状態



姥ヶ沢埴輪窯跡群全景



姥ヶ沢埴輪窯跡群第4号窯跡

序　　文

一昨年発刊の『千代遺跡群―縄文時代編―』に引き続き、ここに『千代遺跡群―弥生・古墳時代編―』の発刊を迎えることができました。

本編を上冊できましたのも、県文化財保護課・理事会並びに調査団・関係各位の皆様のご指導をはじめ、埋蔵文化財に深い理解を示され、発掘調査に協力をいただいた株式会社埼玉地域開発公社、そして、発掘調査員・作業員の方々のご協力によるものと、深く感謝する次第であります。

本編は、弥生時代の集落跡である姥ヶ沢・富士山遺跡および古墳時代の集落跡・埴輪窯跡群である姥ヶ沢遺跡・権現坂埴輪窯跡群を中心とする遺跡の報告となっています。埴輪の窯跡の調査例は県内でも少なく、今回調査された姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡群の２遺跡は、地理的にも時期的にみても同一生産地として把えることが可能であり、県内最大規模の窯跡群となることが確認されました。今回、調査面積の制約から工人集落は確認されませんでしたが、埴輪窯跡・作業場である工房跡・良質な粘土を得た粘土採掘坑等が一体として確認され、当時の埴輪生産活動を知る上で貴重な資料が得られたものと自負しております。

権現坂埴輪窯跡群は、県選定重要遺跡に指定されておりますが、今回新たに道路予定地内に、埴輪窯跡群が発見されたことから、急遽その重要性から道路を設計変更し、埴輪窯跡群を保存する事が出来ました。これは、株式会社埼玉地域開発公社のご理解と、関係諸機関・諸氏の努力の賜物と深く感謝しております。なお、この新たに発見された埴輪窯跡群は、地権者の方々のご理解により、平成９年度中に町の指定史跡として指定される予定となっており、後世へその貴重な文化財を伝えられるよう努力していきたいと考えております。

最後に、本編が貴重な出土遺物の保存活用とともに、郷土資料のための書としてまた、遺跡保護・教育普及の資料として広く活用されますことを願って、序文といたします。

平成10年３月吉日

千代遺跡群発掘調査会長

江南町教育委員会教育長　岡　部　　進

例　　言

1．本書は、埼玉県大里郡江南町大字千代地内に計画された「江南バードレイクカントリークラブ」ゴルフ場造成にかかる事前の埋蔵文化財発掘調査報告書第２集である。

本書の内容については、弥生時代から古墳時代までとしている。

なお、遺跡群の面積と時代が広範に及んだため、第１集縄文時代編・第２集弥生古墳時代編・第３集歴史時代編とした。

また、平成５年11月15日「江南町千代遺跡群発掘調査概報」を上梓しているが、本書をもって正式報告とする。

2．遺跡群名は調査地の大字地名からとったが、地域内には次の遺跡が所在している。姥ヶ沢遺跡（江南町第01号遺跡）・富士山遺跡（江南町第03号遺跡）・権現坂埴輪窯跡群（江南町第08号遺跡）・権現坂遺跡（江南町第09号遺跡）・天神谷遺跡（江南町第14号遺跡）・寺内遺跡（江南町第17号遺跡）・西遺跡（江南町第18号遺跡）・天神遺跡（江南町第52号遺跡）・山神遺跡（江南町第83号遺跡）・北方遺跡（江南町第84号遺跡）・西原遺跡（江南町第85号遺跡）。

3．発掘調査は、事業主体者である㈱埼玉地域開発公社より委託を受け、江南町教育委員会が組織した「江南町千代遺跡群発掘調査会」が実施した。調査会の組織については別記のとおりである。

4．発掘調査は、平成元年８月30日に試掘調査から始まり、平成４年11月30日まで実施した。個々の遺跡の調査時期については別記している。

整理報告作業は，平成４年12月１日より開始し、現在継続中である。

5．出土品の整理及び図の作成は、新井端・森田安彦・永井智教が当たり、以下の者の補助を得た。

（補助員）新井芳江・上杉文子・大島安子・小澤三春・神谷君子・志村モト子・竹澤和子・橋本紀子・福島和子・松田清美・桃薗正志

6．写真撮影は遺構を各調査地区を担当した調査員が、遺物を新井端・森田安彦がおこなった。

航空写真は、中央航業株式会社に委託した。

7．本書に掲載する遺構測量図の内、等高線・座標表示のあるものは現地測量及び写真測量を図化・トレースしたもので、業務は中央航業株式会社に委託した。

8．文責は各節の終りに示している。遺物観察表は、主に弥生・古墳時代の土器・石器を森田安彦が、埴輪を永井智教が当たった。

9．本書の編集は、柳田敏司の指導のもと、森田安彦が行った。

10．本書の刊行までには多くの方々・研究機関からご教示・ご指導を得ているが別記させていただいた。

江南町千代遺跡群発掘調査会の組織

理事会

顧　問	柴田忠雄	江南町長	(平成元年9月～平成5年3月)
	杉田彌平	前江南町議会議長	(平成元年9月～平成5年3月)
会　長	細井　多	前江南町教育長	(平成元年9月～平成2年3月)
	岡部　進	江南町教育長	(平成2年4月～)
理　事	(専門委員)		
	柳田敏司	埼玉県文化財保護審議会会長	(平成元年9月～)
	田中一郎	埼玉県文化財保護審議会委員	(平成元年9月～)
	市毛　勲	日本考古学協会会員	(平成元年9月～)
	(委員)		
	富田宗平	前江南町議会議員	(平成元年9月～平成5年3月)
	橋本亀明	前江南町議会議員	(平成元年9月～平成5年3月)
	柴　芳夫	前江南町議会議員	(平成元年9月～平成5年3月)
	長谷川七郎	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成5年3月)
	上杉　正	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成5年3月)
	吉野　廣	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成5年3月)
	笠原金久	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成5年3月)
	関口正典	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成5年3月)
	岡田光恒	前江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成3年10月)
	梶　吉郎	株式会社　埼玉地域開発公社	(平成元年9月～平成6年1月)
	小賀野幸作	株式会社　埼玉地域開発公社	(平成元年9月～平成8年6月)
	萩原文隆	株式会社　埼玉地域開発公社	(平成8年6月～)
	(監事)		
	梶　吉郎	株式会社　埼玉地域開発公社	(平成元年9月～平成6年1月)
	岡田光恒	前江南町文化財保護審議会委員	(平成元年9月～平成3年10月)
	上杉　正	江南町文化財保護審議会委員	(平成3年10月～)
	椎橋四郎	株式会社　埼玉地域開発公社	(平成6年6月～)

調査団

団　長	柳田敏司	埼玉県文化財保護審議会会長	(平成元年9月～)
調査担当者	新井　端	江南町教育委員会　主　任	(平成元年9月～)
	森田安彦	江南町教育委員会　主　任	(平成元年9月～)
	関口正幸	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成2年4月～平成3年3月)

事務局

事務局長	吉田久雄	前江南町教育委員会　次　長	(平成元年9月～平成4年3月)
	茂木弘行	前江南町教育委員会　次　長	(平成4年4月～平成7年3月)
	橋本安行	江南町教育委員会　次　長	(平成7年4月～)
事　務　長	塚田正久	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成2年4月～平成2年12月)
事　務　員	小林美貴子	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成元年10月～平成2年12月)
	御正山英子	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成元年11月～平成2年12月)
	古谷利美	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成3年1月～平成4年10月)
	岡田千代子	江南町千代遺跡群発掘調査会職員	(平成3年4月～平成8年3月)
	吉田正人	江南町教育委員会主事補	(平成8年4月～)

平成元年9月1日より

発掘調査関係者名簿

［調査指導・協力者］

（文化庁）

河原純之・宮本長二郎・岡村道雄・田中哲男・土肥　孝

（埼玉県教育局文化財保護）

金井塚良一・梅沢太久夫・高橋一夫・井上　肇・柿沼幹夫・早川智明・横川好富・吉川國男・塩野　博・金子真土・増田逸朗・水村孝行・浅野春樹・市川　修・中島　宏

（学識経験者）

青木克尚・有吉重蔵・荒井幹夫・荒川　弘・阿部利平・荒井健治・飯田充晴・池田敏宏・石塚三夫・出縄康行・井上尚明・今関久夫・岩本克昌・石川安司・今井　尭・植木　弘・上原　学・内山敏行・浦野裕行・江原昌俊・大江正行・大熊季広・大田博之・大友　努・大谷　徹・小川良祐・大金宣亮・加部二生・笠井敏光・亀井正道・金子正之・川口　潤・金井塚厚志・木村俊彦・木本雅康・栗原文蔵・剣持和夫・国生　尚・小久保　徹・古池晋禄・権田宣行・駒宮史郎・湖　江・斎藤和行・澤出晃越・坂上寛一・坂山利彦・坂本和俊・寺社下　博・志村　哲・菅谷浩之・鈴木徳雄・須田　茂・須田　勉・関　義則・関口和男・外尾常人・高井佳弘・高柳　茂・滝瀬芳之・坂野和信・千装　智・塚田良道・出牛　昭・鳥羽政之・戸田有二・栃原嗣雄・富田和夫・富沢一明・利根川章彦・中村倉二・中島利治・仲山清隆・南雲芳昭・野中　仁・長谷川　勇・畑　和・林　宏一・早川　南・橋本澄朗・浜野美代子・日高　慎・昼間孝志・昼間孝次・平田重之・福田　聖・堀口萬吉・本間岳史・前原　豊・松本明宣・増田一裕・宮　昌之・宮島秀夫・宮崎朝雄・宮瀧交二・宮瀧由紀子・村上伸二・村松　篤・茂木克美・森岡秀人・森下昌市郎・森田　悌・柳沼賢治・山口逸弘・山崎　武・山路直充・大和　修・雪田　孝・余語琢磨・吉野　健・若松良一・渡辺　一

（江南町内）

宇治川一好・木村昭二・小柴文代・小松原明範・柴益次郎・宅森知克・寺山孝作・福田正芳・湯本光雄・

（団体・機関等）

財・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・大里郡埋蔵文化財担当者会・大里郡市町村教育委員会・国分寺市遺跡調査会・関東古瓦研究会・東アジアの古代文化を考える会・滑川・嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会

（事業者等）

大島一郎・香取慎太郎・島野　賢・田口武男・友野　隆・島田義一・萩原文隆・（株）熊谷組

（現場作業）

新井キヨ・新井寿子・安藤ヨシ子・衣袋春江・上杉婦美子・上杉和助・梅沢かん・大谷キヨ・大沢千代・大塚宏子・大島よし・小沢和子・小沢タツ・岡部八重子・梶　一夫・笠原すい・菊地一市・京藤令子・小久保シズ・小林武雄・小林せつ子・小林サク子・小林シズ・小林宏子・斎藤勝二・鈴木てる・柴田千恵子・下林フミ子・下田かず子・清水昌子・柴崎作吉・柴　キミ・鈴木ゆき・杉田すい子・杉田ちよ・相馬良道・田嶋サト子・高荷キミ・高荷とく・田中きの・高橋　文・高橋トリ・田中リン・高田俊一・寺山善太郎・寺山岩雄・寺山千代・寺山正子・富田たね・富田元子・戸島弘明・富岡岑子・中島広子・永倉はる・野口スミ・野沢裕朗・橋本健次郎・早川宮子・樋村暁治・古谷まつ・藤野富子・藤野治子・本田ヨシ・本田せい・松田良子・水野キヨ・水野千代子・水野ふじ子・森田茂次・矢島文明・矢島よし・矢島福太郎・山口藤雄・湯本とめ・吉野喜作・吉場つる・吉沢たま・吉田喜久江（以上一般）

新井　誠・飯島隆男・石沢　豊・稲田健一・石山秀和・市野千尋・宇治川裕美・宇内明子・太田妙子・太田真二・大木由巳子・大場昭和・小川勝和・小川忠明・岡恵治・岡　正人・落合寛樹・金山哲也・神田　誠・神田善弘・金子由香里・鹿山明子・小林亜紀・小林留美・小松原慎太郎・小島利史・佐藤知興・幸　修司・島野和明・品川和彦・関谷仁之・田島道哉・武田雅彦・高橋阿希・田辺奈々・塚本博之・栃原史郎・永井智教・中野俊尚・長瀬　昇・中島紀之・中島利博・永越信吾・根本　篤・能沢　勇・浜　美紀・兵　ゆり子・藤田直也・福富基裕・福田恵美・福井純一・藤城智子・福島清志・深江俊文・松本重樹・丸山恭子・水谷芳春・三橋謙次・宮下健一朗・宮下万有美・御正山　亮・桃園正志・山本利晃・山田裕司・山岡家佐之・衣田俊一郎・吉田　誠・吉野　仁・吉野弘美（以上学生）

（室内整理作業）

新井芳江・上杉文子・大島安子・小澤三春・神谷君子・久保田睦子・櫻井和哉・志村モト子・白嶋　卓・竹澤和子・永井智教・橋本紀子・福島和子・松田清美・桃園正志

（名簿は順不同です）

凡　　例

1．本書に掲載した挿図の縮尺は、原則として以下の通りである。

・遺構　住居跡１/60、土坑１/40、埴輪窯１/40

・遺物　土器１/４、拓本１/３、石器（石皿・棒状礫器１/４、磨石・敲石１/３、円筒埴輪１/５、形象埴輪１/４、須恵器・土師器１/３

・上記以外のものについてはそれぞれの挿図中に凡例を付した。

2．挿図中の方位は、地図上の北を示す。

3．水糸レベルは、海抜高度（m）を示す。

4．グリットは、100m毎の大グリットと５m毎の小グリットを遺跡群全体に設定した。BIII—a10のBIIIは大グリットを、a10は小グリットを意味する。グリットとX・Y座標軸の関係等については、各遺跡の全測図中に示した。

5．遺構実測図中の網スクリーントーンは、焼土の集中範囲を表す。

6．土器断面黒塗りの遺物実測図は須恵器を示す。

7．土坑の分類は以下の基準に従った。平面形は、Ⅰ型—円形、II型—楕円形、III型—三角形に類似するもの、IV型—方形または長方形、Ⅴ型—不整形、土坑の断面は、A類—鍋底片、B類—皿片、C類—片流れ状、D類—ピット状、E類—袋状。

8．石器の計測は全点行い、石器計測表にまとめた。分類の基準は以下の基準に従った。

・石質　A—安山岩、C—チャート、D—泥岩、F—フォルンフェルス、G—玄武岩、Gy—凝灰岩、H—片岩、K—黒曜石、Ka—花崗岩、Ke—頁岩、Kg—輝緑凝灰岩、Ks—角閃岩、N—粘板岩、R—礫岩、Rh—緑泥片岩、Rs—緑色岩、S—砂岩、Se—閃緑岩、T—点紋緑泥片岩、

・磨石（形状）　平面形態　Ⅰ—円形、II—楕円形、III—両端が丸い棒状、IV—方形、Ⅴ—長方形、VI—三角形、VII—両端が平行な棒状

・敲石（形状）　側面形態　a—盤状、b—楕円形、c—楔形

（残存）　a—無欠損、b—１/２欠損、c—１/４欠損、d—１/４以下欠損

（研磨・敲打部位）　1—全周、2—片面、3—両面、4—外縁一部、5—外縁全部、6—無し

9．石器の実測図において、◀—▶は磨面の範囲を、◁—▷は敲打の範囲を示す。

10．遺物の分布図をドットで示しているが、種別は以下の通りである。

●—土器、☆—石皿、△—磨石、□—棒状礫器、○—敲石、▲—砥石、■—その他の石器、◉—埴輪、◭—打製石斧

11．土器遺物観察表は実測図に表現できない項目を示した。凡例は以下のとおりである。

・法量の単位はcmとした。

・法量における（　）内の数値は推定値を、下線付きの数値は現存値を表す。

・胎土への混入物は［W］白色粒子（white）、［B］黒色粒子（black）、［R］赤色粒子（red）、［U］雲母、［S］砂粒、を示し、多い物から順に列挙した。

・色調は、［rb］5YR5/6明赤褐色（red broun）近似色、［o］5YR7/6橙色（orange）近似色、［do］7.5YR7/４にぶい橙色（dull orange）近似色、［g］7.5 Y5/1灰色（gray）近似色、［gb］5YR6/2（grayish brown）近似色、［dg］N3/０暗灰色（dark gray）近似色を示す。（農林省農林水産技術会議事務局監修

「新版標準土色帖」参照)。

・焼成は良好なものをａ、不良なものをｃ、両者の間をｂとした。

・残存率は、実測図に示した部位に対する比率とした。

12. 埴輪遺物観察表は実測図に表現できない項目を示した。凡例の詳細については別記している。

目　　次

序　文
例　言
凡　例

第１章　調査の概要
　第１節　調査の経緯 …… 3
　第２節　調査方法と調査経過 …… 8
第２章　遺跡の概要
　第１節　遺跡群の地理的環境 ……13
　第２節　周辺の歴史的環境 ……17
第３章　発見された遺構と遺物
　第１節　姥ヶ沢遺跡
　　(1)　遺跡概観 ……24
　　(2)　遺構とその出土遺物 ……30
　第２節　富士山遺跡
　　(1)　遺跡概観 ……196
　　(2)　遺構とその出土遺物 ……200
　　(3)　包含層出土遺物 ……230
　第３節　権現坂埴輪窯跡群
　　(1)　遺跡概観 ……232
　　(2)　遺構とその出土遺物 ……234
第４章　考　　察
　第１節　江南台地における弥生土器の様相 ……253
　第２節　姥ヶ沢埴輪窯跡出土遺物の基礎的検討 ……264
　第３節　姥ヶ沢埴輪窯の構造と変遷と時代 ……274
　第４節　江南町千代地区地下(粘土層)原土の陶土としての可能性 ……278
第５章　総　　括 ……297
　参考引用文献 ……299

付編　自然科学分析
　１姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡出土炭化材の樹種分析 ……305
　２姥ヶ沢遺跡自然科学分析 ……309

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　千代遺跡群グリット網図 …… 9
第 2 図　埼玉県地形略図 ……13
第 3 図　江南町表層地質図 ……14
第 4 図　千代遺跡群全域図 ……15
第 5 図　弥生・古墳時代の周辺の遺跡分布図 …18

姥ヶ沢遺跡

第 6 図　姥ヶ沢遺跡の地形と調査区 ……25
第 7 図　姥ヶ沢遺跡遺構分布図 ……26
第 8 図　姥ヶ沢遺跡第 5 調査区全体図 ……27
第 9 図　姥ヶ沢遺跡第 2 調査区全体図 ……29
第10図　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡平面図 ……30
第11図　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡遺物分布図 …31
第12図　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡出土遺物(1) …32
第13図　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡出土遺物(2) …33
第14図　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡平面図 ……34
第15図　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡遺物分布図 …35
第16図　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡出土遺物(1) …36
第17図　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡出土遺物(2) …37
第18図　姥ヶ沢遺跡第 3 号住居跡平面図 ……38
第19図　姥ヶ沢遺跡第 3 号住居跡遺物分布図 …39
第20図　姥ヶ沢遺跡第 3 号住居跡出土遺物 ……40
第21図　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡平面図 ……41
第22図　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡遺物分布図 …42
第23図　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡出土遺物(1) …43
第24図　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡出土遺物(2) …44
第25図　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡出土遺物(3) …45
第26図　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡平面図 ……46
第27図　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡遺物分布図 …47
第28図　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡出土遺物(1) …48
第29図　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡出土遺物(2) …49
第30図　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡平面図(1) ……51
第31図　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡平面図(2) ……52
第32図　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡遺物分布図 …53
第33図　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡出土遺物 ……54
第34図　姥ヶ沢遺跡第 7 号住居跡平面図 ……56
第35図　姥ヶ沢遺跡第 7 号住居跡遺物分布図 …57
第36図　姥ヶ沢遺跡第 7 号住居跡出土遺物 ……58
第37図　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡平面図 ……60
第38図　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡遺物分布図 …61
第39図　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡出土遺物(1) …62
第40図　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡出土遺物(2) …63
第41図　姥ヶ沢遺跡第 9 号住居跡平面図 ……65
第42図　姥ヶ沢遺跡第 9 号住居跡遺物分布図 …66
第43図　姥ヶ沢遺跡第 9 号住居跡出土遺物 ……67
第44図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡平面図(1) ……68
第45図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡平面図(2) ……69
第46図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡遺物分布図 …70
第47図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(1) …71
第48図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(2) …72
第49図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(3) …73
第50図　姥ヶ沢遺跡第12号住居跡平面図 ……75
第51図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡平面図 ……76
第52図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡遺物分布図 …77
第53図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡出土遺物 ……78
第54図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡平面図(1) ……79
第55図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡平面図(2) ……80
第56図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡遺物分布図 …81
第57図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(1) …82
第58図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(2) …83
第59図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(3) …84
第60図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡平面図 ……86
第61図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡遺物分布図 …87
第62図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土遺物 ……88
第63図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡平面図 ……90
第64図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡遺物分布図 …91
第65図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土遺物 ……92
第66図　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡平面図 ……93
第67図　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡遺物分布図 94
第68図　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡出土遺物 …95
第69図　姥ヶ沢遺跡第18Ｂ号住居跡平面図 ……96
第70図　姥ヶ沢遺跡第18Ｂ号住居跡遺物分布図 97
第71図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡平面図 ……99

第 72 図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡遺物分布図…100
第 73 図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土遺物……101
第 74 図　姥ヶ沢遺跡第20号住居跡平面図……102
第 75 図　姥ヶ沢遺跡第20号住居跡出土遺物……103
第 76 図　姥ヶ沢遺跡第21号住居跡平面図……104
第 77 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(1)……106
第 78 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(2)……107
第 79 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(3)……109
第 80 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(4)……111
第 81 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(5)……112
第 82 図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(6)……114
第 83 図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(1)……115
第 84 図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(2)……116
第 85 図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(3)……117
第 86 図　姥ヶ沢遺跡第 3 調査地区全体図……119
第 87 図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡全体図……121
第 88 図　円筒埴輪観察表凡例(1)……123
第 89 図　円筒埴輪観察表凡例(2)……124
第 90 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡遺物分布図125
第 91 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡平面図……127
第 92 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(1)……128
第 93 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(2)……129
第 94 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(3)……130
第 95 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(4)……131
第 96 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(5)……132
第 97 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(6)……133
第 98 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(7)……134
第 99 図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(8)……135
第100図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(9)……136
第101図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(10)……137
第102図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(11)……138
第103図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物(12)……138
第104図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成(1)……139
第105図　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成(2)……140
第106図　姥ヶ沢遺跡第 2・3 号埴輪窯跡平面図……142
第107図　姥ヶ沢遺跡第 2・3 号埴輪窯跡セクション図……143
第108図　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡遺物出土状態……144
第109図　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡出土遺物(1)……145
第110図　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡出土遺物(2)……146
第111図　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡出土遺物(3)……147
第112図　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成……147
第113図　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡遺物分布図……148
第114図　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物(1)……149
第115図　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物(2)……150
第116図　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物(3)……151
第117図　姥ヶ沢遺跡第 4 号埴輪窯跡平面図……153
第118図　姥ヶ沢遺跡第 4 号埴輪窯跡遺物分布図……154
第119図　姥ヶ沢遺跡第 4 号埴輪窯跡出土遺物(1)……155
第120図　姥ヶ沢遺跡第 4 号埴輪窯跡出土遺物(2)……156
第121図　姥ヶ沢遺跡第 5・6 号埴輪窯跡平面

図(1)……157
第122図　姥ヶ沢遺跡第5・6号埴輪窯跡平面図(2)……158
第123図　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡遺物分布図……159
第124図　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡出土遺物(1)……160
第125図　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡出土遺物(2)……161
第126図　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡出土遺物(3)……161
第127図　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成……161
第128図　姥ヶ沢遺跡第6号埴輪窯跡遺物分布図……162
第129図　姥ヶ沢遺跡第6号埴輪窯跡出土遺物…163
第130図　姥ヶ沢遺跡第7・8号埴輪窯跡平面図……165
第131図　姥ヶ沢遺跡第7・8号埴輪窯跡セクション図……166
第132図　姥ヶ沢遺跡第7号埴輪窯跡遺物分布図……167
第133図　姥ヶ沢遺跡第7号埴輪窯跡出土遺物(1)……168
第134図　姥ヶ沢遺跡第7号埴輪窯跡出土遺物(2)……169
第135図　姥ヶ沢遺跡第7号埴輪窯跡出土遺物(3)……170
第136図　姥ヶ沢遺跡第7号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成……170
第137図　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡遺物分布図……171
第138図　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡出土遺物(1)……172
第139図　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡出土遺物(2)……173
第140図　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成……174
第141図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(1)……175
第142図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(2)……176
第143図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(3)……177
第144図　姥ヶ沢遺跡第8調査地区土層断面位置図……178
第145図　姥ヶ沢遺跡第8調査地区崖線部セクション図……178
第146図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(4)……179

富士山遺跡

第147図　富士山遺跡グリット全体図……197
第148図　富士山遺跡の地形と調査地区……199
第149図　富士山遺跡第16号住居跡平面図……200
第150図　富士山遺跡第16号住居跡遺物分布図…201
第151図　富士山遺跡第16号住居跡出土遺物(1)…202
第152図　富士山遺跡第16号住居跡出土遺物(2)…203
第153図　富士山遺跡第21号住居跡平面図……204
第154図　富士山遺跡第24号住居跡平面図……205
第155図　富士山遺跡第24号住居跡遺物分布図…206
第156図　富士山遺跡第24号住居跡出土遺物……207
第157図　富士山遺跡第25号住居跡平面図……208
第158図　富士山遺跡第25号住居跡遺物分布図…209
第159図　富士山遺跡第25号住居跡出土遺物……211
第160図　富士山遺跡第26号住居跡平面図……212
第161図　富士山遺跡第26号住居跡遺物分布図…213
第162図　富士山遺跡第26号住居跡出土遺物……214
第163図　富士山遺跡第27号住居跡平面図……215
第164図　富士山遺跡第27号住居跡遺物分布図…216
第165図　富士山遺跡第28号住居跡平面図……217
第166図　富士山遺跡第28号住居跡遺物分布図…218
第167図　富士山遺跡第28号住居跡出土遺物……219
第168図　富士山遺跡第29号住居跡平面図……220
第169図　富士山遺跡第29号住居跡遺物分布図……221
第170図　富士山遺跡第29号住居跡出土遺物……221
第171図　富士山遺跡第30号住居跡平面図……222
第172図　富士山遺跡第30号住居跡遺物分布図…223
第173図　富士山遺跡第30号住居跡出土遺物……223
第174図　富士山遺跡土坑平面図(1)……225
第175図　富士山遺跡土坑平面図(2)……226
第176図　富士山遺跡土坑平面図(3)……228

第177図　富士山遺跡土坑平面図(4)……229
第178図　富士山遺跡出土遺物……230
権現坂埴輪窯跡群
第179図　権現坂埴輪窯跡群全体図……232
第180図　権現坂埴輪窯跡群の地形と調査地区…233
第181図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡平面図……234
第182図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡遺物分布図……235
第183図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡出土遺物……236
第184図　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡平面図……237
第185図　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡遺物分布図……238
第186図　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡出土遺物……239
第187図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡平面図……241
第188図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡遺物分布図……242
第189図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(1)……244
第190図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(2)……245
第191図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土円筒埴輪線刻集成……246
第192図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(3)……247
考　察
第193図　周辺の弥生時代遺跡分布図……254
第194図　江南台地出土の櫛描文系土器……256
第195図　樽式土器の分類……257
第196図　櫛描文系土器文様帯分類……258
第197図　吉ヶ谷式土器の分類……259
第198図　円筒埴輪に観察される各手法(1)……265
第199図　円筒埴輪に観察される各手法(2)……266
第200図　線刻意匠、位置分類図……266
第201図　姥ヶ沢Ｂ地点第１号埴輪窯跡出土の線刻をもつ円筒埴輪……267
第202図　口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪……268
第203図　小穿孔分類図……271
第204図　白藤古墳群出土の円筒埴輪と共伴土器……271
第205図　行幸田山Ａ区３号古墳出土の円筒埴輪……272
第206図　周辺出土のハケ目調整土師器……272
第207図　ひび割れの特徴……286
第208図　テストピース……287
付　編
第209図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）模式土層柱状図……310
第210図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）分析試料採取位置……311
第211図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁）主要珪藻化石群集の層位分布……317
第212図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）花粉化石群集の層位分布……319

表 目 次

第 1 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡出土土器観察表……33
第 2 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号住居跡出土石器計測表……33
第 3 表　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡出土土器観察表……37
第 4 表　姥ヶ沢遺跡第 2 号住居跡出土石器計測表……37
第 5 表　姥ヶ沢遺跡第 3 号住居跡出土土器観察表……39
第 6 表　姥ヶ沢遺跡第 3 号住居跡出土石器計測表……39
第 7 表　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡出土土器観察表……45
第 8 表　姥ヶ沢遺跡第 4 号住居跡出土石器計測表……45
第 9 表　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡出土石器計測表……49
第 10 表　姥ヶ沢遺跡第 5 号住居跡出土土器観察表……50
第 11 表　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡出土土器観察表……55
第 12 表　姥ヶ沢遺跡第 6 号住居跡出土石器計測表……55
第 13 表　姥ヶ沢遺跡第 7 号住居跡出土土器観察表……59
第 14 表　姥ヶ沢遺跡第 7 号住居跡出土石器計測表……59
第 15 表　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡出土土器観察表……64
第 16 表　姥ヶ沢遺跡第 8 号住居跡出土石器計測表……64
第 17 表　姥ヶ沢遺跡第 9 号住居跡出土土器観察表……67
第 18 表　姥ヶ沢遺跡第 9 号住居跡出土石器計測表……67
第 19 表　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土土器観察表……74
第 20 表　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土石器計測表……74
第 21 表　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡出土土器観察表……78
第 22 表　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土土器観察表……85
第 23 表　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土石器計測表……85
第 24 表　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土土器観察表……89
第 25 表　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土石器計測表……89
第 26 表　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土土器観察表……92
第 27 表　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土石器計測表……92
第 28 表　姥ヶ沢遺跡第18A号住居跡出土土器観察表……98
第 29 表　姥ヶ沢遺跡第18A号住居跡出土石器計測表……98
第 30 表　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土土器観察表……99
第 31 表　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土石器計測表……100
第 32 表　姥ヶ沢遺跡第20号住居跡出土土器観察表……103
第 33 表　姥ヶ沢遺跡土坑出土土器観察表……113
第 34 表　姥ヶ沢遺跡土坑出土石器観察表……113
第 35 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……180
第 36 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……181
第 37 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(3)……182

第 38 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(4)……183
第 39 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(5)……184
第 40 表　姥ヶ沢遺跡第 1 号埴輪窯跡出土遺物観察表(6)……185
第 41 表　姥ヶ沢遺跡第 2 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……185
第 42 表　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……186
第 43 表　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……186
第 44 表　姥ヶ沢遺跡第 3 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……187
第 45 表　姥ヶ沢遺跡第 4 号埴輪窯跡出土遺物観察表……188
第 46 表　姥ヶ沢遺跡第 5 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……188
第 47 表　姥ヶ沢遺跡第 5 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……189
第 48 表　姥ヶ沢遺跡第 6 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……190
第 49 表　姥ヶ沢遺跡第 7 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……190
第 50 表　姥ヶ沢遺跡第 7 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……191
第 51 表　姥ヶ沢遺跡第 8 号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)……191
第 52 表　姥ヶ沢遺跡第 8 号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)……192
第 53 表　姥ヶ沢遺跡出土遺物観察表(1)……192
第 54 表　姥ヶ沢遺跡出土遺物観察表(2)……193
第 55 表　富士山遺跡第16号住居跡出土石器計測表……203
第 56 表　富士山遺跡第16号住居跡出土土器観察表……204
第 57 表　富士山遺跡第24号住居跡出土土器観察表……206
第 58 表　富士山遺跡第25号住居跡出土石器計測表……206
第 59 表　富士山遺跡第25号住居跡出土土器観察表……210
第 60 表　富士山遺跡第26号住居跡出土土器観察表……216
第 61 表　富士山遺跡第26号住居跡出土石器計測表……216
第 62 表　富士山遺跡第28号住居跡出土土器観察表……219
第 63 表　富士山遺跡第28号住居跡出土石器計測表……219
第 64 表　富士山遺跡第29号住居跡出土土器観察表……222
第 65 表　富士山遺跡第30号住居跡出土石器計測表……223
第 66 表　富士山遺跡土坑・包含層出土土器観察表……230
第 67 表　権現坂埴輪窯跡群第 2 号住居跡出土土器観察表……236
第 68 表　権現坂埴輪窯跡群第 3 号住居跡出土土器観察表……240
第 69 表　権現坂埴輪窯跡群出土遺物観察表(1)…249
第 70 表　権現坂埴輪窯跡群出土遺物観察表(2)…250
第 71 表　櫛描文系土器・吉ヶ谷式土器遺構伴出関係表……260
第 72 表　口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪の集成……269
第 73 表　姥ヶ沢埴輪窯跡群操業時期区分……274
第 74 表　塩西遺跡粘土層軽鉱物組成……280
第 75 表　混合土焼成収縮率結果表……290
第 76 表　炭化材の樹種同定結果(1)……306
第 77 表　炭化材の樹種同定結果(2)……307
第 78 表　姥ヶ沢遺跡谷部(北壁)テフラ分析結果……312
第 79 表　珪藻の生態分類……313
第 80 表　淡水生種の各生態に対する適応性……314
第 81 表　姥ヶ沢遺跡谷部(南壁・北壁)珪藻分析結果(1)……315
第 82 表　姥ヶ沢遺跡谷部(南壁・北壁)珪藻分

析結果(2)……316
第 83 表　姥ヶ沢遺跡谷部(南壁・北壁)花粉分析結果……320
第 84 表　珪藻化石の顕微鏡写真の図版説明……324
第 85 表　珪藻化石の顕微鏡写真のネガ説明……325
第 86 表　花粉分析の顕微鏡写真のネガ説明……326
第 87 表　テフラの顕微鏡写真のネガ説明……326

図版目次

姥ヶ沢遺跡

図版１　姥ヶ沢遺跡航空写真
図版２　姥ヶ沢遺跡調査区全景モザイク写真
図版３　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群航空写真
図版４　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡
図版５　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡
図版６　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡・調査風景
図版７　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡
図版８　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡(1)
図版９　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡(2)
図版10　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡・調査風景
図版11　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡(1)
図版12　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡(2)
図版13　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡
図版14　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡(1)
図版15　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡(2)・調査風景
図版16　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡(1)
図版17　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡(2)
図版18　姥ヶ沢遺跡第12・13号住居跡(1)
図版19　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡(2)
図版20　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡(1)
図版21　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡(2)・調査風景
図版22　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡
図版23　姥ヶ沢遺跡第16・18ａ号住居跡(1)
図版24　姥ヶ沢遺跡第18ａ号住居跡(2)
図版25　姥ヶ沢遺跡第18ａ号住居跡(3)
図版26　姥ヶ沢遺跡第18ｂ号第８調査地区
　　航空写真・第18ｂ号住居跡
図版27　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡
図版28　姥ヶ沢遺跡第20・21号住居跡
図版29　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡出土土器
図版30　姥ヶ沢遺跡第２・３号住居跡出土土器
図版31　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土土器
図版32　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土土器(1)
図版33　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土土器(2)・
　　第６号住居跡出土土器(1)
図版34　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡出土土器(2)・
　　第７号住居跡出土土器(1)
図版35　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡出土土器(2)・
　　第８号住居跡出土土器(1)
図版36　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡出土土器(2)・
　　第９号住居跡出土土器
図版37　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土土器(1)
図版38　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土土器(2)
図版39　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土土器(3)
図版40　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡出土土器
図版41　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土土器(1)
図版42　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土土器(2)
図版43　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土土器(3)
図版44　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土土器
図版45　姥ヶ沢遺跡第16号・18ｂ号住居跡
　　出土土器
図版46　姥ヶ沢遺跡第19・20号住居跡出土土器
図版47　姥ヶ沢遺跡第１・２・３号住居跡
　　出土石器
図版48　姥ヶ沢遺跡第４・５・６号住居跡
　　出土石器
図版49　姥ヶ沢遺跡第７・19号住居跡・土
　　坑出土石器
図版50　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群遠景
図版51　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群確認状況・完掘状態
図版52　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１・２号窯跡
図版53　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第３号窯跡
図版54　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第４号窯跡
図版55　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第４・５号窯跡
図版56　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第５・６号窯跡
図版57　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第３・５・６号窯跡
図版58　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第７・８号窯跡
図版59　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１・２・３号窯跡
　　遺物出土状態
図版60　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１号窯跡遺物出土
　　状態

図版61　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１号窯跡出土遺物(1)
図版62　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１号窯跡出土遺物(2)
図版63　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第１号窯跡出土遺物(3)
図版64　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第２・３号窯跡出土遺物
図版65　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第２・４号窯跡出土遺物
図版66　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第４号窯跡出土遺物
図版67　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第４～７号窯跡出土遺物
図版68　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群第７・８号窯跡出土遺物
図版69　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土埴輪篦記号・透孔・指紋
図版70　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土土師器・石製模造品

富士山遺跡

図版71　富士山遺跡航空写真・第３調査地区全景
図版72　富士山遺跡第16号住居跡(1)
図版73　富士山遺跡第16号住居跡(2)・調査風景
図版74　富士山遺跡第24号住居跡
図版75　富士山遺跡第25号住居跡(1)
図版76　富士山遺跡第25号住居跡(2)
図版77　富士山遺跡第26号住居跡(1)
図版78　富士山遺跡第26号住居跡(2)
図版79　富士山遺跡第27・28号住居跡(1)
図版80　富士山遺跡第28号住居跡(2)・調査風景
図版81　富士山遺跡第29・30号住居跡
図版82　富士山遺跡第16号住居跡出土土器
図版83　富士山遺跡第24・28号住居跡出土土器
図版84　富士山遺跡第25号住居跡出土土器(1)
図版85　富士山遺跡第25号住居跡出土土器(2)
図版86　富士山遺跡第25号住居跡出土土器(3)
図版87　富士山遺跡第26号住居跡出土土器(1)
図版88　富士山遺跡第26号住居跡出土土器(2)
図版89　富士山遺跡第29号住居跡出土土器・第24・26・28・30号住居跡出土石器

権現坂埴輪窯跡群

図版90　権現坂埴輪窯跡群調査区全景・第１号埴輪窯跡
図版91　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡
図版92　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡

付編

図版93　炭化材(1)
図版94　炭化材(2)
図版95　姥ヶ沢採取の軽石・砂粒顕微鏡写真
図版96　姥ヶ沢採取の珪藻化石の顕微鏡写真
図版97　姥ヶ沢採取の花粉化石の顕微鏡写真
図版98　花粉分析プレパラートの状況写真(1)
図版99　花粉分析プレパラートの状況写真(2)

第1章

調査の概要

第1章　調 査 の 概 要

第１節　調査の経緯

1989年（平成元年）９月１日、江南町教育委員会の中に江南町千代遺跡群発掘調査会が正式に発足した。出席者は次のとおりである。

江南町長柴田忠雄、江南町議会議長杉田彌平・江南町町議会議員富田宗平、橋本亀明・江南町教育長細井　多・江南町教育委員長船橋廣之・江南町文化財保護審議委員上杉　正、長谷川七郎、吉野　廣、笠原金久、関口正典、岡田光恒・埼玉県文化財保護審議委員柳田敏司、田中一郎・日本考古学協会員市毛　勲・埼玉県教育委員会文化財保護主査高橋一夫・江南町教育委員会次長吉田久雄、同文化財係新井　端・事業者委員梶　吉郎、小賀野幸作であった。

調査会の組織は別表のとおりであるが、この第１回会議では当て職による各役員の選任が行われ、その後の議事検討の中で調査会の規約・組織・運営について基本的な確認を得られた。事務局となった教育委員会社会教育文化財係では、調査会の運営にかかる調査計画及び予算についても審議の基礎となる素案を提出したが、調査団の指示により次の会議までに調査予算について再度積算をおこなうこととした。

しかし現地では、工事予定地内での試掘調査を進めていた。試掘調査は12―16―17番ホールにかかる北方遺跡、富士山遺跡から着手したが、山林の伐採と抜根に苦慮しながら、覆土と遺構の確認を行っていった。

このころ教育委員会では同時並行で他の遺跡の発掘調査を進めており、試掘調査の主体は調査会雇用の担当者森田安彦を中心に行った。

９月27日第２回会議では平成元年度の予算について調査費のみの契約を締結することとした。本年度の調査予定面積は約18,000㎡である。以後の基本的な契約のスタイルとなるので詳述するが、調査会の予算は実質調査費用のみとした。その外に必要となる事務所等の維持的経費や重機・備品等の費用は直接事業者の経費とした。これは委託金額を押さえ必要時には事業者に求めるという柔軟な考えによる。

調査会の予算管理調査指導等は基本的に町教育委員会が当たっており、その事務局も教育委員会内に置いた。調査会の一般的事務処理は調査会で行えるように、年度途中ではあるが事務員を配置することとした。

10月18日現地に作業員を配置し、試掘調査を進めながら発掘可能の地区から着手した。

10月23日第３回会議を設営したばかりの現地事務所で行い、委員と共に調査予定地の視察を行った。富士山遺跡では遺構までの覆土が薄く、現状で畑地として耕作されていた土地でも、山林部分でもほぼ同様であった。これはかつての開墾の歴史を物語るものと推定され、台地部分の特性と思われた。そのためか遺物は採取されるものの遺構の検出されない部分が広範囲に認められた。しかし微地形に注意すると谷沿いの微高地や、台地縁辺部には良好に遺構が分布する傾向も見られた。

12月26日第４回会議を開き、調査の進展状況と工程について報告され、工事用道路ともなる外周道路部分の試掘を先行して進める調整案が事業者より提出されこれを了承した。また、翌年度の調査方針についても工事側の進展が予想されることから調査面積の拡大と担当者の増員を含めた調査体制を充実する方針を固め、調査団として町・教育委員会に要望していくことが確認された。なお、10月から12月までは調査会、教育委員会とは別々の現場をこなしており、まさにこの年はバブル絶頂期の開発狂乱様相で暮れた。

1990年（平成２年）は雪で明けた。抉られた赤い

台地は暫し雪の衾を得て静寂であった。富士山遺跡では各時代の住居跡の調査が進行している。

１月30日調査団長柳田敏司を迎え事業者側との現地協議を行った。発掘調査の拡大・一層の迅速化が要望されることから、現場で小回りのきく小形重機を導入すること、排土用のベルトコンベアを導入することなどを検討した。

３月19日調査会の調査指導をする調査団の専門委員会を開催した。調査会でも４月より調査担当職員を増員する方針を固め、人選も進んでいるとの報告があった。また、先の調査会雇用職員の処遇については、町職員として採用される予定となった。

４月11日平成２年度調査会の第１回会議を招集した。人事の移動があり、調査会長には新教育長岡部進が就任した。さらに、予定された調査会事務局長・事務員と調査担当者関口正幸の増員が発令報告された。

このようにして新年度以降、調査員は新井・森田・関口の３人体制が整うことになり、工事工程上最も造成が進行するとされる年にあって、調査会としてはようやく充実した体制になった。

本年度の文化財保護法に基づく発掘調査届に記載された発掘調査予定遺跡は８遺跡13地点約120,000㎡の面積を予定していた。しかし、現状の30人あまりの調査補助員数ではまったく足らず、その確保のため隣接市町村まで募集の手を広げると共に労働条件の整備にも腐心した。

バブル全盛期の世相から発掘調査現場は3K職場と言われていたものであったから、しかもあちこちで発掘現場が設営されていたから発掘調査関係職員の確保には担当者の人徳に加え、新渡部稲造氏の肖像に比重が掛けられていた。

工事工程の関係で西原遺跡のようにある程度一気に調査できた遺跡もあるが、部分部分で区分けしなければならなかった地点もあった。

６月には、前年度から継続していた富士山遺跡部分の調査を終え、新たに姥ヶ沢遺跡内の弥生時代集落の調査に着手している。

７月には同じく姥ヶ沢遺跡内に発見された埴輪窯跡の調査に着手した。また、西原遺跡では縄文時代の集落が確認され調査に取り掛かっている。

この三地点は同時並行して発掘調査を進め、ほぼ年内一杯を費やしている。調査成果は以前の江南町の原始古代史を見直す重要な発見が相次ぎ現場の士気も揚がっていった。

６月14日第２回会議を開催した。調査会長・調査団長の出席があった。監査報告等を終えた後、調査の進行状況説明のなかで、富士山から姥ヶ沢遺跡にかけて分布する長方形土坑が話題となった。

遺構の特長として長辺１から３m、短辺0.5から１m、深さ0.4から0.7m程で、ほとんど遺物は出土しないが軸線をそろえて数基から数十基が集中して発見される。時代不明であるが、既に500基以上検出されていた。性格不明であるが、その数の多さに特徴があるとすると耕作に関連したものとも推定され、構造の類似から畑作物の貯蔵穴ではないかとする農業従事者の意見もあり、現場調査に当たっても留意することとなった。

また、寺内廃寺の範囲確認を進めるために今年度予算化した地中レーダー探査を進めていることも報告された。

７月11日には埼玉県住宅都市部土地行政課により、発掘調査の状況、工事の進捗概要についての現地視察があり、調査会長・調査団長が案内した。盛夏のころには大量の縄文式土器、優美な弥生式土器の出土、子鹿埴輪の発見などが蓄積されていた。

この時期補助員は一般・学生を含め100名を越えており、常時70から80人の人々が作業をしていたのだがあまりに広い現場には粗放で、時に人呼ぶ声がこだました。

町議会でも発掘調査の進行状況や内容についての質問が見られた。作業に携わる人や、調査を不安げに見守る関係者・好奇の目で見つめる一般町民を対象に「発掘だより」を定期的に刊行しささやかな啓蒙にも勤めた。これはまったく担当者達の熱意と献身に支えられたものであったが、編集に当たったものとして原稿の無理強いが常であったことはお互いのよい思い出になっているものと思いたい。

７月の時点では、発掘調査は調査予定面積の30パーセントの調査を進めており、試掘調査は50パーセントに近づいていた。事業者側では約50パーセントの伐採を終え、付替道路工事に着手する段階であった。

中秋のころになると、西原遺跡の縄文集落の調査は峠を越え50軒を越える竪穴式住居跡が掘り上がり環状をなす集落が現れた。谷部分から水場は検出されなかったものの、多くの石錘が出土している。姥ヶ沢遺跡の埴輪窯については８基確認されるに留まり、関係すると思われる建物跡等は発見できなかった。

10月から11月には民間委託による教育委員会直営の発掘調査があり、担当者１名がそちらへ向かっている。また、調査会の事務的運営・埼玉県指定史跡塩古墳群整備計画の基本構想に加え、町の事業として教育委員会が事務局となっている町史編さん事業の運営も考え処理せねばならず、主任担当者の疲労はピークに達していた。

11月20日調査団長と事業者との現地協議を行い、重要な確認事項があった。

一は、権現坂埴輪窯跡群を通る外周道路予定地内の試掘調査により埴輪窯跡十数基が確認されたことにより、この部分の道路計画を変更し遺跡の現状保存をする。

二は、ゲートボール場建設予定地の造成を中止するというものである。立地承認にかかる計画変更だが文化財保護行政側には望ましい変更であるので、調整会議で保存可能な方向への検討が要望された。

また、寺内廃寺の当初からの保存区域の確定については試掘調査の結果を参考とすることになっており、現地調査のための伐採を含めた作業について調査団長より説明を行い地権者の了解を得た。

出土遺物が増加するこのころより、立地承認時に約束された資料館構想についても、調査会の立場として遺物量の見積を告げたうえで予算の見通し立てるようを要望した。

12月、近年には珍しい台風一過の温かい朝で明けた。現場は雨水に水没しており、道は川となって瀬音がこだましていた。台地上から谷に流れ込む水量は権現坂地点では５日間程変化していないように見えた。谷の出口は三本地区になるが、地名の由来を「みずもと」とする説に分があるのではないかと思えた。

12月18日調査会長・調査団長出席のうえ中間監査が行われ、先の現地協議の内容なども話された。12月19日調査団長と事業者との現地協議を行う。寺内廃寺・権現坂埴輪窯跡群の保存問題が議事の中心となる。

1991年（平成３年）台地の北半分を占める姥ヶ沢遺跡、富士山遺跡、北方遺跡、権現坂遺跡、西原遺跡の発掘調査をほぼ終えている。姥ヶ沢遺跡では弥生時代に続いて古墳時代前期の集落が明らかになった。富士山遺跡では台地奥の谷津斜面から弥生時代の集落が見つかった。江南台地域では珍しく櫛描文系・縄文系の土器が共伴して出土した。このころから大規模発掘調査の好例としてか、見学者が増えてくる。

２月21日顧問・理事委員を迎え第３回会議を開催した。発掘調査の状況報告として予定調査面積を上回る137,400㎡を調査し、コンテナにして約600箱の出土遺物があった。

とくに、西原遺跡の縄文時代集落、姥ヶ沢・富士山遺跡の弥生時代集落、姥ヶ沢遺跡の埴輪窯跡群の発見調査は重要なものであった。研究者を含め見学者が多数訪れている。議事の中で出土遺物の問題が取り上げられ、資料館建設の計画を検討することを顧問から説明があった。

４月19日には平成３年度の第１回会議を顧問・各理事を迎え開催している。調査団長より調査成果と今後の予定が説明された。

調査は遺跡群を南北で分けた場合ほぼ北側を終了したので工事側に引き渡し、南側に残る天神谷遺跡、山神遺跡、西遺跡、天神遺跡、寺内遺跡に移る。

但し、先年調査会採用とした職員１名は江南町と同様の事情を有する行政体の職員として正式採用されることとなったので快くこれを送り出すこととなった。

そのため今年度は担当者２名体制で調査を行わざるをえなくなった。工事側の造成工事も本格化しており間近に迫る重機械の轟音に威圧されながら、確実な調査を進めていった。

７月９日現地協議をおこなう。報告書刊行までを視野にいれた発掘調査予算の全体像について打診があった。

８月に現地事務所を南側に移転した。天神谷遺跡では平安時代の窯跡を発見した。年の後半からは寺内廃寺周辺部での調査が主体となってきた。寺内遺跡では寺跡を区画すると推定される幅約６ｍの大溝を発見している。

また、西遺跡・伊勢遺跡を通る道路部分、東西の調整池造成地では、寺跡と同時期と推定される集落を調査している。とくに東側の調整池部分では花寺・東院と書かれた墨書土器が出土し注目を浴び、以後この調査はマスコミを賑わせることになる。

９月以降寺内廃寺と周辺分の調査を進める工程上、突発的に小規模な調査部分が未買収地の残っていた西原遺跡や姥ヶ沢遺跡などで発生し作業員を当てては対応した。

同月県林務課の現地視察があった。寺内廃寺の範囲確認調査については、重要遺跡の保存上その規模と遺跡の性格と保存状態を知ることを目的として行うことで、県教育局や事業者との調整を進めていた。既に地中レーダーの成果から主軸線上に乗る基壇建物跡が複数残っていること、それが中心建物であろうことが推定されたが、夏の時点で確認された大溝が寺域を区画すると考えると当時一般的に考えられていた寺域の規模をはるかに越えてしまうことになり、より詳細な遺構の把握が必要となっていた。

具体的には寺域内の建物配置とその種類・性格・構造・変遷・出土遺物の内容と時期などの情報を得ておくことが検討されていた。

千代遺跡群発掘調査会組織・系統図

（1990．４．１時点）

教育局指導文化保護課　埋蔵文化財係／史跡・記念物係

↓

江南町教育委員会　文化財係

↓

江南町千代遺跡群発掘調査会　　会長　岡部　進

［理事会］

専門委員会　柳田　敏司
　　田中　一郎
　　市毛　勲

顧問　柴田　忠雄
　　杉田　彌平
理事　橋本　亀明
　　富田　宗平
　　柴　芳夫
　　上杉　正
　　長谷川七郎
　　吉野　廣
　　笠原　金久
　　関口　正典
　　小賀野幸作
　　吉田　久雄
監事　岡田　光恒
　　梶　吉郎

↓

［調査団］

団長　柳田　敏司
調査担当者　新井　端
調査員　森田　安彦
調査員　関口　正幸

↓

［事務局］

事務局長　吉田　久雄
事務長　塚田　正久
事務員　小林美貴子
事務員　御正山英子

第２節　調査方法と調査経過

調査にあたっては、国土方眼座標第Ⅸ系に基づいて、100m毎の大グリットと５m毎の小グリットを遺跡群全体を覆うように設定した(第１図)。グリットは北西隅を起点とし、Ｘ軸にＡ～Ｌの大グリットと各大グリット内にａ～ｔの小グリットを設定し、Ｙ軸にⅠ～ⅩⅨの大グリットと各大グリット内に１～20の小グリットを設けている。

発掘調査は、対象地域をゴルフコース・調整池・外周道路等の造成地毎に行い、残存林地部分は、現状変更しない箇所のため調査は行っていない。そのため、同じ遺跡でも、連続部分の少ない虫食い状態の調査区設定となっている。

発掘調査は、1989年９月１日に江南町千代遺跡群発掘調査会の発足と同時に始められた。ただし、現状が荒れた山林となっていたため、立木伐採と取り片付け後、10m間隔のトレンチを方眼に入れ、遺構の有無を確認し、確認した時点で表土を剝ぎ、調査に入るという手順をとった。造成工事の関係で、北側より順次調査は進められたが、試掘調査を行いながら、一方で表土を剝ぎ、２～３人の発掘現場担当者による２～３班体制で発掘調査を進めるといった状態が終始続けられた。

また、遺構確認の簡易的な方法として、寺内遺跡の寺域には、発掘調査以前に基壇跡を中心として地下レーダーによる予備調査を行っている。

遺跡群内の発掘調査対象遺跡数10、発掘調査地区39、調査期間３年４ヶ月、調査総面積249,800㎡となる。なお、『寺内廃寺跡』については、ゴルフ場の立地承認の付帯条件として現状保存することが条件付けられており、、埼玉県選定重要遺跡である『権現坂埴輪窯跡群』に関しては、外周道路予定地に新たに窯跡群が確認されたため、道路を設計変更して現状保存としている。

各遺跡の発掘調査面積および調査期間は次表の通りである。

遺跡名	調査地区	調査期間	調査面積(㎡)
富士山	第１調査地区 (12番Ｈ)	89年10月18日～ 90年３月30日	18,000
	第２調査地区 (13･16番Ｈ･Ａ調整池)	90年１月24日～ ６月６日	27,900
	第３調査地区 (17番Ｈ)	90年11月26日～ 91年２月５日	10,200
西　原	第１調査地区 (クラブハウス)	90年５月24日～ 12月18日	24,600
	第２調査地区 (14番Ｈ西)	90年10月24日～ 91年３月７日	11,800
	第３調査地区 (10番Ｈ南)	90年12月10日～ 12月17日	1,200
	第４調査地区 (15番Ｈ西)	90年12月12日～ 91年１月29日	7,200
	第５調査地区 (18番Ｈ西)	91年１月16日～ ４月11日	9,100
	第６調査地区 (Ｐ．Ｇ.)	91年４月４日～ ５月８日	3,500
姥ヶ沢	第２調査地区 (外周道路)	90年６月４日～ ８月１日	1,700
	第３調査地区 (Ｃ調整池)	90年７月６日～ 11月27日	9,800
	第４調査地区 (11番Ｈ)	90年11月26日～ 12月12日	5,600
	第５調査地区 (外周道路)	91年４月５日～ ５月29日	1,100
	第６調査地区 (練習場)	91年５月８日～ 10月３日	4,500
	第７調査地区 (姥ケ沢沼)	92年６月10日～ ６月12日	400
	第８調査地区 (外周道路)	93年５月10日～ ６月10日	700
北　方	第１調査地区 (外周道路)	89年９月２日～ 10月８日	2,300
	第２調査地区 (13番Ｈ)	90年８月２日～ ８月14日	7,500
	第３調査地区 (外周道路歩道)	91年８月２日	500
権現坂	第１調査地区 (工事用道路)	89年８月30日～ 10月１日	800
	第２調査地区 (外周道路)	91年２月４日～ ３月21日	2,800
天神谷	第１調査地区 (７番Ｈ北)	91年６月26日～ ６月27日	5,700
	第２調査地区 (Ｅ調整池)	91年６月26日	1,700
	第３調査地区 (６番Ｈ東)	91年７月23日～ 12月６日	1,500
山　神	第１調査地区 (６番Ｈ)	91年５月31日～ ８月９日	16,600
	第２調査地区 (５番Ｈ)	91年６月17日～ ７月22日	6,400
	第３調査地区 (９番Ｈ西)	91年６月18日～ ８月９日	7,100
西	第１調査地区 (４番Ｈ東)	91年９月10～ 11月15日	1,500
	第２調査地区 (外周道路)	91年９月10日～ 12月13日	1,700
天　神	第１調査地区 (外周道路)	91年５月14日～ ６月14日	1,500
寺　内	第１調査地区 (２番Ｈ･３番Ｈ)	91年７月22日～ 11月21日	22,600
	第２調査地区 (４番Ｈ)	91年９月10日～ 12月20日	15,000
	第５調査地区 (Ｄ調整池)	91年10月27日～ 11月14日	5,000
	第３調査地区 (２号用水池)	91年11月26日～ 12月20日	3,500
	第４調査地区 (自然形池)	91年10月16日～ 91年５月25日	3,700
	寺内古代寺院跡 範囲確認調査	92年１月20日～ 11月30日	3,000
	第６調査地区 (外周道路)	92年２月12日～ ４月３日	1,200
山神塚	４Ｈ南 92年２月10日	91年11月６日～	400
天神谷塚群	５Ｈ・６Ｈ間 ２月10日	92年２月３日～	500
合　計	10遺跡・30地点	89年８月30日～ 93年６月10日	249,800

Ｈはゴルフコースのホール№の略



第１図　千代遺跡群グリット網図

第2章

遺跡の概要

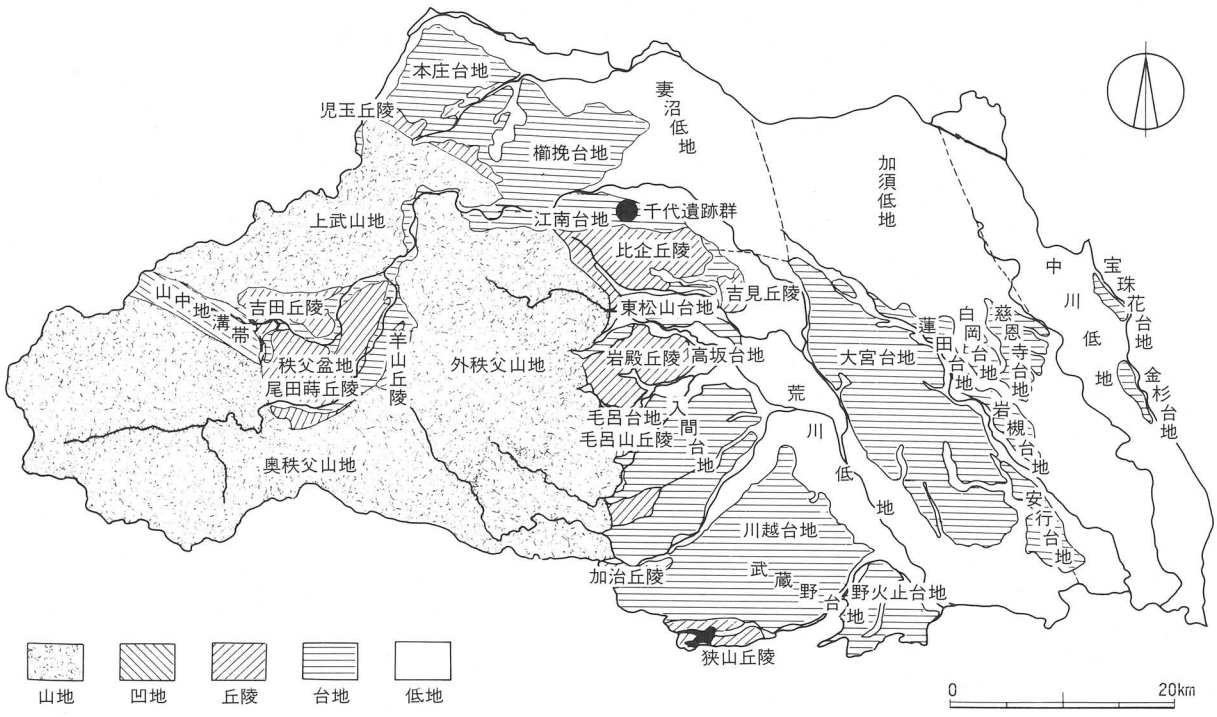
第2章　遺跡の概要

第１節　遺跡群の地理的環境

江南町は、埼玉県北西部の荒川中流域右岸に位置する(第２図)。江南町の地形は、南部を東流する和田川以南の丘陵部(比企丘陵)、荒川右岸の中位段丘である江南台地、部分的に下位段丘の残る荒川沖積地の３つの地形に区分することができる（第３図)。

比企丘陵は、外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。地質的には新生代新第３紀層に相当し、礫岩、砂岩、泥岩、凝灰岩等の互層で構成されている。滑川町福田周辺から産出する「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩は、周辺に分布する多くの古墳の石室構築材として供給されている。江南町域においては、高根山（標高105.1m)から派生している丘陵と、滑川町和泉地区から派生する二つの尾根筋があり、嵐山町とは西側の谷を流れる滑川で区分されている。

江南台地は、寄居町金尾付近より江南町を経て大里村箕輪に至る東西17㎞、南北３㎞にわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は、台地の基盤となる荒川中位段丘の発達した第三紀層上に秩父古世層を起源とする砂礫層（８～20m）の上に、川本粘土層とされている灰白色の粘土層(２～５m)、下部を新期ローム層に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比される大里ローム層と称されているローム層（１～２m)が堆積し、表層に腐食土が乗っている。台地の海抜高度は、100m～40mで、西部から東部へと暫次低下している。台地の北側・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10～15m程の崖線で画され、崖線下には吉野川が流れている。台地上には、平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部および開口部には溜池が築かれている。



第２図　埼玉県地形略図

沖積地は荒川の氾濫原で、台地下部を東流する和田吉野川以北に広がり、部分的に下位段丘が残る。この下位段丘は、川本町畠山から江南町三本付近まで見られ、これより下流では沖積低地へ埋没しているといわれている。沖積低地との比高差は１m前後で、段丘礫層で構成されており、ローム層に被覆されていない。沖積低地は、穀倉地帯となっており、その中に自然堤防状の微高地が点在し、現在の集落がつくられている。標高46m～34m、荒川との比高差９～12mを測る。

今回調査対象となった千代遺跡群は、江南台地の北縁に位置し、東西約１km、南北約1.8kmの範囲にわたっている。遺跡群の中央には、北東方向より1.2kmの距離で開析谷が侵入しており、最奥部には植木沼・三角沼が位置している。また、植木沼からさらに西へ埋没谷が延びており、分水嶺とともに、地形的に遺跡群を南北に２分している（第４図）。

遺跡群内に確認されている10遺跡の地形概観は以下の通りである。

姥ヶ沢遺跡（県遺跡No.65―01）

江南台地の北縁に位置し、東西両側面を開析谷によって画されている。その間、最も広い台地縁辺部で300mを測る。富士山遺跡・西原遺跡とは、東側の開析谷を挟んで対峙している。開析谷右岸および台地北縁部の段丘崖線部斜面には、埴輪窯が構築されている。弥生・古墳時代の集落跡・埴輪窯跡が主体となる。

富士山遺跡（県遺跡No.65―03）

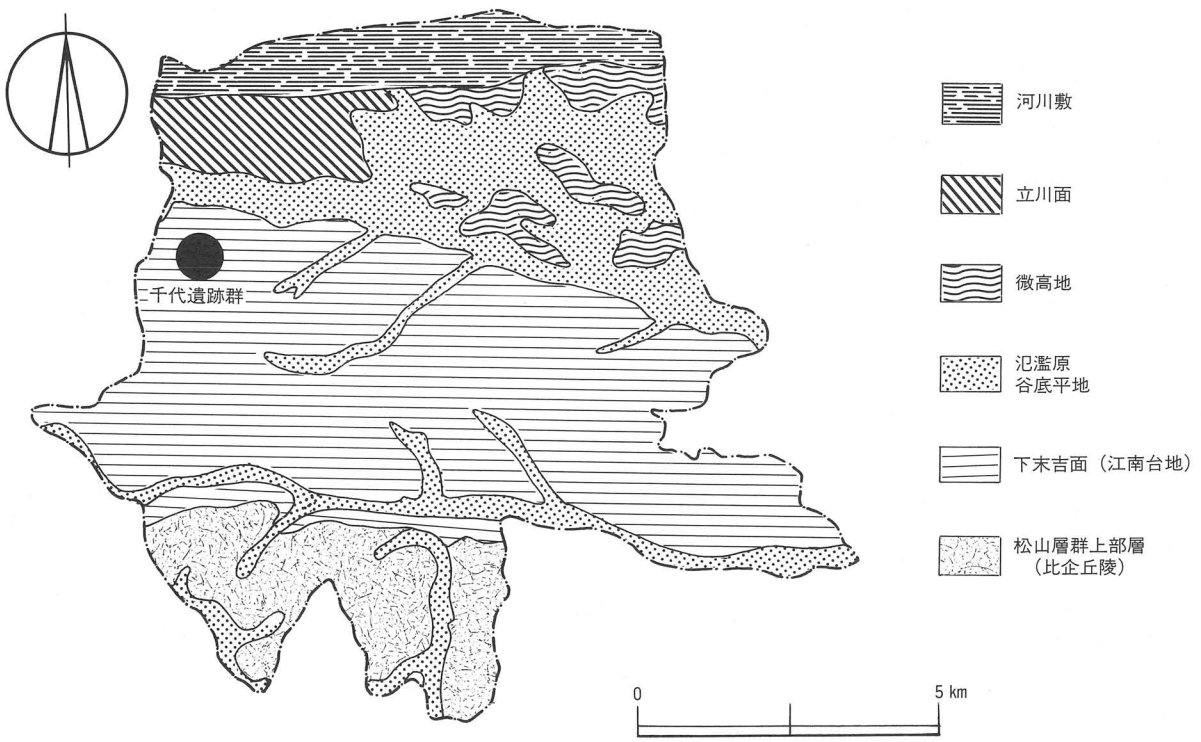
江南台地の北縁に位置し、東西両側面を開析谷によって画されている。その間、最も広い台地縁辺部で450mを測る。西側の開析谷を挟んで姥ヶ沢遺跡、東側の開析谷を挟んで北方遺跡・権現坂埴輪窯跡群が位置している。縄文・弥生・古墳・奈良平安時代の集落跡。

権現坂埴輪窯跡群（県遺跡No.65―08）

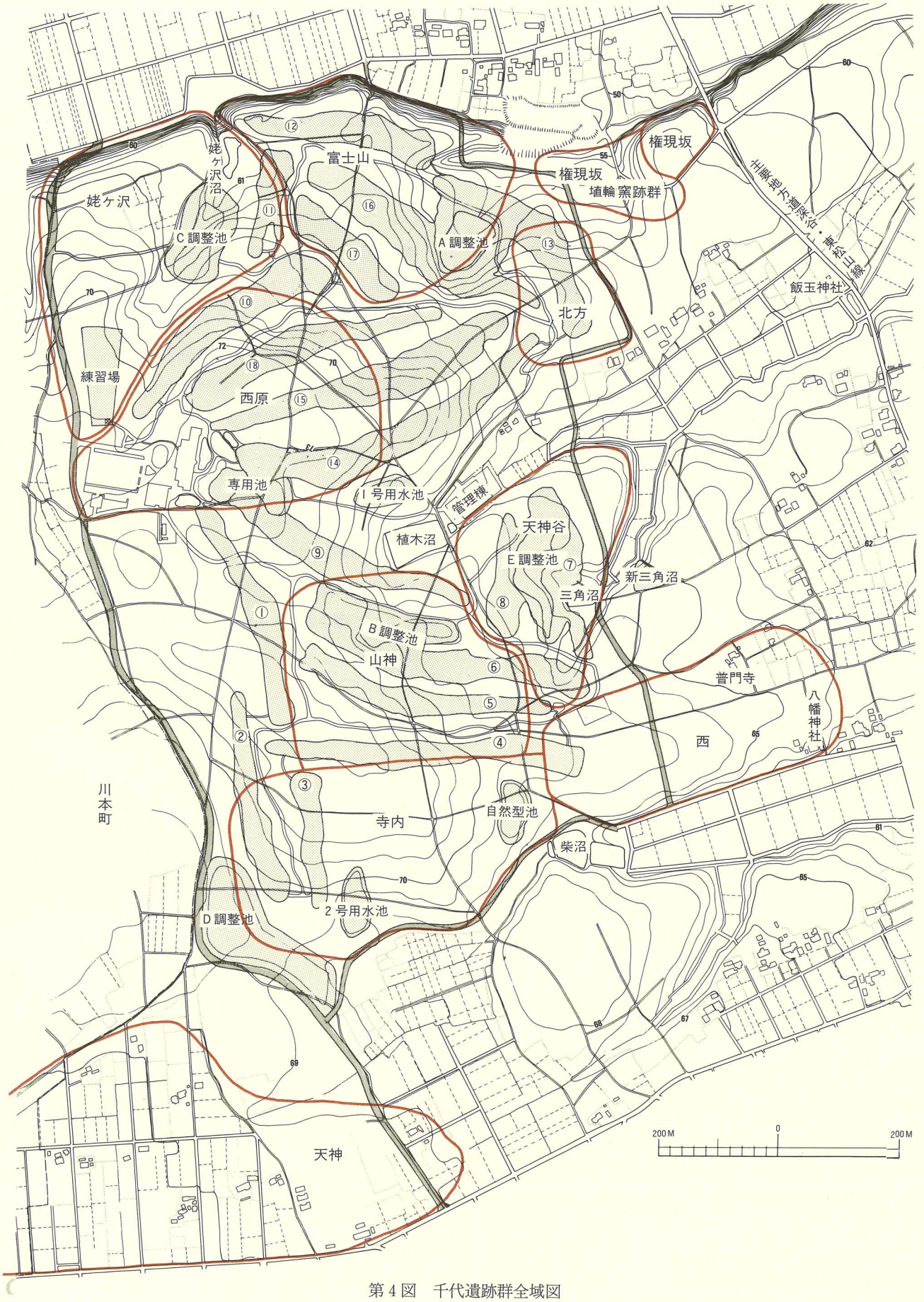
江南台地の北縁に位置し、遺跡の中央に幅約20m、比高差約12mの開析谷が侵入している。埴輪窯跡は、この開析谷の東側縁辺部に位置し、県の重要遺跡に選定されていたが、今回の調査で、新たに開析谷西側台地崖線部にも10数基の窯跡が存在していることが確認されている。

北方遺跡（県遺跡No.65―84）

台地縁辺部より200m程入り、植木沼下の谷に南面している。西側は、開析谷を挟んで富士山遺跡が位



第３図　江南町表層地質図



第４図　千代遺跡群全域図

置し、北側の権現坂遺跡とは地形的に連続している。植木沼下の谷を挟んだ南側には天神谷遺跡が位置している。縄文時代早期・後期の遺物散布地。

西原遺跡（県遺跡No.65―85）

台地縁辺部より500m程入った、高台の平坦地に位置する。西側を姥ヶ沢埴輪窯跡群へと続く比高差１～２m程の開析谷によって、南側を植木沼より続く埋没谷によって画されている。姥ヶ沢遺跡とは、東側の開析谷を挟んで対峙している。縄文時代中期の集落跡が主体となっており、平安時代の住居跡が散在している。

山神遺跡（県遺跡No.65―83）

台地縁辺部より１km程入る。南側には寺内遺跡が地形的に連続しており、南側へと緩やかに傾斜している。浅い埋没谷が２本、北東方向より遺跡内に侵入しており、東側には天神谷遺跡が地形的に連続して隣接している。近世の山神塚が１基確認されている。

天神谷遺跡（県遺跡No.65―14）

台地縁辺部より900m程入った、開析谷が、植木沼と三角沼の方向へ分岐する間の舌状に張り出した地点に位置する。三角沼の南の開析谷左岸には、須恵器窯が１基確認されている。

西遺跡（県遺跡No.65―18）

台地縁辺部より1.1km程入った、柴沼下の谷に南面する地点に位置している。西側は、寺内遺跡へと地形的に連続している。平安時代の集落跡が主体となっている。

寺内遺跡（県遺跡No.65―07）

台地縁辺部より1.3km程入る。柴沼へと続く埋没谷に南面し、南に向かって緩やかに傾斜している。南北方向に小規模な埋没谷が入り込んでおり、古代寺院の建立に当たり大規模な整地が行われたようである。奈良平安時代の寺院跡・集落跡が主体となっているが、埋没谷覆土中に縄文時代早期・後期の土器片が含まれている。

天神遺跡（県遺跡No.65―52）

遺跡群の南端に位置し、台地縁辺部より1.7kmの距離を測る。北側は、寺内遺跡の前面より広がる埋没谷によって画されている。平安時代の集落跡が主体となっている。　（森田安彦）

第２節　周辺の歴史的環境

千代遺跡群の歴史的環境については、既刊の「千代遺跡群発掘調査報告書」１－縄文時代編－において旧石器・縄文時代について論じられているため、本書においては、弥生時代から古墳時代について、町内の遺跡を中心に周辺の遺跡を概観してみたい（第５図）。

弥生時代

弥生時代の遺跡については、町内においては本遺跡群の姥ヶ沢遺跡の一部が確認されているだけであった。しかし、今回の千代遺跡群の調査で周知の姥ヶ沢遺跡の他に富士山遺跡を加え弥生時代の遺跡が２箇所となった。また本遺跡群から半径２㎞以内に近年相次いで弥生時代の遺跡が調査されている。江南台地の北縁部の川本町域では、周知の万願寺遺跡(24)に加え、白草(25)・円阿弥(26)・焼谷(27)・四反歩南遺跡（28）など、いずれも弥生時代後期の遺構・遺物が検出・採集されている。

また、これら遺跡の乗る和田吉野川右岸・江南台地に隣接する比企丘陵上においては、東松山市域の吉ケ谷・岩鼻遺跡、滑川町域の大谷(36)・屋田(37)・船川（38）・新井遺跡（39）、に加え、近年、嵐山町域の芳沼入（57）・蟹沢（58）・大野田西遺跡（59）が調査されている。

これら調査例の増加による資料の蓄積から、従来からいわれている縄文系土器群と櫛描系土器群の分布・対比・系譜等について新視点をもたらすこととなるだろう。

古墳時代

古墳時代の遺跡については、町内において44箇所確認されている。

前期―五領式期の集落跡は、本遺跡群の姥ヶ沢遺跡で住居跡９軒、富士山遺跡で住居跡３軒が検出されている。また、天神谷遺跡では、遺構等は確認されてはいないが、台付甕等出土している。その他町内では、滑川左岸の釜場（４）・諸ケ谷遺跡（５）が調査され、釜場遺跡では検出された住居跡11軒がすべてが焼失住居であった。

和田川右岸では塩丸山（６）・塩西遺跡（７）において前期（五領式期）の遺構が検出されている。塩西遺跡では祭祀土坑から40個体以上の遺物が検出されている。これらの各遺跡は同時代に築造されたと考えられる古墳群に重複して確認されている。

周辺では、江南台地上、川本町域の白草・円阿弥遺跡、また、比企丘陵上、滑川町域の大谷・屋田遺跡、嵐山町域の花見堂（60）・北田遺跡（64）においてこの時期の住居跡が検出されている。

中期―和泉式期については遺跡が少なく、町内では唯一、塩新田遺跡（８）において、６世紀代の古墳に一部破壊された住居跡が１軒検出され、初現的な要素をもつカマドを備えていた。周辺では白草遺跡において同時期の住居跡８軒が検出されている。

後期―鬼高式期となると江南台地及び周辺地域においても集落、古墳が増加するようである。

町内では、本田・東台遺跡（９）・岩比田（10）権現坂（11）・宮下（13）の各遺跡より住居跡が確認されている。なかでも本田・東台遺跡は６世紀後半を中心に８世紀代まで営まれた大規模な集落であり、近接して所在する野原古墳群（14）の形成に関与したものであると考えられる。また、和田川を挟んで対岸には鬼高式期の集落跡と考えられる滑川町円正寺遺跡（40）や円正寺（41）・山中古墳群（42）、天神山横穴墓群（53）などが近接して所在することからこの地域を一体のものとして捉えるほうがより理解しやすいと思われる。周辺では該期の遺跡として、川本町域の川端（34）・権現堂（35）・滑川町域の栗谷（43）・寺谷（44）・寺ノ台（45）の各遺跡があげられる。

後期の古墳は群集墳として形成されており町内においては、和田吉野川流域右岸に立地する天神山古墳群（15）、和田川流域左岸の立野（16）・下原（17）・野原古墳群の他、滑川流域左岸の塩古墳群内荒井支群（21）・西原支群（22）が分布する。



１．姥ケ沢遺跡　２．富士山遺跡　３．天神谷遺跡　４．釜場遺跡　５．諸ケ谷遺跡　６．塩丸山遺跡　７．塩西遺跡　８．塩新田遺跡　９．本田・東台遺跡　10．岩比田遺跡　11．権現坂遺跡　12．権現坂埴輪窯跡群　13．宮下遺跡　14．野原古墳群　15．天神山古墳群　16．立野古墳群　17．下原古墳群　18．塩古墳群　19．姥ケ沢埴輪窯跡群　20．中原古墳群　21．塩古墳群内荒井群　22．塩古墳群内西原群　23．行人塚古墳群　24．川本町万願寺遺跡　25．白草遺跡　26．円阿弥遺跡　27．焼谷遺跡　28．四反歩南遺跡　29．上大塚古墳群　30．清水山古墳群　31．箱崎古墳群　32．塚原古墳群　33．鹿島古墳群　34．川端遺跡　35．権現堂遺跡　36．滑川町大谷遺跡　37．屋田遺跡　38．船川遺跡　39．新井遺跡　40．円正寺遺跡　41．円正寺古墳群　42．山中古墳群　43．栗谷遺跡　44．寺谷遺跡　45．寺ノ谷遺跡　46．松原古墳群　47．峯古墳群　48．山崎古墳群　49．両表古墳群　50．巌山古墳群　51．麓古墳群　52．郭古墳群　53．天神山横穴墓群　54．寺前古墳群　55．ゴエモン塚古墳群　56．月輪古墳群　57．嵐山町芳沼入遺跡　58．蟹沢遺跡　59．大野田西遺跡　60．花見堂遺跡　61．古里古墳群　62．陣屋古墳群　63．天神山古墳群　64．北田遺跡　65．屋根横穴墓群　66．熊谷市石原古墳群　67．宮塚古墳　68．瀬戸山古墳群　69．三ケ尻古墳群

第５図　弥生・古墳時代の周辺の遺跡分布図

周辺地域では江南台地上の川本町上大塚（29）・清水山古墳群（30）がある。比企丘陵の滑川流域では最奥部の嵐山町古里（61）・陣屋古墳群（62）を頂点に左岸域では滑川町松原（46）・峯（47）・山崎（48）・両表（49）古墳群が丘陵上に点在する。また、これに対峙して右岸の丘陵上でも嵐山町天神山（63）・滑川町巌山（50）・麓（51）・郭（52）古墳群などが連続して分布している。荒川流域に目を転ずると、右岸の河岸段丘上に立地する古墳群として川本町箱崎（31）・塚原（32）・鹿島古墳群（33）などがある。これらの古墳群には近接して集落跡が検出されている。また、荒川左岸の自然堤防上には熊谷市広瀬（66）・玉井古墳群が展開する。

この他、これら地域に点在する群集墳関連の生産遺跡として本遺跡群内の姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡群があげられる。両窯跡群とも周知の遺跡であったが今回の調査により新たな広がりと新知見をもたらした。姥ヶ沢窯跡群は江南台地の段丘崖線に発見された既知のＡ地点とその東部に今回確認されたＢ地点から成っている。Ｂ地点では谷津の斜面部に上下２段で８基の窯体が確認された。出土した遺物は円筒埴輪片が大部分であったが、人物・動物などの形象埴輪の部品も出土している。権現坂窯跡群は眼下に和田吉野川の沖積地を望む江南台地の北縁部に立地する。今回の調査では周知の窯跡群の西方に十数基の窯が新たに確認された。また、窯跡に隣接して鬼高式期の住居跡２軒が検出され、これらの住居跡はカマドを付設せず、土器・埴輪片・粘土塊などが出土したことから埴輪生産に関わる工房的なものであると考えられる。今回の調査により両窯跡群の分布距離および関連性をより一層近接したものとした。このことから、両窯跡群は一体のものとして捉え、この時期この地区を埴輪生産の一大拠点として再認識することとなった。今後、周辺古墳の埴輪との比較・検討の進展により不明確な部分の多い需給関係の解明に大きな役割を果たすこととなるだろう。

（関口正幸）

第３章

発見された遺構と遺物

第１節　姥ヶ沢遺跡

調査地区	：	調査期間	：調査面積
第２調査地区（外周道路）	：	90年６月４日～８月１日	： 1,700㎡
第３調査地区（Ｃ調整池）	：	90年７月６日～11月27日	： 9,800㎡
第４調査地区（　11H　）	：	90年11月26日～12月12日	： 5,600㎡
第５調査地区（外周道路）	：	91年４月５日～５月29日	： 1,100㎡
第６調査地区（練 習 場）	：	91年５月８日～10月３日	： 4,500㎡
第７調査地区（姥ヶ沢沼）	：	92年６月10日～６月12日	：　400㎡
第８調査地区（外周道路）	：	92年５月10日～６月10日	：　700㎡

第３章　発見された遺構と遺物

第１節　姥ヶ沢遺跡

(1)　遺跡概観

本遺跡は、８調査地区、24,400㎡の調査が行われている(第６図)。第１調査地区は、1982年に町教育委員会により約1,000㎡の調査が行われており、古墳跡２基、弥生時代後期の住居跡１軒が検出されている(1983新井)。この他、遺跡内にはもう１基の円墳が確認されている。古墳の立地する台地縁辺部の平坦地は、第２次大戦中に畑地として開墾されたため墳丘の大半は削平されており、おそらくは確認されている数以上の古墳が立地していたものと考えられる。また、この調査地区の西側部分の台地崖線部斜面において、埴輪窯１基が確認されている(Ａ地点)。

今回の調査対象地は、第２～８調査地区である。この内、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が確認されているのは、第２・３・５・８調査地区である。第２調査地区からは、弥生時代の住居跡７軒、古墳時代の住居跡７軒、弥生時代の土坑25基が検出されている。弥生時代の住居跡の形態は、隅丸方形・方形を基本とし、炉は全て地床炉で床中央よりやや壁よりに位置する例が多い。柱穴は細く、４～６本を基本とするようである。住居跡は全て焼失住居と考えられるが、出土した遺物は意外と完形品が見当たらず、器台としての転用品が目立った。また、地形的にみて、遺跡内における古墳時代集落の南限が確認されている（第９図)。

第３調査地区からは、蛇行する開析谷の右岸より埴輪窯跡８基が検出されている（Ｂ地点)。遺物は、二条突帯の円筒埴輪が主体となり、大形品も少数存在している。人物埴輪は小形のもので、腕・掌・髷・みずら等の部品、ほかに、鹿頭部・馬などの部品が出土している。注目される遺物としては、窯体内・灰原から滑石製の剣形・鏡形石製模造品が出土している（第86図)。

第５調査地区からは、古墳時代の住居跡４軒が検出されており、遺跡内における集落の東限が確認されている（第８図)。

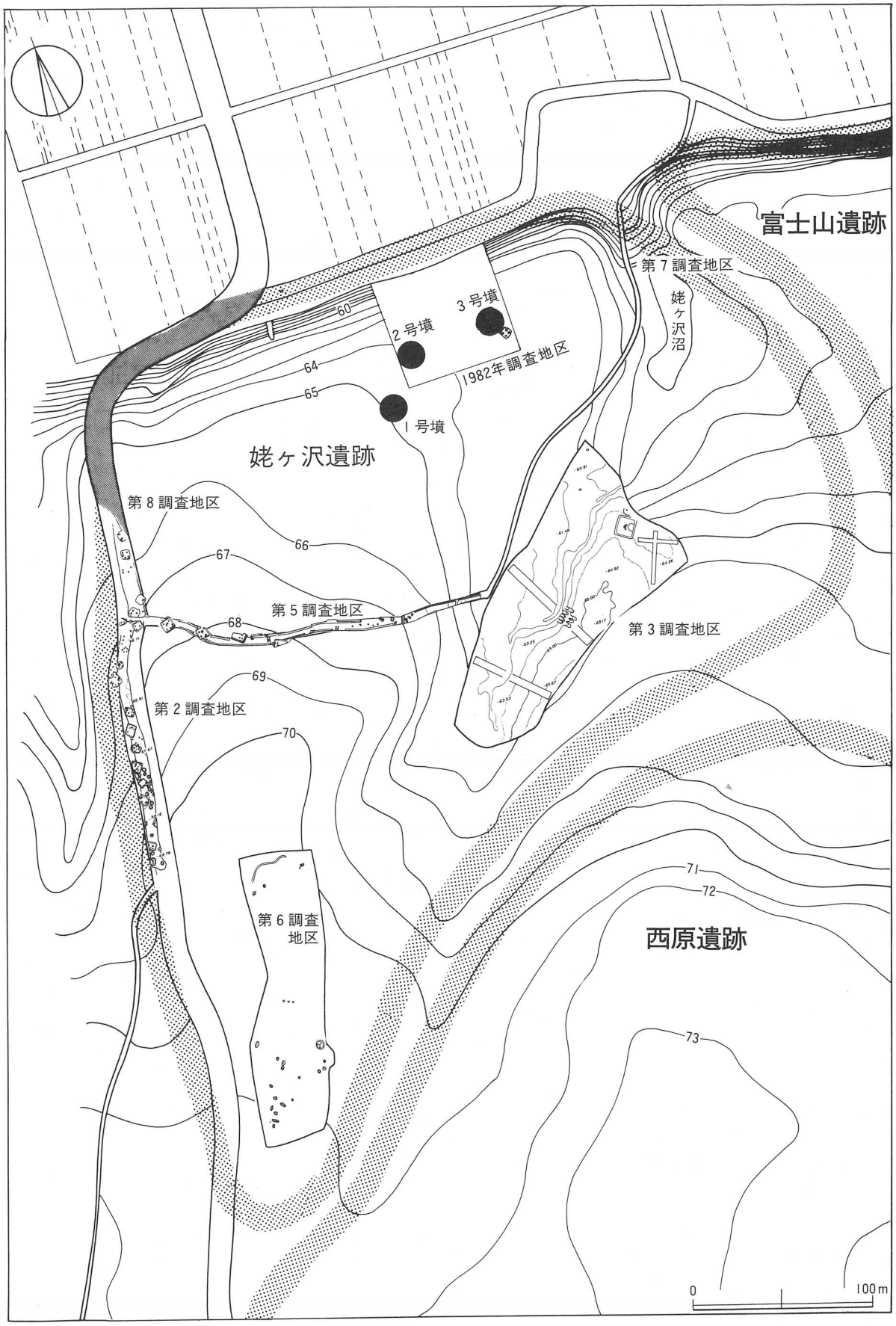
第７調査地区は、姥ヶ沢沼の堤防改修にともない、堤の切開・断面観察を行っている。堤防の構築時期についての資料は得られなかったが、堤の構築方法が古墳の版築に類似しており興味深い。

第８調査地区からは、古墳時代の住居跡４軒が検出されている。遺跡地内西側における古墳時代集落の北限が確認されている。集落は、地形的にさらに北東方向の平坦地に展開しているものと推測される。また、崖線下の調査地点では、焼土と共に埴輪片が採取されており、崖線斜面部に埴輪窯の存在が推定される（第144図)。

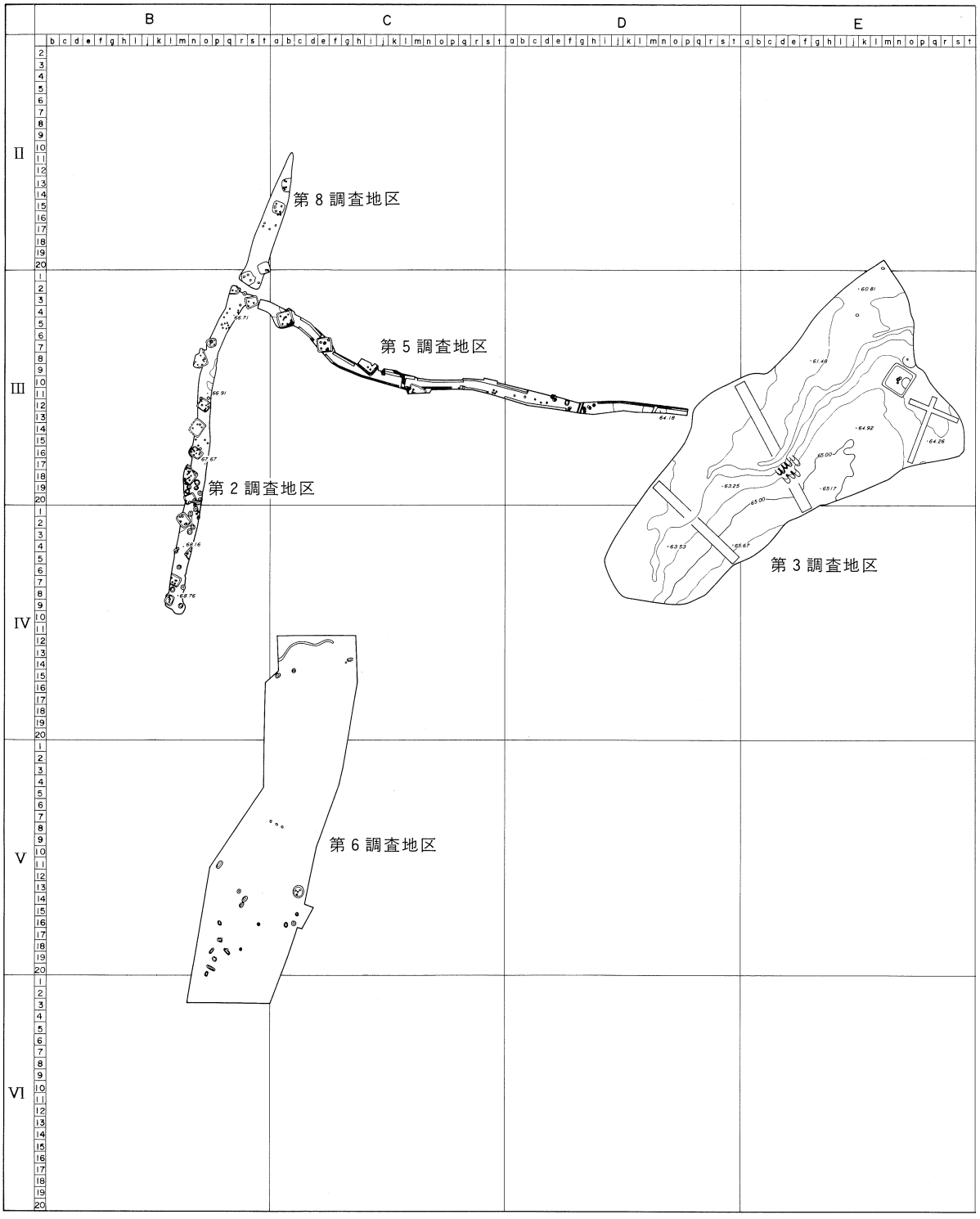
弥生時代の住居跡は、第１・２調査地区より検出されている。両調査地区は250mの距離を測り、間には古墳時代初頭の集落が介在している。集落の展開は、線的な調査のため推測の域をでないが、遺跡の西側に南へと侵入する開析谷の谷頭を囲むように展開する集落（第２調査地区）と、台地縁辺部の平坦地に展開する集落（第１調査地区）に２分される可能性が考えられる。

埴輪窯は、1982年に発見されたＡ地点と、Ａ地点東側より侵入する開析谷の中ほどに今回発見されたＢ地点から成る。Ａ地点の西側は、すでに土取りにより崖線部の大半を消失しているが、第８調査地点の崖線下で埴輪窯の痕跡を確認しており、比較的規模の大きな埴輪生産が行われていた可能性が高い。窯の操業年代は、出土遺物より判断して６世紀初頭を下らない時期と考えられ、現在確認されている県内の埴輪窯の中では一番古く位置付けられよう。

（森田安彦）

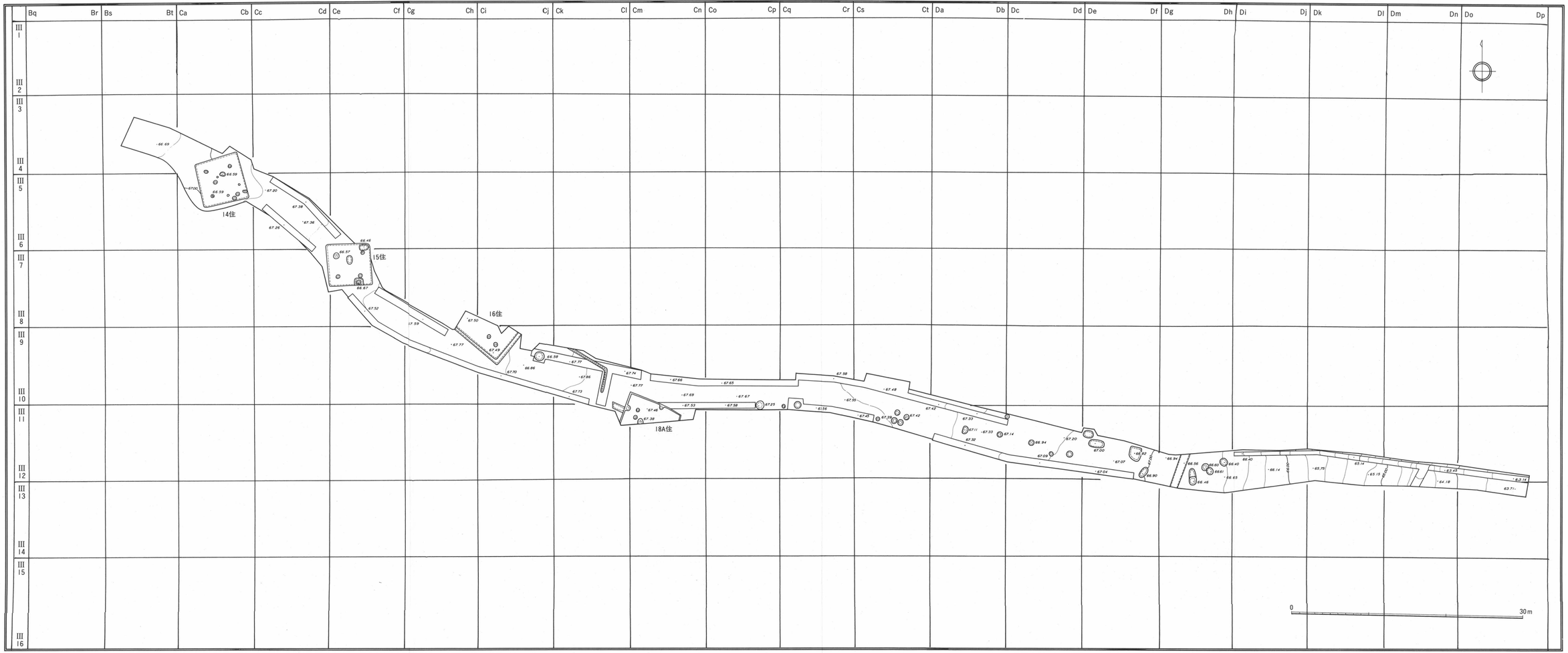


第６図　姥ヶ沢遺跡の地形と調査区

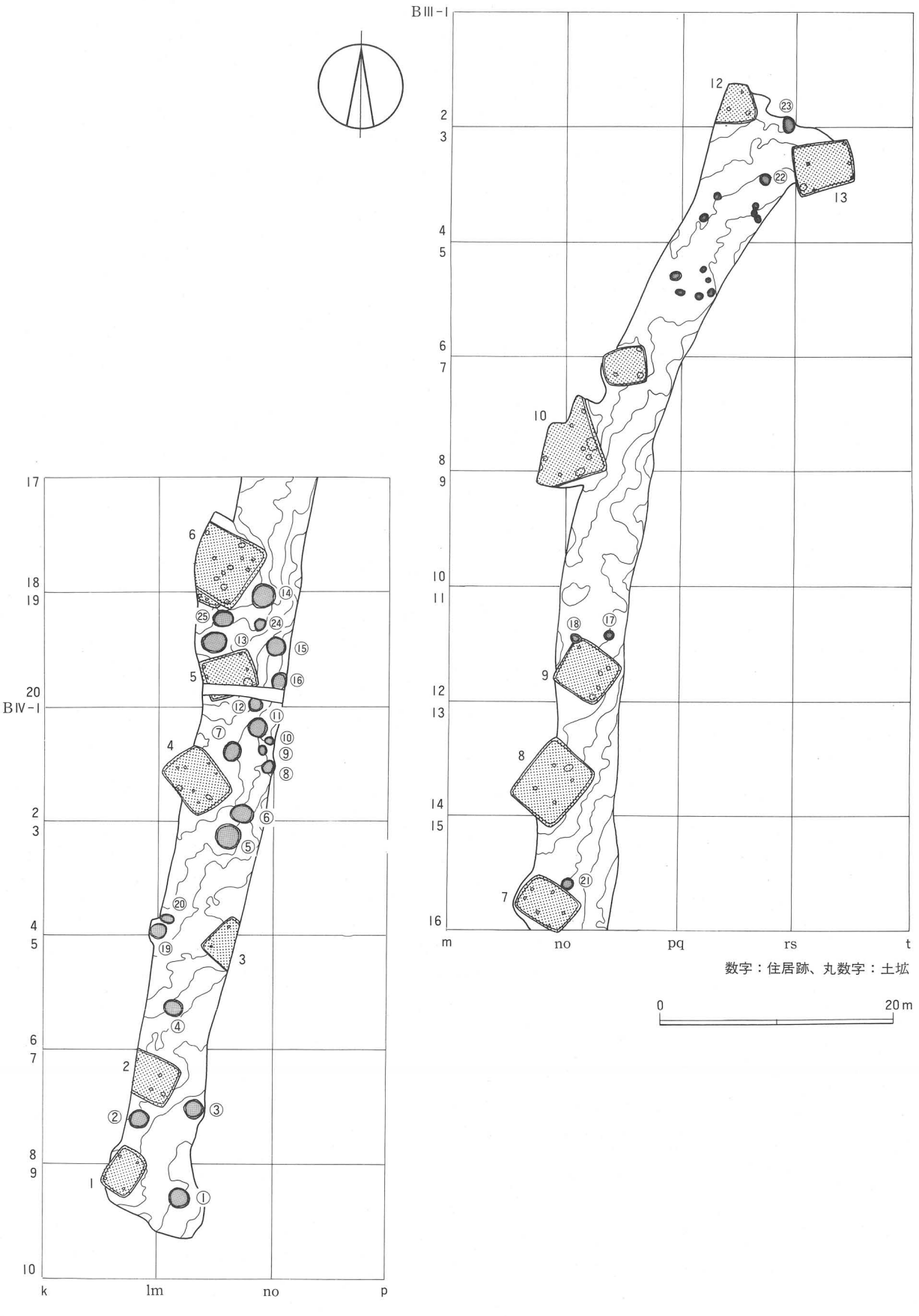


第７図　姥ヶ沢遺跡遺構分布図

1：200



第 8 図　姥ヶ沢遺跡第 5 調査地区全体図



第９図　姥ヶ沢遺跡第２調査区全体図

⑵　遺構とその出土遺物

「竪穴住居跡」

第１号住居跡（第10・11図・図版４）

［位置］ＢⅣ―18・19グリットに位置する。集落南端の住居跡。北側に第２号住居跡が位置している。

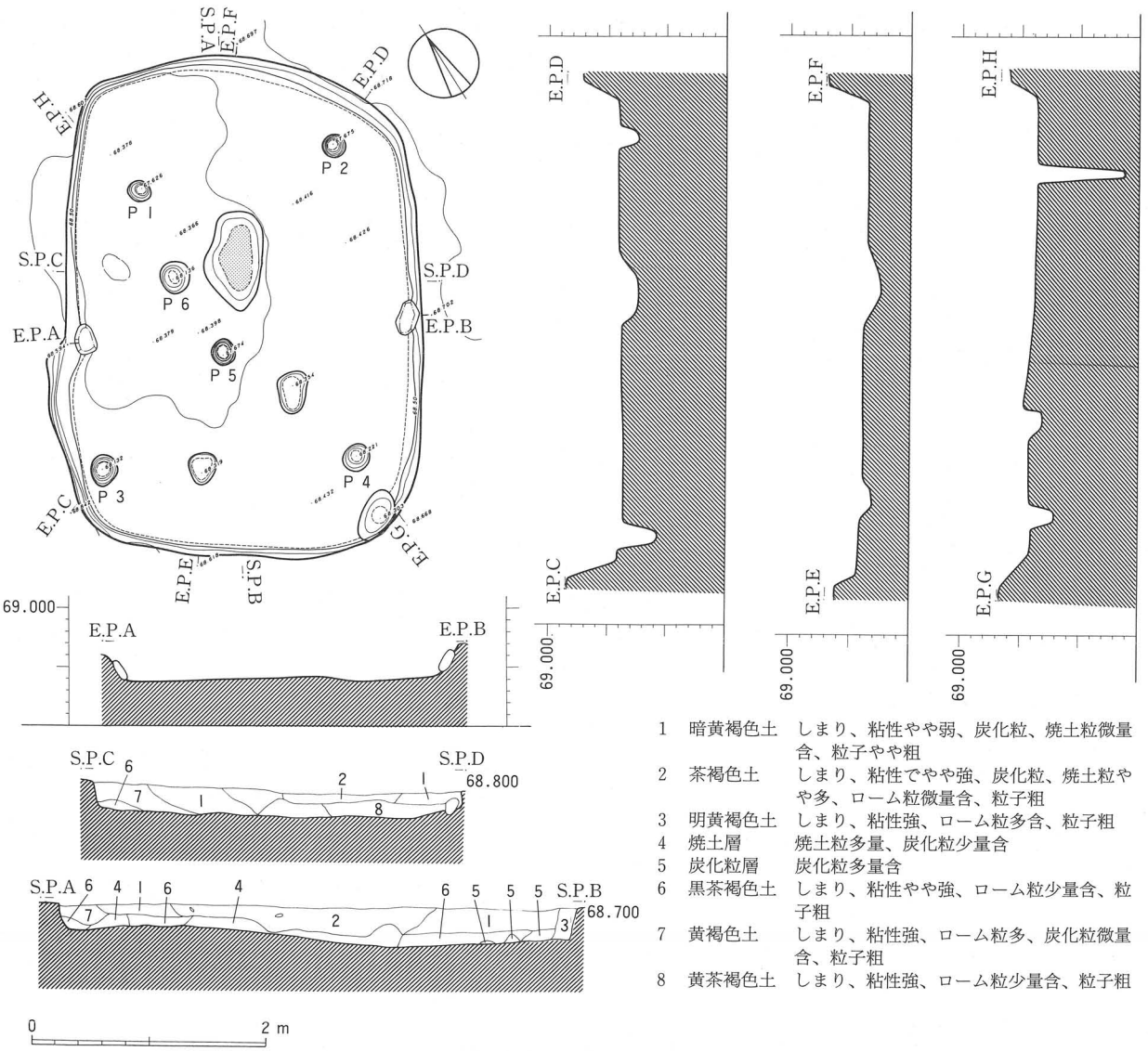
［形状］長径4.3m、短径3.0mの隅丸長方形を呈する。壁高は、東側で30.2cm、西側で19.4cm、南側で21.8cm、北側で29.7cmを測る。

［覆土］８層に分層される。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

［柱穴］柱穴は６口確認されている。Ｐ1～Ｐ4が主柱穴。Ｐ1―82.5cm、Ｐ2―27.9cm、Ｐ3―36.8cm、Ｐ4―77.4cm、Ｐ5―26.4cm、Ｐ6―72.6cmを測る。

［炉］住居の中央やや北東寄りに、長径84cm、短径44cmの不整楕円形を呈する地床炉が１基確認されている。

［遺物出土状況］住居跡の南西の壁際に接するように、２の壺がほぼ完全な形で検出されている。また、13・14の石皿が、東西の壁際のほぼ中央に対をなすように検出されている。この３点の遺物は、いずれも床面上に置かれた状態で検出されており、住居焼失の際、原位置に残されたものと判断される。７の転用品の紡錘車、１の壺形土器の口縁部、11の磨石



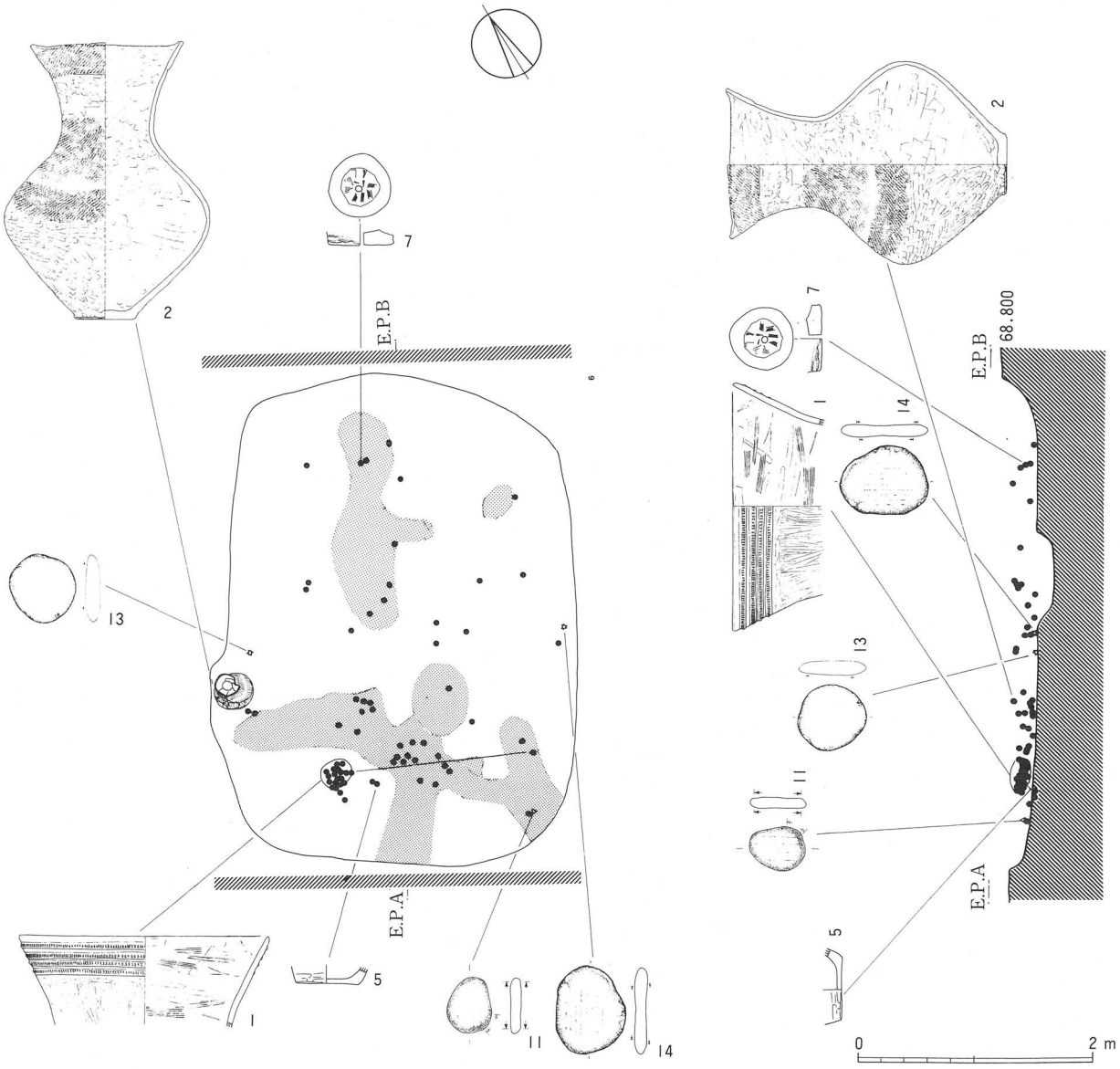
第10図　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡平面図

は、床面からやや浮いた状態で検出されている。１の壺は残存率50％で、おそらく器台として転用されていたものが、破損に際し、本住居跡の覆土中に廃棄されたものと推測される。

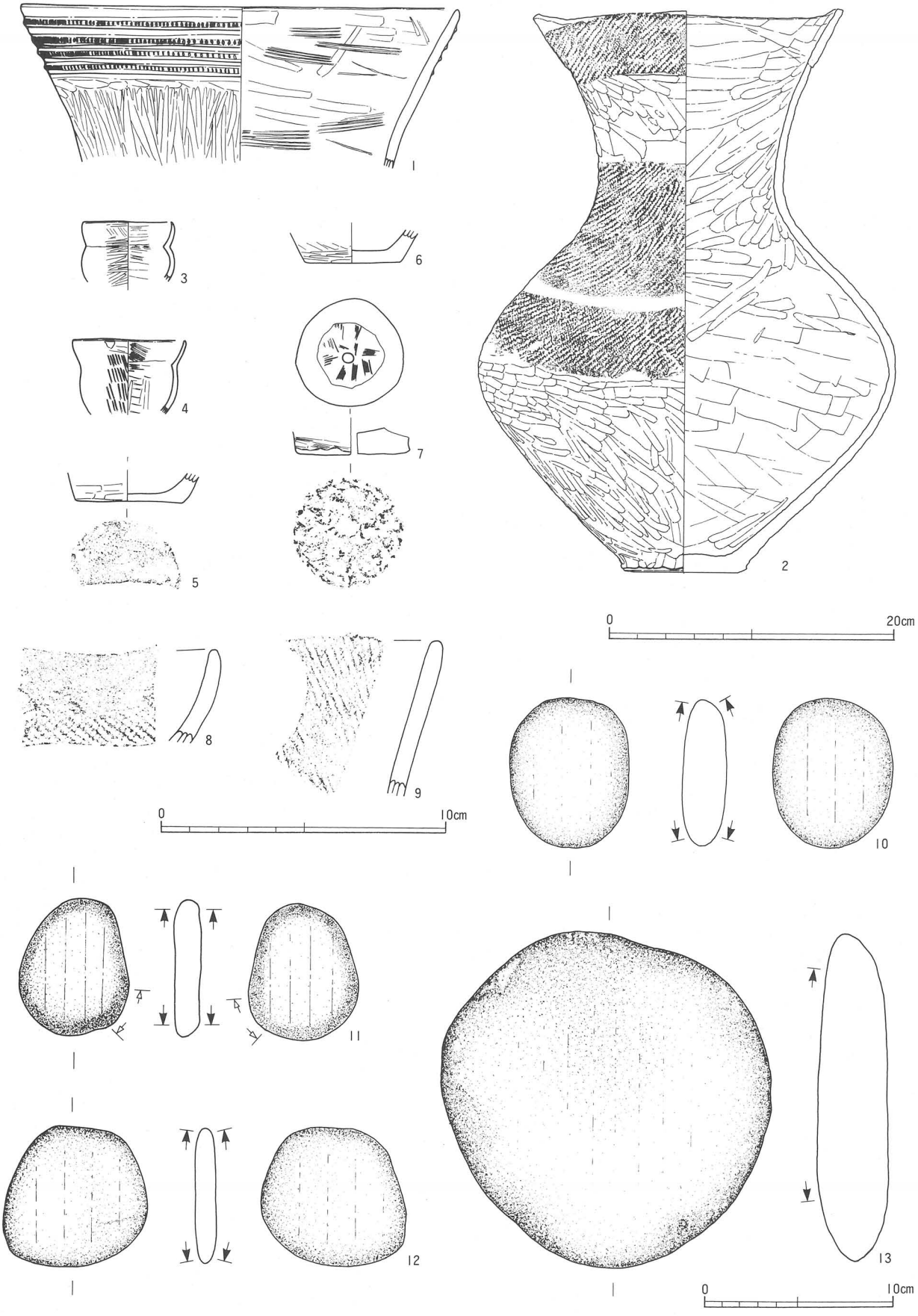
［遺物］（第12・13図、図版29・47）遺物は、土器218点、土製紡錘車１点、磨石４点、石皿２点が出土している。

第12図１・２は壺形土器である。１は、口縁部に輪積みの下端部をつまみあげた突帯を４条廻らし、刻みを施す。突帯直下にヘラ状工具による横方向のケズリを施した後、縦方向のミガキにより調整する。内面は横方向のナデ調整を施す。２は、床面より検出されたほぼ完形の壺形土器で、折返し状口縁をもつ。口縁部、肩部、体部中半に３段の文様帯がつくられ、LR縄文が施文される。内面には横方向のナデ調整が施される。３、４は坩形ミニチュア土器である。３は、外面はミガキにより調整され、内面は横方向のナデ調整が施される。４は、粗いハケ状工具により調整される。内面はミガキが施される。７は紡錘車である。土器底部の転用品である。上面には器壁の破砕面が残る。

10～12は砂岩製の磨石である。偏平な礫を用い、



第11図　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡遺物分布図



第12図　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡出土遺物(1)

平坦な両面に擦痕をもつ。11は、側縁の一部に敲打痕が残る。13・14は、床面より検出された砂岩製の石皿である。14は、平坦な両面に擦痕をもつ。

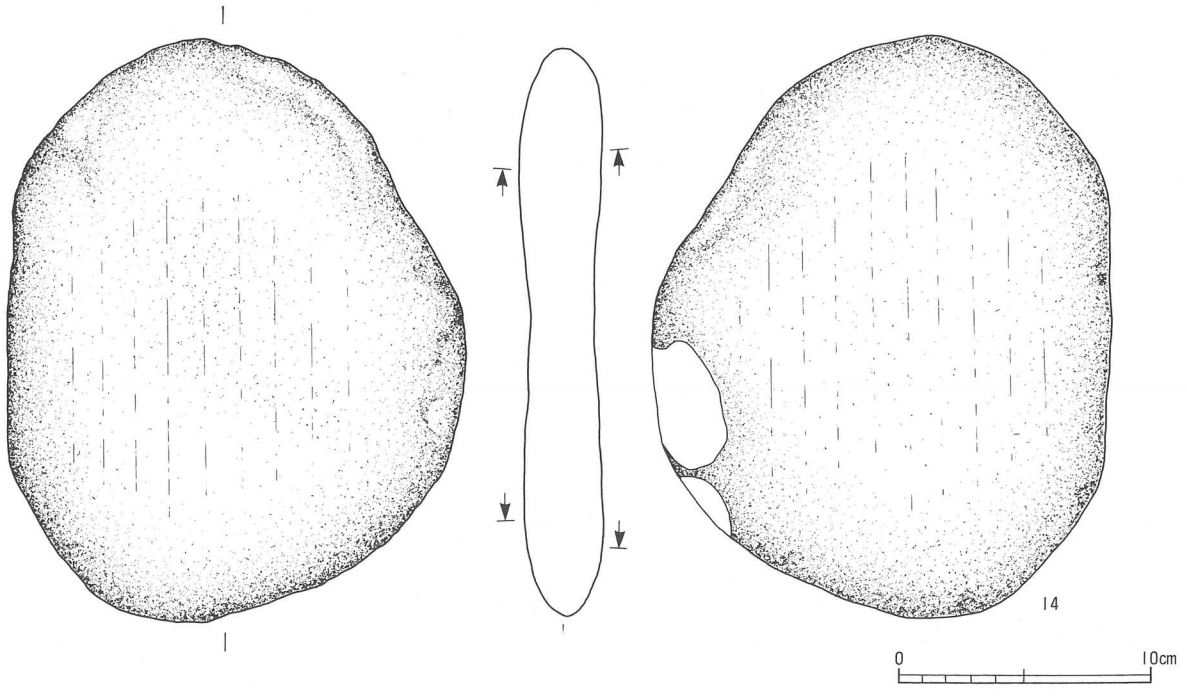
［時期］床面上より検出された壺形土器より判断して、弥生時代後期。

第１表　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	壺	(30.5)	11.3		BR	o	a	50%	
2	壺	22.0	40.0	9.0	SWB	o	b	100%	
3	坩	(6.0)	3.7		SWB	do	b	40%	ミニチュア
4	坩	(5.8)	4.4		SWB	rb	a	30%	ミニチュア
5			1.9	7.5	SWB	do	b	60%	
6	壺		2.4	6.6	SWB	do	a	100%	
7	紡錘車			8.0	SWB	do	b	100%	転用品
8	甕				SW	do	b	20%	
9	甕				SW	do	b	10%	

第２表　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
10	覆土上層	磨石2a	79	60	22	180	S	a	研磨３
11	床面直上	磨石2a	72	51	11	60	S	a	研磨３敲打有
12	覆土上層	磨石4a	75	72	14	125	S	a	研磨３
13	床面	石皿	238	228	48	3,650	S	a	
14	床面	石皿	308	235	46	5,500	S	a	



第13図　姥ヶ沢遺跡第１号住居跡出土遺物(2)

第２号住居跡（第14・15図・図版５）

［位置］ＢⅣ－１６・１７・m7グリットに位置する。西側約１／４が調査区外にかかり未調査。南側に第１号住居跡が位置している。

［形状］現状から判断して、長径（4.0m）、短径3.9mの隅丸方形を呈するものと考えられる。壁高は、東側で34.2cm、西側で31.7cm、南側で29.6cm、北側で24.4cmを測る。

［覆土］９層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

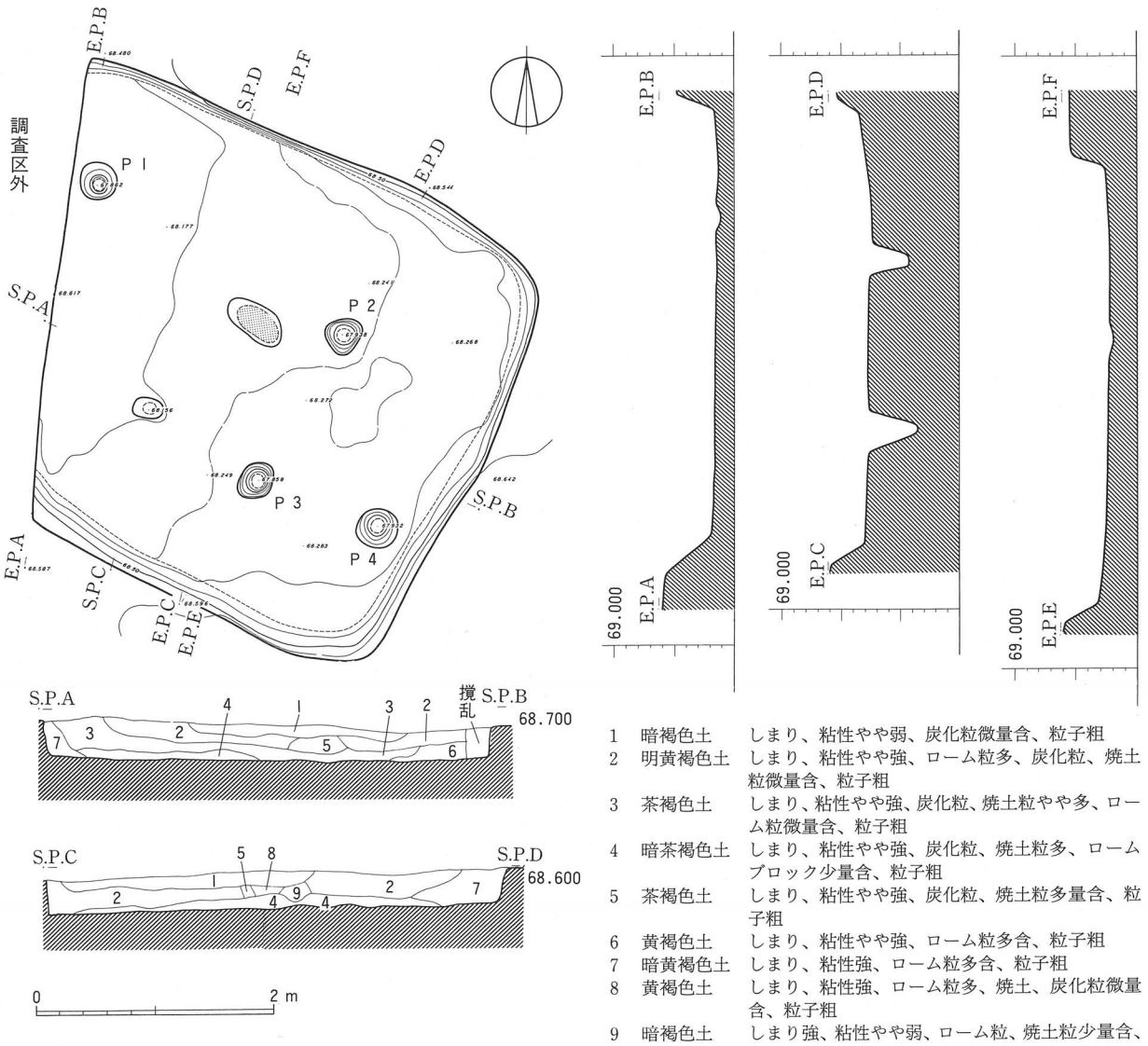
［柱穴］柱穴は４口確認されている。Ｐ1.Ｐ3.Ｐ5が主柱穴。Ｐ1－23.8cm、Ｐ2－4.4cm、Ｐ3－34.2cm、Ｐ4－36.8cmを測る。

［炉］住居の中央やや北寄りに、長径56cm、短径28cmの楕円形を呈する地床炉が１基確認されている。

［遺物出土状態］３の高坏が、ほぼ完形の状態で床面より検出されている。他の遺物はいずれも床面より浮いた状態で検出されており、器としての残存率は低く、本住居の埋没過程で廃棄されたものと推測される。11の片口の破片は、Ｐ4の底付近より出土している。

［遺物］（第16・17図、図版30・47）遺物は、土器209点、磨石５点、棒状礫器２点が出土している。土器には、古墳時代前期五領式期に属するものが15点含まれる。

１・２は甕形土器である。外面にはRL縄文が施さ

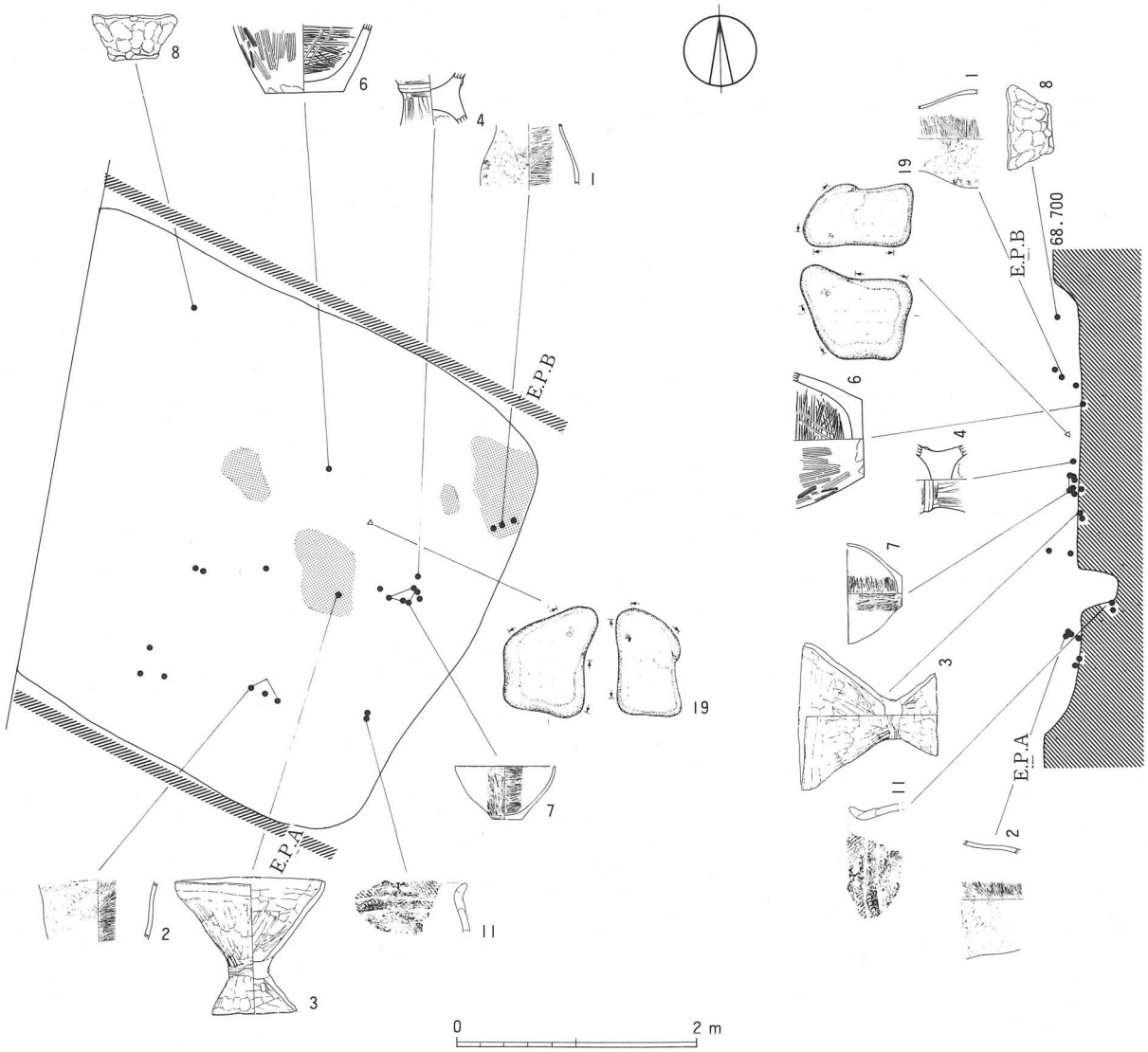


1　暗褐色土　しまり、粘性やや弱、炭化粒微量含、粒子粗
2　明黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多、炭化粒、焼土粒微量含、粒子粗
3　茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒、焼土粒やや多、ローム粒微量含、粒子粗
4　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒、焼土粒多、ロームブロック少量含、粒子粗
5　茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒、焼土粒多量含、粒子粗
6　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多含、粒子粗
7　暗黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒多含、粒子粗
8　黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒多、焼土、炭化粒微量含、粒子粗
9　暗褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒、焼土粒少量含、粒子粗

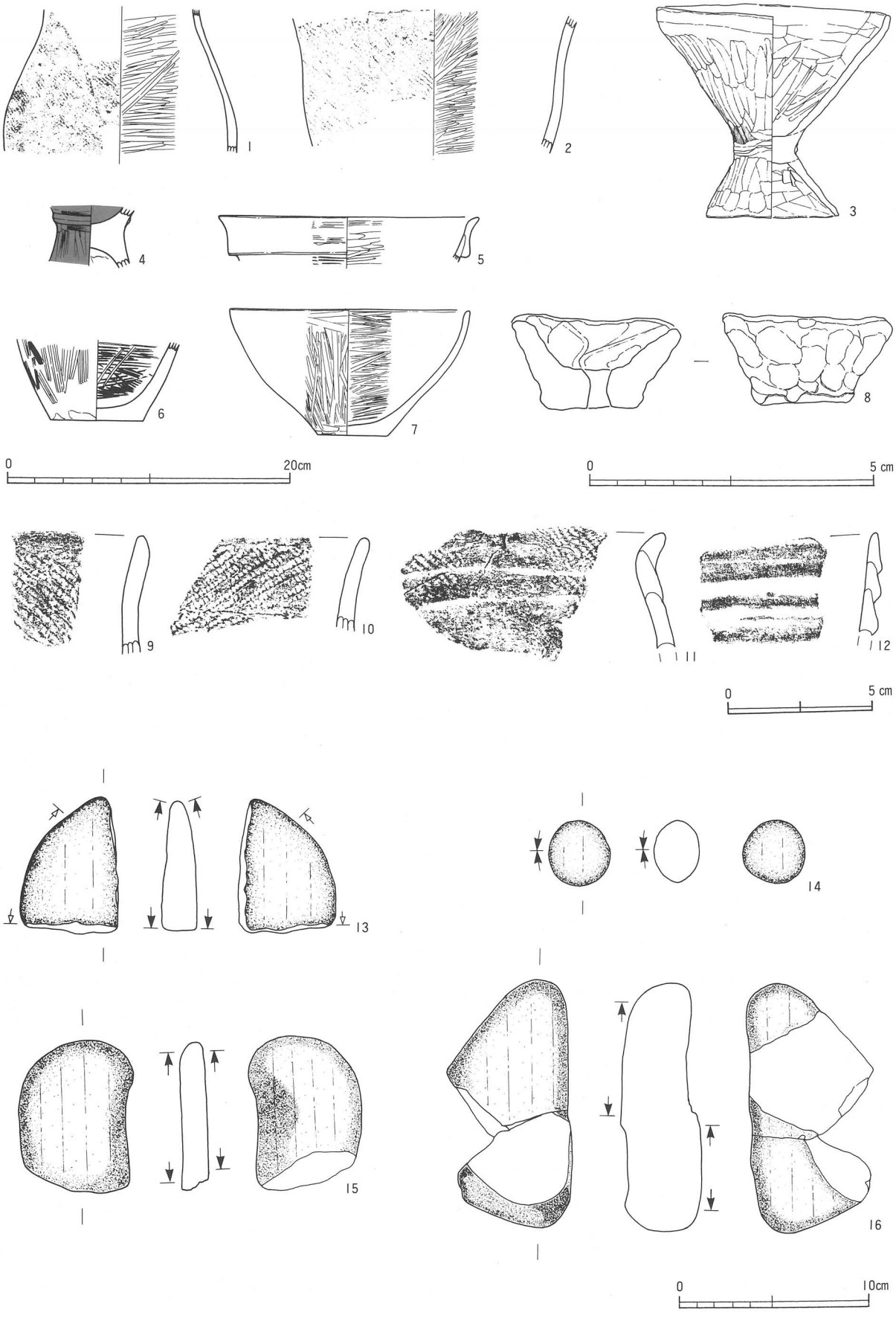
第14図　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡平面図

れる。内面調整は横方向のミガキである。３は、床面より検出されたほぼ完形の坏形土器である。口縁部は横方向のナデ調整、坏部・脚部はヘラ状工具による縦方向のミガキによる調整がおこなわれる。坏部と脚部の接合部には突帯をもつ。４は高坏形土器の接合部である。１条の突帯をもつ。脚部は縦方向のミガキにより調整される。脚部内面を除く全面に赤色塗彩が施される。５は、壺形土器である。折返し状口縁をもつ。外面・内面とも横方向のナデ調整が施される。７は、鉢形土器である。口唇部はヘラ状工具によるケズリ、口縁部は横方向のミガキ、体部は縦方向のミガキ、底部はミガキによって調整される。内面には横方向のミガキが施される。８は、手捏ね成形の甕形ミニチュア土器である。９・10は甕形土器である。９にはRL縄文、10にはLR縄文が施される。11は、片口形土器である。折返し状口縁にRL縄文が施される。口縁の一部は片口状に作り出されている。輪積み痕が明瞭に残る。13・15は砂岩製、14は閃緑岩製、16はフォルンフェルス製の磨石である。13・15・16は、偏平な礫を用いている。欠損部も多いが、平坦な両面に擦痕をもつ。13は、側縁の一部に敲打痕を残す。14は、小形の球形礫を用いている。全面に擦痕をもつ。17・18は砂岩製の棒状礫器である。両者とも断面形状は角のとれた三角形を呈する。17は、一つの面に擦痕をもつ。19は閃緑岩製の磨石である。台状礫を使用している。

［時期］床面上の遺物から判断して、弥生時代後期。



第15図　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡遺物分布図



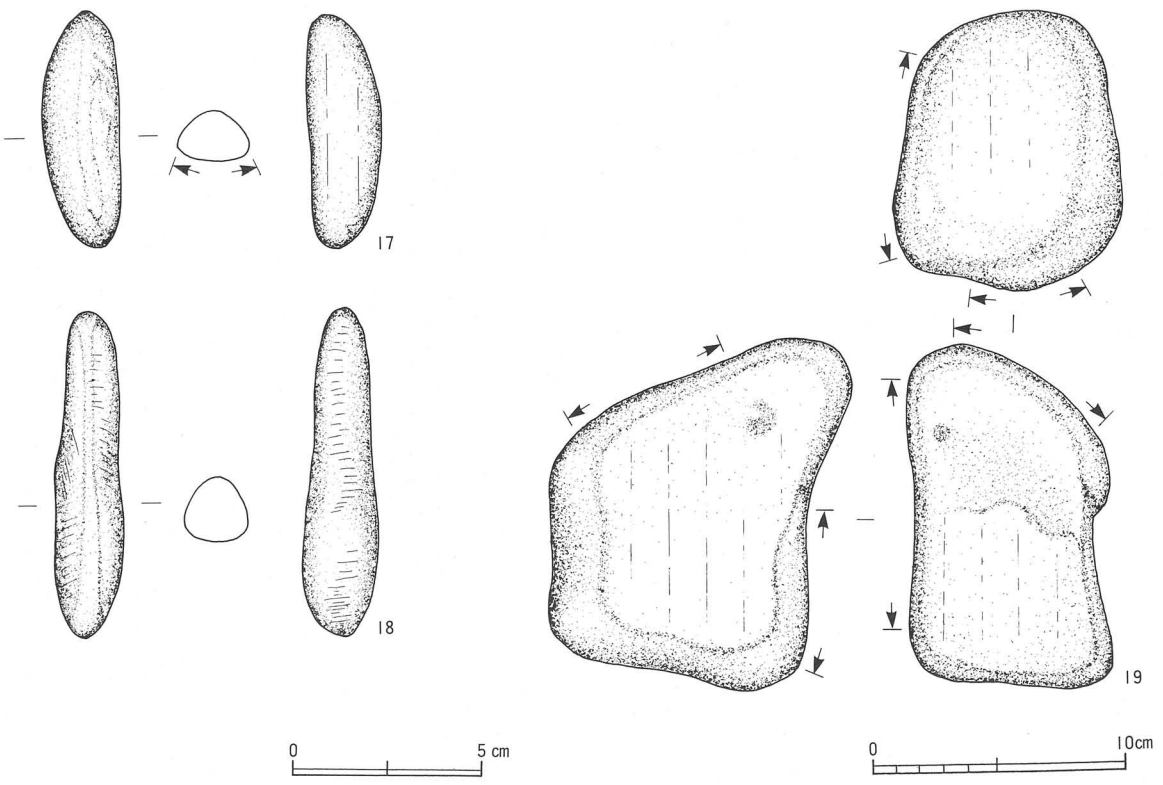
第16図　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡出土遺物(1)

第３表　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕		10.3		SB	o	b	30%	
2	甕		9.3		WB	dg	b	20%	
3	高　坏	16.5	15.0	9.2	BS	do	b	100%	
4	高　坏		3.9		BR	do	b	100%	内外面赤彩
5	壺	(18.3)	3.2		BS	do	a	20%	
6	鉢		5.7	6.5	SWR	do	a	90%	
7	鉢	17.5	8.6	5.0	SWR	do	b	80%	
8	甑	3.0	1.6	1.7	SBR	do	b	100%	ミニチュア
9	甕				WR	do	b	10%	
10	甕				BS	do	a	10%	
11	片口				RS	o	b	10%	
12	壺				WR	dg	b	10%	

第４表　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
13	覆土上層	磨石2a	(72)	(50)	20	70	S	d	研磨３敲打有
14	覆土上層	磨石1b	35	33	27	45	Se	a	研磨１
15	覆土上層	磨石3a	(82)	56	15	110	S	b	研磨３
16	覆土上層	磨石6a	132	(65)	(36)	400	F	b	研磨３
17	覆土上層	棒状礫器3b	238	228	48	3,650	S	a	
18	覆土上層	棒状礫器2b	308	235	46	5,500	S	a	
19	床上10cm	磨石4a	135	104	78	1,500	Se	a	研磨３－４



第17図　姥ヶ沢遺跡第２号住居跡出土遺物(2)

第３号住居跡（第18・19図・図版６）

［位置］ＢⅣ—m4•m5、n4•n5グリットに位置する。約２／３が調査区外にかかり未調査。

［形状］現状から判断して、長径（2.2m）、短径3.6mの方形あるいは長方形を呈するものと考えられる。壁高は、西側で29.0cm、南側で44.2cm、北側で23.8cmを測る。

［覆土］５層に分層される。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

［柱穴］柱穴は２口確認されている。P1—95.7cm、P2—34.1cmを測る。

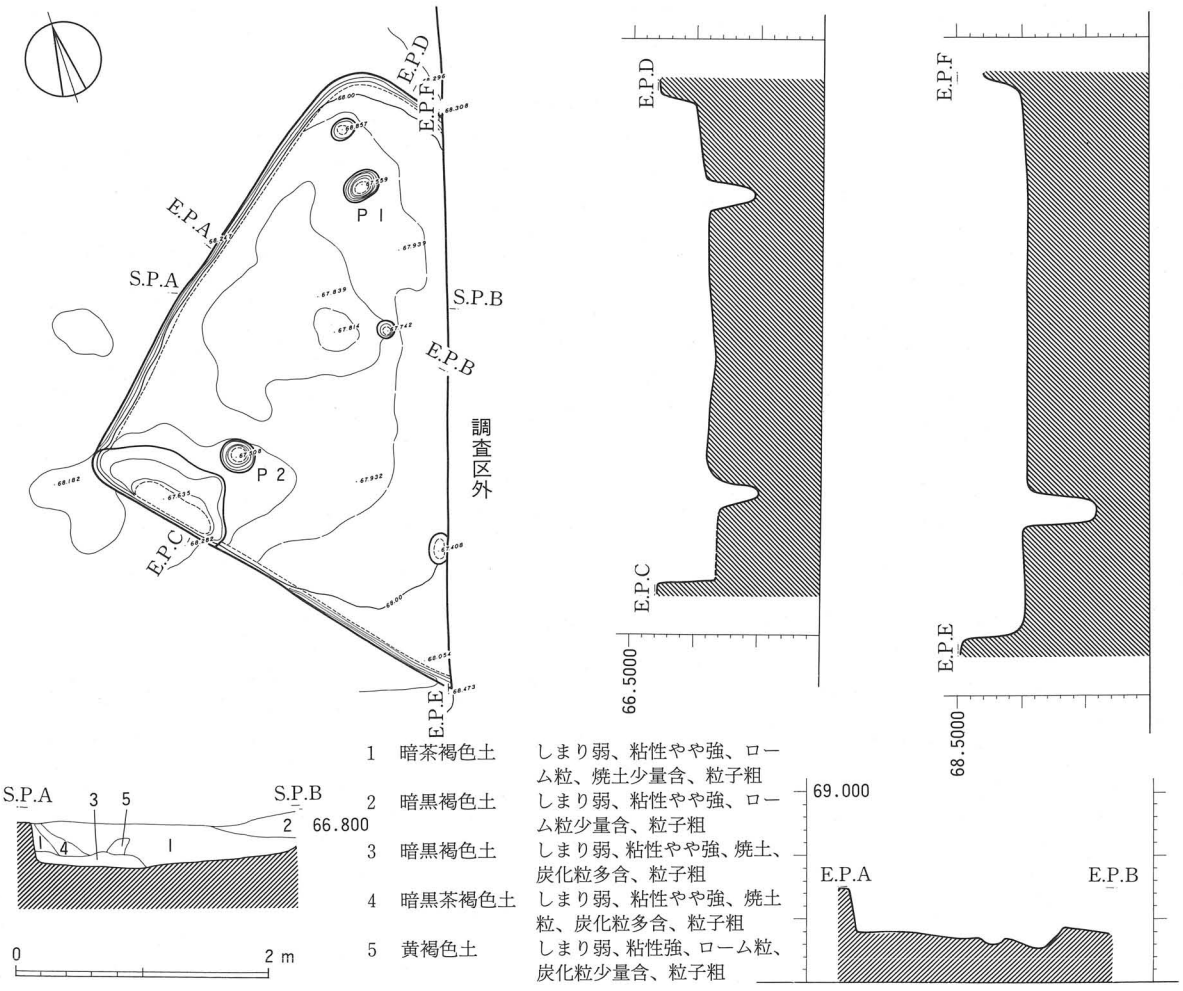
［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］遺物の出土量は少なく、そのほとんどは覆土中からの出土である。床面に残された遺物は認められず、器としての残存率は低く、本住居の埋没過程で廃棄されたものと推測される。

［遺物］（第20図、図版30・47）遺物は、土器49点、磨石１点、棒状礫器１点が出土している。土器には、弥生時代後期に属するものが15点、古墳時代前期五領式期に属するものが33点含まれている。

１は、完形のミニチュア土器である。粘土紐巻上げ成形による。２は、台付甕形土器の体部と台部の接合部である。外面はハケ状工具による縦方向の調整がなされている。内面はナデ調整が施される。４は器台である。外面はハケ状工具による縦方向の調整、脚部内面はナデ調整が施される。坏部内面には一部ヘラ状工具によるケズリが認められる。

５は、フォルンフェルス製の棒状礫器である。断面形状は楕円形を呈する。６は砂岩製の磨石である。偏平な礫を用い、平坦な両面に擦痕をもつ。



第18図　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡平面図

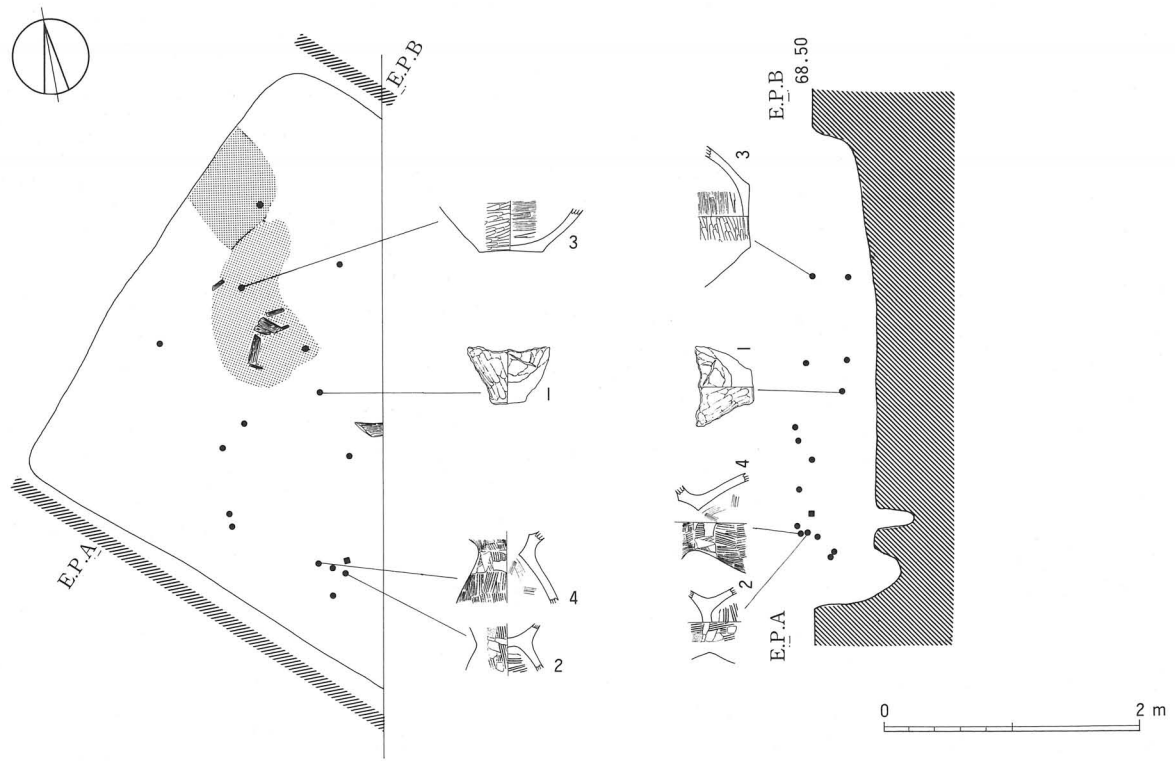
［時期］覆土中には、弥生時代に属する遺物よりも古墳時代前期に属するものの方が多く、両時代の移行期にあたると思われる。住居の帰属時期は古墳時代前期五領式期と考えられる。

第５表　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	鉢	2.6	1.8	1.1	SW	do	b	100%	ミニチュア
2	台付甕		4.4		SW	o	b	90%	
3	甕		4.1	6.3	SR	o	c	50%	
4	台付甕		6.6		SW	o	b	50%	

第６表　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
5	覆土上層	棒状礫器3a	75	23	13	40	H	a	
6	覆土上層	磨石6a	90	85	12	205	S	a	研磨３



第19図　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡遺物分布図

第４号住居跡（第21・22図・図版７）

［位置］ＢⅣ—m1•m2、n1•n2グリットに位置する。北側に第５号住居跡が位置している。

［形状］長径5.5m、短径4.1mの隅丸方形を呈する。東壁南半部から南東隅にかけての壁に壁溝が確認されている。壁高は、東側で55.8cm、西側で58.5cm、南側で56.7cm、北側で52.5cmを測る。

［覆土］６層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

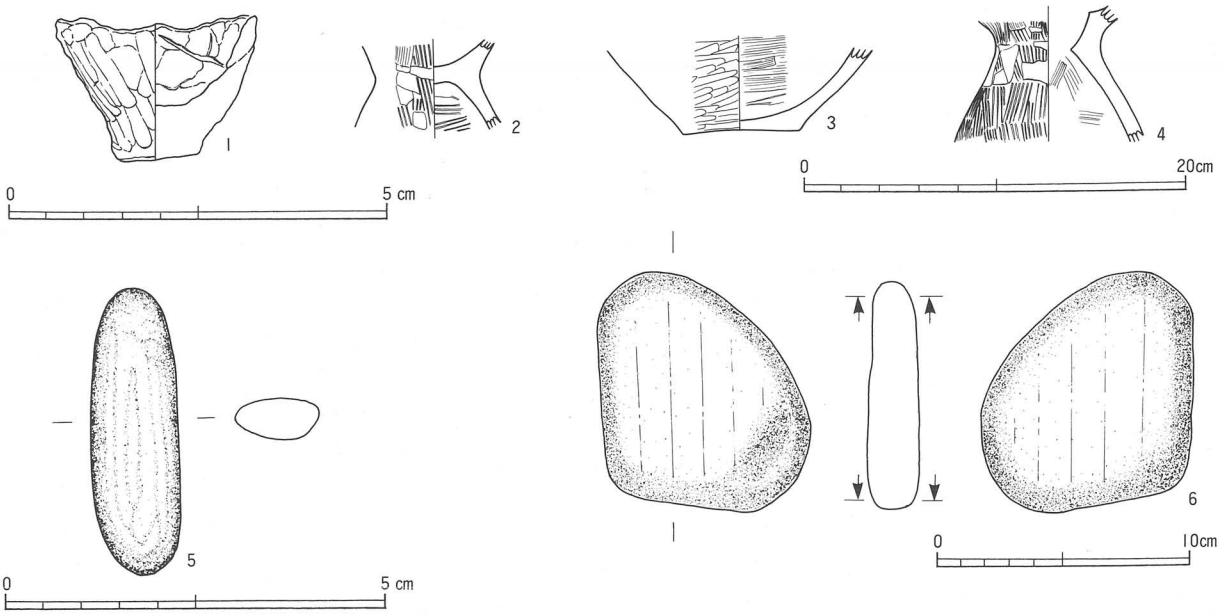
［柱穴］柱穴は７口確認されている。Ｐ1・Ｐ3・Ｐ4•Ｐ5は主柱穴。Ｐ1—36.8cm、Ｐ2—10.5cm、Ｐ3—21.2cm、Ｐ4—26.1cm、Ｐ5—20.8cm、Ｐ6—27.5cm、Ｐ7—24.1cmを測る。Ｐ6・７は、出入口に関連する施設の可能性がある。

［炉］住居跡中央やや北寄に、長径90cm、短径56cmの不正楕円形を呈する地床炉と、中央南寄りの壁際に、長径40cm、短径60cmの楕円形を呈する地床炉が２基確認されている。

［遺物出土状態］１の甕形土器の口縁部および、２の壺形土器の口縁部が逆位で床面に接した状態で検出されている。器台として転用された状態を示しているものと考えられる。２の土器は、地床炉上に置かれた状態で検出されており、炉部における使用状態を示しているものと考えられる。他の遺物はいずれも床面より浮いた状態で検出されており、器としての残存率は低く、本住居の埋没過程で廃棄されたものと推測される。また本住居の特徴として、覆土中より、磨石・石皿・敲石の石器が比較的多く出土している。いずれも床面より40cm程浮いた状態で出土している。住居の壁面に沿うように検出されており、完全に埋没していなかった住居の形状を意識して廃棄された可能性が推測される。

［遺物］（第23～25図、図版31•48）遺物は、土器74点、土製紡錘車１点、磨石９点、石皿１点、敲石１点が出土している。

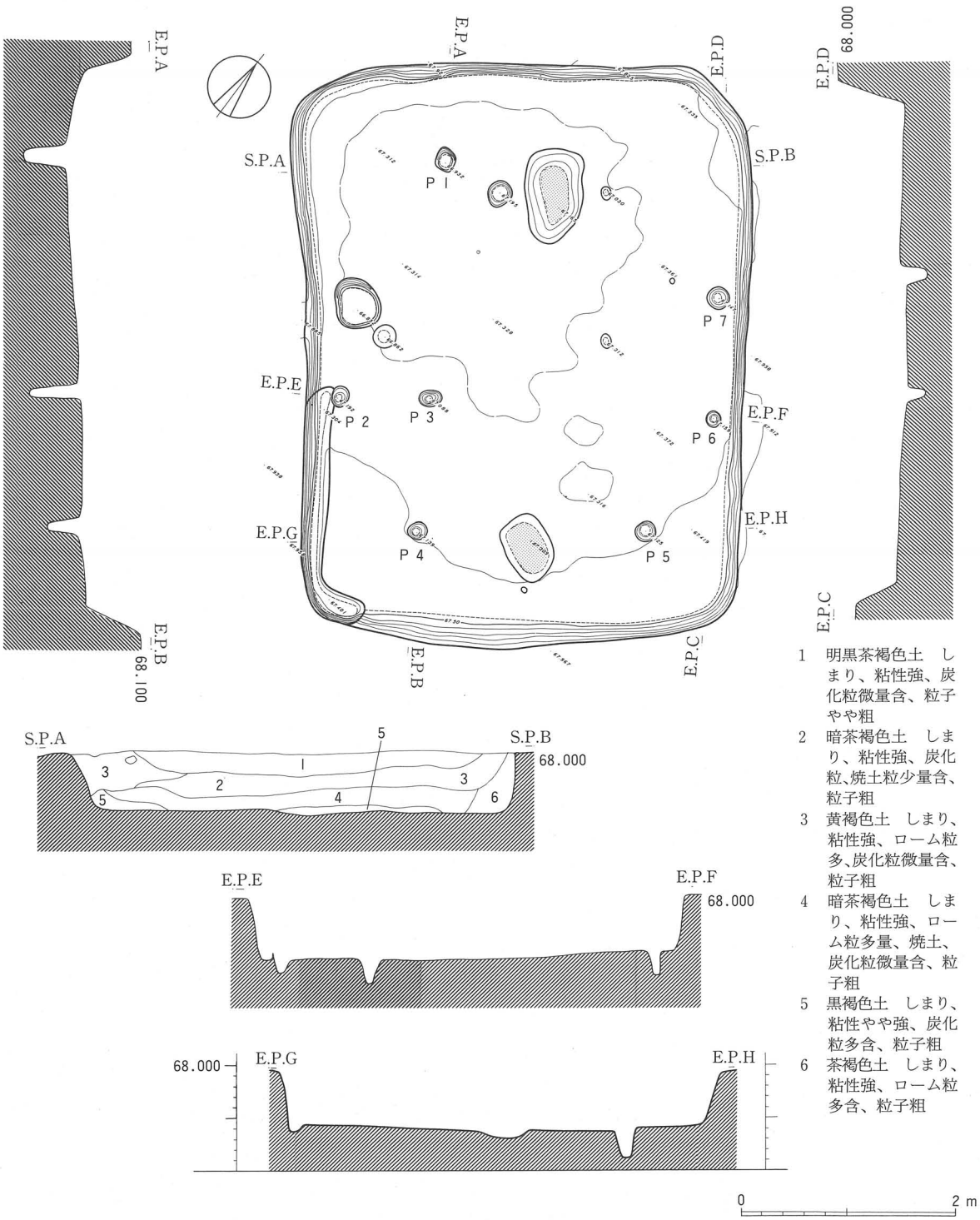
１は甕形土器で、折返し状口縁をもつ。頸部と肩部の境に３連止めの櫛歯の廉状文を施文した後、口縁部から頸部に波状文が施される。内部はヘラ状工具による横方向のミガキによって調整される。体部以下が欠失しており、器台として転用されたものと思われる。２は壺形土器で、口縁部に輪積み痕をつまみ出した突帯をもつ。突帯及び突帯下に横方向のナデ調整を施す。内面はヘラ状工具による横方向のミガキによって調整される。体部以下が欠失しており、器台として転用されたものと思われる。３～５は甕形土器である。RL縄文を施文する。６は鉢形土



第20図　姥ヶ沢遺跡第３号住居跡出土遺物

器である。７・10は高坏形土器である。７は、坏部と脚部の接合部に突帯をもつ。10は、外面をヘラ状工具による縦方向のケズリにより、内面をナデにより調整している。12は土製の紡錘車である。断面は台形を呈する。孔径は、上面の方が下面よりもやや大きい。

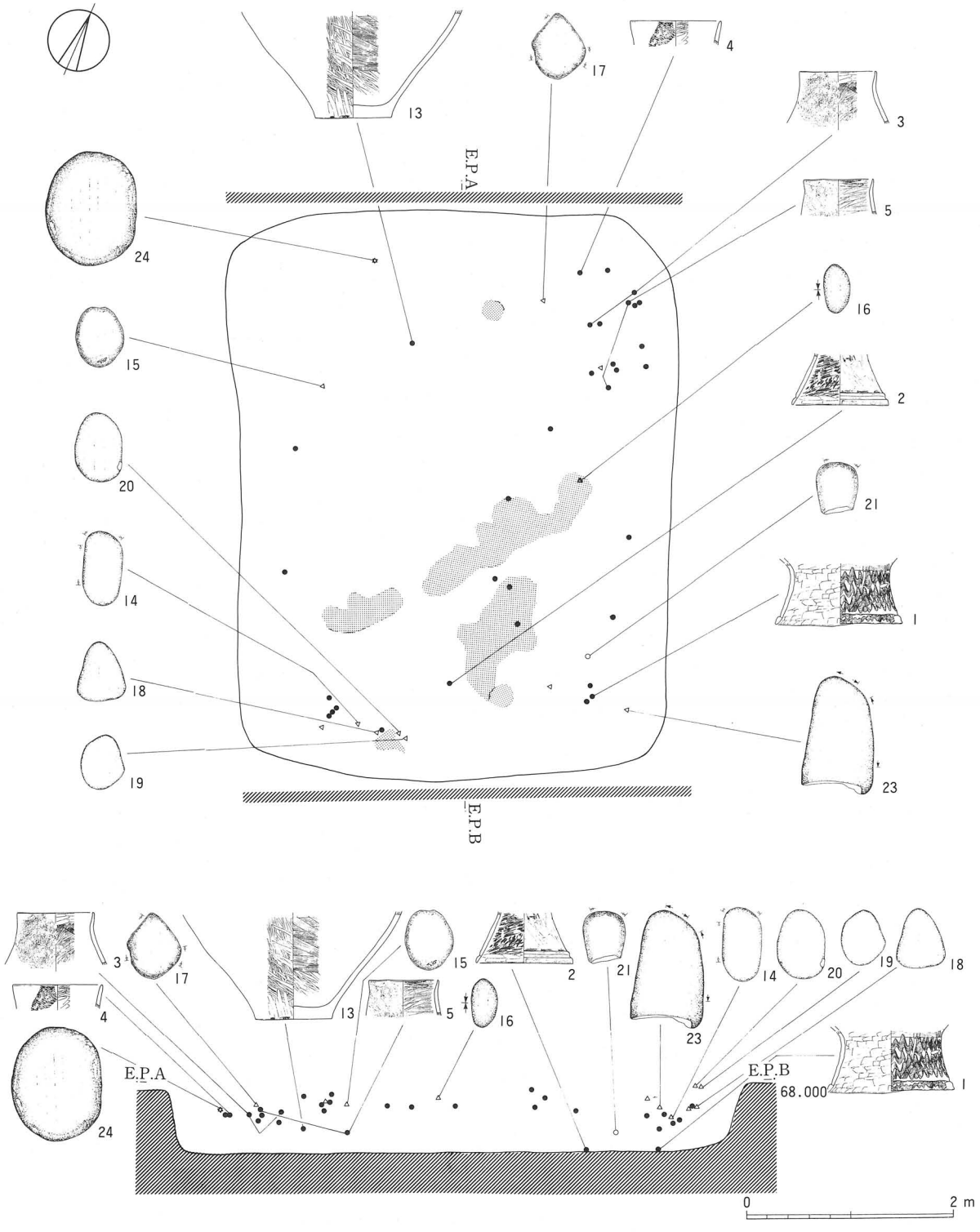
21は砂岩製の敲石である。側縁に敲打痕が残る。偏平な礫を用いており、平坦な両面に擦痕がみられる。14～20・22・23は磨石である。22は緑色岩、14～20・23は砂岩。15は卵形の礫を用い、両面に擦痕をもつ。16はやや偏平な小形の礫を用い、全面に擦痕を残す。17～20・22は偏平な礫を用い、平坦な



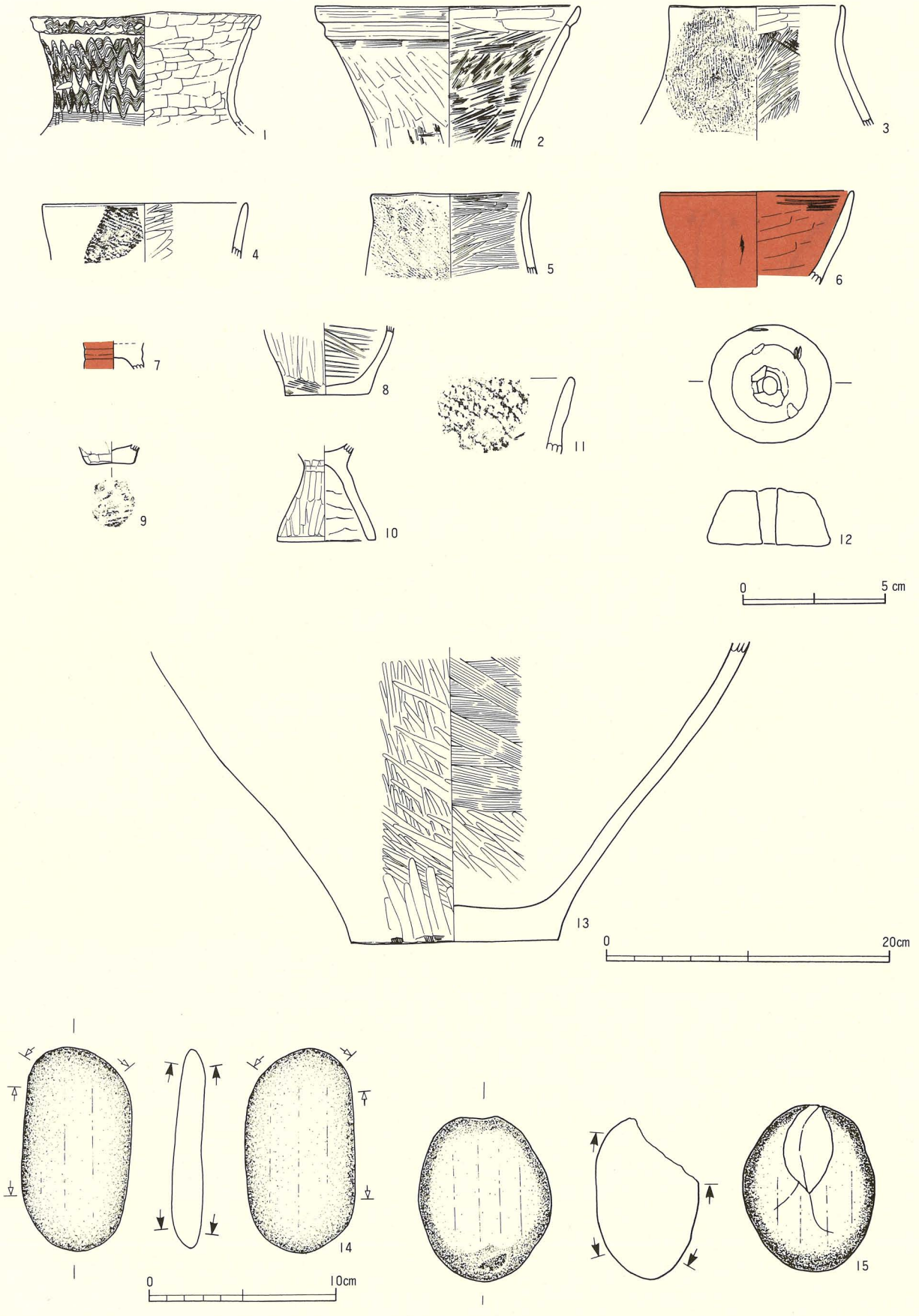
第21図　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡平面図

両面に擦痕をもつ。17は、菱形状の礫の対向する2頂点の周辺に敲打痕が認められる。21は棒状の礫を用いている。一部欠損しているが、作業面に敲打痕をもち、擦痕は認められない。24は石皿である。偏平な礫を使用し、平坦な両面に擦痕が残る。

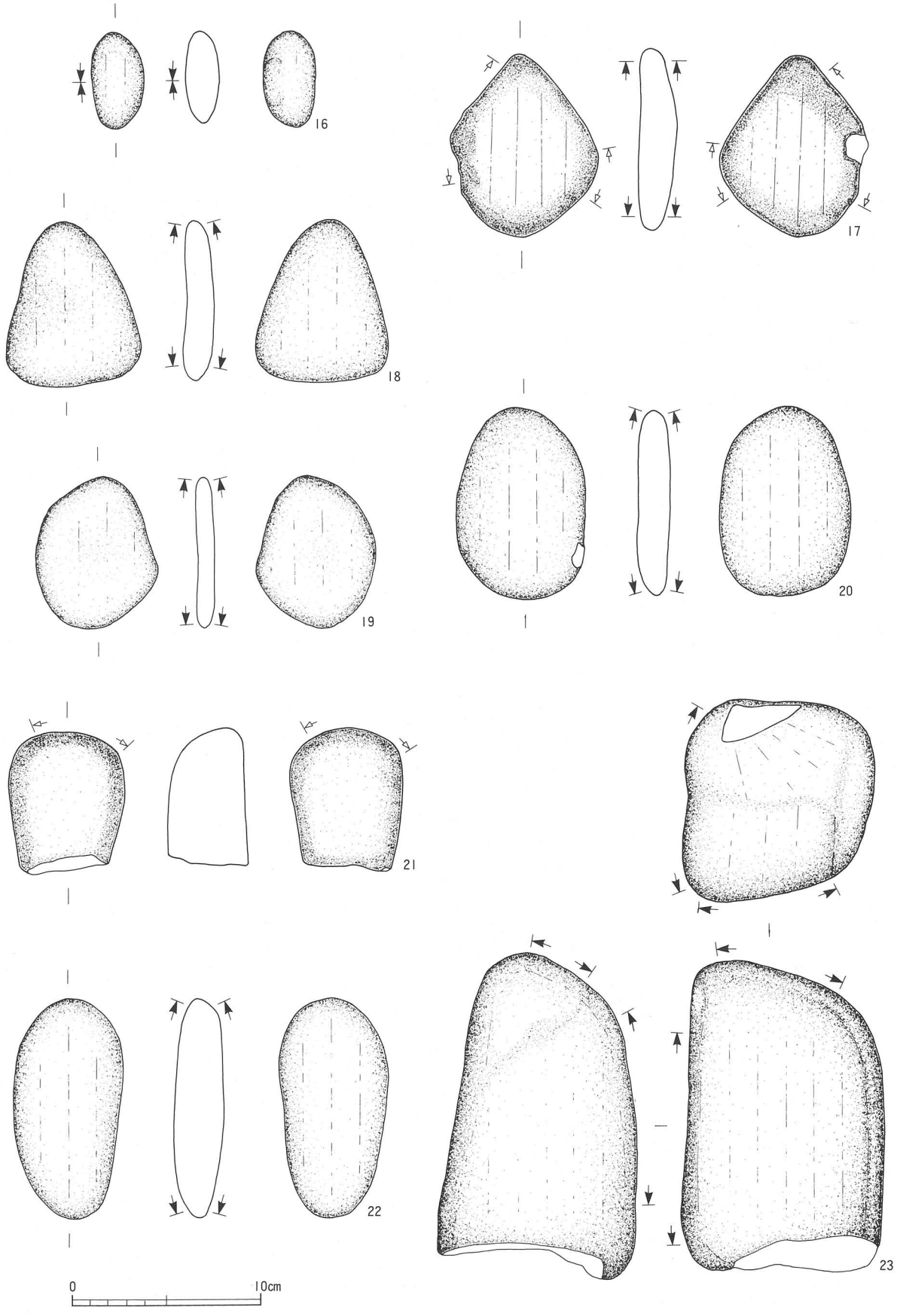
[時期]床面上の遺物から判断して、弥生時代後期。



第22図　姥ヶ沢遺跡第4号住居跡遺物分布図



第23図　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土遺物(1)



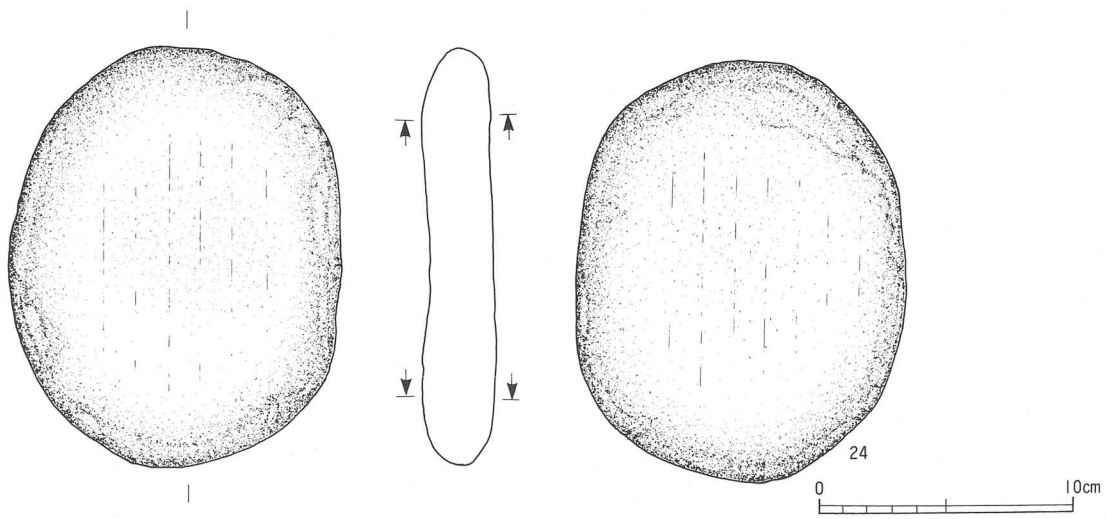
第24図　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土遺物(2)

第７表　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	16.0	8.5		SWB	do	b	90%	
2	壺	18.6	10.0		WS	dg	b	90%	
3	甕	(12.3)	8.3		SB	do	a	30%	
4	甕	(14.4)	3.9		WB	dg	b	10%	
5	甕	(11.3)	5.7		BR	do	a	20%	
6	高　坏	13.5	6.7		WSR	o	b	40%	表面赤彩
7	高　坏		1.7		RB	o	b	100%	表面赤彩
8	甕		4.7	6.2	SBW	do	b	90%	
9	甕		1.2	3.5	WBS	o	b	100%	ミニチュア
10	高　坏		6.9	7.0	WSB	o	b	100%	
11	甕				SWB	do	b	10%	
12	紡錘車				SBW	do	b	100%	
13	壺		20.7	14.7		do	b	90%	

第８表　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
14	床上66cm	磨石3a	107	56	20	170	S	a	研磨２敲打有
15	床上32cm	磨石2b	87	69	53	410	S	d	研磨３
16	床上46cm	磨石2b	50	26	22	45	S	a	研磨１
17	床上50cm	磨石4a	96	77	17	140	S	a	研磨３敲打有
18	床上38cm	磨石6a	85	71	15	120	S	a	研磨３
19	床上60cm	磨石2a	80	62	12	80	S	a	研磨３
20	床上60cm	磨石5a	100	67	22	190	S	a	研磨３
21	床上16cm	敲石3a	(72)	62	42	300	S	b	敲打１
22	覆土上層	磨石3a	115	56	26	285	Rs	a	研磨３
23	床上40cm	磨石2b	(155)	105	97	2,400	S	b	研磨３－４
24	床上39cm	石皿	216	170	44	2,500	Se	a	

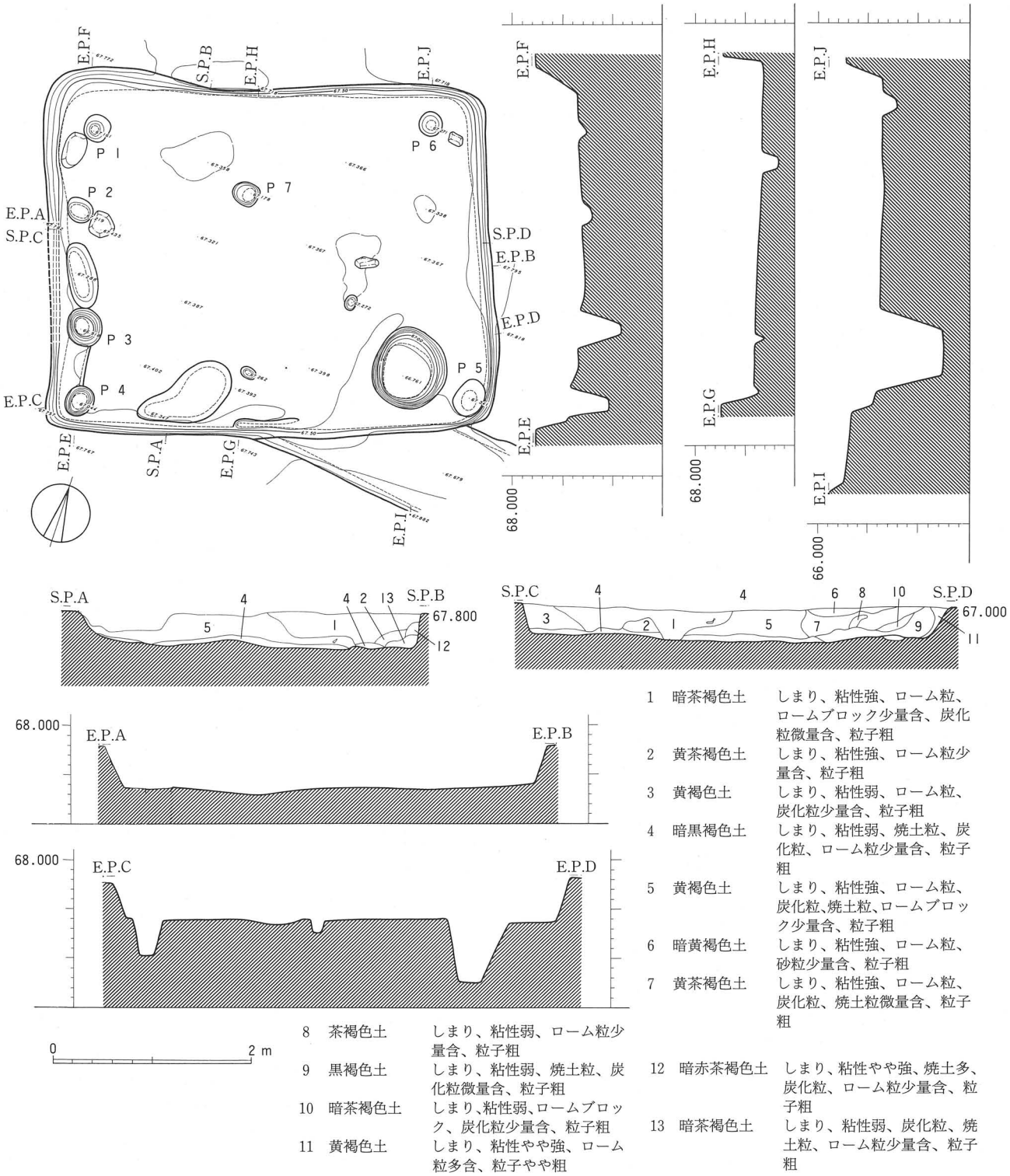


第25図　姥ヶ沢遺跡第４号住居跡出土遺物(3)

第５号住居跡（第26・27図版８・９）

［位置］ＢⅢ―m20・n20グリットに位置する。北側に第６号住居跡、南側に第４号住居跡が位置している。

［形状］長径4.8m、短径3.5mの隅丸方形を呈する。壁高は、東側で32.3cm、西側で30.8cm、南側で30.8cm、北側で25.4cmを測る。南東隅に長径82cm、深さ64cmを測る、貯蔵穴が１基確認されている。後世の溝に切断されているが、おおむね形状は保たれている。



1　暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック少量含、炭化粒微量含、粒子粗
2　黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
3　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
4　暗黒褐色土　しまり、粘性弱、焼土粒、炭化粒、ローム粒少量含、粒子粗
5　黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒、焼土粒、ロームブロック少量含、粒子粗
6　暗黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、砂粒少量含、粒子粗
7　黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒、焼土粒微量含、粒子粗
8　茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
9　黒褐色土　しまり、粘性弱、焼土粒、炭化粒微量含、粒子粗
10　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ロームブロック、炭化粒少量含、粒子粗
11　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多含、粒子やや粗
12　暗赤茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土多、炭化粒、ローム粒少量含、粒子粗
13　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、炭化粒、焼土粒、ローム粒少量含、粒子粗

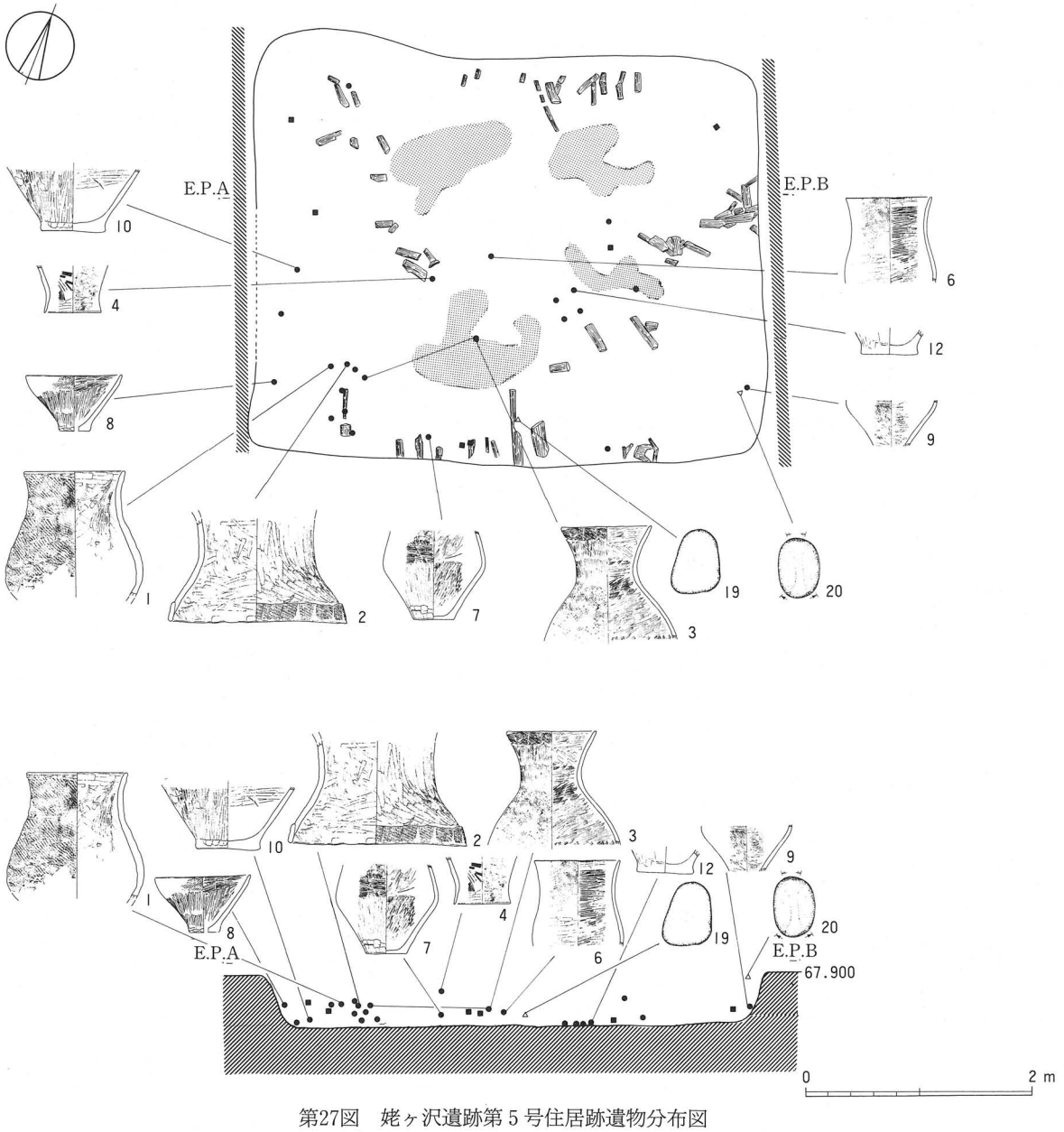
第26図　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡平面図

［覆土］13層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化材・炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

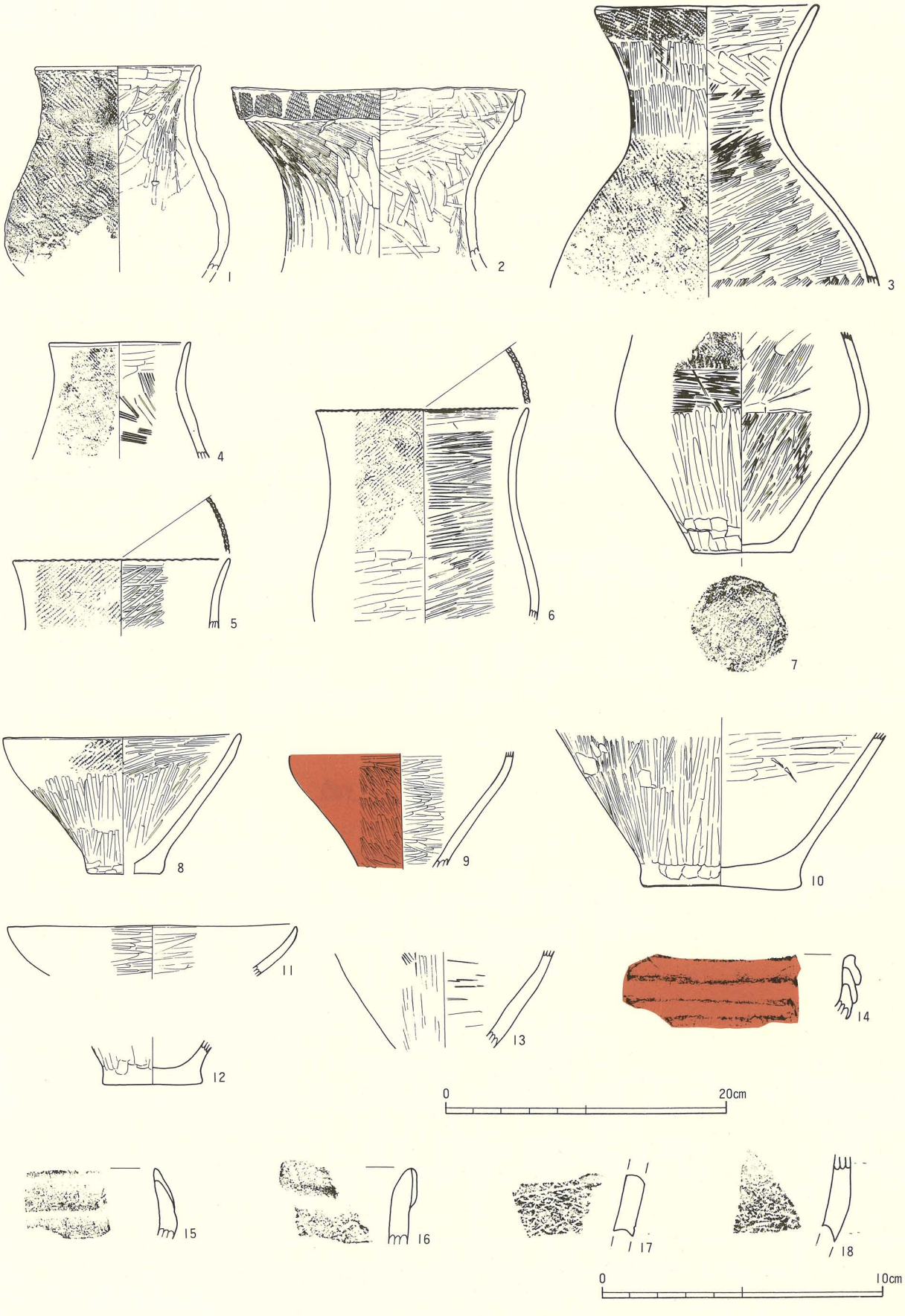
［柱穴］柱穴は７口確認されている。Ｐ1・Ｐ4・Ｐ5・Ｐ6は主柱穴。Ｐ1―23.9cm、Ｐ2―18.1cm、Ｐ3―11.1cm、Ｐ4―35.6cm、Ｐ5―15.9cm、Ｐ6―12.9cm、Ｐ7―12.2cmを測る。Ｐ2・３は、出入口に関連する施設の可能性がある。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面上に、焼け落ちた屋根材と思われる炭化材が良好な状態で遺存する。同じく床面上から縄文施文の壺形土器が２個体（２・３）と、縄文施文の甕形土器が１個体（１）並んで出土している。２の壺形土器は逆位で検出されている。これらは全て体部下半を欠き、器台として転用されていたと推定される。８の甑は、南西隅の壁面中位に接するように出土している。壁面上に置かれていたものが、焼失にともない転げ落ちた可能性がある。西隅の柱穴（P1）とその隣の柱穴（P2）、および北東隅



第27図　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡遺物分布図



第28図　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土遺物(1)

の柱穴（P6）の脇から人頭大の礫が各々１点ずつ検出されている。

［遺物］（第28・29図、図版32・33・48）遺物は、土器232点、磨石２点、敲石１点が出土している。

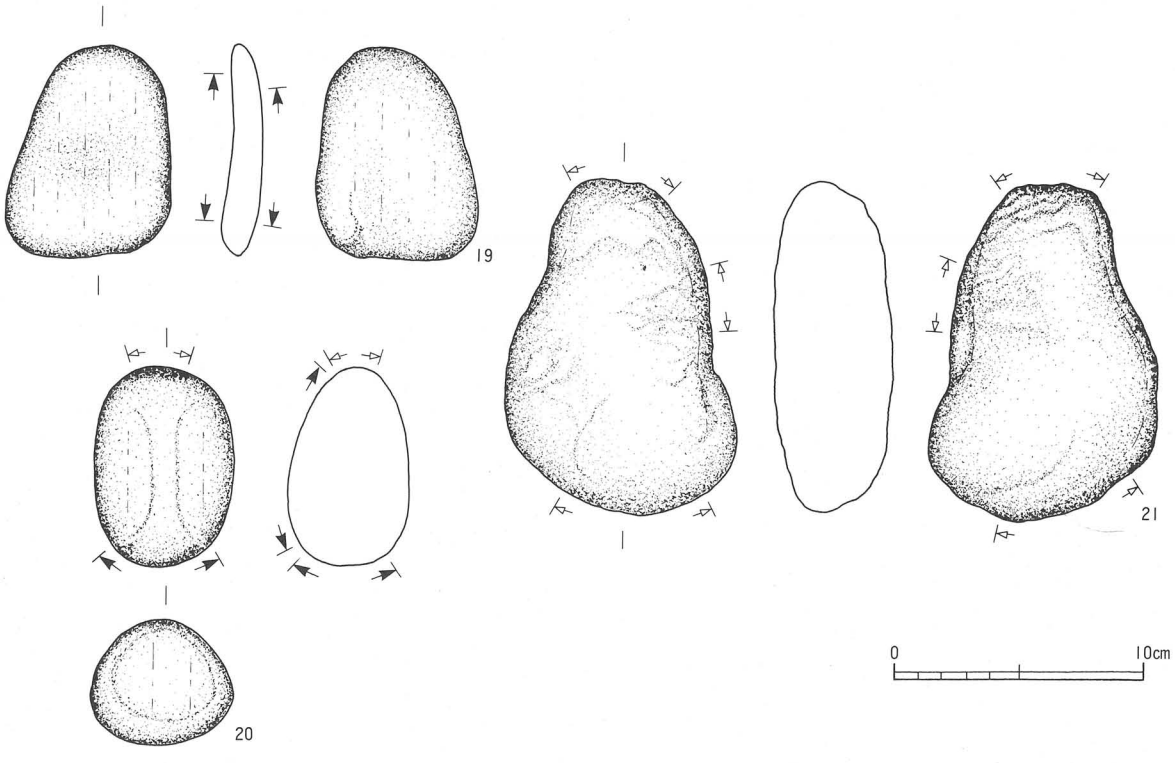
１は、甕形土器である。口唇下にナデ調整を施す。口縁部から体部までRL縄文を施文する。内面は口縁部にミガキを施した後、横方向のナデ調整を行う。２・３は壺形土器である。２は、折返し状口縁をもちRL縄文を施文している。３は、口唇下にナデ調整を施す。口縁部から体部上半にRL縄文を施文後、頸部の縄文をナデ消して無文帯を作出している。内面は横方向のミガキにより調整される。１～３は、全て体部下半が欠失しており、いずれも器台として転用されたものと考えられる。４～６は甕形土器である。４は、RL縄文を施文する。５・６は口唇部に縄文施文による刻みをもち、口縁部から体部にかけてLR縄文を施文する。８は、甑形土器である。口縁部にLR縄文を施文する。体部はヘラ状工具による縦方向のミガキが施される。内部調整は横方向のナデである。

19・20は、砂岩製の磨石である。19は、僅かに湾曲した偏平な礫を用い、平坦な両面に擦痕をもつ。20は、卵形の礫を用いている。下端面と側面に擦痕をもち、上端面には敲打痕が観察される。21は、フォルンフェルス製の敲石である。上端面と下端面、側面の一部に敲打痕がみられる。

［時期］床面上に残された土器より判断して、弥生時代後期。

第９表　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
19	床上６cm	磨石4ａ	85	64	14	105	S	a	研磨３
20	床上38cm	磨石3ｂ	78	56	52	330	S	a	研磨４
21	覆土上層	敲石2ｂ	136	91	52	856	F	a	敲打２－３



第29図　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土遺物(2)

第10表　姥ヶ沢遺跡第５号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	11.7	14.7		SWB	o	b	90%	
2	甕	21.4	12.7		BWS	do	b	100%	
3	壺	15.8	20.0		SB	do	b	90%	
4	甕	(10.0)	8.3		WS	dg	c	30%	
5	甕	(15.4)	4.9		BWR	dg	b	20%	
6	甕	(15.0)	15.0		BWR	do	b	30%	
7	壺		15.7	7.0	SW	dg	b	50%	
8	甑	16.8	9.9	5.0	SWB	do	b	90%	
9	高　坏		8.0		SWR	do	b	20%	内面赤彩
10	壺		11.0	11.0	SR	gb	b	60%	
11	高　坏	(20.5)	3.5		SW	dg	b	30%	
12	甕		2.7	7.0	SBW	do	b	100%	
13	甕		6.8		RSW	do	b	40%	
14	高　坏				RB	o	b	10%	外面赤彩
15	高　坏				SBU	o	b	10%	
16	甕				SW	dg	b	10%	
17	甕				SB	do	b	10%	
18	甕				SB	do	b	10%	

第６号住居跡（第30～32図・図版10）

［位置］ＢⅢ—m17・m18・m19、n17・n18・n19グリットに位置する。北側に第７号住居跡、南側に第５号住居跡が位置している。西側１／３は調査区外にかかり未調査。南北方向に長く掘込みの浅い第6ａ住居跡と、東西方向に長く掘込みの深い第6ｂ住居跡の２軒が重複している。東西セクションで、第6ａ号住居跡の立上がりが確認されないことから、第6ｂ住居跡が新しいと考えられる。

［形状］第6ａ号住居跡は、長径6.6ｍを測るが、第6ｂ号住居跡にプランの大半を切られている。壁高は、南側で30cm、北側で22cmを測る。隅丸長方形を呈するものと推測される。第6ｂ号住居跡は、長径(5.3m)、短径6.2ｍの長方形を呈するものと推測される。壁高は、東側で45.2cm、南側で45.9cm、北側で44.8cmを測る。北東隅から北壁に沿って1.5ｍ×0.7ｍの長方形の土坑が掘り込まれている。

［覆土］７層に分層され、自然堆積を示す。

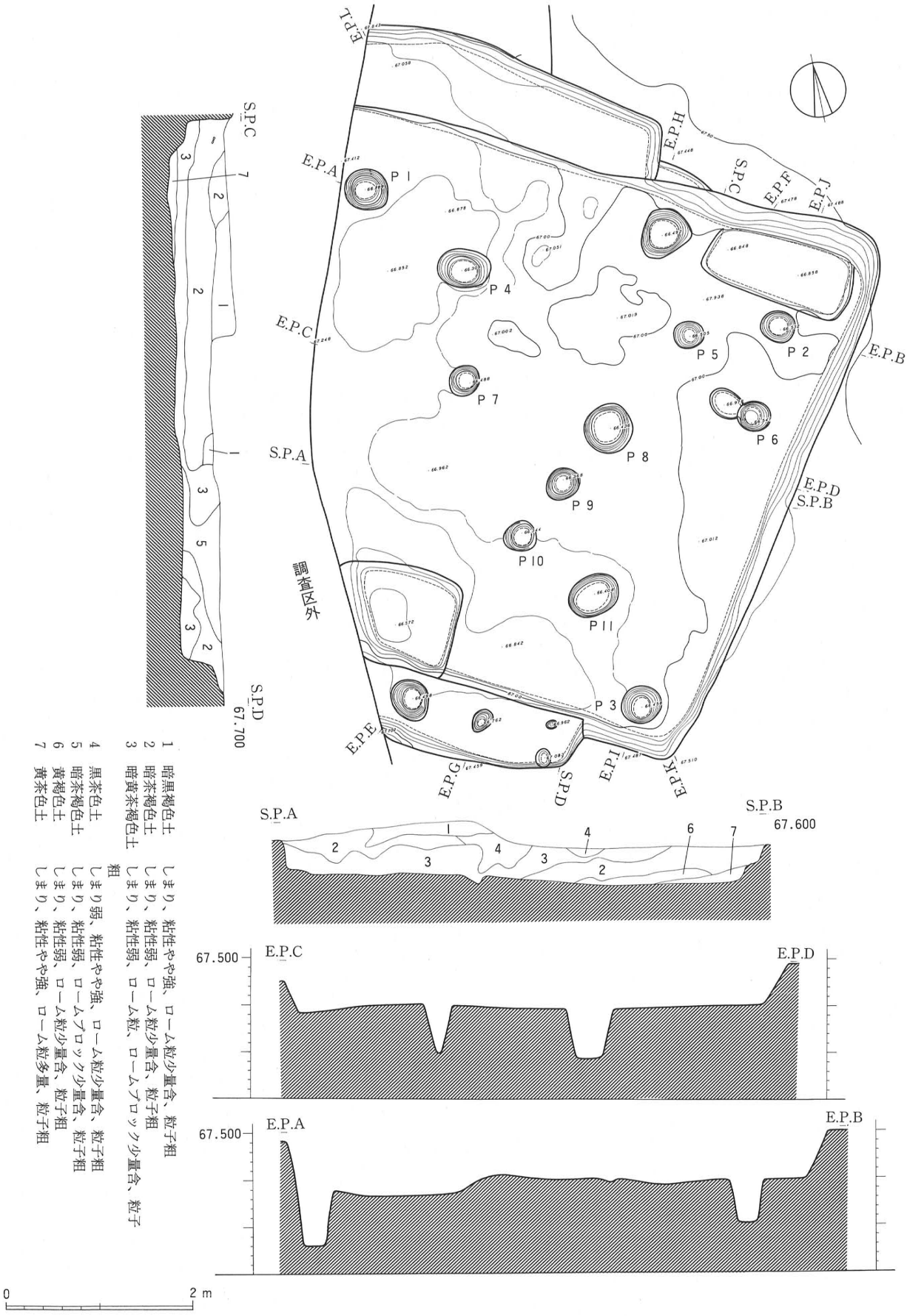
［柱穴］柱穴は12口確認されている。Ｐ1—51.1cm、Ｐ2—49.1cm、Ｐ3—50.8cm、Ｐ4—46.8cm、Ｐ5—49.5cm、Ｐ6—45.3cm、Ｐ7—56.4cm、Ｐ8—41.2cm、Ｐ9—53.2cm、Ｐ10—55.6cm、Ｐ11—49.2cm、Ｐ12—44.2cmを測る。Ｐ1・2・3は、第6ｂ号住居跡の主柱穴。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面に残された遺物は無く、遺物のほとんどが覆土中からの出土である。器としての残存率も低く、本住居の埋没過程で廃棄されたものと推測される。２軒の住居が重複しているが、５の縄文施文の壺形土器が第6ａ号住居跡覆土中より出土しており、第6ｂ号住居跡覆土中からは主に古墳時代初頭に属するハケ調整の土器等が出土している。14の土製紡錘車は、東壁面の上部より出土しており、壁面上に置かれていたものが、転げ落ちた可能性が考えられる。

［遺物］（第33図、図版33・34・48）遺物は、307点、土製紡錘車１点、磨石３点が出土している。

１・２・４は縄文施文の甕形土器である。１・２はLR縄文、４は、RL縄文を施文する。３は底部破片であるが、外面・内面ともに赤色塗彩が施される。５・６は壺形土器である。両者とも折返し状口縁をもつ。５は、折返し状口縁にLR縄文が２段施文され、それ以下は横方向のミガキにより調整される。体部以下を欠失しており、器台として転用されたものと推測される。６は、ハケ状工具で調整された後、ミガキが施されている。７は小型器台の脚部である。ハケ状工具による縦方向の調整の後、縦方向のミガキが施される。８は、高坏形土器である。坏部と脚部の接合部に微隆起帯をもつ。脚部は、縦方向のミガキによって調整される。９は、台付甕形土器である。体部下端および台部はハケ状工具による縦方向の調整がなされる。14は土製紡錘車である。断面形状は長方形である。孔の上端と下端は面取りがされ



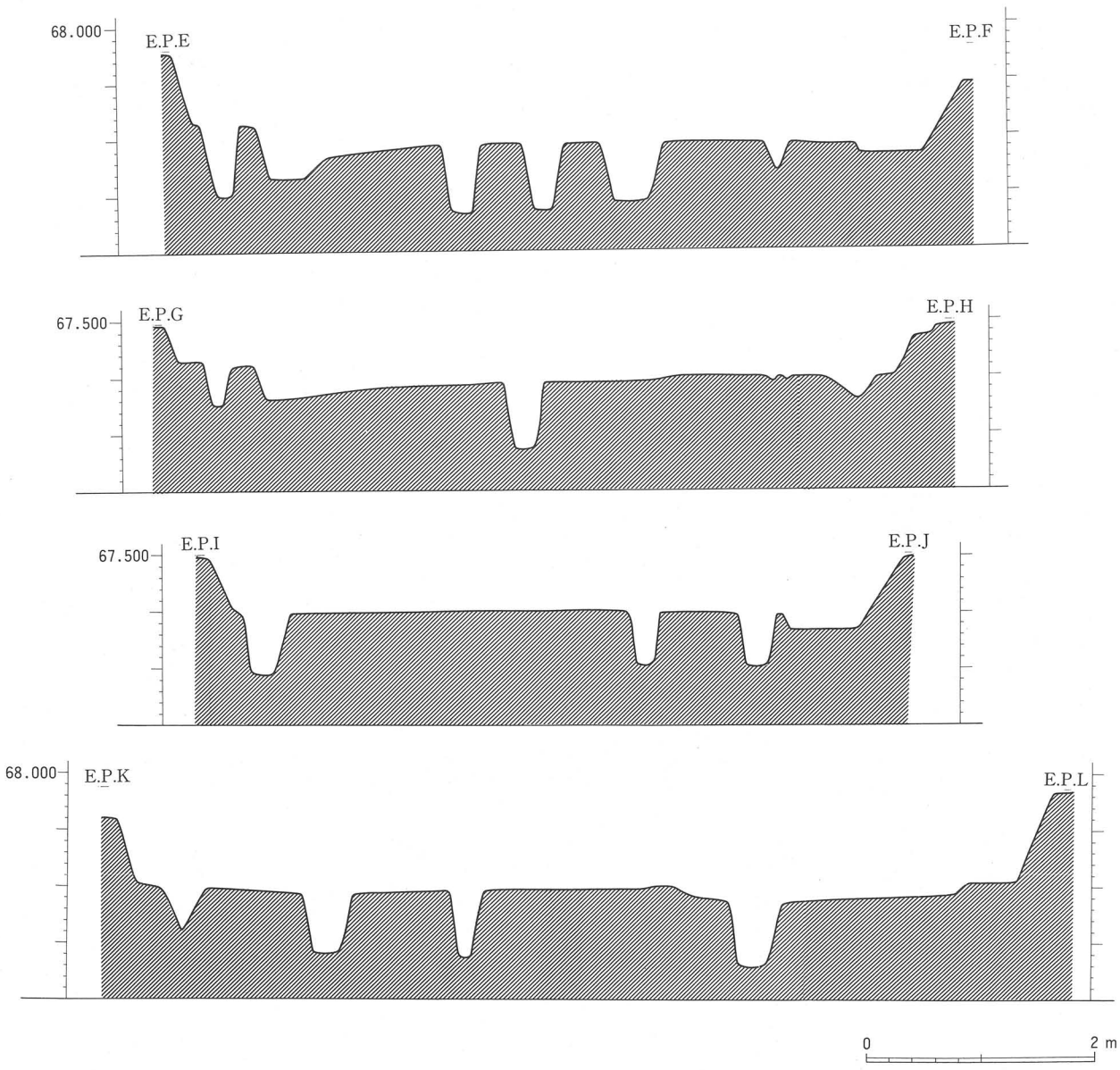
1　暗黒褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子粗
2　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
3　暗黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック少量含、粒子粗
4　黒茶色土　しまり弱、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子粗
5　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ロームブロック少量含、粒子粗
6　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
7　黄茶色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量、粒子粗

第30図　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡平面図(1)

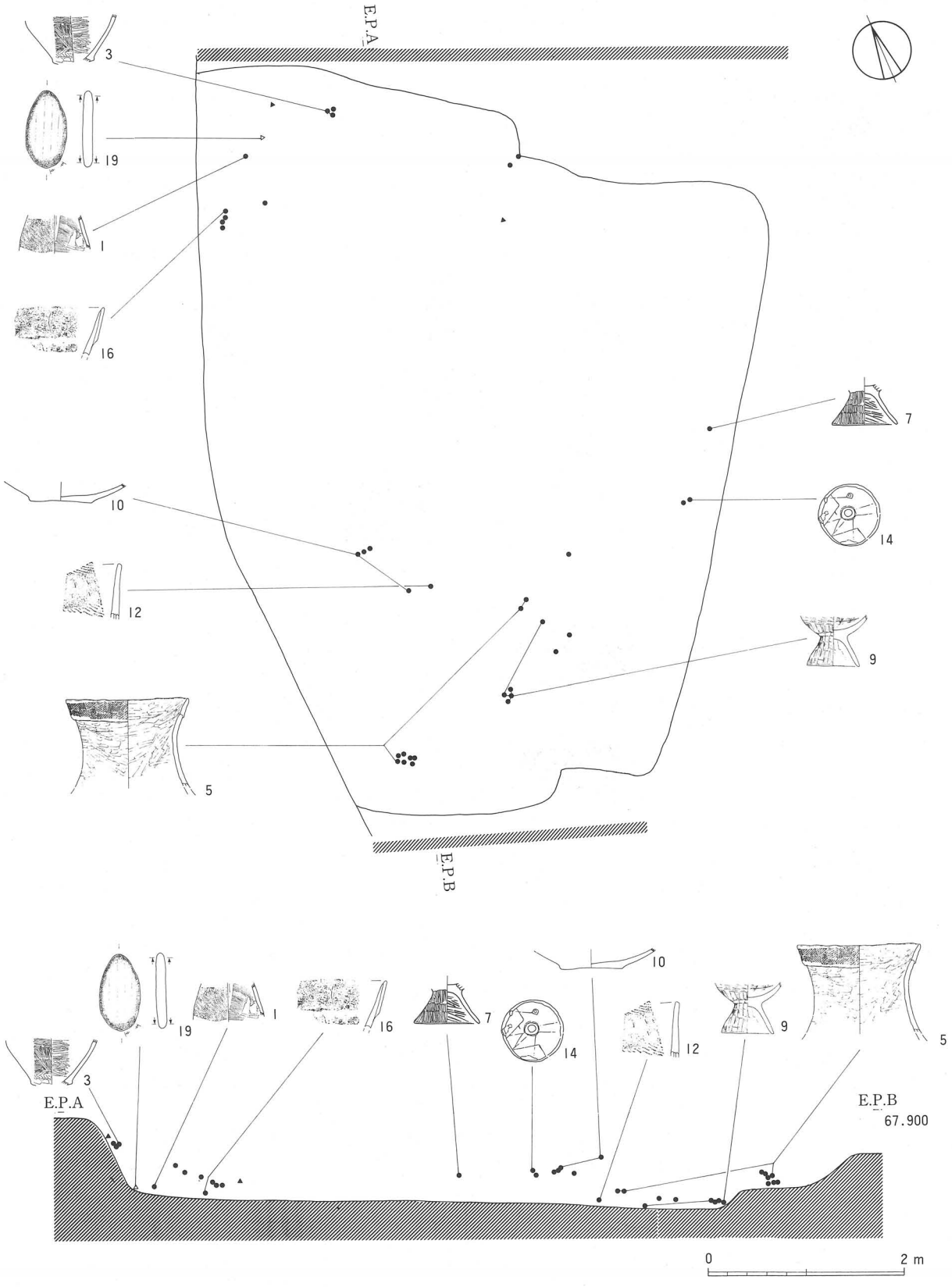
ている。

17・18は閃緑岩製、19は砂岩製の磨石である。17は欠損部が多いため、全体の形状は不明である。18・19は偏平な礫を用い、平坦な両面に擦痕をもつ。19は、側縁の一部に敲打痕を残す。

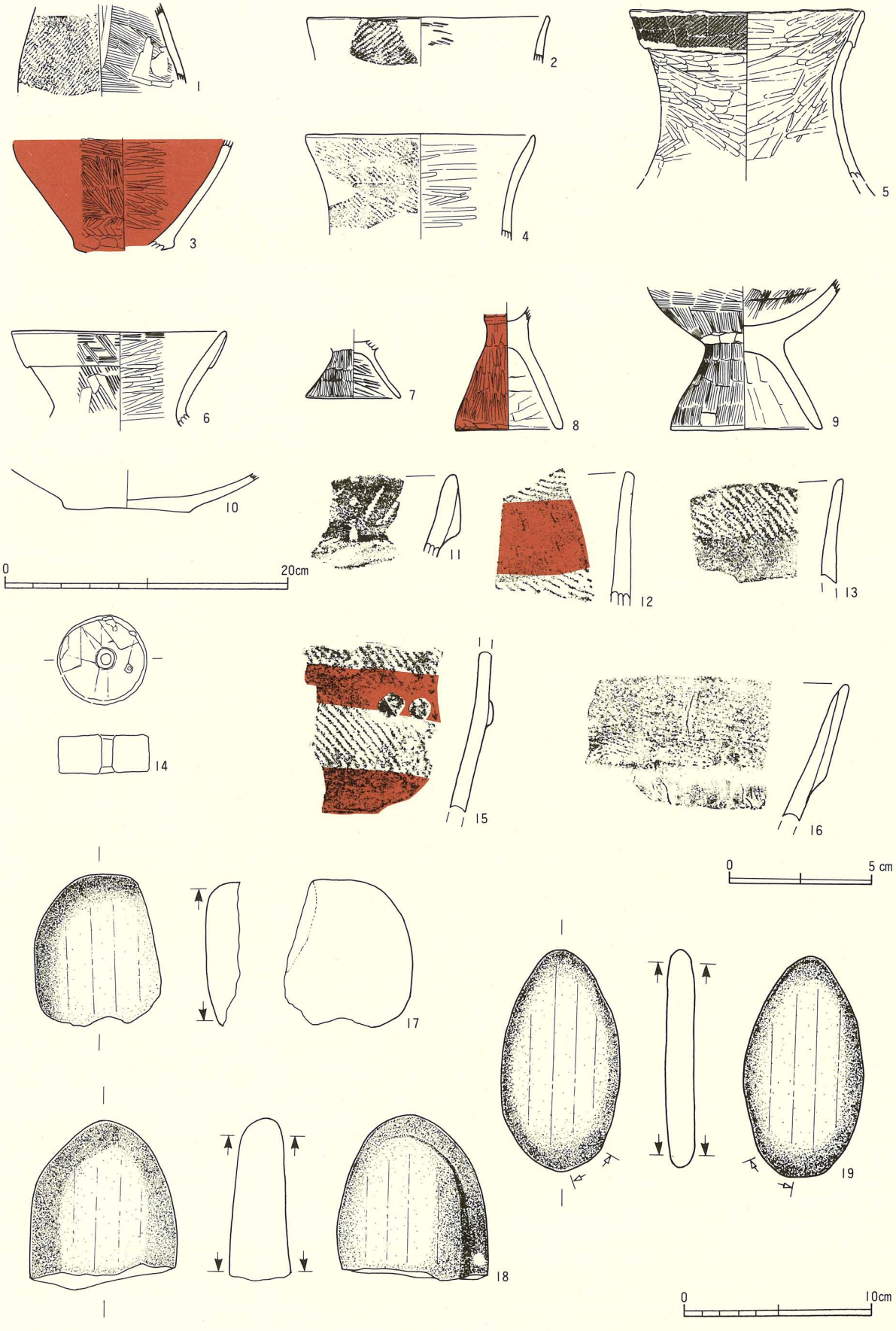
［時期］覆土中の土器から判断して、第6a号住居跡が弥生時代後期、第6b号住居跡が古墳時代前期五領式期と考えられる。



第31図　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡平面図(2)



第32図　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡遺物分布図



第33図　姥ヶ沢遺跡第６号住居跡出土遺物

第11表　姥ヶ沢遺跡第6号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕		5.9		SWB	o	b	30%	
2	甕	(14.5)	3.3		SW	dg	b	10%	
3	鉢		7.5		WRB	o	b	30%	内面赤彩
4	甕	(16.0)	7.3		SW	o	b	20%	
5	壺	16.5	11.5		SWB	do	b	90%	
6	壺	(15.0)	9.1		SW	rb	b	20%	
7	高　坏		3.5	6.8	SWB	o	a	100%	
8	高　坏		8.0	7.7	WS	dg	b	100%	表面赤彩
9	台付甕		10.0	10.6	SW	dg	b	70%	
10	甕		2.9	9.0	SW	dg	c	50%	
11	壺				WS	o	b	10%	
12	壺				SW	o	b	10%	縄文間赤彩
13	甕				SB	do	b	10%	
14	紡錘車				SB	dg	b	100%	
15	壺				SB	do	b	10%	縄文間赤彩
16	壺				SW	o	a	10%	

第12表　姥ヶ沢遺跡第6号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
17	覆土上層	磨石4a	(77)	(65)	(15)	105	Se	d	研磨2
18	覆土上層	磨石2a	(85)	78	32	300	Se	b	研磨2
19	床面	磨石2a	116	61	14	170	S	a	研磨3敲打有

第7号住居跡（第34・35図・図版11・12）

［位置］BIII—m16、n16・n17、o16グリットに位置する。北側に第8号住居跡、南側に第6号住居跡が位置している。

［形状］長径4.9m、短径3.8mの長方形を呈する。壁高は、東側で37.2cm、西側で29.8cm、南側で32.4cm、北側で22.6cmを測る。住居の南隅のコーナーに長径42cm、深さ32cmの貯蔵穴が1基確認されている。北西の壁際には、第21号土坑が接している。

［覆土］8層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

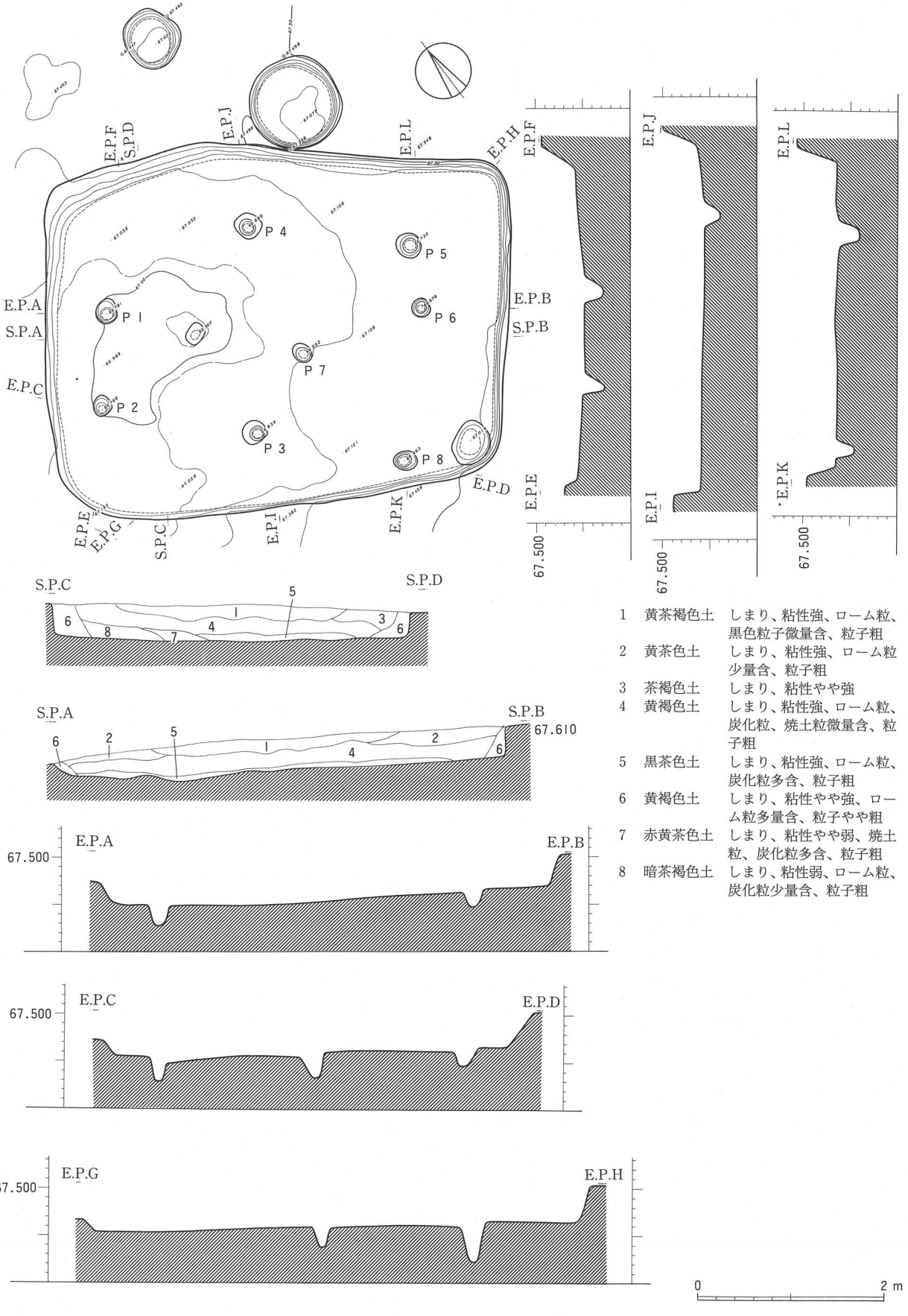
［柱穴］柱穴は8口確認されている。P1—21.2cm、P2—21.9cm、P3—20.2cm、P4—36.8cm、P5—12.2cm、P6—23.7cm、P7—20.8cm、P8—26.1cmを測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］9の高坏形土器および10の壺形土器が床面上より検出されている。10の壺形土器は、胴部上半でカットされており、胴部下半の破片が覆土上層より出土しており、接合している。器台として転用されたものと考えられる。この他、15の磨石が床面より出土している。

［遺物］（第36図、図版34・35・49）遺物は、土器216点、磨石3点、棒状礫器1点が出土している。

1・2は、甕形ミニチュア土器である。1の外面はミガキによって調整され、内面には輪積痕が明瞭に残される。2の外面にはLR縄文がまばらに施文される。内面には横方向のナデ調整が施される。3・4は甕形土器である。口唇部に縄文施文による刻みをもち、器体にはRL縄文が施文される。5は、鉢形ミニチュア土器である。体部、底部に縦方向のナデ調整を施した後、口縁部に横方向のナデ調整を施す。6は、台付甕形土器の台部である。ハケ状工具による縦方向の調整がなされる。9は高坏形土器である。口縁部に、輪積痕をつまみ出した突帯をもつ。坏部外面はヘラ状工具による横方向のケズリにより、内面はミガキにより調整がなされる。脚部には、斜方向のミガキを施す。坏部と脚部の接合部には、突帯をもつ。脚部内面を除く全面に赤色塗彩が施される。10は壺形土器である。折返し状口縁をもち、口唇下にナデ調整が施される。口縁にはLR縄文、肩部にはRL縄文が施文される。肩部の縄文は一部ナデ消されている。内面はナデとミガキにより整形される。11・12は甕形土器の口縁部破片である。11は、折返し口縁に櫛歯状工具による波状文を施文後、円形のボタン状貼付文を貼付している。頸部には波状文、2連止めの廉状文が施文される。内面はナデ調整が施さ

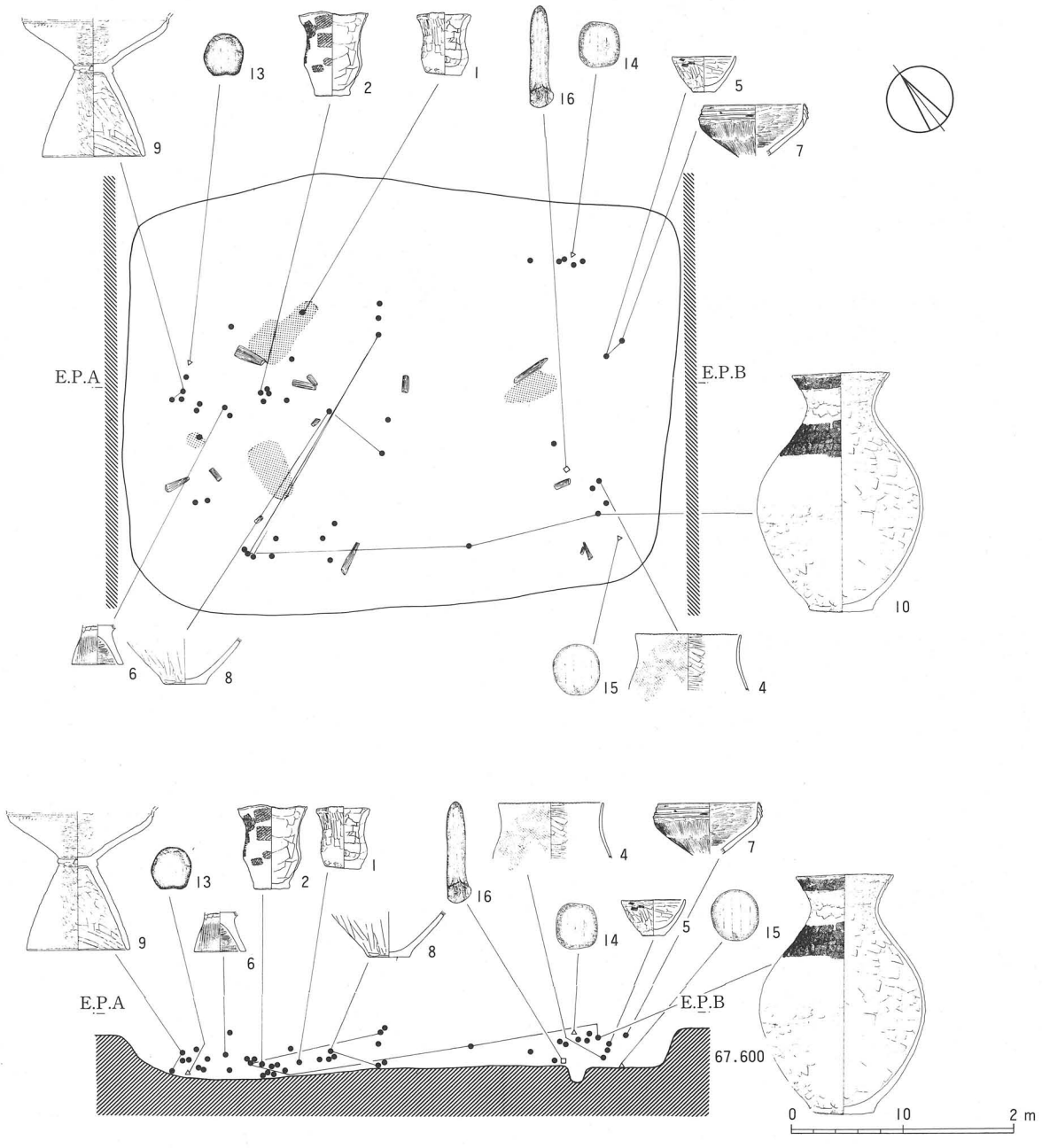


第34図　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡平面図

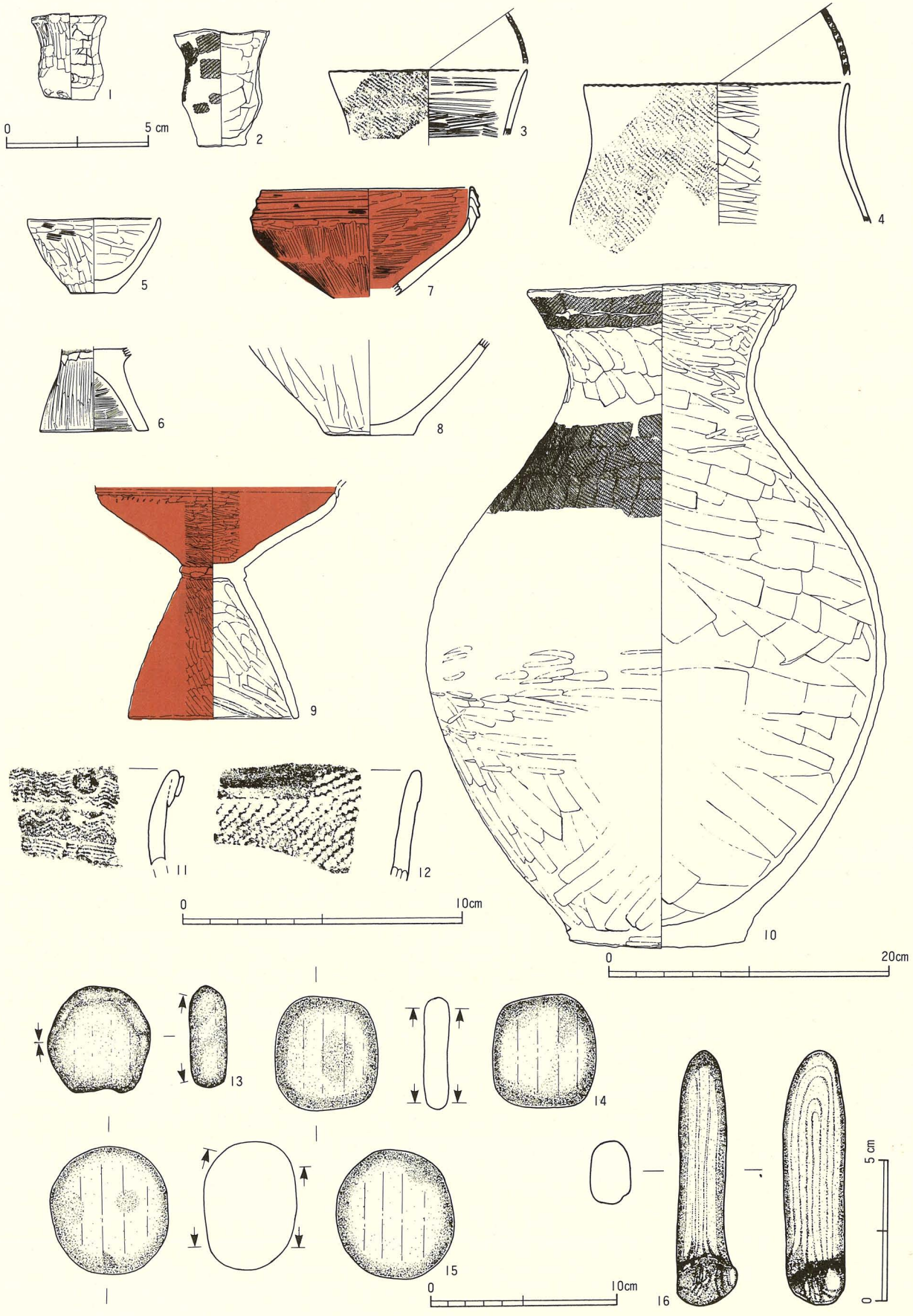
れる。12は、LR縄文が施文される。

13はフォルンフェルス、14は砂岩、15は閃緑岩製の磨石である。13・14は、偏平な礫を用いている。13は、平坦な面の片面と側縁全周にわたって擦痕がみられる。14は、平坦な面の両面に擦痕が残る。16は、片岩製の棒状礫器である。断面形状は隅丸の長方形である。

［時期］床面に残された遺物より判断して、弥生時代後期。



第35図　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡遺物分布図



第36図　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡出土遺物

第13表　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	4.0	4.6	2.8	SBW	do	a	100%	ミニチュア
2	甕	7.0	8.0	3.5	SB	dg	b	90%	ミニチュア
3	甕	(14.0)	4.5		WBS	do	b	20%	
4	甕	(18.8)	10.0		BWS	dg	b	30%	
5	鉢	9.2	5.3	3.0	SB	o	b	90%	
6	台付甕		5.4	7.8	RS	do	a	100%	
7	高	14.9	7.5		SRB	do	b	100%	内外面赤彩
8	壺		6.5	6.3	SRB	do	b	60%	
9	高　坏		16.8	12.2	BW	o	a	90%	内外面赤彩
10	壺	19.0	47.5	12.7	SBW	do	b	90%	
11	甕				SWU	dg	b	10%	
12	甕				SW	do	a	10%	

第14表　姥ヶ沢遺跡第７号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
13	床面直上	磨石4a	58	54	19	105	F	a	研磨２
14	床上６cm	磨石4a	58	54	12	65	S	a	研磨３
15	床面	磨石1b	70	63	47	285	Sh	a	研磨３
16	床上８cm	棒状礫器3a	89	21	16	55	H	a	

第８号住居跡（第37・38図・図版13）

［位置］ＢⅢ—n13・n14・n15、o13・o14・o15グリットに位置する。北側に第９号住居跡が、南側に第７号住居跡が位置している。

［形状］長径6.6m、短径5.2mの隅丸長方形を呈する。壁高は、東側で64.1cm、西側で57.2cm、南側で58.1cm、北側で57.9cmを測る。

［覆土］８層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒子・焼土粒子を含む。床面上に炭化粒子・炭化材を多量に含む層がブロック状に認められ、本住居跡は焼失住居であることが推測される。

［柱穴］柱穴は６口確認されている。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５は主柱穴。Ｐ１—69.6cm、Ｐ２—62.7cm、Ｐ３—34.5cm、Ｐ４—66.5cm、Ｐ５—27.3cm、Ｐ６—31.9cmを測る。Ｐ６は、出入口に関連する施設の可能性がある。

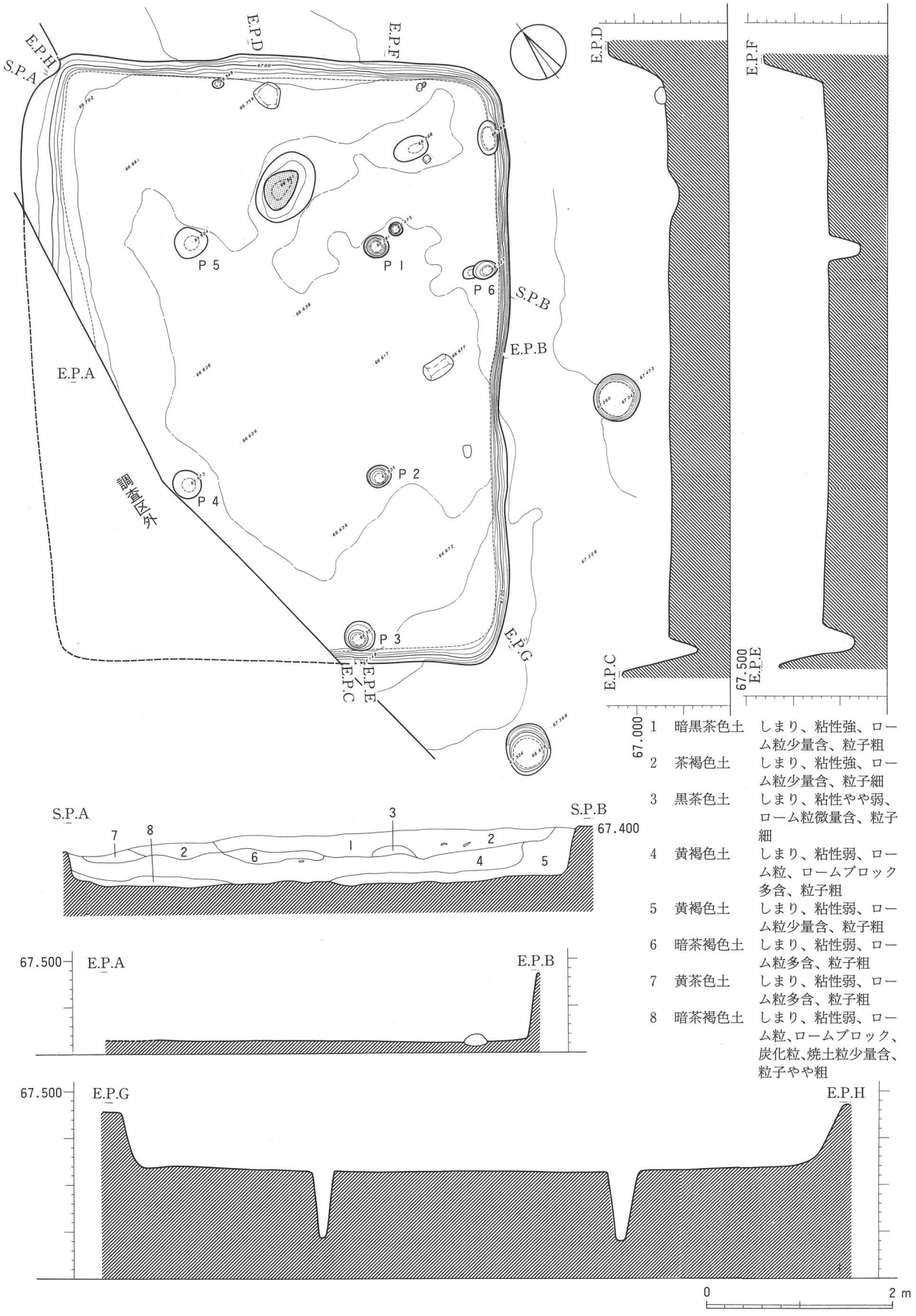
［炉］住居の北東寄りに、長径80cm、短径58cmの地床炉が確認されている。

［遺物出土状況］焼失住居のため、屋根材と思われる炭化材が出土している。床面からは、３のほぼ完形の甕形土器、22の敲石、25・27の石皿、26の棒状礫器が出土している。覆土中からは、６の鉢形土器がほぼ完形で出土している他は、いずれも器としての残存率は低く、本住居の埋没過程で廃棄されたものと推測される。

［遺物］（第39・40図、図版35・36）遺物は、土器483点、磨石４点、石皿２点、棒状礫器１点、敲石１点が出土している。土器には、弥生時代後期に属する櫛描文をもつもの２点、縄文施文のもの13点が含まれている。

１～５は、甕形土器である。１は、口唇部に縄文施文による刻みをもつ。口縁部から体部にRL縄文を施文する。２は、口縁上部はハケ状工具による縦方向の、下部はハケ状工具による横方向の調整がなされている。３は、口縁部に縄文施文による刻みをもつ。口縁部から体部上半にLR縄文が施文され、体部下半は縦横のミガキにより整形される。内面調整は、横方向のミガキによっておこなわれる。４・５は、不整な方向のハケ状工具による調整がなされている。６は鉢形土器である。内外面とも横方向のミガキが施される。９は器台形土器である。脚部は縦方向のミガキにより調整される。赤色塗彩が施され、穿孔を有する。18は、櫛描文を有する体部破片である。

20は片岩、21は砂岩製の磨石である。偏平な礫を用い、平坦な面の両面に擦痕をもつ。22は、凝灰岩製の敲石である。棒状の礫を用いており、側面の一部に敲打痕をもつ。欠損部には擦痕が認められる。23・24は、砂岩製の磨石である。23は、偏平な礫を用い、平坦な両面に擦痕をもつ。24は、下端厚が上端厚より大きい礫を用い、平坦な面の片面とやや凸



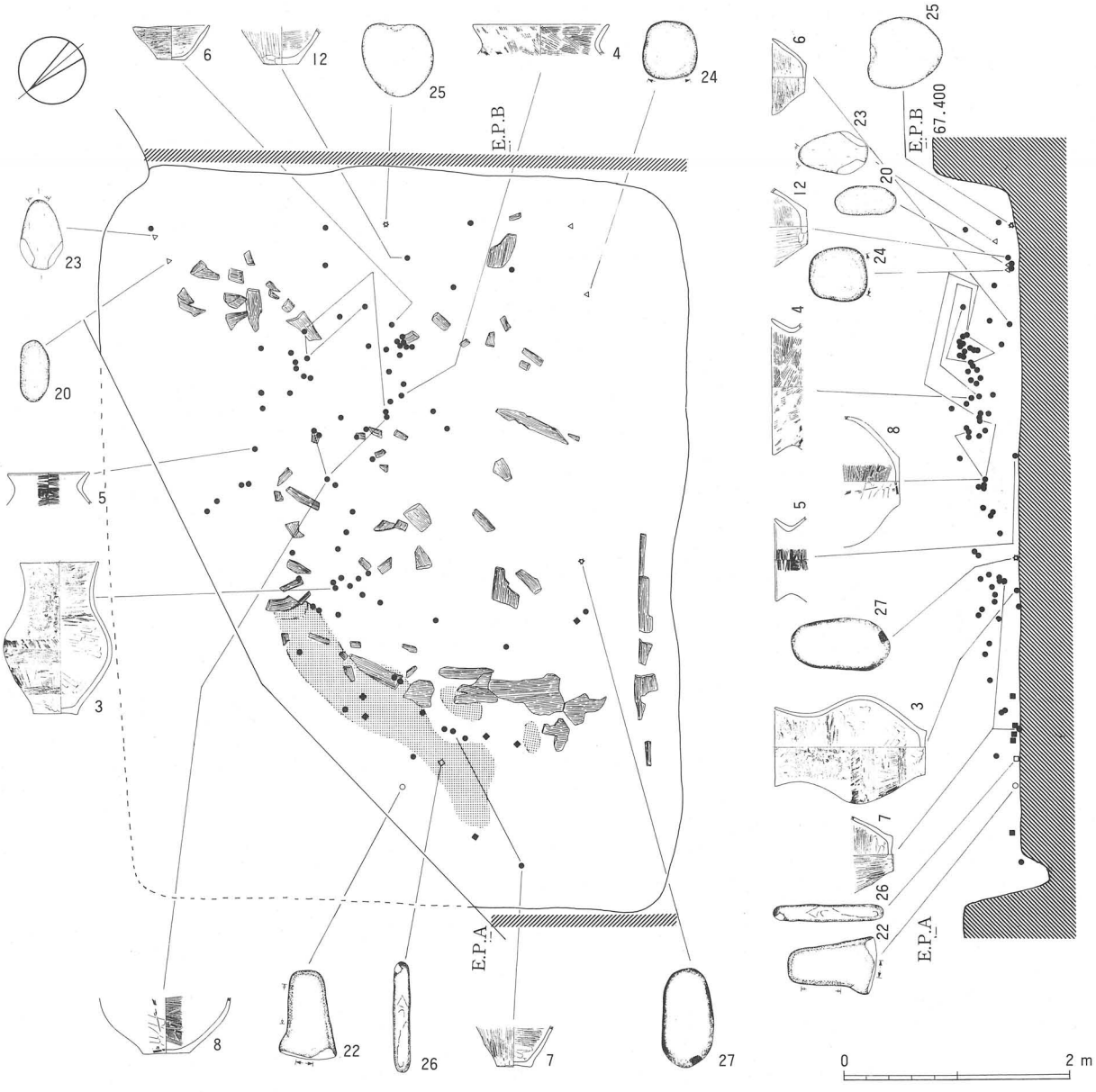
1　暗黒茶色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
2　茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子細
3　黒茶色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒微量含、粒子細
4　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック多含、粒子粗
5　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
6　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒多含、粒子粗
7　黄茶色土　しまり、粘性弱、ローム粒多含、粒子粗
8　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック、炭化粒、焼土粒少量含、粒子やや粗

第37図　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡平面図

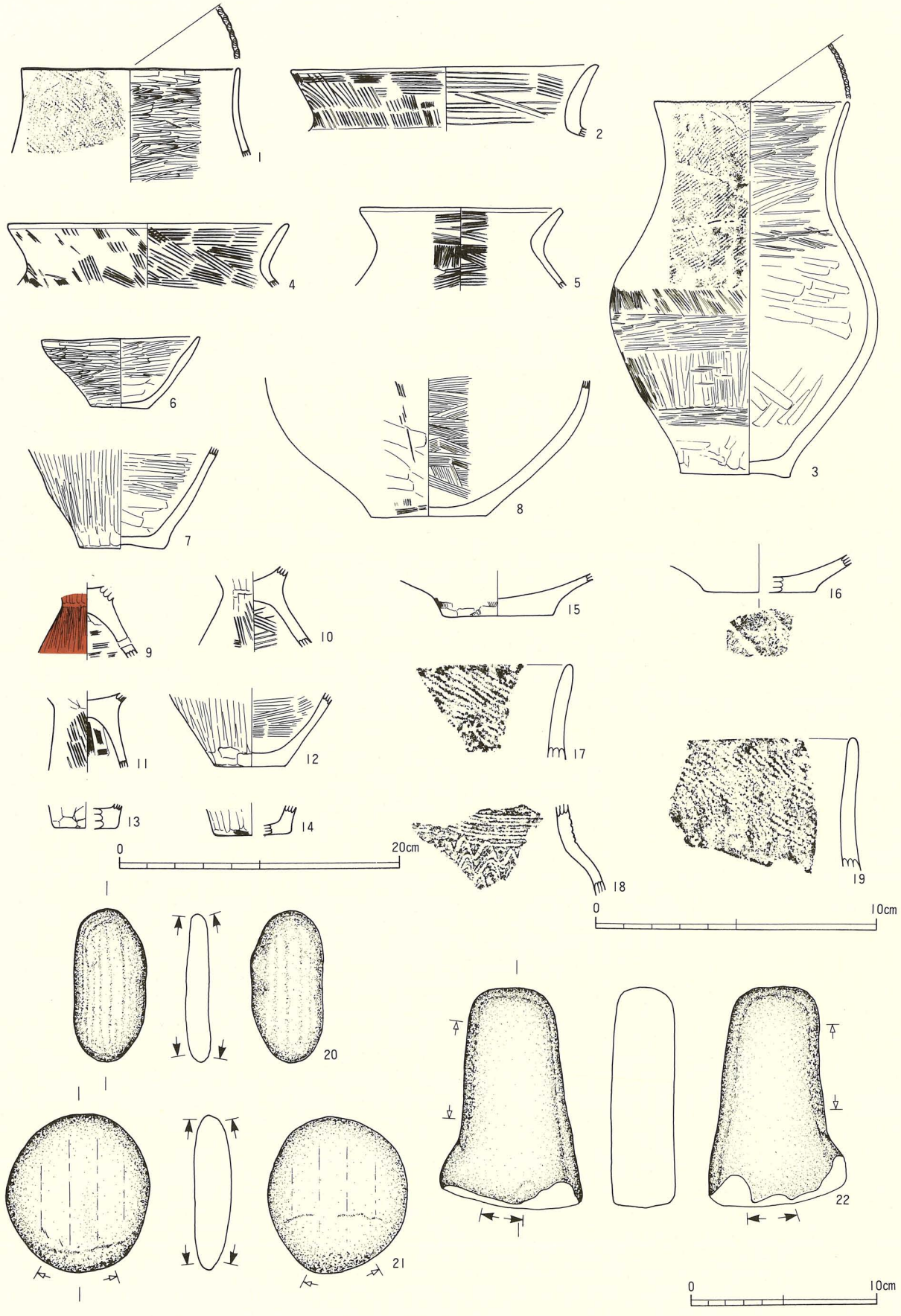
の下端面に擦痕をもつ。25・27は、閃緑岩製の石皿である。偏平な礫を用いている。27は、平坦な面の両面に擦痕をもつ。26は砂岩製の棒状礫器である。

断面形状は楕円形を呈する。

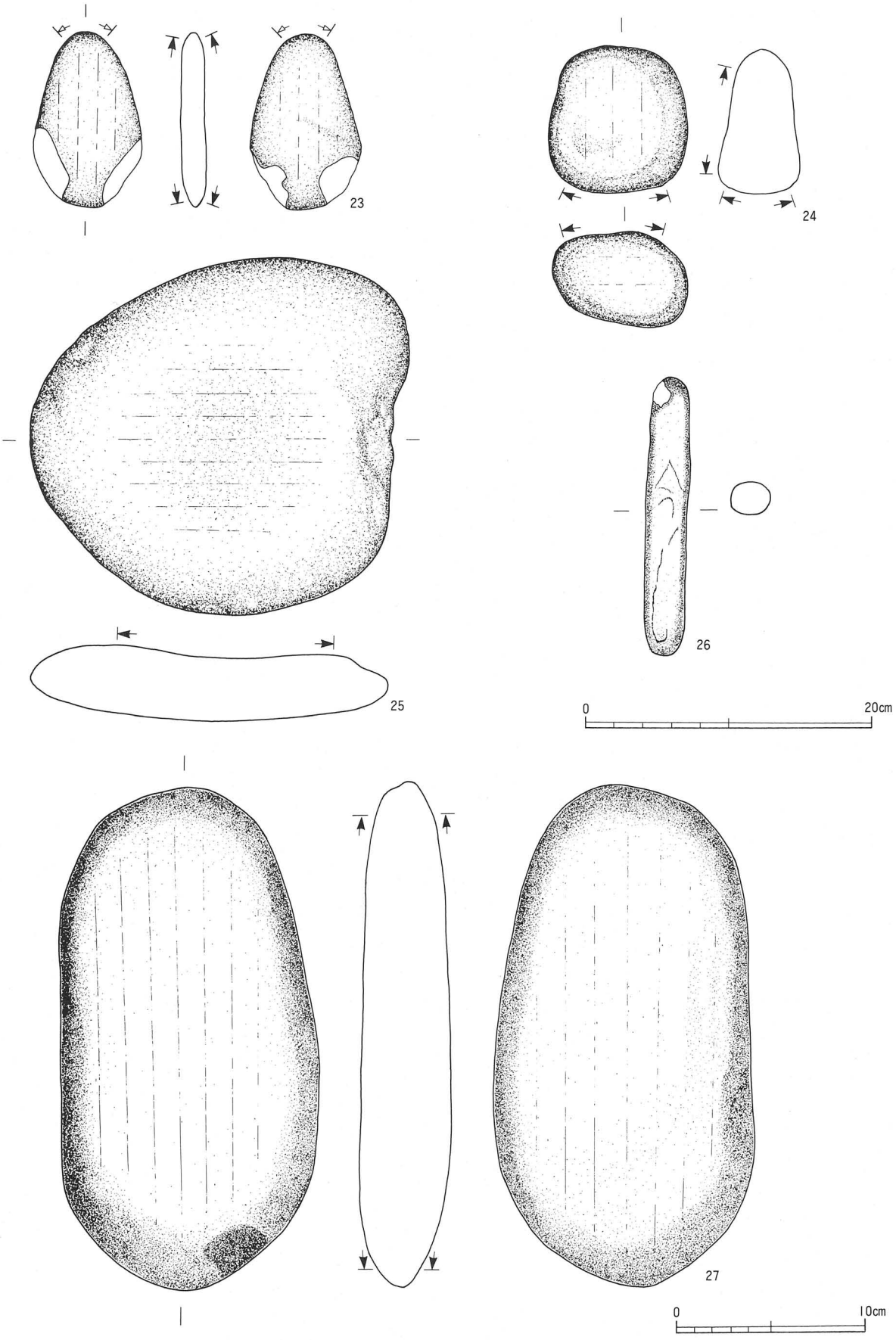
［時期］床面に残された遺物より判断して、弥生時代後期。



第38図　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡遺物分布図



第39図　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡出土遺物(1)



第40図　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡出土遺物(2)

第15表　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	(11.7)	6.2		SB	do	b	20%	
2	甕	(21.7)	4.6		WBS	rb	b	40%	
3	壺	13.9	26.7	7.8	SW	do	b	90%	
4	甕	(20.0)	4.3		BR	do	b	30%	
5	甕	(14.3)	5.3		SWB	do	b	20%	
6	鉢	11.2	5.0	4.3	BSW	do	b	90%	
7			7.1	6.0	SB	do	b	90%	
8	壺		9.7	8.1	SBW	do	b	70%	
9	高　坏		4.2		WB	do	b	90%	内外面赤彩
10	高　坏		5.0		SBW	do	b	90%	
11	高　坏		5.0		SW	do	b	90%	
12	甕		5.0	5.1	SB	do	b	90%	
13	甕		1.7	(4.7)	SW	dg	b	30%	ミニチュア
14	甕		1.4	(5.4)	WB	dg	b	40%	ミニチュア
15	壺		2.5	7.8	SWB	do	b	70%	
16	壺		2.3	(7.8)	SB	do	b	30%	底面木葉痕
17	甕				BW	do	b	10%	
18	甕				SWU	dg	b	10%	
19	甕				BW	do	b	10%	

第16表　姥ヶ沢遺跡第８号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
20	床上８cm	磨石4a	80	37	12	70	H	a	研磨３
21	覆土上層	磨石1a	83	74	21	190	S	a	研磨３
22	床直上	敲石7a	(177)	73	40	535	Gy	b	敲打３
23	床上27cm	磨石6a	92	57	15	100	S	a	研磨３
24	床上９cm	磨石4b	77	72	49	435	S	a	研磨４
25	床面	石皿	246	243	50	5,300	Se	a	
26	床直上	棒状礫器3b	127	42	47	279	S	a	
27	床面	石皿	346	176	54	5,900	Se	a	

第９号住居跡（第41・42図・図版14・15）

［位置］ＢⅢ—n12、o11・o12・o13、p12グリットに位置する。南側に第９号住居跡が位置している。北西隅に第42・42号土坑が重複している。

［形状］長径4.7m、短径4.4mの方形を呈する。壁高は、東側で49.8cm、西側で36.8cm、南側で44.3cm、北側で42.7cmを測る。住居の南東隅に長径61cm、深さ45cm程の貯蔵穴が確認されている。

［覆土］９層に分層され自然堆積を示す。

［柱穴］柱穴は５口確認されている。Ｐ1・Ｐ2・Ｐ3・Ｐ4が主柱穴。Ｐ1—43.8cm、Ｐ2—36.1cm、Ｐ3—41.9cm、Ｐ4—40.8cm、Ｐ5—10.8cmを測る。

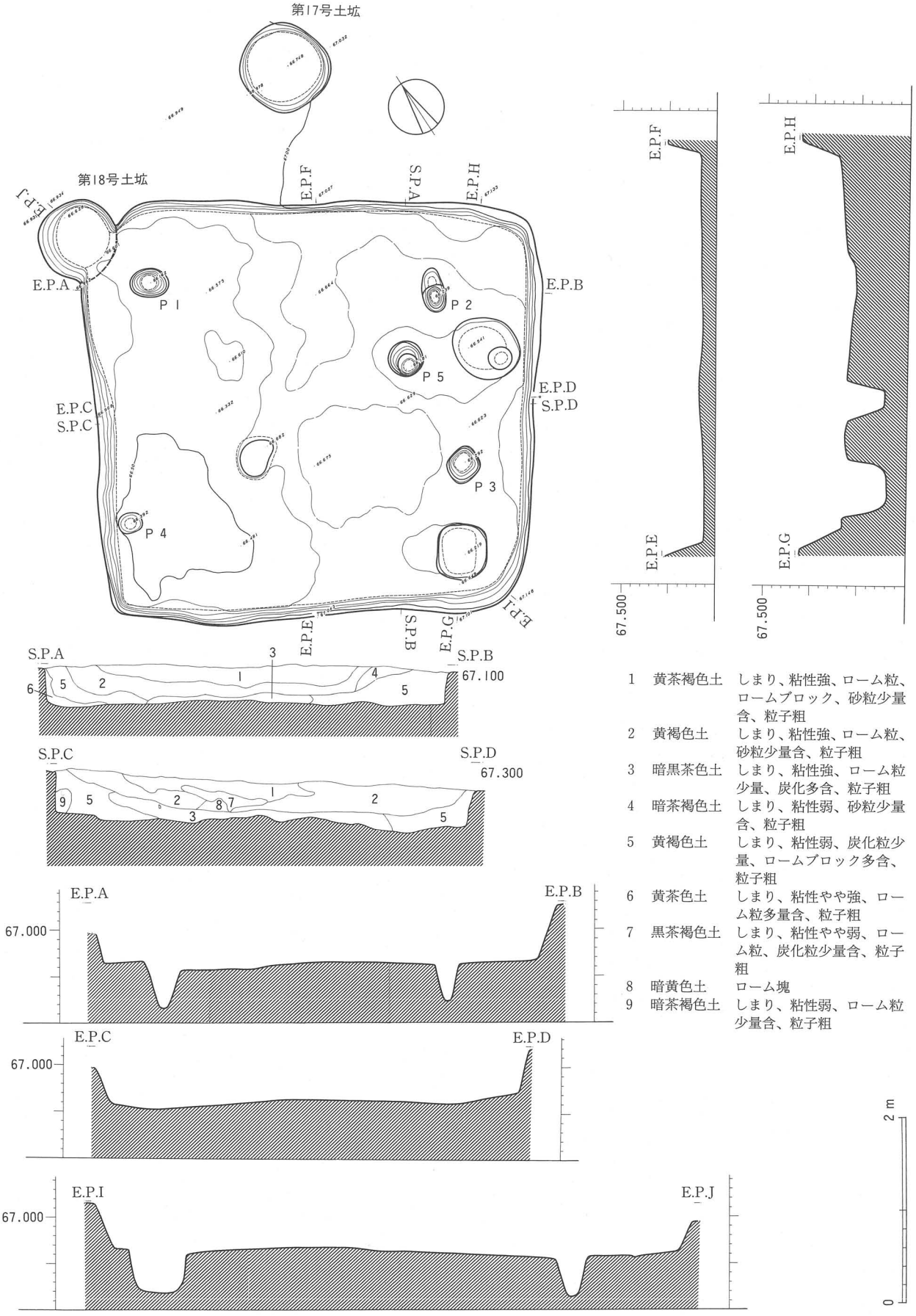
［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面より２のミニチュア土器が出土している他は、床面より器として使用できる状態で出土した遺物は無い。８～10のミニチュア土器が覆土上層より出土しているが、特殊な出土状態は認められず、他の使用できなくなった土器片とともに、住居の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

［遺物］（第43図、図版36）遺物は、土器463点、磨石１点が出土している。

２は、ミニチュア土器である。口縁部にハケ状工具による横方向の調整を施した後、ナデにより整形する。内外面に赤色塗彩を施す。３は、丸底甕である。口縁部はヘラ状工具による横方向のケズリにより、体部は斜方向のミガキにより調整される。内面はナデ調整を施す。４は、甕である。底部が欠損しているため、全体の形状は不明である。口縁部はハケ状工具による縦方向の調整、体部はハケ状工具による横方向の調整がなされる。内面はナデ調整である。６は台付甕の台部である。７～９は、ミニチュア土器である。いずれも粘土紐巻上げによって整形され、内面は指頭によるナデ調整がおこなわれる。７は、器表面全面に指頭押さえ痕がみられる。９は、折返し状口縁をもち、ヘラ状工具によるナデにより調整がなされる。

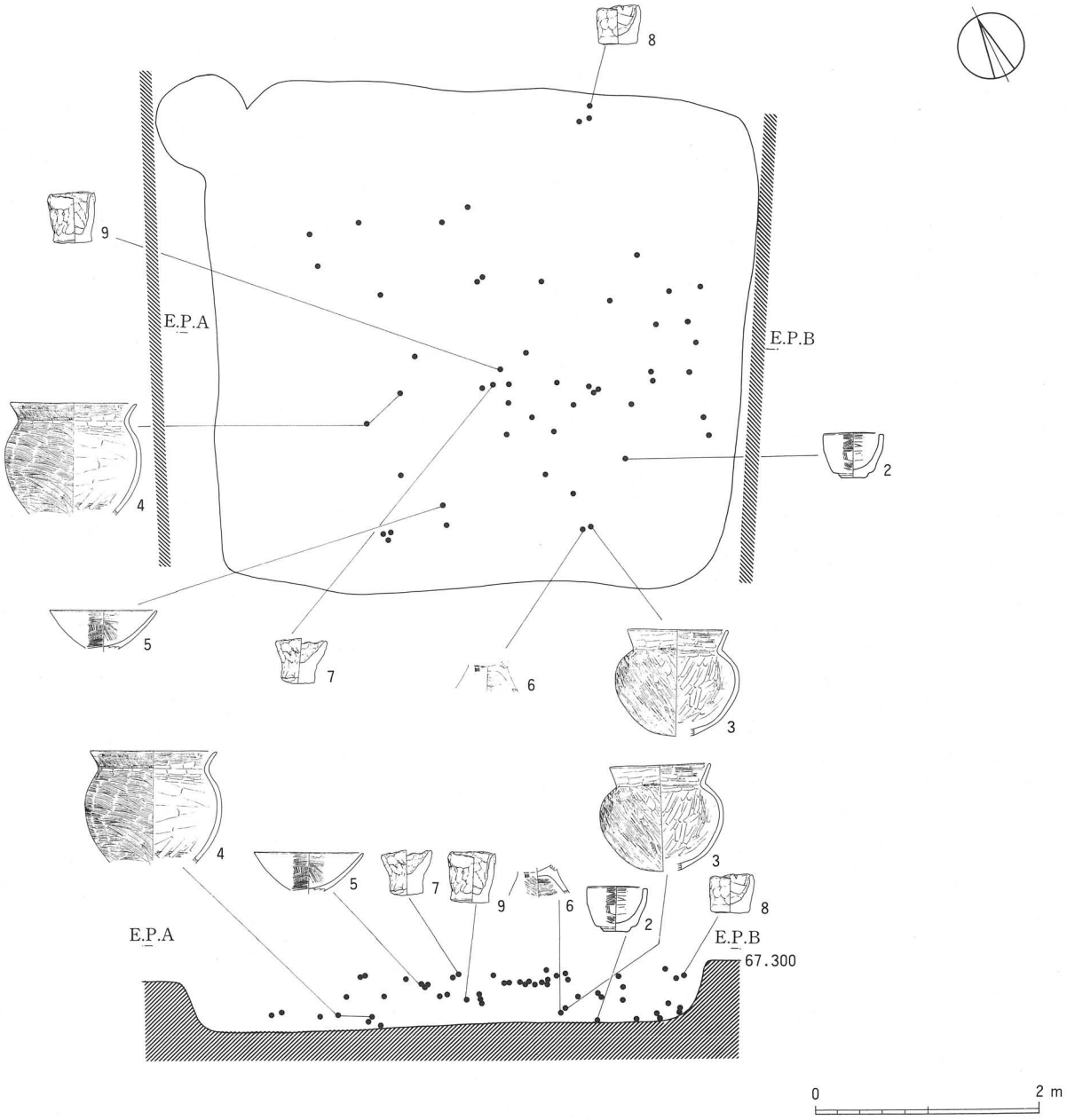
10は閃緑岩製の磨石である。偏平な礫が用いられ、平坦な面の片面及び側面の一部に擦痕をもつ。



1	黄茶褐色土	しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック、砂粒少量含、粒子粗
2	黄褐色土	しまり、粘性強、ローム粒、砂粒少量含、粒子粗
3	暗黒茶色土	しまり、粘性強、ローム粒少量、炭化多含、粒子粗
4	暗茶褐色土	しまり、粘性弱、砂粒少量含、粒子粗
5	黄褐色土	しまり、粘性弱、炭化粒少量、ロームブロック多含、粒子粗
6	黄茶色土	しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗
7	黒茶褐色土	しまり、粘性やや弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
8	暗黄色土	ローム塊
9	暗茶褐色土	しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗

第41図　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡平面図

［時期］床面および覆土中より出土した遺物より判　　断して、古墳時代前期五領式期。



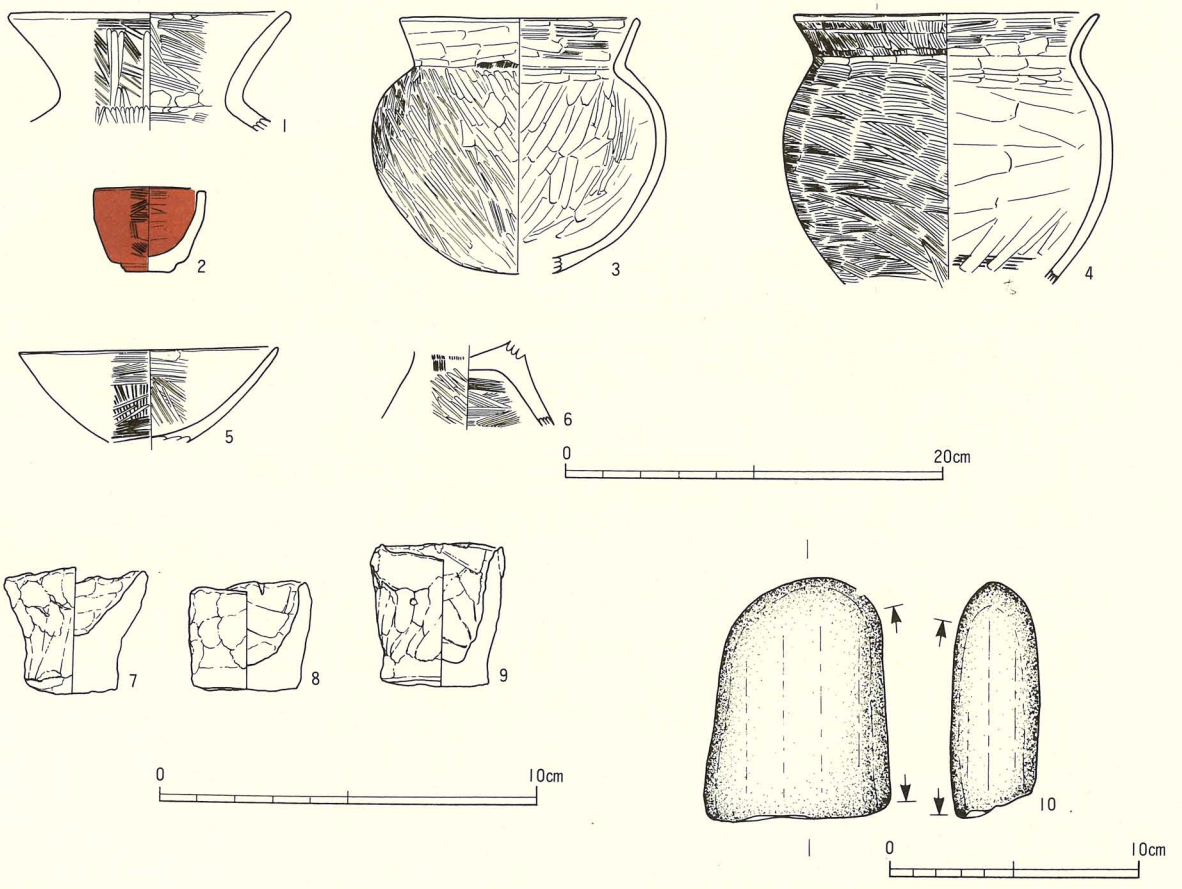
第42図　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡遺物分布図

第17表　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡出土土器観察表

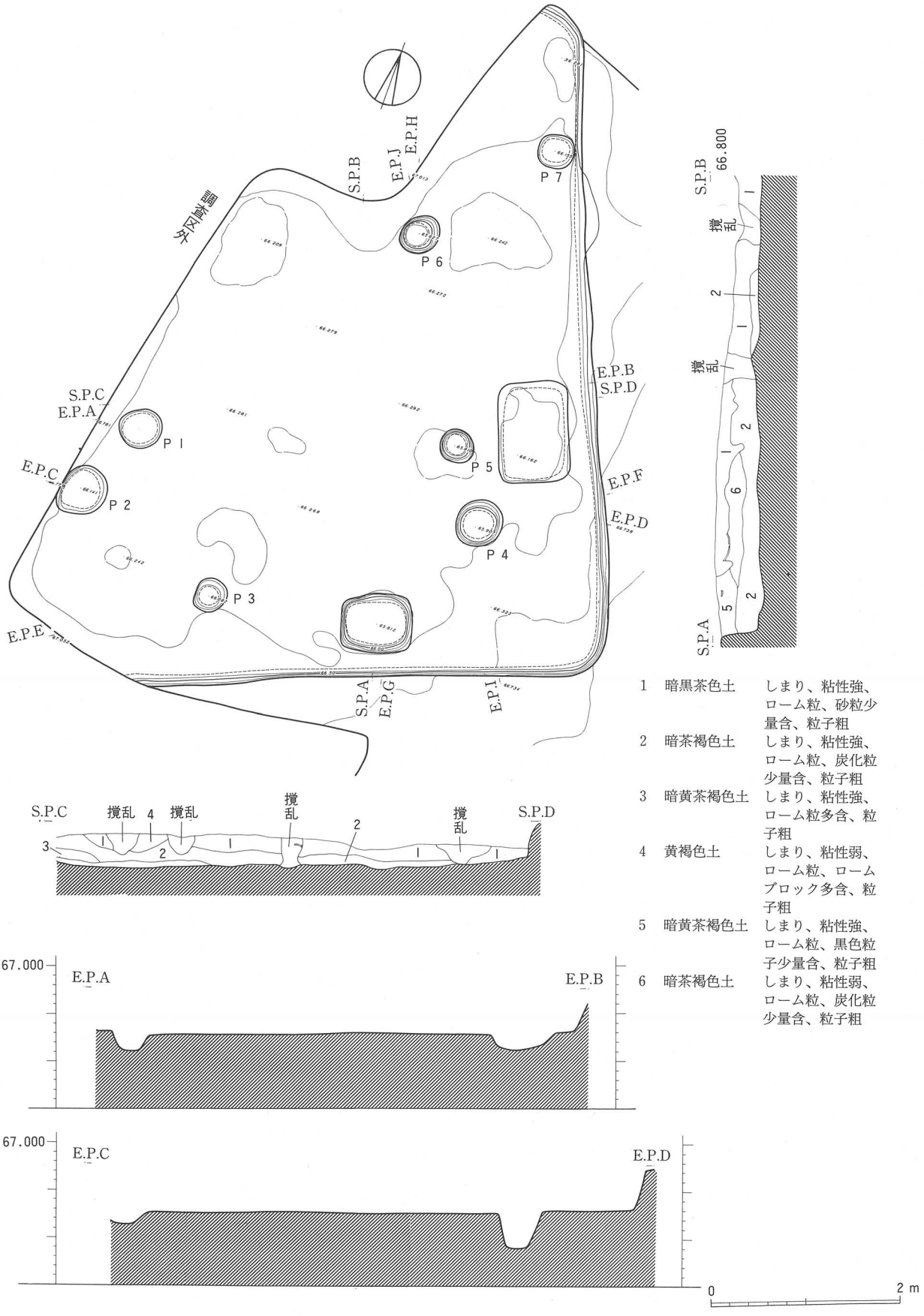
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	壺	15.0	5.9		WS	do	b	20%	
2	鉢	5.9	4.4	2.4	SBW	do	b	70%	
3	甕	12.7	13.5		BS	do	a	90%	
4	甕	16.0	14.3		WB	do	b	80%	
5	鉢	13.7	4.9		SB	o	b	50%	
6	台付甕		3.7		SW	do	b	50%	
7	鉢	3.8	3.4	2.4	SW	do	b	100%	
8	鉢	3.0	2.4	2.8	SW	do	b	100%	
9	鉢	3.2	3.8	2.8	SW	do	b	100%	

第18表　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
10	覆土上層	磨石5b	(94)	75	37	430	Se	b	研磨２



第43図　姥ヶ沢遺跡第９号住居跡出土遺物



1　暗黒茶色土　しまり、粘性強、ローム粒、砂粒少量含、粒子粗
2　暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
3　暗黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒多含、粒子粗
4　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック多含、粒子粗
5　暗黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、黒色粒子少量含、粒子粗
6　暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗

第44図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡平面図(1)

第10号住居跡（第44～46図・図版16・17）

［位置］ＢⅢ—n8・n9、o7・o8・o9グリットに位置する。西側約１/２は、調査区外にかかり未調査。北側に第11号住居跡が位置している。

［形状］長径7.1mの方形を呈するものと推定される。壁高は、東側で31.9cm、南側で43.4cm、北側で71.3cmを測る。住居の東側・南側の壁際に２基の貯蔵穴が確認されている。

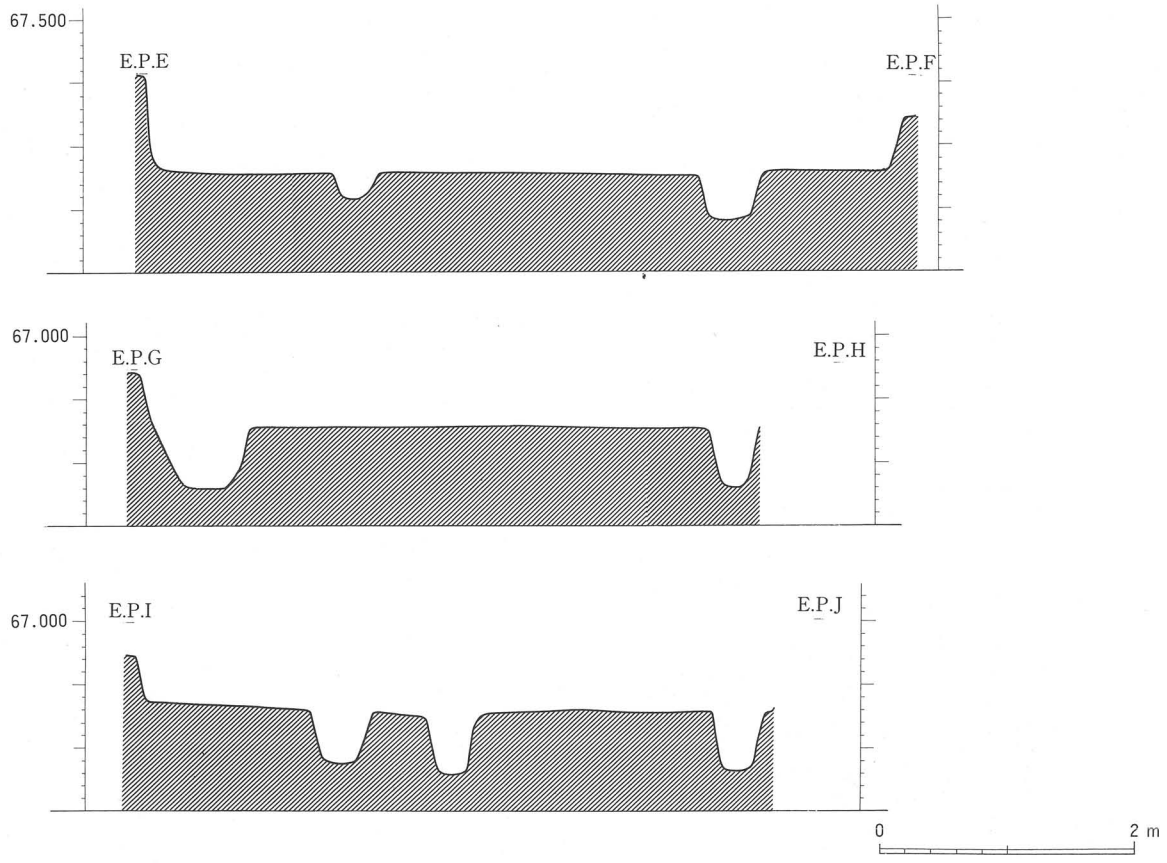
［柱穴］柱穴は７口確認されている。Ｐ2・Ｐ4は主柱穴。Ｐ1—14.5cm、Ｐ2—47.3cm、Ｐ3—49.0cm、Ｐ3—39.3cm、Ｐ4—39.3cm、Ｐ5—21.8cm、Ｐ6—21.3cm、Ｐ7—15.9mを測る。

［炉］確認されていない。

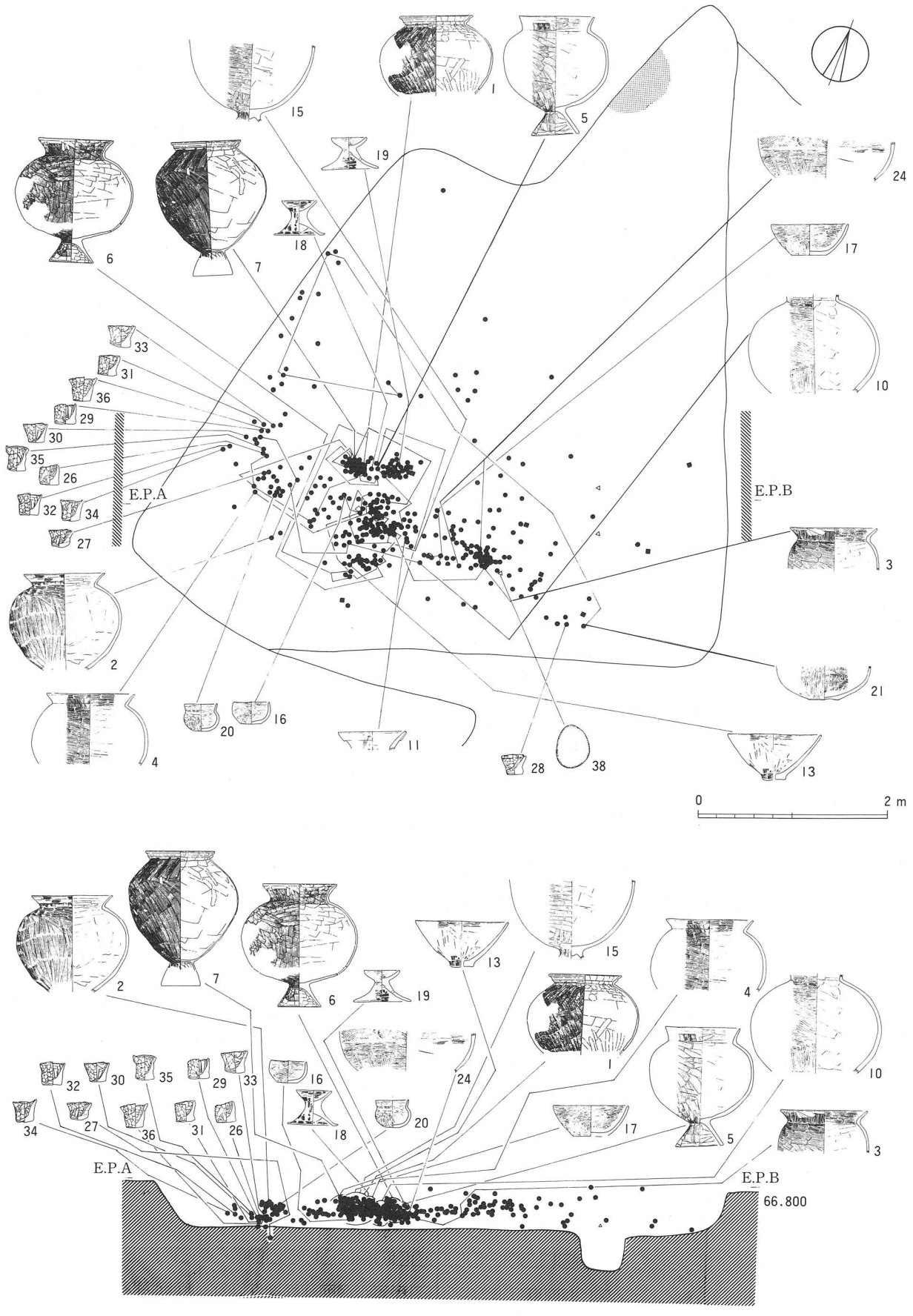
［遺物出土状態］遺物は、平面的に南側に偏った分布を示している。特に南西隅には、26・27・29～36のミニチュア土器10点が集中して出土している。垂直分布は、床面から10cm程ほどの間の層で検出されており、住居の廃絶後間もなく廃棄されたものと推測される。他の遺物のほとんどは、床面より10cm程の間層を挟んで集中的に検出されている。器台・小型坩形土器・甑等がほぼ完形に近い形で出土しており、遺物の単なる廃棄ではなく、その行為の背景に何等かの意図があったものと推測される。

［遺物］（第47～49図、図版37・38・39）遺物は、土器1,241 点、磨石２点が出土している。

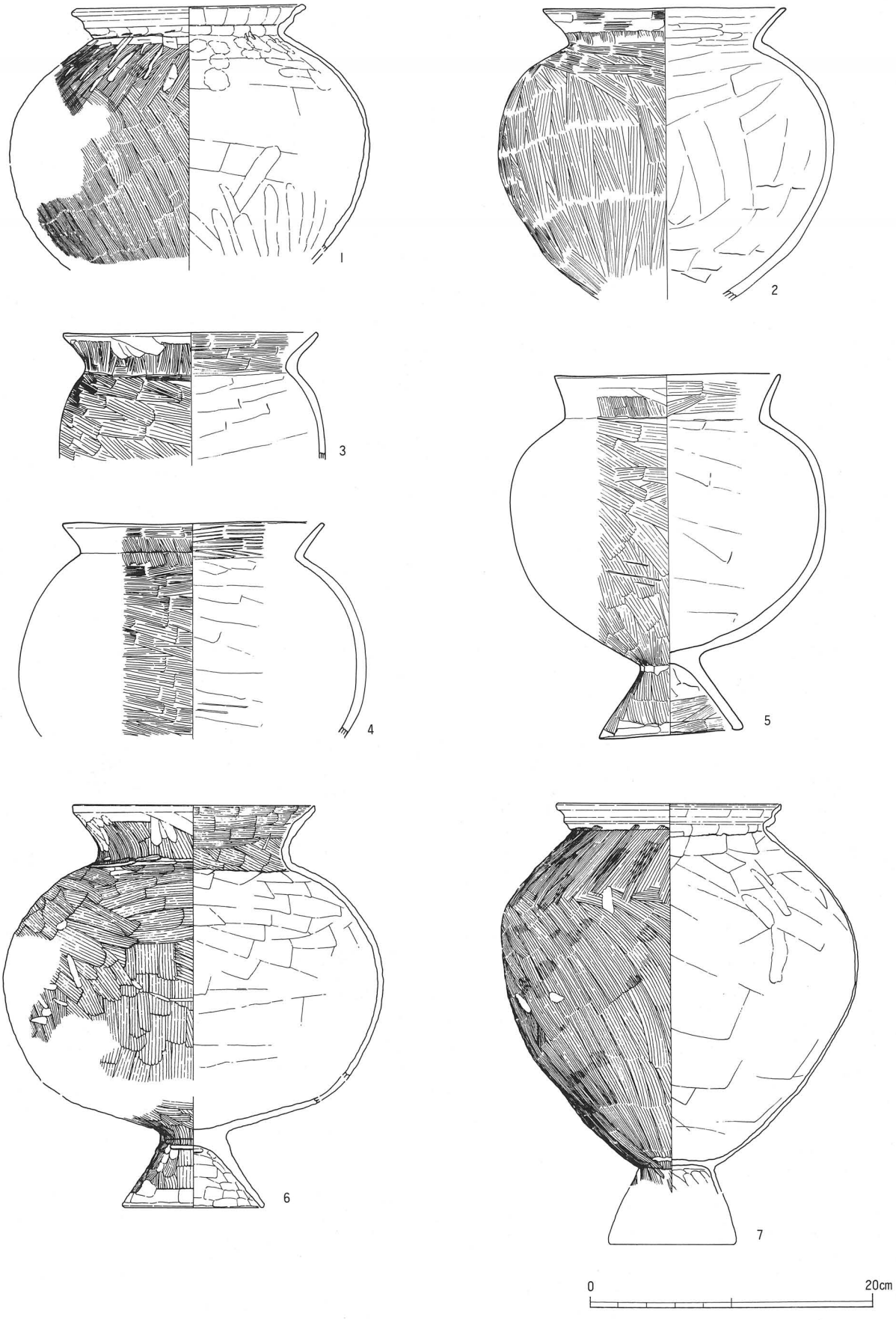
１～４は甕形土器である。いずれも底部が欠損しているため、全体の形状は明らかではない。１は、Ｓ字状口縁をもつ。ハケ状工具を使用し、右下から左上へ肩部まで斜方向に調整した後、口縁下右上から左下へ斜方向の調整をおこなう。口縁部直下にはヘラ状工具による横方向のケズリがみられる。２は、ハケ状工具を用い頚部から体部に縦方向の調整をおこなった後、口縁部と肩部に横方向の調整を施す。４は、口縁部と体部にハケ状工具による横方向の調整がなされる。頚部は、ハケ状工具による縦方向の調整である。口唇下はナデられる。５～７は、台付甕である。６は、口縁下部はハケ状工具による縦方向の調整、体部は縦横のハケ状工具による調整がな



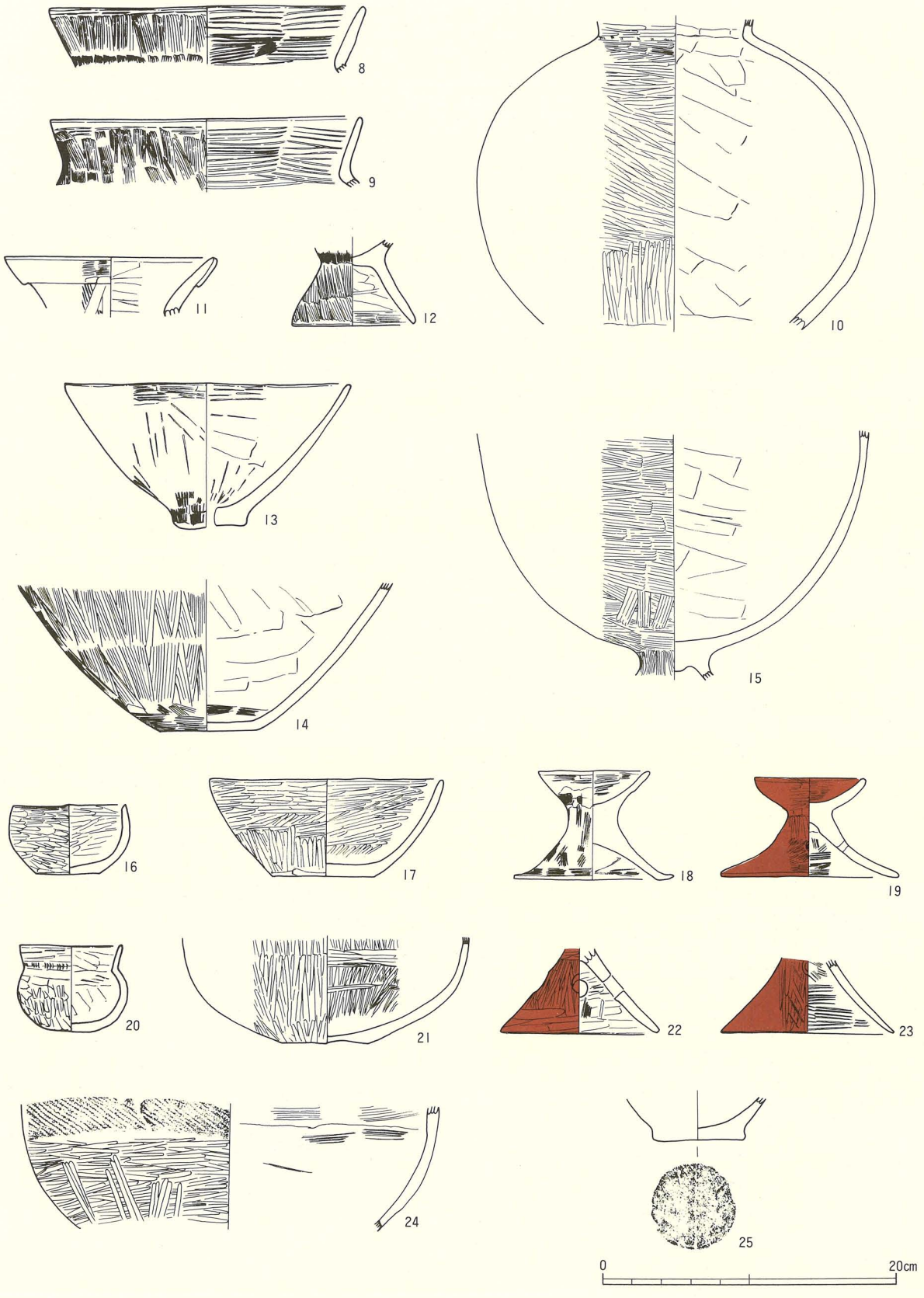
第45図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡平面図(2)



第46図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡遺物分布図

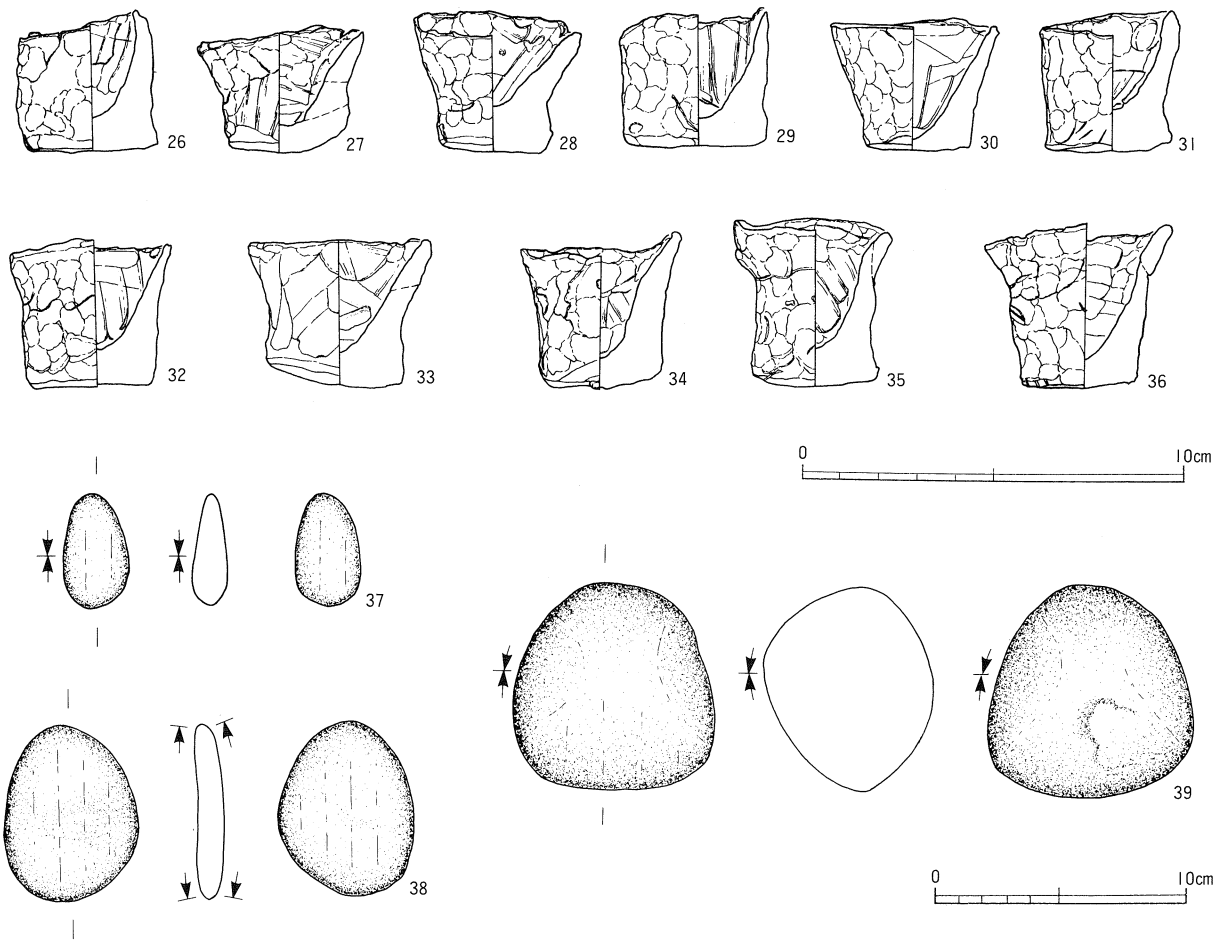


第47図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(1)



第48図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(2)

される。口縁上部は横方向のナデ調整が施される。台部はハケ状工具による縦方向の調整とヘラ状工具によるケズリで整形され、裾部はケズリのみで調整される。内面調整は横方向のナデによる。体部は潰れた球形で、やや歪みがある。7は、S字状口縁をもつ。ハケ状工具を使用し、台部との接合部から上へ斜方向の調整の後、頸部から肩部へ斜めに調整をおこなう。内面はナデ調整が施される。11は、壺形土器である。折返し状口縁をもち、ハケ状工具による横方向の調整が成される。13は、甑形土器である。体部はハケ状工具による縦方向の調整後、粗くナデ消す。内面はナデ調整される。16は、鉢形土器である。横方向のミガキにより調整される。17は鉢形土器である。体部上半は横方向のミガキ、下半は縦方向のミガキが施される。内面は横方向のミガキによる調整を受ける。18・19は器台形土器である。19は、受部は内外面ともに横方向のミガキが施される。脚部外面は様々な方向のミガキが施されるが、内面はハケ状工具による横方向の調整がなされる。受部と脚部の接合部はヘラ状工具によるケズリが施される。脚部内面を除いて赤色塗彩され、脚部に4箇所の穿孔を有する。20は坩形土器である。口縁部は横方向のナデ調整、体部はミガキが施される。内面はナデ調整される。法量的にみると13・16・20はミニチュア土器の範疇にはいる可能性がある。22・23は器台形土器の脚部である。22は外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のナデにより調整される。外面に赤色塗彩が施され、3箇所の穿孔を有する。24は甕形土器である。RL縄文が施文される。26～36は、ミニチュア土器である。口径・器高・底径とも3～4cm前後の小形のものである。いずれも、粘土紐巻上げにより成形される。27の器表面下半と33は、指頭によるナデが施される。内面は指頭によるナデとヘラ状工具によるナデとで調整される。35・36は折返



第49図　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土遺物(3)

し状口縁をもつ。

37は閃緑岩、38は砂岩、39は緑色岩製の磨石である。37・38は偏平な礫を、39は球形の礫を用いている。37・39は、全面に擦痕をもつ。38は、平坦な面の両面に擦痕をもつ。

［時期］床面および覆土中より検出された遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第19表　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	16.5	21.0		SWR	do	b	60%	
2	甕	17.2	20.5		SW	dg	b	50%	
3	甕	18.0	9.0		SW	do	b	50%	
4	甕	18.5	15.0		BS	do	b	70%	
5	台付甕	16.0	25.0	10.2	SWR	do	b	70%	
6	台付甕	16.0	(24.0)	10.2	SWR	do	b	60%	
7	台付甕	16.3	28.0		SRW	gb	b	80%	
8	甕	(21.5)	4.5		SB	dg	b	30%	
9	甕	(21.0)	4.7		SWB	do	b	30%	
10	甕		20.0		BR	dg	a	90%	
11	壺	14.4	4.1		SB	do	b	10%	
12	台付甕		5.5		SW	dg	b	90%	
13	甑	9.4	9.6	5.0	SW	rb	b	80%	
14	甕		10.0	6.3	SBR	rb	b	40%	
15	台付甕		16.5		SW	do	b	60%	
16	鉢	7.6	4.8	4.3	SWB	rb	b	80%	
17	鉢	16.0	6.1	7.0	SB	do	b	90%	
18	高　坏	7.6	7.0	11.0	SBW	do	b	90%	
19	高　坏	7.5	6.1	12.2	BR	o	a	90%	内外面赤彩
20	坩	7.0	5.5	4.5	BS	do	b	90%	
21	鉢		7.3	5.7	SWR	do	a	50%	
22	高　坏		5.2	11.0	BW	o	b	90%	表面赤彩
23	高　坏		4.2	9.0	BR	o	b	90%	表面赤彩
24	甕		8.5		SBW	do	b	50%	
25	甕		1.5	6.0	SW	do	b	100%	底面木葉痕
26	甕	3.2	3.5	3.4	SW	do	b	100%	ミニチュア
27	甕	4.3	3.2	3.0	SW	do	b	100%	ミニチュア
28	甕	4.5	3.5	2.8	SW	do	b	100%	ミニチュア
29	甕	3.8	3.5	3.6	SW	do	b	100%	ミニチュア
30	甕	4.4	3.2	3.0	SW	do	b	100%	ミニチュア
31	甕	3.4	3.3	3.5	SWB	do	b	100%	ミニチュア
32	甕	4.0	3.8	3.5	SW	do	b	100%	ミニチュア
33	甕	4.5	3.8	3.5	SW	do	b	100%	ミニチュア
34	甕	4.3	3.9	3.2	SW	do	b	100%	ミニチュア指紋有
35	甕	4.0	4.3	3.2	SW	do	b	100%	ミニチュア
36	甕	4.8	4.0	3.3	SW	do	b	100%	ミニチュア

第20表　姥ヶ沢遺跡第10号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
37	覆土上層	磨石2a	43	25	14	25	Se	a	研磨1
38	床上5cm	磨石2a	68	51	12	70	S	a	研磨3
39	覆土上層	磨石1b	82	82	79	690	Rs	a	研磨1

第12号住居跡（第50図・図版18）

［位置］ＢⅢ—r1・r2、s1・s2グリットに位置する。東側に第13号住居跡が位置している。北側・西側約２／３は調査区外にかかり、未調査。

［形状］住居の大半が、調査区外にかかるため形状は不明。現状で、長径（3.3m）、短径（3.0m）を測り、方形または長方形を呈するものと推定される。

［柱穴］柱穴は３口確認されている。Ｐ1—11.0cm、Ｐ2—39.8cm、Ｐ3—51.2cmを測る。Ｐ2は、主柱穴と考えられる。

［炉］Ｐ2とＰ3の間に、直径50cm程の範囲で、床面が被熱・硬化し、赤化した箇所が確認されている。明瞭な掘込みは認められないが、地床炉と考えられる。

［遺物出土状態］床面より出土する遺物は無い。覆土中より僅かに出土している遺物も残存率は低く、本住居の埋没過程で周囲より流れ込んだものと推測される。

［遺物］住居の覆土より、ハケ調整の施された土器片が６点出土している。いずれの遺物も小片となっており図示するには至らなかった。

［時期］覆土中より出土した土器片より判断して、古墳時代前期五領式期。

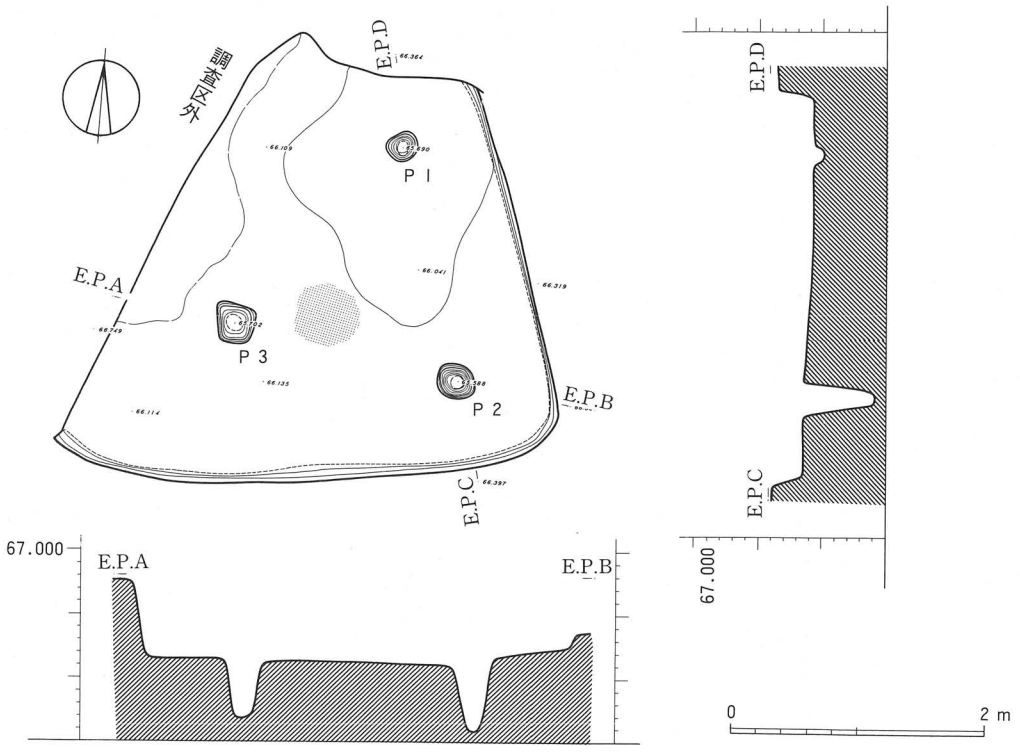
第13号住居跡（第52・53図・図版18・19）

［位置］ＢⅢ—r2・r3、s2・s3グリットに位置する。西側に第12号住居跡が位置している。南東隅に、第26号土坑が重複している。

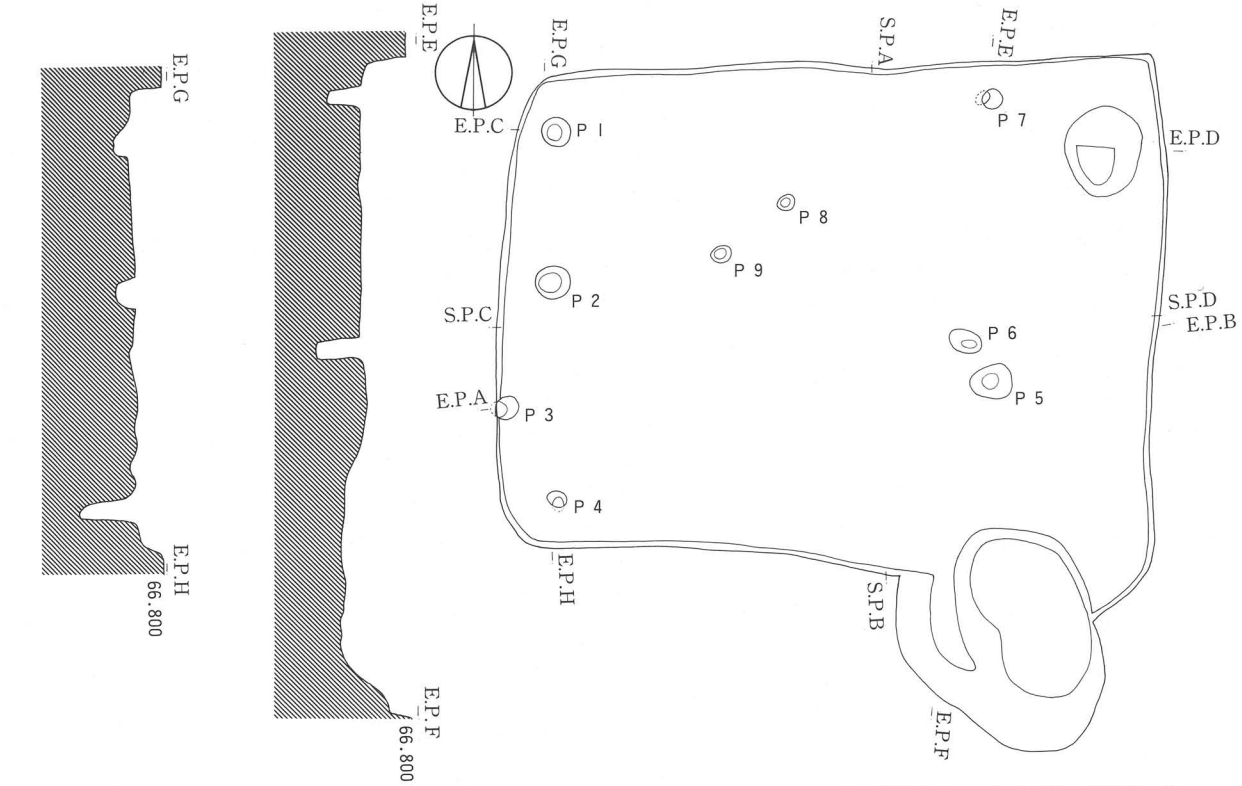
［形状］長径5.2m、短径3.9mの方形を呈する。壁高は、東側で18.1cm、西側で44.9cm、南側で14.6cm、北側で28.9cmを測る。北東コーナーで長径72cm、深さ20cmの貯蔵穴様ピットが１基確認されている。

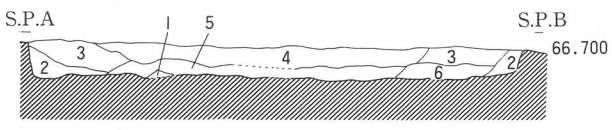
［覆土］６層に分層され、自然堆積を示す。４・６層に焼土・炭化粒が確認されている。住居が埋没する過程の窪地での火を使用した土地利用行為が行われた可能性が窺える。

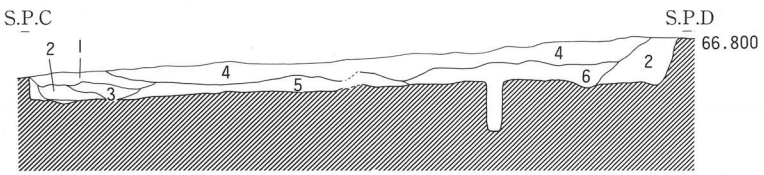
［柱穴］柱穴は９口確認されている。Ｐ1—10.6cm、Ｐ2—14.6cm、Ｐ3—49.2cm、Ｐ4—46.2cm、Ｐ5—48.3cm、Ｐ6—19.1cm、Ｐ7—31.2cm、Ｐ8—39.0cm、Ｐ9—20.0cmを測る。Ｐ2・３は出入り口施設に関連す



第50図　姥ヶ沢遺跡第12号住居跡平面図

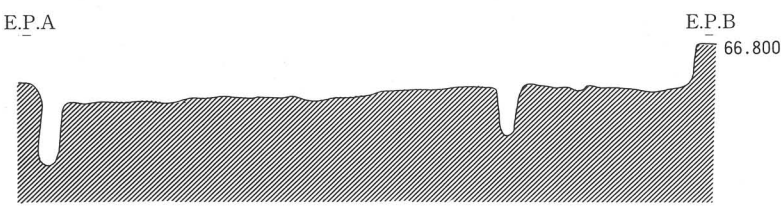






1	茶褐色土	しまり強、粘性弱、焼土粒少量、ローム粒微量含、粒子やや粗
2	黄褐色土	しまり、粘性強、ローム粒多含、粒子やや粗
3	茶褐色土	しまり、粘性強、ローム粒少含、粒子やや粗
4	黒褐色土	しまり、粘性強、焼土粒、炭化粒少量、ローム粒微量含、粒子粗
5	黄褐色土	しまり、粘性やや強、ローム粒、ロームブロック（φ４～６cm）多含、粒子粗
6	黒茶褐色土	しまり、粘性やや強、ローム粒、焼土粒、炭化粒微量含、粒子やや粗







第51図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡平面図

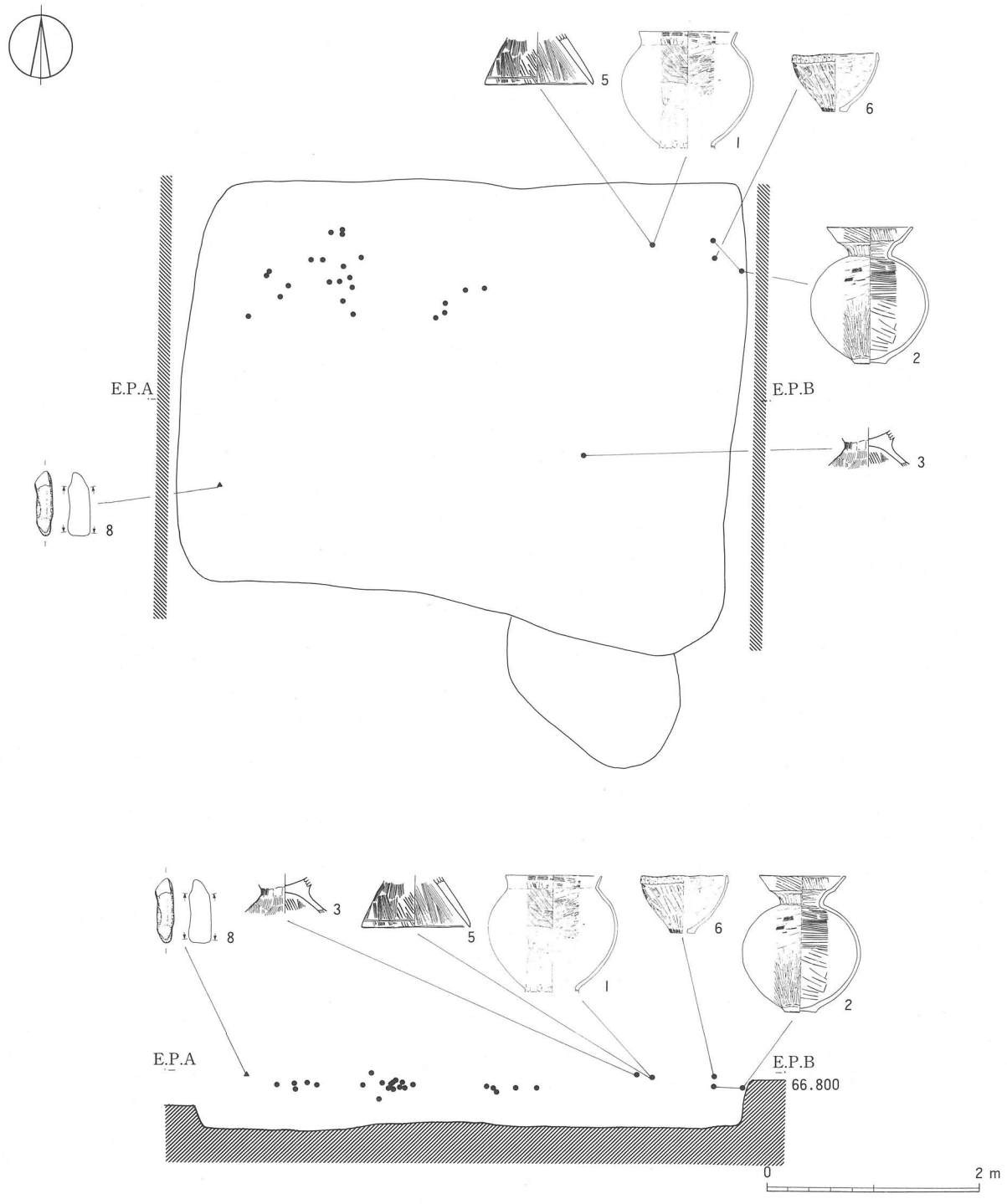
るピットの可能性がある。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面からの出土は認められず、いずれも床面より20～30cm程浮いた状態で出土している。６の甕がほぼ完形であるが、他は遺存状態が悪く、住居廃絶後、浅い窪地状態での遺物の一括投棄と判断される。

［遺物］（第53図・図版40）遺物は、やや少なく、土器183点、磨石１点、砥石１点が出土している。

１は、台付甕。やや外反する直立気味の口縁部と丸い体部を持つ。台部を欠損する。器面調整は、口縁部内外面および口縁端面ヨコナデ、体部上半内外面ハケメ、体部下半内外面ヘラナデを施す。２は複合口縁の壺である。口縁部はやや立ち上がった後、



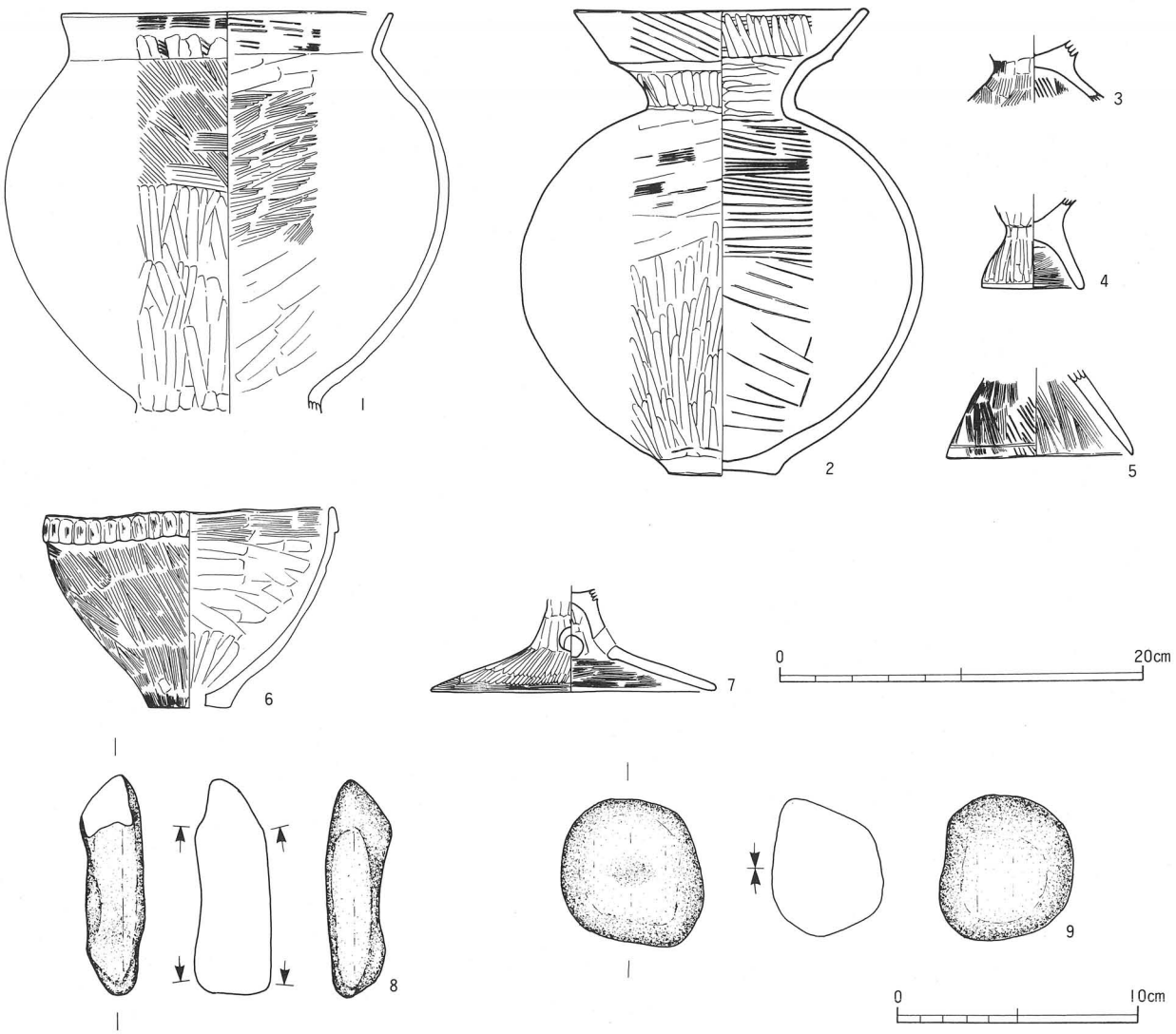
第52図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡遺物分布図

内面に微かな稜をもって開く。体部は、丸く張り、中位に最大径を持つ。器面調整は、口縁部外面および口縁端面ヨコナデ、頸部および体部下半内面ヘラナデ、体部上半内外面ハケメ、口縁部内面および体部下半外面ヘラミガキを施す。6は甑。ほぼ完形品。口縁部を指で折り曲げて押さえた跡が残る。器面調整は、体部外面および口縁部内面ハケメ、体部内面ヘラナデを施す。7は、高坏の脚部。円筒状から直線的に開き、透孔は3箇所。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はハケメを施す。8は砥石。両面に砥面がある。9は磨石。全体が研磨され、表面に凹みが1箇所認められる。

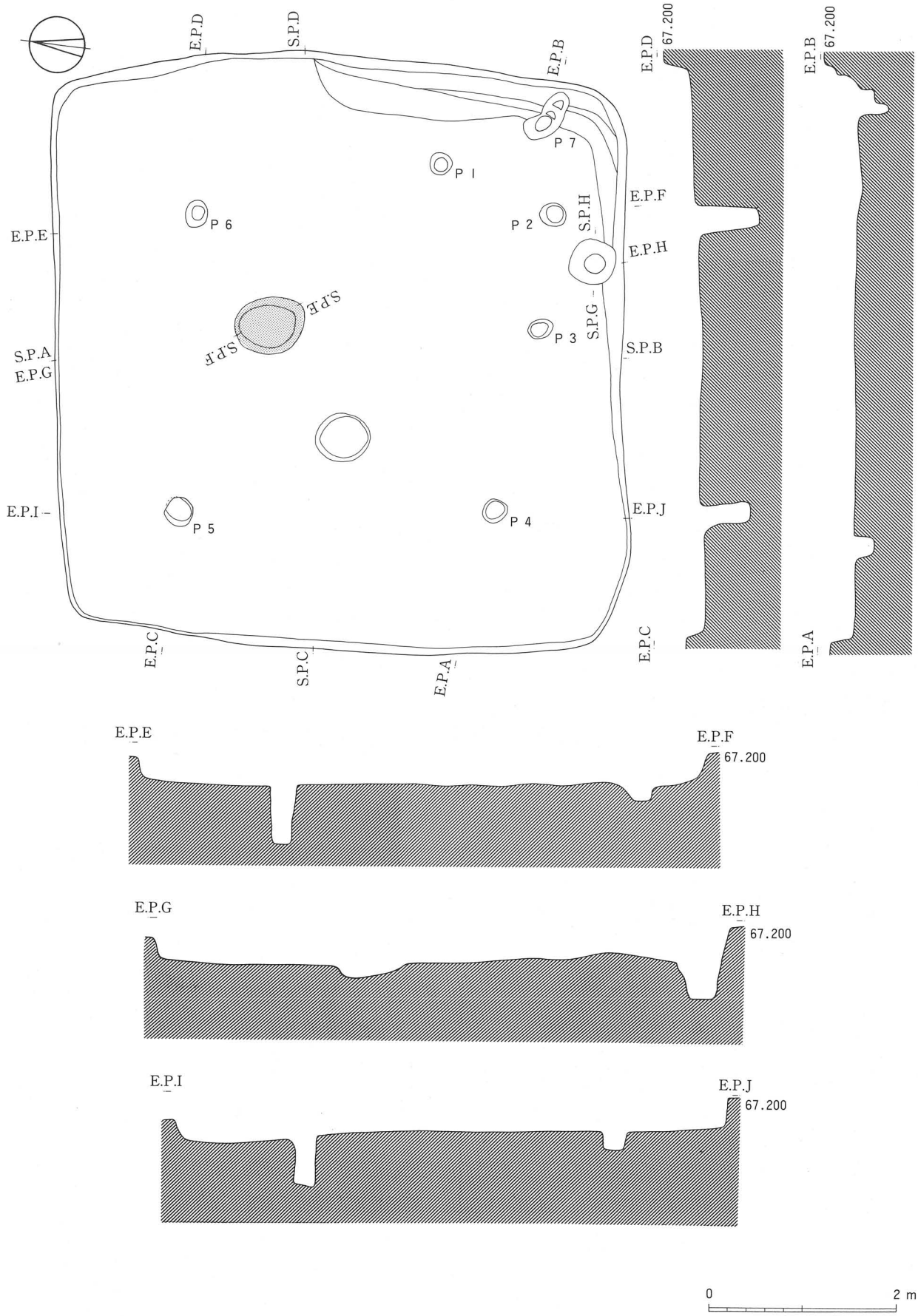
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第21表　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	台付甕	(18.1)	22.1		WS	do	b	30%	
2	壺	16.2	25.8	5.8	WBS	o	b	70%	
3	台付甕		3.0		WBS	do	b	100%	
4	台付甕		4.4	5.5	WBS	do	b	100%	
5	台付甕		4.8	10.1	WBS	do	b	100%	
6	甑	16.0	11.1	4.5	SWB	do	c	95%	
7	高　坏		5.6	15.7	SWR	lg	b	90%	孔3個



第53図　姥ヶ沢遺跡第13号住居跡出土遺物



第54図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡平面図(1)

第14号住居跡（第54～56図・図版20・21）

［位置］ＣⅢ―a4・a5、b4・b5グリットに位置する。

［形状］長径6.5m、短径6.0mの方形を呈する。壁高は、東側で27.7cm、西側で19.2cm、南側で30.3cm、北側で24.2cmを測る。

［覆土］10層に分層される。覆土下層に多量の焼土・炭化粒を含む。南側壁面際より住居の埋没が進行したと判断される。

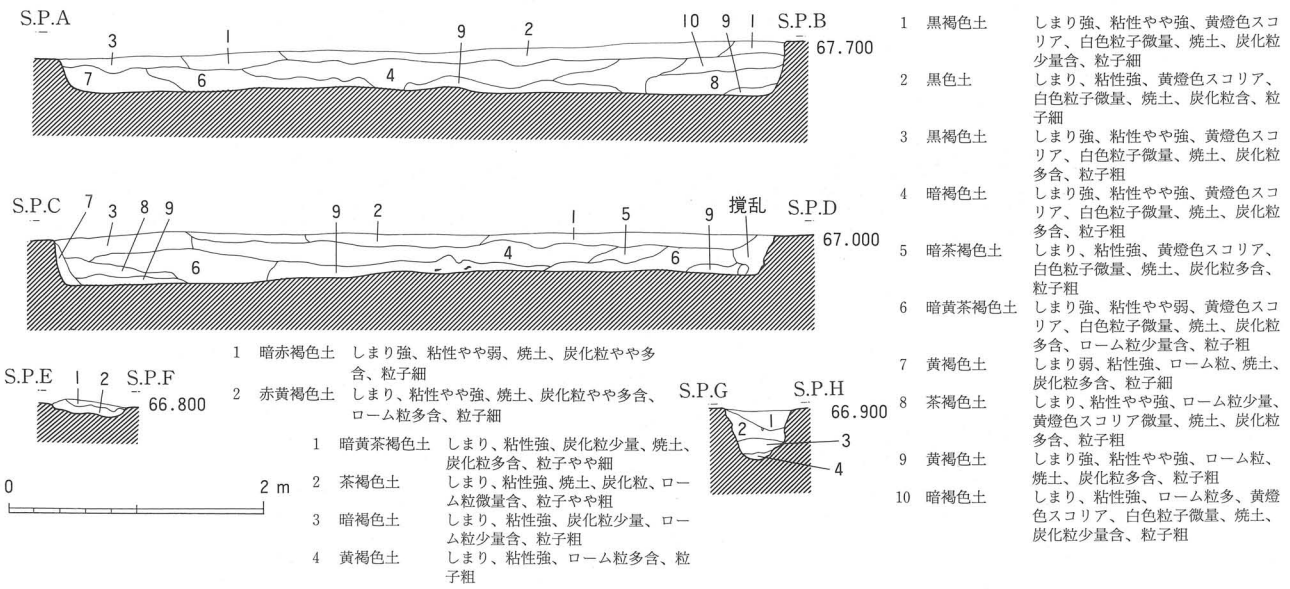
［柱穴］柱穴は８口確認されている。Ｐ4～Ｐ7は主柱穴。Ｐ1―46.0cm、Ｐ2―17.0cm、Ｐ3―40cm、Ｐ4―23.5cm、Ｐ5―66.0cm、Ｐ6―53.4cm、Ｐ7―19.5cm、Ｐ8―16.5cmを測る。Ｐ2.4.5.6は主柱穴。Ｐ8は、出入り口施設に関連するピットの可能性がある。

［炉］中央やや北寄りに、長径80cm、深さ13cmを測る地床炉が確認されている。被熱で硬化している。

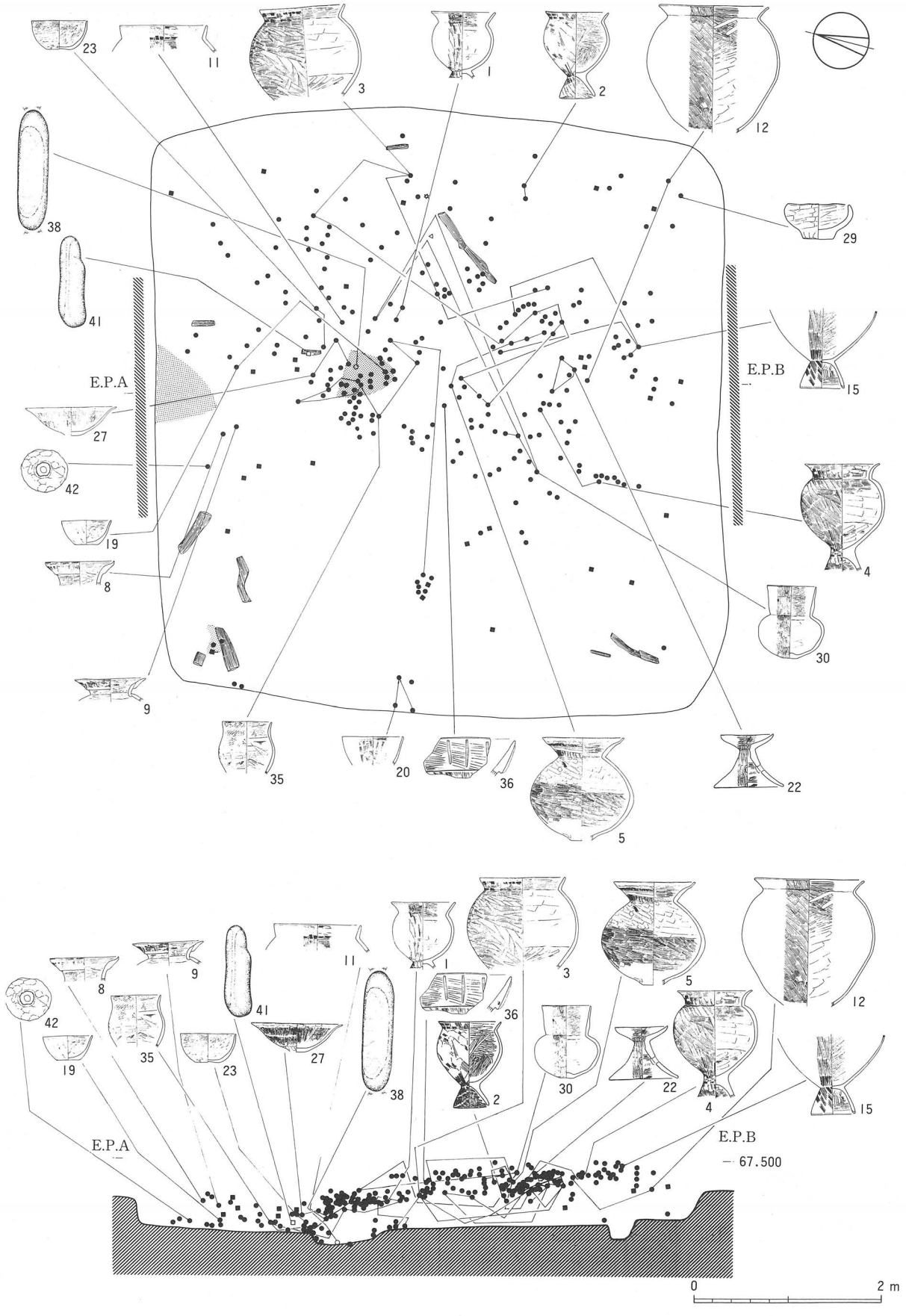
［遺物出土状態］炉の周囲および北壁面の二箇所に焼土の集中が認められ、20cmから100cm程の長さの炭化材が数点確認されている。覆土下層に多量の焼土・炭化材が確認されており、本住居跡は焼失住居と考えられる。遺物の出土状態は、東西断面で、炉付近より南側に右上がりのドットとして認識され、床面に遺棄された形での出土状態は確認されていない。住居焼失後、南壁方向からの埋没土流入がある程度進行した後、一括して遺物が投棄されたものと推定される。38の敲石は、炉壁面に接した状態で出土したものである。

［遺物］（第57～59図・図版41～43）遺物は、多く土器655点、磨石１点、石皿１点、棒状礫器１点、敲石１点が出土している。

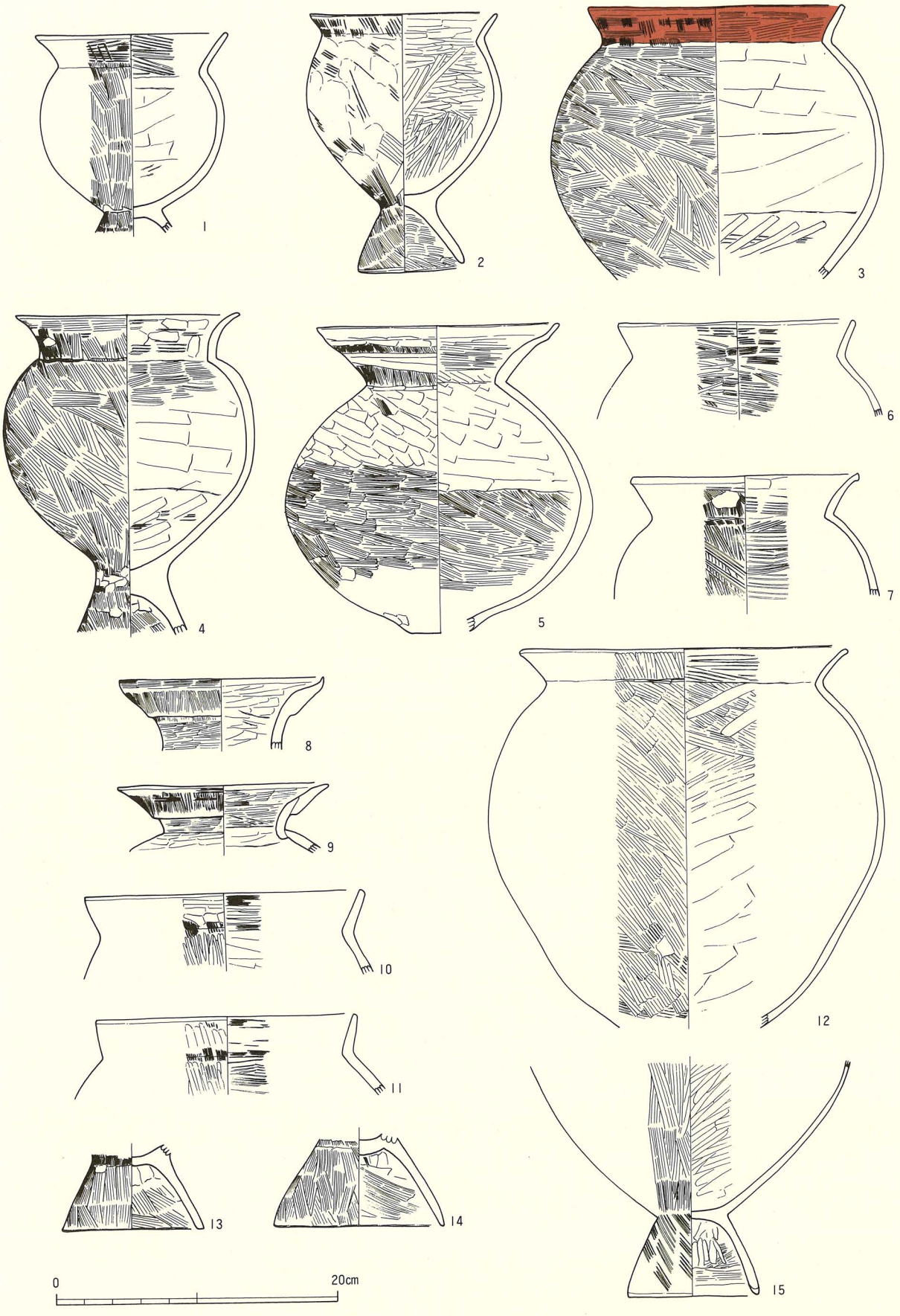
１・２・４は台付甕。１は台部を欠損する。口縁部は外反気味に開き、体部中位に最大径がくる。器面調整は、口縁部内面および体部外面にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。２は、完形品。口縁部は直線的に開き、体部上半に最大径がくる。器面調整は、外面および台部内面ハケメ、口縁部および体部内面ヘラケズリを施す。４は、台部を欠損する。口縁部は直立気味に立上がり外反し、体部上半に最大径がくる。器面調整は、口縁部内面および口唇部ヨコナデ、口縁部および体部外面、体部内面上半部ハケメ、体部内面下半部ヘラナデを施す。３・６・７・10～12は甕。３は、底部を欠損する。口縁部は直線的に立上がり開く。体部中位に最大径がくる。器面調整は、体部外面および内面上半部ハケメ、口縁部内外面ヨコナデ、体部下半部ヘラナデを施す。５・８・９は壺形土器。５は単純口縁を呈する。頸部内面に稜をもって明瞭に「く」字状に外反した後、直線的に開き、口縁端部付近でやや稜をもって立ち上がる。体部やや下位に最大径がくる。器面調整は、口



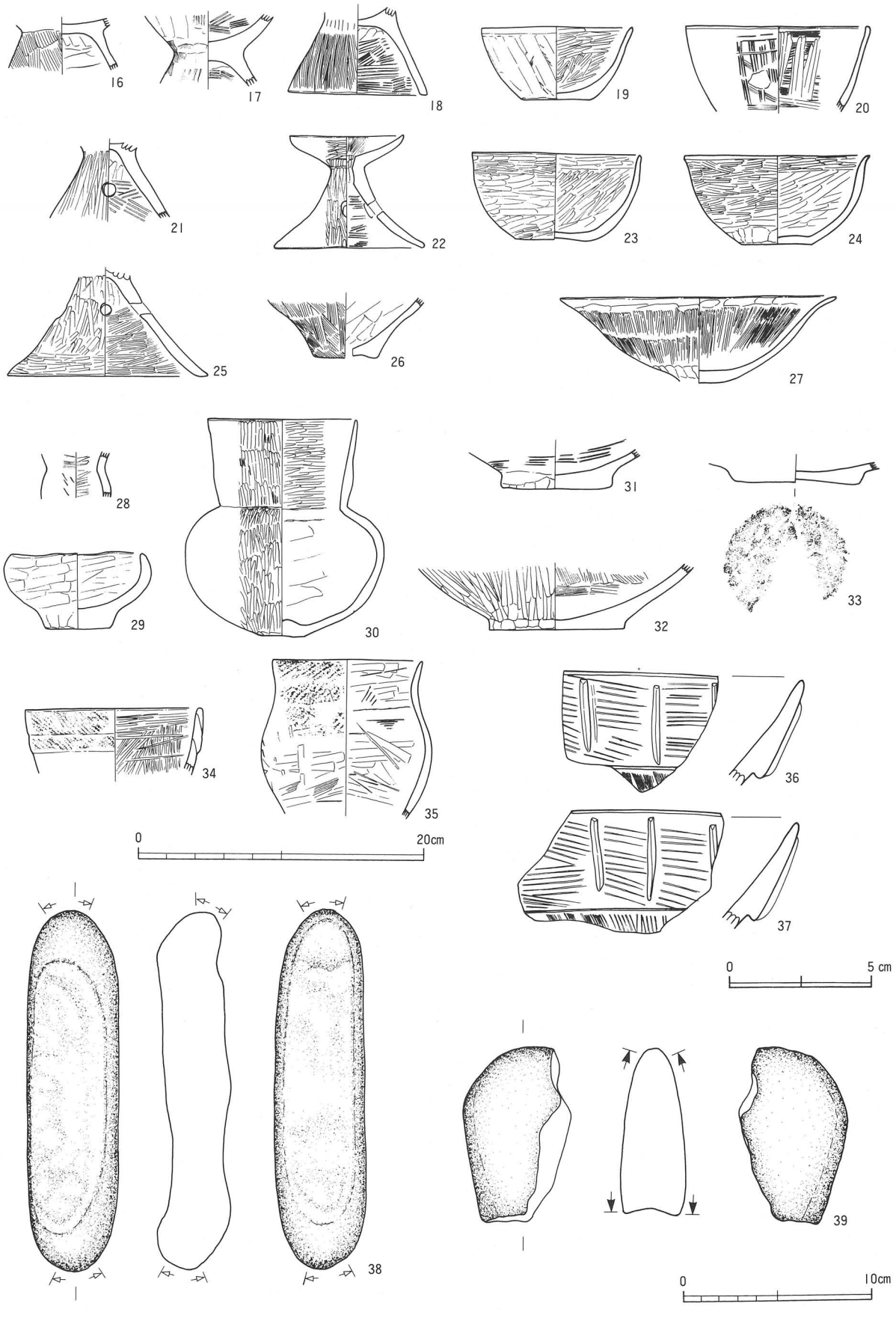
第55図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡平面図(2)



第56図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡遺物分布図



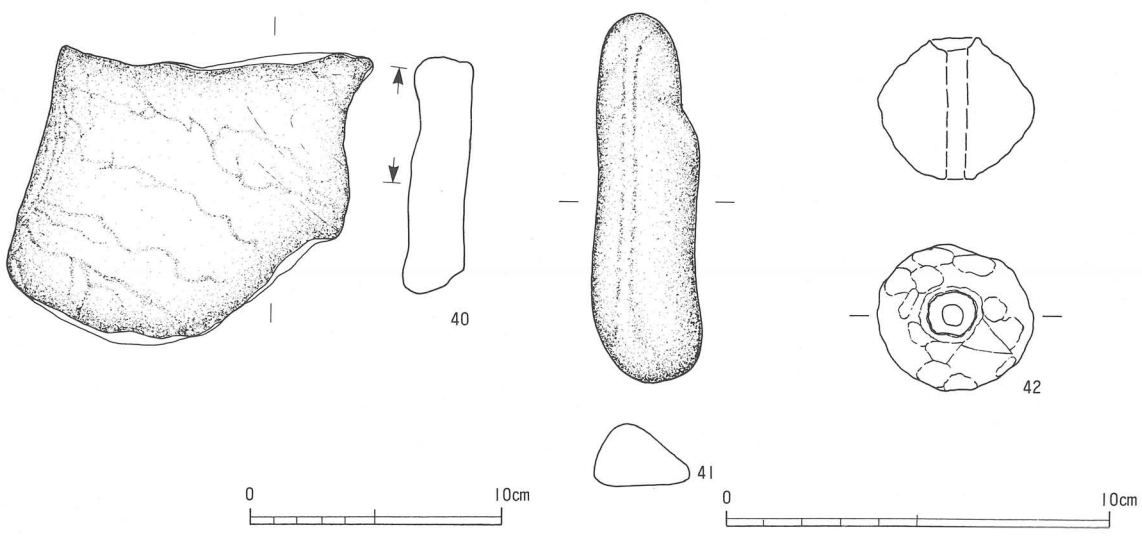
第57図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(1)



第58図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(2)

縁部外面は、ハケメ調整後口端部および口縁部部分的にヨコナデ、体部内外面上半部ヘラナデ、下半部ハケメを施す。８は、複合口縁を呈する。頸部は円筒状に立ち上がり、複合部が外反し、口縁端部が立ち上がる。器面調整は、口縁部外面ハケメ、口縁端部ヨコナデ、内面ヘラナデを施す。９は、複合口縁を呈する。頸部より複合部を含めて全体的に外反する。器面調整は、口縁部外面ハケメ、頸部および内面ヨコナデが施される。13・14・16～18は、台付甕の台部。15は薄手の作りで焼成も良好で、体部上半を欠損するが、口縁はＳ字状を呈するものと推測される。19・20・23・24は、鉢形土器で、いずれも口縁部に最大径がくる。19は完形品。器面調整は、外面に粗いヘラナデ、内面はヘラミガキが施される。20は、薄手の作りで、底部を欠損する。底部よりほぼ直線的に開く。器面調整は、内外面ともヘラミガキが施される。23は、やや上げ底を呈し、底部よりやや丸みをもって立ち上がる。器面調整は、内外面ともヘラケズリが施される。24は、口縁端部が外反する。器面調整は、内外面ともヘラケズリが施される。22は、ほぼ完形の器台形土器。内彎気味に開く浅い皿状の器受部をもち、明瞭な端面を作らない。器面調整は、器受部および脚部外面ヘラミガキ、脚部内面ハケメを施す。26は、甑の体部下半。27は、高坏の坏部。器面調整は、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ハケメを施す。28は、ミニチュア土器。頸部のすぼまりによって体部と口縁部が区別されるため壺と判断した。粗雑ながらも粘土帯のマキアゲ成形により作られている。29は、小形の鉢。体部が張り、口縁部が内彎している。器面調整は、内外面ともヘラナデが施される。30は、ほぼ完形の坩。体部は球形に膨らみ、口縁は直線的に広がる。器面調整は外面および口縁部内面ヘラミガキ、体部内面ヘラナデを施す。31～33は甕の底部。33は、底面に木葉痕を残す。34は、壺形土器の口縁部。口縁部に２段の粘土紐による輪積痕を残す。口縁部に単節RLの斜縄文を施文し、内面はヘラミガキが施される。35は、甕形土器。頸部の屈曲がやや弱いが、体部上半に最大径がくる。口縁部に単節LRの斜縄文を施文し、体部下半にはヘラミガキが施される。36・37は、やや内彎気味に開く壺形土器の口縁部。複合口縁部に縦位の棒状浮文を貼付している。内面に赤彩が認められる。38は、砂岩製の敲石。両端に敲打痕が認められる。39は、閃緑岩製の磨石。40は、緑泥片岩製の石皿。41は、砂岩製の棒状礫器。42は、床面より若干浮いた状態で出土した有孔土玉。直径4.1cmを測り、５㎜の孔が穿たれている。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。



第59図　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土遺物(3)

第22表　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	台付甕	13.7	14.0		SB	do	b	90%	
2	台付甕	13.3	18.3	7.7	WSB	rb	b	100%	
3	甕	18.2	19.5		BS	do	b	70%	口縁部赤彩
4	台付甕	15.9	22.5		BS	rb	b	70%	
5	壺	17.2	21.8	(4.2)	BS	rb	a	60%	
6	甕	(16.7)	6.7		BS	do	a	20%	
7	甕	(16.1)	8.8		BSW	do	a	20%	
8	壺	14.5	5.0		BS	do	a	90%	
9	壺	14.9	4.5		BS	do	b	80%	
10	甕	(19.7)	6.6		BWS	do	a	20%	
11	甕	(18.6)	5.3		BWS	do	b	20%	
12	甕	23.4	27.0		BS	do	b	80%	
13	台付甕		5.5	10.0	WBS	do	b	90%	
14	台付甕		6.2	12.0	BSW	rb	b	50%	
15	台付甕		17.0	9.5	SB	do	a	50%	
16	台付甕		3.0		WBS	rb	a	100%	
17	台付甕		4.7		SB	do	b	80%	
18	台付甕		6.0	9.7	BSW	rb	b	80%	
19	鉢	10.5	5.0	4.8	BS	rb	b	100%	
20	鉢	13.0	6.0		BSW	o	a	50%	
21	高　坏		5.0		BS	do	a	90%	孔４個
22	器台	7.9	8.0	10.5	BRS	do	a	90%	孔３個
23	鉢	11.7	6.0	4.8	BRS	do	b	70%	
24	鉢	13.0	6.2	4.7	WS	do	b	90%	
25	高　坏		7.0	14.1	BS	rb	b	100%	孔４個
26	甑		4.0	4.4	SBW	do	b	80%	
27	高　坏	19.3	6.0	2.8	BR	do	c	90%	
28	壺		3.0		BW	do	b	30%	
29	鉢	9.2	5.3	4.5	BS	o	b	80%	
30	坩	10.3	15.2	3.0	SB	do	a	90%	
31	甕		2.5	7.5	BS	do	b	90%	
32	甕		4.3	9.4	SWB	do	a	90%	
33	甕		1.0	9.0	SR	do	c	80%	底部木葉痕
34	壺	(12.5)	4.6		SBW	do	a	20%	縄文施文
35	甕	10.5	10.8		SWB	do	b	70%	縄文施文
36	壺				SWB	do	c	10%	内面赤彩
37	壺				SWB	do	c	10%	内面赤彩

第23表　姥ヶ沢遺跡第14号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
38	炉壁面	敲石3a	192	47	44	603	S	a	敲打部位a
39	覆土上層	磨石5b	(91)	(56)	(35)	240	Se	d	研磨３
40	覆土上層	石皿	172	144	39	1,700	Rh	c	
41	床上８cm	棒状礫器3a	193	54	40	570	S	a	

第15号住居跡（第60・61図・図版22）

［位置］ＣⅡ－ｄ6・ｄ7、ｅ6・ｅ7、ｆ6・ｆ7グリットに位置する。

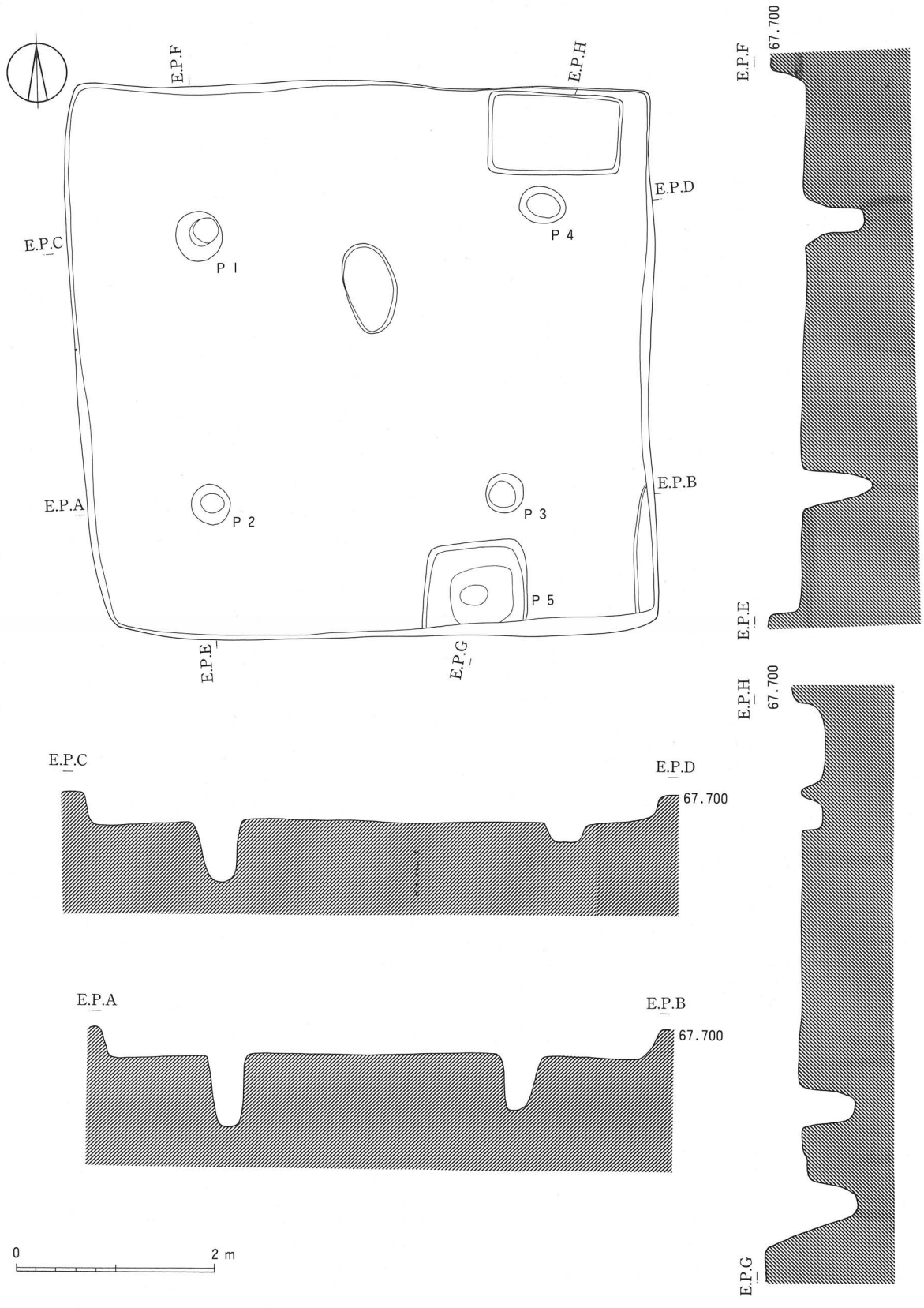
［形状］長径5.8m、短径5.6mの方形を呈する。壁高は、東側で34.1cm、西側で30.3cm、南側で33.2cm、北側で33.7cmを測る。北東コーナーで、長径125cm程の長方形を呈する、貯蔵穴様の土坑が１基確認されている。

［柱穴］柱穴は、主柱穴が４口確認されている。Ｐ1－63.6cm、Ｐ2－74.2cm、Ｐ3－55.7cm、Ｐ4－20.6cmを測る。Ｐ5は、深さ56cmを測る。浅い方形の掘り込みの中に位置しており、出入り口施設に関連するピットの可能性がある。

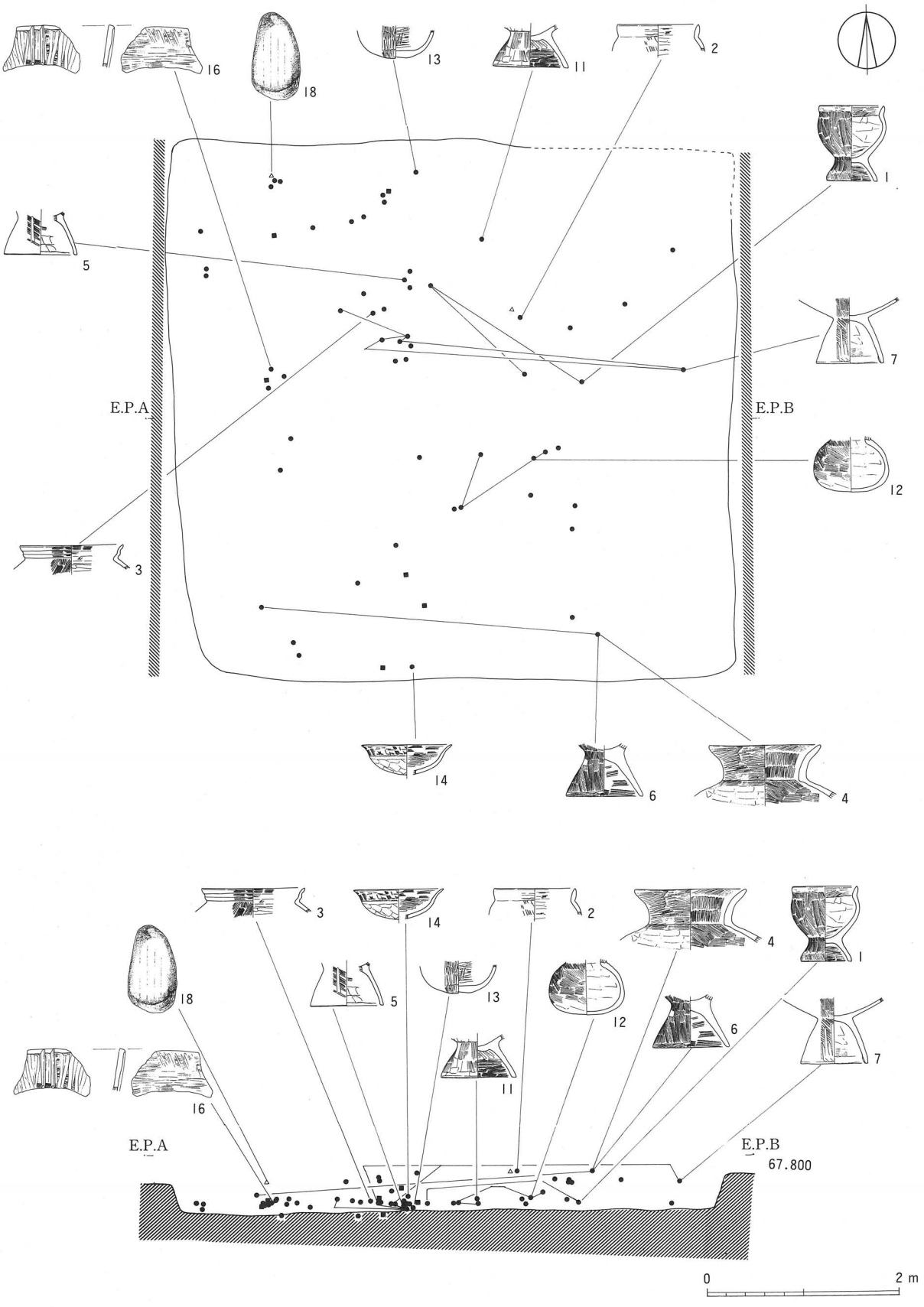
［炉］中央やや北寄りに、長径90cm、深さ20cmを測る地床炉が１基確認されている。被熱で硬化している。

［遺物出土状態］床面に使用可能な状態で検出された遺物は無く、ほとんどが破片となって出土している。床面より５cm程の間層を挟んで遺物が出土している。

［遺物］（第62図・図版４４）遺物は、土器457点、磨石２点が出土している。

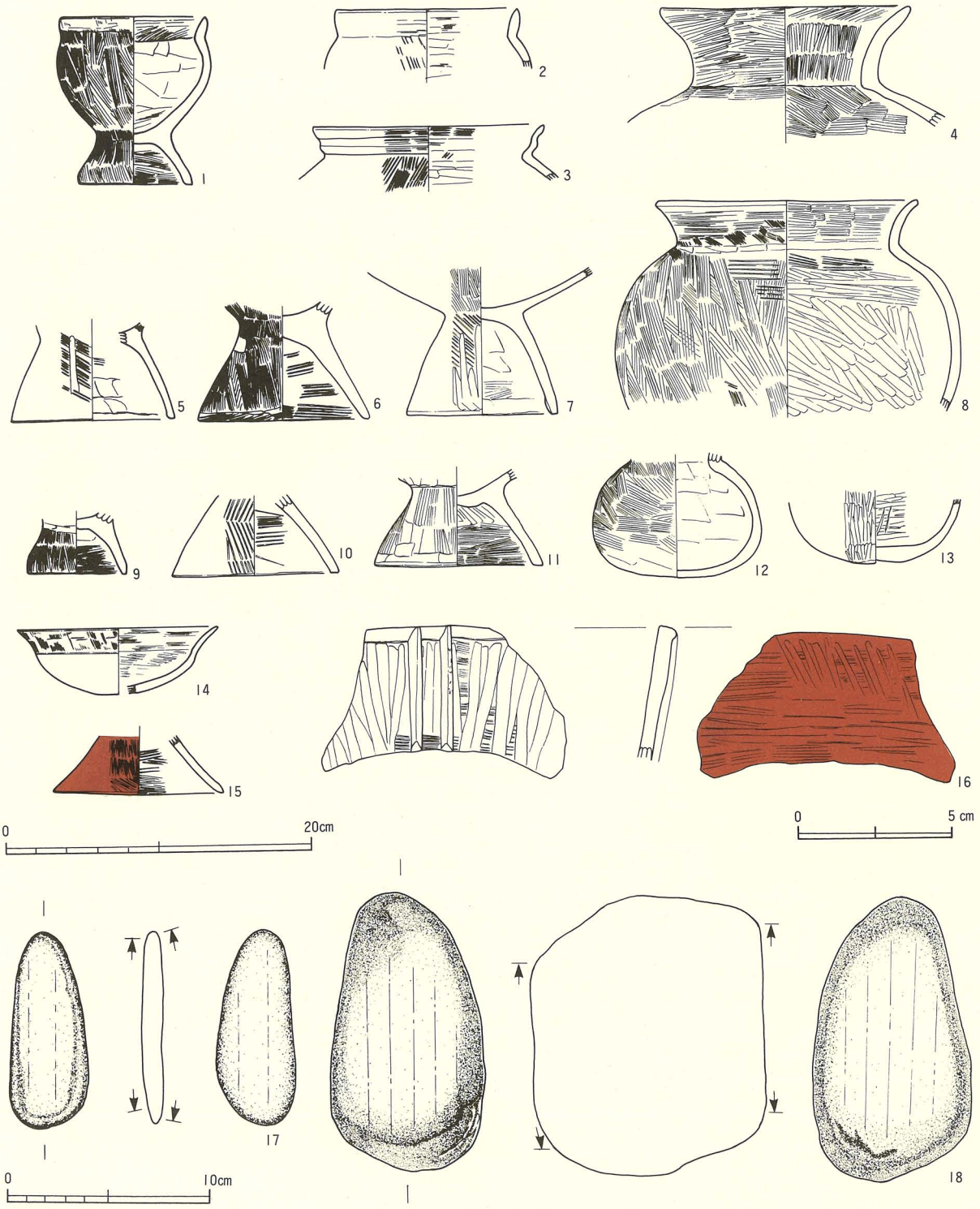


第60図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡平面図



第61図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡遺物分布図

１は、小形の台付甕。体部上位に最大径がくる。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面および台部内外面ハケメ、体部内面ヘラナデを施す。２・３は甕の口縁部。３はＳ字状口縁を呈する。薄手の作りで、７の台部と胎土が似ており、同一個体の可能性が高い。４・８は、甕形土器。４は、口縁部が円筒状に立上がり、大きく外反する。体部は潰れた球形を呈するものと考えられる。８は、体部上半に最大径がくる。器面調整は、口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、体部外面および内面上半ハケメ、体部下



第62図　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土遺物

半ヘラナデを施す。12･13は、口縁部を欠損する坩。12の体部は潰れた球形を呈し、下半に最大径がくる。器面調整は、外面ハケメ、内面ヘラナデを施す。15は、器台の脚部。外面に赤彩を施す。器面調整は、外面ヘラケズリ、内面ハケメを施す。16は、壺形土器の口縁部。口端部を押さえ平坦面を作り出しており、断面三角形状の２条の棒状浮文が貼付されている。内面に赤彩が認められる。器面調整は、内外面ともヨコハケ後ヘラミガキが施されている。17・18は磨石。17の石質は砂岩、18はフォルンフェルス。表裏面に磨面が認められる。

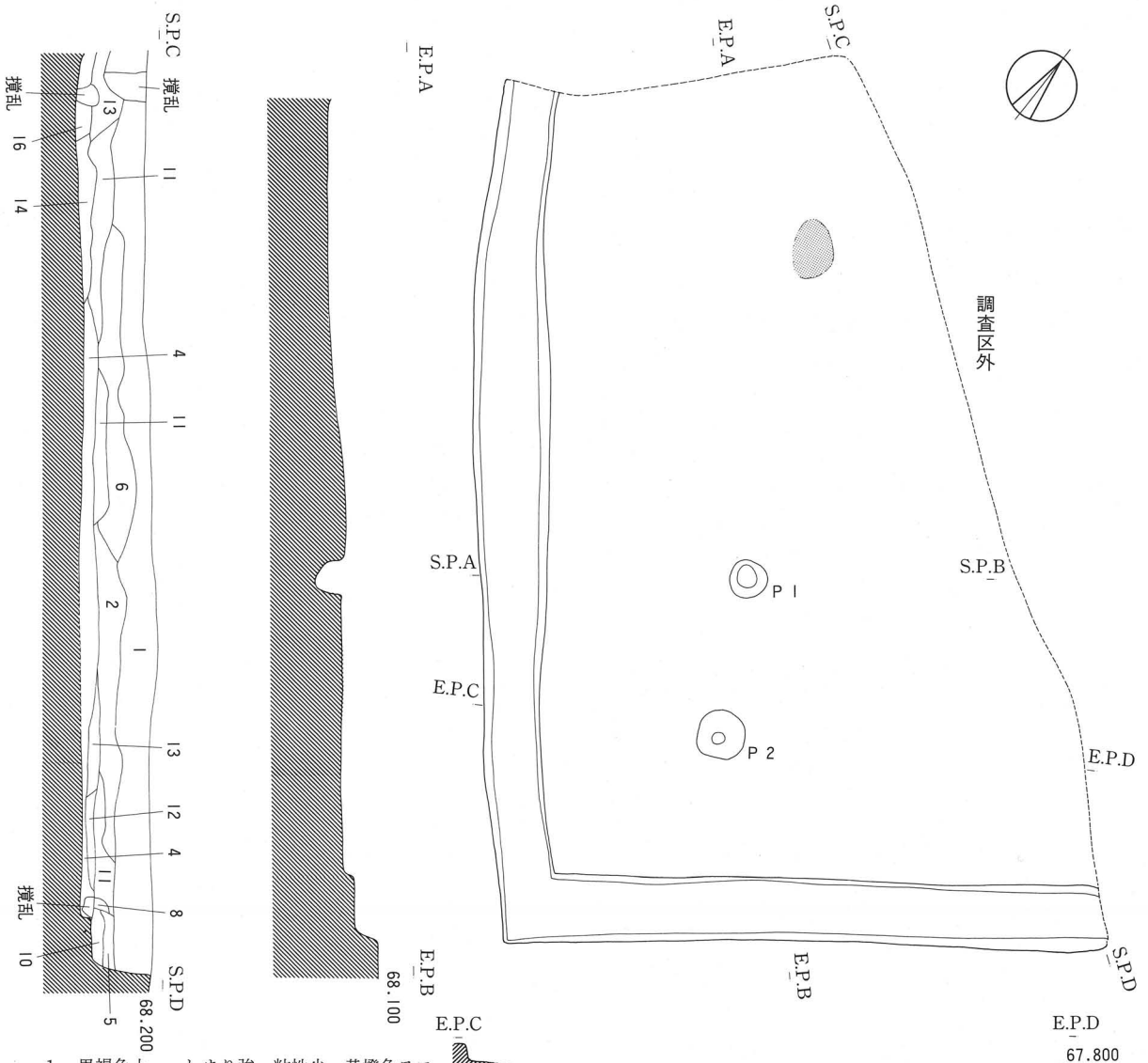
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第24表　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	台付甕	9.5	11.0	7.4	BR	o	b	60%	
2	甕	(10.8)	3.8		BR	o	b	20%	口縁Ｓ字
3	台付甕	(15.0)	3.3		BR	o	a	30%	
4	甕	16.3	7.3		SB	o	b	40%	
5	台付甕		6.1	10.8	SWB	do	b	40%	
6	台付甕		7.2	11.3	SWB	do	b	100%	
7	台付甕		9.2	10.0	BR	o	a	90%	
8	甕	17.0	13.8		BS	rb	a	80%	
9	台付甕		3.5	6.3	SW	do	a	100%	
10	台付甕		5.0	11.0	SWB	do	b	40%	
11	台付甕		5.6	10.8	SB	do	b	90%	
12	坩		7.7	4.5	BW	do	b	80%	
13	坩		4.0	3.0	SW	do	b	80%	
14			4.4	4.0	SB	do	b	90%	
15	器台		3.5	11.0	BS	o	a	30%	外面赤彩
16	壺				BS	o	b	20%	内面赤彩

第25表　姥ヶ沢遺跡第15号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
17	覆土上層	磨石3a	94	37	11	55	S	a	研磨３
18	床上32cm	磨石4b	135	120	78	1,600	F	a	研磨３



1　黒褐色土　しまり強、粘性少、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
2　暗黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
3　黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒やや多、炭化粒微量含、粒子粗
4　明黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多含、粒子粗
5　茶褐色土　しまり、粘性やや強、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
6　黒茶褐色土　しまりやや弱、粘性やや強、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、粒子粗
7　黄茶褐色土　しまりやや弱、粘性強、ロームブロック(φ１cm)少量、黄燈色スコリア、ローム粒微量含、粒子粗
8　黄褐色土　しまりやや弱、粘性強、ローム粒多含、粒子粗
9　黒茶褐色土　しまり、粘性やや弱、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
10　明褐色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒多含、粒子細
11　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、黄燈色スコリア微量含、炭化粒微量含、粒子細
12　暗褐色土　しまり強、粘性やや強、黄燈色スコリア微量含、ローム粒少量含、粒子やや粗
13　褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒、ロームブロック(φ１cm)やや多含、粒子細
14　黄褐色土　しまりやや強、粘性やや弱、ローム粒、ロームブロック(φ１cm)やや多含、粒子細
15　茶褐色土　しまり、粘性やや弱、黄燈色スコリア、ローム粒微量含、粒子細
16　暗褐色土　しまりやや強、粘性弱、ローム少量含、粒子細

第63図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡平面図

第16号住居跡（第63・64図・図版23）

［位置］ＣⅢ－ｈ8・ｈ9、ｉ8・ｉ9、ｊ9グリットに位置する。北側約１／３は、調査区外にかかり未調査。

［形状］長径（7.3m）、短径（4.3m）で、方形を呈するものと推定される。壁際には、幅40cm程の段差が確認されており、土層堆積状態から判断して２軒の住居の重複と考えられる。

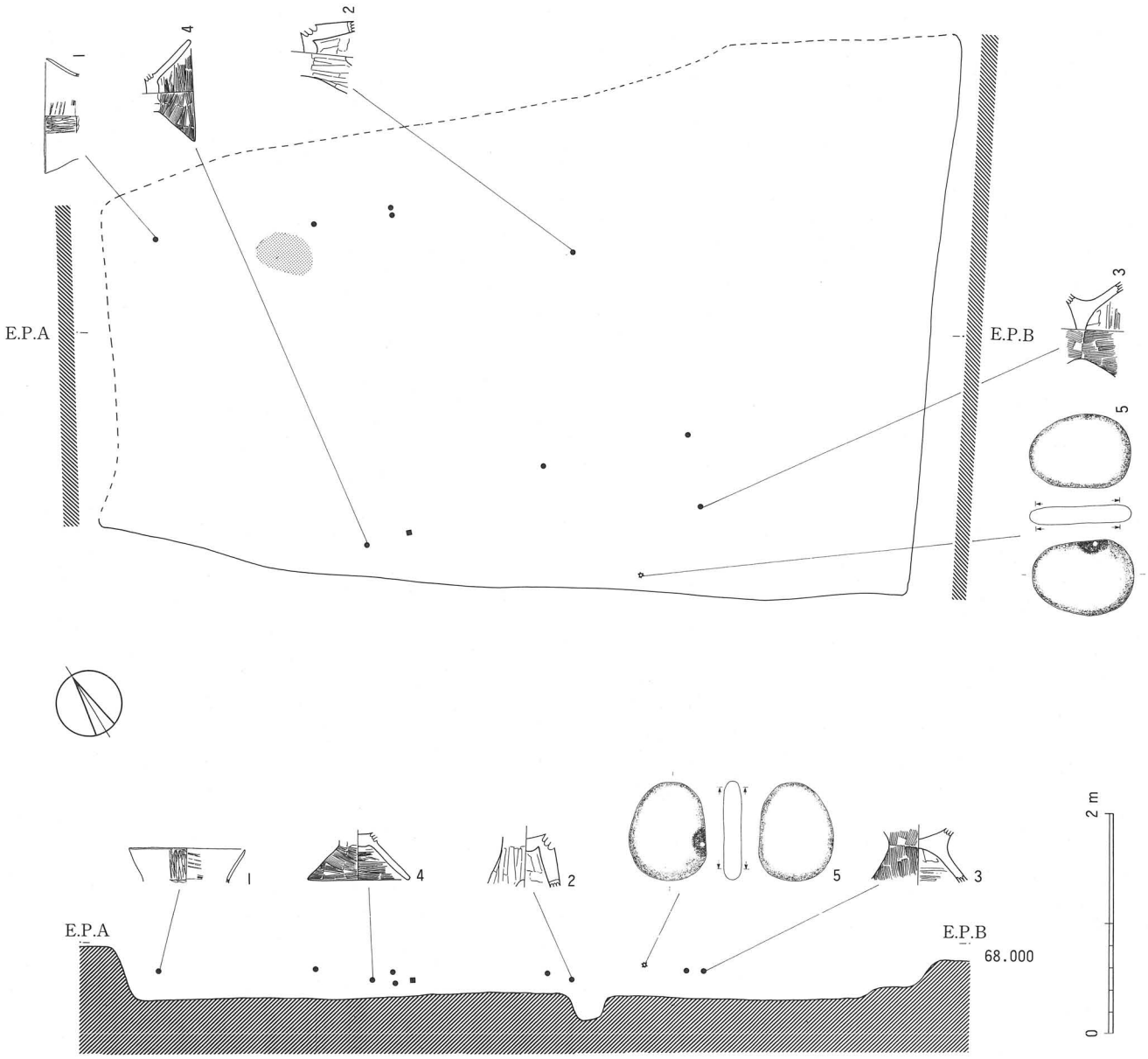
［覆土］16層に分層される。１・２・５・６・９・10・15層が新住居の覆土、３・４・11～14・16層が旧住居の覆土。

［柱穴］柱穴は２口確認されている。Ｐ1－23.2cm、Ｐ2－27.5cmを測る。Ｐ1は、新住居跡に伴なう。

［炉］中央やや北寄りに、長径50cm程の範囲で被熱で硬化した床面が確認されている。確認レベルより判断して、旧住居跡に伴なうものと考えられる。掘り込みは確認されてい。

［遺物出土状態］旧住居覆土中には遺物は含まれておらず、新住居の床面直上より、遺物片が少量出土している。使用可能な状態での出土は無く、住居廃絶直後に廃棄されたものと考えられる。

［遺物］（第65図・図版45）遺物は少なく、土器103点、石皿１点が出土している。



第64図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡遺物分布図

１は、坩の口縁部。頚部より直線的に開く。器面調整は、外面ヘラミガキ、内面ナデが施される。２は、高坏の脚部。透孔が４箇所穿たれている。３・４は、台付甕の台部。５は、床面より24cm程浮いた状態で出土した完形の石皿。石質は、閃緑岩。

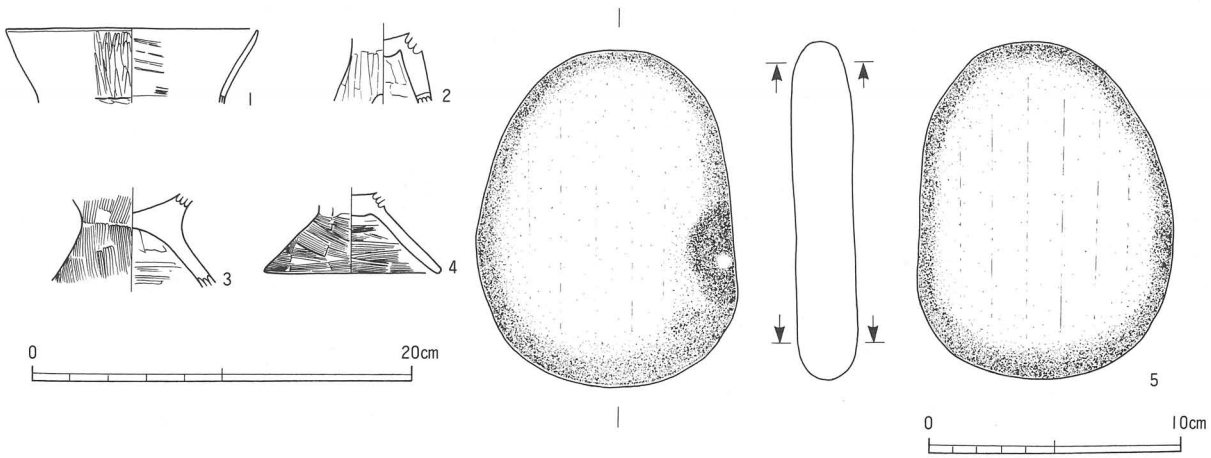
［時期］床面および覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第26表　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	坩	13.3	4.0		WB	do	a	30%	
2	高　坏		2.8		WB	do	a	90%	孔４個
3	台付甕		4.5		SW	do	b	80%	
4	台付甕		4.0	9.3	SW	do	b	60%	

第27表　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
5	床上24cm	石皿	176	134	28	1,000	Se	a	



第65図　姥ヶ沢遺跡第16号住居跡出土遺物

第18Ａ号住居跡（第66・67図・図版24・25）

［位置］ＣⅢ－ｌ10・ｌ11、ｍ10・ｍ11、ｎ10・ｎ11グリットに位置する。南側１/２は調査区外にかかり未調査。

［形状］長径7.2m、短径（3.1m）の方形を呈する。壁高は、東側で30.2cm、西側で30.8cm、北側で25.6cmを測る。壁際には、幅16cm、深さ10cmの周溝が確認されている。

［覆土］14層に分層される。覆土下層に多量の焼土・炭化材を含む。

［柱穴］柱穴は３口確認されている。Ｐ1―14.8cm、Ｐ2―57.1cm、Ｐ3―15.5cmを測る。

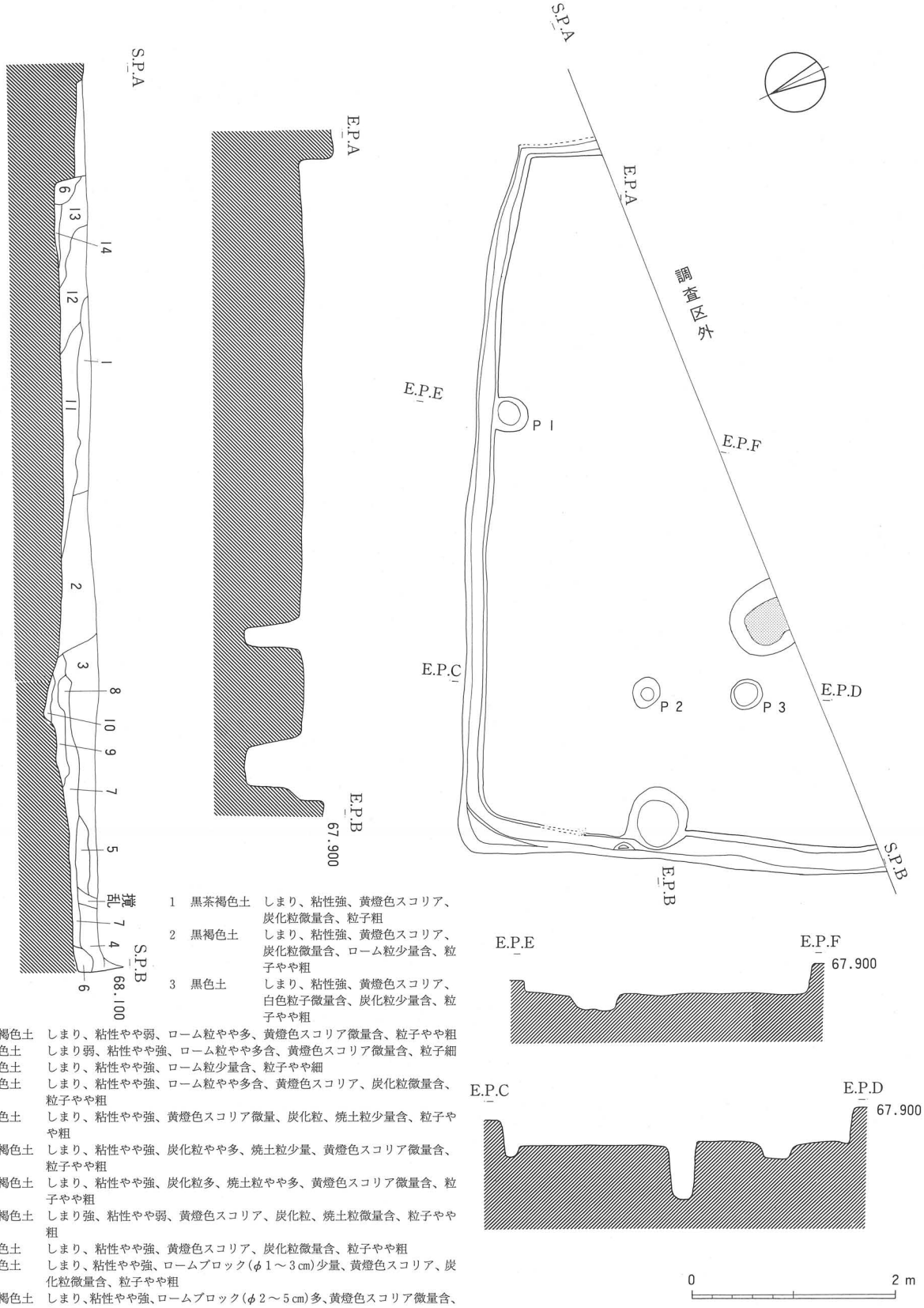
［炉］中央やや北寄りに、径70cm、深さ10cm程の地床炉が確認されている。炉底面は、被熱で硬化している。

［遺物出土状態］床面直上より、30cm～１m程の長さの炭化材が多量に出土している。覆土下層には、多量の焼土・炭化粒が出土しており、本住居跡は焼失住居と考えられる。６・10の鉢、８の小形土器は床面に接した状態で出土している。２の台付甕は床面からやや浮いた状態で出土しており、住居の廃絶後しばらくして投棄された可能性が考えられる。３の小形台付甕は床面からやや浮いた出土状態を示すが、あるいは、壁面上に置かれていたものが住居の焼失に伴ない転げ落ちた可能性もある。

［遺物］（第68図・図版45）遺物は多く、土器953点、磨石１点、棒状礫器２点が出土している。

１は、底部付近を欠損する甕。口縁部は直線的に

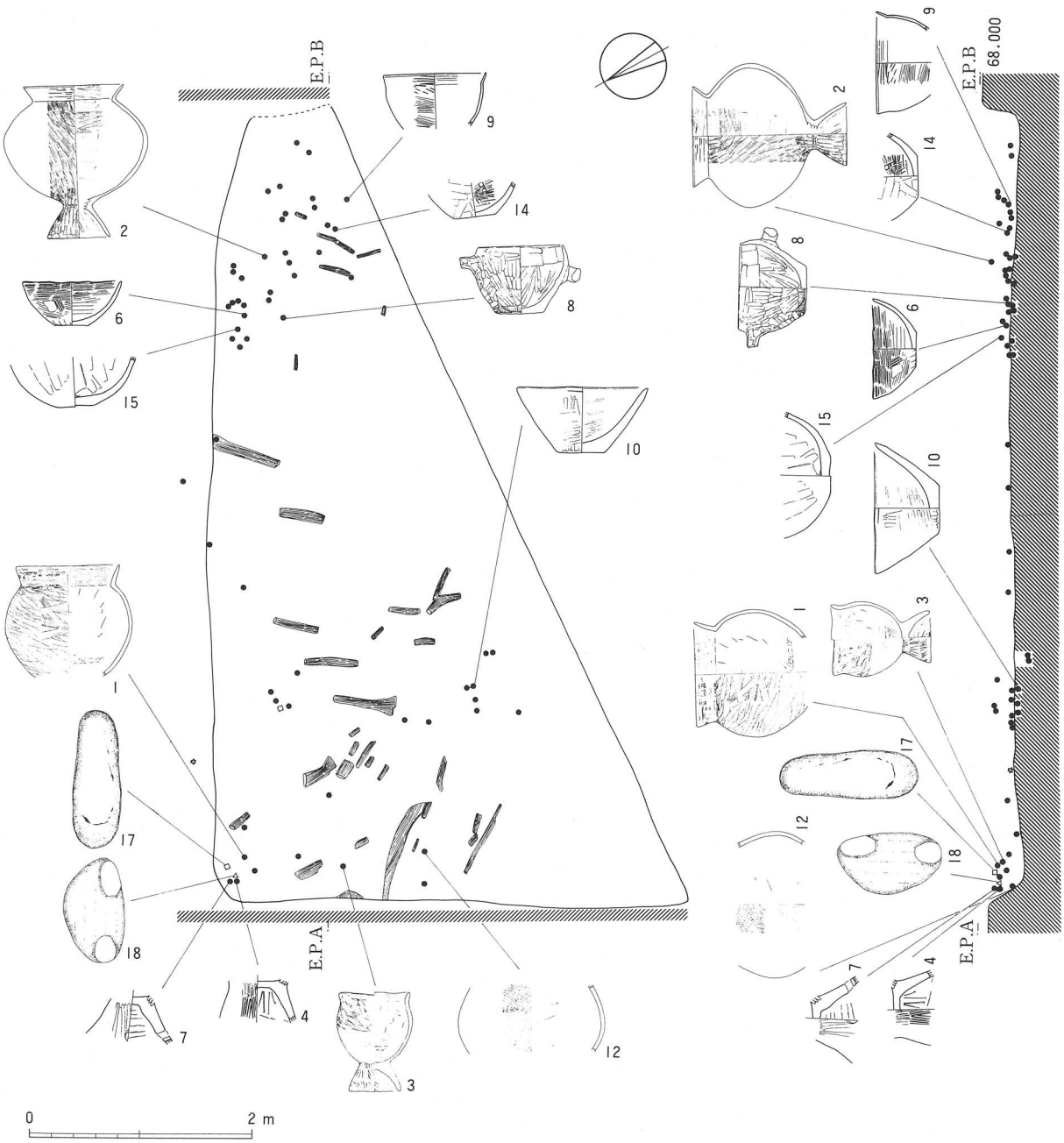
開き、球形の体部を呈する。体部中位に最大径がくる。器面調整は、口縁部内外面ハケメ後ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラナデが施される。２は、約１/２残存する台付甕。体部がやや潰れた球形を呈し、上位に最大径がくる。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面および体部外面および内面上



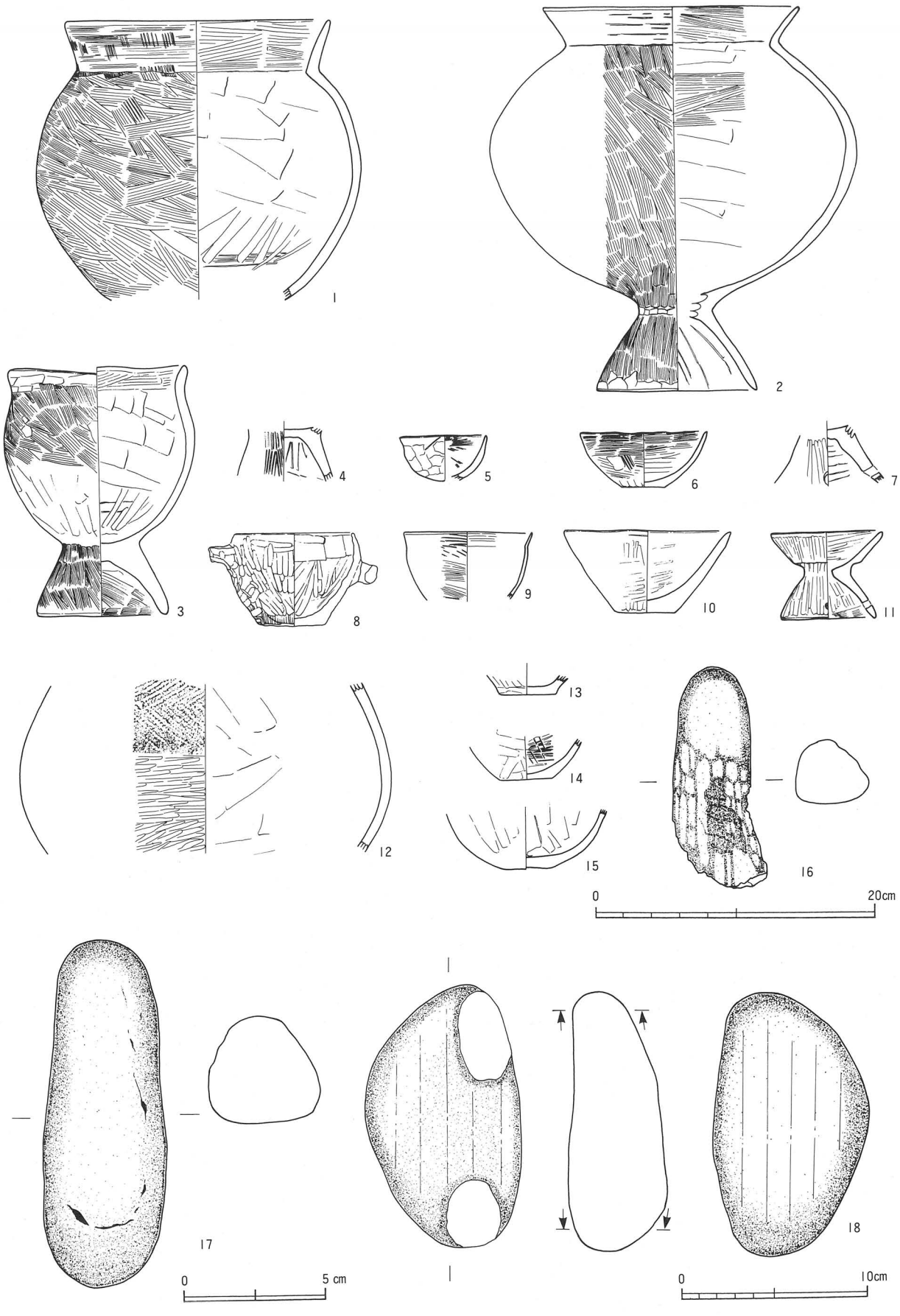
1　黒茶褐色土　しまり、粘性強、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、粒子粗
2　黒褐色土　しまり、粘性強、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、ローム粒少量含、粒子やや粗
3　黒色土　しまり、粘性強、黄燈色スコリア、白色粒子微量含、炭化粒少量含、粒子やや粗
4　黄茶褐色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒やや多、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
5　黄褐色土　しまり弱、粘性やや強、ローム粒やや多含、黄燈色スコリア微量含、粒子細
6　茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子やや細
7　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒やや多含、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、粒子やや粗
8　暗褐色土　しまり、粘性やや強、黄燈色スコリア微量、炭化粒、焼土粒少量含、粒子やや粗
9　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒やや多、焼土粒少量、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
10　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒多、焼土粒やや多、黄燈色スコリア微量含、粒子やや粗
11　暗黄褐色土　しまり強、粘性やや弱、黄燈色スコリア、炭化粒、焼土粒微量含、粒子やや粗
12　黄褐色土　しまり、粘性やや強、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、粒子やや粗
13　暗褐色土　しまり、粘性やや強、ロームブロック(φ１～３cm)少量、黄燈色スコリア、炭化粒微量含、粒子やや粗
14　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ロームブロック(φ２～５cm)多、黄燈色スコリア微量含、粒子粗

第66図　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡平面図

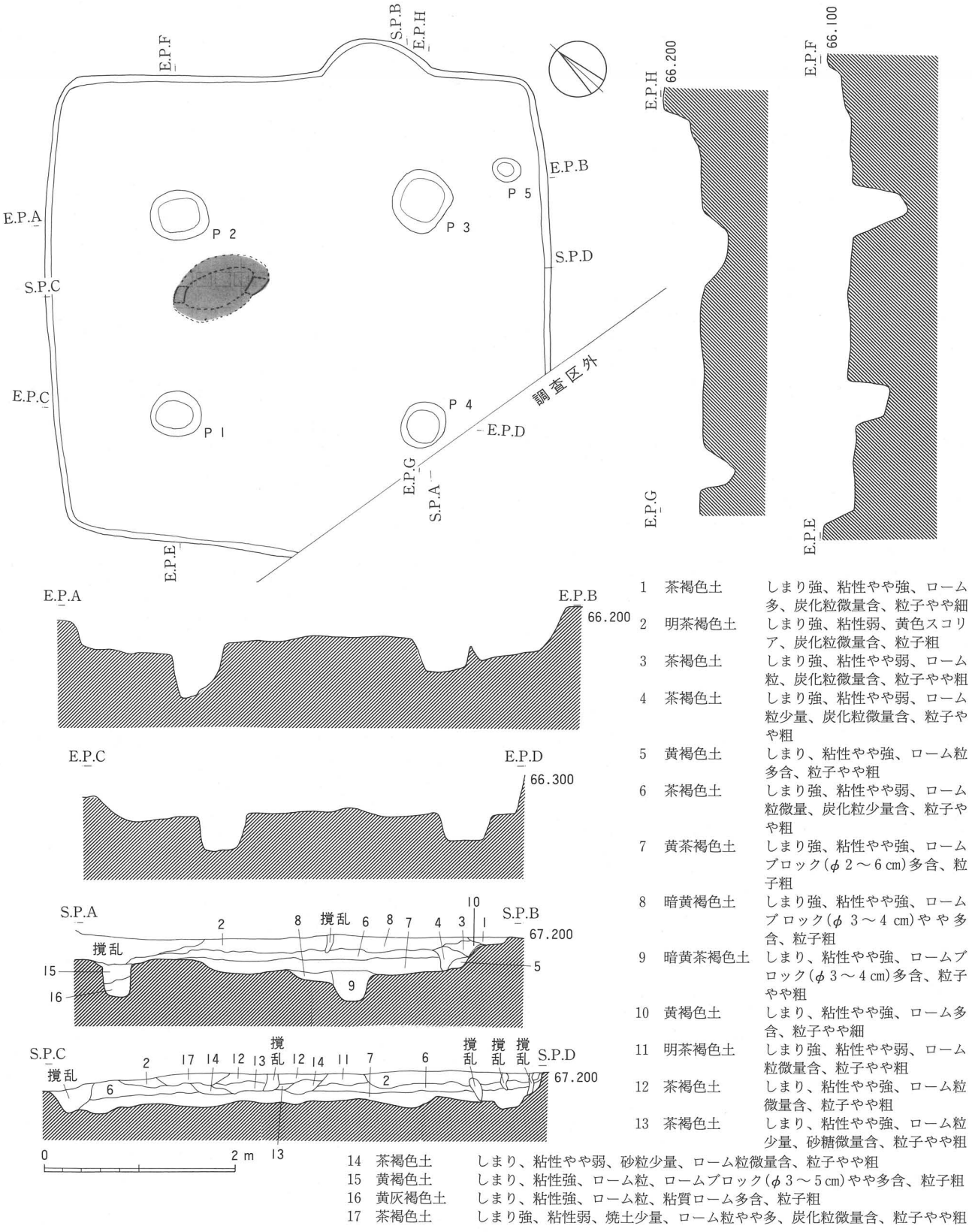
半ハケメ、体部内面下半ヘラナデが施される。3は、小形の台付甕。体部の張り出しが弱く長胴化している。口縁部は緩やかに外反する。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面および口縁部内面ハケメ、体部内面ヘラナデを施す。体部外面下半は、ヘラ状工具により丁寧にハケメがナデ消されている。5・6・8～10は、小形の鉢形土器。5は、体部外面に指押さえの痕跡を残す。9は薄手の作りで、やや膨らむ体部と短く開く口縁部を持つ。10は、底部よりほぼ直線的に開く器形を呈する。器面調整は粗いヘラナデが施される。8は、孔の開いた把手が2個付く。器面調整は、内外面ともハケメ後ヘラケズリが施される。底面にハケメを残す。7は、高坏の脚部。透孔が3箇所穿たれている。器面調整は、外面ヘラケズリ、内面ハケメが施される。11は、小形の器台。下端に稜をもって立上がる器受部をもつ。脚部下半には透孔が穿たれている。器面調整は、外面ヘラミガキ、内面ナデが施される。12は、球形を呈する壺形土器の体部。上半は0段多条単節LRの縄文が羽状施文されており、下面はヘラミガキが施されている。



第67図　姥ヶ沢遺跡第18A号住居跡遺物分布図



第68図　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡出土遺物



1　茶褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム多、炭化粒微量含、粒子やや細
2　明茶褐色土　しまり強、粘性弱、黄色スコリア、炭化粒微量含、粒子粗
3　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒、炭化粒微量含、粒子やや粗
4　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒少量、炭化粒微量含、粒子やや粗
5　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多含、粒子やや粗
6　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒微量、炭化粒少量含、粒子やや粗
7　黄茶褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームブロック(φ２～６cm)多含、粒子粗
8　暗黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームブロック(φ３～４cm)やや多含、粒子粗
9　暗黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ロームブロック(φ３～４cm)多含、粒子やや粗
10　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム多含、粒子やや細
11　明茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒微量含、粒子やや粗
12　茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒微量含、粒子やや粗
13　茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量、砂糖微量含、粒子やや粗
14　茶褐色土　しまり、粘性やや弱、砂粒少量、ローム粒微量含、粒子やや粗
15　黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック(φ３～５cm)やや多含、粒子粗
16　黄灰褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、粘質ローム多含、粒子粗
17　茶褐色土　しまり強、粘性弱、焼土少量、ローム粒やや多、炭化粒微量含、粒子やや粗

第69図　姥ヶ沢遺跡第18Ｂ号住居跡平面図

13・14は甕形土器の底部。15は、坩の体部下半と考えられる。16・17は、棒状礫器。石質は、16が緑泥片岩、17が砂岩。18は、砂岩製の磨石。両面に磨面が認められる。

［時期］床面に残された遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第18Ｂ号住居跡（第69・70図・図版26・27）

［位置］ＢⅡ—r1・r2、s1・s2グリットに位置する。南西のコーナーの一部が、調査区外にかかり未調査。北東に第19号住居跡が位置している。

［形状］長径5.3m、短径5.1mの方形を呈する。壁高は、東側で21.3cm、西側で27.3cm、南側で35.7cm、北側で27.8cmを測る。北辺の壁面が一部弧状に突出している。

［覆土］17層に分層され、自然堆積を示す。

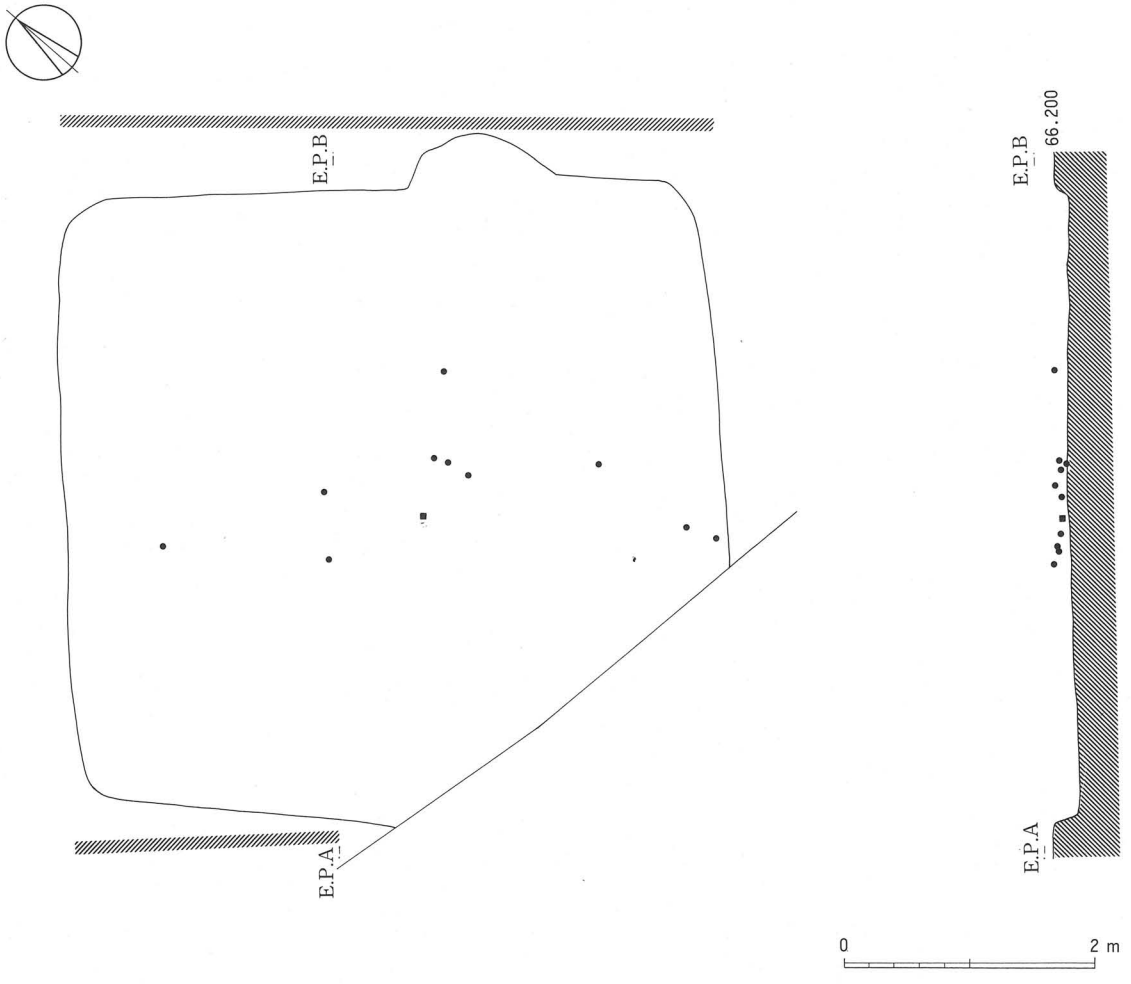
［柱穴］柱穴は５口確認されている。Ｐ1～Ｐ4は主柱穴。Ｐ1—35.1cm、Ｐ2—58.1cm、Ｐ3—41.4cm、Ｐ4—40.7cm、Ｐ5—27.6cmを測る。Ｐ5は、出入り口施設に関連するピットの可能性がある。

［炉］Ｐ1とＰ2の間に、長径106cm、深さ12cmを測る地床炉が確認されている。炉底面は、被熱で硬化している。

［遺物出土状態］住居の中央東西ラインに集中して出土している。床面に使用可能な状態で検出された遺物は無く、いづれの破片も小片である。

［遺物］遺物は僅かで、土器片10点が出土しているにすぎない。いづれも小片のため図示するに至っていない。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。



第70図　姥ヶ沢遺跡第18Ｂ号住居跡遺物分布図

第28表　姥ヶ沢遺跡第18Ａ号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	18.7	20.0		WBS	rb	a	70%	
2	台付甕	18.2	27.5	18.2	BWS	rb	b	50%	
3	台付甕	12.8	17.8	9.5	SB	do	b	70%	
4	台付甕		3.4		SWB	do	c	40%	
5		6.2	3.2		WS	do	b	40%	
6	鉢	8.6	3.8	2.8	RBS	do	a	90%	
7	高　坏		3.3		SW	dg	b	70%	孔３個
8	鉢	6.5	5.0	3.7	BS	do	b	90%	把手付
9	鉢	9.2	4.8		SW	do	a	20%	
10	鉢	11.0	7.0	4.5	SWB	do	b	50%	
11	器台	7.8	6.2	6.8	BS	do	b	50%	孔１個
12	壺		12.0		SWR	do	b	30%	縄文羽状施文
13	甕		1.3	4.0	SW	gb	b	40%	
14	甕		2.7	3.6	SBW	do	a	40%	
15	坩		4.1	3.4	SBW	do	b	40%	

第29表　姥ヶ沢遺跡第18号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
16	覆土上層	棒状礫器3b	(100)	53	41	457	Rh	b	
17	床上24cm	棒状礫器3b	127	42	47	279	S	a	
18	床上20cm	磨石2b	144	84	47	700	S	a	

第19号住居跡（第71・72図・図版27）

［位置］ＢⅡ—s20、t20、ＢⅢ—s1、t1グリットに位置する。南西に第18b号住居跡が位置している。北西方向より浅い埋没谷が侵入しており、本住居跡がその谷頭となっている。

［形状］長径4.6m、短径4.2mの方形を呈する。壁高は、東側で27.9cm、西側で51.5cm、南側で36.2cm、北側で40.5cmを測る。

［覆土］11層に分層され、自然堆積を示す。８～11層に、焼土・炭化粒子を多量に含む層があり、住居が埋没する過程の窪地での、火を使用した土地利用行為が行われた可能性が窺える。

［柱穴］柱穴は２口確認されている。Ｐ1—33.8cm、Ｐ2—30.9cmを測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］いづれの遺物も床面および壁面に接した状態で出土している。遺物の器としての残存率も高く、住居廃絶に当たって、一括して遺棄されたものと推測される。２の小形台付甕は、壁面途中に接した状態で出土しており、住居コーナー壁上に置かれていたものが、転げ落ちた状態を示している可能性が考えられる。８の特殊器台は、脚部を欠損するが、床面に接して逆位で検出されている。

［遺物］（第73図・図版46）遺物は少なく、土器92点、磨石１点、棒状礫器１点が出土している。

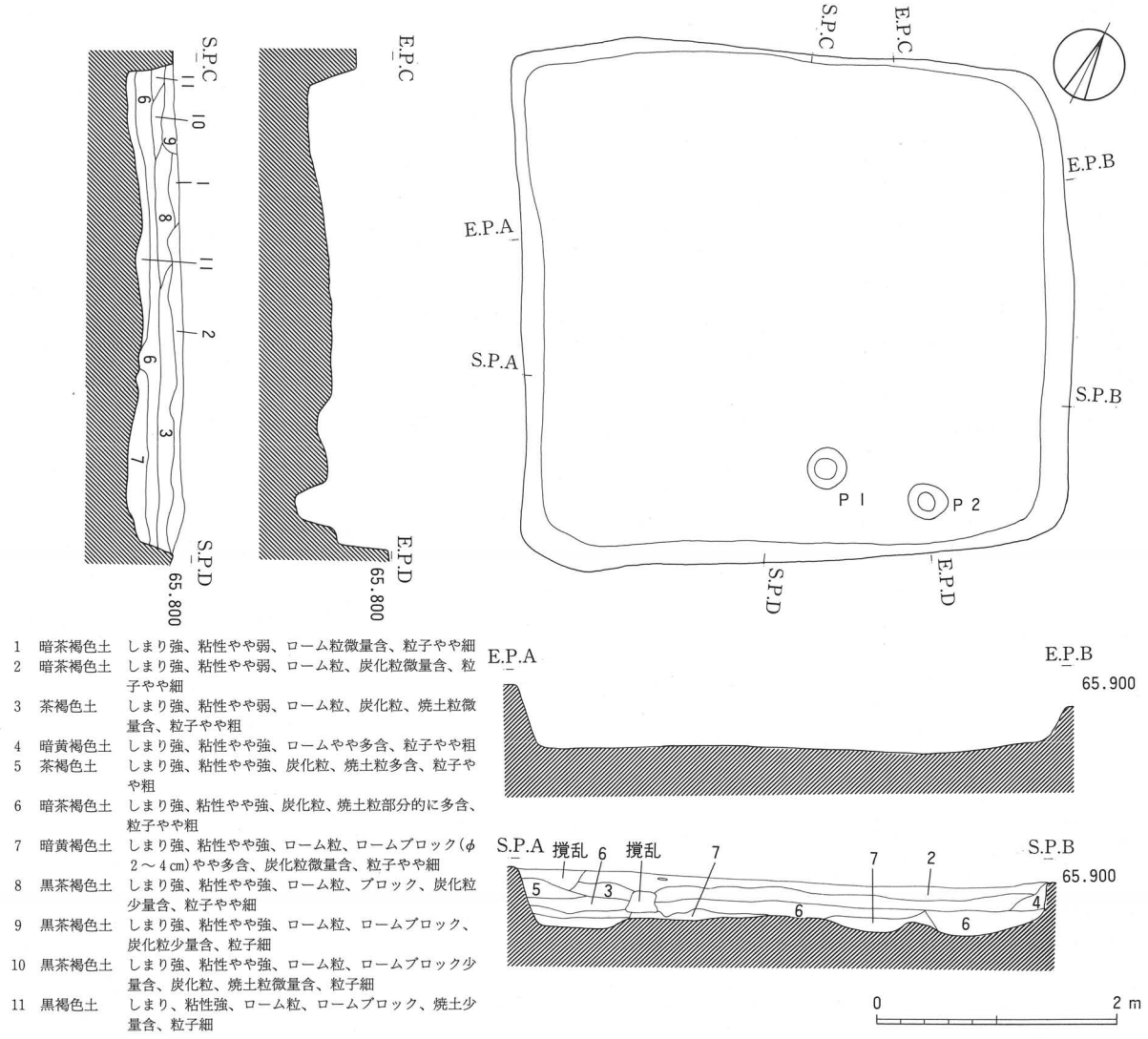
１は、ほぼ完形の甕形土器。体部の張りはやや弱いが球形を呈し、上半に最大径がくる。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面ハケメ後ヘラナデ、体部内面上半ハケメ、下半ヘラナデが施される。ハケメは粗く、櫛目状。２は、ほぼ完形の小形台付甕。体部の膨らみは弱く、長胴形を呈し、口縁部に最大径がくる。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面および体部外面ハケメ、体部内面ヘラナデが施される。３は、ほぼ完形の台付甕。体部は球形を呈し、上半に最大径がくる。器面調整は、口縁部外面ヨコナデ、体部外面および口縁部内面ハケメ、体部内面ヘラナデが施される。４は、脚部を欠損する台付甕。体部は球形を呈し、中位に最大径がくる。器面調整は、口縁部ヨコナデ、体部ハケメを施す。体部内面のハケメは粗く、櫛目状を呈する。５は、壺形土器の口縁部。複合口縁を呈する。器面調整は、内外面とも丁寧なヘラミガキが施される。６は、台付甕の台部。７は、高坏の脚部。透孔は３箇所穿たれている。８は、異形の器台形土器で、脚部の裾を欠損する。口縁部は強く外反するが、長さが一定でないため、全体は大きく歪んでいる。中心の貫通孔は、径1.2cm程である。脚部の透孔は３箇所に穿たれている。器面調整は、内外面とも粗いヘラミガキが

施されている。９は、棒状礫器。石質は緑泥片岩。10は、磨石。石質は閃緑岩で、両面に磨面が認められる。

［時期］床面に残された遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第30表　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	14.8	15.8	5.5	WS	gb	c	90%	
2	台付甕	10.5	12.7	6.7	SWB	do	b	90%	
3	台付甕	13.5	20.3	6.8	WS	rb	b	90%	
4	台付甕	13.3	15.3		WB	rb	a	50%	
5	壺	(16.0)	4.0		BW	do	a	10%	
6	台付甕		6.0	8.2	WB	rb	b	80%	
7	高　坏		5.2		SWB	do	b	60%	孔３個
8	器台	19.0	10.9		SWB	do	b	80%	孔３個

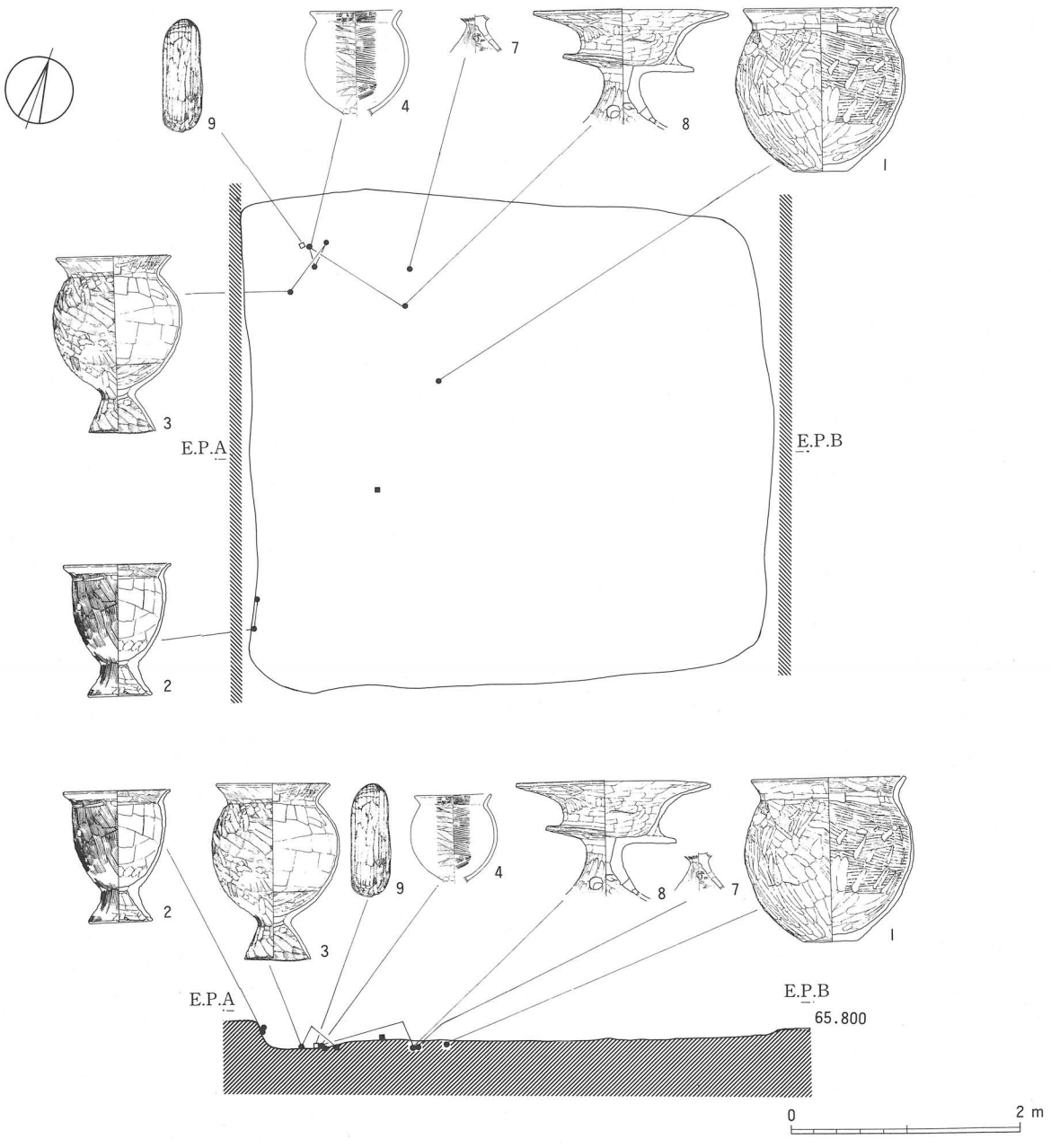


1　暗茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒微量含、粒子やや細
2　暗茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒、炭化粒微量含、粒子やや細
3　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒、炭化粒、焼土粒微量含、粒子やや粗
4　暗黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ロームやや多含、粒子やや粗
5　茶褐色土　しまり強、粘性やや強、炭化粒、焼土粒多含、粒子やや粗
6　暗茶褐色土　しまり強、粘性やや強、炭化粒、焼土粒部分的に多含、粒子やや粗
7　暗黄褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒、ロームブロック(φ２～４cm)やや多含、炭化粒微量含、粒子やや細
8　黒茶褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒、ブロック、炭化粒少量含、粒子やや細
9　黒茶褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒、ロームブロック、炭化粒少量含、粒子細
10　黒茶褐色土　しまり強、粘性やや強、ローム粒、ロームブロック少量含、炭化粒、焼土粒微量含、粒子細
11　黒褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック、焼土少量含、粒子細

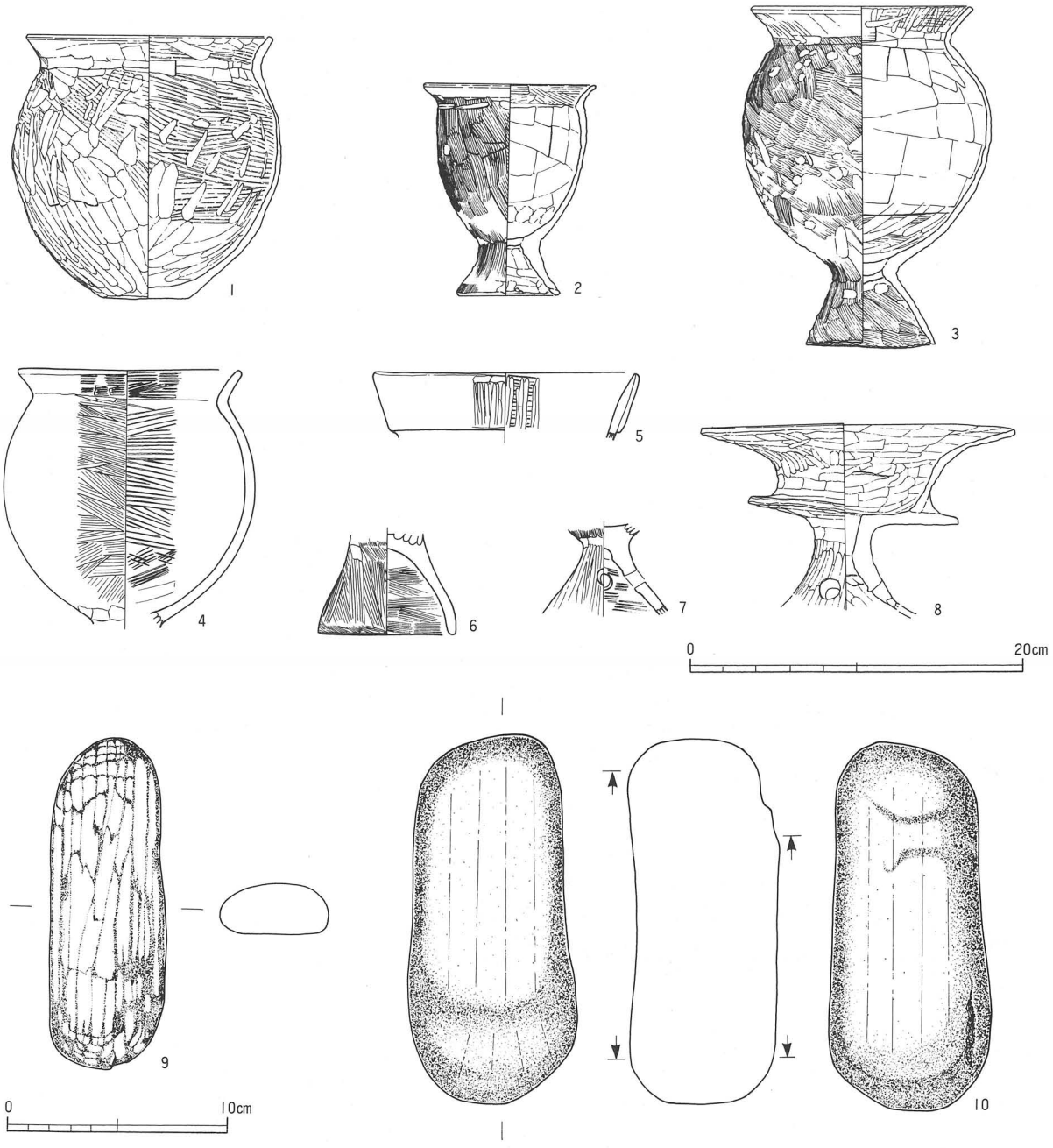
第71図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡平面図

第31表　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土石器計測表

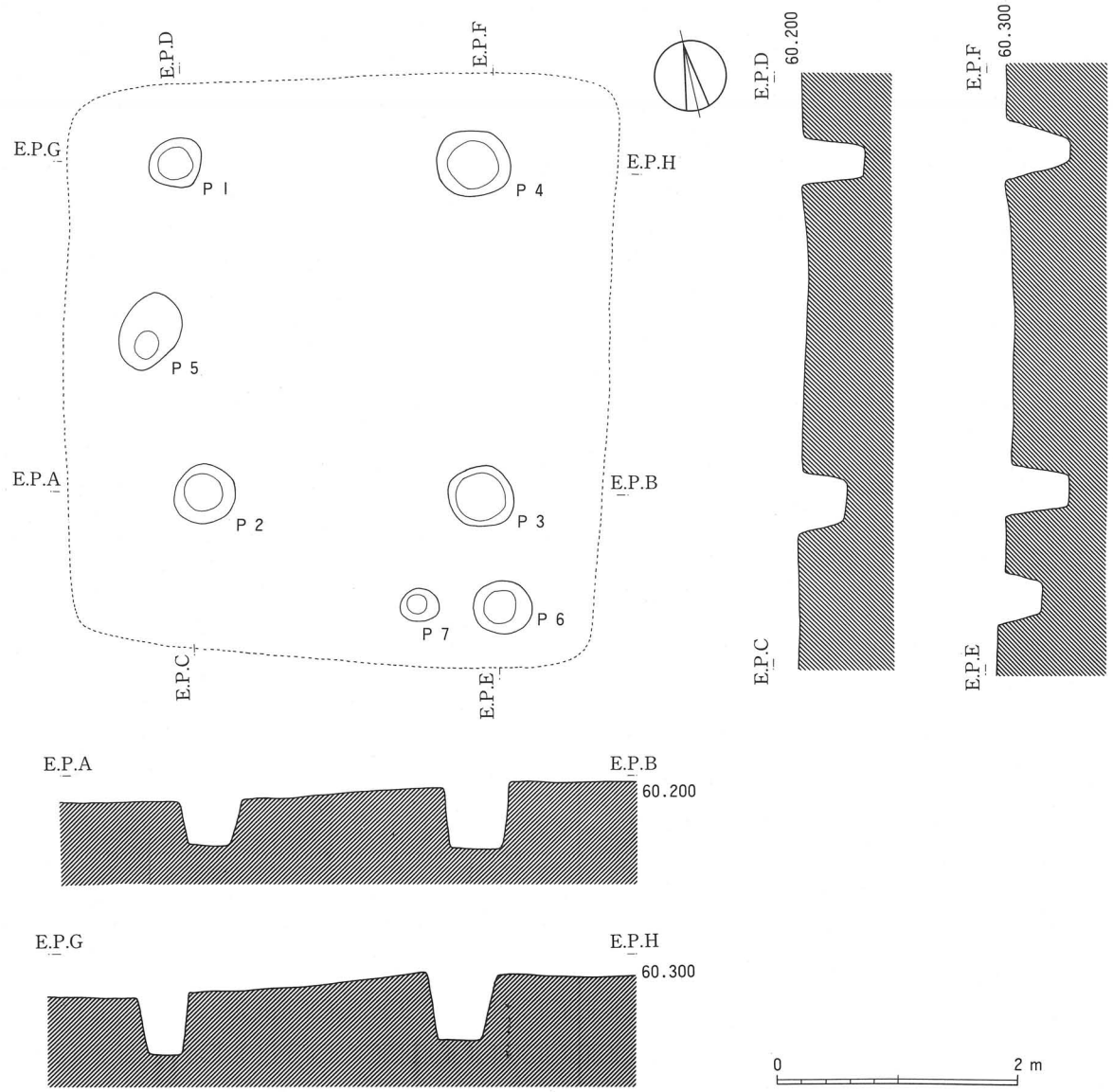
番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
9	床面直上	棒状礫器3a	198	67	28	675	Rh	a	
10	床面直上	磨石	160	73	61	1,100	Se	a	研磨４



第72図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡遺物分布図



第73図　姥ヶ沢遺跡第19号住居跡出土遺物



第74図　姥ヶ沢遺跡第20号住居跡平面図

第20号住居跡（第74図・図版28）

［位置］ＣⅡ―a15・a16、b15グリットに位置する。北側に第21号住居跡が位置している。

［形状］壁は確認する事ができなかったが、柱穴の範囲から、長径4.8ｍほどの方形を呈するものと推定される。

［柱穴］柱穴は７口確認されている。主柱穴はＰ1～Ｐ4。Ｐ1―57.4cm、Ｐ2―38.7cm、Ｐ3―52.8cm、Ｐ4―57.8cm、Ｐ5―37.5cm、Ｐ6―33.5cm、Ｐ7―35.2cmを測る。Ｐ6・７は、出入り口施設に関連するピットの可能性がある。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］住居覆土上層より土器片113点が出土している。住居床面より使用可能な状態で出土した遺物は無く、Ｐ4覆土中より、図示した遺物２点が出土している。

［遺物］（第75図・図版46）土器片113点が出土している。

１は、高坏の脚部。外面は赤彩が認められる。器面調整は、外面ヘラミガキ、内面ハケメが施される。２は、器台の脚部。裾部が大きく広がる。透孔は３箇所に穿たれている。器面調整は、外面ヘラミガキ、内面ハケメ後ヘラナデが施される。

［時期］ピット内より出土した遺物および覆土中より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第32表．姥ヶ沢遺跡第20号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	高　坏		5.0		BW	do	a	70%	表面赤彩
2	器台		7.0	15.0	BW	do	a	70%	孔３個

第21号住居跡（第76図・図版28）

［位置］ＣⅡ－ｂ13・ｂ14グリットに位置する。南側に第20号住居跡が位置している。

［形状］壁面は、東西面の一部のみ確認している。柱穴の配置から、長径6.2ｍの方形を呈するものと推測される。

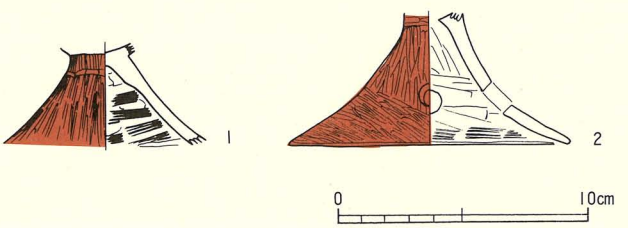
［柱穴］柱穴は、10口確認されている。Ｐ1―37.0cm、Ｐ2―36.3cm、Ｐ3―43.8cm、Ｐ4―40.0cm、Ｐ5―20.5cm、Ｐ6―49.9cm、Ｐ7―20.2cm、Ｐ8―43.3cm、Ｐ9―19.7cm、Ｐ10―15.6cmを測る。ピットの配置から、２～３度の建替えまたは、重複が推測される。

［炉］Ｐ8の西側に、長径70cm程の焼土が確認されている。地床炉と考えられるが、掘り込みは確認されず、炉底面は被熱により硬化している。

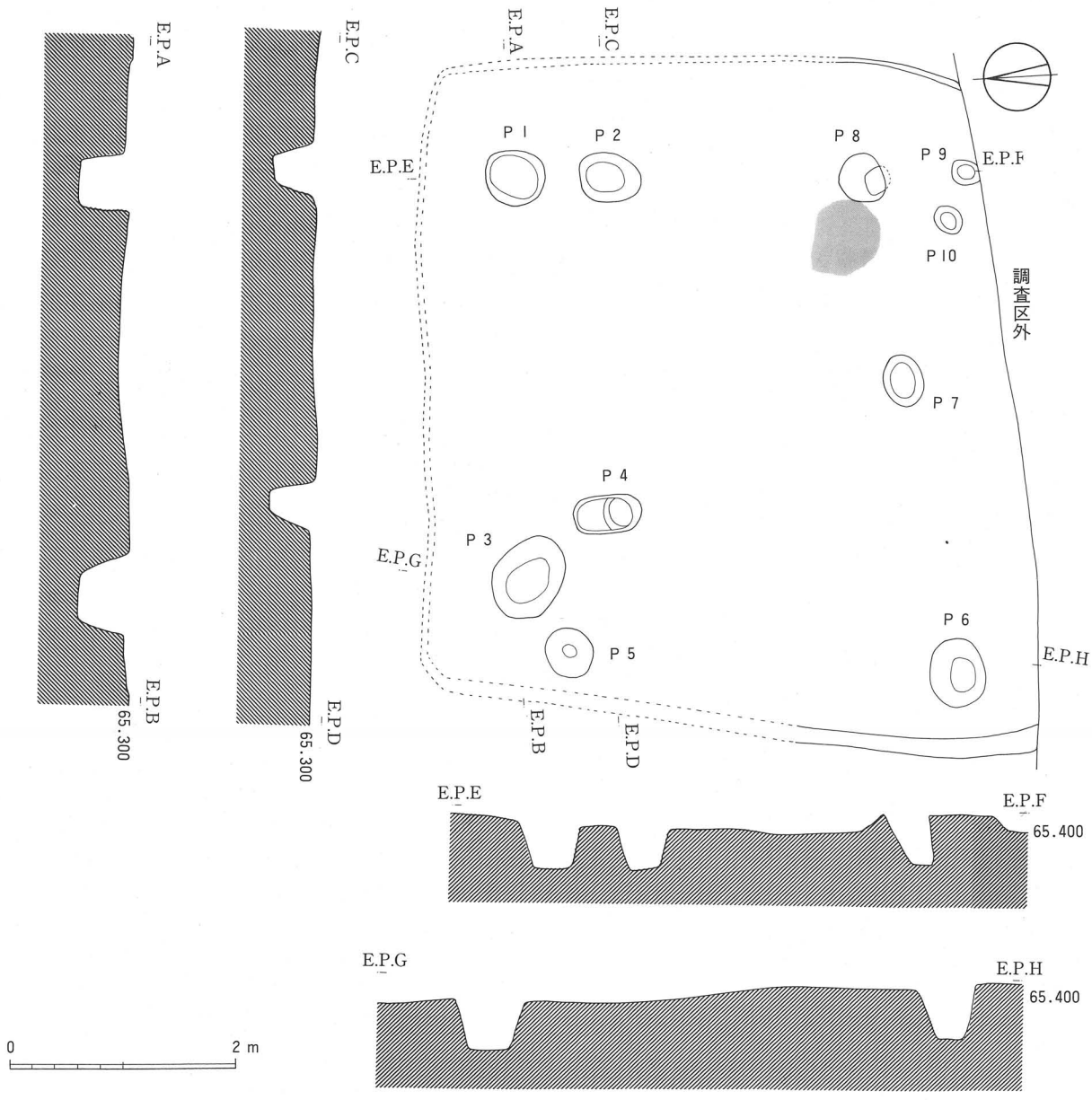
［遺物出土状態］本住居に明確に伴うと考えられる遺物の出土は無い。覆土上層より、ハケ調整の施された、土器小片が数点出土している。

［遺物］小片のため図示するに至らなかった。

［時期］覆土上層より出土した遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。　（関口・森田）



第75図　姥ヶ沢遺跡第20号住居跡出土遺物



第76図　姥ヶ沢遺跡第21号住居跡平面図

土坑（第77～85図）

本遺跡の第２調査区からは、土坑が25基確認されている。１基を除いて、いずれの土坑も円形を呈している。覆土中に含まれている少数の遺物は、いずれも弥生時代に属するものであり、覆土の状態も、炭化粒・焼土粒を含むものが多く近似している。弥生時代の住居跡の周囲に、重複することなく分布していることから、これらの土坑は弥生時代住居跡に付帯する屋外施設と推測される。川本町焼谷遺跡（1991年村松）、白草遺跡（1992年礒崎）等の周辺の集落跡においても、住居に近接して土坑が検出されており、本遺跡と同様の在り方を呈している。

第１号土坑（第77図）

［位置］ＢⅣ—m19グリットに位置する。

［形状］Ⅰ—Ａ。直径186cm、深さ26cmを測る。

［覆土］２層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に、炭化粒・焼土粒を含む。

［遺物］（第83図１）覆土中より土器23点が出土している。１は、甕形土器の口縁部。LRの縄文が施文されている。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第２号土坑（第77図）

［位置］ＢⅣ—l8グリットに位置する。

［形状］Ⅰ—Ａ。直径202cm、深さ50cmを測る。

［遺物］（第83図２・３）覆土中より、磨石２点が出土している。２・３は磨石。２は、緩やかなレンズ状の礫を用いており、両面に擦痕をもつ。側縁には部分的に敲打痕が認められる。砂岩製。３は偏平な礫を用い、両面に擦痕をもつ。閃緑岩製。

［時期］覆土および覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第３号土坑（第77図）

［位置］ＢⅣ—m7・m8グリットに位置する。

［形状］Ⅰ—Ａ。直径212cm、深さ22cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第４号土坑（第77図）

［位置］ＢⅣ—m6グリットに位置する。

［形状］Ⅰ—Ａ。直径172cm、深さ42cmを測る。

［覆土］２層に分層される。覆土全体に、炭化粒・焼土粒を含む。

［遺物］（第83図４）覆土中より、土器18点が出土している。４は、小形の甕形土器である。口唇下ナデ調整、口縁部から体部上半にLR縄文施文、以下縦方向のミガキが施される。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第５号土坑（第78図）

［位置］ＢⅣ—n3グリットに位置する。

［形状］Ⅰ—Ａ。直径251cm、深さ49cmを測る。

［遺物］（第83図５～10）覆土中より土器11点、磨石４点、棒状礫器２点が出土している。５・８～10は磨石である。５は、凝灰岩製。８は、円形の礫を利用し、両面に擦痕をもつ。側縁の一部に敲打痕をもつ。砂岩製。９・10は、閃緑岩製。６・７は、棒状礫器である。６は片岩製、７は砂岩製。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第６号土坑（第78図）

［位置］ＢⅣ—n2グリットに位置する。

［形状］Ⅱ—Ａ。長径202cm、短径178cm、深さ49cmを測る。

［遺物］覆土中より、土器７点が出土している。

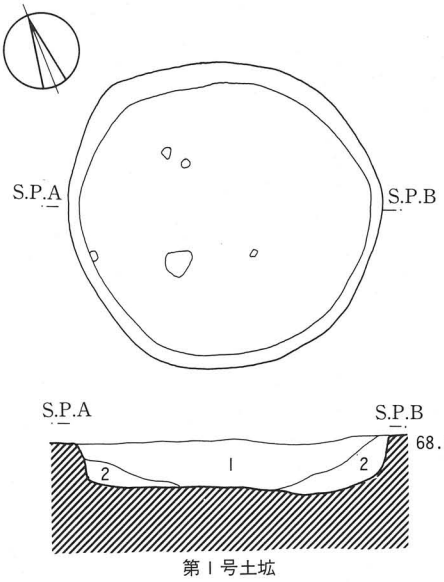
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第７号土坑（第78図）

［位置］ＢⅣ—n1グリットに位置する。

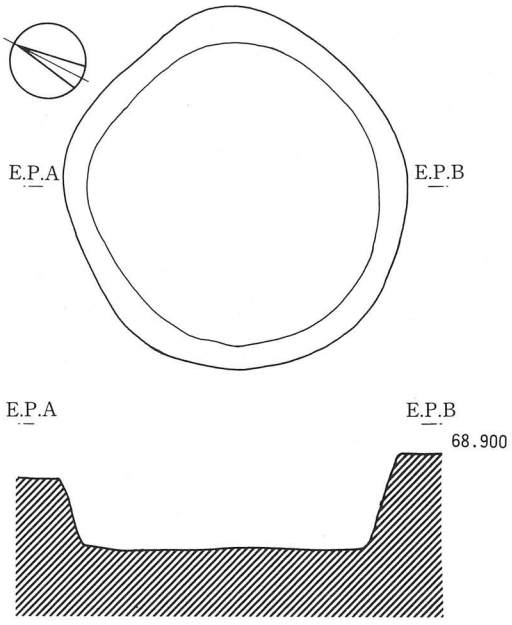
［形状］Ⅰ—Ａ。直径160cm、深さ44cmを測る。

［覆土］７層に分層され、自然堆積を示す。覆土下層に炭化粒を含む。

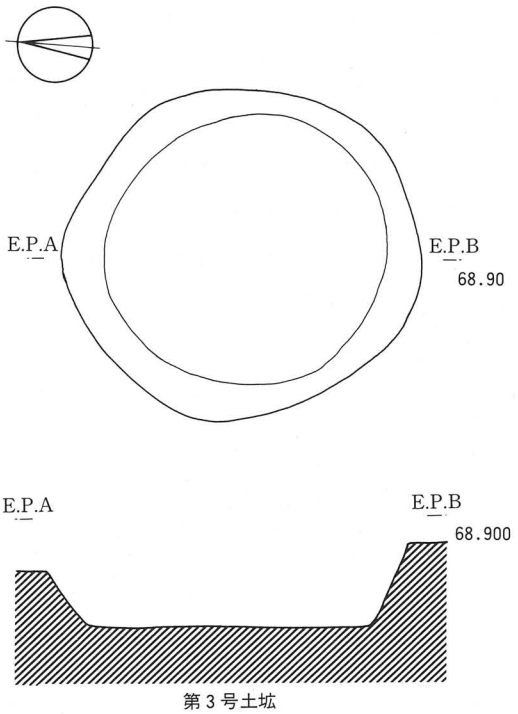


第１号土坑

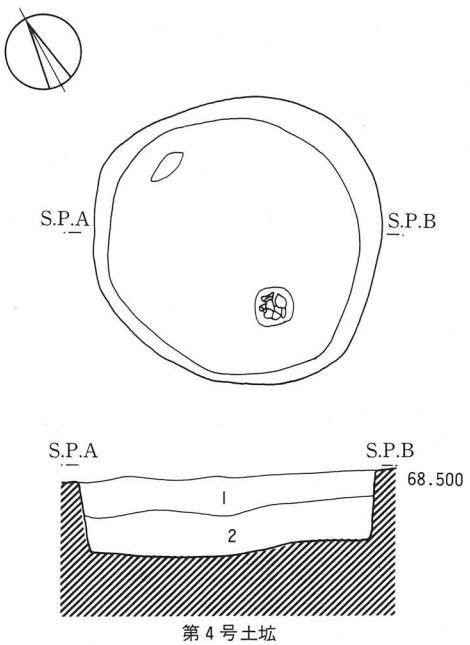
1　暗黄褐色土　しまり、粘性やや強、焼土、炭化粒微量含、粒子やや粗
2　黄褐色土　しまり、粘性強、焼土、炭化粒微量、ローム粒やや多含、粒子やや粗



第２号土坑



第３号土坑

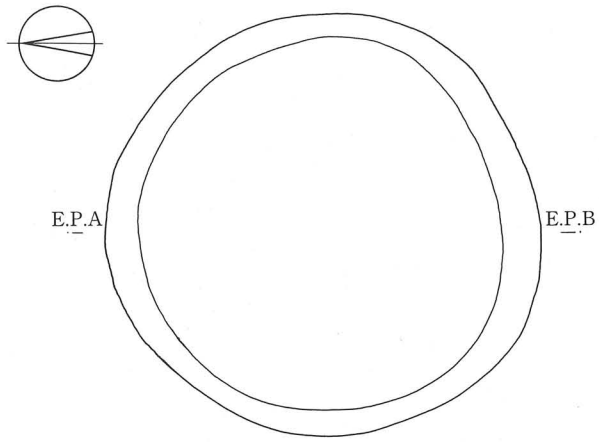


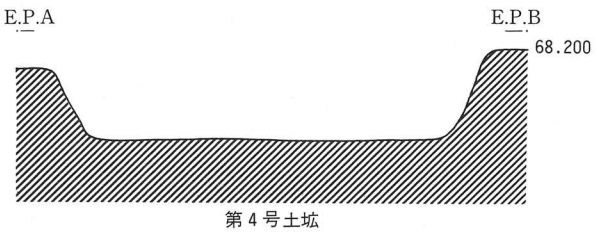
第４号土坑

1　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒、ローム粒、ロームブロック微量含、粒子粗
2　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ロームブロックやや多、炭化粒微量含、粒子粗

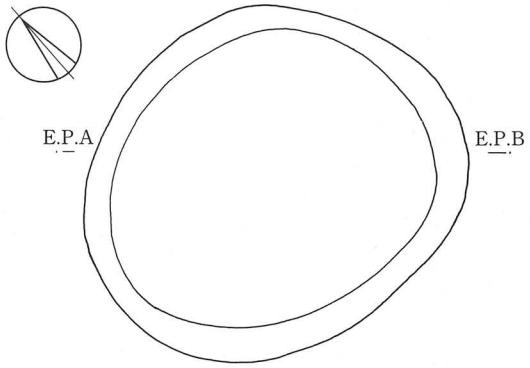


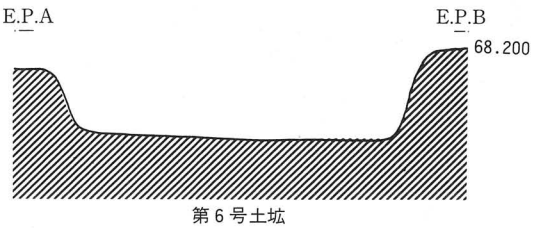
第77図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(1)



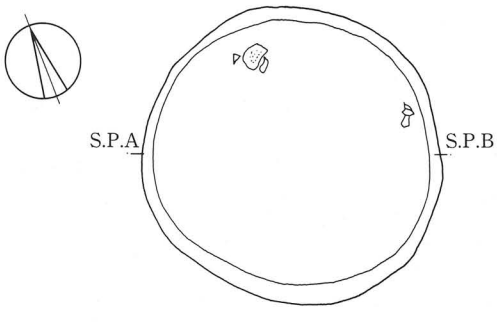


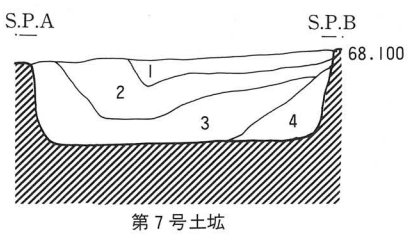
第４号土坑



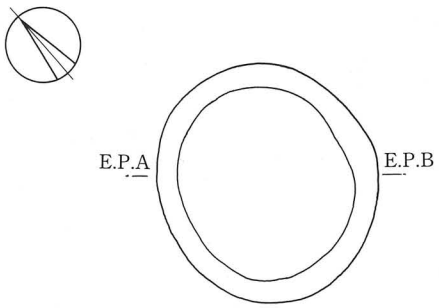


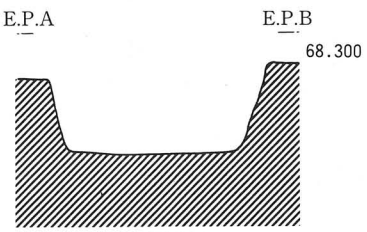
第６号土坑





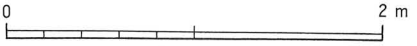
第７号土坑





第８号土坑

1　茶褐色土　　しまり強、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
2　黄褐色土　　しまり、粘性強、ロームブロックやや多量含、粒子粗
3　暗黄褐色土　しまり、粘性強、ロームブロックやや多、炭化粒微量含、粒子粗
4　黄褐色土　　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック多含、粒子粗



第78図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(2)

［遺物］（第84図11～13）覆土中より、土器20点、磨石１点が出土している。また、鉄滓14点が出土している。11・12は甕形土器である。RL縄文を施文している。13は、磨石である。偏平な礫を用い、両面に擦痕をもつ。砂岩製。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第８号土坑（第78図）

［位置］BIV—n1グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径137cm、深さ48cmを測る。

［遺物］（第84図14・15）覆土中より、土器９点、磨石１点が出土している。15は磨石である。両面に擦痕をもつ。砂岩製。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第９号土坑（第79図）

［位置］BIV—n1グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径77cm、深さ52cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第10号土坑（第79図）

［位置］BIV—n1グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径84cm、深さ23cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第11号土坑（第79図）

［位置］BIV—n1グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径169cm、深さ39cmを測る。

［遺物］（第84図16・17）覆土中より。土器２点が出土している。16・17は、甕形土器の口縁部である。RL縄文施文。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第12号土坑（第79図）

［位置］BIV—n1グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径113cm、深さ17cmを測る。

［覆土］２層に分層され、自然堆積を示す。

［遺物］（第84図18～31）覆土中より、土器76点、棒状礫器１点が出土している。18～23・25は甕形土器である。21は、口縁部から体部にRL縄文を施文。25は、口唇部に縄文施文による刻みをもつ。体部上半にRL縄文を施文し、下半はハケ状工具による横方向の調整を施す。24は、壺形土器。口縁部に輪積み痕をつまみ出した突帯を３条巡らす。頸部は無文帯で、以下LR縄文を施文している。26・27は鉢形土器。26はミニチュア土器で、体部は縦方向のミガキが施される。31は、棒状礫器。凝灰岩製。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第13号土坑（第79図）

［位置］BIII—m19・m20・n19・n20グリットに位置する。

［形状］II—Ａ。長径228cm、短径201cm、深さ34cmを測る。

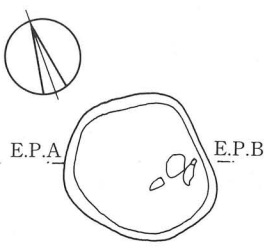
［遺物］（第85図32～40）覆土中より、土器139点、棒状礫器１点が出土している。33は、折返し状口縁にRL縄文を施文している。34は、表面にハケメ調整が施されている。薄手の丁寧なつくりで、口縁はＳ字状を呈するものと推測される。35・37は、甕形土器。37は、口縁部から体部上半にRL縄文施文。36は、壺形土器。口縁部にRL縄文を施文し、以下縦方向のミガキが施される。35～37は、第12号土坑覆土中の土器片と接合している。38は、鉢形土器。内外面横方向のミガキが施される。39は、台付甕形土器の台部。40は、棒状礫器。凝灰岩製。

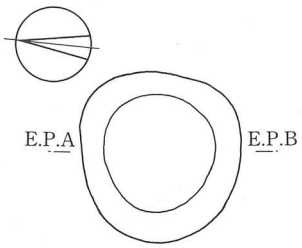
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

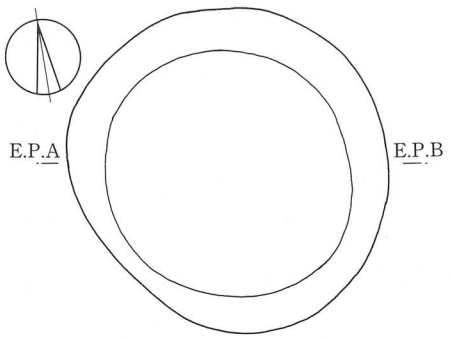
第14号土坑（第80図）

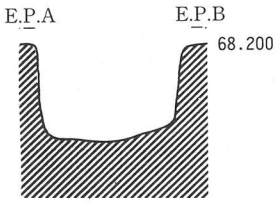
［位置］BIII—n18・n19グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径222cm、深さ30cmを測る。

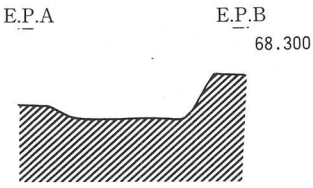








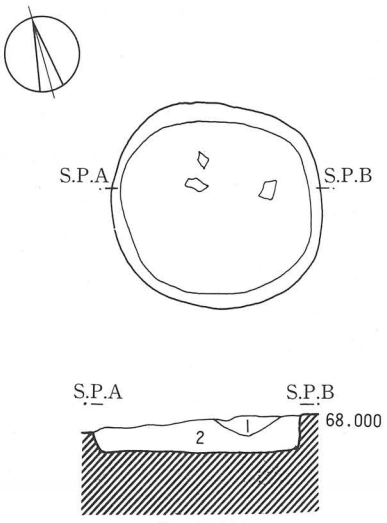
第９号土坑



第10号土坑

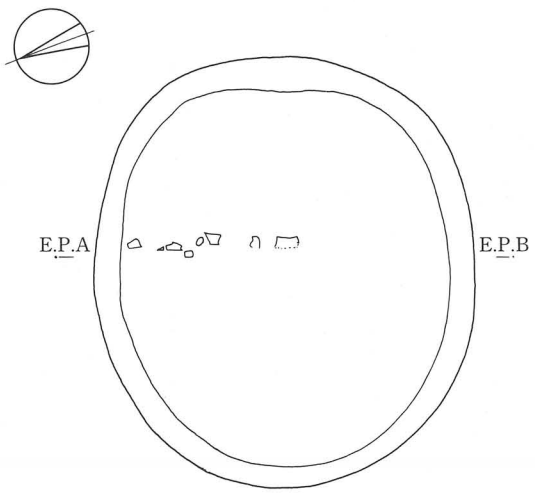


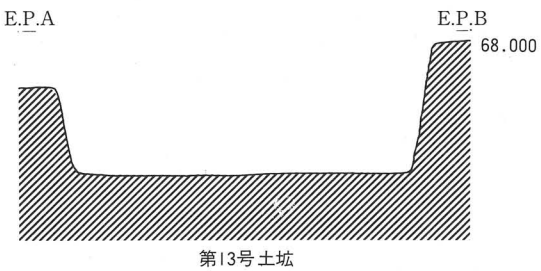
第11号土坑



第12号土坑

1　茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、ローム粒少量含、粒子やや粗
2　暗褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗





第13号土坑



第79図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(3)

［遺物］無し。
［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第15号土坑（第80図）
［位置］ＢⅢ—n19・n20・o19・o20グリットに位置する。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径173cm、深さ45cmを測る。
［覆土］５層に分層され、自然堆積を示す。
［遺物］覆土中より、土器９点が出土している。
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第16号土坑（第80図）
［位置］ＢⅢ—o20グリットに位置している。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径147cm、深さ37cmを測る。
［覆土］３層に分層される。
［遺物］無し。
［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第17号土坑（第81図）
［位置］ＢⅢ—グリトに位置する。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径192cm、深さ31cmを測る。
［覆土］４層に分層される。
［遺物］（第85図41・42）覆土中より、土器12点が出土している。41は、LR縄文を施文している。42は、口縁部にハケ状工具による縦方向の調整が施されている。
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第18号土坑（第81図）
［位置］ＢⅢ—o12グリットに位置する。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径81cm、深さ16cmを測る。
［覆土］２層に分層される。
［遺物］覆土中より、土器11点が出土している。
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

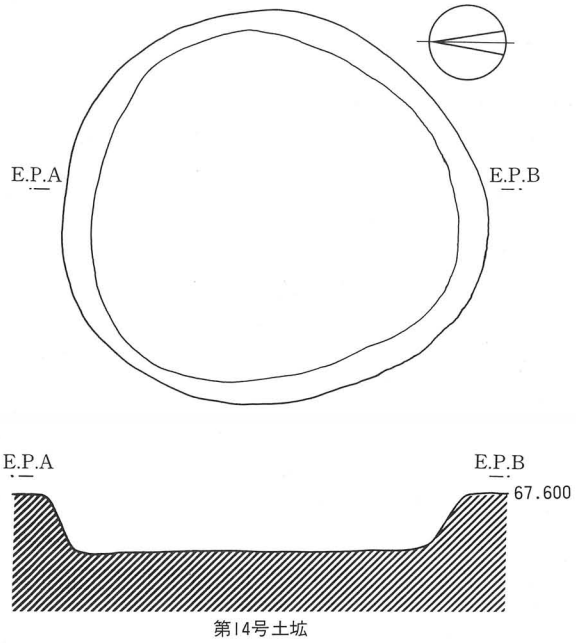
第19号土坑（第81図）
［位置］ＢⅢ—o12グリットに位置する。第20号土坑が隣接している。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径145cm、深さ30cmを測る。
［覆土］２層に分層され、微量の炭化粒を含む。
［遺物］覆土中より、土器７点が出土している。
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第20号土坑（第81図）
［位置］ＢⅣ—l4・l5・m4・m5グリットに位置する。第19号住居跡が隣接している。
［形状］Ⅱ—Ａ。長径128cm、短径98cm、深さ31cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

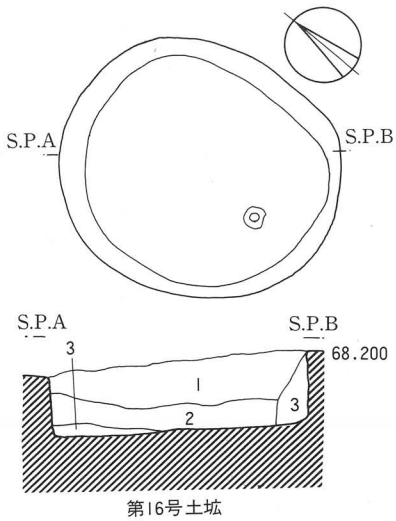
第21号土坑（第81図）
［位置］ＢⅢ—o16グリットに位置する。
［形状］Ⅳ—Ａ。長径230cm、短径156cm、深さ38cmを測る。
［覆土］２層に分層され、自然堆積を示す。覆土全体に炭化粒を含む。
［遺物］覆土中より、土器９点が出土している。
［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第22号土坑（第82図）
［位置］ＢⅢ—r4グリットに位置している。
［形状］Ⅰ—Ａ。直径122cm、深さ24cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第23号土坑（第82図）
［位置］ＢⅢ—r3グリットに位置する。
［形状］Ⅱ—Ａ。長径146cm、短径113cm、深さ55cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

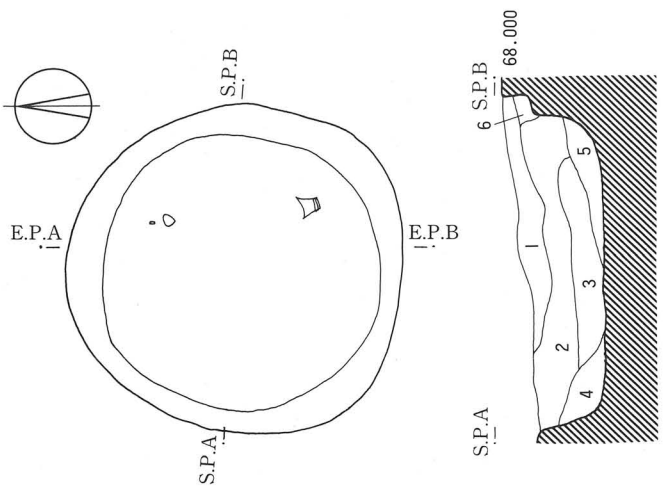


第14号土坑

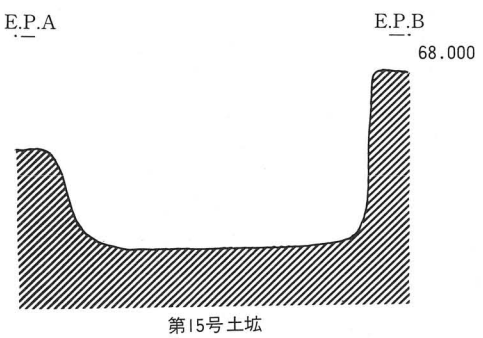


第16号土坑

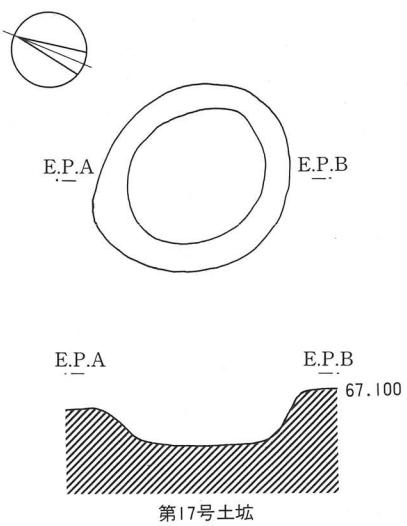
1　黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子細
2　暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
3　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗



1　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ロームブロック少量含、粒子粗
2　茶褐色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒少量含、粒子粗
3　暗茶色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック少量含、粒子粗
4　黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
5　茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
6　黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒多量含、粒子やや粗



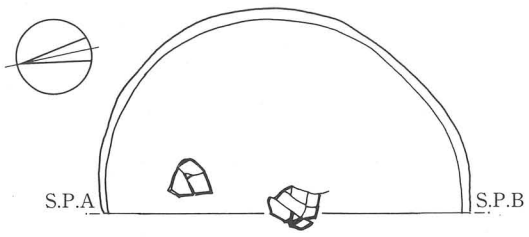
第15号土坑

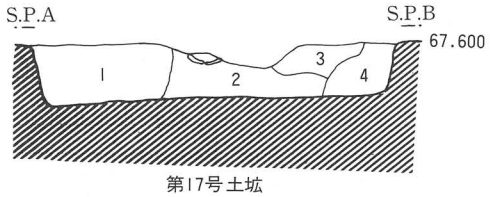


第17号土坑



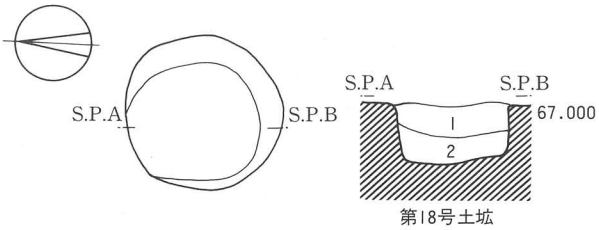
第80図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(4)





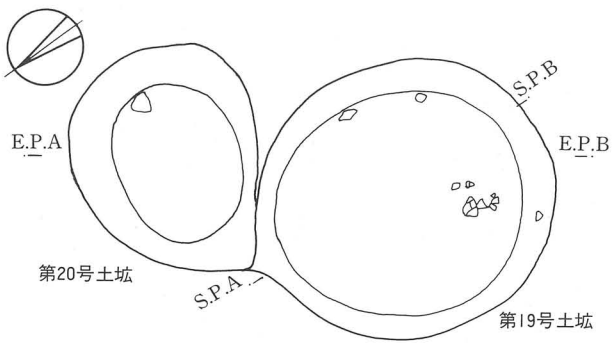
第17号土坑

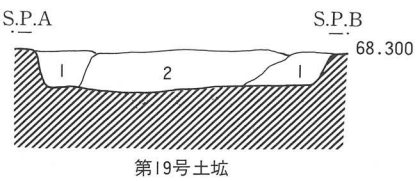
1　黒茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多、炭化粒微量含、粒子粗
2　暗褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子粗
3　暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量、炭化粒微量含、粒子粗
4　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量、炭化粒微量含、粒子粗



第18号土坑

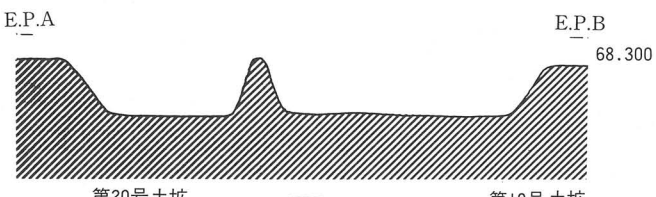
1　暗黒茶色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒少量含、粒子粗
2　黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗

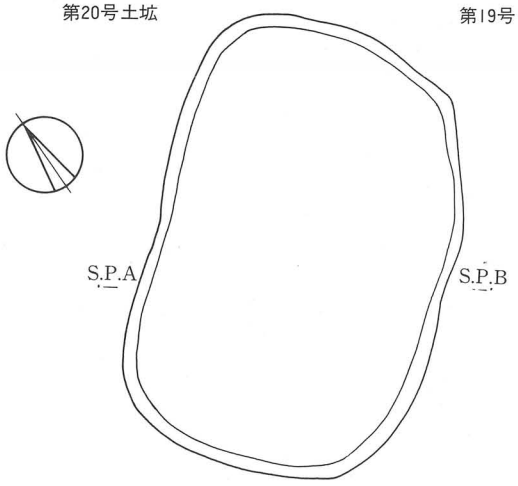


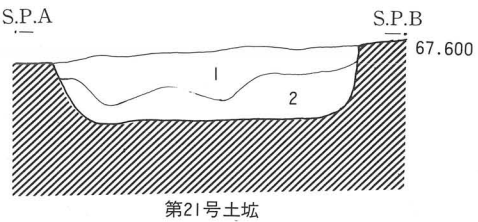


第19号土坑

1　黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子細
2　茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒微量含、粒子細







第21号土坑

1　茶褐色土　しまり、粘性やや弱、炭化粒少量、ロームブロック少量含、粒子粗
2　明茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒やや多、炭化粒微量含、粒子粗



第81図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(5)

第24号土坑（第82図）

［位置］ＢIII—n19グリットに位置する。

［形状］Ｉ—Ａ。直径120cm、深さ35cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

第25号土坑（第82図）

［位置］ＢIII—m19グリットに位置する。

［形状］II—Ａ。長径184cm、短径174cm、深さ22cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］覆土より判断して、弥生時代後期。

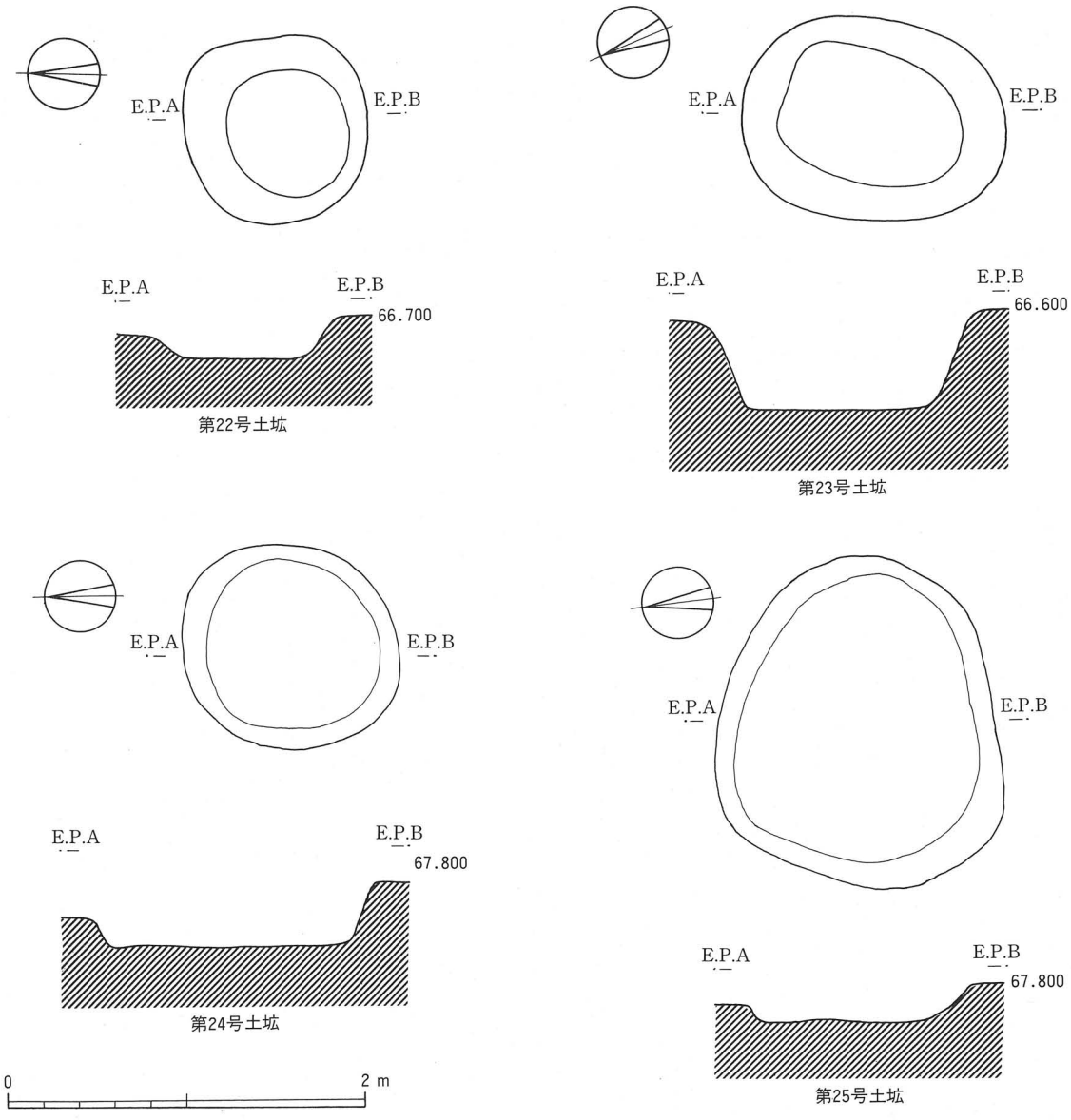
（関口・森田）

第33表　姥ヶ沢遺跡土坑出土土器観察表

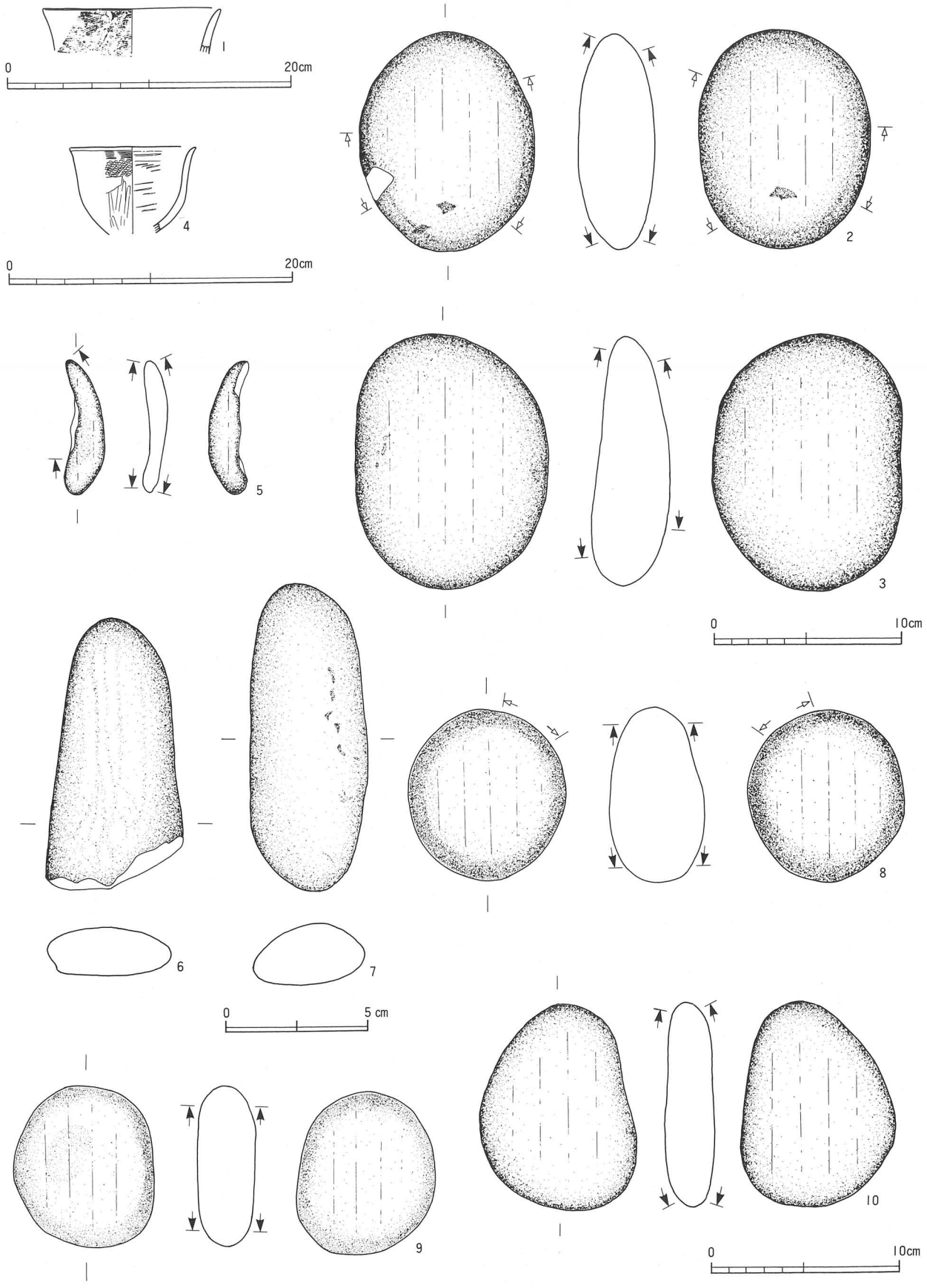
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	(12.4)	3.1		SW	do	b	10	SK1
4	甕	8.8	6.0		SB	do	b	40	SK4
11	甕	(11.0)	3.0		SB	do	a	20	SK7
12	甕				SB	do	b	10	SK7
14	甕	4.4	4.3		SWB	do	b	60	SK8
16	甕				SB	do	a	10	SK11
17	甕				SB	do	b	10	SK11
18	甕				SWU	o	b	20	SK12
19	甕				SB	ro	b	10	SK12
20	甕				SB	o	b	10	SK12
21	甕	(10.9)	6.3		SW	ro	b	30	SK12
22	甕	(18.5)	3.5		SB	do	b	20	SK12
23	甕	(14.8)	5.6		SB	do	b	20	SK12
24	壺	(19.3)	11.5		SBR	do	b	50	SK12
25	甕	(15.3)	18.4		SWR	do	b	40	SK12
26	鉢	8.6	7.5	3.4	SBR	do	a	80	SK12小形
27	鉢	(13.0)	6.8	4.5	SWR	do	b	50	SK12
28	甕		1.5	6.3	SB	do	b	90	SK12
29	甕		3.3	6.0	SW	do	b	60	SK12
30	甕		3.5	6.5	SWR	do	b	90	SK12
32	甕				SWR	do	b	10	SK13
33	壺				WR	do	a	10	SK13
34	甕				RW	dg	a	10	SK13ハケメＳ字口縁
35	甕				BW	do	b	20	SK12—13
36	壺	(13.0)	8.5		SWR	do	a	40	SK12—13
37	甕	10.8	13.0		SWB	do	b	70	SK12—13
38	鉢	(13.5)	6.0		SB	do	b	50	SK13
39	台付甕		6.8	8.0	SWB	o	b	90	SK13
41	甕				SBW	do	b	10	SK17
42	甕	(21.5)	3.8		SB	do	b	30	SK17

第34表　姥ヶ沢遺跡土坑出土石器計測表

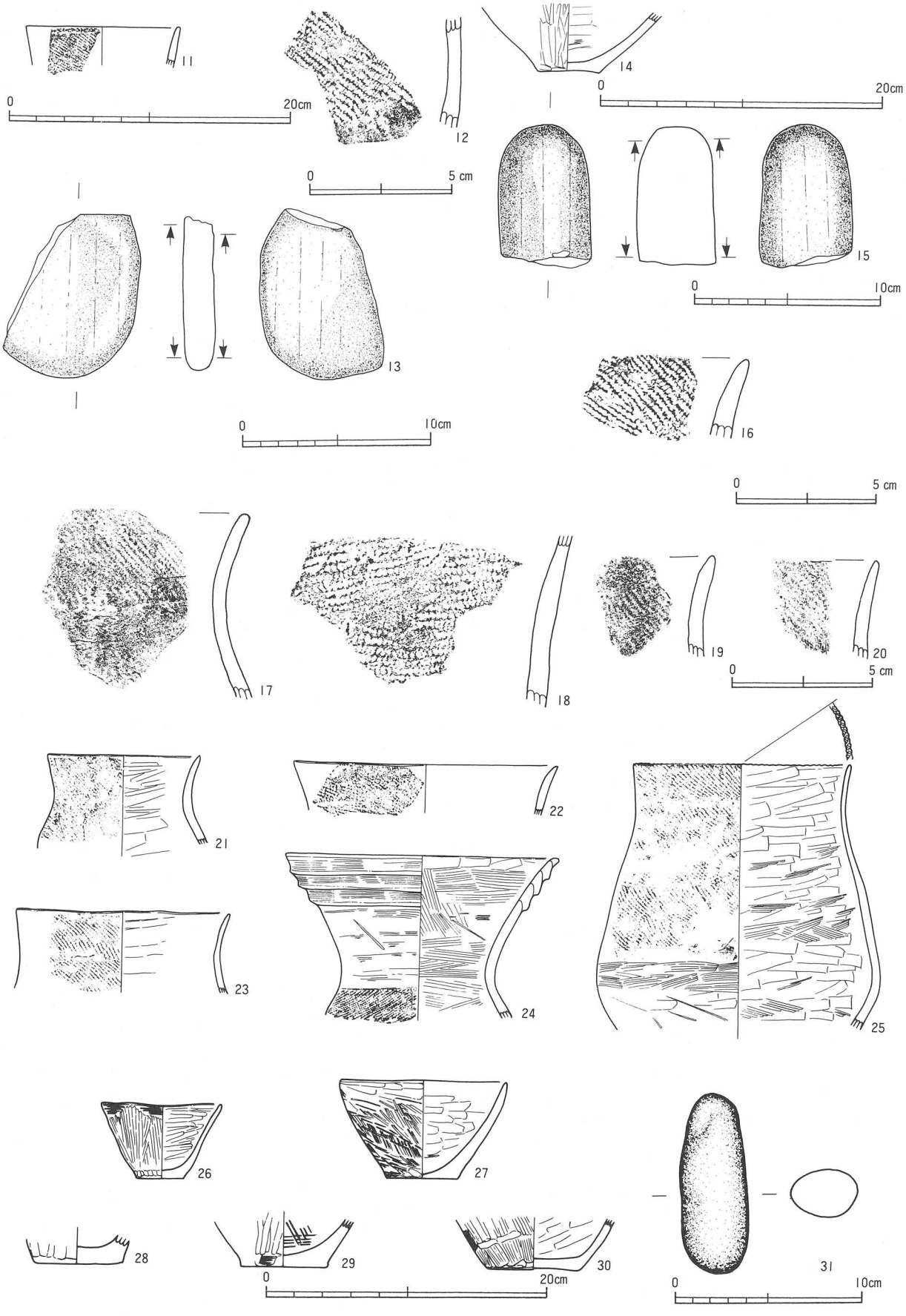
番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
2	SK2	磨石2b	118	91	42	625	S	a	研磨３敲打有
3	SK2	磨石2b	138	100	47	930	Se	a	研磨３
5	SK5	磨石3a	(71)	(16)	10	75	Gy	b	研磨３—４
6	SK5	棒状礫器2a	(96)	44	23	138	H	b	
7	SK5	棒状礫器3b	107	42	25	165	S	a	
8	SK5	磨石1b	92	83	43	450	S	a	研磨３
9	SK5	磨石2a	87	75	33	325	Se	a	研磨３
10	SK5	磨石6a	110	82	28	375	Se	a	研磨３
13	SK7	磨石5a	(97)	(62)	15	135	S	b	研磨３
15	SK8	磨石3b	(77)	48	42	235	S	b	研磨３
31	SK12	棒状礫器3b	64	23	21	50	Gy	a	
40	SK13	棒状礫器6c	88	41	18	84	Gy	a	



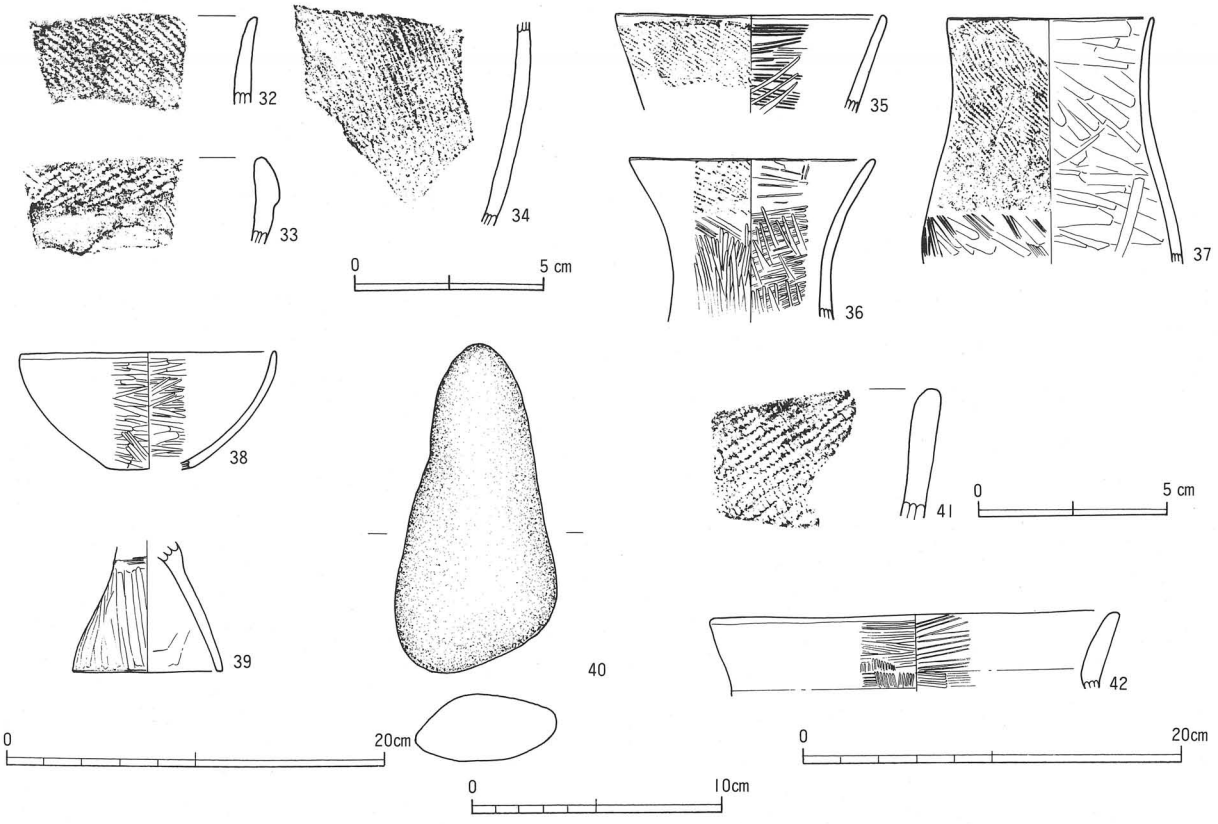
第82図　姥ヶ沢遺跡土坑平面図(6)



第83図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(1)



第84図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(2)



第85図　姥ヶ沢遺跡土坑出土遺物(3)

姥ヶ沢埴輪窯跡群

位　置

姥ヶ沢埴輪窯跡群は、1982年に調査されたＡ地点に１基と今回調査されたＢ地点で８基の埴輪窯を発見している。Ａ地点は江南台地の段丘斜面に窯体が築かれていたが、Ｂ地点は台地縁より奥深く侵入する姥ヶ沢の谷を約200m程入った谷の屈曲部に位置する。工房に相当する建物跡や粘土の採掘跡等の関連する遺構は今回の調査区内では発見には至らなかった。これらの関連施設跡の存在は周辺部分に十分その位置を想定されるものである。以前より知られている権現坂埴輪窯跡群は東側1.5㎞程の台地縁部を中心に位置する。姥ヶ沢群と強い関連が想定され、先の問題を考える上でも欠かせない存在である。

姥ヶ沢埴輪窯跡群の立地する谷は、上面幅8.10m、下面幅6,4m、右岸側の谷肩部は標高約65m、左岸側は約63.5m、比高差1.5m、現水面との比高差約４ｍを測る。Ｂ地点では谷の延長200m余りを調査しているが、この場所以外では窯は作られていなかった。この谷はさらに南西方向に延び西原遺跡の西方に続く。窯の築かれた右岸側は一様に急斜面でどの位置に窯が築かれても良いように思われるが、より詳細に地形を観ると秋・冬の季節風を受けやすい北西方向を向く弧状に浸蝕された谷斜面を選んでいる。実際、８基の窯は偏差はあるものの斜面に直交して築かれ、その窯の主軸はいずれも北西方位をとっている。窯上位の平坦地では古墳時代の遺構は何も確認されていない。調査地点の地形は谷斜面がとくに痩せており、埴輪片が露出していた。窯跡群が築かれたことによりその崩壊・埋没とともに斜面土が失なわれたためと思われた。また、現水面に近い斜面の下位はさらに浸蝕が激しく、下位の窯体は焚口付近から灰原のほとんどを失っていた。対岸となる谷の西側では比高差に対応するようにローム土が失われており、さらに西側で立ち上がる斜面部まで続いている。この間約30m程の低地部は谷流路の浸蝕部分と思われる。当然のごとく遺構は確認できなかった。

発掘調査は窯跡群を囲むＡ－１からＸ-24までの任意のグリットを0.5mで設定した。本文での位置関係についての説明はこのグリットで表している（第87図）。

基準土層

ローム台地の基本的な層序であるが、江南台地の特徴から次のとおり区分される。

１　表土層

２　黄茶褐色土層　この地点では表土の流失や過去の開墾が頻繁であったためか硬質なローム層が露出しており撹乱の及んだ上層と処女層である下層に区分できる。

３　暗茶褐色土層　硬質で粘質の強い性質　上位群の窯の基底部又は火床面となっている。

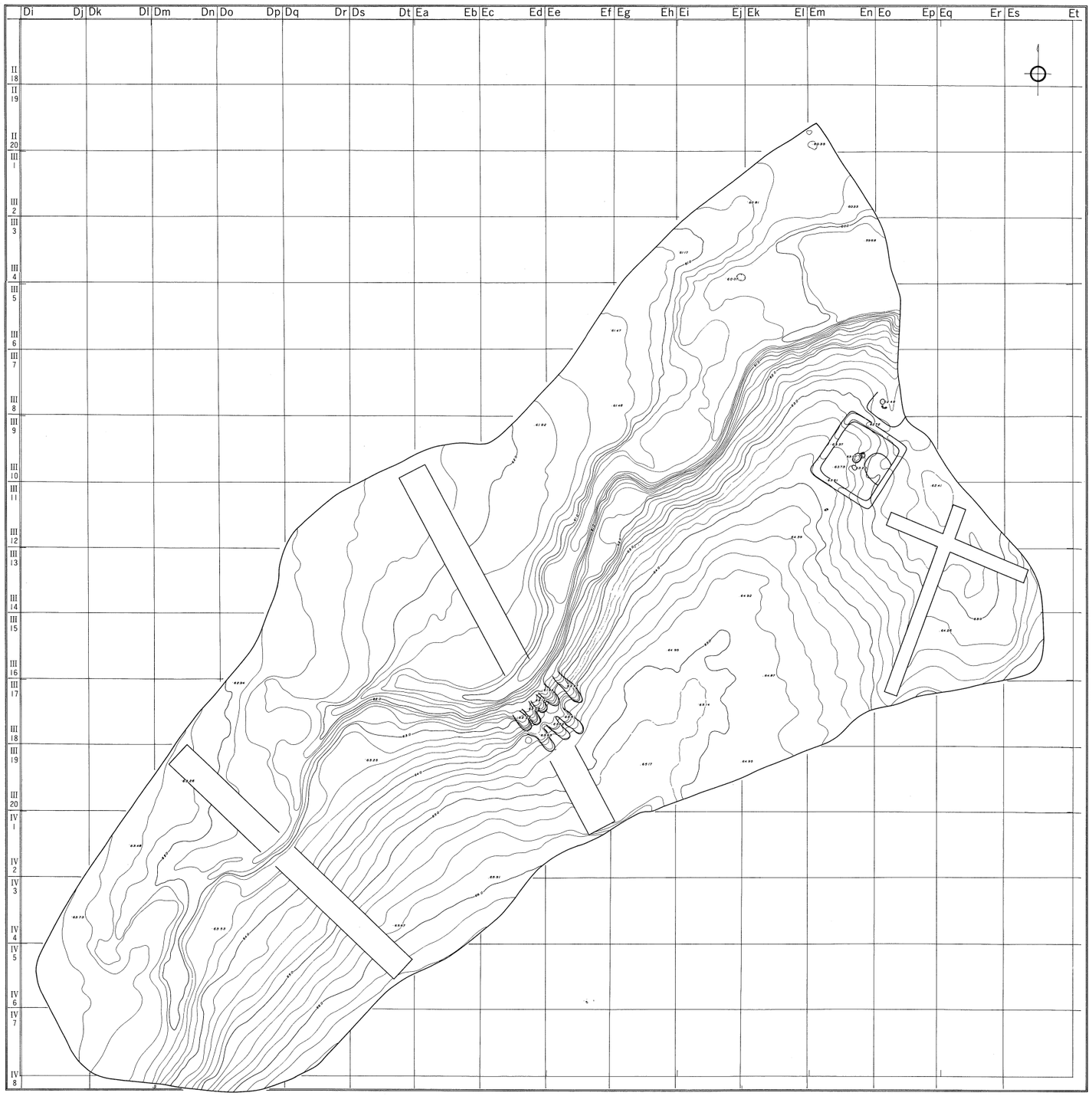
４　灰白色粘土層　南関東の下末吉層に対比される土層、川本粘土層と呼ばれる。白色細粒粘性が極めて強く造形土に用いることができる。また鉄分を多く含むため酸化焔焼成の場合赤色に発色する。

５　砂礫層　江南台地を造る基盤層である。

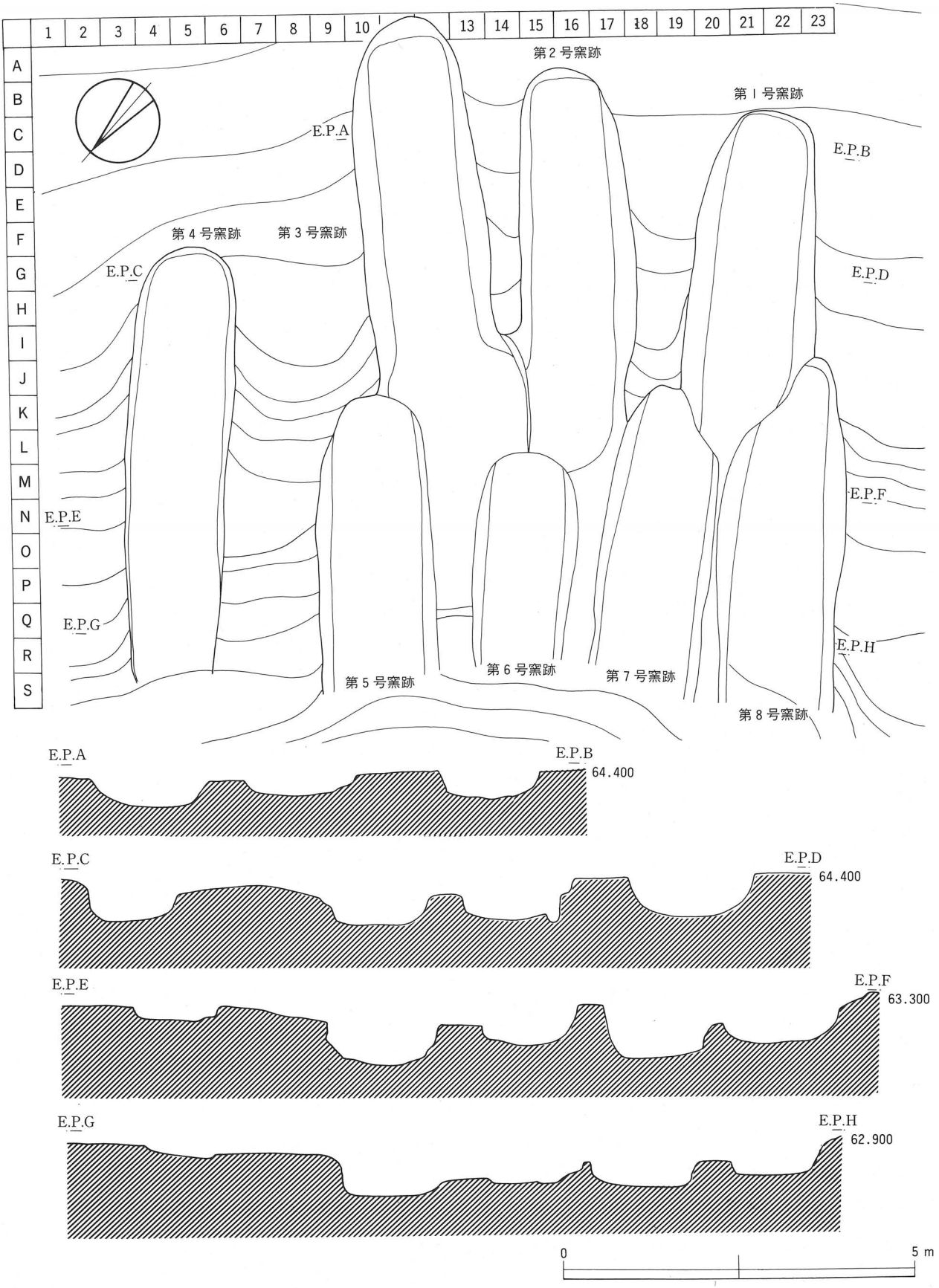
下位群の窯は４層中または、５層直上に築かれている。窯の掘削は比較的容易であったと思われ、しかも安定した性質を持つ3.4.5層中に築かれることから窯の構造においても地下式または半地下式構造をとりやすかったと思われる。事実、天井部は確認できないものの窯本体の遺存状態は良好と言える。谷の埋没状況は後章の自然科学分析に譲るが、概要は①腐植土層②泥炭層　③火山灰薄層　④泥炭層II⑤砂礫層となる。灰原の遺物包含層は③層から④層の上面まで確認できる。

構造・単位群

窯の存在は試掘トレンチに窯本体が当たったことにより確認されたが、斜面上部では表土層が極く薄く、これを除去するとすぐに窯本体が現れた。また、流水面に近い斜面下位では灰原層は流失しており、谷埋没土中にかろうじて灰原に当たる遺物包含層を確認できたが、遺物の包含量は少ない。完全に遺存する窯はないが、上位より煙道部・焼成部・燃焼部・焚口部・前庭部・灰原部となり、焼成部底面と燃焼部底面は窯床の傾斜が大きく変化することから、ここに変換点を計測している。窯の改築や操業面の更



第86図　姥ヶ沢遺跡第３調査地区全体図



第87図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡全体図

新から変換点の位置も角度も微妙に異なることがある。

第１号から第３号窯の上位群と第５号から第８号窯の下位群と第４号窯単独の三群が存在している。上位群は下位群の窯上部を削平して築かれる。下位群と同様に並列する上位群の焚口部から灰原と重なっていた。谷斜面を築窯に選定していることや埋没状況などから半地下式の窯体構造を意図したと推定されるが、窯体の掘り込みが浅目である感は否めない。下位群は遺存部分で1.3mの深さを測る部分があることから地下式の窯体構造をしていたと推定される。上位下位の窯とも斜面上での位置、規模、主軸とも良く似ており併焼していた窯もあったと考えられる。特に下位群では窯の規模と配置がほぼ等間隔になっておりその可能性が高い。第４号窯に関しては窯体同士の切り合いが無い。斜面上での位置は上位の窯下位の窯のほぼ中間地に築かれていた。おのおの窯には数次の操業をうかがわせる改修痕を認める場合もあるが、これは遺構に残された次数のみであり改修の際に削り取られる必然性を考慮すると最低の操業数を確認できたに過ぎない。操業時期の区分については後段に述べる。灰原については、斜面部の他に谷埋没土中に確認される。第１、２号窯の会に比較的密に分布する他には余り認められなかった。しかし、下流方向に広く薄く広がる様な検出状況であった。

出土遺物凡例（第88・89図）

埴輪窯跡関連遺構から出土した埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪の２種類が存在しており、円筒埴輪はさらに普通円筒埴輪と朝顔形埴輪に分けられ、形象埴輪は人物、動物（馬・鹿）がある。

(1)　図示方法

円筒埴輪は全体の形状が把握されるものを主体に、口縁部・突帯・底部の破片を、形象埴輪は器種・部位の特定されるものを主体に選出した。

形象埴輪は、基本的に全て手書きによって図示しており、遺存状態次第では図上復元を積極的に行っている。

(2)　観察結果の記述方法

観察結果の記述については、観察表を用い、形象埴輪は観察表を用いずに記述とした。

観察表の作成にあたっては、内容の統一を考慮して、「塚廻り古墳群」を参考に、第88・89図に示すような凡例（マニュアル）を作成した。

第１号窯跡（第90・91図・図版52）

上位群の南端Ｃ-19からＰ-23に位置する。煙道部から焼成部の一部は失われているが、窯体及び灰原が確認される。窯体の主軸方向はＮ-143°-Ｅを指す。窯体は現存長6.0mを測るが、焼成部と燃焼部の境界が側壁の内湾する部分に明瞭に現れており、現存する燃焼部は現存長3.5m、幅1.4m程でしだいに幅を狭め煙道部に移行すると思われる。燃焼部はＩ-20からＬ-22にかかる床面が窪んでおり軸長1.6mを測る。

第１次操業面は第６層下面の地山面を床としている。平坦な燃焼部前面から13°～15°の傾斜角で燃焼部へ移行している。地山面をそのまま床としているが、良く焼土化していた。壁はほぼ垂直に0.31m立ち上がる。粘土を貼った形跡は認められず、地山のままであった。燃焼部に相当する部分にはほとんど埴輪片が出土しておらず、良く清掃がなされた後第６層を置いている。

第２次操業面は、第６層を床とする。燃焼部の窪みを埋めるように第６層がかさ上げされており、10°～12°と傾斜角が緩くなっている。焚口部から灰原にかけては前庭部に当たる平坦面がＬ-17付近からＯ-20に認められ、第２号窯とあまり段差無く連続している。Ｏ-20以下谷部分の斜面には下位群の第７・８号窯の窪みを埋めるように窯から掻き出された焼土・炭化物などの残土と共に円筒埴輪を主体とした多量の埴輪片が散布している。操業面の観察から第１号窯は、最低２時期の操業を行っていることがわかる。

第２次操業面を埋める堆積土は自然な状態で観察され、第１層から第６層が認められる。いずれの堆積土もローム土を主体としており、細粒で概して締まりがない。焼成部の床面から大部分が細片となっ

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本／2㎝	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備　考
1-1	A	31.5	27.9 24.5	14.5 14.0	A0.8 B1.0 C1.3	B 7.5 6.1	①B②B③0.4④26.0 ①B②B③0.5④16.0		①F ②A ③ナデ強い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ヨコハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 軟・酸 ③2・10 ④胴部一部欠損	第３段中位に小孔（径1.7）を１ヶ所穿孔する。胴部内面に沈線状のヨコナデ有り。

番号　1－1（1：通番、1：窯番）

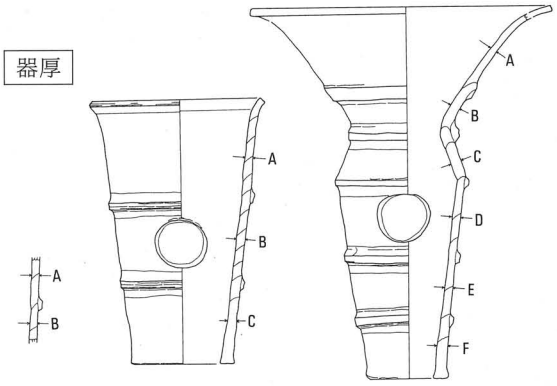
形態　A．普通円筒埴輪　B．朝顔形同筒埴輪

器高　最高値を記した。

口径　最大径→最小径。推定径は（ ）。

底径　口径に順ずる。

器厚



突帯　①分類　※小文字は突出度の低いもの（0.4cm以下）。

A．方形を呈するもの。　C．半裁五角形のもの。

B．M字状を呈するもの。　D．不正形なもの。

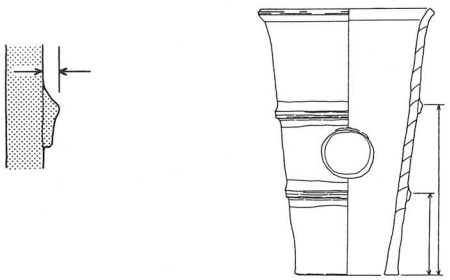


②調整手法

A．ユビ・布によるナデ。

B．木口状の工具を併用するもの。

③突帯高　　④底部～高



口唇部

①分類

A．あまり外反せず、端部が上を向くもの。

B．A類に順ずるが、内面の突出するもの。

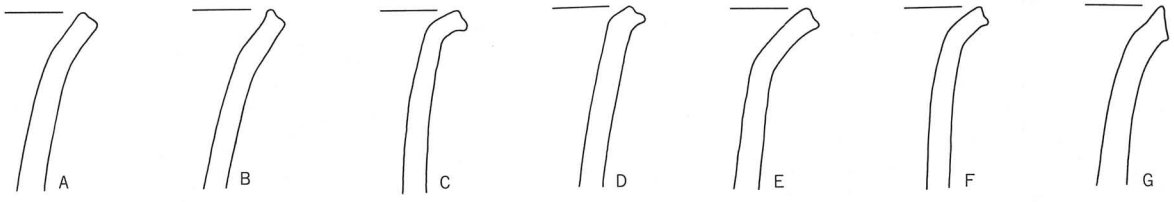
C．口縁部上端で強く急外反するもの。

D．C類の中でも外反の度合いが弱いもの。

E．口縁部中位より強く外反するもの。

F．E類の中でも外反の度合いが弱いもの。

G．端部が外に向き、ほぼ垂直に立つもの。

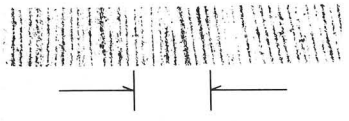


②調整手法　A．ユビ・布によるナデ。

B．木口状の工具を併用するもの。

③手法の特徴　調整の強弱等。

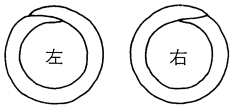
ハケ目　2㎝内での条線の数。



第88図　円筒埴輪観察表凡例(1)

成形調整

①基底部



②外面　調整を古いものから順に記した。

③内面　外面に順ずる。

①胎土　A～Cで胎土の特徴を記し、１～３で特に目立つ物質を記した。

A．細砂を少量含み、精良なもの。
B．細砂・小礫を含み、やや粗いもの。
C．砂粒・小礫を多く含み、粗いもの。

１．砂礫（チャート等が主体となる。）
２．白色粒子
３．赤色粒子（酸化鉄粒子か。）

②焼成

硬．硬質でキズのつきにくいもの。
軟．軟質でキズのつきやすいもの。
普．硬と軟の中間的なもの。

酸．酸化焔焼成のもので、器表面のみで判断した。
還．還元焔焼成のもので、器表面のみで判断した。

③色調　１～４は灰色系、５～６は赤色系、７～８は橙色系、９～10は黄色系。

１．暗灰色　２．暗紫灰色　３．暗青灰色　４．灰褐色　５．赤褐色　６．にぶい赤色

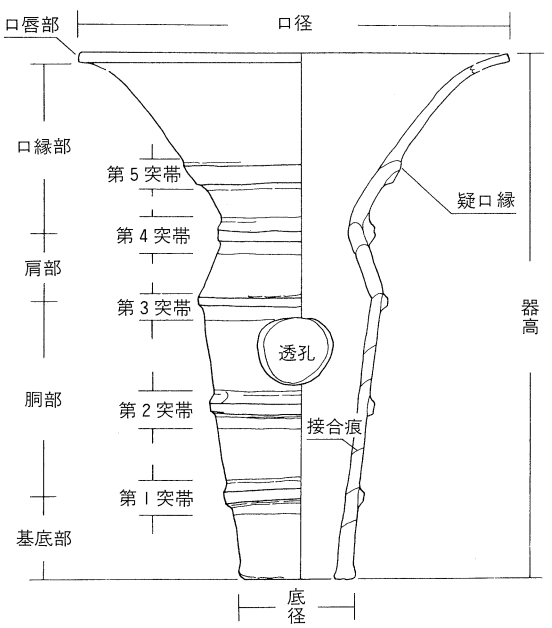
(暗)→

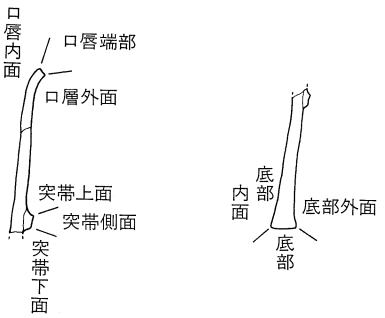
７．赤橙色　８．橙色　９．にぶい黄褐色　10．黄灰色　11．黄白色～乳白色

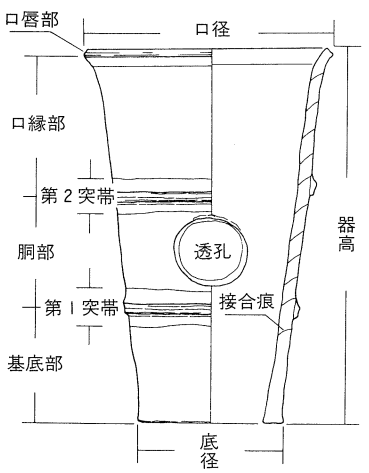
→(明)

④残存　残存状態を示した。

各部名称

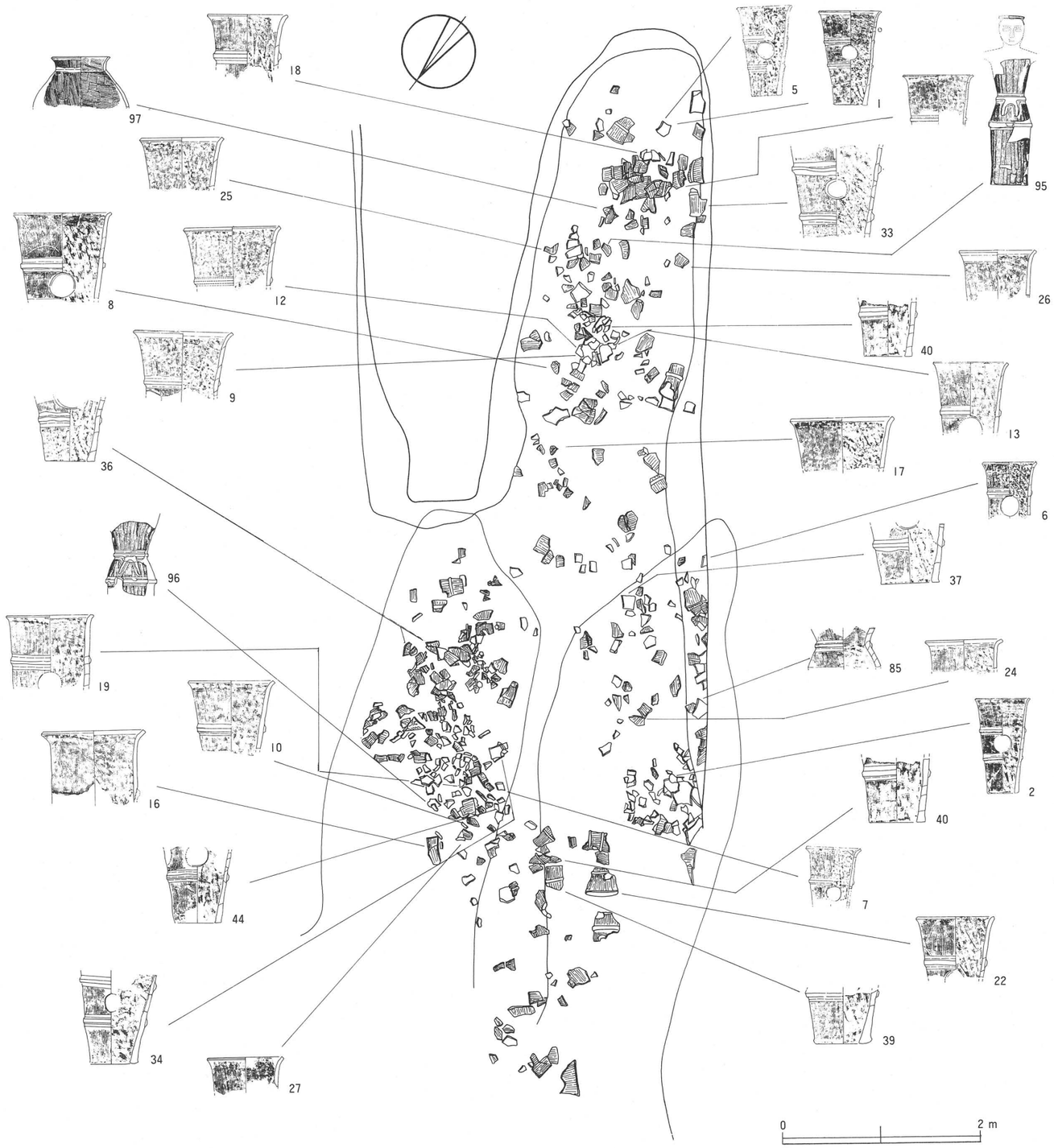




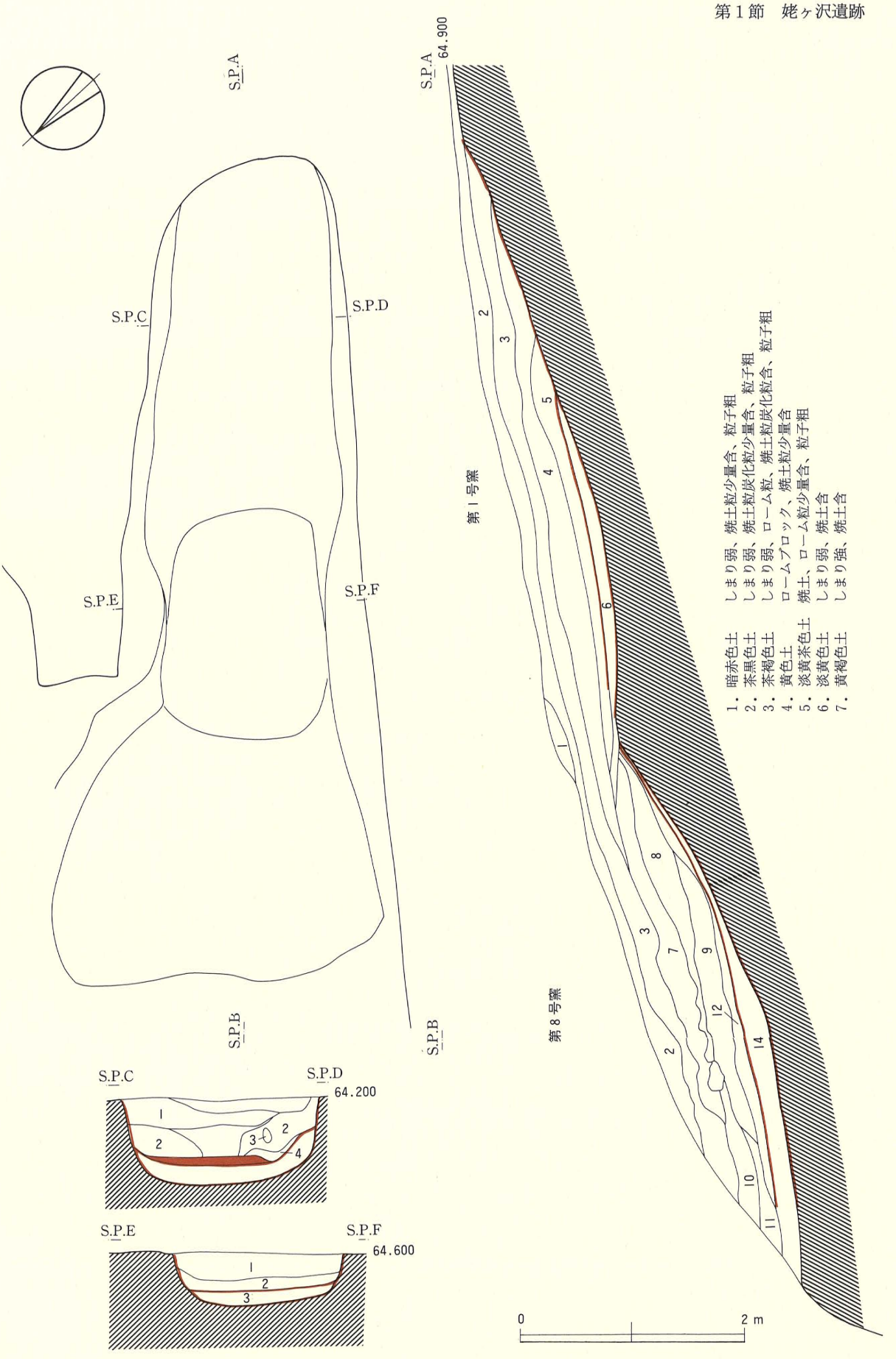


※「塚廻り古墳群」をもとに作成

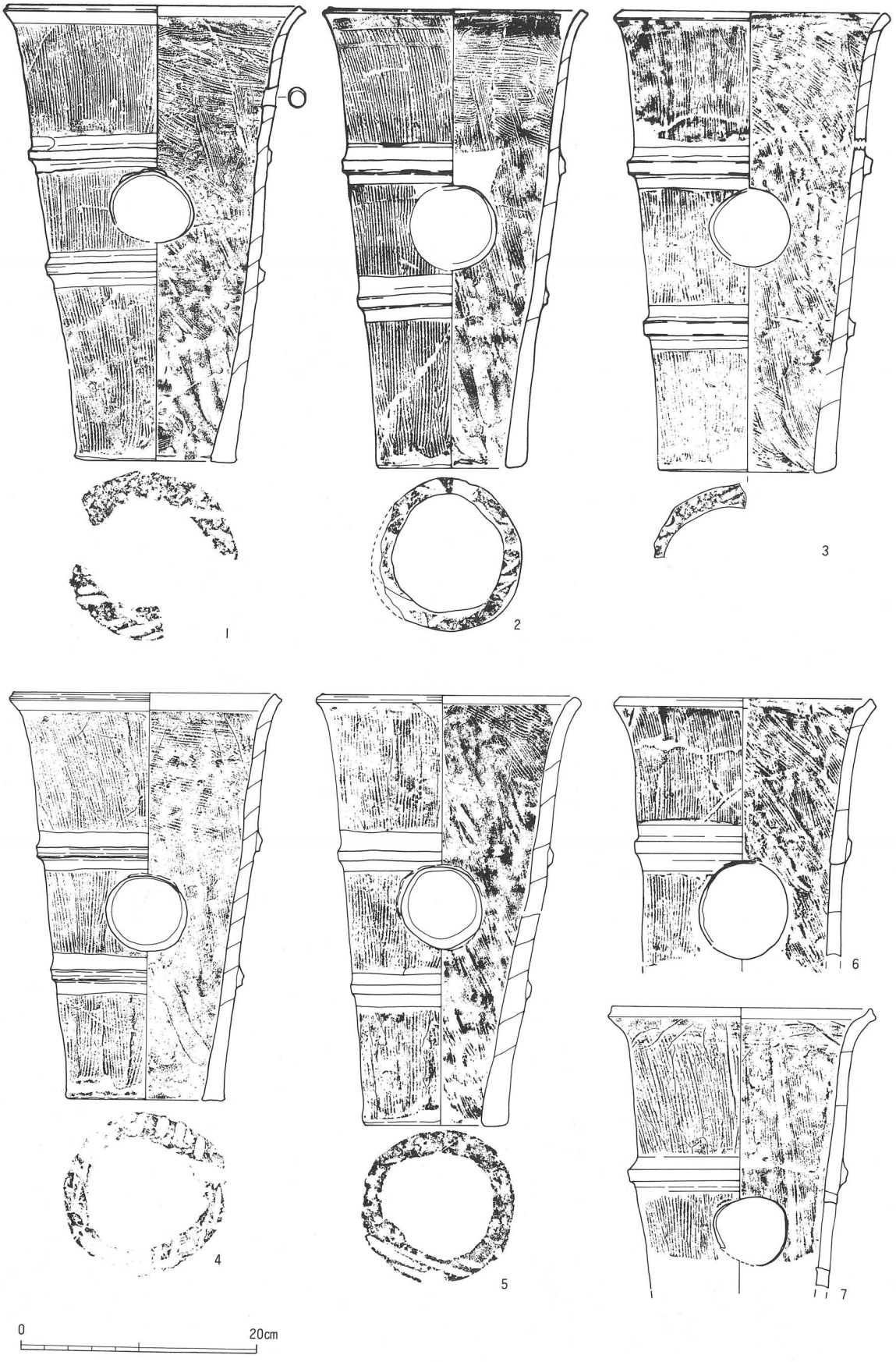
第89図　円筒埴輪観察表凡例(2)



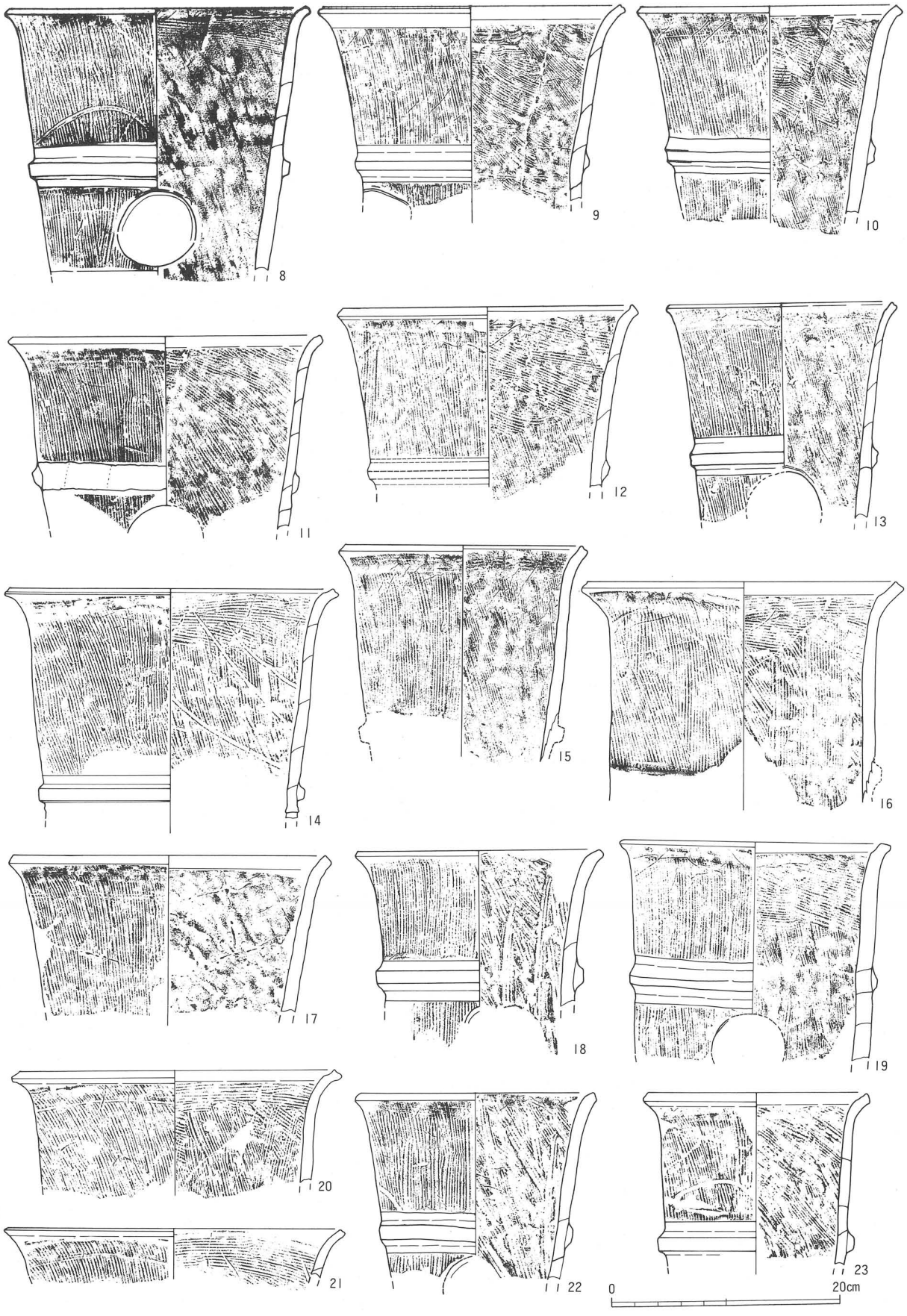
第90図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡遺物分布図



第91図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡平面図



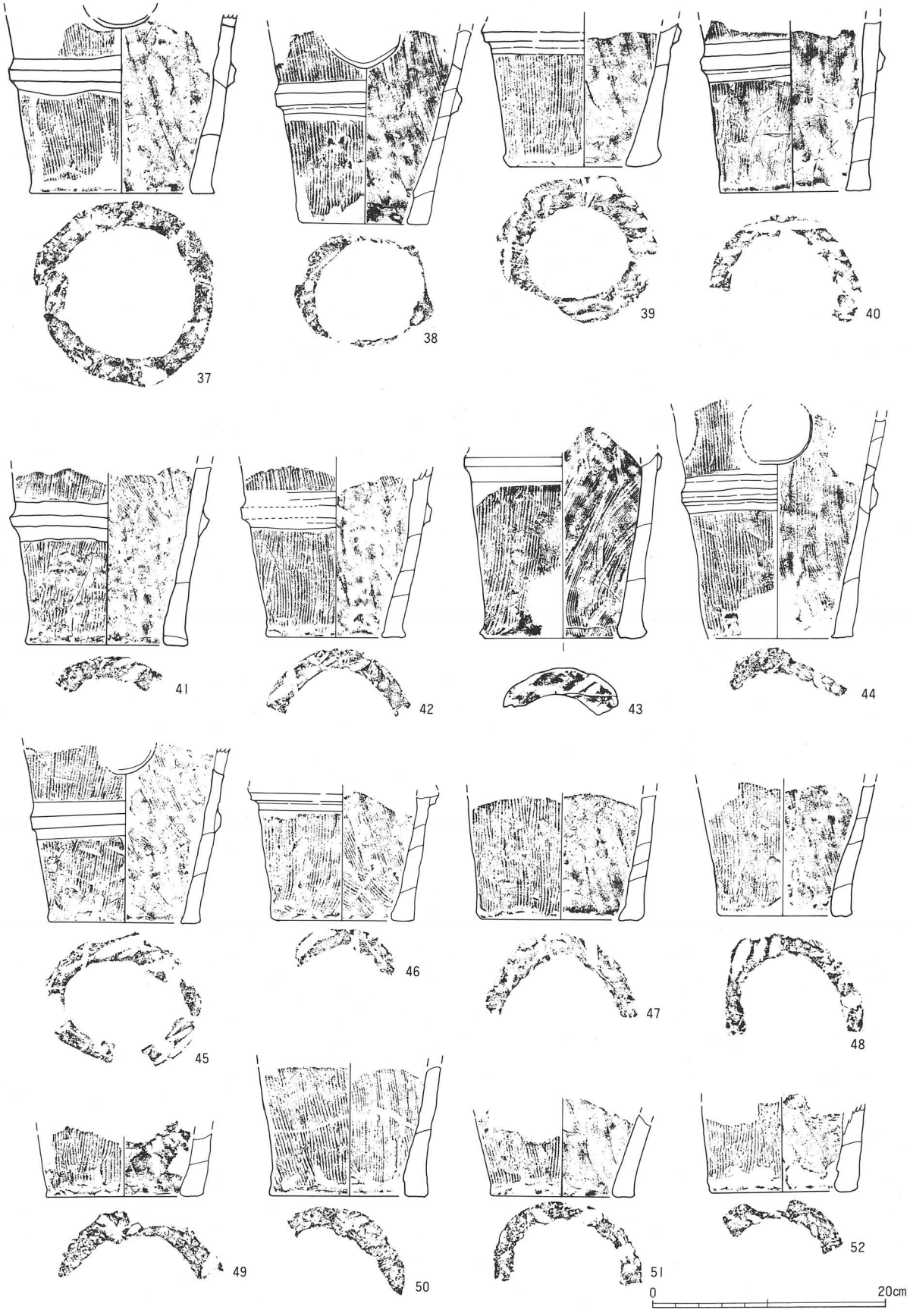
第92図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(1)



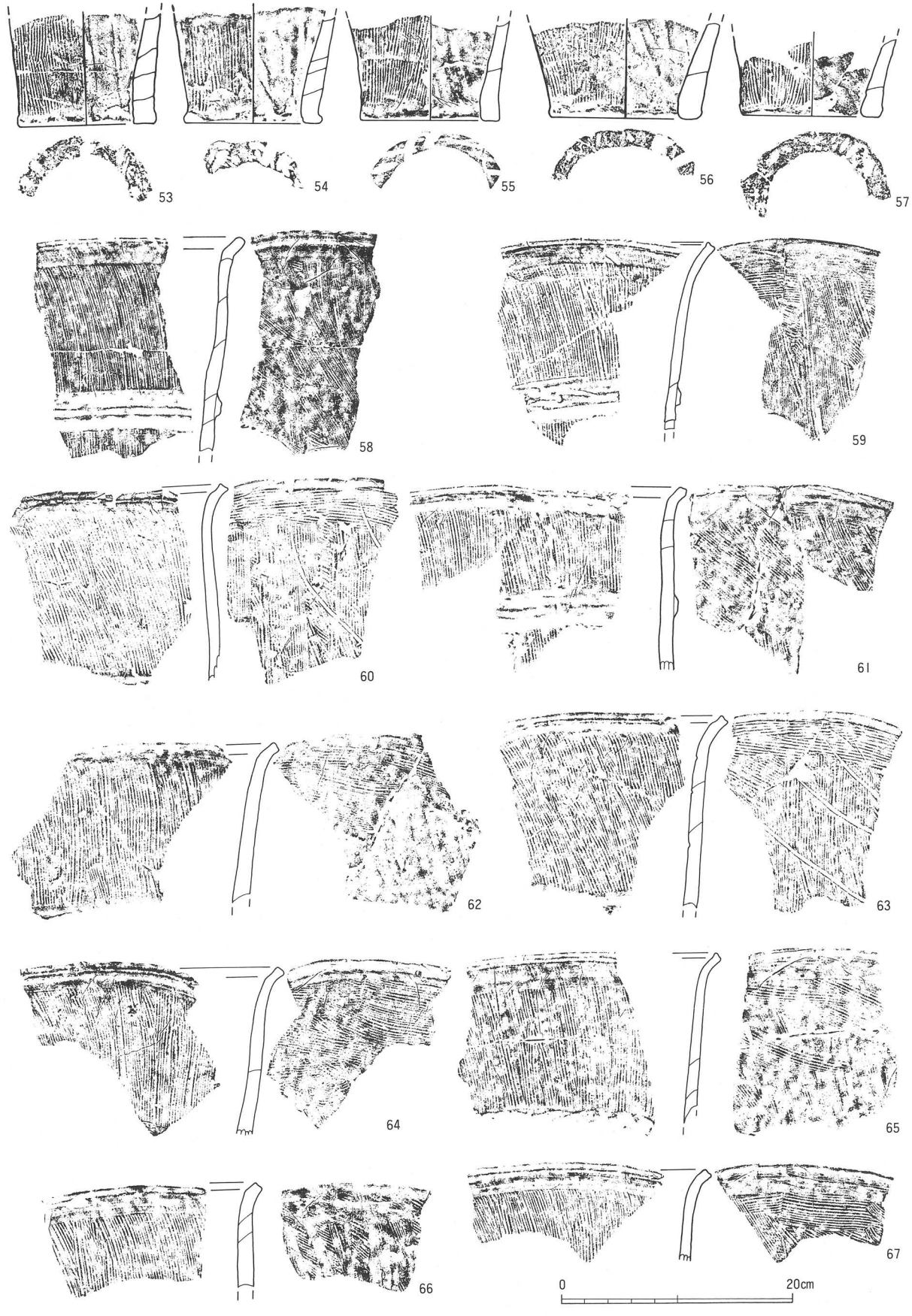
第93図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(2)



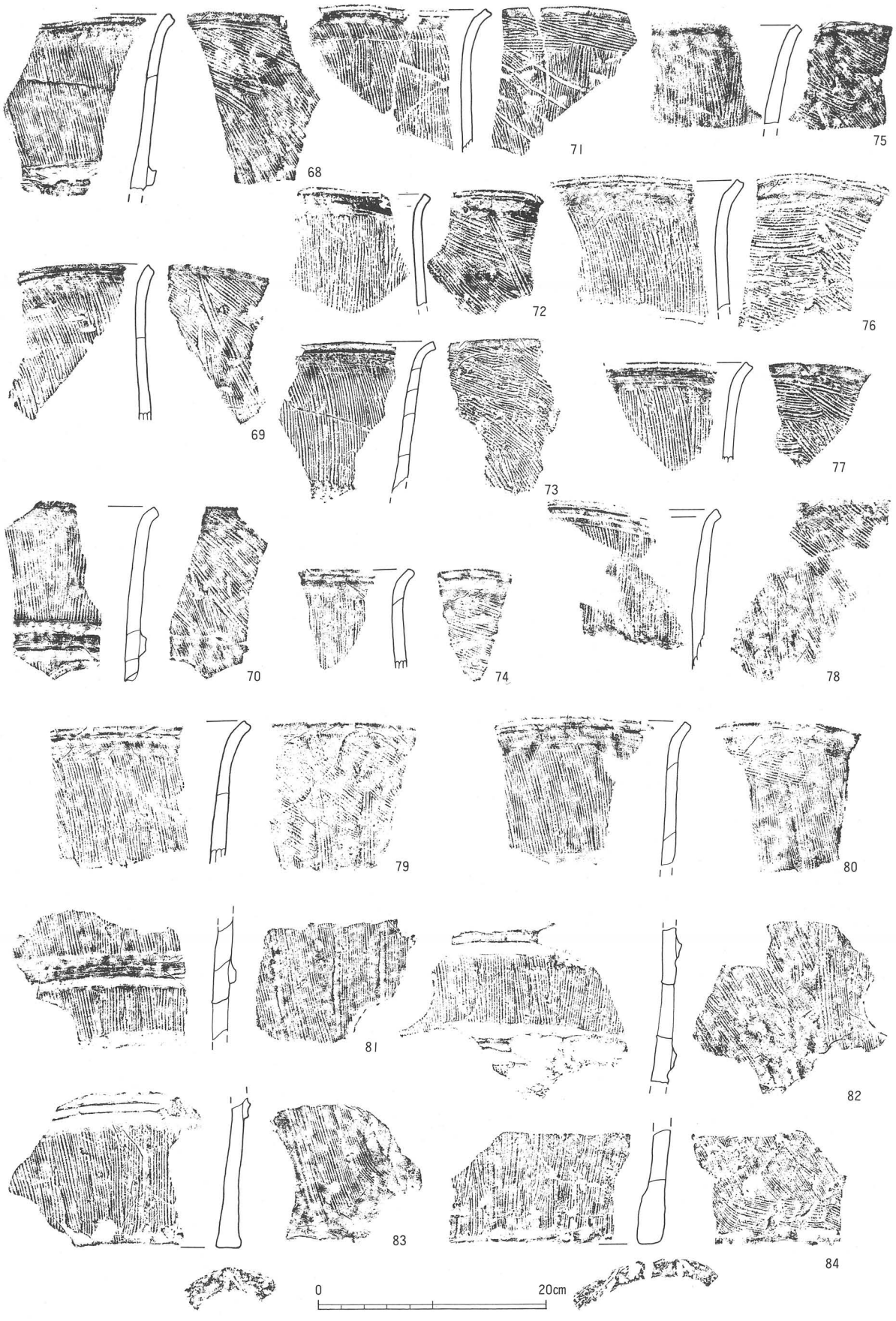
第94図　姥ヶ沢遺跡第1号埴輪窯跡出土遺物(3)



第95図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(4)



第96図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(5)



第97図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(6)

た円筒埴輪が出土している。これらの埴輪片のＦ-22のNo.97は、円筒埴輪を上向きに並べ置いて焼き台にしている。やや大型の円筒埴輪破片など竑底に敷かれたものはそのような性格を持つものと思われる。

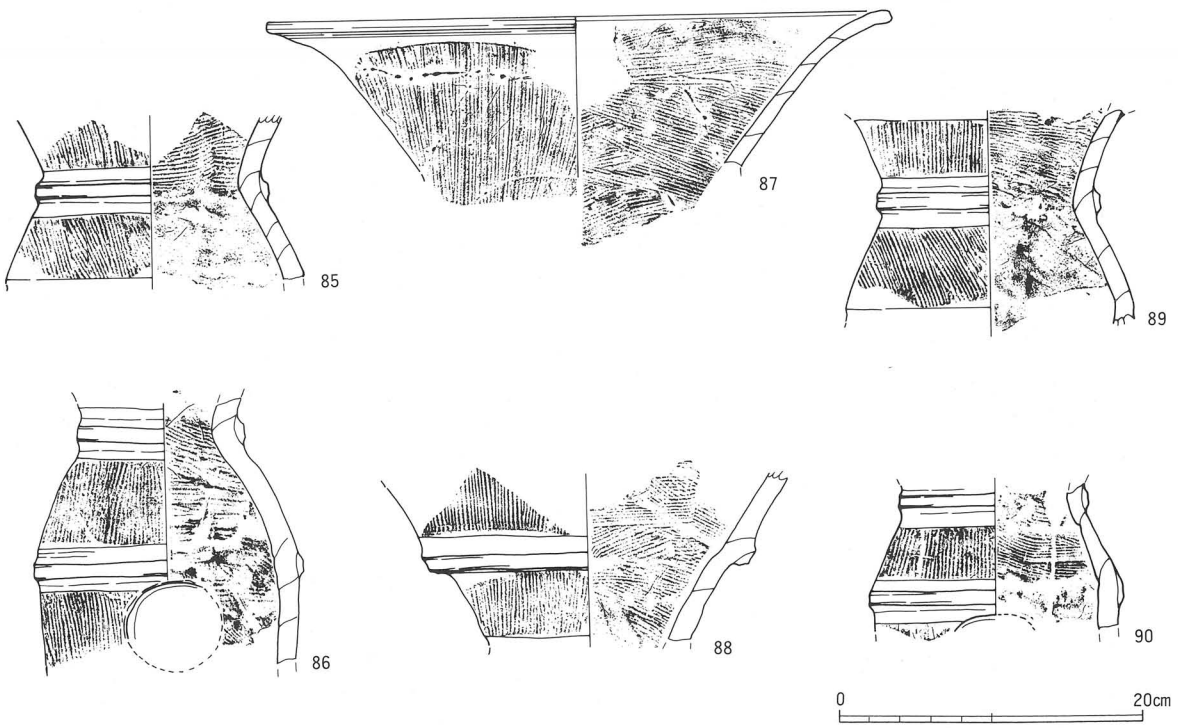
北隣に接する第２号窯とは主軸をやや異にするものの側壁の間隔は1.2mであり、前庭部から灰原を共用していることから、併焼していた時期があったと推定される。出土遺物のほとんどは２条突帯を有する円筒埴輪であったが、巫女・馬などの形象埴輪も少量認められた。

第１号窯跡出土遺物（第92～104図・図版61～63）

本窯より出土した遺物は、窯体内・灰原ともほとんどが埴輪片であり重量152.0kgであった。普通円筒埴輪を主体とし、以下朝顔形円筒埴輪・形象埴輪がある。他に僅かではあるが土師器が出土している。

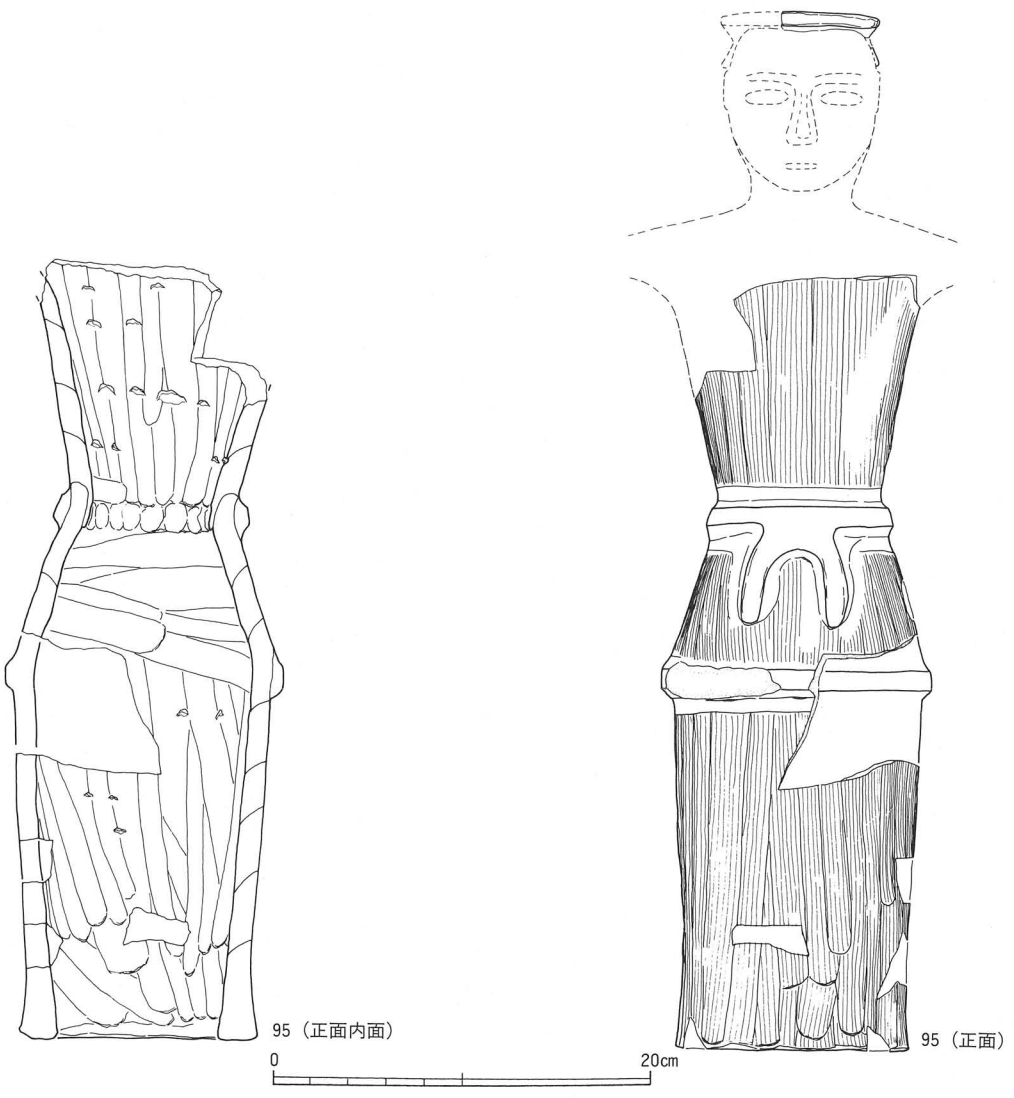
ａ　普通円筒埴輪（第92～97図、第35・40表）

普通円筒埴輪で全容の明らかなものは、１～５の５個体であり、形態・成形調整手法も近似しており、以下、本例を中心に特徴をみていく。５個体の埴輪はいずれも２条突帯を有し、基底部・胴部・口縁部の３段構成である。形態・法量も近似しており、歪みを考慮しても器高39.5cm、口径28cm、底径14cmに収まる。底径と口径の比は１対２、底径と器高の比は１対1.4～1.5程になる。透かし穴は胴部いっぱいに対面して円窓が穿たれる。しかし、１のみは口縁部の中位に直径1.7cmの円孔が胴部の透穴と約90°違えて穿たれている。1.2.4.5の成形は底部となる粘土版を円筒化して作られている。底面には篠竹様の圧痕・砂粒の圧痕とともに左巻による粘土版円筒の接合痕が残る。縦断面や剝離・接合面の観察によると粘土版円筒部は８～10cmの高さとなっている。上部へは粘土紐巻上げにより一気に成形される。また、粘土版成形を用いず粘土紐の巻上げによるものもある。器面の調整は縦ハケしか残ってないが２cm当り８～11本を数え、いずれもやや細かく整美な印象を受ける。内面はなでの後ハケによっているが、施される部位の見切りに差異がある。1.2.4は第１突帯付近からハケを施しているが、3.5は底部よりハケを施している。突帯はほぼ器高を三等分する位置に取り付けられ、突帯形態のA.B.C類が認められる。突帯の貼付は幅広くしっかりと張り付けられ、指ナデによ

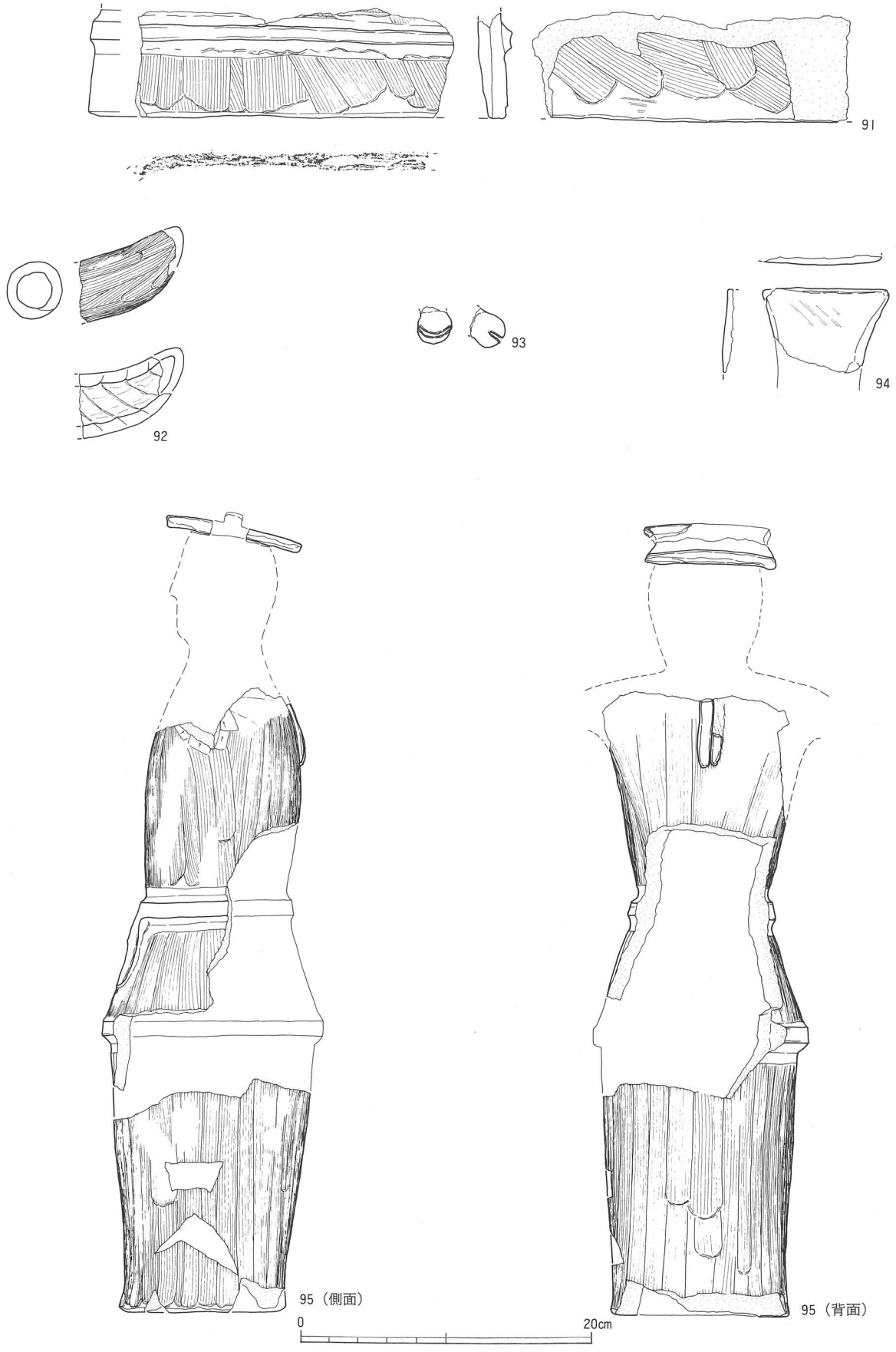


第98図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(7)

る凹面が明瞭である。また、ナデの息次や工具痕とみられる圧痕の残る例もあった。口縁部は口唇部の外反と、端部の形状の差によりＡ～Ｇの７類とした。１はＦ類に当り、口唇部の外反は強くなく、内面にナデによる凹面を持ち、口唇端部を上方・外方につまみ出すようにする。２はＡ類に当り、外反は強くなく口唇部は角頭状をしている。3.5はＤ類に当り、口唇部の外反は弱く、内面にはナデか平面を持ち口唇部は丸みを持った角頭状をしている。４はＥ類に当り、口唇部の外反は弱く、角頭状の口唇端部を上外方へつまみ出すが凹面がある。７はＢ類に当り、大きく口唇部を外反させ、内面には強い凹面を持ち、口唇端部を上外方につまみ出す鶏頭状をしている。Ｃ類は口唇部端部を外方に短く大きく外反させ、丸みを持った角頭状をする。Ｇ類は口唇部の外反が弱く、内面に凹面を持ち肥厚気味の鶏頭状をしている。底部の調整はほとんどされていない。底部から粘土紐の巻上げによる成形の埴輪は自重のためはみ出しが多く見られ、これを取り除くことをしていない。透かし穴は胴部いっぱいに円窓を開けている。１～５はほぼ正円に近く、右回転で切り取られている。焼成はいずれも良好で橙茶褐色・赤褐色・茶褐色をしている。１は断面中が青灰色で須恵質、外面は茶褐色をしている。同一個体でも接合部位の多い埴輪は色調の差が大きく、器台に使用されたと思われる埴輪は特に色調の異なる傾向がある。円筒埴輪の外



第99図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(8)



第100図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(9)

面内面には篦記号とした沈線の描かれたものがある。

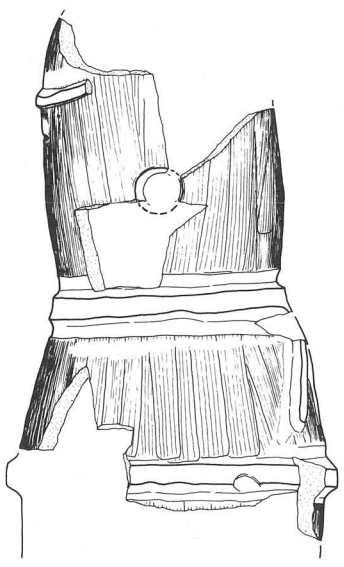
8.22.23.は口縁部の外面に上向きの弧線が、14.60.63.71.は口縁部の内面に条線が引かれている。いずれも同じ位置大きさ形態といって良く、書き馴れた筆勢のある線である。検出個体数に比して、いわゆる篦記号のある埴輪は本窯では少数である。

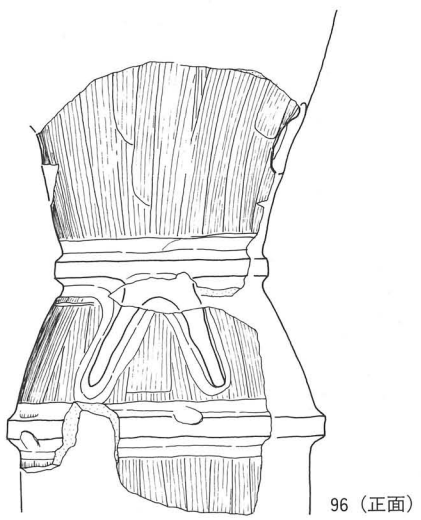
b　朝顔形円筒埴輪（第98図、第40表）

完存品はないが、口縁部から頸部の破片が確認されている。体・底部は普通円筒埴輪との区別が困難であるため抽出していない。口縁部を残す87は大きく開く口縁部を有し直径は41cmを測る。口縁端部は水平につまみ出され、内外面は丁寧なハケが施されている。頸部を残す85.88.89は括れ部から口縁部に移行しており内面の器面調整はナデからハケの境界となっている。頸部の直径はいずれも16cm前後である。86は頸部部の直径が10cmと前者に比してもかなり小振りであり、内面の調整も異なることから形象埴輪の台部に当ると思われる。

c　形象埴輪（第99～102図、図版63）

91は、不明形象埴輪である。内外面は縦、斜位のハケ（８本/２cm）によって調整され、突帯から底部高6.0cmを測り、粘土板を２枚重ねることによって底部としている。内面には押圧痕と思われる条痕が認められ、平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられる。家形埴輪の底部であった可能性が高い。92は、馬形埴輪の尻尾と思われる。粘土紐を左巻きの螺旋状に巻き上げることによって成形しており、中空品である。外面は縦・斜位のハケ（９本/２cm）、内面はナデによって調整されている。93は、馬形埴輪に貼付されていたと思われる中実の鈴である。径２cm程度の粘土玉に刀子等の鋭利な工具によって切り込みを入れ、若干の粘土をもってやや下向きに馬形埴輪本体に圧着させていたようである。94は、人物埴輪女子像の髷で、粘土板によって成形される。下面は剝離しているため不明であるが、上面にはナデ消されているものの僅かに木目圧痕が残っている。95は、胴部背面と頭部を欠損した人物埴輪である。髷は胎土の特徴から同一個体とした。本資料は女子像であったものと思われる。残存高43.2cm・推定高54cmを測る。成形は底部を幅４cmの粘土板を左巻きで円筒化した後、粘土紐を巻き上げる。腰部に乾燥単位をもっている。外面調整は縦ハケ（９本/２cm）の後に肩部以上はケズリ・ナデによって消しており、内面は斜・縦位のナデによって調整している。上衣裾部と腰帯部は粘土紐を突帯状に貼付することに







第101図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(10)

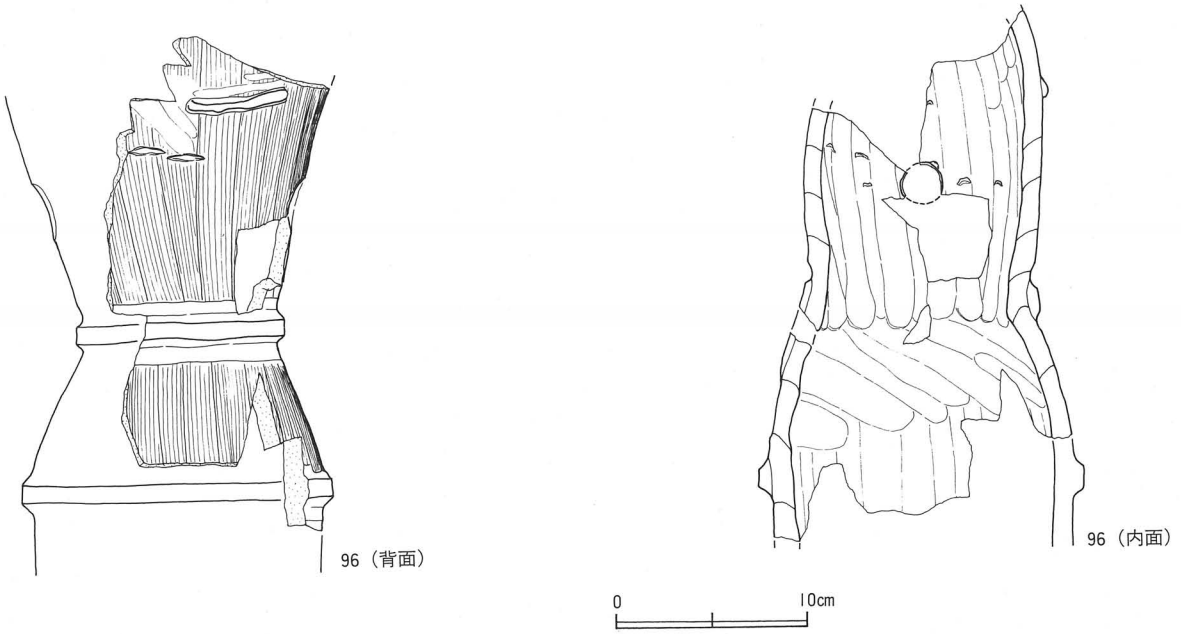
よって作出しており、腰帯の結び目はＵ字状の粘土板を圧着することによってそれを行う。腕は欠損するものの肩部に残された痕跡から、差し込み式であったことが判る。背面上部には縦位で２条の粘土紐が圧着されており、首飾りの余りを背面に垂らす表現であるものと思われる。髷は粘土板を接着するものであるが、剝離面の状態からは前後２枚の粘土板を個別で庇状に接着しているようである。96は、胴部のみ残存する人物埴輪である。残存高23.6cmを測り、95に類似するプロポーションのもので、成形・調整も共通する。上衣裾部と腰帯は粘土紐を貼付することによって作出しており、腰帯の結び目も同様である。背面上部には横位に粘土紐を指押さえによって圧着させて軽く指ナデを加えているが、何を表現するものなのかは不明である。なお、95との相異点として、腋の下に相当する部分に一対の透孔を径2.5cm程度で穿孔している点が挙げられる。

ｄ　土師器（第103図・図版70）

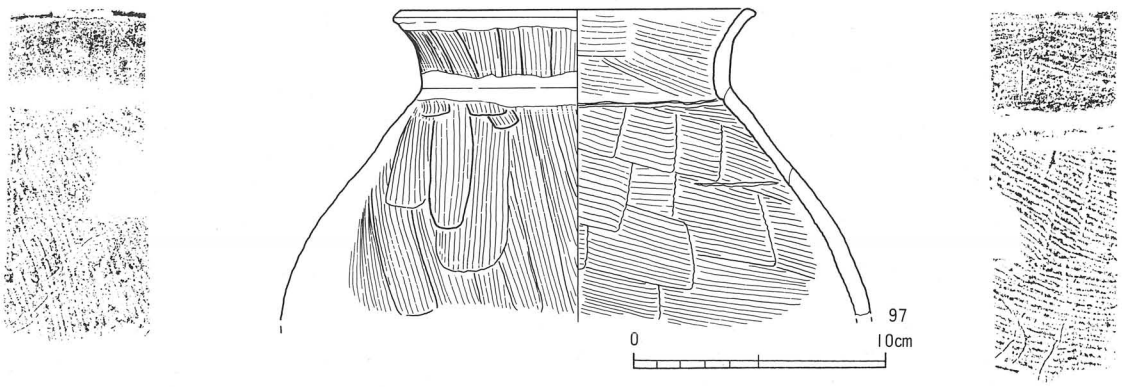
土師器の甕である。頸部内面には接合痕が明瞭に観察され、疑口縁を設けているものと思われる。外面は縦・斜位のハケ、内面は胴部を斜位、口縁部を横位のハケによって調整しており、ハケ原体の密度は８本/２cmである。ハケ原体は該期の土師器にみられるハケに比べて粗く、円筒埴輪のハケに近い。頸部以上の口縁部は内外面に弱い指ナデによって調整され、口唇部に限って木口状の工具を用いている。

第２号窯跡（第106～108図・図版52・53）

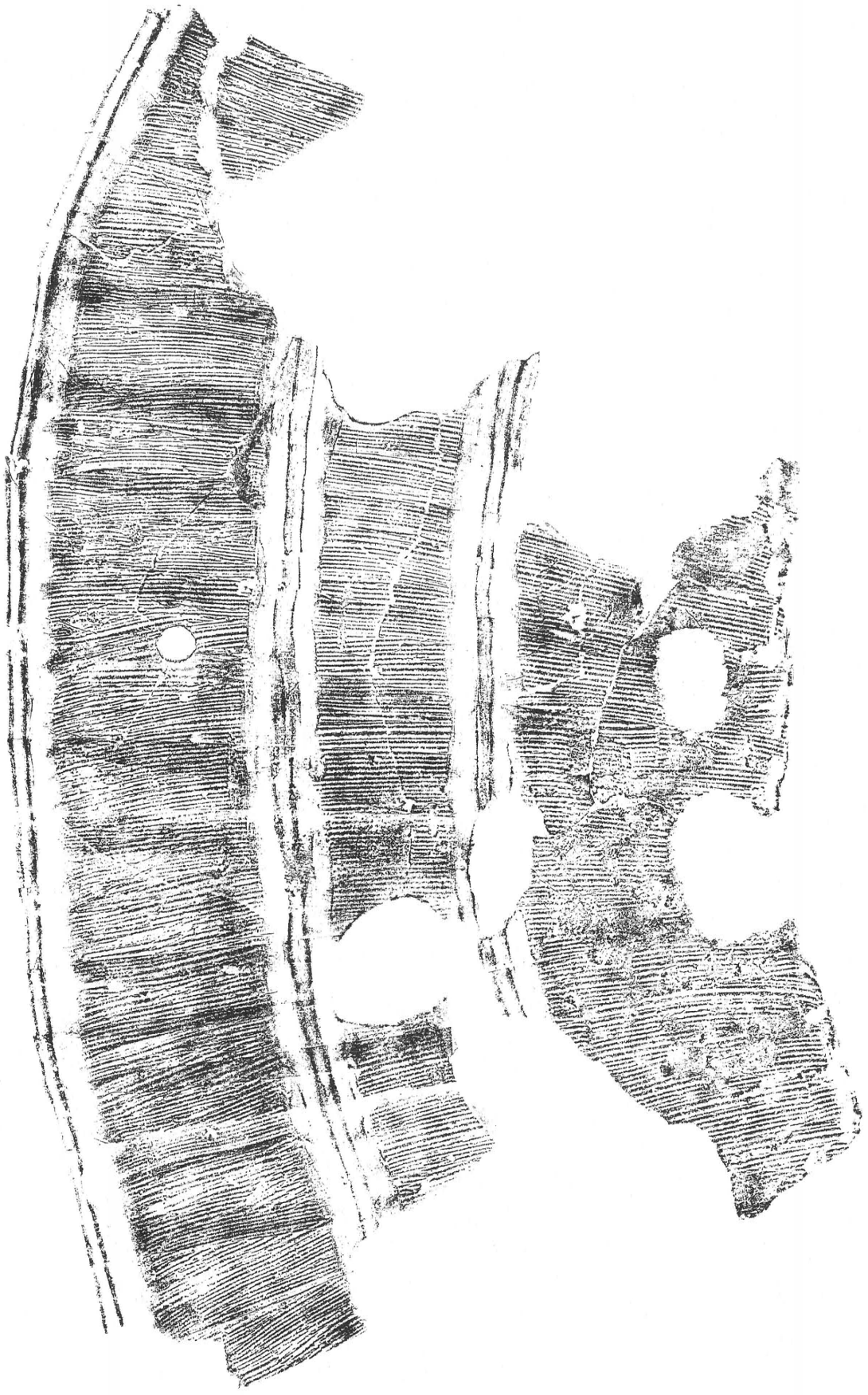
上位群の中央Ｂ-14からＯ-18に位置する。煙道部から焼成部の一部は失われているが、窯体及び灰原



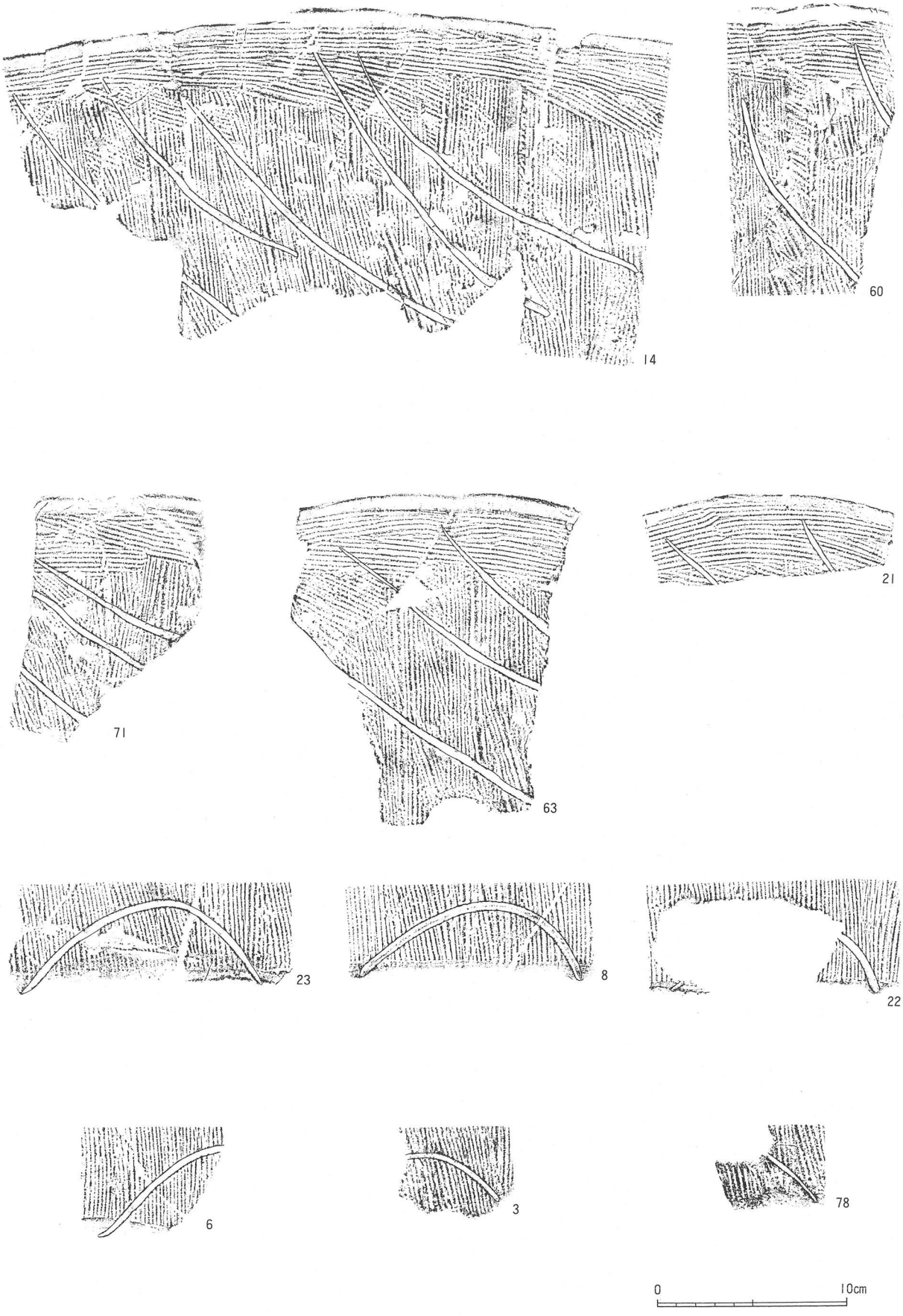
第102図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(11)



第103図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物(12)



第104図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成(1)



第105図　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成(2)

が確認される。窯体の主軸方位はN-136°-Eを指す。窯体は現存長5.4mを測るが、焼成部と燃焼部の境界はあまり明瞭でない。現存する燃焼部は、現存長3.5m、幅1.25mでしだいに幅を狭め煙道部に移行すると思われる。第１号窯と第３号窯に挟まれており、第３号窯とは0.5mと接近している。最低１回の窯体の作り替えがなされ、２時期の操業がされている。

第１次操業面は第６層下面の地山面をそのまま床としている。第２次操業面に一部削りとられるが、平坦な床面から15°～17°の緩やかな傾斜角で焼成部へ移行しているいる。壁の残りはあまり良くないがほぼ垂直に0.36m立ち上がる。粘土を貼った形跡は認められず、地山のままであった。焼成部の遺存長は2.6mであった。燃焼部からは大型の埴輪片が残されており、これを埋めるように第４・５層を置き、さらに燃焼部の位置を焚口部へずらして窯の改造が行われている。

第２次操業面は、地山面・第３層を床とする。燃焼部はJ-15からN-17の範囲で床面が窪んでおり、軸長1.7m、幅1.15mを測る。焼成部へは13°～15°と傾斜角が緩くなっている。焚口部から灰原にかけては前庭部に当たる平坦面がN-14付近からO-18に認められる。わずかではあるが、前庭部は第１号窯の前庭部に覆われ、第３号窯の前庭部を覆っている。第３号窯以後で第１号窯の以前に操業していた時期があったと推定される。前庭部の範囲は、第１～３号窯とも斜面部で共通して斜面の変換点で踏み留まっている。灰原部も同様で、O-14以下谷部分の斜面には下位群の第５・６号窯の窪みを埋めるように窯から掻き出された焼土・炭化物などの残土と共に円筒埴輪を主体とした埴輪片で覆われている。操業面の観察から第２号窯は最低２時期の操業を行っていることがわかる。

第２次操業面を埋める堆積土は自然な状態で観察され、第１層から第６層が認められる。いずれの堆積土もローム土を主体としており細粒で、概して締まりがない。焼成部の床面から大部分が細片となった円筒埴輪が出土している。これらの埴輪片を上向きに並べ置いて焼き台にしたやや大型の円筒埴輪片などが窯底に敷かれていた。

出土遺物のほとんどは２条突帯を有する円筒埴輪であったが、馬などの形象埴輪片も少量認められた。特殊な遺物として前庭部より石製模造品が出土している。

第２号窯跡出土遺物（第109～111図、図版64・65）

本窯より出土した遺物は、窯体内・灰原ともほとんどが埴輪片であり総重量39.5kgであった。普通円筒埴輪を主体とし、以下朝顔形円筒埴輪、形象埴輪がある。他にわずかではあるが土師器が出土している。

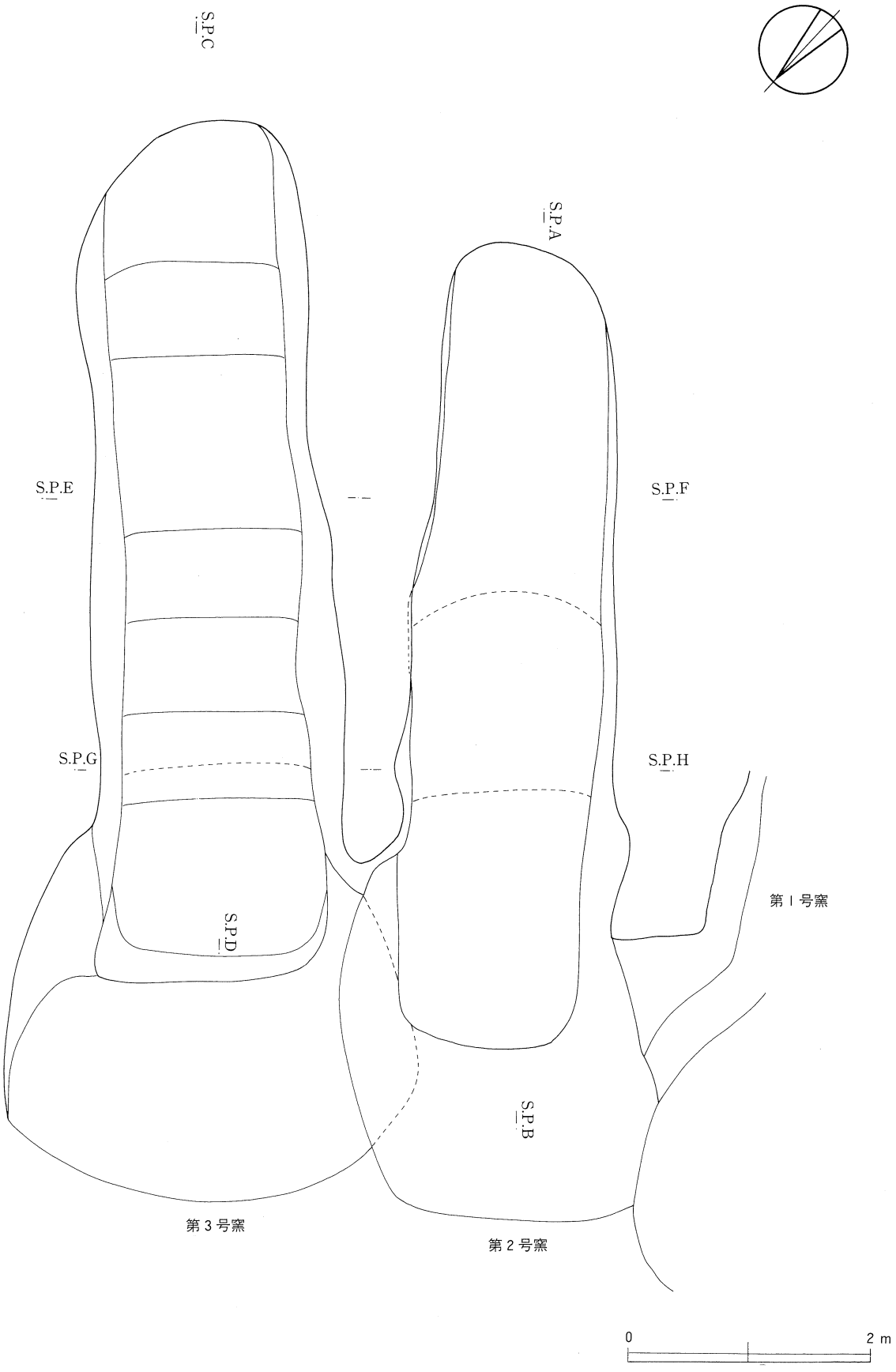
a　普通円筒埴輪（第109・110図、第41・42表）

普通円筒埴輪で全容の明らかなものはほぼ半身が出土している１があり、焼台に使用されたものと思われる。２条突帯３段構成で口径25.2底径13.2器高34.3cmを測る。１号窯の普通円筒埴輪に比して一回り小振りだが、底部から直線的に外反していく形態は共通している。また、口径、底径、器高の比率もほぼ等しくなつている。底部粘土版巻上げ円筒から製作されており、外面ハケ後突帯を貼付ける。内面は底部から口縁までハケによる。口縁はわずかに外反させ、角頭状をしている。口縁部の外面には弧状の篦記号が描かれている。4.11は同形態の円筒埴輪であろう。3.5.6.12.13は１よりさらに口径底形が小さく、体部・底部の外半の度合が直立的でやや形態が異なる。2.7.8は口径29.8cmで本窯の一群では最も大きいが、段の幅はやや狭いので３条突帯４段構成をとると考えられる。接合はしないが８のような体部・底部をしていると推定される。9.10.12は小形の一群になる。

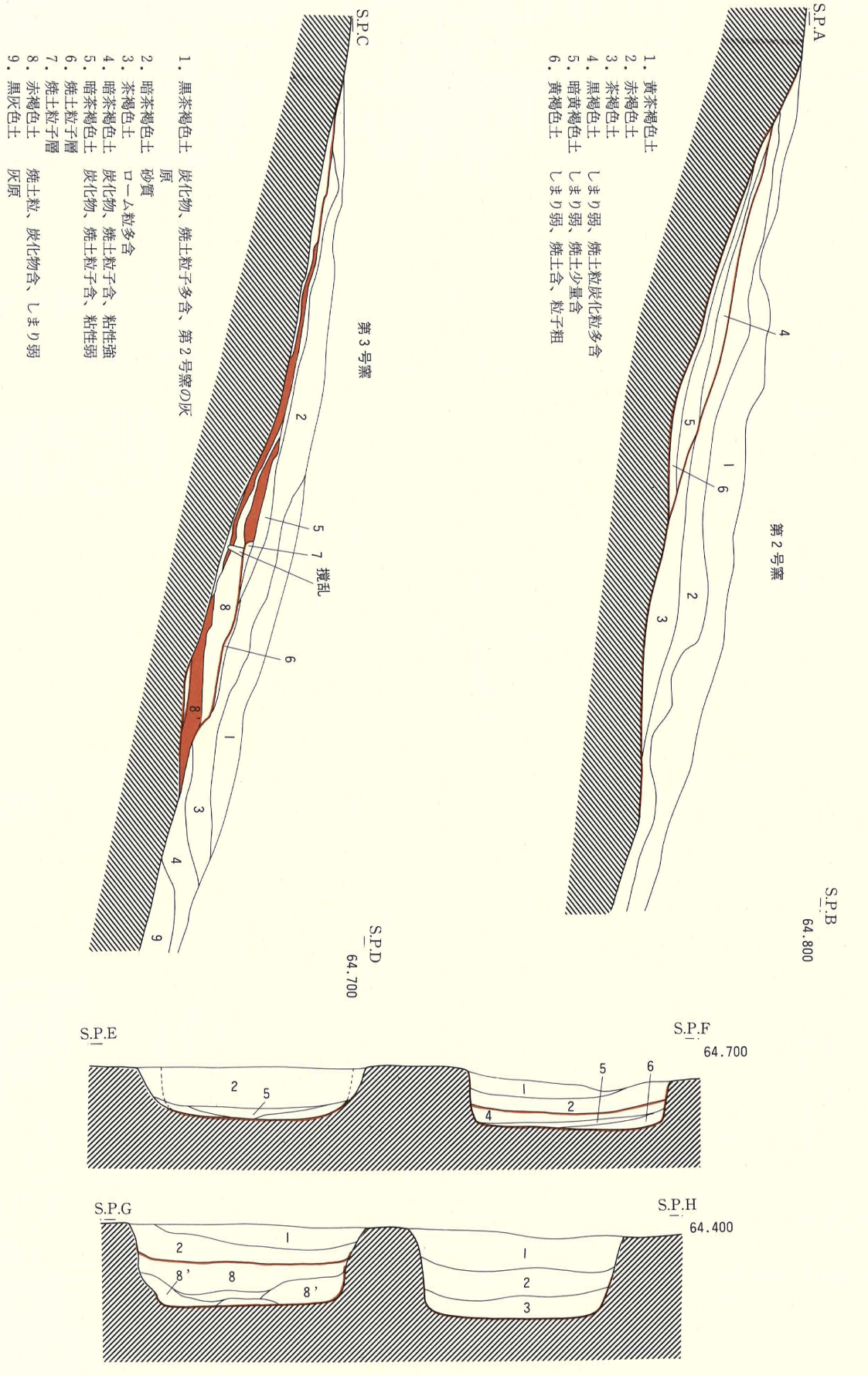
b　朝顔形円筒埴輪（第110図、第42表）

完存品はないが、口縁部から体部の破片が確認されている。20は頸部・体部の大半が３号窯内から出土しているが２号窯の灰原出土片と接合している。口縁部はあまり外反しない、体部以下を３段構成とすると約80cmほどの器高となる。透かし穴は体部上段と中段に楕円と略円形に穿たれる。

c　形象埴輪（第111図）



第106図　姥ヶ沢遺跡第２・３号埴輪窯跡平面図



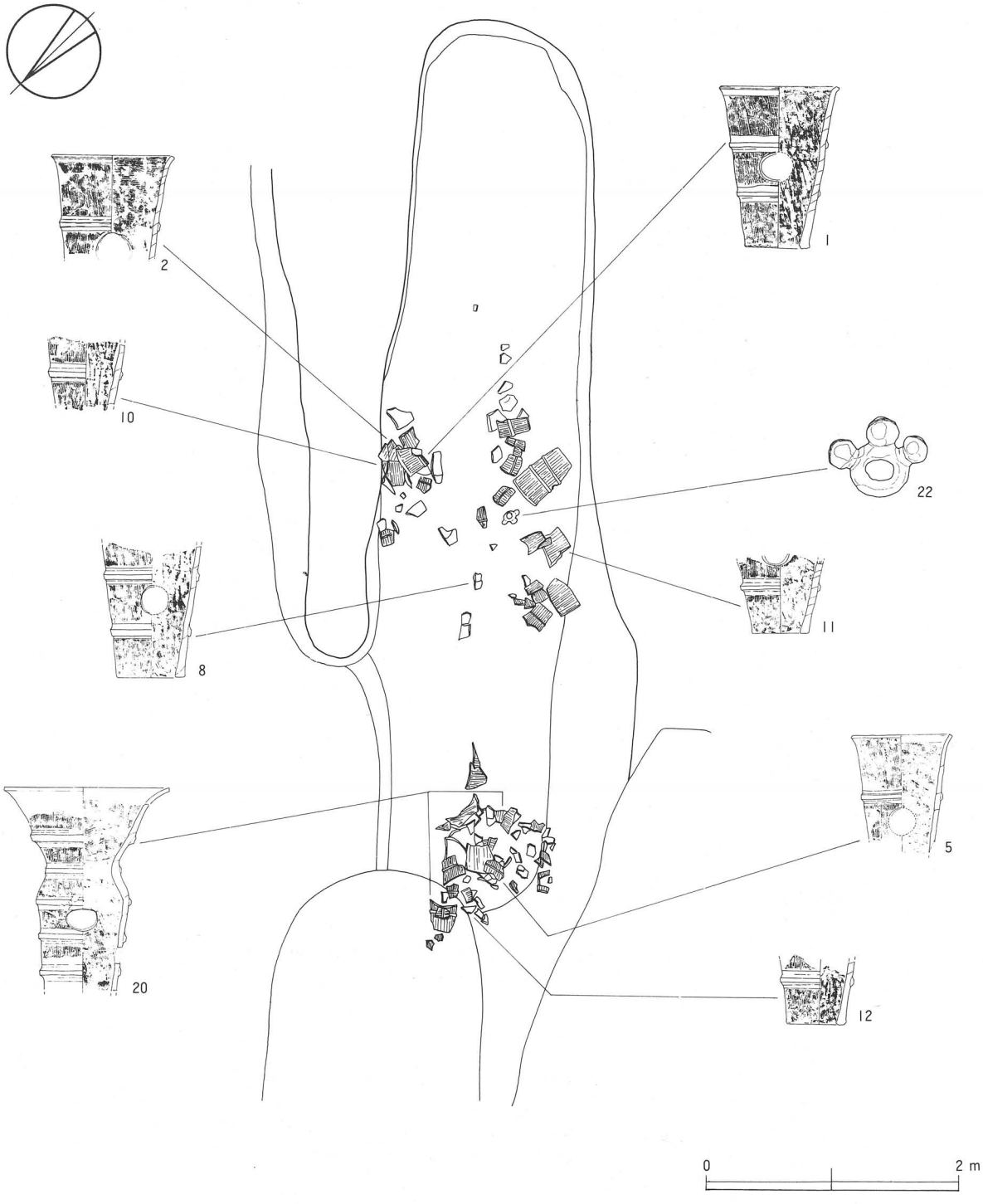
第107図　姥ヶ沢遺跡第２・３号埴輪窯跡セクション図

三環鈴形埴輪（22）

環の直径は約6.2cm、鈴の直径約3.0cmをはかる。鈴は粘土玉に切り込みを入れただけで鈴口を表わし、環にしっかりと接合する。鈴はほぼ60度に配置されることから、初期の三環鈴を忠実に模倣したものと思われる。鈴環の一方には接合面と思われる当りが認められる。当初は馬形埴輪などに取り付けたと思われる。

人物埴輪（23）

左手首部分である。掌や手首の括れを表現せず、棒



第108図　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡遺物出土状態



第109図　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡出土遺物(1)

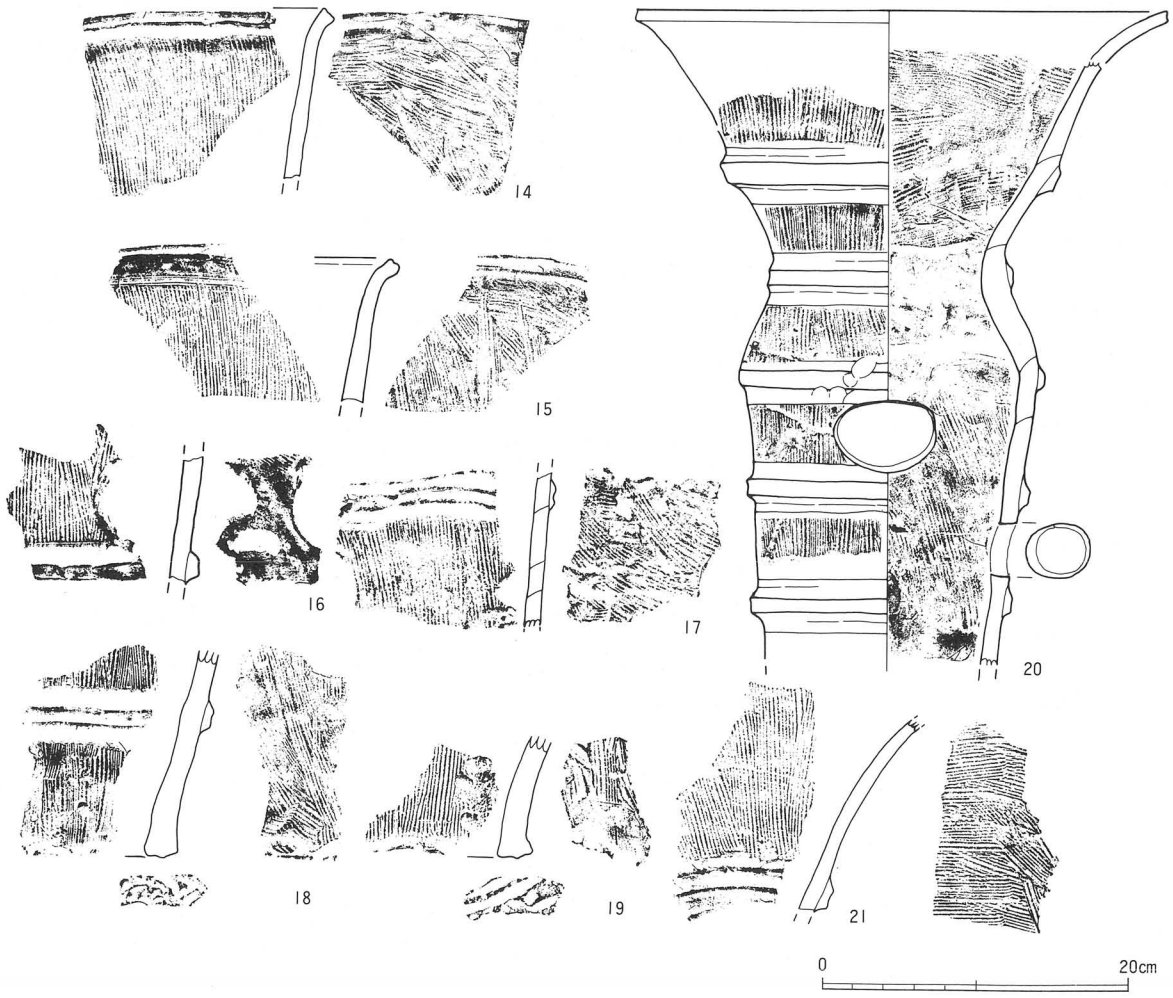
状の粘土の一端を平板化したところへ細棒状の粘土を貼付けて指としている。表・裏面ともよくナデられている。

第３号窯跡（第105・106・112図・図版53）

上位群の北端Ａ-10からＬ-13に位置する。煙道部から焼成部の一部は失われているが、窯体及び灰原が確認される。窯体の主軸方位はＮ-136°-Ｅを指す。窯体は現存長5.8mを測るが、焼成部と燃焼部の境界はあまり明瞭でない。現存する焼成部は現存長3.8m、幅1.3m程で箱形を呈し、煙道部に移行すると思われる。燃焼部から焚口部はＨ-１～Ｌ-13にかかる範囲で軸長1.6mを測る。床面は平坦ではなく焚口付近は斜面に移行しはじめている。改窯を含め２時期の操業をしている。

第１次操業面は、第８層下面の地山面を床としている。平坦な燃焼部前面から12°～14°の傾斜角で焼成部へ移行している。焼成部は幅1.25m、壁は立上がり25cm程で変換点から1.8m程で失われる。燃焼部には焼土塊や埴輪片を含む焼土などで埋まっており、第８層を構成している。窯体内には多くの埴輪片が残されており、朝顔形円筒埴輪など認められた。

第２次操業面は第８層を床とする。第１次操業面の燃焼部の窪みに溜まった焼土などを埋めるように第８層がかさ上げされ、変換点を焼成部側へ移動する。焼成部の傾斜は途中から14°～16°と緩くなっている。焚口部から灰原にかけては前庭部に当たる平坦面が大きく堀拡げられておりＬ-９付近からＯ-15に認められ、南側は隣の２号窯前庭部に削られる。Ｏ-９以下谷部分の斜面には下位群の第7.8号窯の窪みを埋めるように窯から掻き出された焼土・炭化物などの残土と共に円筒埴輪を主体とした埴輪片が散



第110図　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡出土遺物(2)

布している。

第２次操業面を埋める堆積土は自然な状態で観察され、第１層から第８層が認められる。いずれの堆積土もローム土を主体としており、細粒で概して締まりがない。天井部や壁に相当する構築材は認められなかった。

出土遺物は普通円筒埴輪であったが、形象埴輪として子鹿の頭部が灰原から出土している。

第３号窯出土遺物（第113～115図、第43・44表）

本窯より出土した遺物は、窯体内・灰原ともほとんどが埴輪片であり総重量12.0kgであった。普通円筒埴輪の他には形象埴輪がある。

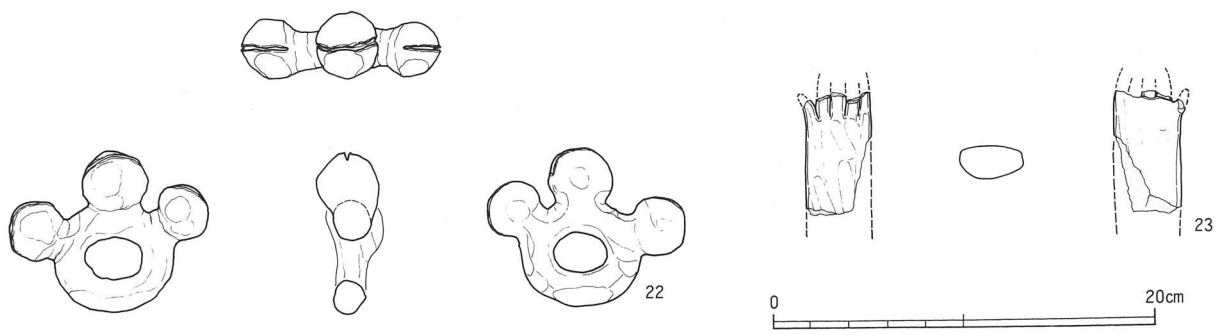
ａ　普通円筒埴輪（第114・115図、第43・44表）

普通円筒埴輪で全容の明らかなものはないが、２条突帯３段構成をとると推定される口縁部、体部、底部の各部分が残る。口縁部は直径約27cmの1.3.5と約24cmの2.4と約20cmと小ぶりの６の３種がある。いずれも口縁端部での外反が大きく、ナデも強い。体部には円窓が開けられ底部に至る。9.10.11.13.14.15はほぼ半身を残す破片であるが湾曲、変形が大きく、焼台に転用されている可能性がある。突帯は低いがしっかりと貼付けられている。

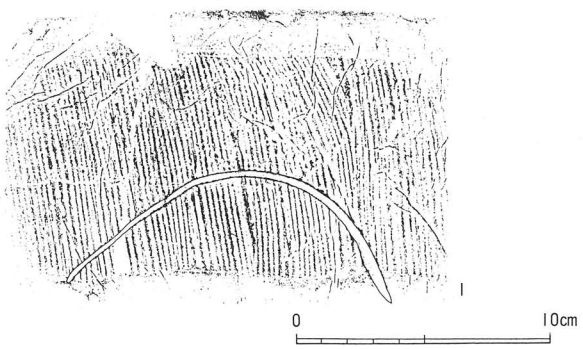
ｂ　形象埴輪（第115図、図版64）

本窯より出土した形象埴輪は、馬・鹿・人物がある。以下に各資料の観察結果を述べる。

20は、馬形埴輪の立て髪部分と考えられ、前輪に近い部分である。板状を呈し平面的で、断面形状は不均等である。全体に入念なナデによる調整をおこなった後、粘土紐を両面に連続するような形で貼付し、ラフなナデによって調整している。割れ口の内１面は背筋部分からの剝離面が残されており、僅かにハケメを観察することができる。21は、人物女子像の髷部分で、半分近くを欠損する。粘土板を鼓形に切り取ることによって髷本体を成形しており、各面は指頭によるナデによって調整されている。最もくびれる部分の上面には粘土紐が貼付されており、両端は欠損のため判然としないが角状に突出するようである。なおこの粘土紐は、髷本体を頭部と接合した後に、頭部に一部かかるように貼付されている。



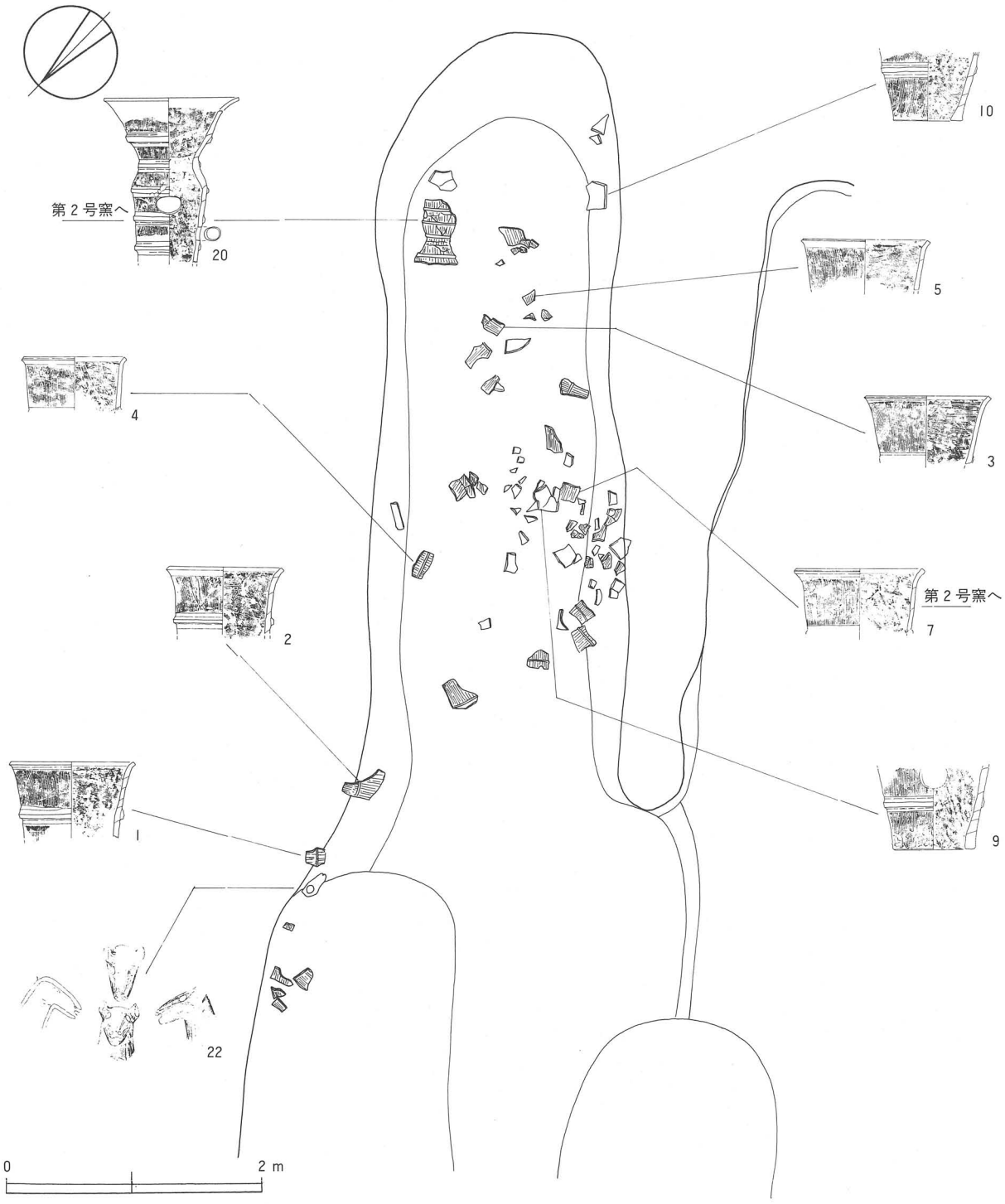
第111図　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡出土遺物(3)



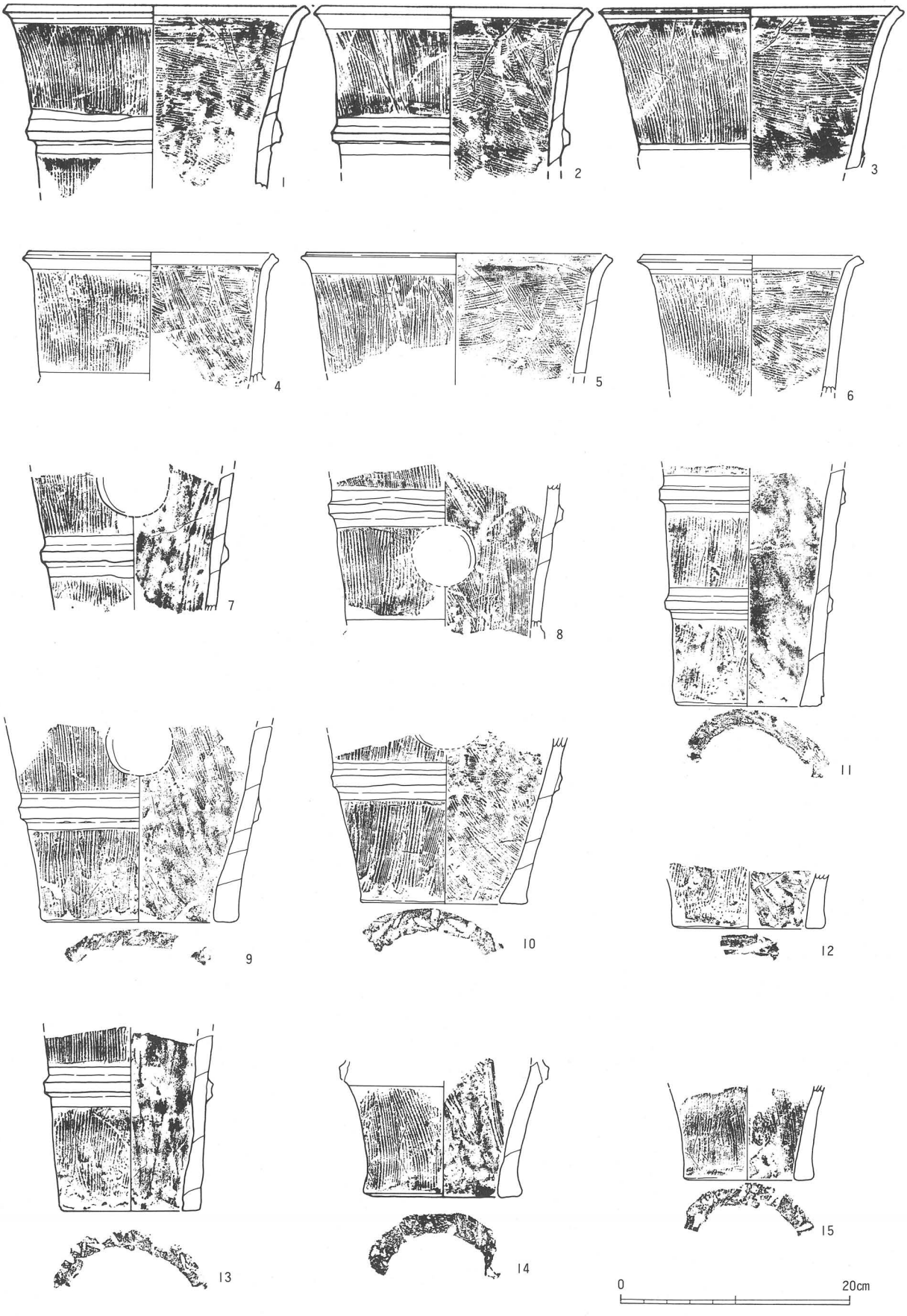
第112図　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成

髷の頭部への接合は、髷本体の裏面に残された剝離痕の状態から、頭頂部に軽く圧着する程度のものと思われる。22は、人物埴輪の腕部である。断面楕円形で中実の棒状粘土の一端を押し潰し、そこへ人差し指から小指に相当する４本の粘土紐を貼付し、側面に親指に相当する１本の粘土紐を貼付している。

上記の特徴は、第２号窯跡出土の腕部（第111図23）とは異なる特徴であるが、片面にナデを欠落させた手甲を思わす特徴的な表現である。23は、人物埴輪の腕部で、肩部付近までの遺存である。肩部付近のラインや体部との接合部分および掌部に残る剝離痕から、何かを捧げ持つ仕種を表現した人物埴輪の右



第113図　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡遺物分布図



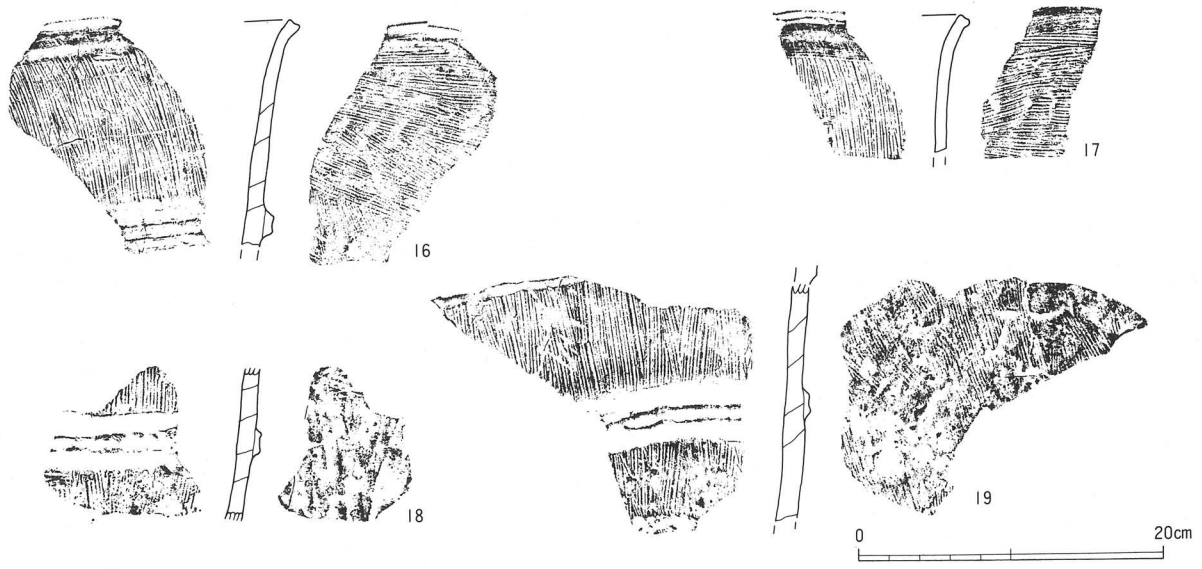
第114図　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡出土遺物(1)

腕部であるとおもわれる。成形は、中実の棒状粘土を開放した体部へ差し込み、多少の粘土をもって隙間を埋め固定している。この際に、肩部の表現は木口状の工具によって調整される。なお、掌部の成形技法は、22に酷似しており、双方の製作者が同一である可能性は高い。24は、雌鹿と考えられる動物埴輪の頭部で、頚部から頭部にかけての遺存である。頚部までは円筒埴輪と同様の輪積みであるが、頭部は板状粘土を円筒化することによって成形しており、特に頭頂部付近の内面において接合痕を明瞭に残している。鼻先は開放され、ラフなナデによって多少調整される程度である。耳は別に成形したものを差し込み、ナデによって定着させる。外面は、ハケ（10本/２cm）によってランダムな調整が施され、内面は入念なナデによって調整される。目は鋭利な工具によって楕円形に切り取った後に、ナデによって簡単に調整される。鼻孔も鋭利な工具によって切り取られるが、何ら調整は施されない。口は鋭利な工具によって左右個別でU字形に切り取られ、調整は行っていない。

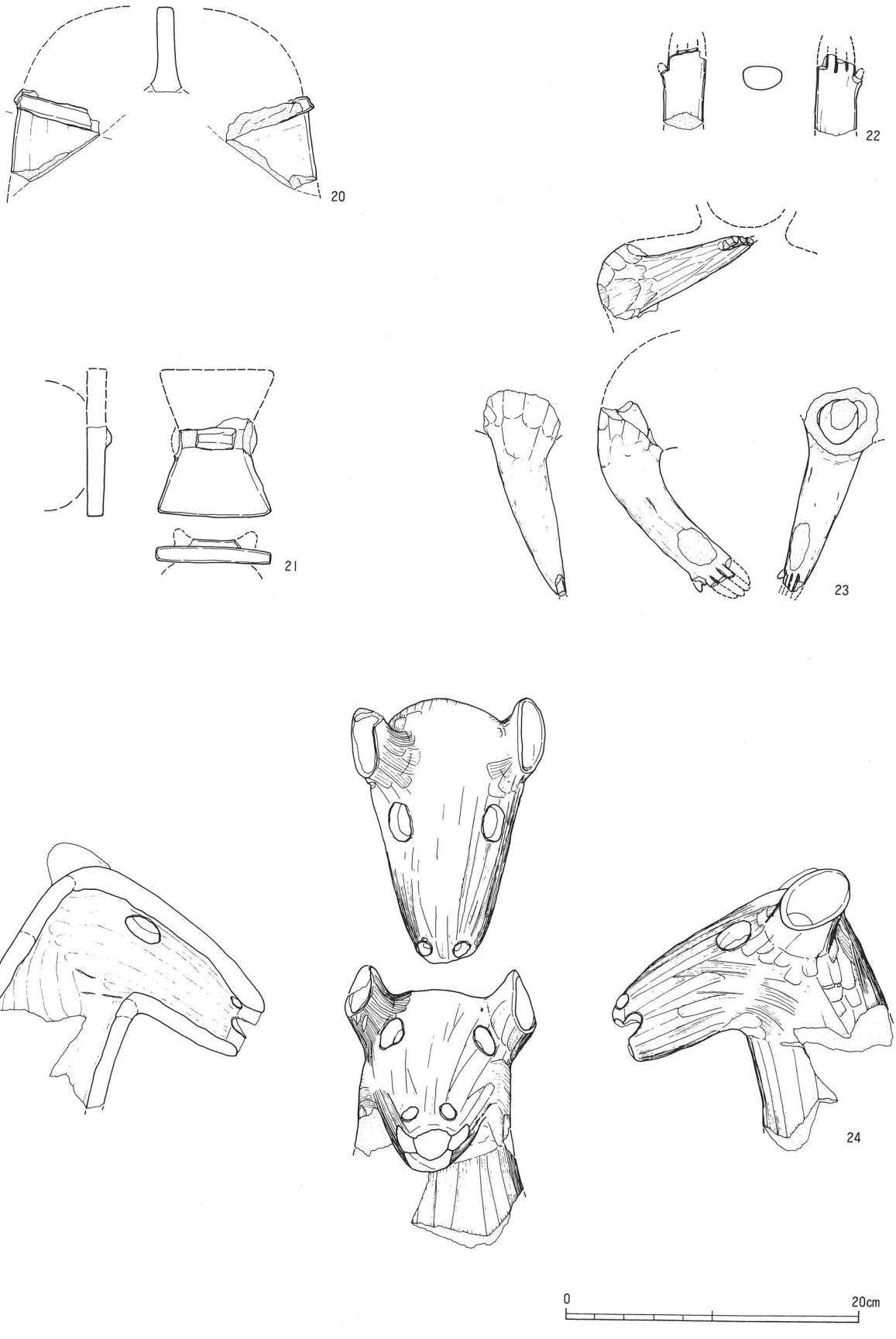
第４号窯跡（第117.118図・図版54・55）

上位群の南側G－４からR－５に位置する。煙道部から焼成部の一部は失われているが、窯体及び前庭部が良く遺存している。窯体の主軸方位はN-132°-Eを指す。現存長6.1mを測る。現存する焼成部はG－４～L－６付近までで側壁の遺存状態もよい。燃焼部とは明瞭な変換点を持つ。その燃焼部はL－４からO－５にかかる平らな床面で軸長1.5mを測る。この付近の側壁の遺存状態も良好で青灰色に還元されていた。焚口部分はこの還元層の見られなくなる位置までと推定され、M－３付近からP－５までと考えられる。前庭部は窯体側壁の幅のまま斜面下へのびる。すべて流失したものか斜面部には灰原は確認できなかった。窯体の改築等は行われていないようであったが、３時期の操業を確認している。

第１次操業面は第３層下面に確認された３枚の窯床a,b,cのうち最下位ｃで地山面としている。次に茶褐色土を主体にしたｂ、同じくａとなる。平坦な燃焼部から焼成部へは19°～21°の傾斜角で移行している。側壁は内傾しながら55cm程遺存していた。粘土を貼った形跡は認められず地山のままであったが、燃焼部・焼成部には青灰色に還元している部分が認められた。第２次、３次操業面は、大規模な改窯では無く床面の簡単な清掃の後に連続して操業されたものと思われる。各時期の床面はいずれも平坦であったが、焼成部の上段に焼台に使用したと思われる埴輪５個体が残されていた。この焼台に使用され



第115図　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡出土遺物(2)



第116図　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡出土遺物(3)

た埴輪は朝顔形円筒埴輪３個体と普通円筒埴輪２個体であるが、朝顔形円筒埴輪は口縁部を欠くものの体部は完存しており、これを床に半身を埋め込んで設置していた。この様な焼台の例はあまり類例を見ないので他の目的をもつ施設の可能性もあるが、本窯では焼成部の上端を示す位置に置かれた焼台と理解したい。焚口からは前庭部は４°～５°と緩やかに傾斜し、50を越す自然面に至り消滅する。窯体の埋没土は５層からなるが、天井の崩落土と思われる第２・５層以降自然な堆積をしているようである。 燃焼部からは２個体の円筒埴輪が検出されている。いずれも、須恵質に焼かれ一つは大きく歪んでいた。この復元可能な円筒埴輪のほかにはほとんど遺物が無い。焼成部・燃焼部とも埴輪片が捨てられていない。あるいは窯出しの後に清掃されているとも思われる。本来完成品でない青灰色の円筒埴輪が残され、砕かれた石製模造品が焼成部にばらまかれている。その後この埴輪窯は再び操業されることは無く埋没している。本窯の出土状態の意味する所は、窯の廃絶に伴う事情を反映していると推定するのは考えすぎではないかもしれないが、その一つの考えは、青灰色の埴輪の出来る窯を封じ込めるための祭祀を行ったのではないか。焼成部の床ａ面から検出された剣形の石製模造品は砕かれた破片で２点出土している。

第４号窯跡出土遺物（第119・120図、図版65～67）

第４号窯遺物は26.0kgを量り、その内訳は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪で、形象埴輪は含まれない。図示した円筒埴輪のうち１・８・９・10は焼台として窯尻部に仰臥されていたものである。

ａ　普通円筒埴輪（第119図、第45表）

普通円筒埴輪で全容の判明するものは１～３の３個体である。すべて２条突帯３段構成品である。

全容の判明した各個体は器形・法量・突帯貼付間隔等の差異を認める事ができ、３は、他の個体と比較した場合小形である。

成形は、全資料において幅30cm程度の粘土板を円筒化した後、粘土紐によって巻き上げか輪積みを行っている事が確認される。

外面調整は全て縦ハケによってなされる。

内面調整は、ナデによって調整した後、ハケによる調整を行う事で共通する。

突帯は概ね高く（0.4cm以上）、断面形状は凡例分類のＢ類が主体となり、Ｃ類が極僅かに存在する。突帯は直線的に貼付され調整の入念な場合と、蛇行気味に貼付され調整も粗雑な場合がある。前者は木口状の工具によるナデ、後者は布ナデによって調整され、割合的には前者が主体的である。

口唇部は凡例分類のＦ類とＣ類が存在しており、両者の割合はほぼ均等である。調整は木口状工具による入念なナデの場合と、布による粗雑なナデの場合があり、前者が主体的である。

透孔はほぼ正円形に統一されているが、一点のみハート形に近い不整円形を呈するものが存在している(3)。

焼成は燈色系の発色を示す酸化焔焼成品と、暗紫灰色の発色を示し硬質な還元焔焼成品の２種が存在している。本窯の還元焔焼成品は、いわゆる須恵質に焼成された埴輪である。線刻（ヘラ記号）は確認されていない。

ｂ　朝顔形円筒埴輪（第120図、図版66・67）

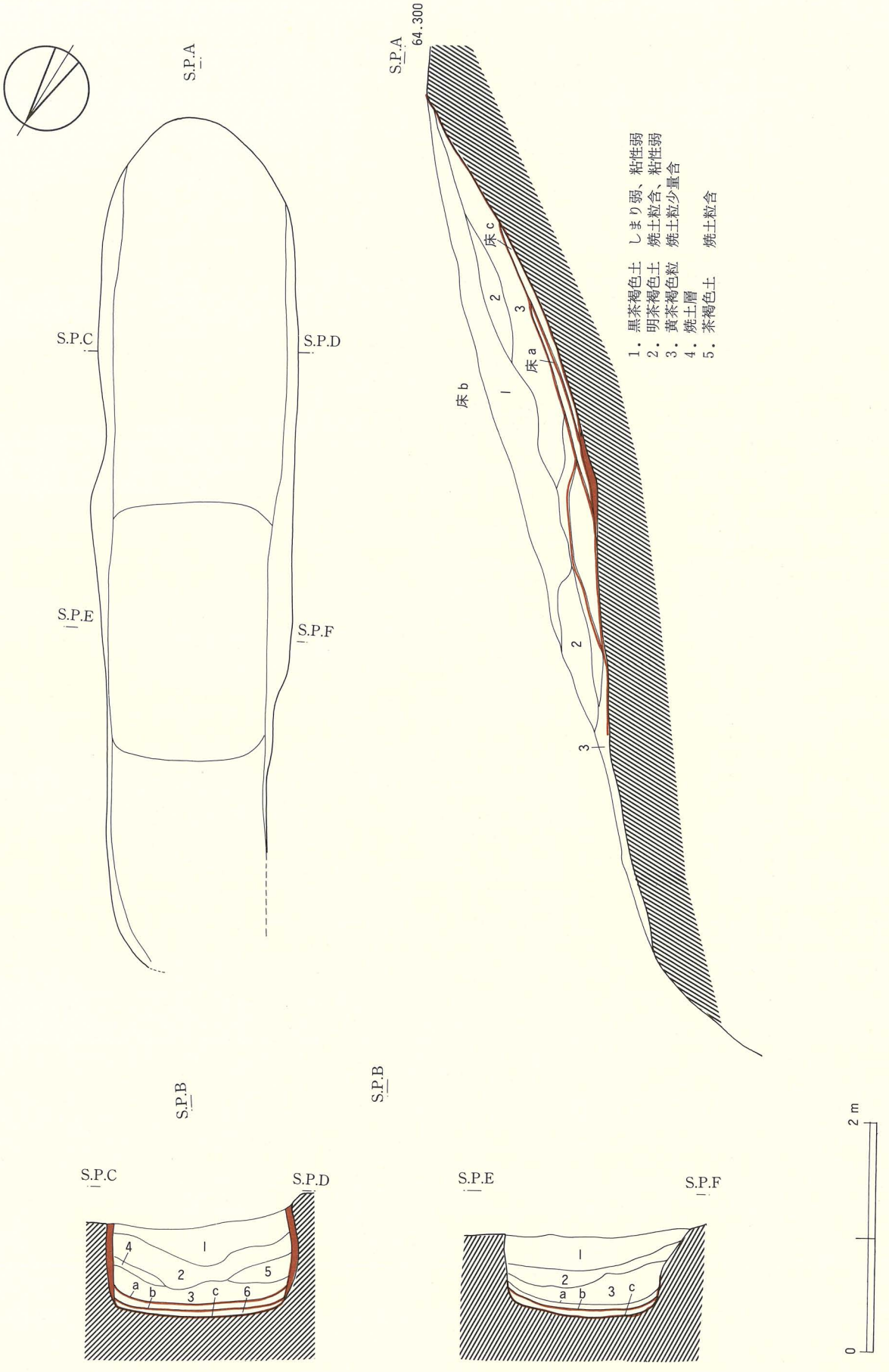
朝顔形円筒埴輪で全容を把握することの可能な個体は存在していないが、図示した３個体（８・９・10）は、口縁部を欠落するのみであり、概ね全容を把握することが可能である。朝顔形円筒埴輪３個体は全て５条突帯６段構成品で、器形・突帯貼付間隔等の近似した規格性の高いものである。

成形は、普通円筒埴輪と同様に輪積みか巻き上げによって行うが、特に第５突帯部に明確な乾燥単位を設けており、疑口縁状を呈する。なお、８・９の底部内面には木目圧痕が残されてり、底部粘土板成形時の作業台密着面であると考えられる。

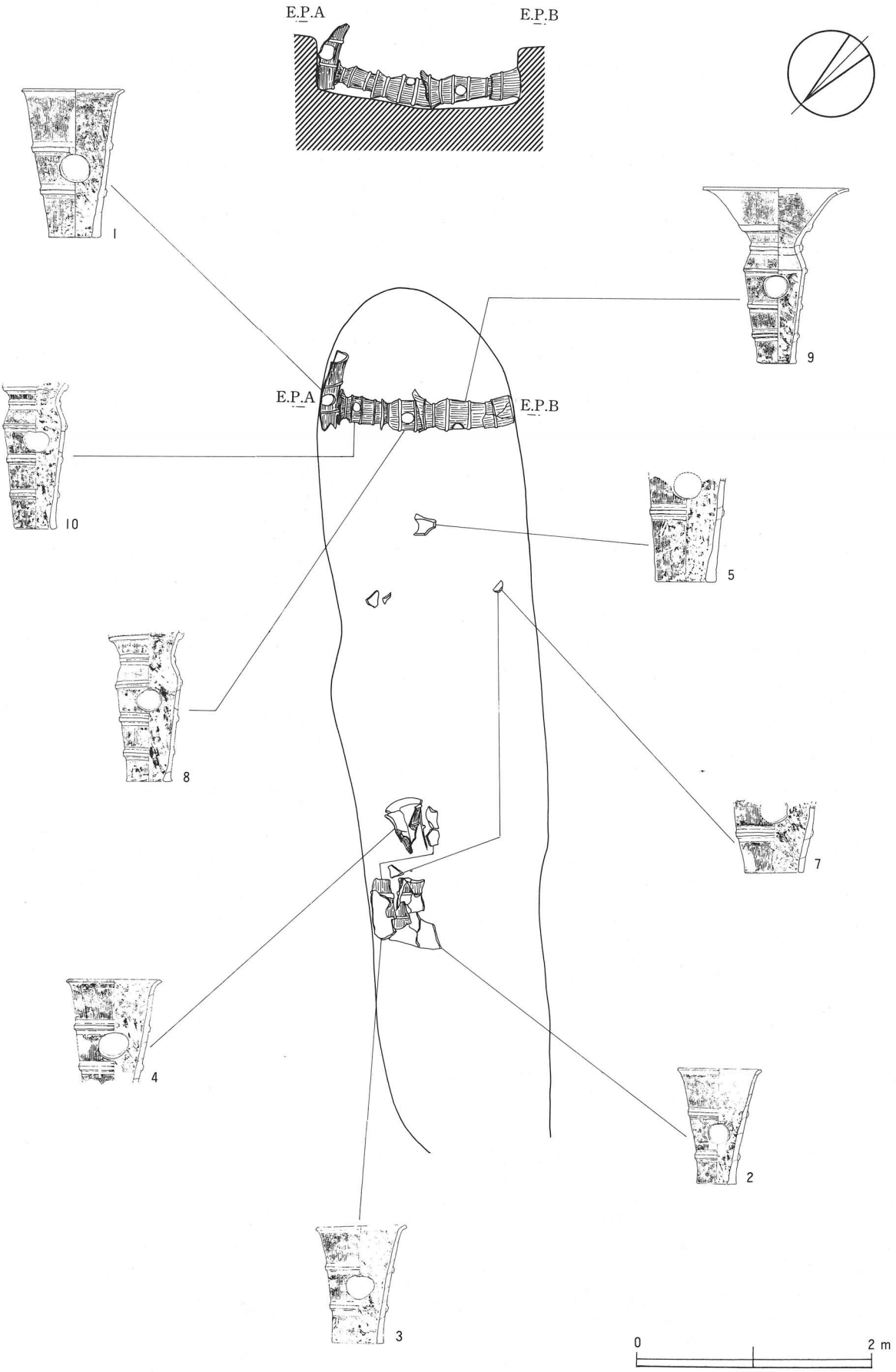
外面調整は、第５突帯以上は突帯貼付に後出する縦ハケ調整である。

内面調整は頚部以下はナデとハケを併用したランダムな調整であるが、頚部以上は斜位のハケによって調整される。

突帯は、普通円筒埴輪同様、凡例分類のＣ・Ｂ類



第117図　姥ヶ沢遺跡第４号埴輪窯跡平面図



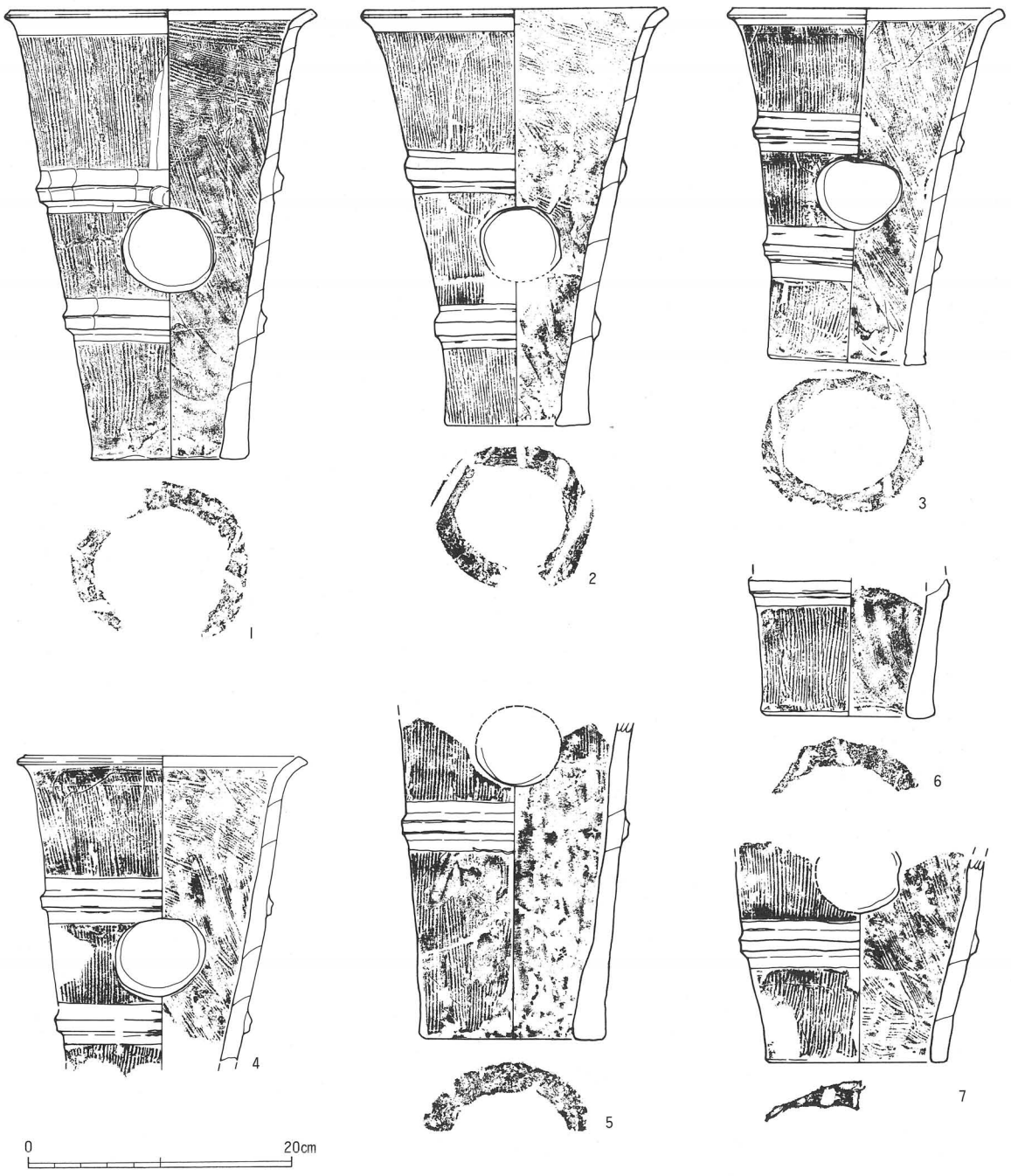
第118図　姥ヶ沢遺跡第４号埴輪窯跡遺物分布図

が主体であるが、第５突帯に関してはやや幅広のベルト状を呈している。

口唇部については、残存する個体が存在しないため不明である。

第５号窯跡（第121～123図、図版55～57）

下位群の北端でH－９からR－11に位置する。北に位置する第４号窯とは1.5m程、南に位置する第６号窯とは0.8m程と接しているが切り合いは認められない。煙道部から焼成部の一部は上位に位置する第３号窯により削平され、焚口以下前庭部、灰原とも流失している。窯体のほとんどは第３号窯または第２号窯の掘削土とその灰原に覆われる。そのため、保存状態は意外に良好であった。窯体の主軸方位はN－135°－Eを指す。窯体は現存長4.8m、幅1.2mを測るが、焼成部と燃焼部の境界付近は幅1.1mとやや狭くなる。焼成部と燃焼部の境界には明瞭に変換点があり、第１次から第３次操業面までは15°～17°、第



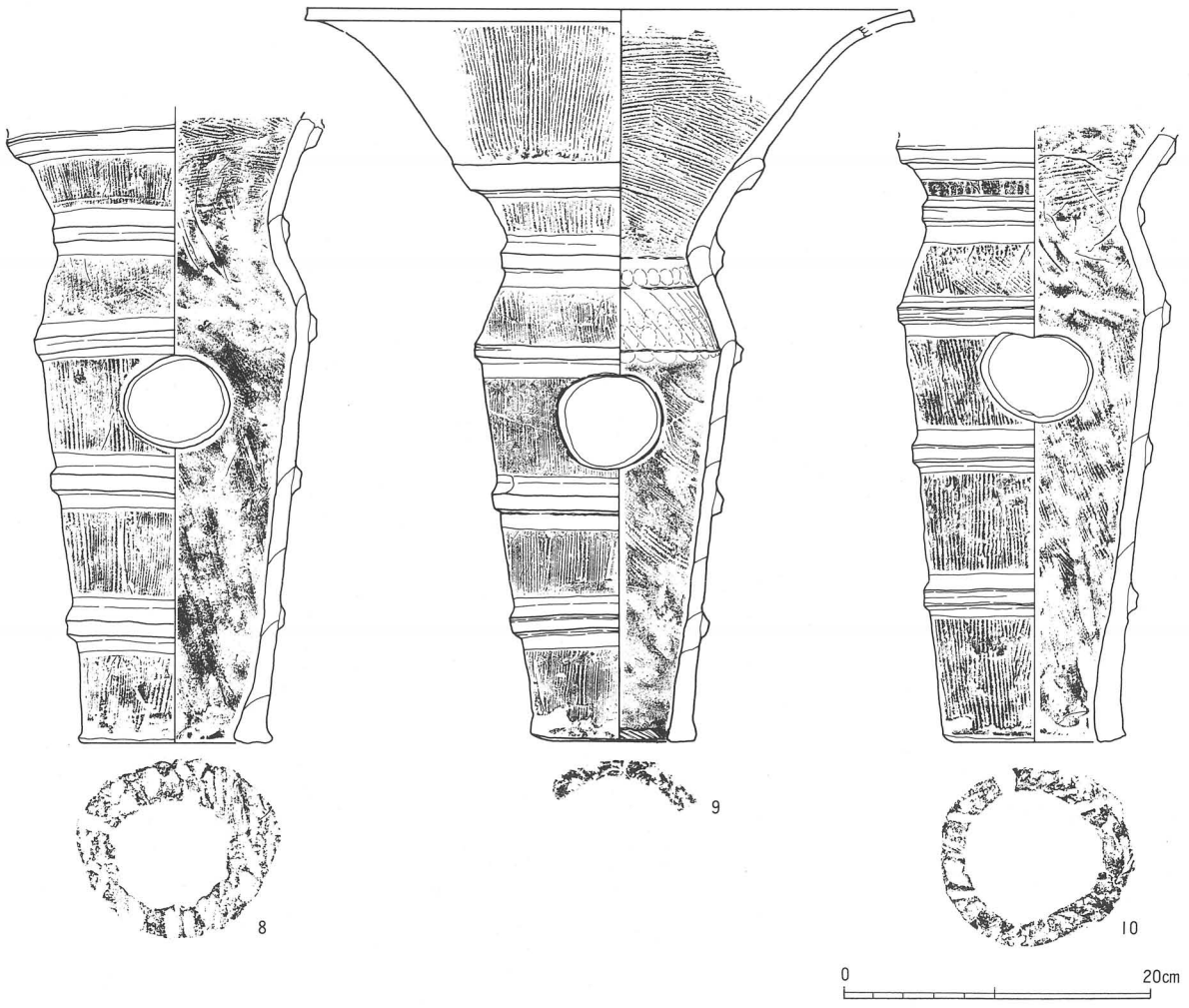
第119図　姥ヶ沢遺跡第４号埴輪窯跡出土遺物(1)

４・５次操業面では18°～20°まで平面で、凹凸の少ない焼成部へ移行している。焼成部の先端には焼き台に使用されてたと思われる円筒埴輪が敷かれており、ここまでを焼成部とすると、軸長2.6mとなる。土層は、10層観察されるが、改窯は認められない。燃焼部焚口部に残された焼土・炭化物の掻き出された床の状況から５時期の操業が認められる。この床面は、下位よりａ.ｂ.ｃ.ｄ.ｅとする。

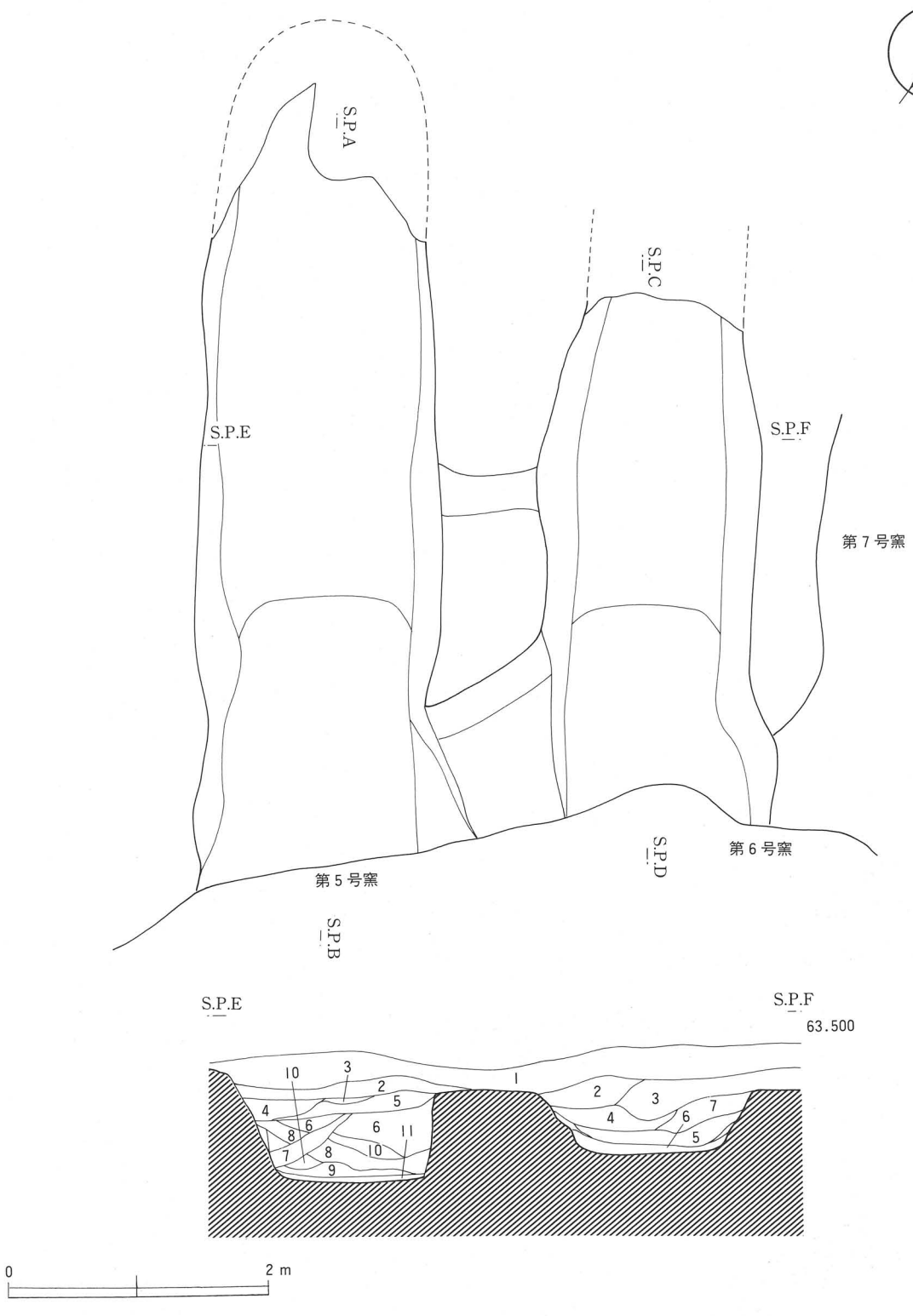
第１次操業面は、地山面のａ床としている。緩やかに傾斜する燃焼部から焼成部へ至る。ａ床上の焚口部左側の壁際には火入れに際して行われた祭祀によるものか土師器坩形土器が出土している。第２次操業面は、ａ床に５㎝程嵩上げしたｂ床面である。第３次操業面はｂに７㎝程嵩上げしたｃ床面である。炭化物・焼土の堆積がやや厚く見られた。第４次操業面はｃ床に10㎝程嵩上げしたｄ床面である。第５次操業面はｄ床面に５㎝程嵩上げしたｅ床面である。最終の操業面であるが、焼成部・燃焼部とも遺物の出土が少ない。本窯で焼成したものか明らかでないが、焼成部等から出土する円筒埴輪片と焼き台に使用されたまま窯底に残された円筒埴輪は大きさの異なる別型式の物であることが注意される。壁はほぼ垂直に0.51m立ち上がる。燃焼部では約0.8m程遺存していた。粘土を貼った形跡は認められず、地山のままであったが、良く焼土化していた。本窯の出土遺物は、ａ床面上の土師器・焼き台に使用されていた円筒埴輪と少ない。

第５号窯出土遺物（第124～126図・図版67）

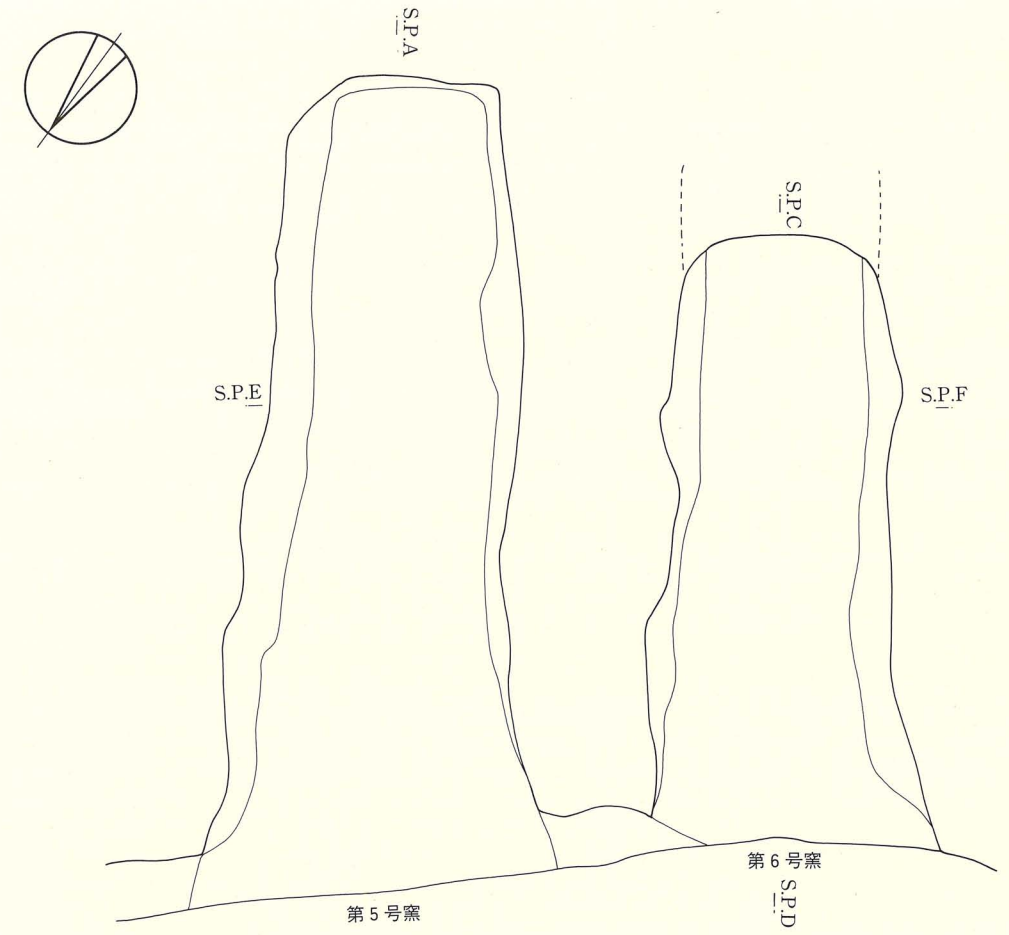
本窯より出土した遺物は、総重量15.5kgを量り、

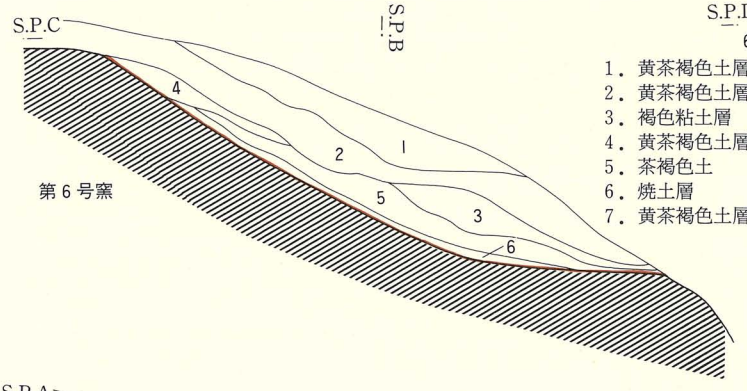


第120図　姥ヶ沢遺跡第４号埴輪窯跡出土遺物(2)



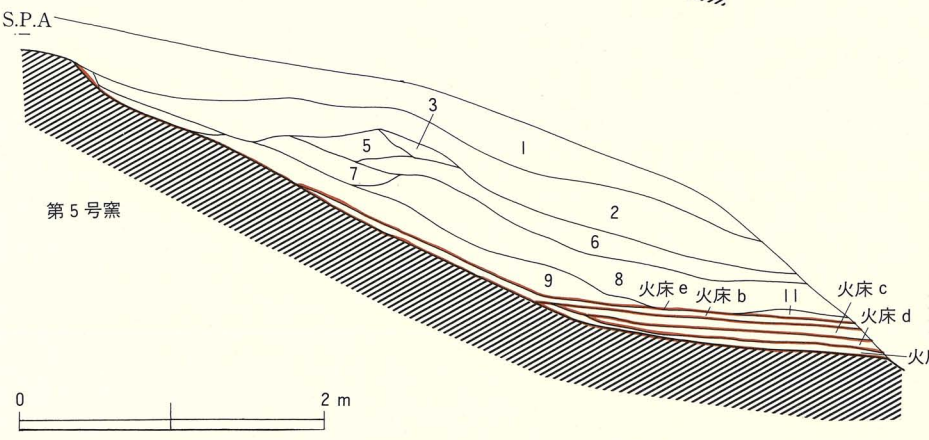
第121図　姥ヶ沢遺跡第５・６号埴輪窯跡平面図(1)





S.P.D
63.400

1．黄茶褐色土層　粘土粒含
2．黄茶褐色土層　焼土粒、炭化粒含、砂質
3．褐色粘土層　しまり、粘性強
4．黄茶褐色土層　しまり弱、炭化粒、焼土粒含
5．茶褐色土　しまり弱、焼土粒多含
6．焼土層
7．黄茶褐色土層　しまり弱、焼土ブロック含、砂質



S.P.B
63.500

1．黒灰層
2．黄褐色粘質土層
3．黄褐色粘質土層　黒色土含
4．黄褐色粘質土層　焼土粒含
5．灰白粘土層
6．黄白粘土層
7．暗褐色粘質土
8．黒色土　しまり弱
9．灰褐色土　焼土粒多含
10．黄茶褐色粘土層
11．焼土層

第122図　姥ヶ沢遺跡第５・６号埴輪窯跡平面図(2)

普通円筒埴輪のみである。

a　普通円筒埴輪（第124・125図、第46・47表）

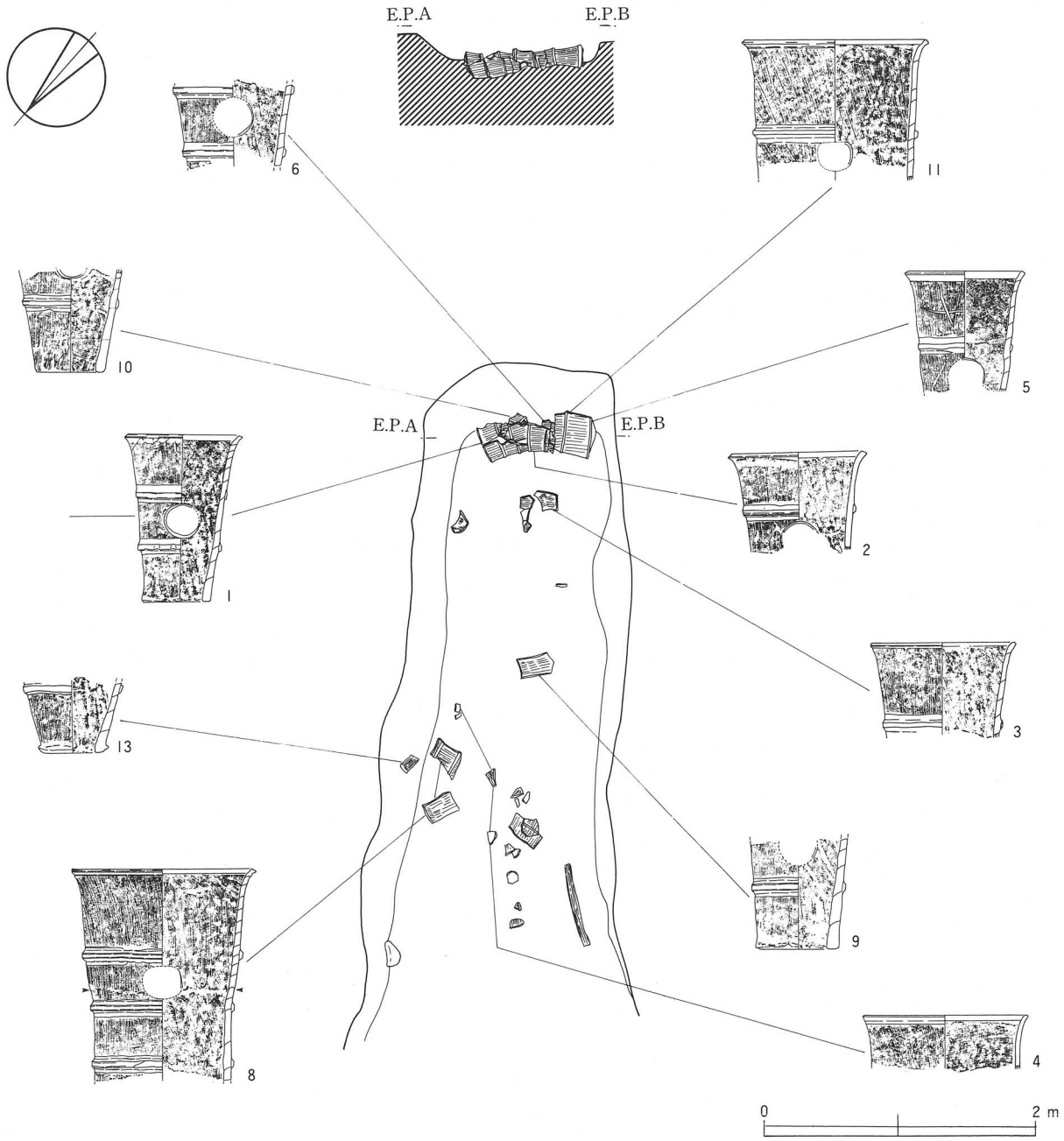
普通円筒埴輪で全容が判明するのは、１の一個体のみであり、２条突帯３段構成品でやや小形なものである。８は現状で３条の突帯が確認でき、口径や傾き等から４条ないし５条突帯の準大形品か大形品である可能性が高く、４・11も８と同様なものであろう。しかし、他の個体を観察した限りでは、２条突帯３段構成がその主体をなしていたことがうかがわれる。

成形は、例外なく輪積みか巻き上げによって行っているが、８は現状での第２第３突帯の間に乾燥単位が認められ、乾燥単位を境に歪みを生ずることから、個別に成形した円筒を連結するような成形技法である可能性も考えられよう。

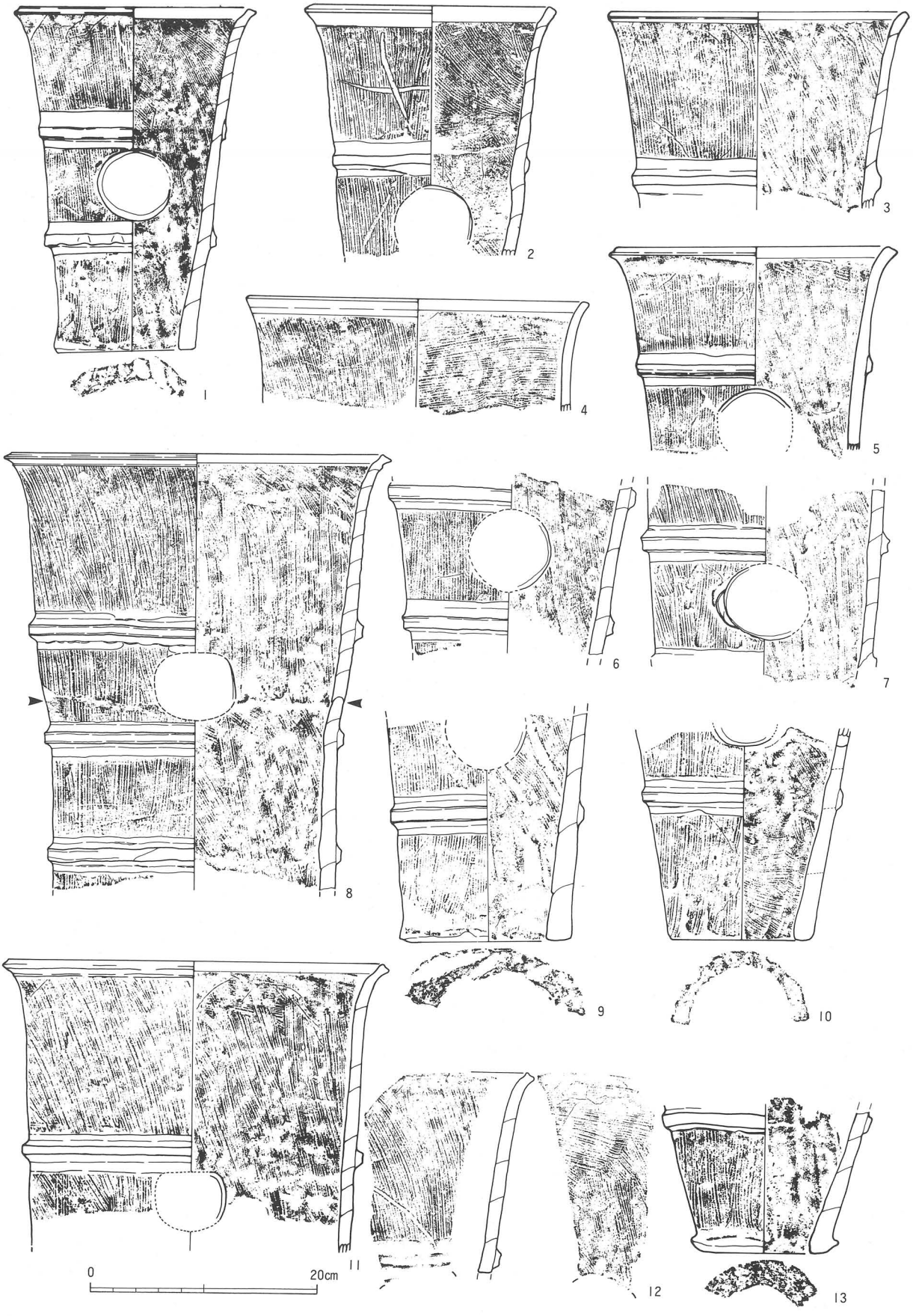
外面調整は全て斜め気味の縦ハケによってなされるもので、突帯貼付に後出するものは認められない。

内面はナデとハケを併用したランダムな調整で、複数のパターンが確認される。

突帯は概ね高い（0.4cm　以上）もので、その断面



第123図　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡遺物分布図

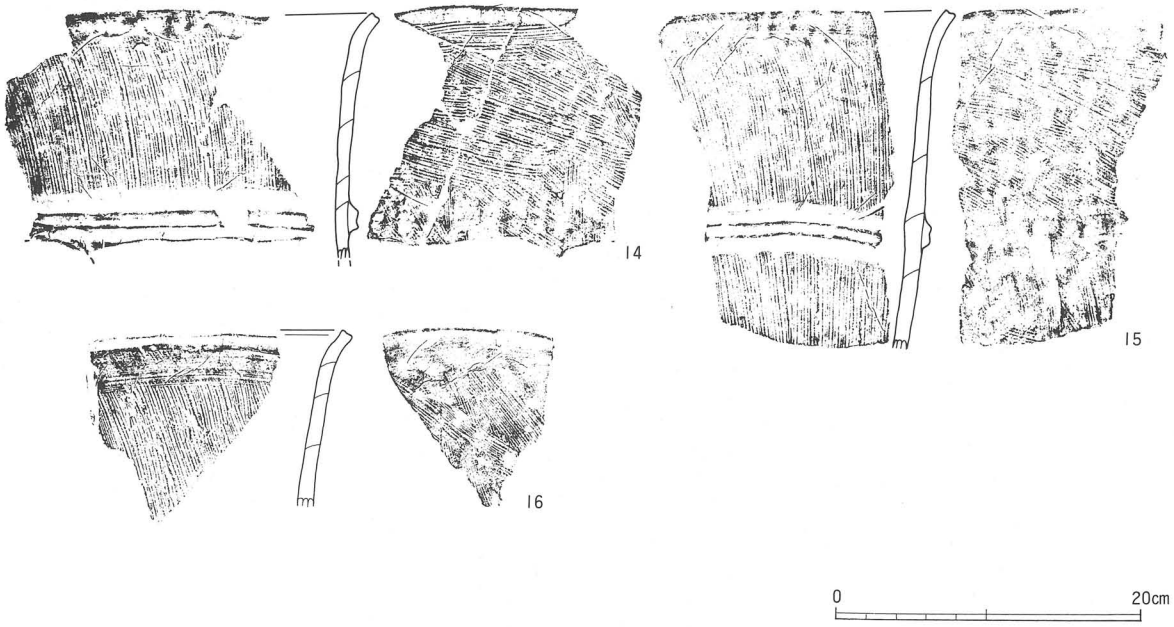


第124図　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡出土遺物(1)

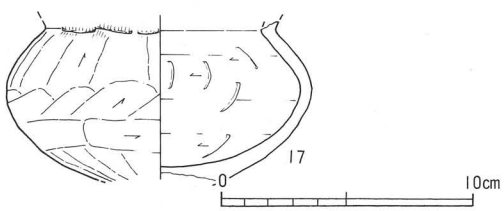
形状は凡例分類のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類が確認され、Ｃ類が主体となる。

突帯の大半は、蛇行すること無く貼付されており、その調整には工具を併用するものと獣皮・布を併用した指ナデによるものの２者が存在している。前者が、主体となるものである。　口唇部は凡例分類のＡ・Ｂ・Ｄ・Ｆ類が認められ、Ａ類が最も多く、次いでＢ・Ｆ類、Ｄ類は１点のみである。調整は工具を用いるナデが指ナデよりも多く、ナデも入念なものが主体的である。

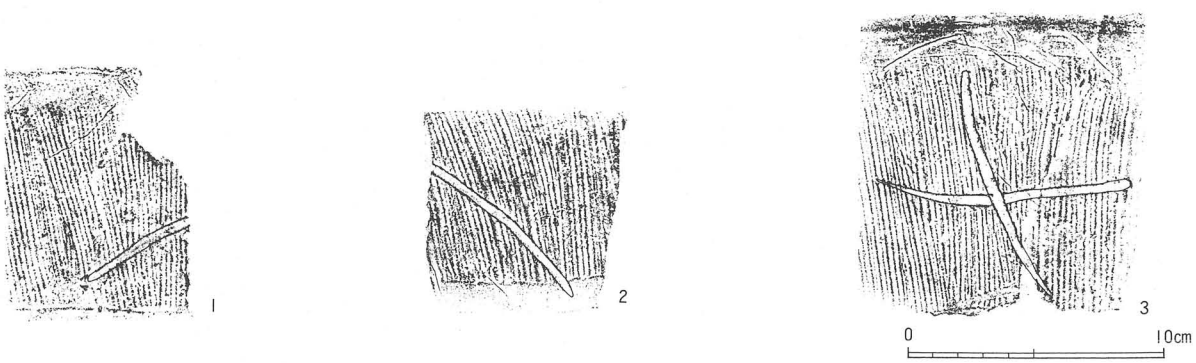
透孔の形状には正円・不整円・半円形のものが認められ、正円形透孔が主体となる。半円形透孔は半円形を呈するもので、準大形・大形品に集中する。焼成は酸化焔焼成品は少ないが、大差ではない。　胎



第125図　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡出土遺物(2)



第126図　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡出土遺物(3)



第127図　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成

土は比較的良質なものを用いており、多少の差異を見せるが、概ねその特徴は共通している。

線刻（ヘラ記号）の施されるものは１・２・12の３点であり第127図に示しておいた。

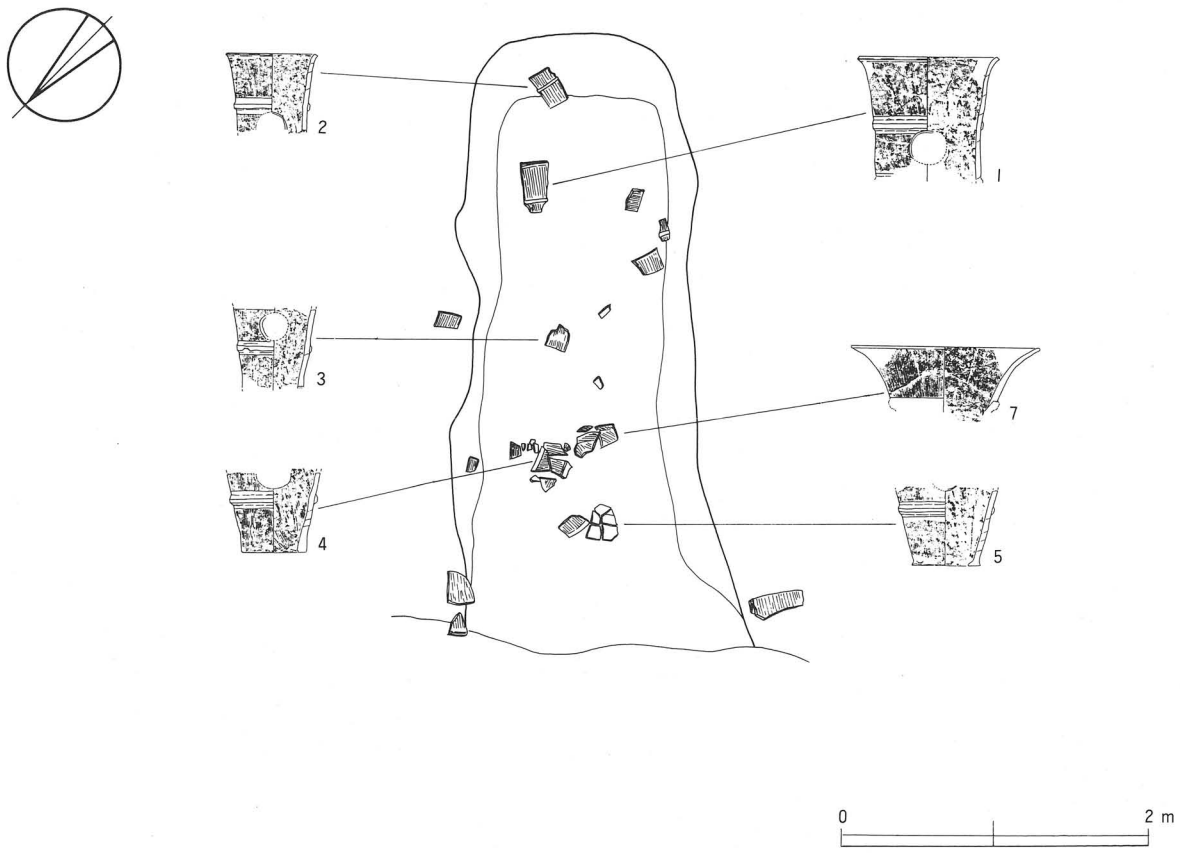
第６号窯跡（第121・122・128図、図版56・57）

下位群の北端より２基目、N－４からR－16に位置する。北に位置する第５号窯とは0.8m程、南に位置する第７号窯とは0.5m程とかなり近接しているが切り合いは認められない。ただ、第７・８号窯は、流失しているものの主軸の交錯する焚口部から前庭部で重複していたものと思われる。煙道部から焼成部の上位に位置する第３・２号窯により削平され、焚口部以下、灰原とも流失している。窯体のほとんどは第３号窯または第２号窯の掘削土とその灰原に覆われる。そのため埋没状態は、第５号窯と同様であったが遺存状態は良くない。窯体の主軸方位はN－133°－Eを指す。窯体は現存長3.3m、幅約1.2mを測る。焼成部と燃焼部の境界には明瞭に変換点があり、20°～22°の角度で平面の焼成部へ移行している。焼成部の先端は削平されてしまい遺存長1.9mしかない。土層は、６層確認され、第１層は上位窯の灰原、第２・３・４層は上位窯の掘削土、第５層は天井または窯体の崩落土と思われ、あまり使用されぬまま埋没している。燃焼部前面の焚口部は窯体の右側を30cm程拡げている。側壁の立上がりは10～15cmと遺存状態が他の窯に比して悪い。上位窯の掘削などに際して意識的に削平されたと思われる。操業期間は短いと思われ、床の状況では１時期の操業しか認められず、遺物の出土量も少ない。

第６号窯出土遺物（第129図・図版67）

第６号窯より出土した遺物は15.0kgを量り、その内訳は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪で、形象埴輪は含まれない。

a　普通円筒埴輪（第129図・第98表）



第128図　姥ヶ沢遺跡第６号埴輪窯跡遺物分布図

普通円筒埴輪で全容の判明するものは存在しておらず、全て破片資料であった。図示し得た埴輪は復元径や、外傾の度合い、器厚等から２条突帯３段構成品が主体をなすものと思われる。１と２は復元口径を比較した場合、企画の異なる同一段構成品と考えるか、或いは１が３条突帯４段構成品である可能性も考慮される。

成形調整に関しては、第１号窯等で観察した内容と同様であり、重複するため省略しておく。

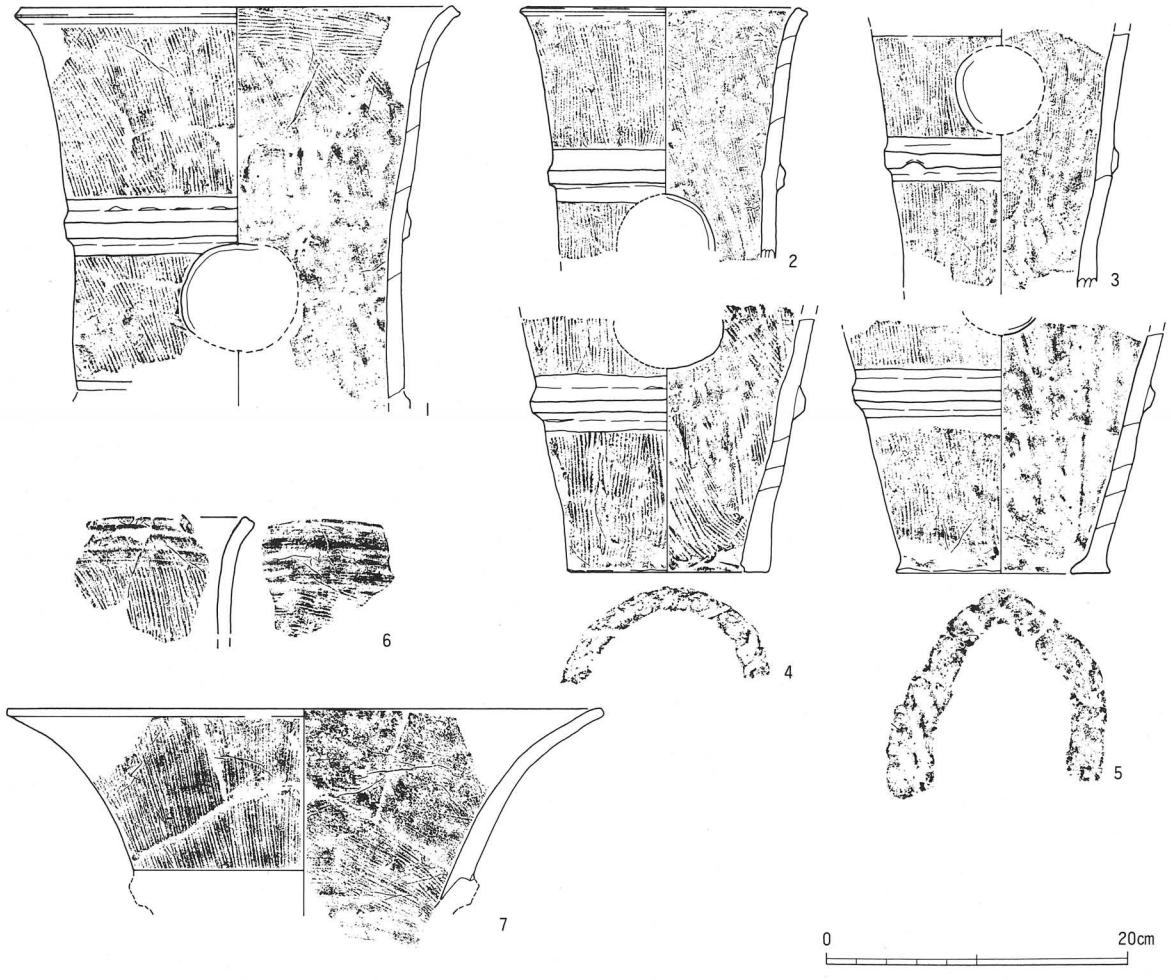
突帯は概ね高いものが主体となり、その断面形状は凡例分類のＡ・Ｃ類を確認することができる。数量的にはほぼ同等である。突帯の調整手法としては、工具を併用する場合と獣皮・布等を併用した指ナデの場合の２者が確認される。とくに布を用いた指ナデである１の突帯上面には布目圧痕が残されており、比較的目の粗い布を用いていることが解る。口唇部は凡例分類のＡ・Ｆ類が確認され、工具を用いた入念なナデによって調整される。

透孔は、遺存状態が芳しくないが、全て正円形を呈するものと考えられる。

焼成は酸化焔焼成品も存在するが、還元焔焼成品は少数である。酸化焔焼成品は燈色系の発色で、全体的に発色は淡い印象を受ける。

ｂ　朝顔形円筒埴輪（第129図、第48表）

朝顔形円筒埴輪は１点のみの確認である。疑口縁部分から上の大形破片で観察された成形技法は、疑口縁部形成による一時的な乾燥の後、突帯と口縁部を一体で成形しており、先の第４号窯出土品と同一の技法であると判断される。突帯部分と口縁部では用いる胎土が異なるためか発色が異なっている。赤色の発色を意図している。



第129図　姥ヶ沢遺跡第６号埴輪窯跡出土遺物

第７号窯跡（第130～132図・図版58）

下位群の北端より３基目、K-18からR-19に位置する。北は第６号窯と、南は0.8m離れて第８号窯と接しているが切り合いは認められない。煙道部から焼成部の一部は上位に位置する第１・３号窯により削平され、焚口以下前庭部、灰原とも流失している。窯体のほとんどは第１号窯または第２号窯の掘削土とその灰原に覆われる。また、窯自体の掘り込みも深いためか、保存状態は意外に良好であった。窯体の主軸方位はN-145°-Eを指す。窯体の現存長4.7m、幅1.2mを測るが、焼成部と燃焼部の境界付近は幅1.1mとやや狭くなる。燃焼部と焼成部の境界には明瞭に変換点があり、18°～20°で平面で凹凸の少ない焼成部へ移行している。土層は、上位窯の掘削土で焼成部床の上部を直接覆っている。本窯のあまり埋没していない時期での上位の窯の構築が始められたことを窺わせる。本窯自体の改築を認めることはできないが、燃焼部・焚口部に残された焼土・炭化物の掻き出された床の状況から４時期の操業が認められる。この床面は下位よりａ・ｂ・ｃ・ｄとする。

第１次操業面は地山面のａ床としている。緩やかに傾斜する燃焼部から焼成部へ至る。焼成部の長さは約1.8mを測る。燃焼部から焚口部は、Q-17からR-18付近で窯壁の左側は隣の第７号窯と30cmしか離れておらず、流失部分では切り合うことも推定される。燃焼部の床は焚口部に向かって緩やかに傾斜している。第２次操業面はａ床上とほぼ同一で操業されたｂ床が認められる。第３次操業面は、第７層下面、第９層上面の炭化物層の堆積するｃ床面である。焼成部からは円筒埴輪片が少量出土している。第４次操業面は、第７層の上面であるｄ床面である。第７層は、天井部の構築材と思われる粘土混じりの黄白色土で、ローム土を基本としているが、これを片付けずに火入れを行っている。ｄ床上には窯天井構築材に起因する第６層が厚く堆積する。側壁の状態はほぼ垂直ぎみに立ち上がるが、第１号窯に削平されるため50cm程しか遺存しない。粘土を貼った形跡は認められず地山のままであったが、良く焼土化していた。このｄ床上の覆土には多量の円筒埴輪片が焼成部・燃焼部から出土している。

第７号窯出土遺物（第133～135図、図版67～68）

第７号窯より出土した遺物は総重量22.5kgを量り、普通円筒埴輪と形象埴輪が確認された。

ａ　普通円筒埴輪（第132・133図、第49～50表）

普通円筒埴輪で全容が判明するものとしては、１・２の２個体である。２条突帯３段構成品であり、口縁部と底部が間延びした器形や突帯・口唇部の形状、内外面の調整手法等、近似している。しかし、１は２と比較して一回り小形であり、法量においてのみ差異を生じている。

段構成が判明する個体は、２条突帯３段構成品である先述の１・２以外に存在していない。他の個体も口径・外傾の度合い等から２条突帯３段構成品であると考えられるが、７に関しては口径と残存器高のバランスを考慮すれば大形品である可能性が高い。

突帯は概ね高い（0.4cm）もので、その断面形状は凡例分類のＡ・Ｂ・Ｃ類が確認され、Ｃ類が主体となる。突帯の大半は蛇行すること無く貼付されており、調整は工具を併用するナデによると判断される。

口唇部は凡例分類のＡ・Ｂ・Ｄ・Ｆ類が認められ、各類の比率はほぼ均等である。調整は突帯同様に全て工具を用いるナデと判断でき、ナデも入念なものが主体である。

透孔の形状には正円・不整円形が認められ、円形透孔に統一される。

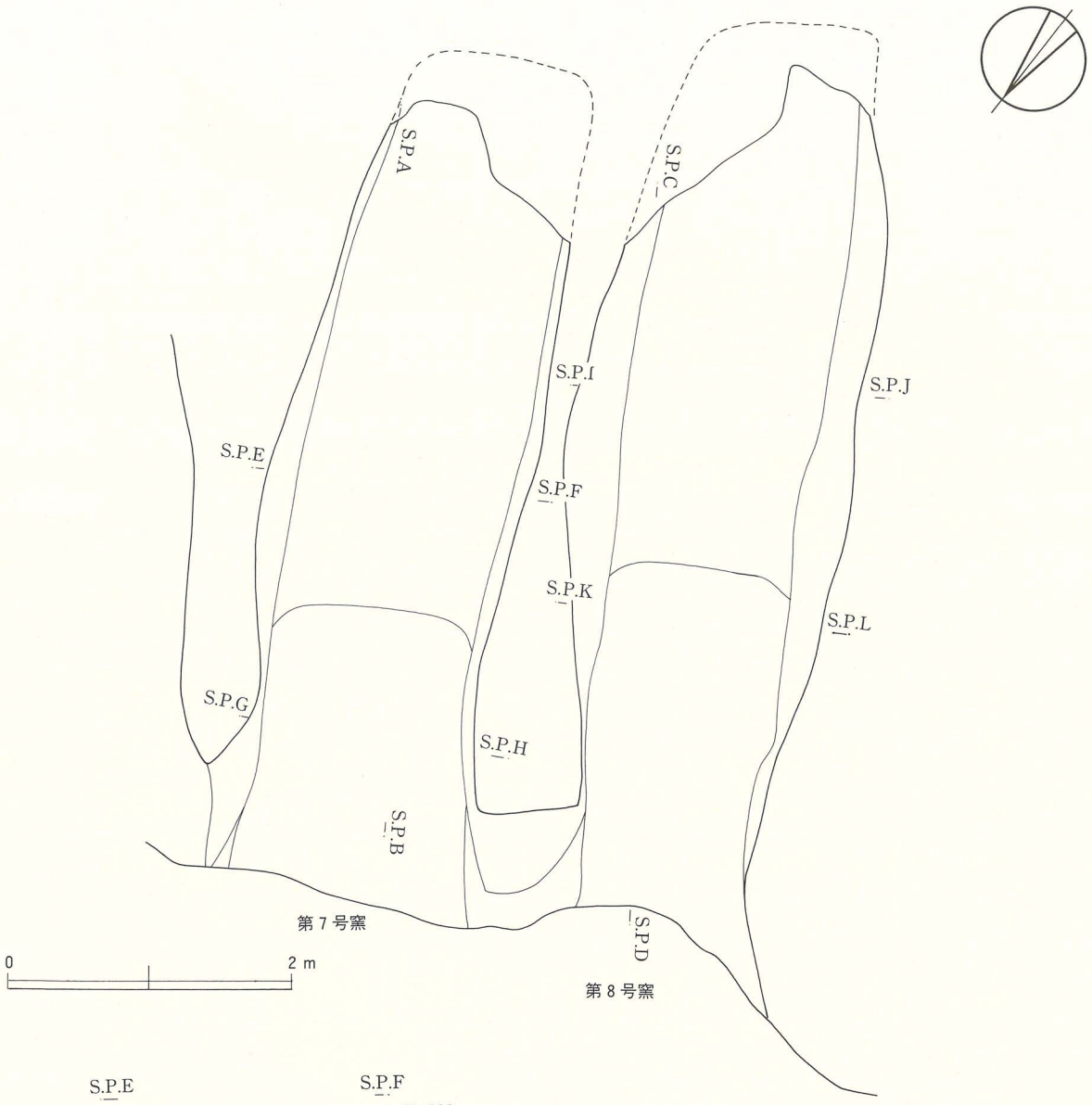
焼成は酸化焔焼成品が主体となり、還元焔焼成品は少ない。

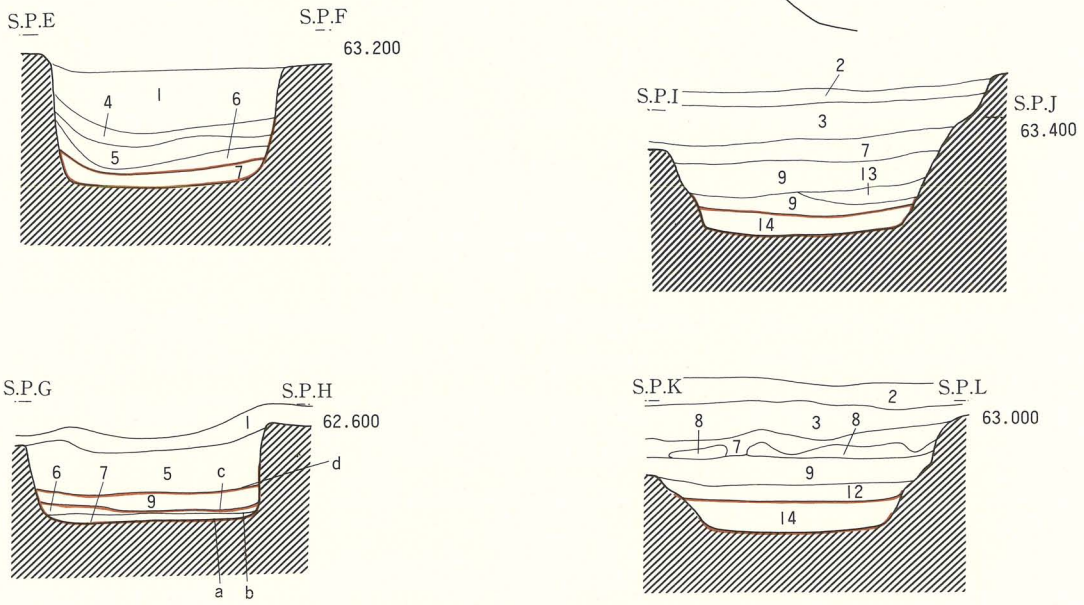
線刻（ヘラ記号）の施されるものは、２・３・５・６・８の５点であり、第136図に示しておいた。

ｂ　朝顔形円筒埴輪（第134図、第50表）

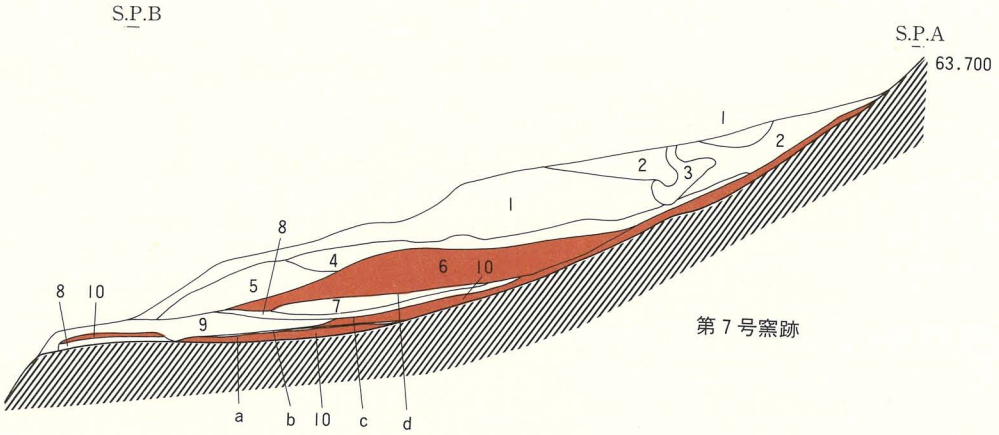
朝顔形円筒埴輪は18～20の３点で、全容を把握できる個体は存在していない。

20は、３個体の中で最も遺存状態の良好な個体で、頸部以上の残存である。最上段の突帯が残存しており、突帯部は乾燥単位に相当する疑口縁部である。さらに疑口縁を境に胎土が異なっており、突帯を含

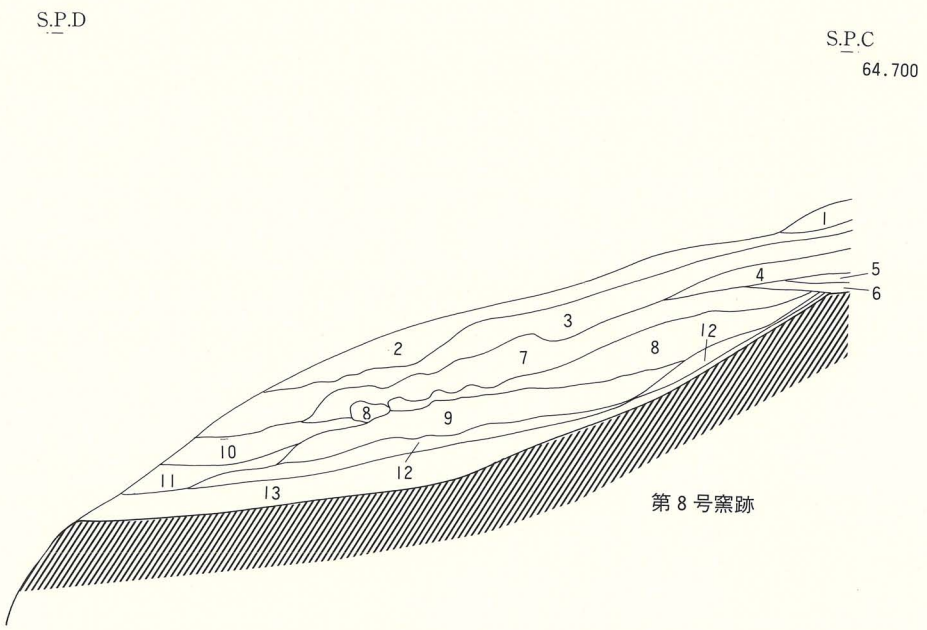




第130図　姥ヶ沢遺跡第７・８号埴輪窯跡平面図



1．茶黒色土　炭少量含。しまりなく粘性弱。粒子粗。
2．黄茶黒色土　ローム粒少量含。しまりなし。粒子粗。
3．暗茶黒色土　ローム粒少量含。しまりなし。粒子粗。
4．黄赤褐色土　焼土、炭多含。しまり強
5．黄褐色土　ローム土
6．淡赤色土　ローム多含。しまり、粘性弱。粒子粗。
7．黄白色土　ローム多含。粒子粗。
8．黒色土　炭、灰少量含。しまり粘性弱。
9．淡黄茶色土　ローム粒、焼土、炭含。しまり、粘性強。
10．暗赤褐色土　焼土ブロック状に含。しまり強く、粘性弱。



1．暗茶色土　しまり弱、粘性強、焼土含。粒子粗。
2．茶黒色土　しまり弱、焼土、炭化粒少量含。粒子粗。
3．茶褐色土　ローム粒、焼土粒、炭含。しまり弱、粘性粗。
4．黄色土　ローム ブロック、焼 土少 量含。
5．淡黄茶色土　焼土、ローム粒少量含。粒子粗。
6．赤褐色土　焼土多含。粒子粗。
7．茶褐色土　ローム、焼土、炭少量含。粒子粗。
8．黄色土　ローム粒多含。
9．淡黄色土　焼土、ローム粒多含。粒子粗。
10．黄色土　ローム粒多含。
11．淡黄色土　ローム粒、焼土、炭やや多含。
12．黄褐色土　ローム粒、焼土多含。
13．黄褐色土　ローム粒、焼土、炭多含。

第131図　姥ヶ沢遺跡第７・８号埴輪窯跡セクション図

む口縁部が赤褐色、それ以下は乳白色の発色である。。

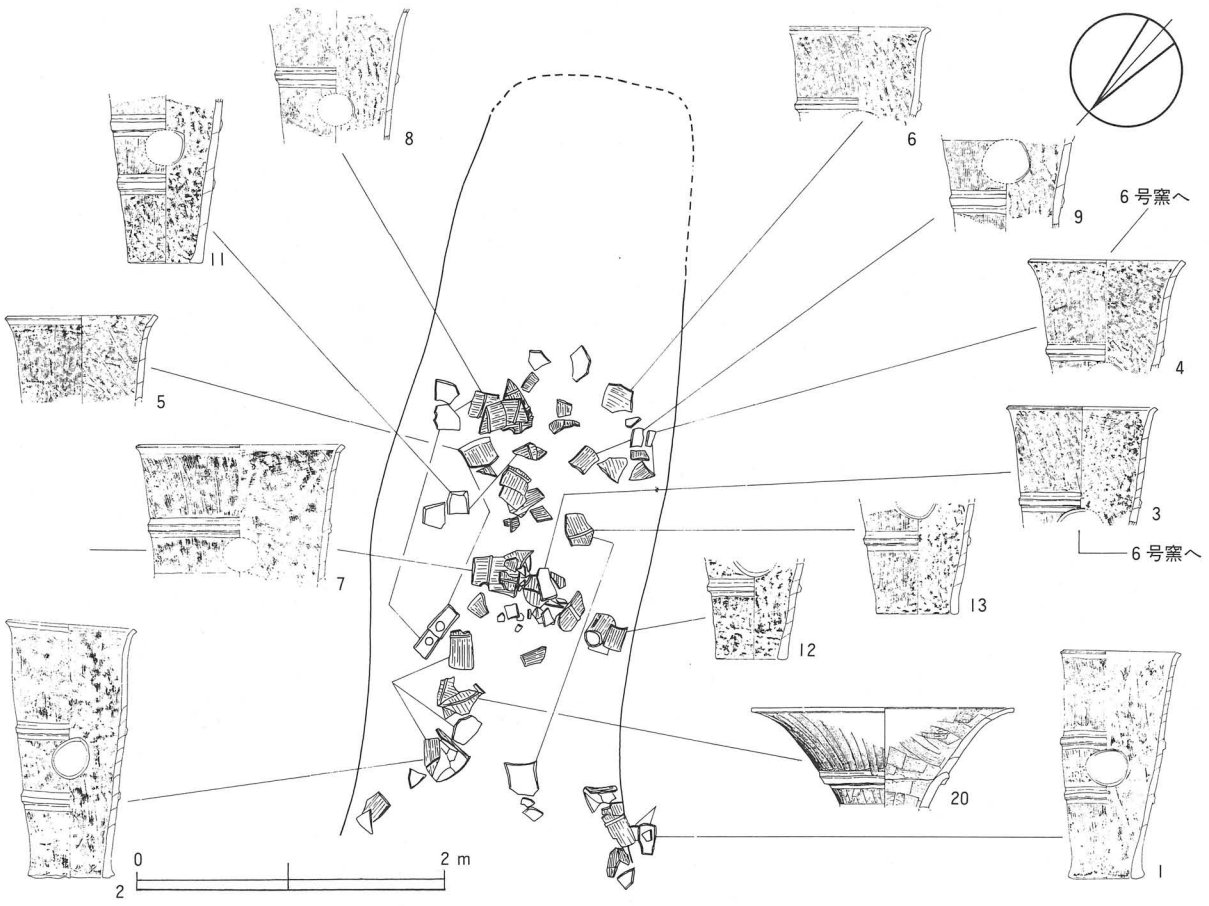
(2)　形象埴輪（第135図）

本窯より出土した形象埴輪も少ない。伴明した器種とした馬形埴輪があり、他に不明形象埴輪がある。21は馬形埴輪障泥部の破片である。粘土板を成形した後に馬本体へ圧着しており、隙間には粘土紐を介在させることで角度の調整を図っている。障泥表面にはリング状に粘土紐を圧着し、後に指頭による弱いナデを加えることで調整している。

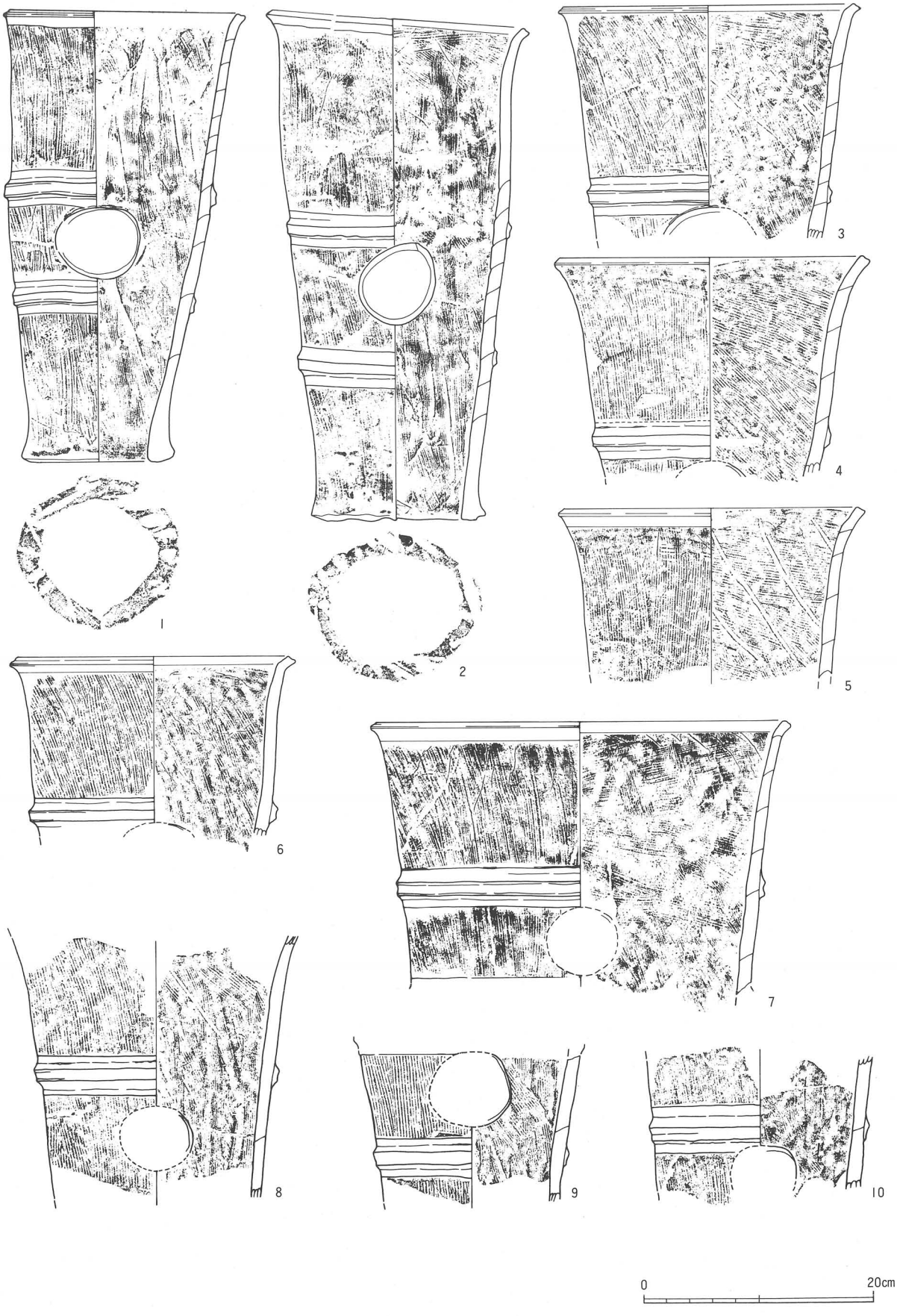
第８号窯跡（第130・131・137図・図版58）

下位群の南端、K-22からU-24に位置する。北側の第７号窯跡とは同規模でまたほぼ並列している。切り合いは認められない。煙道部から焼成部の一部は、上位に位置する第１号窯により削平され、焚口部以下前庭部、灰原とも流失している。窯体の覆土は第１号窯を主体とする掘削土とその灰原に覆われ、また窯自体の掘込みも深いためか保存状態は良好であった。窯体の主軸方位はN-147°-Eを指す。窯体の現存長4.9m・幅1.2mを測るが、焼成部と燃焼部の境界付近は幅1.0mとやや狭くなる。主軸方向・規模とも第７号窯に近似している。焼成部と燃焼部の境界には明瞭に変換点があり、第１次操業面では13°～15°で焼成部へ移行している。第２次以降の操業面でもほぼ同様であるが、緩やかな傾斜のため変換点の位置ははっきりしない。土層は、上位窯の灰原以下に５層観察される。８・10層以上は上位窯の掘削土で窯体を直接覆っている。第７号窯同様、本窯のあまり埋没していない時期に上位の窯の構築が始められている。ただ、第14層中に操業面を１枚認めることも可能なのだが、不明瞭なので３時期とはせず２時期以上の操業を推定したい。この床面は下位よりａ・ｂとし、ｃは14層中の１面とする。

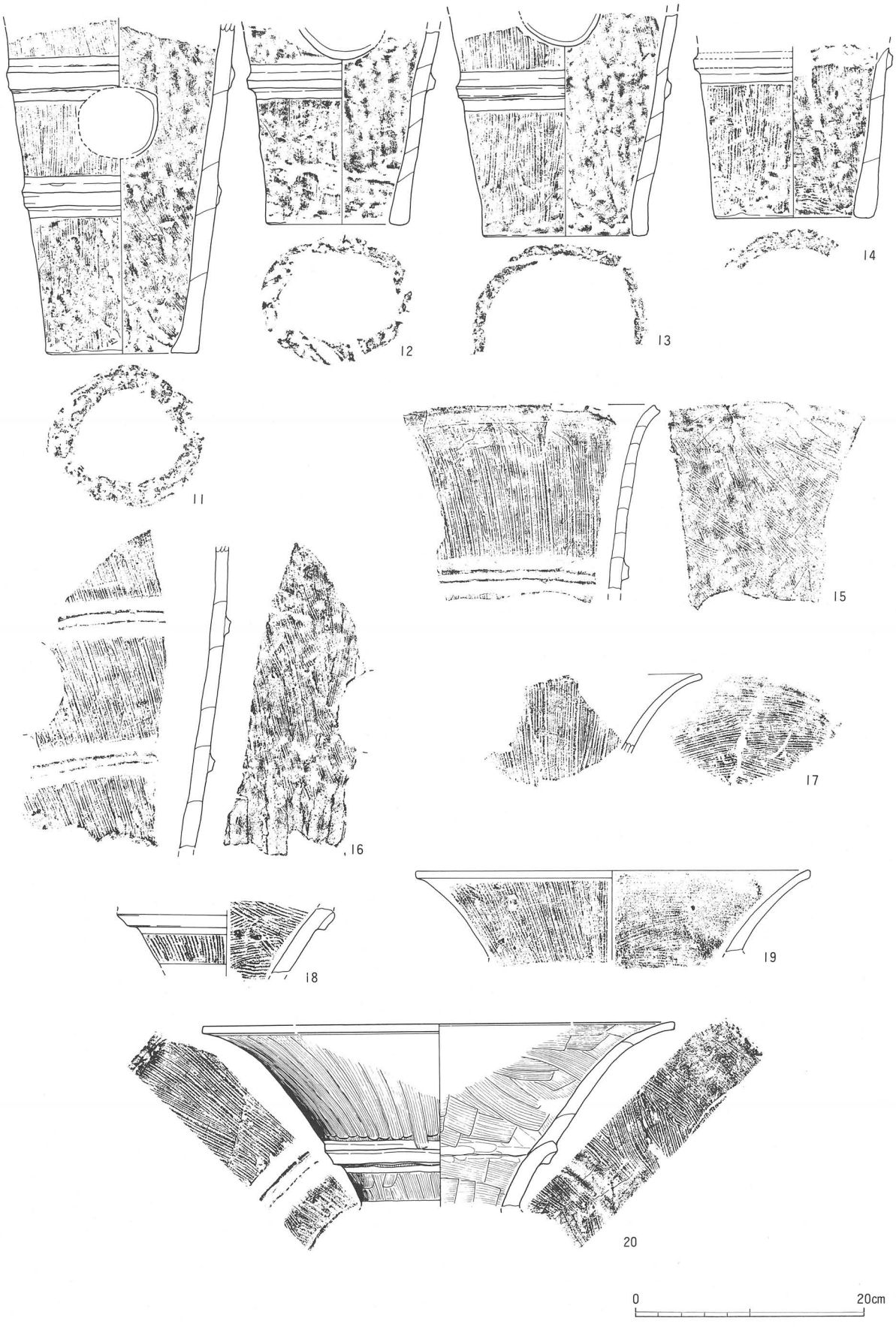
第１次操業面は地山面のａ床としている。第14層の下面に当たり、緩やかに傾斜する燃焼部から焼成



第132図　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡遺物分布図



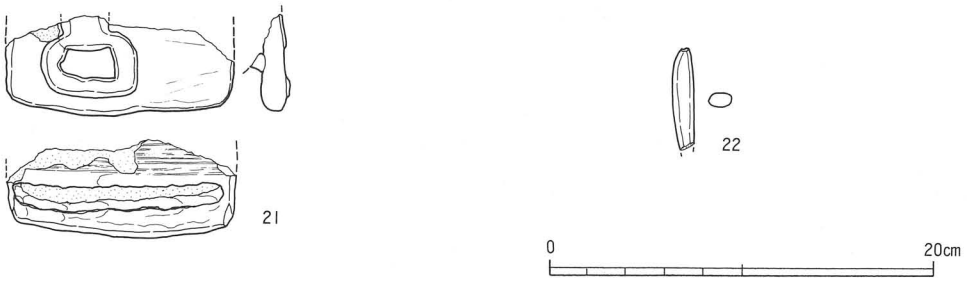
第133図　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土遺物(1)



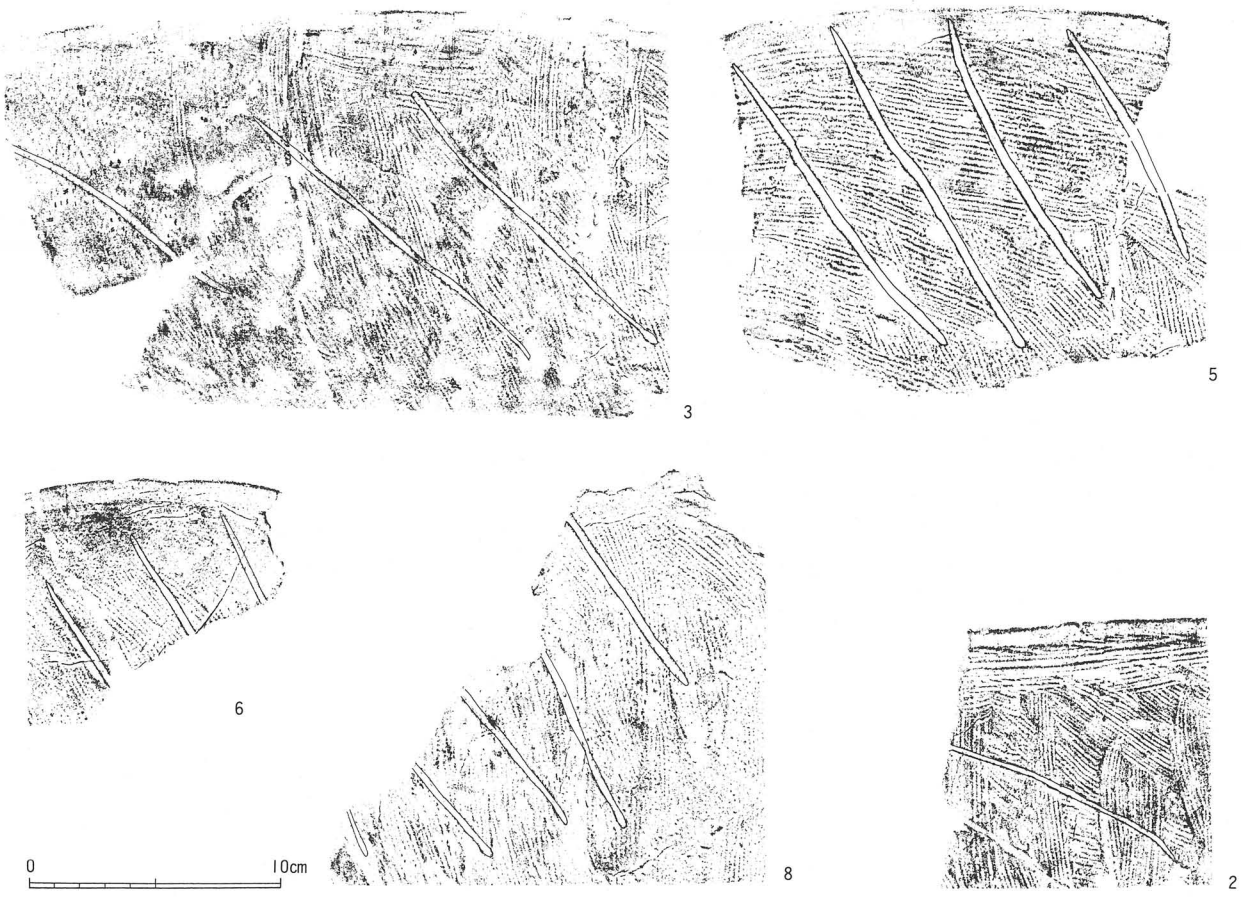
第134図　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土遺物(2)

部へ至る。焼成部は軸長約2.8mを測る。焼成部から焚口部はP-20～R-22付近に当たり、焼成部の規模は長さ幅とも約１mを測る。側壁の遺存状態はあまり良くない。これは第２次操業面での側壁の部分的な拡張やその後の遺存状態が不良なためである。

第２次操業面はａ床上に10cm～12cm嵩上げしたｂ床面で、これはほぼ焼成部から焚口部を覆っている。焼成部からは円筒埴輪片が少量出土している。14層は天井部の構築材や燃焼部から掻き出した灰焼土等からなる排土と思われる粘土混じりの黄白色土でローム土を基本としているが、これを片付けずに火入れを行っている。また、ｄ床上には窯天井構築材に起因する第９層が厚く堆積する。側壁の状態はほぼ垂直気味に立ち上がるが、崩壊が著しいため床付近しか遺存しない。構造上の共通点だけでなく、操業の仕方や廃絶の状況が第７号窯と類似していることから、同時期に操業していたと思われる。



第135図　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土遺物(3)



第136図　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成

第８号窯出土遺物（第138～139図、図版68）

第８号窯より出土した遺物は12.5kgを量り、その内訳は普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪、少量の形象埴輪である。

ａ　普通円筒埴輪（第138図、第51表）

普通円筒埴輪は、全て破片資料であった。図示し得た埴輪は復元径や、外傾の度合い、器厚等から全て２条突帯３段構成品であると思われる。

成形に関しては、第１号窯で観察した内容と重複するため省略しておく。

外面調整は、全ての個体において突帯貼付前に縦ハケによる調整が施されており突帯貼付に後出する例は認められない。

内面調整は、ナデの後に上半部を中心としてハケによる調整を施しているが、本窯の場合ハケが底部にまで及ぶ例が多い。

突帯は概ね高いものが主体となり、その断面形状は凡例のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類を確認することができ、数量的にはＣ類が最多である。

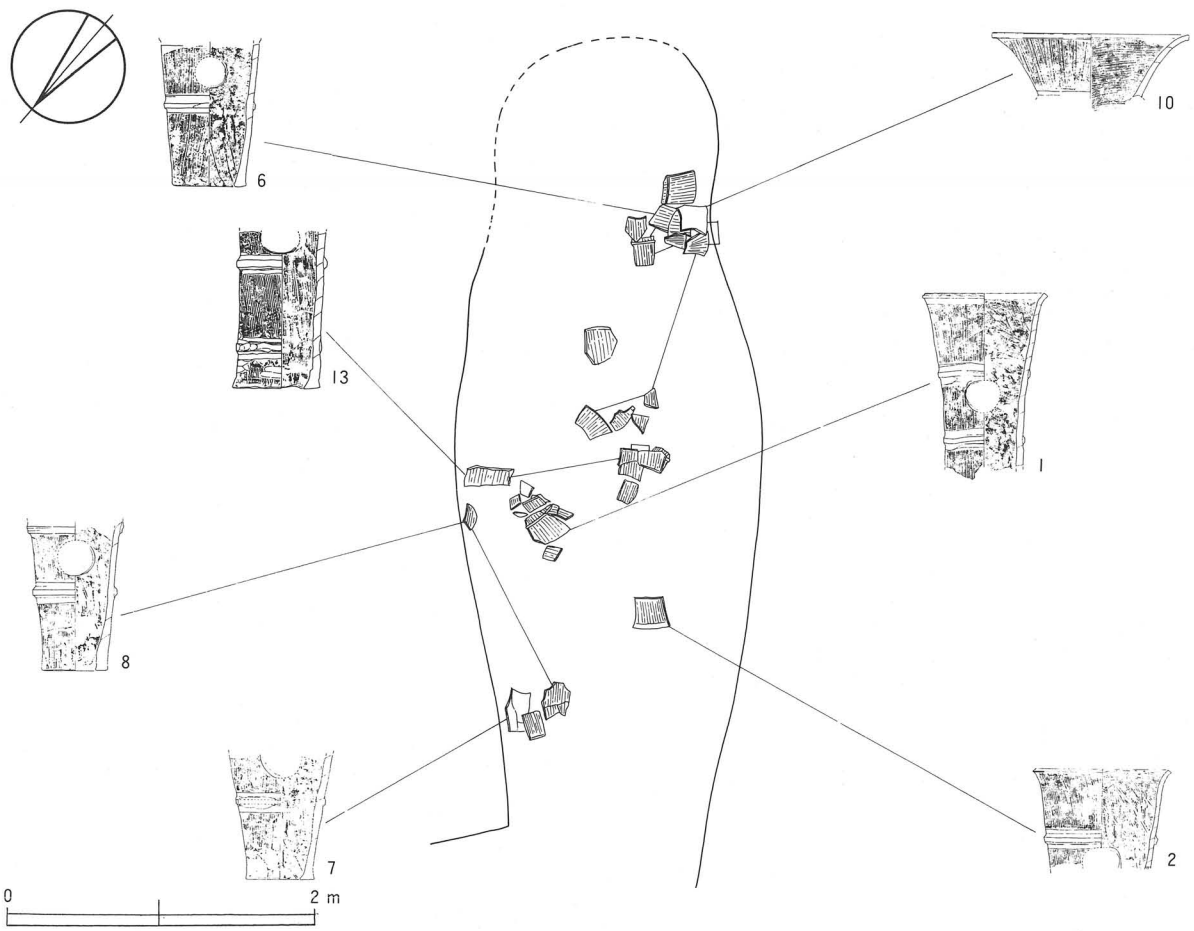
突帯の調整手法としては、木口状工具を併用する場合と獣皮・布等を併用した指ナデの場合の２者が確認され、割合的には前者の例が多い。　口唇部はＡ・Ｂ・Ｆ類が確認され、割合的にはＡ類が最多である。調整は木口状工具を併用したナデが主体であり、ナデも入念なものである。

透孔は全て円形を呈するもので、半円形のものや半円形を意識したものは確認されていない。

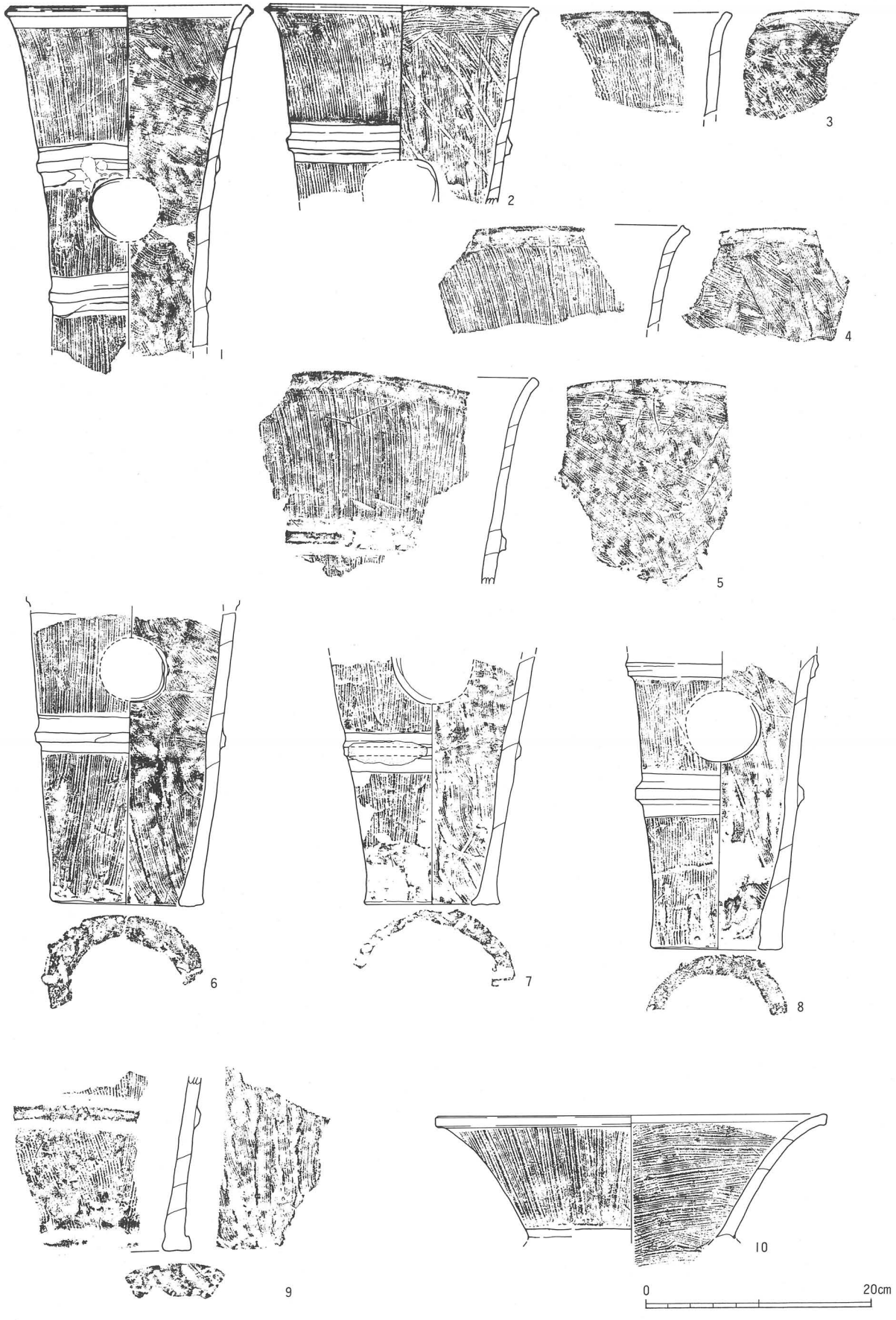
焼成は酸化焔焼成品と、還元焔焼成品の割合がほぼ均等である。酸化焔焼成品は、赤褐色～黄燈色の発色であるが、第１号窯等の埴輪と比較すると発色は暗く、くすんだ印象を受ける。還元焔焼成品は、硬質な焼き上がりで発色も全体的に暗い。

ｂ　朝顔形埴輪（第138図、第51表）

朝顔形円筒埴輪は、10の１個体のみで、口縁部のみの残存である。口唇部は木口状工具によるナデによって調整され、外面調整は縦ハケ、内面調整は横



第137図　姥ヶ沢遺跡第８号埴輪窯跡遺物分布図



第138図　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡出土遺物(1)

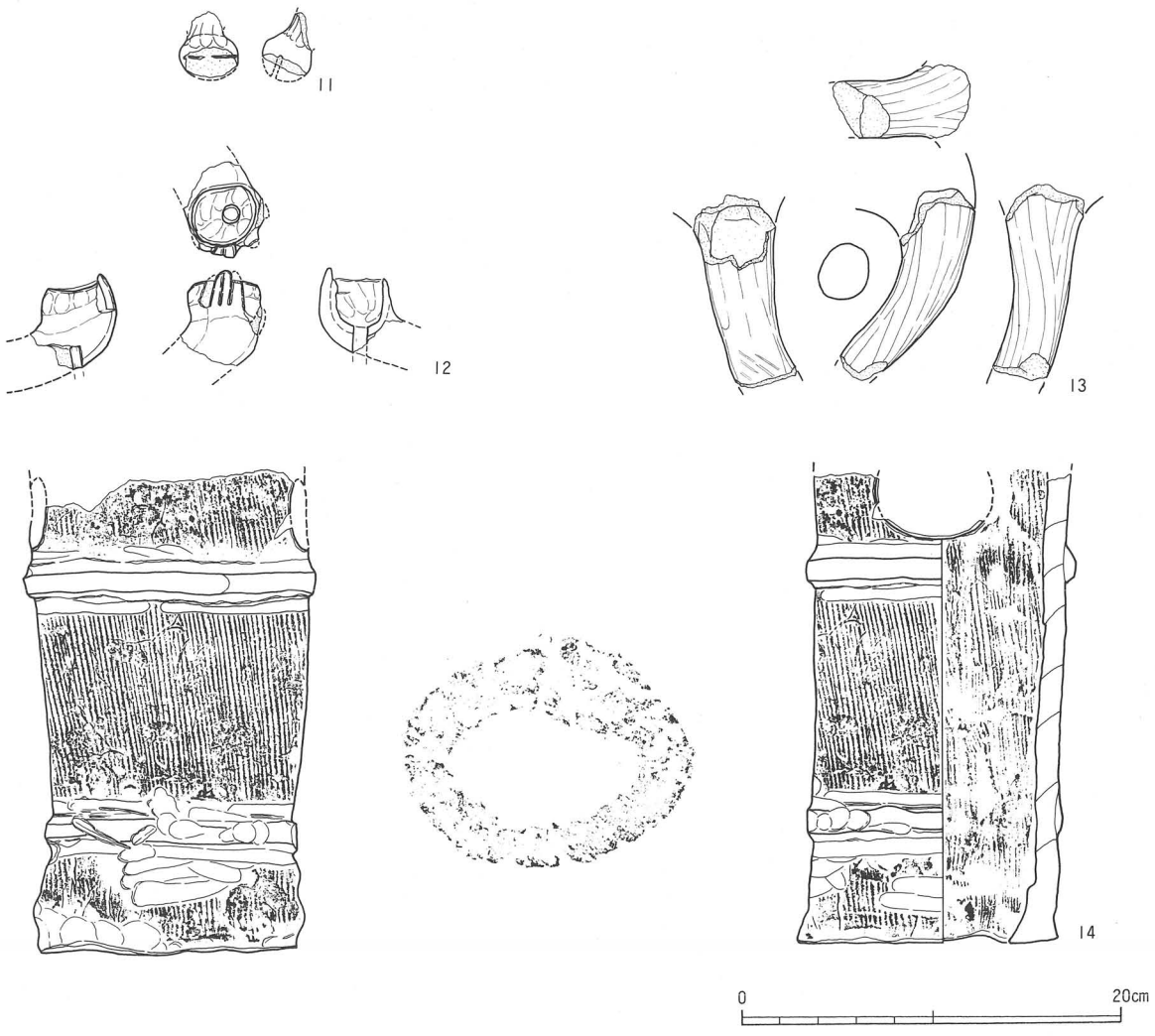
ハケである。

ｃ　形象埴輪（第139図）

本窯より出土した形象埴輪は、馬・人物がある。以下に各資料の観察結果を述べる。

11は、馬形埴輪に貼付されていた鈴と考えられる。中実の粘土玉に鋭利な工具で切り込みを入れるだけの簡素な造りで、少量の粘土を用いて馬形埴輪本体に貼付されている。12は、椀を捧げ持つ人物埴輪の左腕部で、親指と小指を欠損する。成形は、まず第２号窯出土品等と同様の技法で一度腕部を完成させた後、別に成形しておいた椀を掌部に圧着する。最後に椀の底部内面から手の甲にかけて貫通する。径１cm程度の孔を棒状工具を用いて穿孔するが、焼成時の破裂を避けるための配慮であろうか。なお、椀を圧着する際、掌の形を椀に合わせて圧着し手の甲にナデ調整を加えるため、手の甲に通常残される特徴的な手甲状の段差は消失している。13は、人物埴輪の腕部である。肩部以下の残存で、肩部付け根と掌部の大半を欠損している。中実の棒状粘土を解放した肩部に差し込むことによって成形しており、掌部は板による押圧を加えている。肩部との接合状態から、腕を前へ差し出す仕草を表現していると考えられる。24は人物埴輪の基部である。現状で２条突帯３段構成を呈し、第３段には一対の円形透孔を穿孔している。突帯は布ナデによって調整されており、不整形なものである。円筒埴輪と同様に輪積みによって成形しており、内外面調整は共に縦ハケである。底部は歪み・亀裂が著しく、突帯貼付後に指ナデによる補修を行っている。平面径は透孔が側面に穿孔されていると考えた場合、側面に相当する部分を最短径とする楕円形を呈している。

（窯・出土遺物・新井、形象埴輪・永井）



第139図　姥ヶ沢遺跡第８号埴輪窯跡出土遺物(2)

姥ヶ沢埴輪窯跡一括出土遺物

総重量52.5kgで、窯跡群直下の埋没谷中からの出土である。普通円筒・朝顔形円筒・形象の各埴輪と少量の土師器が出土している。

a　普通円筒埴輪（第141図、第53表）

普通円筒埴輪は全体的に淡色系の色調を呈するものが目立っており、埋没状態に起因する漂白化の結果と思われる。破片資料が主体で詳細は不明であるが、基本的には他の窯跡出土の普通円筒埴輪と共通する属性を有するようである。しかし、３～７の資料群は、図上では明確でないものの異質な属性を持ち合わせた一群である。特に胎土や色調、調整に用いられる工具等に著しい相違点が認められる。流入遺物である可能性を指摘するに止める。

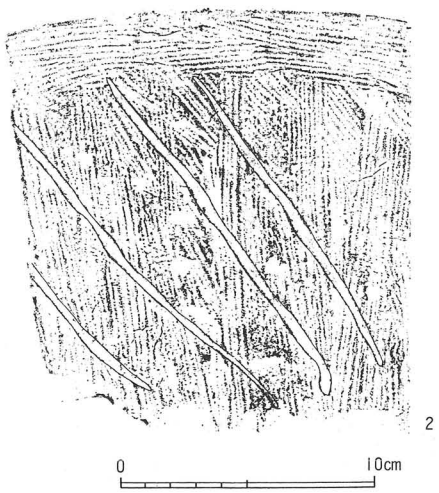
b　朝顔形円筒埴輪（第141図、第53表）

朝顔形円筒埴輪であると考えられた資料は12～14である。普通円筒埴輪と同様に淡色系の色調を示し、埋没状態に起因する漂白の結果と考えられる。全て破片資料であるために詳細は不明であるが、第４号窯において焼台として用いられた一群に類似するようである。

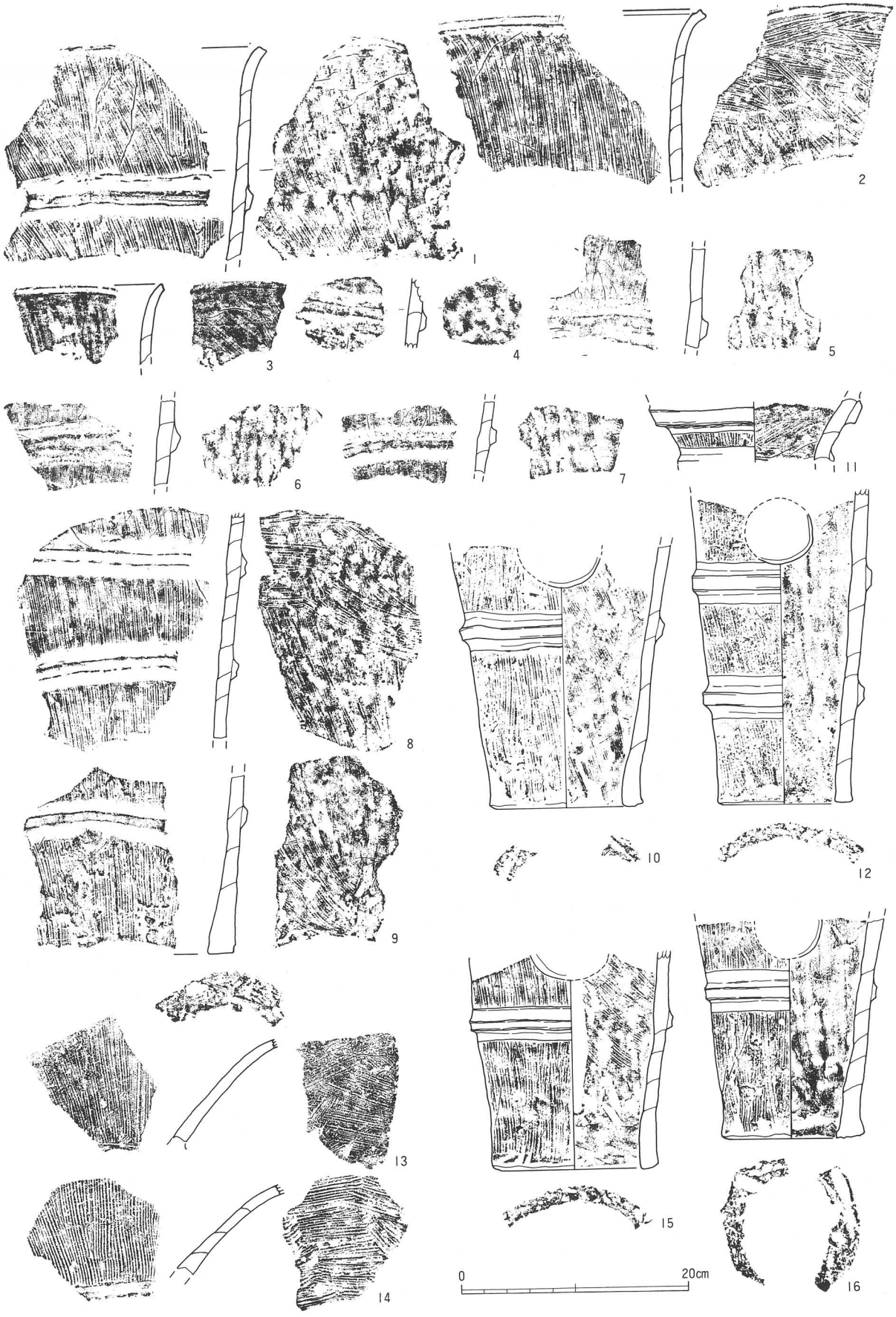
c　形象埴輪（第142図）

一括出土として扱った遺物の中には、比較的多数の形象埴輪が含まれており、判明した器種は全て馬形埴輪であった。

17は、馬形埴輪の立髪部破片である。粘土板を用いて成形した後、本体へ多少の粘土による補塡をもって接着し、両面にナデによる入念な調整を加えて一体化を図っている。接着面には明瞭な剝離痕を残しており、ハケメ調整を確認することができる。手綱の表現は両面で対になる粘土紐を貼り付けることによってなされており、片面のみにナデによる調整が加えられる。18は、馬形埴輪の鞍部後輪に相当する破片である。粘土板によって成形しており、両面にナデ調整を加えている。片面には粘土紐の貼付によって尻繋の表現を行っており、雲珠の脚へ至るものと考えられる。下部の割口には特に剝離痕を残しておらず、胴部の形状は反映されていない。19は、馬形埴輪の鞍部破片である。粘土板によって成形されており、両面にナデ調整を加えている。下部には明瞭な剝離痕は残されていない。20は馬形埴輪の鞍部破片である。粘土板によって成形されており、両面にナデ調整を加えている。縦断面中央がやや窪んでおり、磯金具の表現である可能性が考えられる。下部には明瞭な剝離痕は残されていない。21は、馬形埴輪の鞍部破片である。粘土板によって成形されており、両面にナデ調整を加えている。下部には明瞭な剝離痕は残されていない。22は、馬形埴輪の障泥部破片である。粘土板によって成形されており、表面はナデ、裏面はハケメによって調整される。裏面には粘土紐が添付されており、胴部に接着する際の緩衝であろう。表面には粘土紐が添付されており、輪鐙の表現と思われる。23は、馬形埴輪の障泥部破

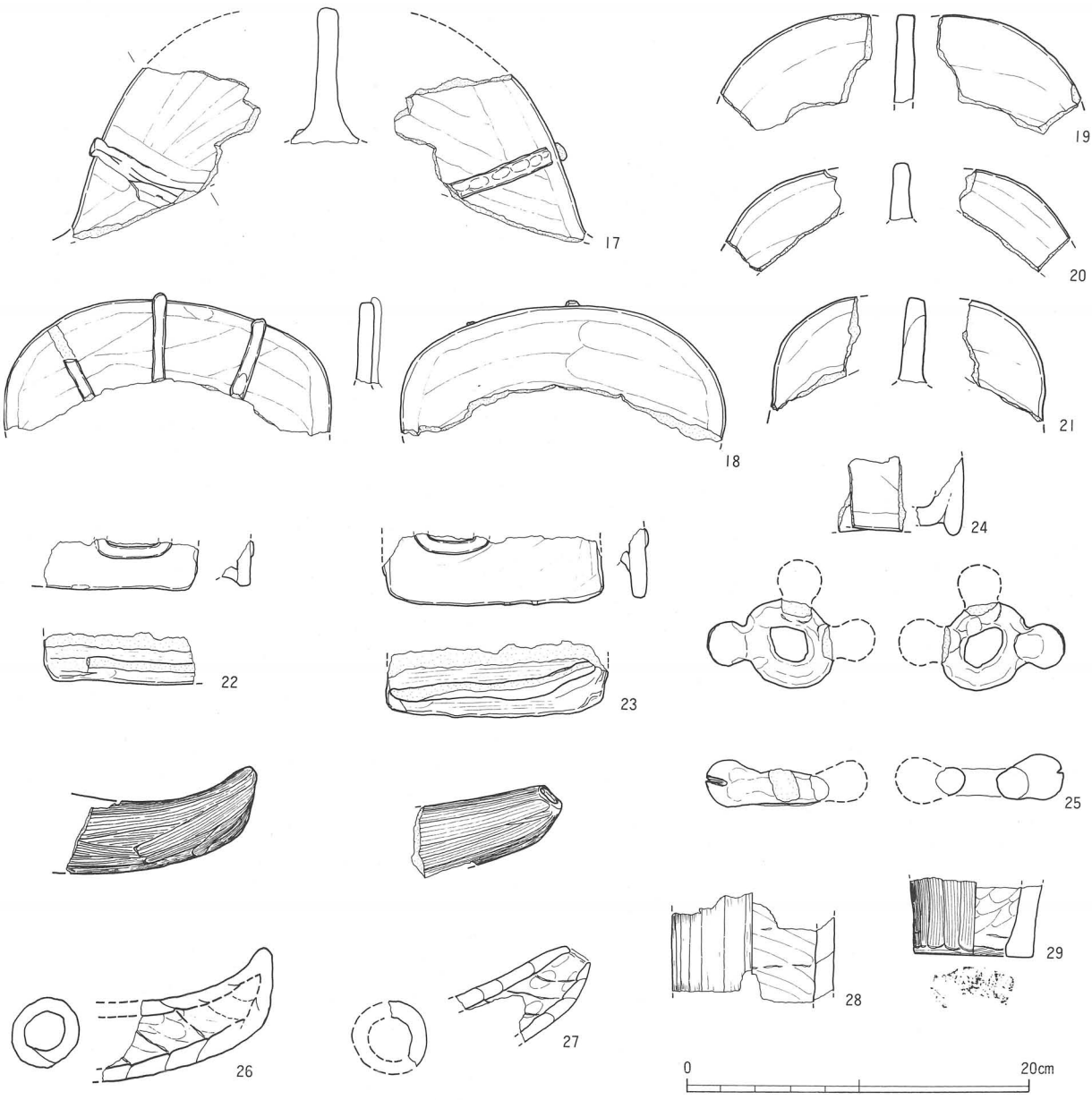


第140図　姥ヶ沢遺跡第８号埴輪窯跡出土円筒埴輪線刻集成



第141図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(1)

片である。粘土板によって成形されており、表面はナデ、裏面はハケメによって調整される。裏面には粘土紐が添付されており、胴部に接着する際の緩衝であろう。表面には粘土紐が添付されており、輪鐙の表現と思われる。22に酷似する。24は、馬形埴輪の障泥部破片である。粘土板によって成形されており、表面はナデ、裏面はハケメによって調整される。胴部（腹部）を僅かに残しており、緩衝のための粘土紐が見られない点で、22・23と異なっている。25は、三環鈴を象っており、おそらく馬形埴輪のどこかに貼付されていたと考えられる。全面に渡ってナデ調整が加えられ、環状の粘土紐に偏在して三個の鈴が添付されているが、内二個は剝離している。第２号窯出土品に類似するが、本資料はやや小振りである点で異なっている。26は、馬形埴輪等の動物埴輪の尻尾部破片で、中空品である。粘土紐を螺旋状に巻き上げる事によって成形されており、端部は絞り込みによって完全に閉鎖される。外面はハケメ、内面にはナデ調整が加えられている。27は馬形埴輪等の動物埴輪の尻尾部破片で、中空品である。粘土紐を螺旋状に巻き上げる事によって成形されており、端部は絞り込むものの閉塞されておらず、26と



第142図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(2)

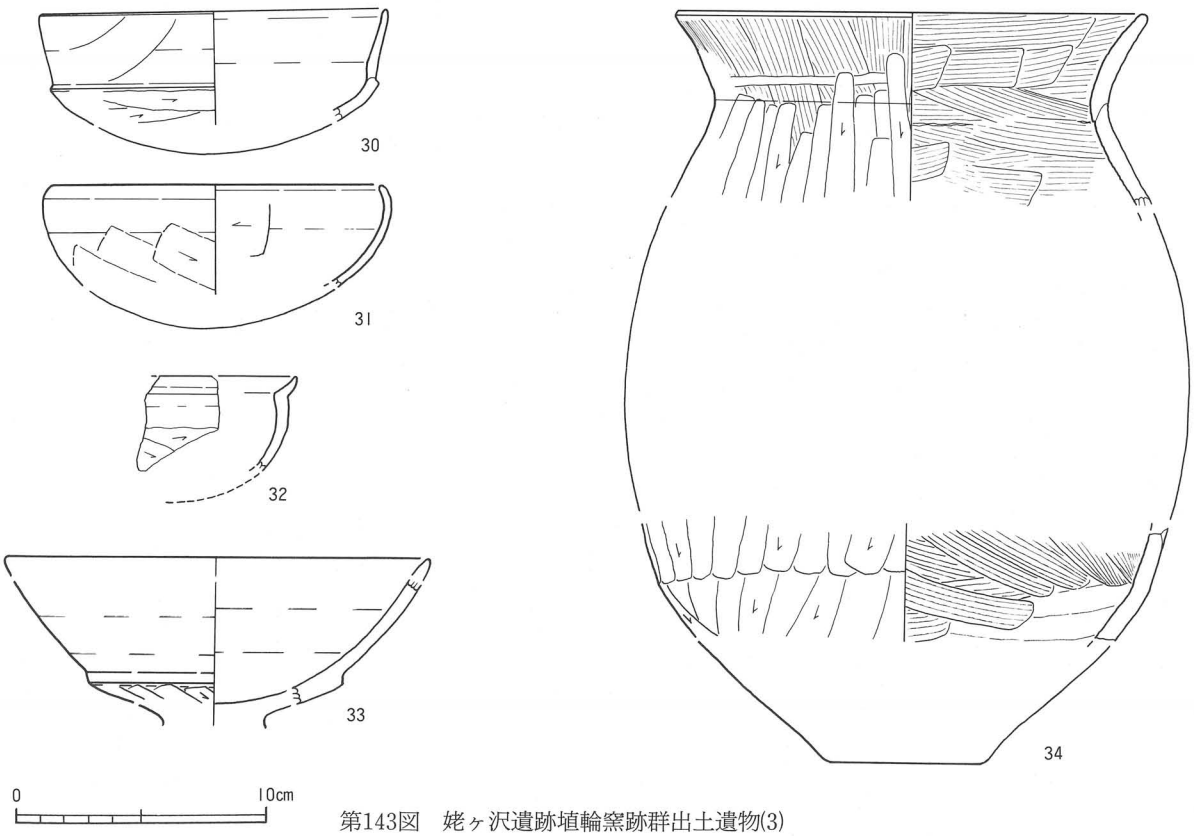
は異なっている。外面はハケメ、内面にはランダムなナデ調整が加えられている。28は、馬形埴輪等の動物埴輪の脚部破片である。輪積みによって成形され、外面は縦ハケメ、内面は斜位のナデ調整が加えられている。底部は残されていない。29は、馬形埴輪等の動物埴輪の脚底部破片である。幅4cm程度の粘土板を丸めることによって成形されており、内外面の底部下端には作業台密着痕が残されている。外面は縦ハケメ、内面は斜位のナデ調整が加えられている。

d　土師器（第143図30～34）

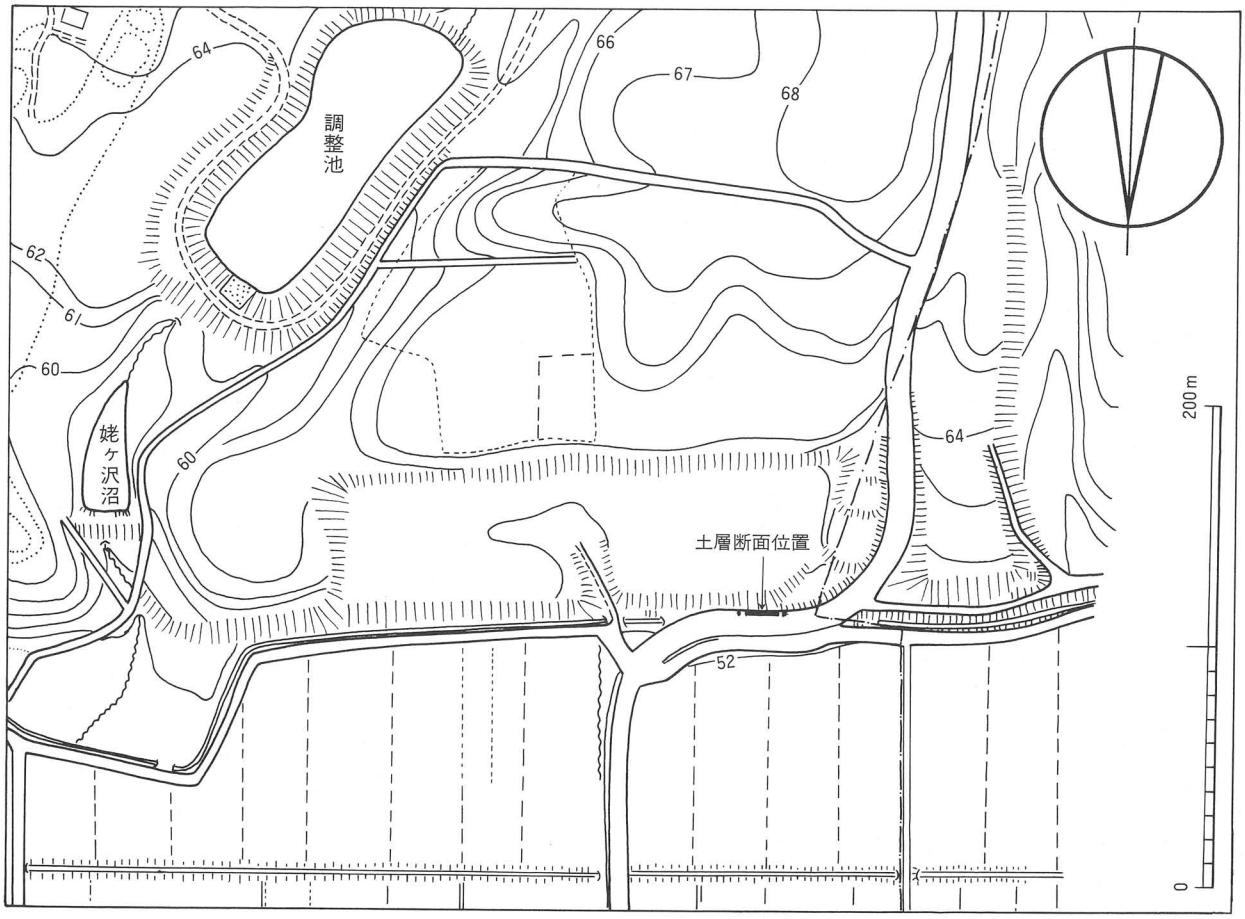
30は、口縁部と体部の境に明瞭な稜をもった、いわゆる須恵器坏蓋模倣坏で、小破片からの復元である。口縁部内外面と体部内面は布等による横ナデ、体部外面はヘラケズリによって調整されている。器高は比較的高く、良質な胎土を用いている。31は、口縁部と体部の境は存在せず坏と言うよりは椀とすべき器種であろう。口縁部外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリによる調整が加えられ、内面は弧状ベラによる横ナデ調整が加えられる。体部は半球状で口縁部はやや強く内湾しており、良質な胎土を用いている。32は、口縁部の形状から、いわゆる内斜口縁の坏である。口縁部・体部上半外面と内面は横ナデ、体部下半はヘラケズリによって調整される。用いられる胎土は良質なものである。33は、坏部下位に稜をもった高坏で、小破片からの復元である。坏部上位の口縁部外面と坏部内面は横ナデ、坏部下位の外面はヘラケズリによる調整が加えられている。口縁部上端と脚部全てを欠損しており、器形の詳細は不明である。胎土は良質なものを用いている。34は、胴部の下半と底部の全てを欠損した甕である。輪積みによって成形され、頸部と胴下半部に明瞭な接合痕を残している。内外面は埴輪と同様のハケメによって調整され、後に胴部外面に限ってヘラケズリによる調整が加えられる。胎土はやや粗いものを用いている。

姥ヶ沢埴輪窯跡Ａ地点（第144・145図）

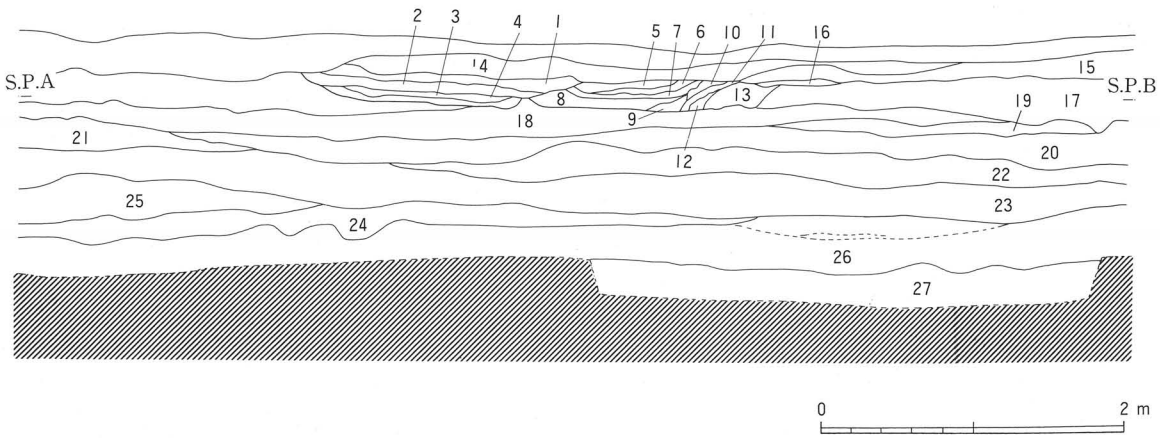
第８調査地点の崖線下を流れる吉野川側道の路面直下において、少量の埴輪片と焼土・炭化物の散布する地点を確認した。1980年に発見された埴輪窯跡に近接した地点である。埴輪窯跡に伴う灰原等であ



第143図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(3)



第144図　姥ヶ沢遺跡第８調査地区土層断面位置図



1．明茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ２～５cm以下の円礫多含、焼土粒少量含、粒子やや粗
2．茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１cm以下の小礫少量含、焼土炭化粒少量含、粒子やや粗
3．暗黄色土　しまり強、粘性やや弱、砂礫、φ１～３cm程の円礫やや多含、粒子やや粗
4．暗赤茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１～３cm程の円礫少量、炭化粒少量含、粒子やや粗
5．茶褐色土　しまり強、粘性やや強、φ１cm以下の円礫、焼土少量含、粒子やや粗
6．明茶褐色土　しまり強、焼土やや多、砂粒、微量含、粒子やや細
7．黒茶褐色土　しまり強、粘性弱、焼土、炭化粒微量含、砂礫多含、粒子やや細
8．明赤茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１～３cmの円礫少量、焼土、炭化粒微量含、粒子やや粗
9．暗黄茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１cm以下の円礫、砂粒やや多含、粒子やや粗
10．茶褐色土　しまり強、焼土、炭化粒やや多含、粒子やや粗
11．暗黄褐色土　しまり強、粘性やや弱、砂粒やや多、焼土微量含、粒子やや細
12．茶褐色土　しまり強、粘性やや強、焼土、炭化粒やや多含、粒子やや細
13．暗赤茶褐色土　しまり強、粘性やや強、φ１cm以下の円礫、焼土少量含、粒子やや粗
14．赤茶褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１～３cm程の円礫少量含、粒子やや粗
15．茶褐色砂礫層　しまり弱、φ１～６cm程の多量含、粒子粗
16．暗黄褐色土　しまり強、粘性やや弱、φ１～６cm程の円礫多量含、粒子粗
17．赤茶褐色土　しまり強、粘性やや強、φ１～３cm程の円礫少量含、焼土少量含、粒子粗
18．黄褐色砂礫層　しまり強、粘性弱、φ１～10cmの円礫多量含、粒子粗
19．暗黄灰褐色土　しまり強、粘性やや弱、砂粒やや多含、粒子やや細
20．暗褐色土　しまり粘性強、φ１～10cmの円礫少量含、粒子やや細
21．黄褐色砂礫層　しまり強、粘性弱、φ１～10cmの円礫、砂粒多含、粒子やや粗
22．明褐色土　しまり、粘性強、φ１～10cmの円礫やや多含、粒子粗
23．黒褐色土　しまり、粘性強、φ２～10cmの円礫やや多含、粒子粗
24．暗茶褐色土　しまり、粘性強、φ２～５cmの円礫多含、砂粒少量含、粒子粗
25．褐色礫層　しまり、粘性強、φ２～４cmの円礫多含、粒子粗
26．暗褐色礫層　しまり強、粘性弱、φ１～３cmの円礫、角礫多含、粒子粗
27．暗褐色土層　しまり極強、粘性強、φ１～３cm以下の円礫、角礫多含、粒子粗

第145図　姥ヶ沢遺跡第８調査地区崖線部セクション図

る可能性が高いが、旧道開削時の破壊や調査区の制約等から明瞭な遺構の検出には至らなかった。

［出土遺物］（第146図１～５、第53表）

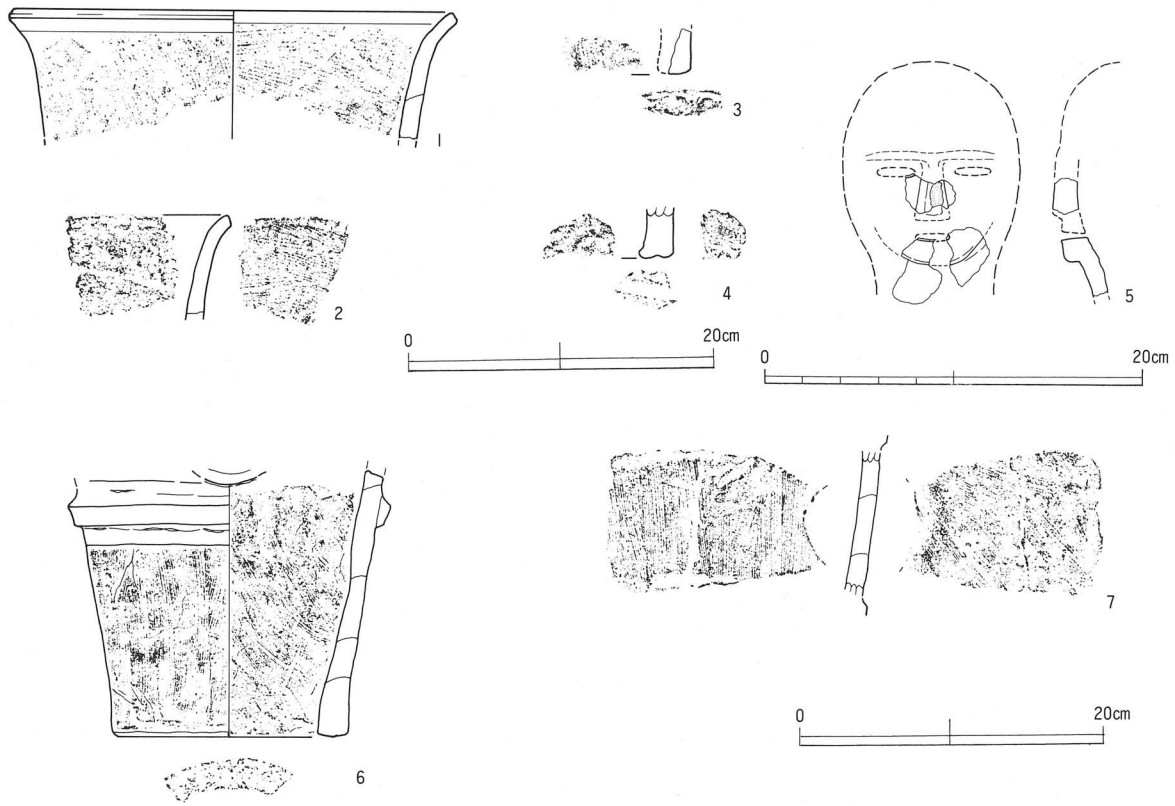
円筒埴輪の細片少量と人物埴輪の破片を検出した。１～４は円筒埴輪の破片であり、恐らく普通円筒埴輪であろう。口縁部と底部が確認され、突帯部は未確認である。焼成は不良で色調は灰褐色～黄灰色、胎土はやや粗い。５は３点の破片から推定した人物埴輪の顔面で、人物埴輪としては小振りなものであろう。焼成はやや不良で、色調はにぶい赤色、胎土は比較的良質である。

第２調査地区出土埴輪（第146図、第54表）

第２調査地区の表土からは数点の埴輪片が採集されている。位置的にはⅣ１～５・Bm～ｏグリット付近で、江南台地縁辺部から南へ200ｍ以上奥まった地点である。

６は、円筒埴輪の大形破片で、突帯と透孔の一部を残している。普通円筒埴輪であると思われ、突帯形状は凡例に示す分類ではＣ類、調整手法はＢ類に該当し、突帯高0.8cm、底部からの高さは18cmを測る。外面は縦位のハケメ、内面は斜位のハケメによって調整されており、使用されるハケメの原体は19本/1.7cmで非常に細かい。器厚は基底部中央で２cmを測り、透孔は円形であると考えられる。胎土には白色粒子をやや多く含んでいるが比較的良好で、焼成は酸化焔による良好で、色調は淡茶褐色を示している。

７は円筒埴輪胴部の小破片で、透孔の一部を残している。外面は縦位のハケメ、内面は斜位のハケメによって調整されており、使用されるハケメの原体は19本/２cmで非常に細かい。器厚は破片中央で0.8cmを測り、透孔は円形であると考えられる。胎土には白色粒子をやや多く含んでいるが比較的良好で、焼成は酸化焔による良好なもので、色調は淡茶褐色である。６に酷似し、同一個体である可能性も考慮される。（永井）



第146図　姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡群出土遺物(4)

第35表　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-1	A	31.5	27.9 24.5	14.5 14.0	A0.8 B1.0 C1.3	B 7.5 6.1	①B②B③0.4④26.0 ①B②B③0.5④16.0		①F ②A ③ナデ強い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ヨコハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 軟・酸 ③2・10 ④胴部一部欠損	第３段中位に小孔（径1.7）を１ヶ所穿孔する。胴部内面に沈線状のヨコナデ有り。
1-2	A	39.2	(22.5)	13.2 12.7	A0.9 B1.0 C1.1	(A) (7.0)	①C②B③0.8④25.5 ①C②B③0.4④14.3		①A ②B ③ナデ弱い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ヨコハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④口縁部大半を欠損	
1-3	A	39.5	(23.5)	(15.0)	A1.0 B1.1 C1.2	(A) (7.0)	①A②B③0.7④26.0 ①A②B③0.8④12.8		①F ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ナナメナデ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③7 ④縦半分を欠損	第３段外面に線刻。「(」
1-4	A	34.1	(23.0)	13.5 13.2	A0.9 B1.0 C1.9	A 7.0 6.7	①C②B③0.5④21.5 ①C②B③0.6④10.5		①B ②B ③ナデ弱い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→タテハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③4・7 ④口縁部欠損	
1-5	A	36.5	(23.5)	13.7 13.0	A1.0 B1.0 C1.2	A 7.2 7.0	①A②B③0.4④23.0 ①A②B③0.4④11.5		①A ②B ③ナデ強い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテナデ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④口縁部一部欠損	底部内面に木目圧痕。
1-6	A	—	(22.0)	—	A0.5 B1.2	B (8.5)	①A②A③0.6④—		①A ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③7 ④破片	口縁部に線刻。「(」
1-7	A	—	(22.5)	—	A1.0 B1.0	B (6.4)	①C②A③0.5④—		①B ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③5・8・10 ④口縁部2/3周	
1-8	A	—	(27.0)	—	A0.9 B1.0	B (7.0)	①A②B③0.7④—		①A ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5・7 ④口縁部1/2周	口縁部に線刻。「(」
1-9	A	—	(27.0)	—	A0.8 B0.9	(A) —	①C②A③0.4④—		①A ②A ③端部深く窪む		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④口縁部1/3周	突帯部裏面にヨコナデ。
1-10	A	—	(23.0)	—	A1.1 B1.2	—	①C②B③0.7④—		①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・10 ④口縁部1/2周	内・外面に黒斑。
1-11	A	—	(27.5)	—	A0.7 B0.9	(B)—	—		①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	9	①B、2・3 ②軟・酸 ③7 ④口縁部3/4周	突帯剝離。
1-12	A	—	(26.0)	—	A1.1 B—	—	①B②B③0.5④—		①B ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5 ④破片	
1-13	A	—	(20.5)	—	A0.9 B1.2	(B) (6.5)	①C②A③0.7④—		①B ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ヨコハケ	11	①B、1・2 ②硬・還 ③1・5 ④口縁部3/4周	
1-14	A	—	28.5 27.0	—	A0.9 B—	(B) —	①C②B③0.7④—		①E ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→ヨコハケ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・9 ④口縁部残存	口縁部内面に線刻。 「＼＼＼＼」 内面に黒斑。
1-15	A	—	(20.5)	—	A0.8	—	—		①B ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ	9 10	①B、1・2 ②普・酸 ③10 ④口縁部1/2周	焼き歪み著しい。内外面でハケ原体が異なる。 突帯剝離。
1-16	A	—	(28.0)	—	A0.8	—	—		①E ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	突体剝離。 内面に黒斑。

第36表　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-17	A	—	(28.0)	—	A1.1	—	—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメナデ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-18	A	—	(22.0)	—	A1.0 B1.1	(A) (7.0)	①A②A③0.5④—		①A ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突体・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②普・酸 ③7 ④破片	内面に黒斑。
1-19	A	—	(14.0)	—	A0.9 B1.2	(A) (6.5)	①C②B③0.5④—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突体・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③9・10 ④口縁部1/3周	ハケ原体幅3.5。
1-20	A	—	(29.0)	—	A0.9	—	—		①E ②A ③端部内面突出する		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④口縁部1/3周	
1-21	A	—	(29.0)	—	A0.8	—	—		①E ②A ③端部内面突出する		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	口縁部内面に線刻。「＼＼」1-19と同一個体か？
1-22	A	—	(21.0)	—	A0.9 B1.0	(A) (6.0)	①A②B③0.7④—		①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突体・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・7 ④口縁部1/2残	口縁部外面に線刻。「(」
1-23	A	—	(20.0)	—	A0.9 B—	—	①A②B③0.8④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突体・口唇部ナデ ③ナナメハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③7・8・9 ④破片	口縁部外面に線刻。「(」
1-24	A	—	(21.0)	—	A0.9	—	—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメナデ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-25	A	—	(23.0)	—	A1.0	—	—		①B ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2 ②普・酸 ③5・7 ④破片	
1-26	A	—	(21.0)	—	A0.8	—	—		①B ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	10	①B ②普・酸 ③4・10 ④破片	
1-27	A	—	(21.0)	—	A0.8	—	—		①B ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ナナメハケ→ヨコハケ	10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-28	A	—	(22.0)	—	A0.9 B—	(B) (7.0)	①A②B③0.8④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突体・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・10 ④破片	突体ナデの抜き払い痕あり。
1-29	(B)	—	—	—	E1.3	—	①A②B③0.8④— ①B②B③0.6④—		—		①— ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・10 ④破片	朝顔型円筒の胴部
1-30	A	—	(20.0)	—	A0.9	—	—		①B ②A ③ナデ		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③9 ④破片	工具幅3.8。
1-31	(A)	—	—	—	B— C1.3	—	①B②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ→タテハケ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・10	外面に2本の縦亀裂。
1-32	(A)	—	—	—	A1.0 B1.0	(A) (6.5)	①C②B③0.6④—		—		①— ②タテハケ→タテハケ→突体ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	内外面に黒斑３条突帯か？
1-33	(A)	—	—	—	A— B1.2 C1.3	(A) (6.5)	①A②B③0.9④— ①A②B③0.8④—		—		①— ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ→ナナメナデ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③7 ④胴部1/2周残	外面に黒斑。 突帯ナデ工具痕明瞭。

第37表　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物観察表(3)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-34	(A)	—	—	14.0 13.5	A— B0.9 C1.2	(B) (5.0)	①B②A③0.6④21.5 ①B②A③0.6④11.5		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ→ヨコハケ	10	①B、1・2 ②硬・酸 ③4・10 ④3段目まで完存	突帯裏面にヨコナデ。 1段目外面に縦方向に亀裂の補修痕。 (タテナデ)
1-35	(A)	—	—	13.5 13.0	A— B1.0 C1.4	A (7.5)	①C②B③0.6④23.3 ①C②B③0.6④11.2		—			①観察不可能 ②タテナデ→突体ナデ ③タテナデ→ナナメハケ→ヨコハケ	8	①B、1・2 ②硬・還軟・酸 ③4・8・10 ④底部ほぼ莞存	突帯裏面にヨコナデ。
1-36	(A)	—	—	(16.0)	A1.3 B1.4	(A) (7.0)	①1②A③0.6④12.0		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③10 ④底部2/3周残	第1段外面に縦方向の亀裂。
1-37	(A)	—	—	16.5 15.0	A1.1 B1.3	(A) (7.0)	①B②B③0.6④11.0		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③8・10 ④底部莞存	
1-38	(A)	—	—	12.5 —	A1.0 B1.1	(A) (7.0)	①C②A③0.5④11.5		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③ヨコナデ→タテナデ→ナナメナデ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③4・10 ④底部莞存	外面に黒斑。 第1段外面に亀裂補修痕。(突帯貼付後・タテナデ)
1-39	(A)	—	—	13.0 12.5	A— B1.2	—	①C②B③0.6④12.0		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③ヨコナデ→ナナメナデ→タテハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③9・10 ④底部完存	
1-40	(A)	—	—	(13.0)	A— B1.2	—	①C②A③0.4④11.5		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③ヨコナデ→ナナメナデ→タテハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③7・9 ④底部2/3残	
1-41	(A)	—	—	(12.0)	A— B1.1	(A) —	①B②A③0.5④11.2		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③7・9 ④底部1/3残	
1-42	(A)	—	—	(12.0)	A— B1.2	—	①B②B③0.7④12.0		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③ナナメナデ→タテハケ	8	①B、1・2 ②軟・酸 ③7・8 ④底部1/2残	
1-43	(A)	—	—	(15.0)	A— B1.2	—	①B②A③0.5④16.0		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	10	①B、1・2 ②硬・酸 ③7 ④破片	
1-44	(A)	—	—	(12.5)	A0.8 B1.2	(A) (6.0)	①C②B③0.5④13.3		—			①左 ②タテハケ→突体ナデ ③ヨコナデ→ナナメナデ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-45	(A)	—	—	13.5 10.7	A1.0 B1.2	(A) (6.0)	①B②A③0.4④9.5		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 ③4・10 ④底部完存	突帯裏ヨコナデ。
1-46	(A)	—	—	(13.0)	A— B1.2	—	①C②B③0.7④11.0		—			①観察不可能 ②タテハケ→突体ナデ ③ヨコナデ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③9・10 ④破片	外面黒斑。
1-47	(A)	—	—	(15.0)	A1.4	—	—		—			①観察不可能 ②タテハケ ③ヨコナデ→ナナメナデ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③9 ④破片	
1-48	(A)	—	—	(11.0)	A1.0	—	—		—			①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ→タテハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③9 ④底部1/2以上	底部内面にヨコハケ。(原体による押圧か)
1-49	(A)	—	—	(13.5)	A1.3	—	—		—			①左 ②タテハケ ③ヨコナデ→ナナメナデ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-50	(A)	—	—	(14.0)	A1.2	—	—		—			①観察不可能 ②タテハケ ③ヨコナデ→タテハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③8・10 ④破片	

第38表　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物観察表(4)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-51	(A)	—	—	(12.3)	A1.3	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③ナナメナデ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8・10 ④破片	
1-52	(A)	—	—	(12.3)	A1.3	—	—		—		①左 ②タテハケ ③ヨコナデ→ナナメナデ →ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-53	(A)	—	—	(12.5)	A1.4	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ		8	①B、1・2 ②硬・酸 ③1・4・9 ④破片	
1-54	(A)	—	—	(12.0)	A1.6	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④破片	
1-55	(A)	—	—	(12.0)	A1.0	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③ナナメナデ→タテハケ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8 ④破片	
1-56	(A)	—	—	(13.0)	A1.4	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	ハケ原体幅3.5 底部内面に押圧痕 内外面にタール状付着物。
1-57	(A)	—	—	(12.0)	A1.2	—	—		—		①左 ②タテハケ ③ナナメナデ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・10 ④底部2/3残	
1-58	A	—	—	—	A0.8 B1.0	(B)—	①C②B③0.6④—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ		11	①B、1・2 ②普・酸 ③5・9 ④破片	
1-59	A	—	—	—	A0.8 B0.8	(A)—	①C②B③0.5④—		①B ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ →タテハケ		10	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-60	A	—	—	—	A0.9	—	①—②A③—④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ →ヨコハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	内外面に黒斑。 内面に線刻。 「＼＼」
1-61	A	—	—	—	A0.9 B1.1	—	①B②A③0.4④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	胴部に亀裂補修痕。(タテナデ)
1-62	A	—	—	—	A0.9	—	①—②B③—④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-63	A	—	—	—	A0.8	—	①—②B③—④—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ →ヨコハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	内面に線刻。 「＼＼＼」 内外面に黒斑。
1-64	A	—	—	—	A1.0	—	①—②B③—④—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	内外面に黒斑。
1-65	A	—	—	—	A0.9	—	①—②B③—④—		①F ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ヨコハケ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③9・10 ④破片	
1-66	A	—	—	—	A1.2	—	—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ →ナナメハケ		10	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④破片	

第39表　姥ヶ沢遺跡第１号埴輪窯跡出土遺物観察表(5)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-67	A	—	—	—	A0.9	—	—		①B ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→タテナデ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・8 ④破片	
1-68	A	—	—	—	A0.9 B—	—	①A	②B③0.7④—	①F ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③5・10 ④破片	
1-69	A	—	—	—	A0.8	—	—		①F ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ		8	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	外面黒斑。
1-70	A	—	—	—	A1.0 B—	(B) —	①A	②B③0.6④—	①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ		8	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	外面黒斑。
1-71	A	—	—	—	A0.7	—	—		①E ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	内面に線刻。「＼＼＼」
1-72	A	—	—	—	A0.9	—	—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ		11	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④破片	外面黒斑。
1-73	A	—	—	—	A0.9	—	—		①F ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→ヨコハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	内面黒斑。
1-74	A	—	—	—	A1.0	—	—		①F ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ		11	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-75	A	—	—	—	A0.9	—	—		①A ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-76	A	—	—	—	A1.1	—	①—②A	③—④—	①A ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ		10	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④破片	
1-77	A	—	—	—	A0.9	—	—		①F ②B ③B		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ→ヨコハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-78	A	—	—	—	A0.8	—	—		①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	外面に線刻。「(」
1-79	A	—	—	—	A0.5	—	①—②A	③—④—	①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④破片	
1-80	A	—	—	—	A0.4	—	①—②B	③—④—	①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ヨコハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
1-81	A	—	—	—	A0.9 B0.9	—	①C②B	③0.5④—	—		①— ②タテハケ突帯ナデ ③タテハケ		8	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	突帯ナデ 工具痕明瞭。
1-82	(A)	—	—	—	A— B0.,5 C—	(A) (6.5)	①C②B ①C②B	③0.4④— ③0.4④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 硬・還 ③3・10 ④破片	

第40表　姥ヶ沢遺跡第1号埴輪窯跡出土遺物観察表(6)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1-83	(A)	—	—	—	A— B1.0	—	①C②B③0.6④12.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9 ④破片	外面黒斑。 原体幅3.5。
1-84	(A)	—	—	—	A1.4	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ→ヨコハケ		10	①B、1・2 ②硬・還 ③4・10 ④破片	底径20cm以上 3条突帯以上か？
1-85	A	—	—	—	A1.0 B1.2	—	①B②B③0.3④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ヨコハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9 ④破片	
1-86	A	—	—	—	A B0.9 C1.0	—	①B②B③0.3④— ①B②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ→タテナデ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③破片	肩部疑口縁。
1-87	B	—	41.0	—	A0.8	—	—		①H ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメナデ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9 ④口唇部1/3残	口唇部ナデ 工具痕明瞭。
1-88	B	—	—	—	A0.9 B1.0	—	①C②B③1.0④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコナデ→ナナメナデ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・9・10 ④破片	
1-89	B	—	—	—	A0.8 B1.1	—	①B②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ヨコハケ		10	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9 ④破片	
1-90	B・	—	—	—	A1.1 B—	(B) —	①B②A③0.5④— ①B②A③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ヨコハケ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8 ④破片	

第41表　姥ヶ沢遺跡第2号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
2-1	A	34.3	(25.2)	(13.2)	A1.2 B1.5 C1.3	A (6.3)	①A②B③0.5④21.4 ①A②B③0.4④11.3		①F ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→タテナデ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③8 ④縦半分残存	第3段外面に線刻「(」。
2-2	A	—	(29.0)	—	A0.9 B1.1	B (8.0)	①B②A③0.9④—		①F ②A ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ナナメハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9 ④破片	外面黒斑。
2-3	A	—	23.2 22.5	—	A0.9 B1.0	B 6.2 4.8	①B②A③0.3④—		①B ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→ヨコハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9・10 ④口唇部ほぼ完周	胴部内面に沈線状のヨコナデ有り。
2-4	A	—	25.0 23.5	—	A0.9 B1.0	(B) (7.5)	①B②B③0.6④—		①F ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③タテハケ→ヨコハケ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②普・酸 ③7・8 ④口唇部完周	
2-5															
2-6	A	—	(21.6)	—	A1.1	(A) (5.5)	①A②B③0.5④—		①B ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ→ナナメハケ		8	①B、1・2 ②硬・還 ③10 ④破片	胴部内面に沈線状のヨコナデ有り。
2-7	A	—	(28.0)	—	A0.9	—	①—②B③—④—		①B ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③4・9 ④破片	
2-8	A	—	—	(14.5)	A0.9 B1.1 C1.5	(A) (6.3)	①C②B③0.7④21.2		①C②B③0.7 ④9.4—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ→ナナメハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③8・10 ④大型破片	外面黒斑。
2-9	(A)	—	—	—	A1.0 B1.2	—	①B②B③0.4④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ナナメハケ		8	①B、1・2 ②普・酸 ③5・9 ④破片	

第42表　姥ヶ沢遺跡第２号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
2-10	(A)	—	—	—	A1.1 B1.4	(A) (6.4)		①C②B③0.6④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ	8	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-11	(A)	—	—	(11.8)	A1.2 B1.5	B (5.9) (5.2)		①C②B③0.6④9.7		—		①左 ②タテハケ→突帯 ③ナナメハケ→タテナ	8	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-12	(A)	—	—	(12.6)	A— B1.3	—		①A②B③0.5④9.3		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ	9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-13	(A)	—	—	(12.2)	A1.0 B1.1	A (7.4)		①C②B③0.7④9.8		—		①左 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ→ナナメハケ	10	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-14	A	—	—	—	A1.0	—		—		①B ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部 ③ヨコハケ→ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	外面黒斑。
2-15	A	—	—	—	A1.1	—		—		①B ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部 ③ナナメハケ→ヨコハケ→ナナメハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-16	(A)	—	—	—	A1.1	(A) (5.4)		①A②B③0.9④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ→ナナメハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③9 ④破片	
2-17	(A)	—	—	—	A— B1.1	(A) (5.2)		①B②B③0.4④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ヨコナデ→ナナメハケ	8	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
2-18	(A)	—	—	—	A1.1 B1.4	—		①B②B③0.8④9.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③7 ④基底部破片	
2-19	(A)	—	—	—	A1.2	—		—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③タテナデ→ナナメハケ→タテハケ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③7 ④基底部破片	
2-20	B	—	—	—	A0.9 B1.1 C1.1 D1.1 E1.1 F1.1	上B 7.5 5.5 下A 4.3 4.0		①C②B③0.8④— ①B②B③0.3④— ①D②B③0.6④— ①B②B③0.6④— ①B②B③0.6④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ→タテハケ→突帯ナデ→タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→ナナメナデ→ヨコハケ→ヨコナデ→ナナメハケ	8 12	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④口縁部・基底部欠損	肩部・第５突帯部分に疑口縁。
2-21	B	—	—	—	A1.0 B—	—		①B②B③0.8④—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③ナナメハケ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③9 ④口縁部破片	疑口縁部。

第43表　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
3-1	A	—	26.8	—	A1.1 B1.2	—		①C②B③0.5④—		①F ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ヨコハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③5・9 ④口縁部1/3周	原体幅3.7。
3-2	A	—	24.4	—	A1.0 B—	—		①B②B③0.6④—		①A ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④口縁部1/2周	原体幅3.7。
3-3	A	—	26.8	—	A0.9 B—	—		①—②B③—④—		①B ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③5・9 ④口唇部破片	突帯剝離。 外面黒斑有り。

第44表　姥ヶ沢遺跡第３号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
3-4	A	—	22.4	—	A0.9	—	—		①F ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②硬・還 ③3・10 ④口唇部破片	
3-5	A	—	27.3	—	A1.0	—	—		①B ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・9 ④口縁部1/2周	内面黒斑有り。
3-6	A	—	19.6	—	A0.8	—	—		①F ②B ③ナデ強い		①観察不可能 ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ →ナナメハケ		9	①B、1・2 ②硬・酸 ③9・10 ④口縁部破片	
3-7	(A)	—	—	—	A1.1 B1.2	(A) (6.4)	①A②B③0.5④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ→ナナメハケ →タテハケ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③4・9 ④破片	外部黒斑。
3-8	(A)	—	—	—	A1.1 B1.1	(A) (5.5)	①C②B③0.4④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ナナメハケ→タテハケ		7	①B、1・2 ②普・酸 ③6 ④破片	
3-9	(A)	—	—	17.5	A1.0 B1.5	(A) (6.1)	①C②B③0.6④9.7		—		①左 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ→ナナメハケ		10	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④基底部破片	
3-10	(A)	—	—	14.8	A0.9 B1.1	(A) —	①B②A③0.4④11.0		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ナナメハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④基底部破片	No.8と同一個体か？
3-11	(B)	—	—	12.8	A1.2 B1.2 C1.5	—	①A②A③0.4④18.7		①A②A③0.4 ④8.8—		①左 ②タテハケ→突帯 ③ナナメナデ		9	①B、1・2 ②軟・酸 ③4・8・10 ④基部1/2周	突帯部裏面にヨコナデ。
3-12	(A)	—	—	13.3	A1.8	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③ナナメナデ		9	①B、1・2 ②硬・還 普・酸 ③4・5 ④破片	
3-13	(A)	—	—	12.2	A1.7 B1.1	(B) (7.0) (6.0)	①B②A③0.5④11.0		—		①左 ②タテハケ→突帯 ③タテナデ→ナナメハケ		10	①B、1・2 ②硬・還 ③2・4	
3-14	(A)	—	—	14.0	A1.4	—	①—②B③—④—		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯 ③ナナメナデ→ナナメハケ		9	①B、1・2 ②硬・還 ③4・5 ④基部1/3周	
3-15	(A)	—	—	11.2	A1.3	—	—		—		①左 ②タテハケ ③ナナメハケ		9	①B、1・2 ②硬・還 ③4・9	
3-16	A	—	—	—	A0.8 B—	—	①C②B③0.6④—		①F ②A ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ →タテハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
3-17	A	—	—	—	A0.8	—	—		①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ		10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	No.16と同一個体か？
3-18	(A)	—	—	—	A1.0 B1.1	(A) —	①C②B③0.6④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ		9	①C、1・2 ②硬・酸 ③4・5 ④破片	
3-19	(A)	—	—	—	A1.0 B1.1	(A) —	①B②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ		9	①C、1・2 ②普・還 ③4・10 ④破片	

第45表　姥ヶ沢遺跡第4号埴輪窯跡出土遺物観察表

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
4-1	A	34.0	24.0 23.0	13.5 12.5	A0.7 B0.9 C1.1	A 6.8 6.5	①C②B③0.6④21.1 ①C②B③0.6④10.7		①F ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメナデ→ナナメナデ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③7・8 ④口縁部・底部を一部欠く	口縁部内外面に亀裂補修痕。(指オサエ・タテナデ)
4-2	A	32.1	(20.5)	12.5 11.0	A0.9 B0.9 C1.4	A 6.0 5.7	①C②A③0.4④19.5 ①D②A③0.5④8.0		①F ②B ③ナデ弱く、口唇部内面のみ工具使用		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ナナメナデ→ヨコハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 ③2・3 ④口縁部・底部を一部欠く	焼き歪み著しい。内面に沈線状のヨコナデ3条。
4-3	A	27.0	(20.5)	13.01 11.0	A1.0 B1.0 C1.3	B 6.5 5.0	①C②B③0.7④17.5 ①C②B③0.8④8.0		①C ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②ヨコハケ→タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ヨコハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 ③2・3 ④口縁部大半欠く	焼き歪み著しい。底部外面に押圧痕。 (木目明瞭)
4-4	A	—	22.3 22.0	—	A1.1 B1.1 C1.2	B 7.3 6.1	①C②B③0.5④— ①C②B③0.5④—		①C ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③5・10 ④底部部大半欠く	
4-5	(A)	—	—	(14.0)	A1.1 B1.3	A (6.5)	①B②B③0.4④16.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→タテハケ	9	①B、1・2 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	外面黒斑。 外面に亀裂補修痕。
4-6	(A)	—	—	(13.0)	A— B1.2	—	①C②B③0.4④10.0		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ヨコナデ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③6 ④破片	底部内面に押圧痕。 (木目明瞭)
4-7	(A)	—	—	(14.0)	A0.8 B1.0	A (6.5)	①C②B③0.4④9.8		—		①観察不可能 ②ヨコハケ→タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・10 ④破片	底部外面にタテハケに先行するヨコハケ。 透孔縁部に突帯ナデ工具の接触痕。
4-8	B	—	—	12.5	A— B0.9 C0.9 D0.9 E0.8 F1.1	A 7.0 6.8	①C②B③0.8④40.0 ①B②B③0.3④34.5 ①C②B③0.5④28.0 ①C②B③0.7④17.5 ①C②B③0.7④8.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ→ナナメハケ→タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ→ナナメナデ→ヨコハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9・10 ④口唇部欠く	底部外面に押圧痕。(木目明瞭) 第5突帯部に疑口縁。口縁部内面に線刻風の沈線「＼＼」 (最終調整に先行)
4-9	B	—	—	(12.0)	A1.0 B1.1 C1.1 D1.1 E1.0 F1.2	A 6.8 6.5	①B②B③0.7④58.0 ①B②B③0.5④32.0 ①C②B③0.5④26.0 ①C②B③0.5④1.2 ①C②B③0.6④8.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ→タテハケ→突帯ナデ→タテハケ ③ナナメハケ→ヨコナデ→ナナメハケ→ナナメナデ→ヨコハケ	13 8	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③5・6・8 ④底部の一部・口唇部を欠く	底部内面に押圧痕。(ナナメの木目。7本／2cm) 胴部外面に亀裂補修痕(タテナデ)。 第5突帯部に疑口縁。肩部を境にハケ原体が変わる。上位のハケ原体幅6.5
4-10	B	—	—	12.5 11.5	A— B0.9 C0.9 D1.0 E1.0 F1.4	B 7.5 6.7	①C②B③0.8④39.0 ①C②B③0.4④35.5 ①C②B③0.5④29.0 ①C②B③0.6④19.0 ①C②B③0.6④9.5		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ→タテハケ→突帯ナデ→タテハケ ③ヨコナデ→ナナメナデ→タテハケ→ナナメナデ→ヨコハケ→ヨコナデ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・10 ④口唇部を欠く	底部外面に最初の調整に先行する押圧痕(木目明瞭)。 第5突帯部に疑口縁。

第46表　姥ヶ沢遺跡第5号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
5-1	A	31.0	(21.5)	(12.5)	A1.0 B0.9 C0.9	A 6.4 6.1	①C②B③0.5④20.5		①A ②B ③ナデ弱い		①観察不可能 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2 ②硬・還 ③4・10 ④縦半分欠く	突帯ナデ工具痕明瞭 口縁部外面に線刻。「(」?
5-2	A	—	(21.5)	—	A1.0 B1.0	—	①a②B③0.4④—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ	11	①B、1・2・3 ②硬・還 軟・酸 ③4・8 ④口縁部3/4残	口縁部外面に線刻「＋」。
5-3	A	—	(26.0)	—	A1.0 B—	(A) —	①C②A③0.5④—		①B ②A ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④破片	

第46表　姥ヶ沢遺跡第５号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯 2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部 ①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整 ①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
5-4	A	—	(30.0)	—	A0.9	—	—	①B ②A ③ナデ強い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8 ④破片	2条突帯以上か。
5-5	A	—	(25.0)	—	A0.8 B0.9	A (7.0)	①C②B③0.5④—	①A ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ナナメハケ	8 11	①B、1・2・3 ②普・酸 ③7・9・10 ④破片	突帯ナデ工具痕明瞭。 ハケ原体2種類原体幅3.5。
5-6	(A)	—	—	—	A— B1.0 C—	(A) (7.5)	①C②B③0.6④— ①C②B③0.6④—	—	①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③10・11 ④破片	
5-7	(A)	—	—	—	A0.9 B1.0	(B) (7.5)	①C②B③0.7④—	①—②A③—④ — —	①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2 ②硬・還 軟・酸 ③4・10 ④破片	胴部に亀裂補修痕(タテナデ)。
5-8	(A)	—	(34.0)	—	A0.9 B1.0 C1.1 D—	(C) (7.0)	①B②B③0.7④— ①A②B③0.5④— ①A②B③0.5④—	①F ②B ③ナデ強く、削り込む	①— ②タテハケ→突帯ナデ→タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→タテハケ	10	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9・10 ④大型破片	口唇部ナデ工具痕明瞭。 胴部亀裂・亀裂補修痕(タテナデ)。 作業工程を示す歪み。 (乾燥単位) 3条突帯以上で、大形品の可能性有。
5-9	(A)	—	—	(15.5)	A1.0 B1.3	(B) (7.0)	①B②B③0.8④12.5	—	①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	9	①B、1・2 ②硬・還 ③4・10 ④破片	底部外面に黒斑。
5-10	(A)	—	—	(12.0)	A1.0 B1.2	(A) (6.0)	①B②A③—④0.4	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	11	①B、1・2・3 ②硬・還 軟・酸 ③4・10 ④破片	ハケ原体幅5.2。 突帯裏にヨコナデ。
5-11	A	—	(34.0)	—	A0.9 B0.9	(C) (6.5)	①A②B③0.8④—	①D ②B ③ナデ強く、削り込む	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9・10 ④大形破片	胴部に亀裂補修痕(タテナデ) 2条突帯以上。
5-12	A	—	—	—	A B—	(B) —	①A②B③0.6④—	①A ②B ③ナデ弱い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②普・酸 ③9・11 ④破片	外面に線刻。「(」? 内面に黒斑。2条突帯以上。
5-13	(A)	—	—	(13.0)	A— B1.0	—	①D②A③0.4④—	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	
5-14	(A)	—	—	—	A0.9 B—	(C) —	①C②B③0.5④—	①F ②B ③ナデ弱い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②硬・酸 ③5 ④破片	
5-15	A	—	—	—	A0.9 B0.9	—	①C②B③0.6④—	①A ②B ③ナデ弱い	①観察不可能 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	11	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9 ④破片	2条突帯以上。
5-16	A	—	—	—	A0.8	—	—m	①B ②B ③ナデ弱い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	11	①B、1・2 ②硬・還 ③4 ④破片	

第48表　姥ヶ沢遺跡第６号埴輪窯跡出土遺物観察表

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
6-1	A	—	(30.0)	—	A0.9 B1.0	A 8.0		①A②A③0.4④—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・還 軟・酸 ③4・9 ④破片	突帯ナデ布圧痕。
6-2	A	—	19.0	—	A0.9 B1.0	A 6.0		①C②B③0.4④—		①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③4・10 ④破片	
6-3	(A)	—	—	—	A0.9 B1.0	(A) (6.0)		①A②B③0.3④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→タテハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・還 軟・酸 ③4・9・10 ④破片	
6-4	(A)	—	—	(13.0)	A0.9 B1.1	(A) (7.0)		①A②B③0.6④12.0		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②普・酸 ③5 ④底部1/2残	
6-5	(A)	—	—	(14.0)	A1.0 B1.2	(A) —		①C②A③0.5④12.0		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9 ④底部3/4残	
6-6	A	—	—	—	A0.9	—	—			①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③	
6-7	B	—	(39.0)	—	A0.9	—		①—②A③—④—		①H ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	11	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5・7・9 ④大型破片	突帯部分までを黄橙色系の胎土を用い、口縁部は赤褐色系の胎土を用いる。

第49表　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
7-1	A	40.2	23.0 20.2	14.0 13.5	A0.8 B0.9 C1.1	A 7.0 6.5		①C②B③0.7④24.5 ①C②B③0.6④15.0		①B ②B ③ナデ強い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	11	①B、1・2 ②硬・還 ③1・2・3 ④胴部一部欠く	焼き歪み著しい。
7-2	A	44.7	(25.5)	15.0 12.5	A1.1 B1.1 C1.2	B 8.5 6.2		①C②B③0.4④26.0 ①B②B③0.5④14.0		①F ②B ③ナデ強い		①左 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ→タテハケ→ヨコハケ	10	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③8・9・10 ④口縁部大半欠く	基底部に縦方向の亀裂・亀裂補修痕(タテナデ)。 内面に線刻。 「(」
7-3	A	—	(27.0)	—	A0.9 B—	(A) (8.0)		①C②B③0.4④—		①D ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ	10	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9・10 ④口縁部1/2周	内面に線刻。 「＼＼＼」
7-4	A	—	(27.5)	—	A1.0 B—	(A) —		①C②B③0.6④—		①B ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・10 ④口縁部2/5周	
7-5	A	—	(27.0)	—	A0.9	—	—			①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	10	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9・10 ④破片	内面に線刻。 「＼＼＼＼」
7-6	A	—	(25.0)	—	A0.9 B—	(A) —		①A②B③0.6④—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	8	①B、1・2 ②普・酸 ③9 ④破片	内面に線刻。 「＼＼＼」
7-7	A	—	(37.0)	—	A0.9 B0.9	(A) 6.5		①C②B③0.7④— ①—②B③—④—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ タテハケ→ヨコハケ	11	①B、1・2 ②普・酸 ③8・9・10 ④大型破片	外面黒斑。 5条突帯品か？
7-8	A	—	—	—	A0.9 B0.9	(A) (6.5)		①A②B③0.5④—		①— ②BA ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③8・9 ④破片	内面に線刻。 「＼＼＼＼＼」
7-9	(A)	—	—	—	A1.0 B—	(B) (7.0)		①A②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9・10 ④破片	突帯ナデ工具痕明瞭。

第50表　姥ヶ沢遺跡第７号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
7-10	(A)	—	—	—	A1.1 B1.1	(C) (6.0)	①C②B③0.4④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5 ④破片	
7-11	(A)	—	—	14.0 13.0	A1.0 B1.1 C1.2	(C) (7.0)	①C②B③0.5④25.0		①C②B③0.4 ④14.5—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→タテハケ→ ナナメハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③5 ④底部完存	No10と同一個体か？
7-12	(A)	—	—	13.5 11.5	A1.9 B1.1	(B) (8.0)	①C②B③0.8④12.5		—		①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→タテハケ	10	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9 ④底部完存	風化著しい。
7-13	(A)	—	—	(14.0)	A1.0 B1.1	(B) (7.0)	①C②B③0.7④13.0		—		①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→タテハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5 ④底部1/2残	突帯部ナデに先行する指頭圧痕明瞭。
7-14	(A)	—	—	(14.0)	A— B1.2	—	①C②B③0.7④14.0		—		①観察不可能 ②ナナメハケ→タテハケ →突帯ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③7・8 ④破片	
7-15	(A)	—	—	—	A0.9 B—	(A) —	①C②B③0.6④—		①A ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・10 ④破片	外面黒斑。
7-16	(A)	—	—	—	A1.0 B1.0 C1.2	B (8.0)	①B②B③0.5④— ①C②B③0.5④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→タテナデ→ ナナメハケ	10	①C、1・2・3 ②普・酸 硬・還 ③4・8・9・10 ④破片	下位の突帯に、ナデに先行する指頭圧痕。
7-17	B	—	—	—	A0.9	—	—		①H ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ	12	①C、1・2・3 ②普・酸 ③5 ④破片	
7-18	B	—	—	—	A— B1.2	—	①C②B③0.6④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	9	①C、1・2・3 ②普・酸 ③11 ④破片	突帯部疑口縁。
7-19	B	—	(34.0)	—	A0.9	—	—		①H ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ	10	①C、1・2・3 ②普・酸 ③5 ④破片	
7-20	B	—	(41.0)	—	A1.0 B1.3	—	①C②B③0.8④—		①H ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯ナデ→ ナナメハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメナデ →ナナメハケ→ヨコハケ	9 11	①C、1・2・3 ②普・酸 ③7・11 ④口縁部大半を欠損	突帯部に疑口縁。疑口縁を境に胎土・ハケ原体が異なる。

第51表　姥ヶ沢遺跡第８号埴輪窯跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
8-1	A	—	(22.0)	—	A0.9 B1.0 C1.1	(C) (6.5)	①D②A③0.4④— ①D②A③0.4④—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	11	①B、1・2 ②硬・還 普・酸 ③4・9・10 ④縦1/2欠損	内面突帯裏付近にヨコナデ。
8-2	A	—	(24.0)	—	A0.8 B0.9	(C) (7.0)	①C②B③0.6④—		①F ②B ③ナデ弱い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテハケ→ナナメハケ タテハケ→ヨコハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・還 ③2・3・4 ④口縁部1/2残	内面に線刻。「＼＼＼＼」
8-3	A	—	—	—	A0.8	—	①—②B③—④—		①B ②B ③ナデ強い		①— ②ナナメハケ→タテハケ →突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	8	①B、1・2 ②軟・酸 ③1・4・9 ④破片	内面に黒斑。

第52表　姥ヶ沢遺跡第8号埴輪窯跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
8-4	A	—	—	—	A1.0	—	—		①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテハケ	10	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9 ④破片	
8-5	A	—	—	—	A1.0 B—	(A) —	①C	②B③0.6④—	①A ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ→タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④破片	突帯ナデ工具痕明瞭。
8-6	(A)	—	—	14.0 13.0	A1.0 B1.0	(A) (6.0)	①—	②B③—④(27.0)	①C ②B ③0.6 ④15.5—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ→タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④3/4周残存	内面突帯裏にヨコナデ。
8-7	(A)	—	—	(12.0)	A0.9 B1.0	(A) (7.0)	①B	②A③0.4④14.5	—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	10	①B、1・2 ②硬・還 ③2・3・4 ④破大型破片	底部外面に押圧痕(木目明瞭)。全面にわたって剝離が進行。内面に沈線状のヨコナデ。
8-8	(A)	—	—	(12.0)	A— B1.0 C1.2	(B) (6.5)	①C	②B③0.7④25.0	①A ②A ③0.7 ④14.5—		①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメナデ →タテハケ→ヨコハケ	10	①B、1・2 ②硬・還 ③1・2・3 ④底部1/2周残	
8-9	(A)	—	—	—	A— B1.2	(A) —	①C	②B③0.5④12.5	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ	9	①B、1・2・3 ②普・酸 硬・還 ③3・4・8・9 ④破片	
8-10	B	—	34.5 34.0	—	A1.0	—	①—	②B③—④—	①H ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④口縁部ほぼ完存	疑口縁からの剝離。

第53表　姥ヶ沢遺跡出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
一括-1	A	—	—	—	A1.0 B1.0	(B) —	①C	②B③0.7④—	①A ②B ③ナデ弱い		①— ②ナナメハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③11 ④破片	突帯ナデ工具痕明瞭。
一括-2	A	—	—	—	A0.9	—	—		①F ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ →タテハケ	10	①B、1・2 ②硬・酸 ③4・10・11 ④破片	
一括-3	A	—	—	—	A0.7	—	—		①G ②B ③ナデ強い		①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ	16	①C、1・2・3 ②軟・酸 ③11 ④破片	
一括-4	(A)	—	—	—	A0.9 B1.1	—	①A	②B③0.7④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	16	①C、1・2・3 ②普・酸 ③11 ④破片	外面赤彩か？
一括-5	(A)	—	—	—	A1.0 B—	(A) (5.0)	①C	②B③0.7④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ	17	①C、1・2・3 ②軟・酸 ③11 ④破片	
一括-6	(A)	—	—	—	A1.2 B1.2	—	①C	②B③0.7④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ	19	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・11 ④破片	
一括-7	(A)	—	—	—	A0.9 B0.9	—	①C	②B③0.7④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	18	①B、1・2・3 ②普・酸 ③11 ④破片	
一括-8	(A)	—	—	—	A0.9 B0.9 C0.9	—	①B ①C	②B③0.5④— ②B③0.6④—	—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ	10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③7・9 ④大型破片	2条突帯品以上か？
一括-9	(A)	—	—	—	A1.0 B1.4	—	①B	②A③0.7④12.0	—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	9	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③9・11 ④破片	
一括-10	(A)	—	—	13.0	A1.0 B1.0	(A) (7.0)	①C	②B③0.6④16.0	—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ	10	①B、1・2・3 ②硬・還・普・酸 ③1・3・9・10 ④破片	底部内面に板押圧痕。

第54表　姥ヶ沢遺跡出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯	2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部	①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整	①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
一括-11	B	—	—	—	A1.0	—	①C②B③0.8④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		11	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③11 ④完周残存	疑口縁。
一括-12	(B)	—	—	(12.0)	A0.8 B1.0 C1.1	(A) (6.0)	①A②B③0.6④20.5		①A②B③0.7 ④9.5		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		8	①C、1・2・3 ②軟・酸 ③9・11 ④底部半周・肩部以上欠損	風化著しい。
一括-13	B	—	—	—	A1.0	—	①—②B③—④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		11	①B、1・2・3 ②普・酸 ③8・9 ④破片	疑口縁部で剝離する。
一括-14	B	—	—	—	A0.9	—	①—②B③—④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		8	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5・11 ④破片	疑口縁部で剝離する。
一括-15	(A)	—	—	(14.5)	A0.9 B1.2	(A) (7.5)	①C②B③0.6④13.0		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③タテハケ→ナナメハケ →ヨコハケ		10	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③9・11 ④破片	
一括-16	(A)	—	—	13.0 11.5	A1.1 B1.1	(B) (6.0)	①B②B③0.4④13.5		—		①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→タテナデ →タテハケ		10	①B、1・2・3 ②普・酸 ③9・11 ④底部ほぼ完存	
A-1	A	—	(24.0)	—	A0.9	—	—		①E ②B ③ナデ強い		①— ②ナナメハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ		9	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5・10 ④破片	
A-2	A	—	—	—	A0.9	—	—		①A ②A ③ナデ弱い		①— ②ナナメハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ		12	①B、1・2・3 ②軟・酸 硬・還 ③3・9 ④破片	
A-3	A	—	—	—	—	—	—		—		①観察不可能 ②タテハケ ③—		—	①B、1・2・3 ②軟・酸 ③11 ④破片	底部内面剝落。
A-4	(A)	—	—	—	A1.5	—	—		—		①観察不可能 ②観察不可能 ③ヨコナデ		—	①B、1・2・3 ②普・酸 硬・還 ③1・4・10 ④破片	
第2—1	(A)	—	—	(12.0)	A— B1.0	(A) —	①C②A③0.7④12.0		—		①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ→ナナメナデ →ナナメハケ		18	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③8・9 ④破片	
第2—2	(A)	—	—	—	A0.8	(A) (5.5)	①—②A③—④— ①—②A③—④—		—		①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ		19	①B、1・2・3 ②硬・酸 ③4・8・9 ④破片	

第2節　富士山遺跡

調査地区	調査期間	調査面積
第1調査地区（　12H　）	89年10月18日～3月30日	18,000㎡
第2調査地区（16H・A池）	90年1月24日～6月6日	27,900㎡
第3調査地区（　17H　）	90年11月26日～2月5日	10,200㎡

第2節　富士山遺跡

(1)　遺跡概観

本遺跡では、3調査地区56,100㎡の調査を行っている。

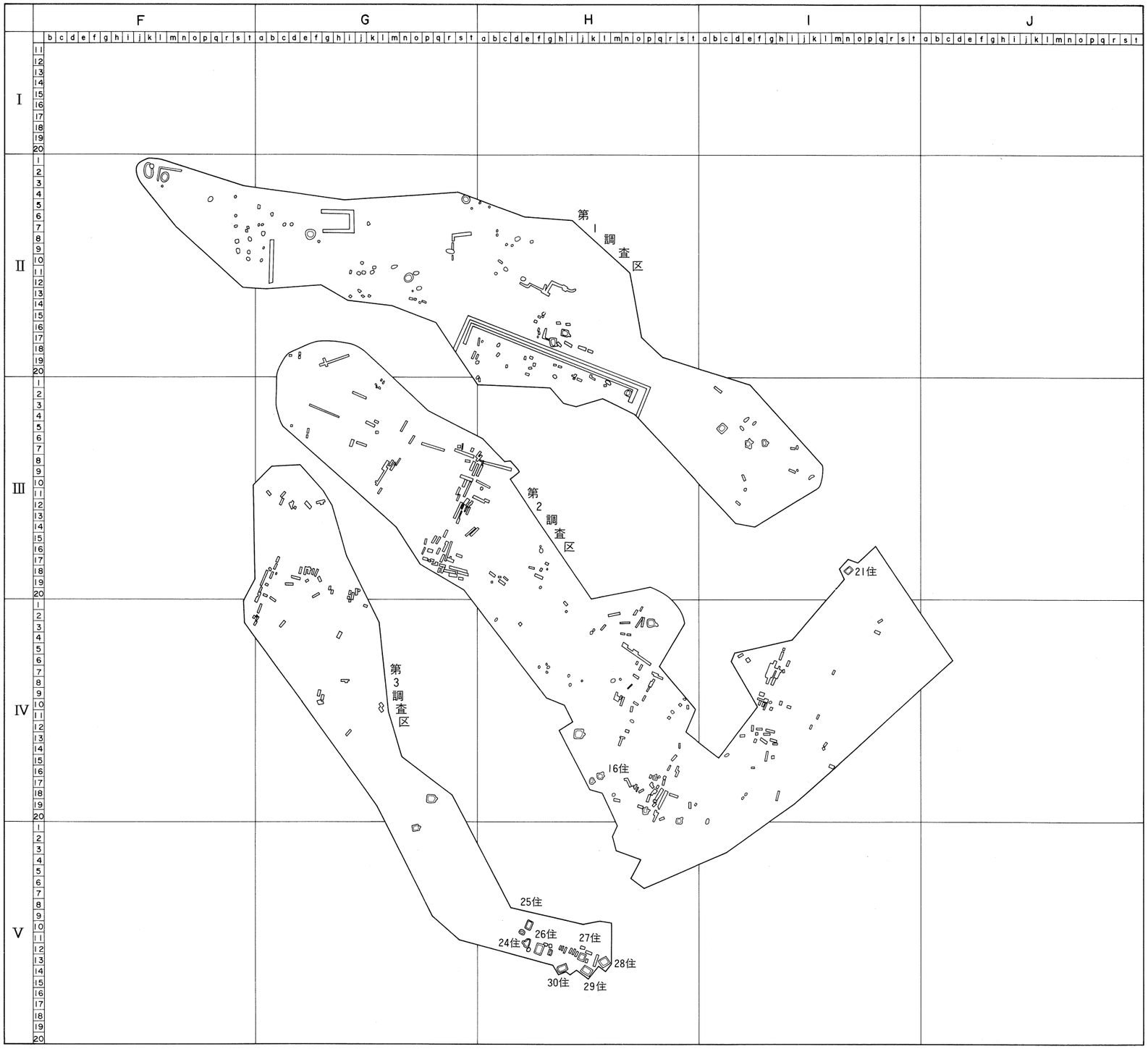
第1調査地区は、台地崖線部に最も近く、平成元年10月から2年3月にかけて、約18,000㎡の調査を行っている。縄文時代早期の炉穴3基、前期諸磯式期の住居跡3軒、中期加曽利E式期の住居跡2軒と屋外埋甕1基と集石土坑4基、平安時代の住居跡7軒が確認されている。

第2調査地区は、平成2年1月から6月にかけて、約27,900㎡の調査を行っている。縄文時代中期の集石土坑7基、後期の屋外埋甕1基、古墳時代の住居跡2軒、平安時代の住居跡6軒が確認されている。第3調査地区は、平成2年11月から3年2月にかけて、約10,200㎡の調査を行っている。縄文時代中期の集石土坑2基、弥生時代後期の住居跡7軒、平安時代の住居跡2軒、土坑17基が確認されている。弥生時代の遺構および遺物が確認されているのは第3調査地区のみである。この調査区は、遺跡範囲の南西部分にあたっており、台地崖線部からはおよそ200m程内部へ入っている。調査区の東側には、南北方向に開析谷が崖線部より入り込んでおり、さらに第2調査区と第3調査区の間にこの開析谷から枝別れした埋没谷が東西方向に走っている。弥生時代の住居跡群が検出されているのは、この開析谷が分岐する舌状に張り出した地点である。標高は65m前後で、緩やかな斜面になっている。(第147・148図)

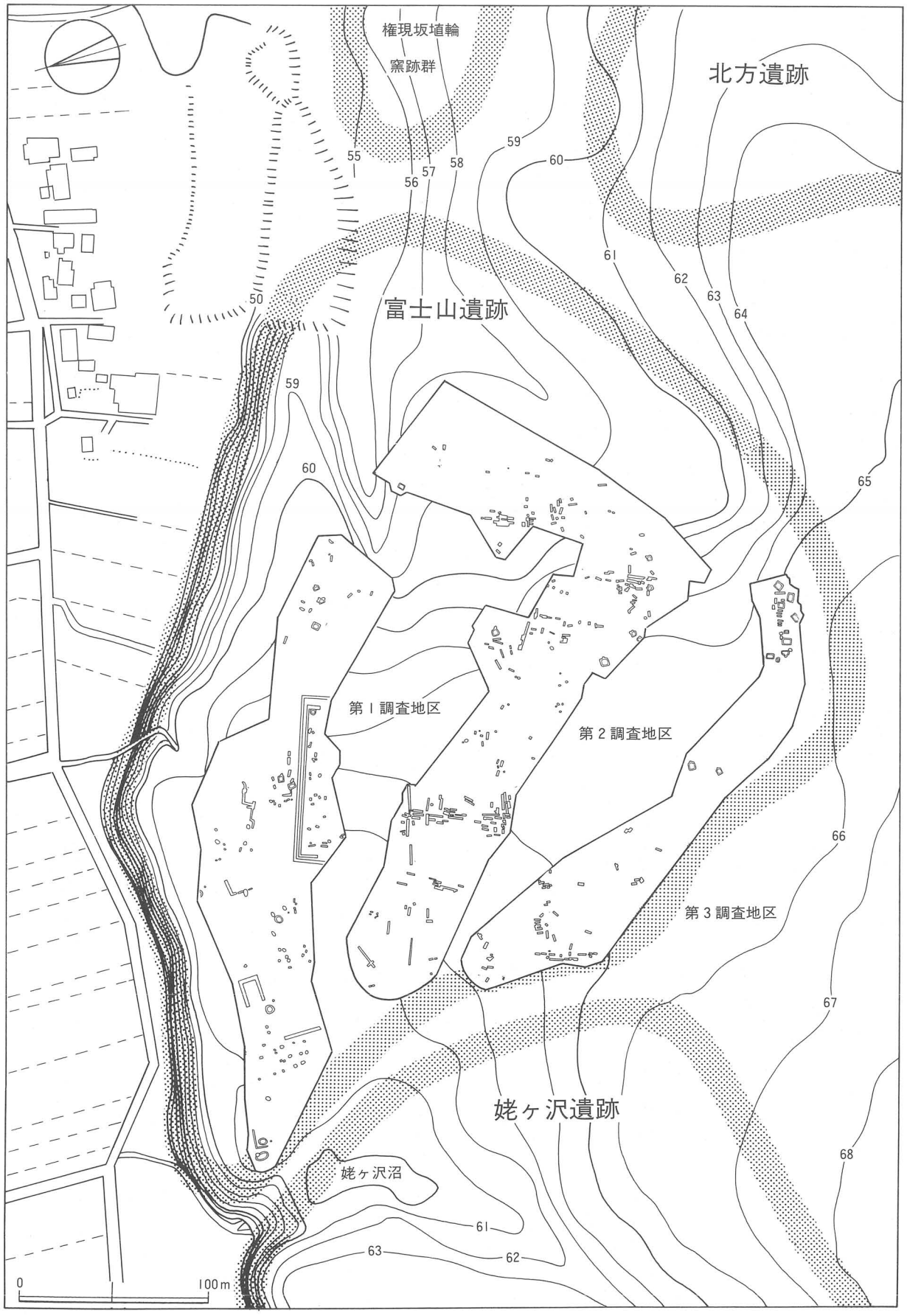
なお、同じ弥生時代の集落遺跡である姥ヶ沢遺跡（第2調査地区）からは、東方へ約600m隔たっている。

検出された、該期の遺構は、弥生時代後期の住居跡7軒である。この他、土坑が17基確認されているが、明確に弥生時代に属すると考えられる土坑は、2基だけである。この2基は、不整円形を呈し共通するが、この他の土坑は、いずれも長方形を呈している。遺物はほとんど無く、僅かに認められる土器片も周囲よりの流れ込みと判断され、時期を決定する遺物の出土状態は示していない。長方形の土坑は、近世から近代にかけて作られた畑作物の貯蔵穴とも考えられるが、住居跡の軸方向と平行に重複すること無く並んでいることから、弥生時代の土坑の可能性も否定できないため、今回の報告書に、時期不詳として報告しておく。これらの遺構は、調査区の東端部に分布しており、集落跡の主体は調査区の東側、開析谷の西岸一帯に広がっているものと推測される。調査された住居跡は、姥ヶ沢遺跡と同様に、7軒とも火災により焼失したものである。床面上からは、焼土や焼け落ちて炭化した屋根材などが検出されている。遺物の出土状態も姥ヶ沢遺跡と似ており、完形品は少なく、転用品が多い。

姥ヶ沢遺跡・川本町焼谷遺跡・白草遺跡においては、住居跡に近接して円形の土坑が確認されており、住居跡に付帯する屋外施設と判断されている。本地域周辺における一般的な集落構成を示していると考えられるが、本遺跡においてはそのような施設は確認されず、集落構成の在り方が異なるようである。各住居跡の帰属時期は考察において検討しているが、集落は、姥ヶ沢遺跡と比較すると本遺跡の方がやや先行して営まれていたようである。しかし、概ね同時期の集落として把えることが可能であり、立地条件をほぼ同じくする集落が、近接して併存していたことになる。集落構成および出土土器の内容に異なる部分が認められることから、各集団の規範を維持しつつも交流がなされていた事が想定され、そこにどのような各集団の規範の維持機構が存在していたのか興味深い検討課題である。　（森田安彦）



第147図　富士山遺跡グリット全体図



第148図　富士山遺跡の地形と調査地区

(2)　遺構とその出土遺物

「住居跡」

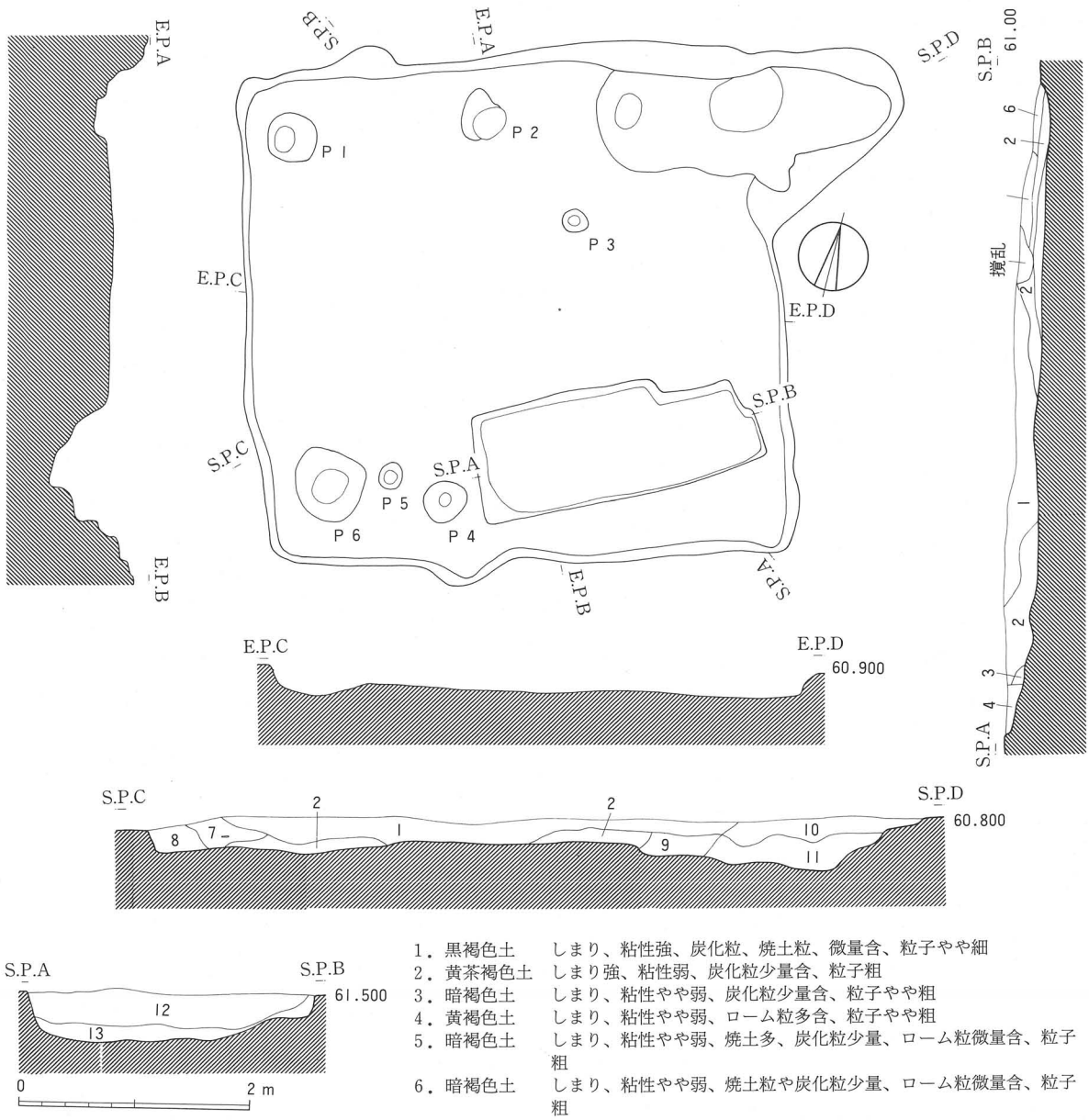
第 16 号住居跡（第149・150 図・図版 72・73）

［位置］ HIV-116　グリットに位置する。

［形状］ 長径 4.7 m、短径 4.5 mの隅丸方形を呈する。北東隅に不整楕円形の土坑が重複している。また、南東壁寄りに、長軸 2.5 m程の不整長方形を呈する土坑が床面より検出されている。セクションでの重複関係は認められないことから、床下土坑の可能性も考えられる。

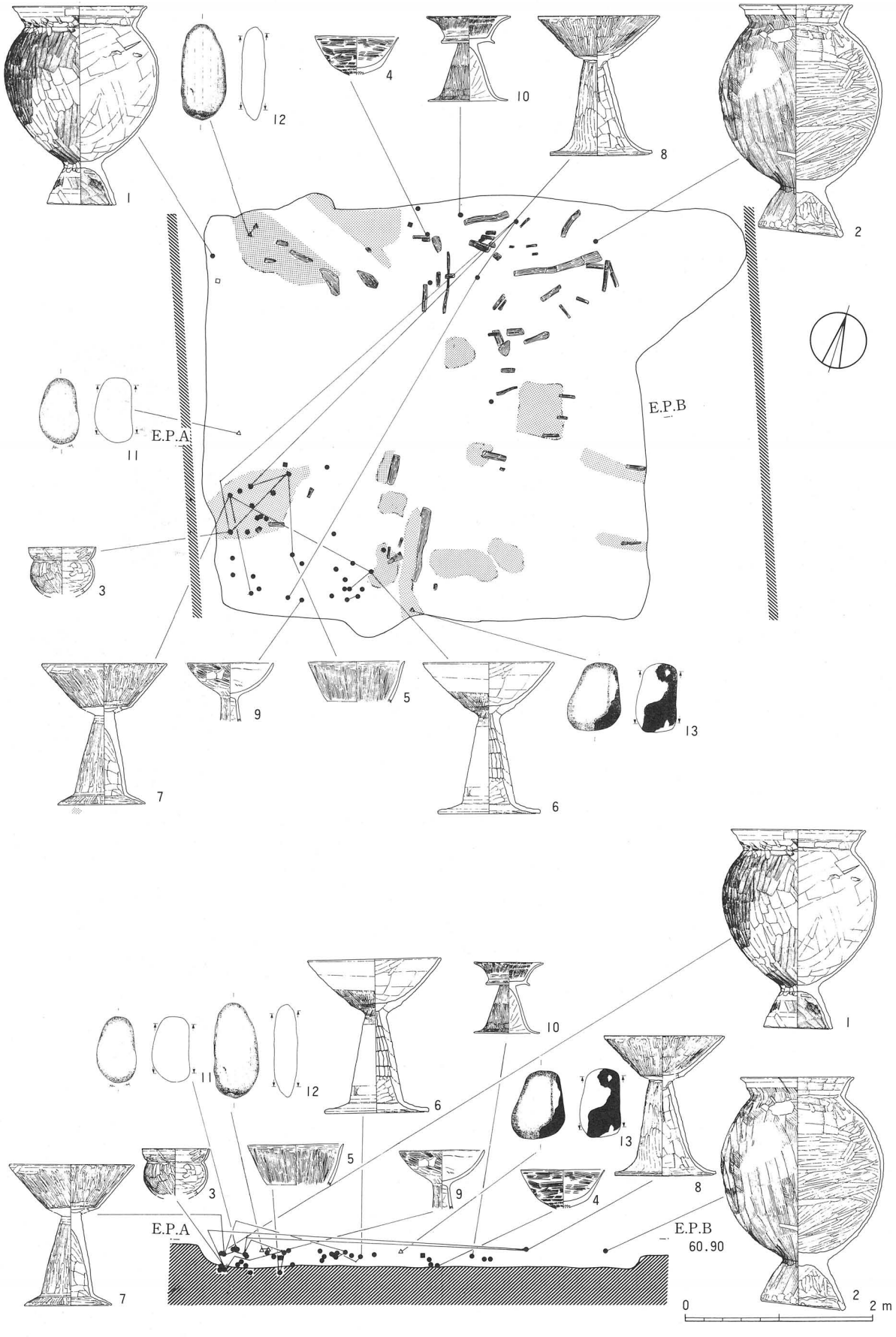
［覆土］ 覆土は 13 層に分層され、自然堆積を示す。覆土下層は、多量の焼土・炭化粒子を含み、炭化材が放射状に検出されている。焼失住居である。

［柱穴］ 柱穴は 6 口確認されているが、不規則な配置となっており、主柱穴は明確に比定できない。



1．黒褐色土　しまり、粘性強、炭化粒、焼土粒、微量含、粒子やや細
2．黄茶褐色土　しまり強、粘性弱、炭化粒少量含、粒子粗
3．暗褐色土　しまり、粘性やや弱、炭化粒少量含、粒子やや粗
4．黄褐色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒多含、粒子やや粗
5．暗褐色土　しまり、粘性やや弱、焼土多、炭化粒少量、ローム粒微量含、粒子粗
6．暗褐色土　しまり、粘性やや弱、焼土粒や炭化粒少量、ローム粒微量含、粒子粗
7．茶褐色土　しまり強、粘性弱、炭化粒微量含、粒子粗
8．茶褐色土　しまり強、粘性弱、炭化粒微量含、粒子粗
9．黄茶褐色土　しまり強、粘性弱、ローム粒少量、ロームブロック微量含、粒子粗
10．茶褐色粒　しまり強、粘性弱、粒子粗
11．暗茶褐色土　しまり強、粘性弱、ローム粒微量含、粒子粗
12．暗褐色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
13．暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒多含、粒子やや粗

第149図　富士山遺跡第16号住居跡平面図



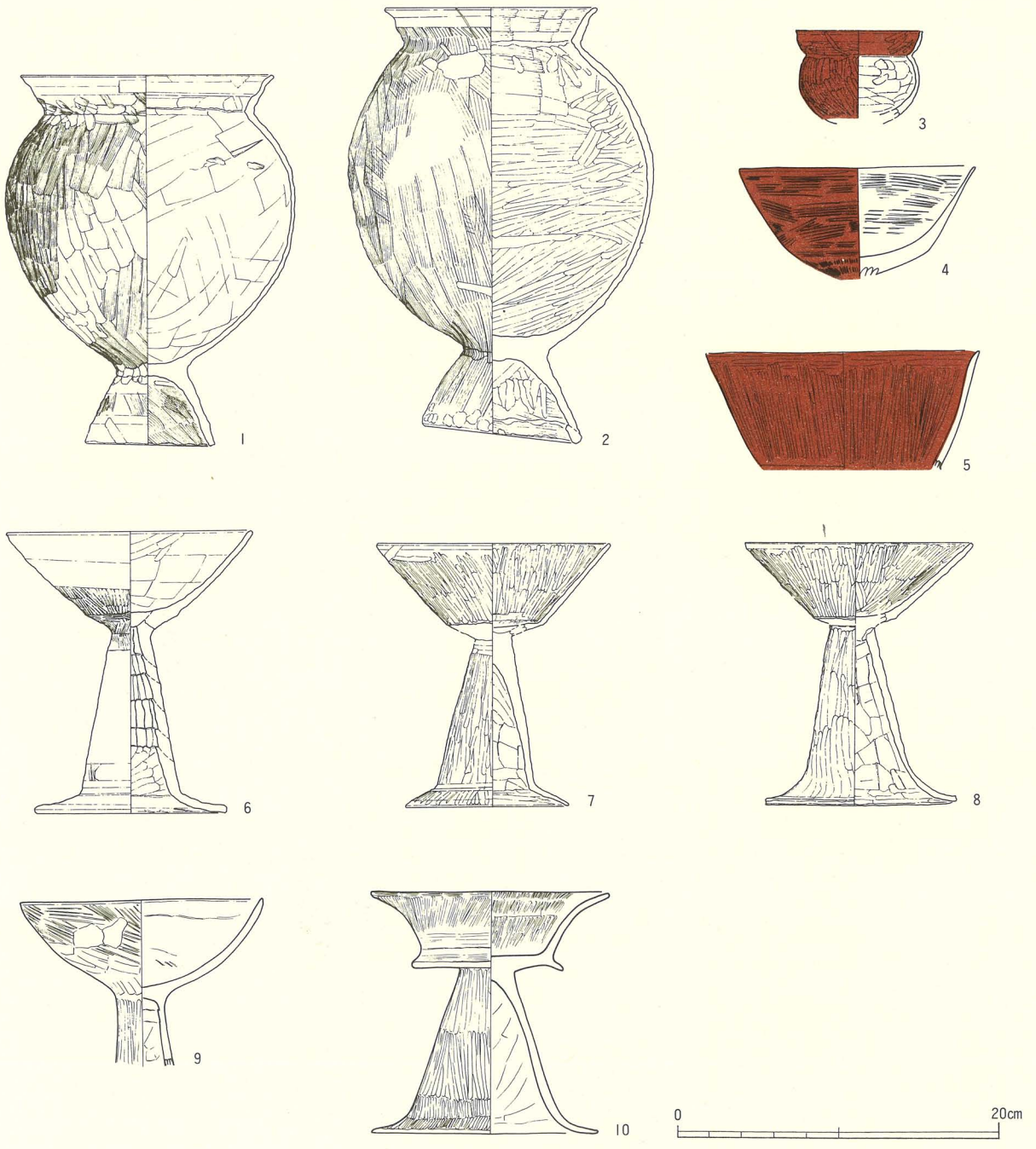
第150図　富士山遺跡第16号住居跡遺物分布図

P 1-11.3 cm、P 2-8.7 cm、P 3-20.6 cm、P 4-20.6 cm、P 5-27.5 cm、P 6-49.8 cmを測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面上には、焼け落ちた屋根材が放射状に遺存しており、遺物は住居南西隅より纏まって出土している。１の台付甕が北西隅に寄りかかるように、また、２の台付甕が北東隅より、いずれもほぼ完形で床面より出土している。６・７・８の高坏は南西隅より、10の高坏は北壁中央より、炭化材に混じってやや床面から浮いた状態で検出されている。いずれもほぼ完形品である。

［遺物］（第151・152図・図版82）遺物は、土器105点、磨石３点が出土している。１・２は、Ｓ字状口縁をもつ台付甕形土器である。１は、体部はヘラ状工具によるケズリの後、ハケ状工具による縦方向の調整がおこなわれている。いずれも、台部との接合



第151図　富士山遺跡第16号住居跡出土遺物(1)

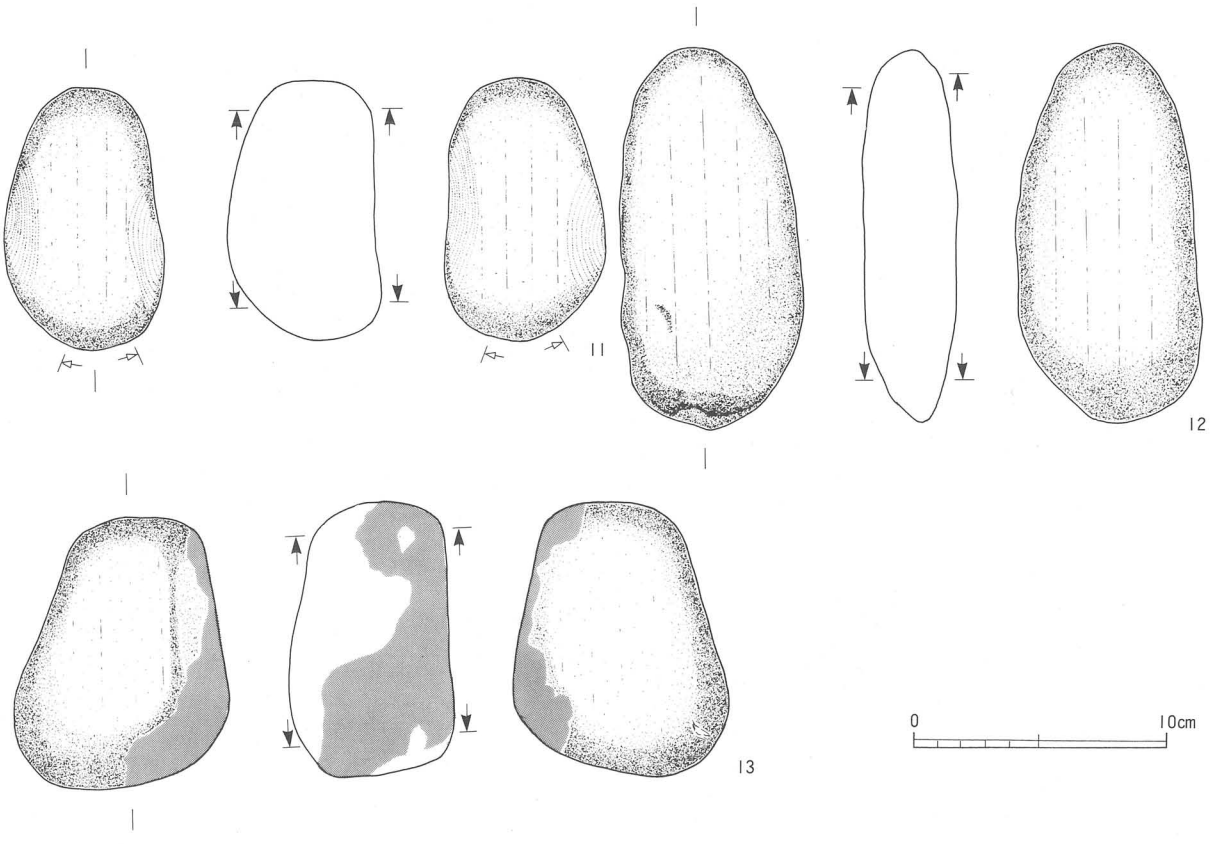
部から上に向かって斜方向に施される。頚部は、体部のハケ調整の後、ヘラ状工具によるケズリによって調整される。2は、台部裾に粘土紐が廻らされ、複合している。3は、坩形土器である。口縁部は横方向の、体部は縦方向のミガキが施される。内面は、ミガキにより調整される。4は、高坏の坏部である。外面は、ハケ状工具による横方向の調整を受ける。内面は、ハケ状工具による横方向の調整の後、ナデにより磨消している。赤色塗彩が施される。5は、器種・器形ともに不明の口縁部破片である。内外面に丁寧な縦方向のミガキが施され、赤色塗彩される。6～9は、高坏である。6は、坏部下半から接合部までハケ状工具により縦方向に調整した後、ナデによって磨消している。7・8は、坏部と脚部に縦方向のミガキを施す。9は、坏部にハケ状工具による斜方向の調整を施す。坏部下部から接合部、脚部はミガキにより調整される。10は、異形の高坏である。外面は、坏部・脚部とも縦方向のミガキが施される。坏部内面もミガキにより調整される。

11～13は、フォルンフェルス・砂岩・チャート製の磨石である。11・13は、やや厚みのある礫を用いている。平坦な面と、それに対向するなだらかな凸の面に擦痕をもつ。11の下端面には、敲打痕がみられる。12は、偏平な礫を用い、平坦な面の両面に擦痕をもつ。13は、片面に多量のススが付着している。

［時期］床面に残された遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。

第55表　富士山遺跡第16号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
11	床上16cm	磨石2b	105	62	57	600	H	a	研磨3敲打有
12	床上15cm	磨石2b	150	72	32	400	S	a	研磨3
13	床上14cm	磨石5a	108	84	67	960	C	a	研磨3-4被熱



第152図　富士山遺跡第16号住居跡出土遺物(2)

第56表　富士山遺跡第16号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	台付甕	15.2	22.7	8.5	SB	dg	b	100%	
2	台付甕	13.7	27.5	10.4	SW	do	b	60%	
3	坩	(8.3)	5.4		WR	do	a	50%	ミニチュア表面赤彩
4	高　坏	14.1	6.8		SWB	do	b	70%	外面赤彩
5	坩	16.9	7.4		WR	do	a	90%	内外面赤彩
6	高　坏	15.5	17.5	12.2	SW	dg	a	90%	
7	高　坏	14.6	15.8	10.3	SWB	rb	a	90%	
8	高　坏	14.4	(16.3)	11.8	SW	do	a	100%	
9	高　坏	15.1	10.4		SWB	do	b	90%	
10	高　坏	14.8	15.0	14.1	SWB	do	a	100%	

第21号住居跡（第153図）

［位置］ⅠⅢ-n 19グリットに位置する。

［形状］長径3.7ｍ、短径3.6ｍのやや不整な隅丸方形を呈する。北側の壁面が一部突出する。

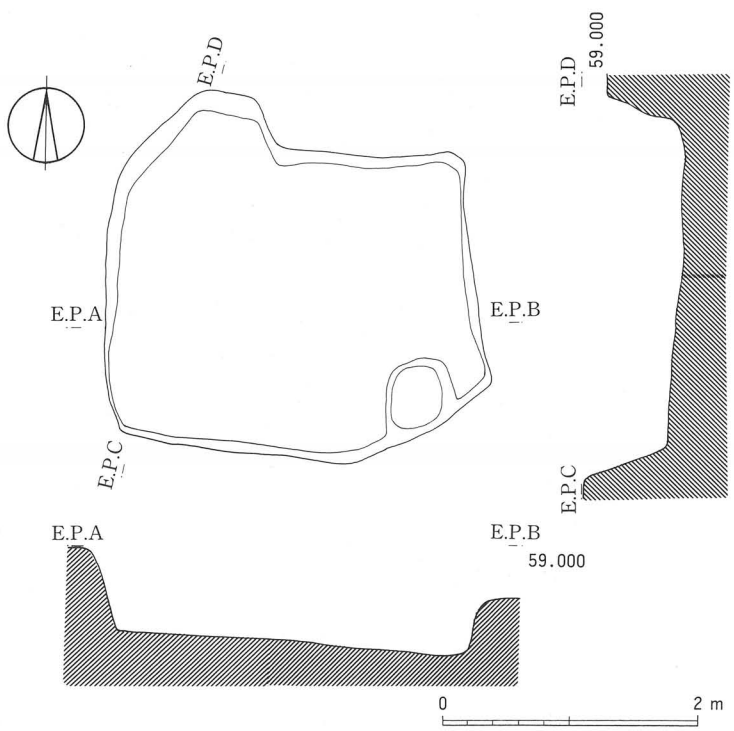
［柱穴］確認されていない。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］覆土中より、ハケ調整の施された土器小片が数点出土している。

［遺物］いずれも小片のため、図示するには至らなかった。

［時期］覆土中の遺物より判断して、古墳時代前期五領式期。



第153図　富士山遺跡第21号住居跡平面図

第24号住居跡（第154・155図・図版74）

［位置］ＨＶ-c 9•c 10グリットに位置する。北側に第25号住居跡、南側に第26号住居跡が位置している。

［形状］長径3.05ｍ、短径3.1ｍの、西壁が突出する不整形を呈する。２軒の住居の重複の可能性もあるが、セクションでは、確認されなかった。

［覆土］覆土は、10層に分層され、自然堆積を示す。覆土には、若干の炭化粒が混じっており、北東隅に長さ25㎝程の炭化材が出土している。

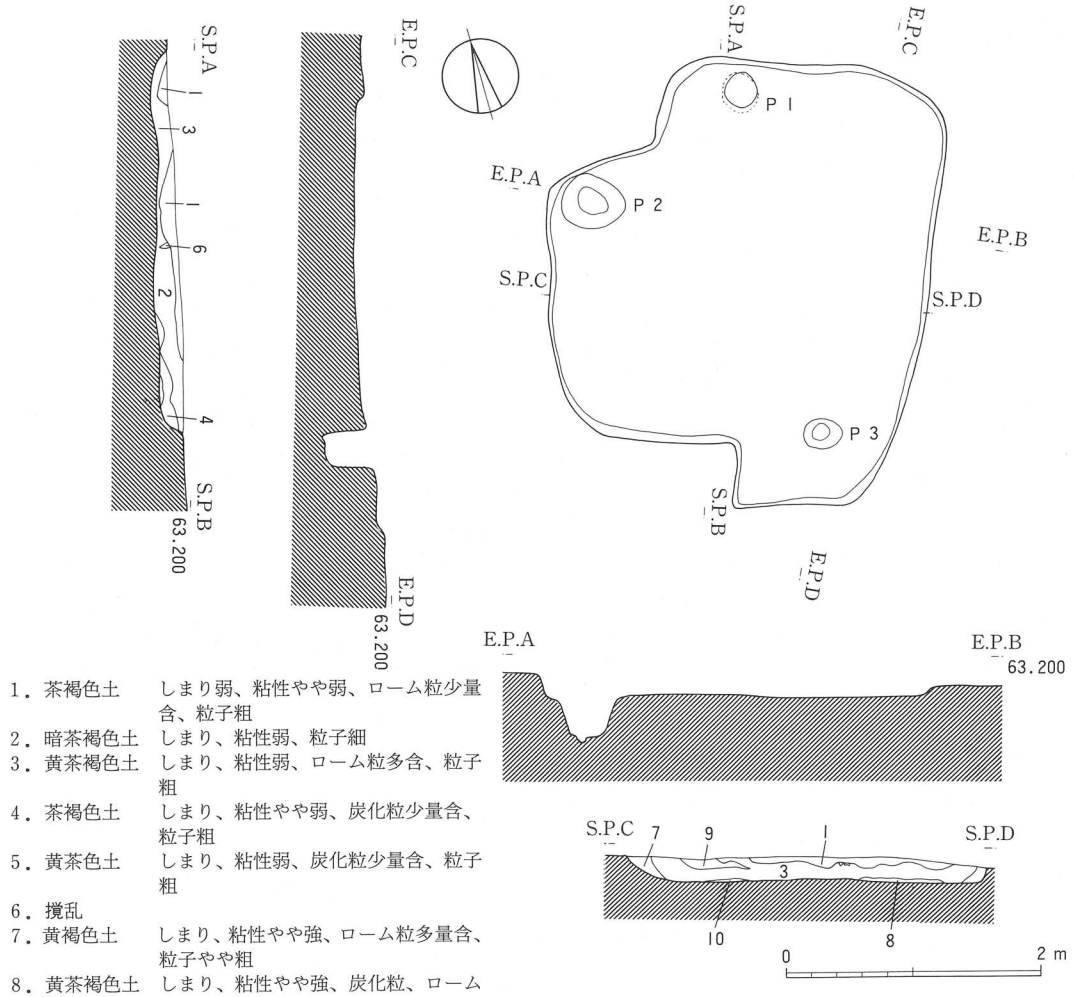
［柱穴］柱穴は３口確認されているが、不規則な配置をとる。Ｐ1-46.4㎝、Ｐ2-33.0㎝、Ｐ3-42.1㎝を測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］５の磨石が床面に接した状態で出土している。他は、いずれも床面から若干浮いた状態で出土しており、住居廃絶時に遺棄された状態で検出された遺物は無い。

［遺物］（第156図、図版83）遺物は、土器51点、磨石２点、棒状礫器１点が出土している。

１は、高坏形土器である。口縁部に輪積み痕をつまみ出した突帯を３条廻らせ、この突帯と口唇部に刻みを施す。突帯以下と内面は、横方向のナデによって調整される。３は、台付甕形土器の台部である。



1．茶褐色土　しまり弱、粘性やや弱、ローム粒少量含、粒子粗
2．暗茶褐色土　しまり、粘性弱、粒子細
3．黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒多含、粒子粗
4．茶褐色土　しまり、粘性やや弱、炭化粒少量含、粒子粗
5．黄茶色土　しまり、粘性弱、炭化粒少量含、粒子粗
6．撹乱
7．黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子やや粗
8．黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、炭化粒、ローム粒少量含、粒子粗
9．暗黄朱色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒、焼土少量含、粒子粗
10．黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗

第154図　富士山遺跡第24号住居跡平面図

ナデ調整がほどこされる。内面には輪積み痕が明瞭に残る。4は、壺形土器である。口唇下はナデにより成形される。口唇部、肩部、体部中半に3段の文様帯をもち、LR縄文が施文される。体部下半には、縦方向のミガキが施される。内面は横方向のミガキにより調整される。5・7は、砂岩製の磨石である。平坦な面の両面に擦痕をもつ。7は偏平な礫を使用している。6は、緑泥片岩製の棒状礫器である。断面形状は、隅丸の長方形である。

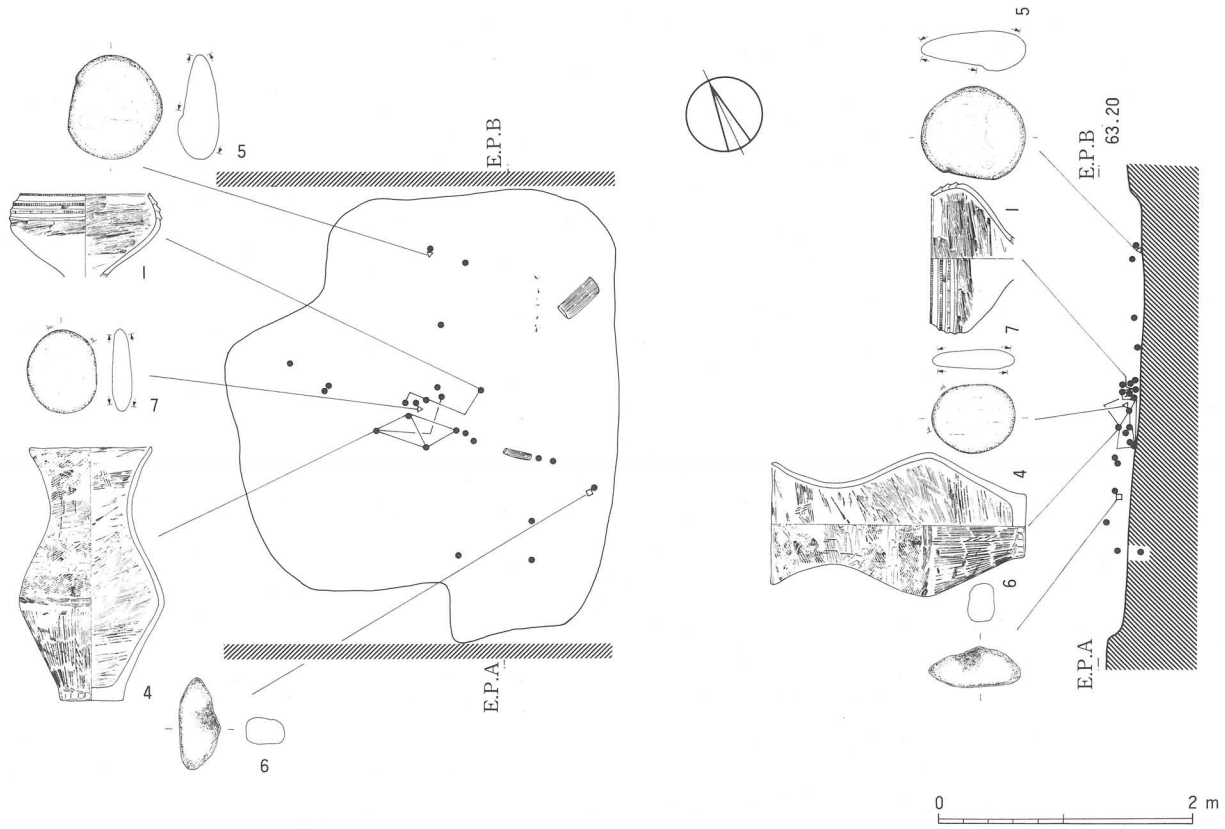
［時期］覆土中より出土した遺物から判断して、弥生時代後期。

第57表　富士山遺跡第24号住居跡出土土器観察表

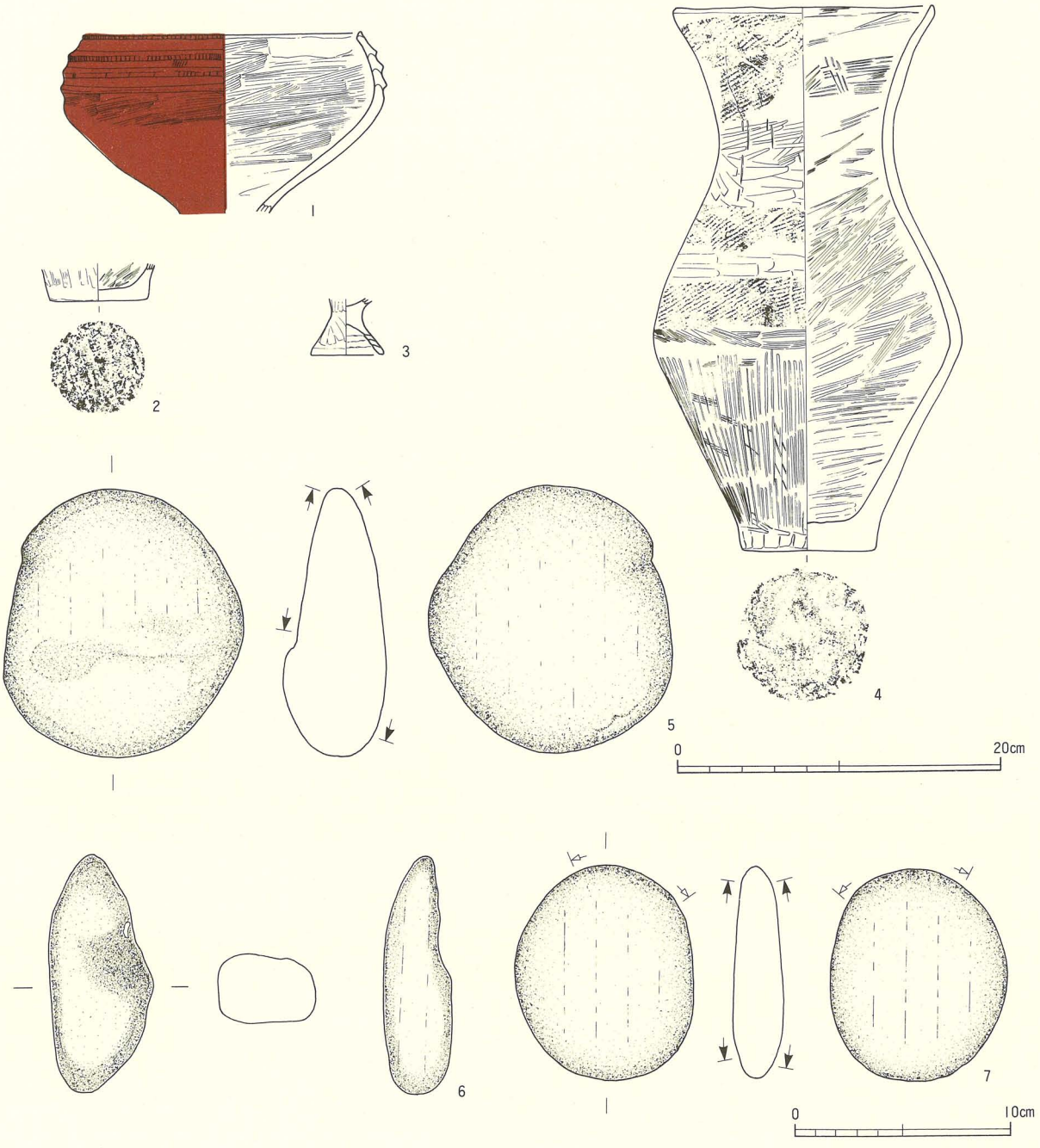
番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	高坏	17.0	11.2		SW	do	b	50%	表面赤彩
2	甕		2.1	6.0	SW	dg	c	100%	
3	高坏		3.9	4.5	BW	do	b	100%	ミニチュア
4	壺	16.1	33.0	8.1	SW	do	b	80%	

第58表　富士山遺跡第5号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
5	床面直上	磨石1a	126	110	43	813	S	a	研磨3
6	床上6cm	棒状礫器		72	30	19	Rh	a	
7	床上8cm	磨石2a	100	82	25	330	S	a	研磨3敲打有



第155図　富士山遺跡第24号住居跡遺物分布図



第156図　富士山遺跡第24号住居跡出土遺物

第 25 号住居跡（第 157・158 図・図版 75・76）

［位置］ＨＶ-ｃ７・ｃ８グリットに位置する。南側に第 24 号住居跡が位置している。西側に第 366 号土坑が近接している。

［形状］長径 3.6 ｍ、短径 2.7 ｍの長方形を呈する。

［覆土］９層に分層され、自然堆積を示す。全体的に薄く焼土・炭化粒子を含み、床面からは炭化材が検出されており、本住居跡が焼失住居であることを示している。

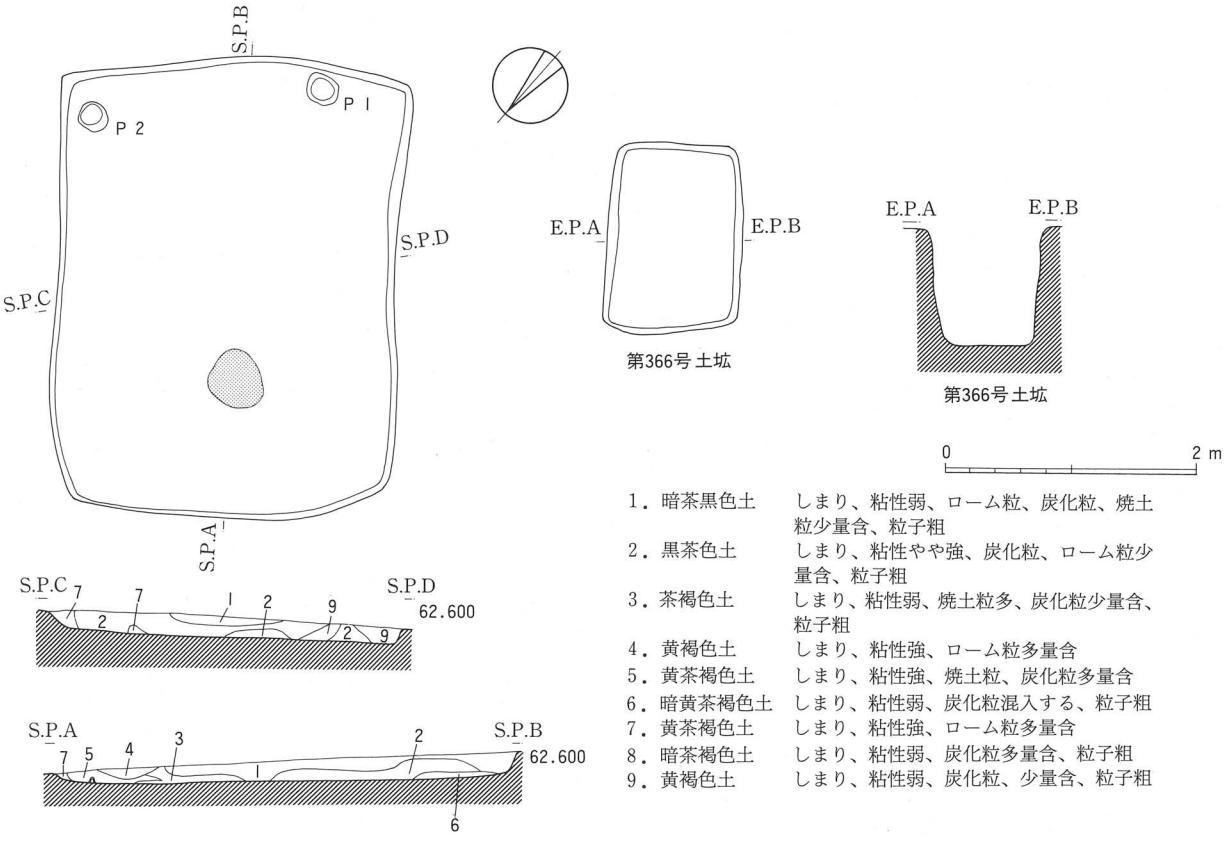
［柱穴］柱穴は、住居南壁際に２口確認されている。Ｐ 1-17.4 ㎝、Ｐ 2-11.7 ㎝を測り、両者とも浅い。

［炉］中央よりやや北壁寄りに、直径約 46 ㎝のほぼ円形を呈する地床炉が１基確認されている。掘込みはほとんど確認されず、床面が被熱により赤色硬化している。

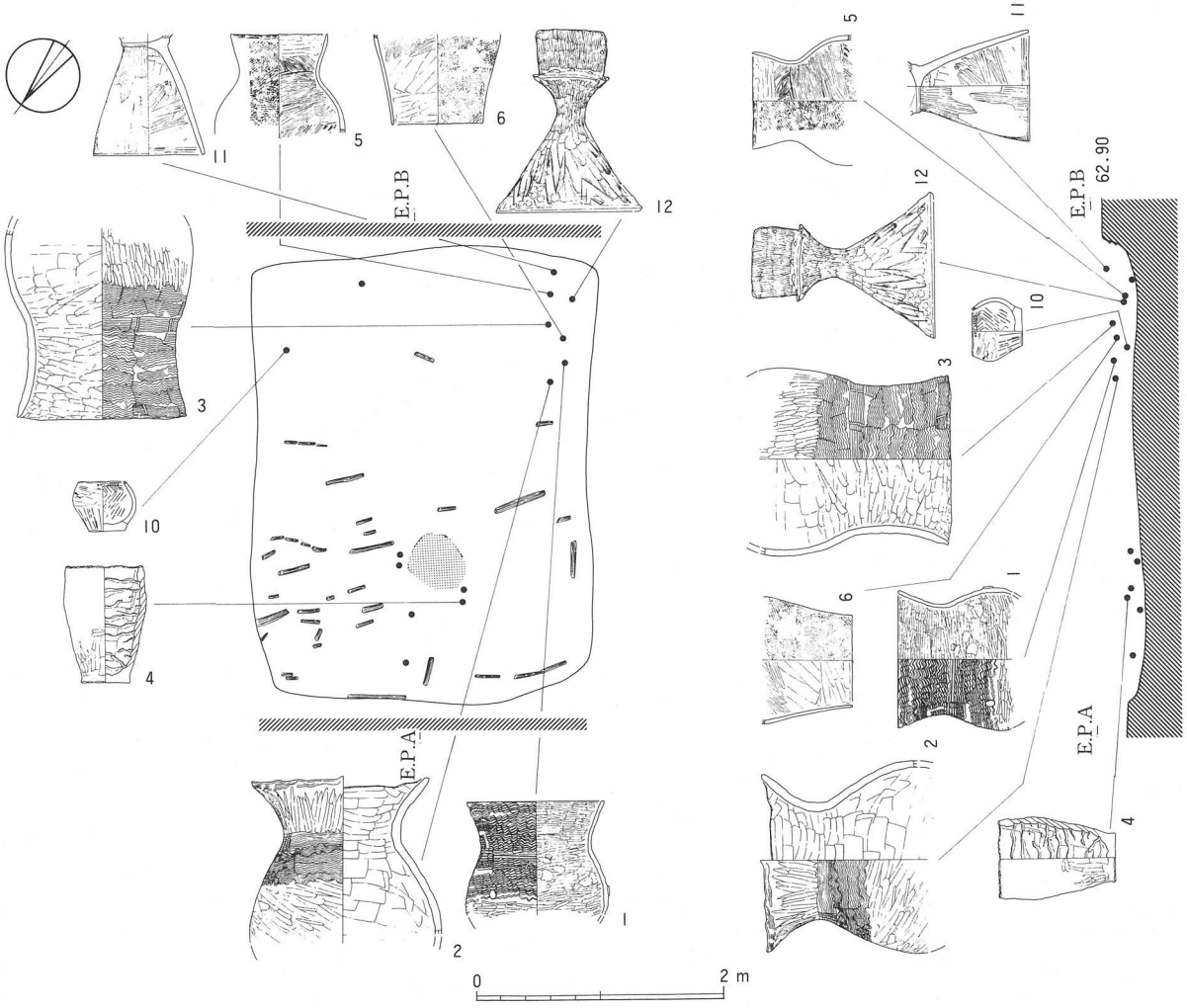
［遺物出土状態］遺物は、いずれも床面および若干浮いた状態で検出されており、住居焼失時床面に置かれていた位置をほぼ保っているものと推測される。１・２・３・５・６・11・12 は、南西隅の壁際に並んで検出されている。１・２・３・５・６は、いずれも胴部下半をカットしており、器台として転用されていた状態を示している。３・６は逆位。11 は高坏の脚部で、12 は特殊器台。いずれも横転した状態で検出されている。４のミニチュア土器は炉脇より出土している。

［遺物］（第 159 図・図版 84～86）遺物は、土器 19 点が出土している。

１は、甕形土器である。１は、頸部に３連止めの櫛描簾状文を施文した後、その上部と下部に波状文を施文する。波状文は、口縁部から頸部では下から上に、体部では上から下の順に施文する。櫛描文施文後、体部中位に円形の粘土粒を５個貼付する。内面には、横方向のミガキが施される。体部に著しい炭化物の付着がみられる。２は壺形土器で、大きく開いた口縁の端部が緩やかな波状口縁状になる。口唇下には粗い櫛描波状文が１段施文される。頸部に３連止めの簾状文を施文した後、その直下に波状文を施文する。波状文は下から上に順次施文される。櫛描文施文後、頸部には縦方向のミガキ、体部には斜方向のミガキによる調整が加えられる。肩部に炭



第157図　富士山遺跡第25号住居跡平面図



第158図　富士山遺跡第25号住居跡遺物分布図

化物の付着が顕著である。３は甕形土器で、頸部に３連止めの櫛描簾状文を施文した後、口縁部から頸部、肩部に波状文を施文する。施文順序は、基本的には上から下であるが、全体では不規則なものとなっている。１～３は、いずれも体部下半が欠失している。台として転用されたものと考えられる。４は、甕形のミニチュア土器である。口縁部から体部中半まで縄文を施文する。体部下半はヘラ状工具による縦方向のケズリによって調整される。内部には輪積み痕が明瞭に残る。５・６は、甕形土器である。いずれも、口縁部に縄文施文による刻みをもち、口縁部から体部にLR縄文を施文する。内面は、ナデ調整を施す。５は、口唇部を横方向にナデ調整する。７は、高坏形ミニチュア土器の脚部である。縦方向のナデ調整が施される。接合部に突帯をもつ。８は、坏形ミニチュア土器である。外面は横方向のミガキ、内面はナデにより調整される。口縁部に隣接した２個の小孔が穿たれる。12は、特殊器台形土器である。脚部の上部には円形の台部がつくられ、台部上面はヘラ状工具によるケズリにより平坦に成形される。脚部、台部外面は縦方向のミガキが施される。台部上面には対称となる位置に２枚の板状壁（歯）が取り付けられる。これらは、４本の粘土紐を積み上げて成形し、上端部と側端部をヘラ状工具によるケズリで成形したものである。外面は非常に丁寧な縦方向のミガキが施される。内面には指頭押さえ痕が残る。板状壁は器体に対しほぼ直立するが、台部が円形であるため緩やかに湾曲する。

［時期］床面上に残された遺物から判断して、弥生時代後期。

第59表　富士山遺跡第25号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕	12.2	10.0		SW	dg	b	90%	ボタン状貼付文５
2	壺	15.9	14.3		WB	dg	b	90%	
3	甕	15.0	17.0		WSB	do	b	80%	
4	甕	6.3	10.0	4.3	SB	do	b	70%	ミニチュア
5	甕	12.9	13.5		SWB	do	b	90%	
6	甕	12.3	12.2		WSB	do	c	90%	
7	高　坏		4.0	5.2	SB	do	a	100%	ミニチュア
8	高　坏		6.5	9.3	SBW	do	b	100%	
9	甕		1.5	6.5	SW	dg	b	100%	
10	鉢	6.5	6.7	4.8	SWB	do	b	100%	孔２
11	高　坏		16.2	14.8	SWB	do	b	100%	表面赤彩
12	器　台	6.3	15.9	12.4	SBW	do	a	100%	

第26号住居跡（第160・161図・図版77・78）

［位置］ＨＶ-ｄ９・ｄ10、ｅ10グリットに位置する。北側に第372号土坑が接している。

［形状］長径4.9ｍ、短径3.2ｍの長方形を呈する。

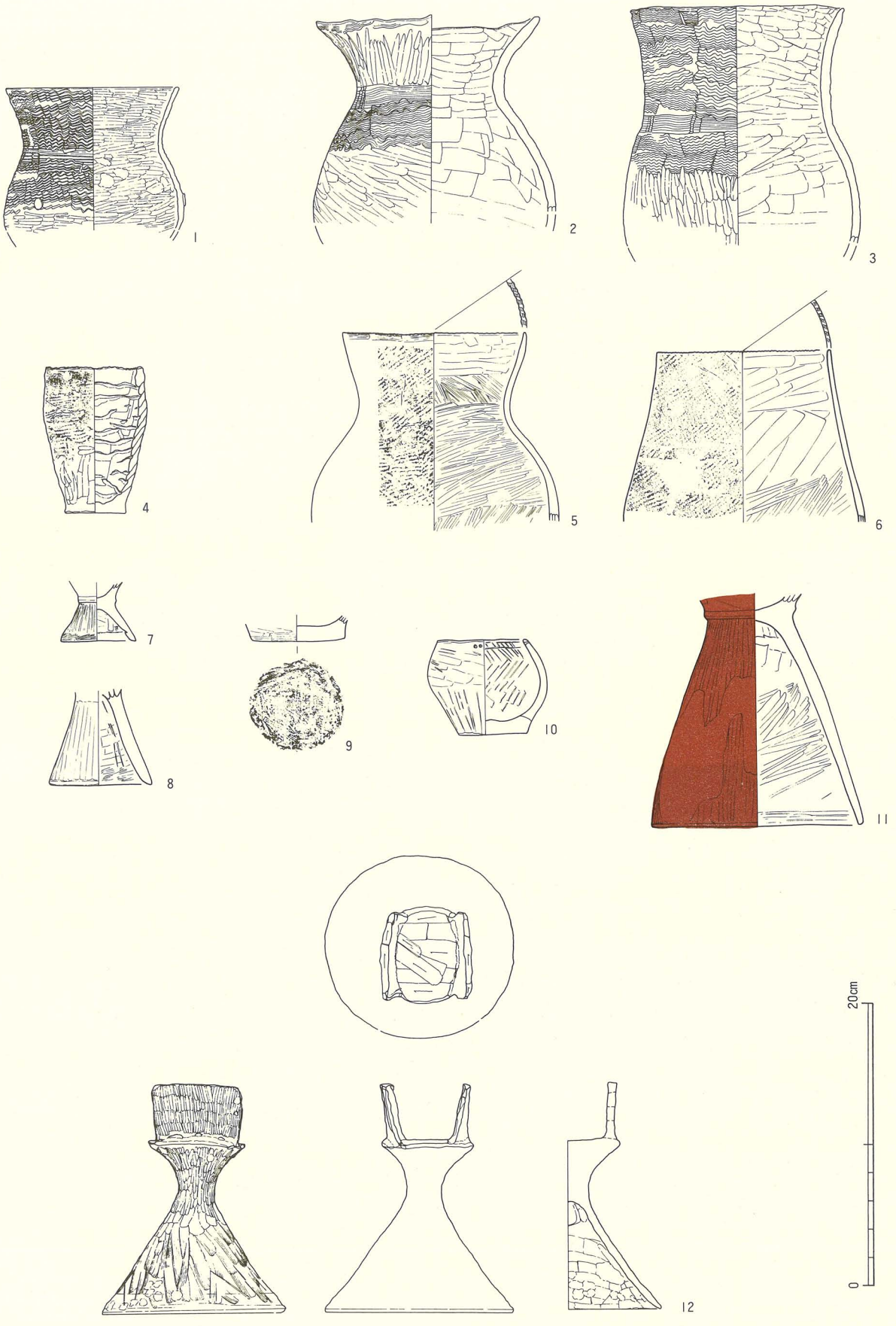
［覆土］覆土は11層に分層され、自然堆積を示す。覆土下層において、焼土・炭化粒子を多量に含み、床面上には炭化材が検出されている。焼失住居である。

［柱穴］柱穴は６口確認されている。Ｐ1-46.8㎝、Ｐ2-19.5㎝、Ｐ3-87㎝、Ｐ4-64.1㎝、Ｐ5-23.1㎝、Ｐ6-57.3㎝を測る。Ｐ２・Ｐ３は、炉脇に位置している。

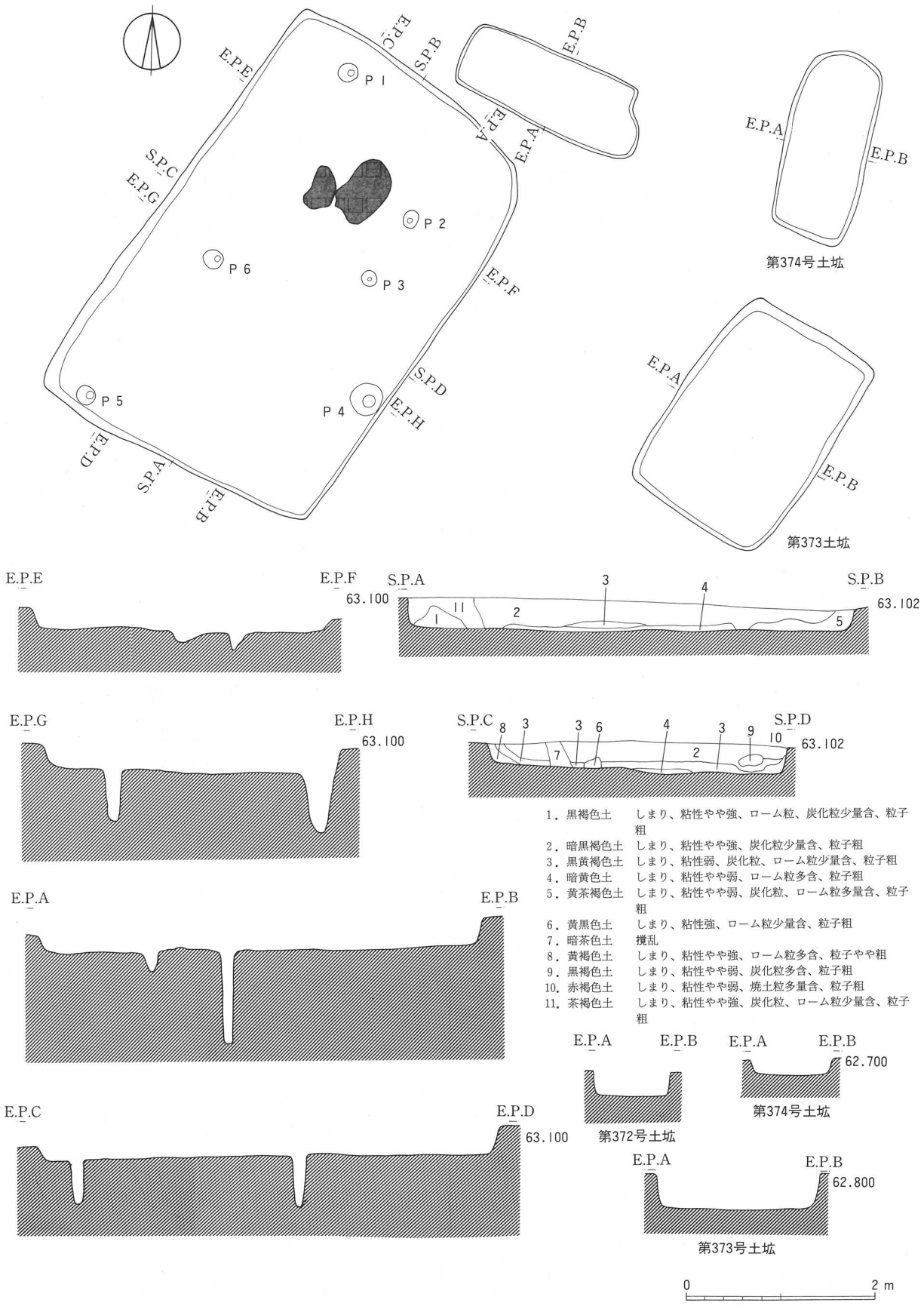
［炉］中央よりやや北壁寄りに、長径74㎝・短径44㎝と、長径47㎝・短径26㎝の不整楕円形を呈する２基の地床炉が、東西方向に隣接して確認されている。掘込みはほとんど無く、被熱により赤色硬化している。

［遺物出土状態］３のほぼ完形の壺が、西側中央壁際に寄掛かるように検出されている。そして、これに並ぶように、５・１の壺形土器の口縁部が逆位で床面から検出されている。頸部下半がカットされており、器台として転用されていたものと考えられる。また、２の甕が、やはり床面に転がるようにして検出されている。

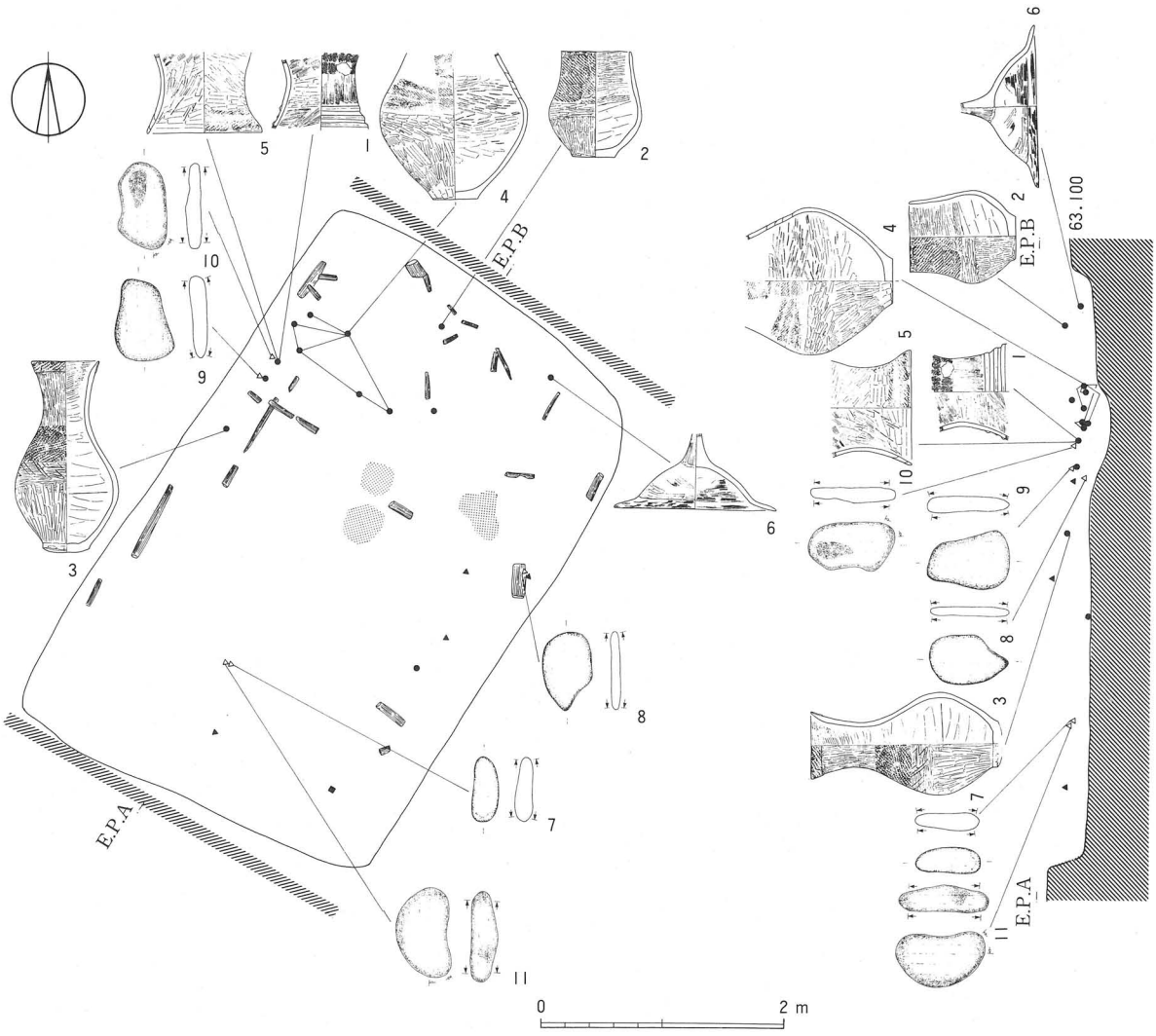
［遺物］（第162図・図版87～89）遺物は、土器63点、磨石５点が出土している。



第159図　富士山遺跡第25号住居跡出土遺物



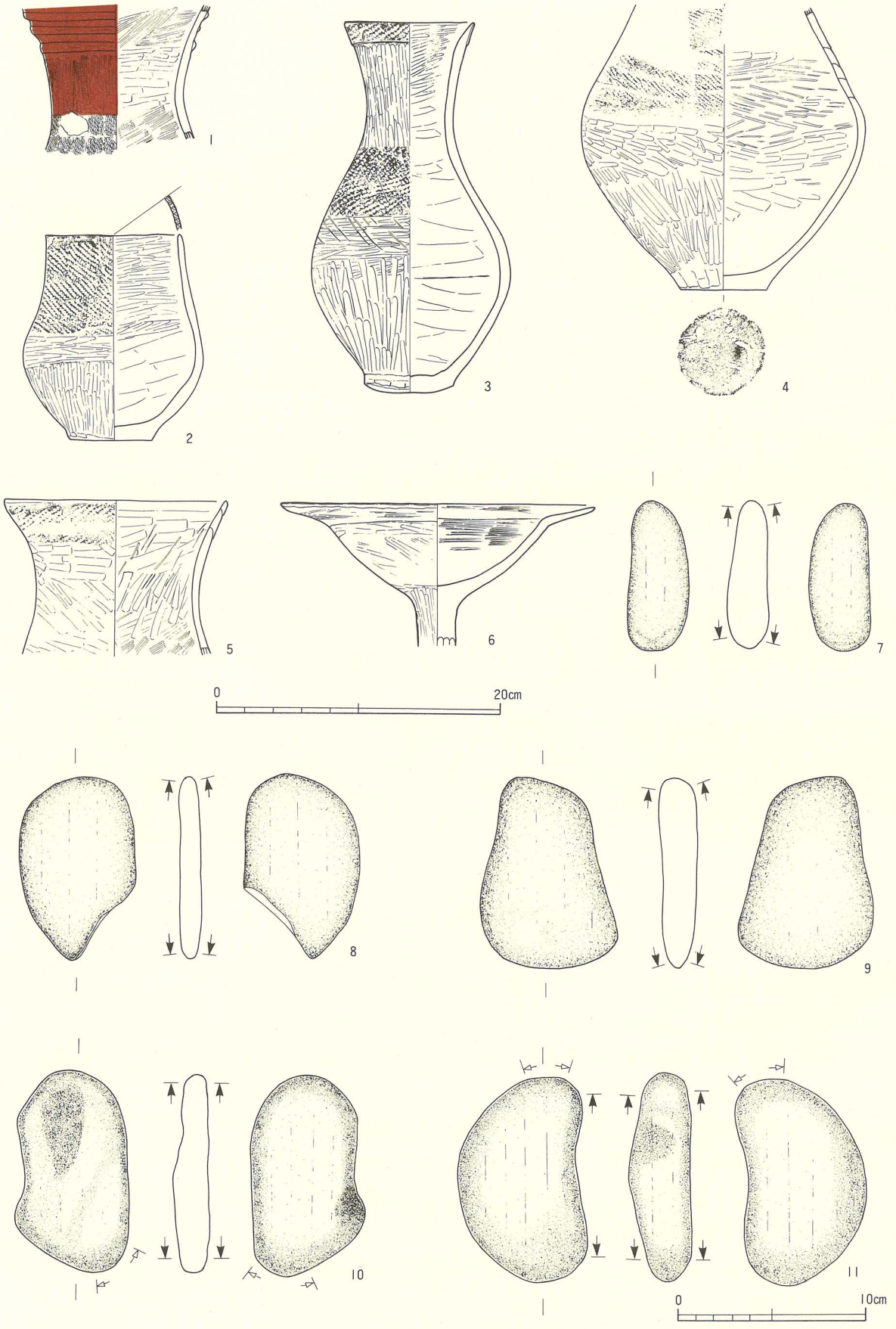
第160図　富士山遺跡第26号住居跡平面図



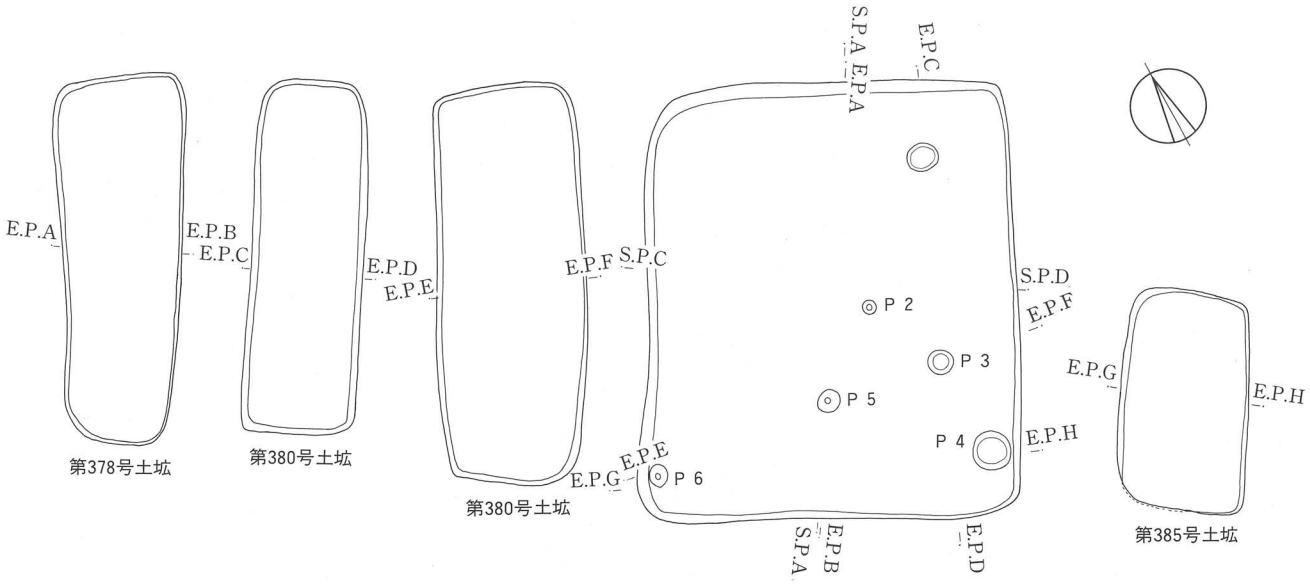
第161図　富士山遺跡第26号住居跡遺物分布図

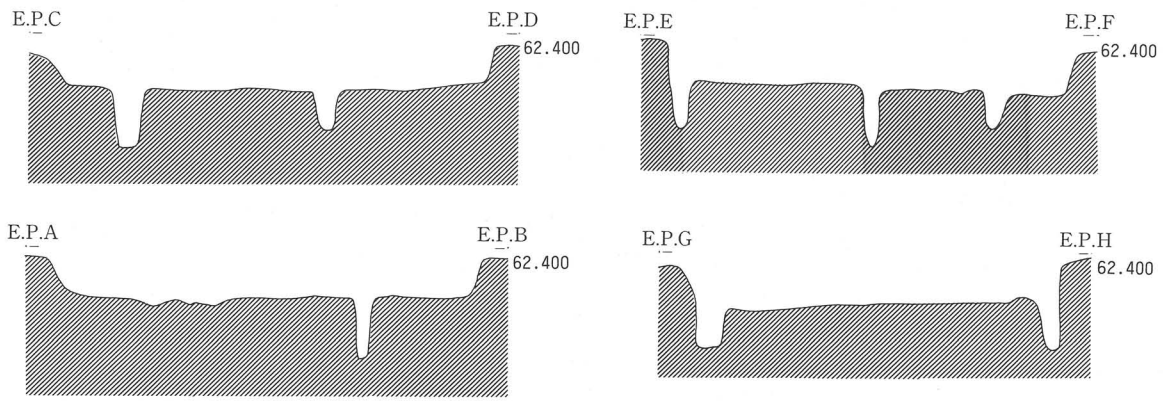
１は、壺形土器である。口縁部に突帯を３条廻らす。頸部から肩部に縄文を施文した後、頸部の縄文を磨消し、ハケ状工具による縦方向の調整をおこなって無文帯としている。内面は、横方向のナデ調整が施される。外面・内面ともに赤色塗彩が施される。２は、小形甕形土器である。口唇部に縄文施文による刻みをもつ。口縁部から体部上半にかけてRL縄文を施文する。体部中半は横方向のミガキ、下半は縦方向のミガキが施される。内面はミガキにより調整される。３は、壺形土器である。折返し状口縁をもち、口縁部と肩部にLR縄文が施文される。口縁部はナデ調整される。頸部と文様帯以外の体部は、ミガキにより調整される。５は、甕形土器である。口縁部にRL縄文を施す。頸部はヘラ状工具によるケズリによって成形される。６は、高坏形土器である。ナデにより調整される。７はフォルンフェルス製の、８～11は砂岩製の磨石である。７～10は、偏平な礫を用い、平坦な両面に擦痕をもつ。10は、下端面の凸部に敲打痕を残す。11は、片面がやや膨らんでいるが、ほぼ偏平な礫を用いている。平坦な面とやや膨らんでいる面の両面に擦痕をもつ。上端面に敲打痕が認められる。

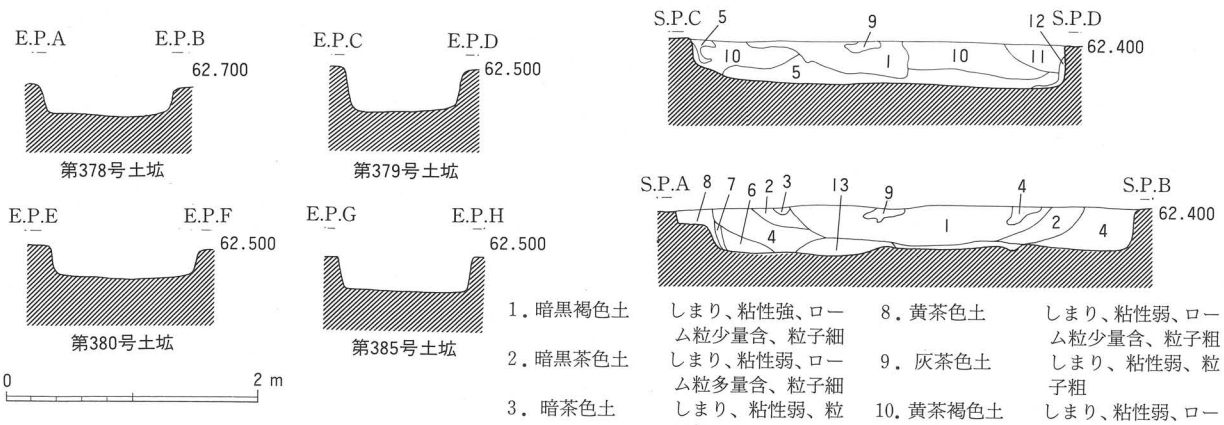
［時期］床面上に残された遺物より判断して、弥生時代後期。



第162図　富士山遺跡第26号住居跡出土遺物







1．暗黒褐色土	しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子細	8．黄茶色土	しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
2．暗黒茶色土	しまり、粘性弱、ローム粒多量含、粒子細	9．灰茶色土	しまり、粘性弱、粒子粗
3．暗茶色土	しまり、粘性弱、粒子粗	10．黄茶褐色土	しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック多量含、粒子粗
4．暗茶褐色土	しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗	11．暗黒茶褐色土	しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック多量含、粒子粗
5．暗茶褐色土	しまり、粘性弱、ロームブロック、炭化粒少量含、粒子粗	12．黄褐色土	しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗
6．黒茶色土	しまり、粘性強、ロームブロック多量含、粒子粗	13．暗赤褐色土	しまり、粘性強、炭化粒、焼土粒多量含、粒子細
7．黄黒色土	しまり、粘性強、ローム粒やや多含、粒子粗		

第163図　富士山遺跡第27号住居跡平面図

第27号住居跡（第163・164図・図版79）

［位置］ＨＶ-g 11・h 10・h 11グリットに位置する。第380号土坑と第385号土坑の間に位置する。南側に第29号住居跡が近接する。

［形状］長径3.5ｍ、短径2.9ｍの隅丸方形を呈する。

［覆土］13層に分層され、自然堆積を示す。床面直上の層において、焼土・炭化粒子がやや多く検出されている。

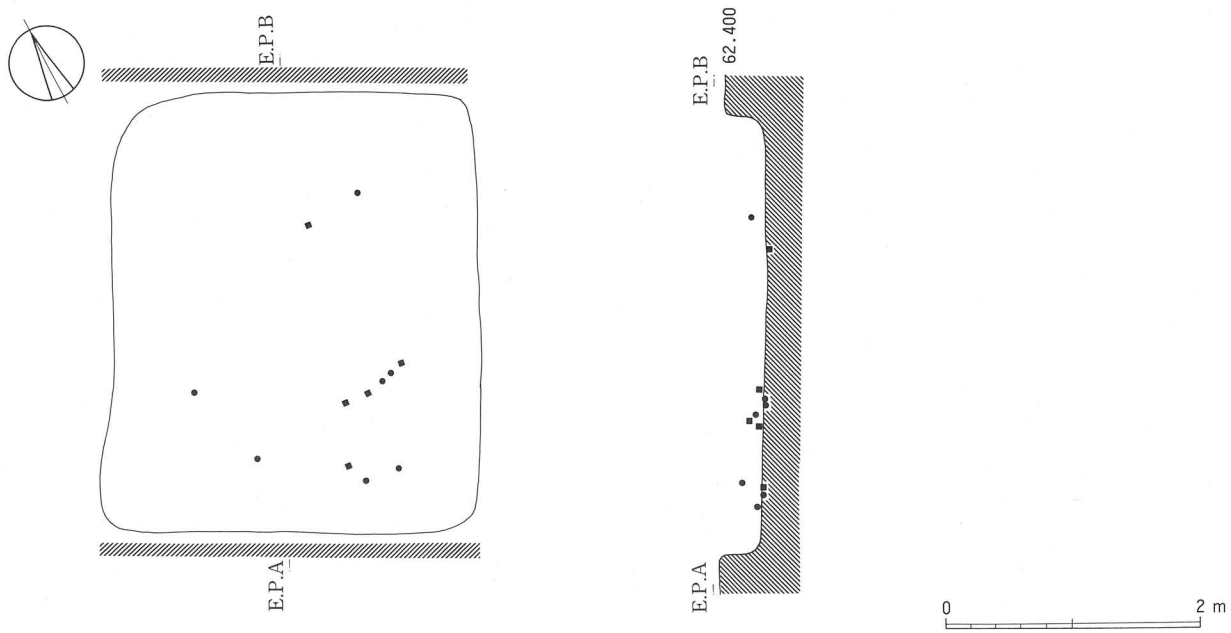
［柱穴］柱穴は、6口確認されているが、配置は不

第60表　富士山遺跡第26号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	壺		9.3		SWB	do	b	90%	表面赤彩
2	甕	9.5	14.5	5.8	SBW	do	b	90%	
3	壺		26.0	6.5	SB	do	a	90%	
4	壺		20.0	6.0	SWB	rb	b	80%	
5	壺	15.5	10.8		SWB	do	b	90%	
6	高　坏	22.0	10.2		SWB	do	b	80%	

第61表　富士山遺跡第26号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
7	床上9cm	磨石3a	78	31	22	90	F	a	研磨3
8	床上5cm	磨石2a	98	60	13	105	S	a	研磨3
9	床上10cm	磨石5a	103	74	23	230	S	a	研磨3
10	床上12cm	磨石5a	107	59	17	125	S	a	研磨3敲打有
11	床上14cm	磨石2a	109	65	32	290	S	a	研磨3-4敲打



第164図　富士山遺跡第27号住居跡遺物分布図

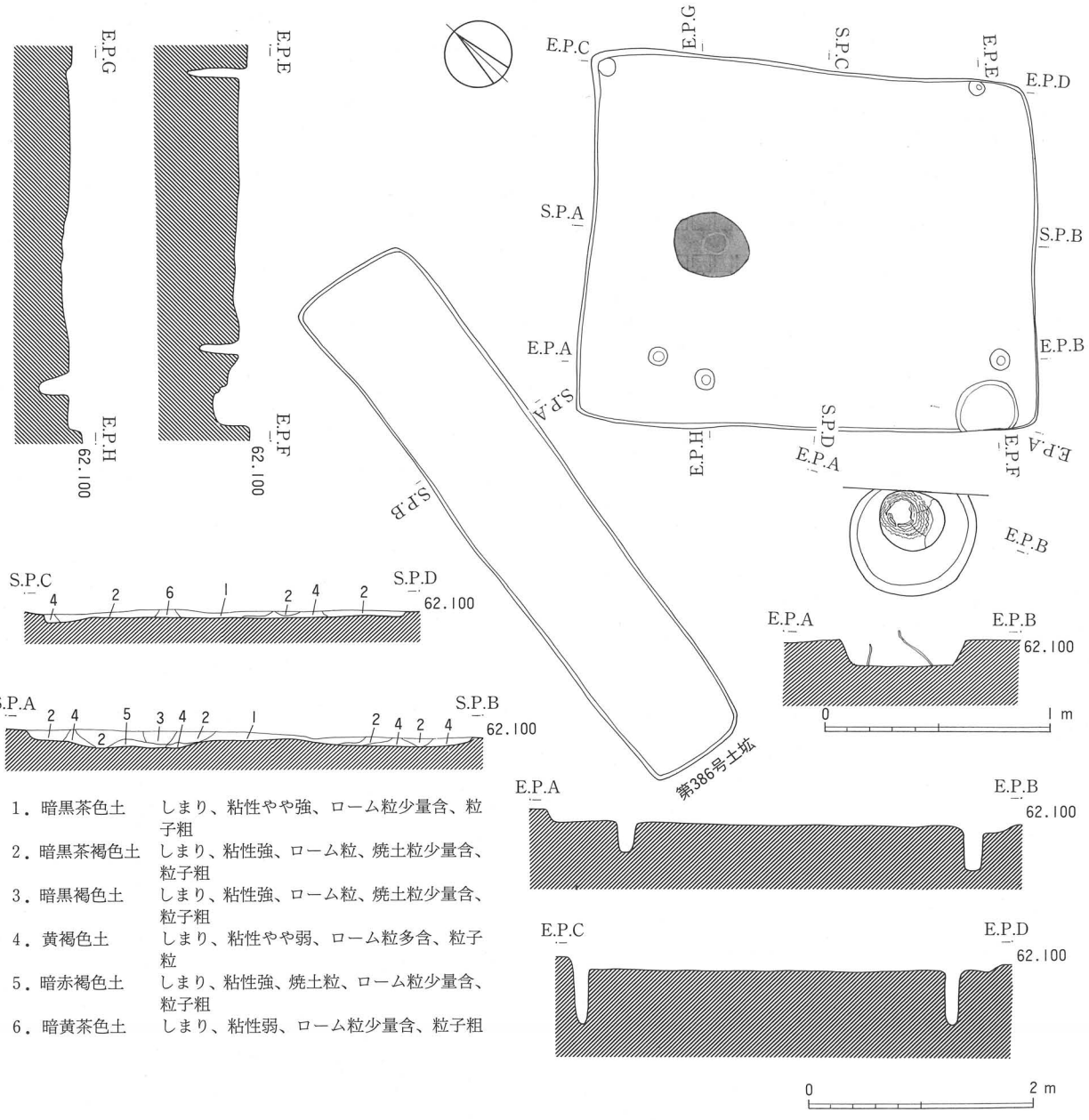
規則である。P 1-46.9 ㎝、P 2-21.8 ㎝、P 3-31.3 ㎝、P 4-32.5 ㎝、P 5-22.5 ㎝、P 6-44.9 ㎝を測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］覆土下層において、土器小片が出土しているが、床面上に残された遺物は無い。

［遺物］遺物は、土器 11 点が出土しているが、いずれも小片のため図示できるものはなかった。

［時期］覆土の堆積状況および、覆土下層より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。



第165図　富士山遺跡第28号住居跡平面図

第28号住居跡（第165・166図・図版80）

［位置］ＨＶ-i 11、j 10•j 11グリットに位置する。西側に第386号土坑が位置している。

［形状］長径3.95ｍ、短径3.25ｍの方形を呈する。

［覆土］ 6層に分層される。覆土中に焼土・炭化粒子を少量含む。

［柱穴］柱穴は5口確認されている。Ｐ1-51.7㎝、Ｐ2-49.3㎝、Ｐ3-36.8㎝、Ｐ4-27.3㎝、Ｐ5-26.8㎝を測る。

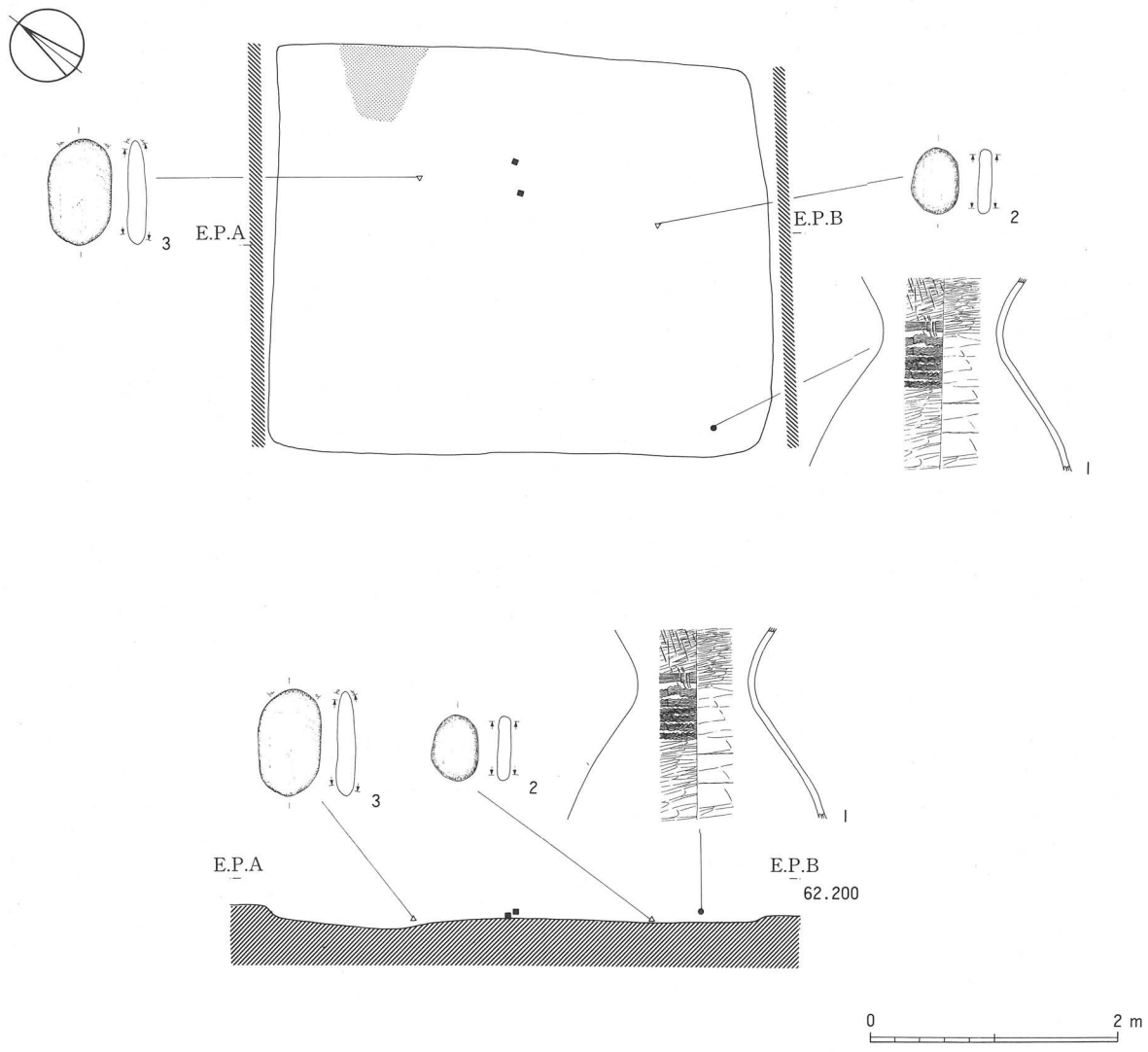
［炉］中央やや北壁寄りに、直径約68㎝程のほぼ円形を呈する地床炉が1基確認されている。掘込みはほとんど無く、被熱により赤色硬化している。

［遺物出土状態］南西隅のピット内に、口端部と胴部下半部を欠く壺形土器が検出されている。また、2・3の磨石が床面上に接して出土している。

［遺物］（第167図・図版83・89） 遺物は、土器6点、磨石2点が出土している。

1は壺形土器である。口縁部上端と胴部下半がカットされており、器台として転用されていたものと考えられる。横方向のミガキを施した後に、頸部に3連止めの櫛描簾状文、肩部に6段の波状文を施文する。2・3は、砂岩製の磨石である。偏平な礫を用い、平坦な面の両面に擦痕をもつ。

［時期］覆土の堆積状況および、ピット内に残された遺物から判断して、弥生時代後期。



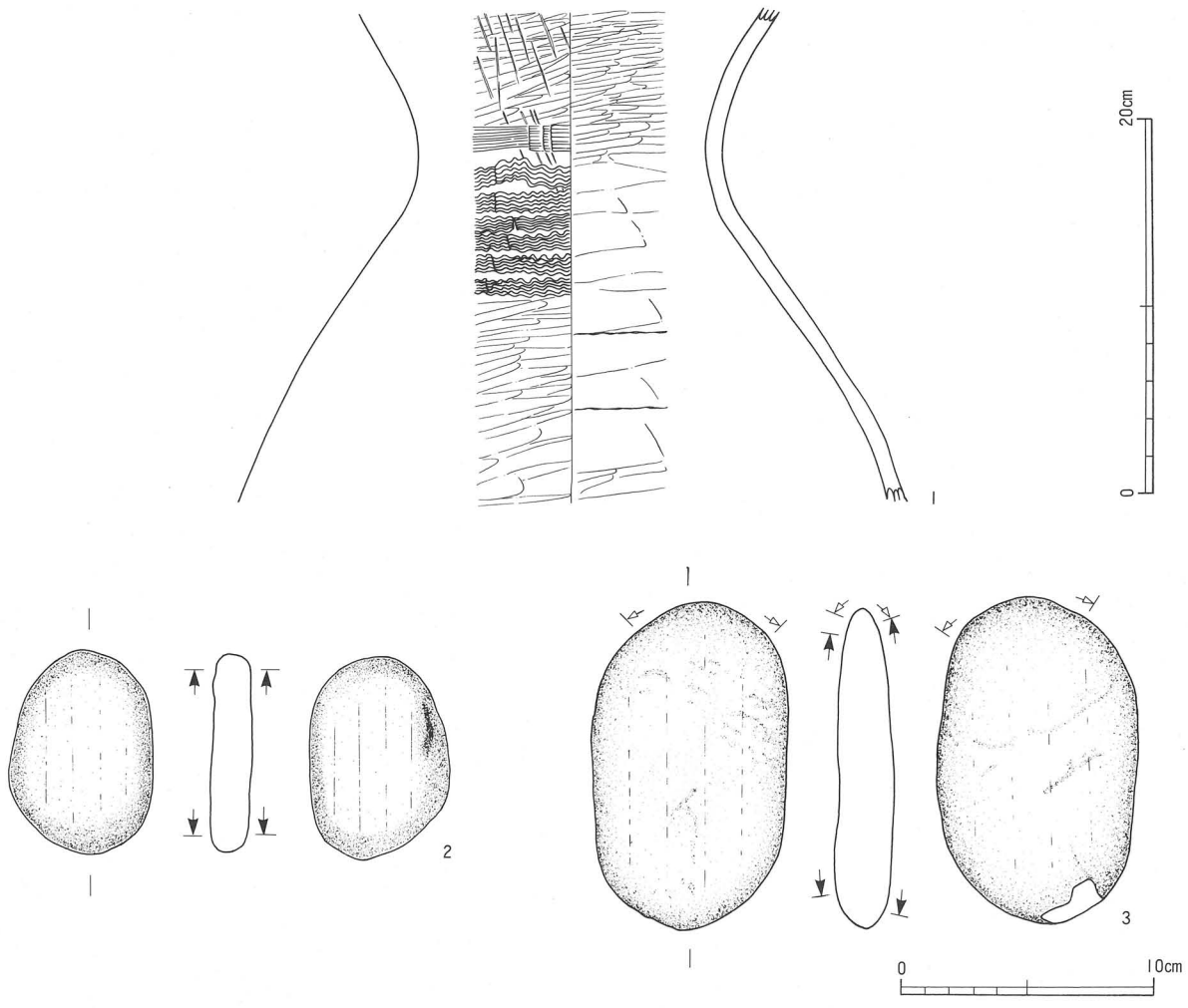
第166図　富士山遺跡第28号住居跡遺物分布図

第62表　富士山遺跡第28号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	壺		26.0		SW	do	b	90%	

第63表　富士山遺跡第28号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
2	床面直上	磨石2a	79	55	15	100	S	a	研磨３
3	床上４cm	磨石2a	131	77	27	430	S	a	研磨３



第167図　富士山遺跡第28号住居跡出土遺物

第29号住居跡（第168・169図・図版81）

［位置］ＨＶ-g 14・h 14グリットに位置する。北側に第27号住居跡が近接する。

［形状］長径4.1ｍ、短径3.55ｍの方形を呈する。住居内に2基の土坑が確認されている。

［覆土］覆土は11層に分層され、自然堆積を示す。

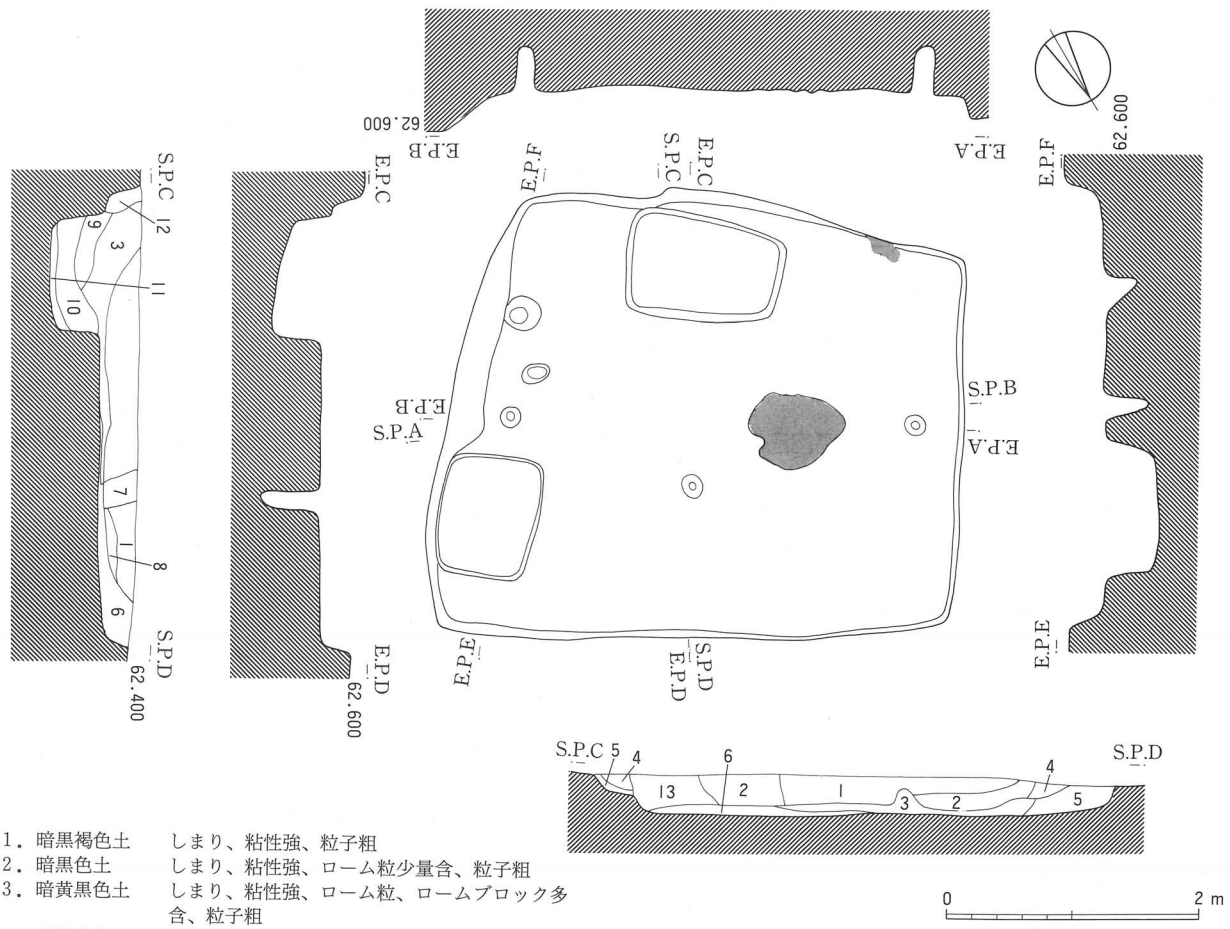
［柱穴］柱穴は5口確認されているが、配置は不規則である。Ｐ1-40.7㎝、Ｐ2-26.4㎝、Ｐ3-14.7㎝、Ｐ4-34.7㎝、Ｐ5-47.0㎝を測る。

［炉］中央よりやや北壁寄りに、長径76㎝、短径60㎝の不整楕円形を呈する地床炉が1基確認されている。掘込みはほとんど無く、被熱により赤色硬化している。

［遺物出土状態］床面に残された遺物は無く、覆土上層より土器小片が僅かに出土している。

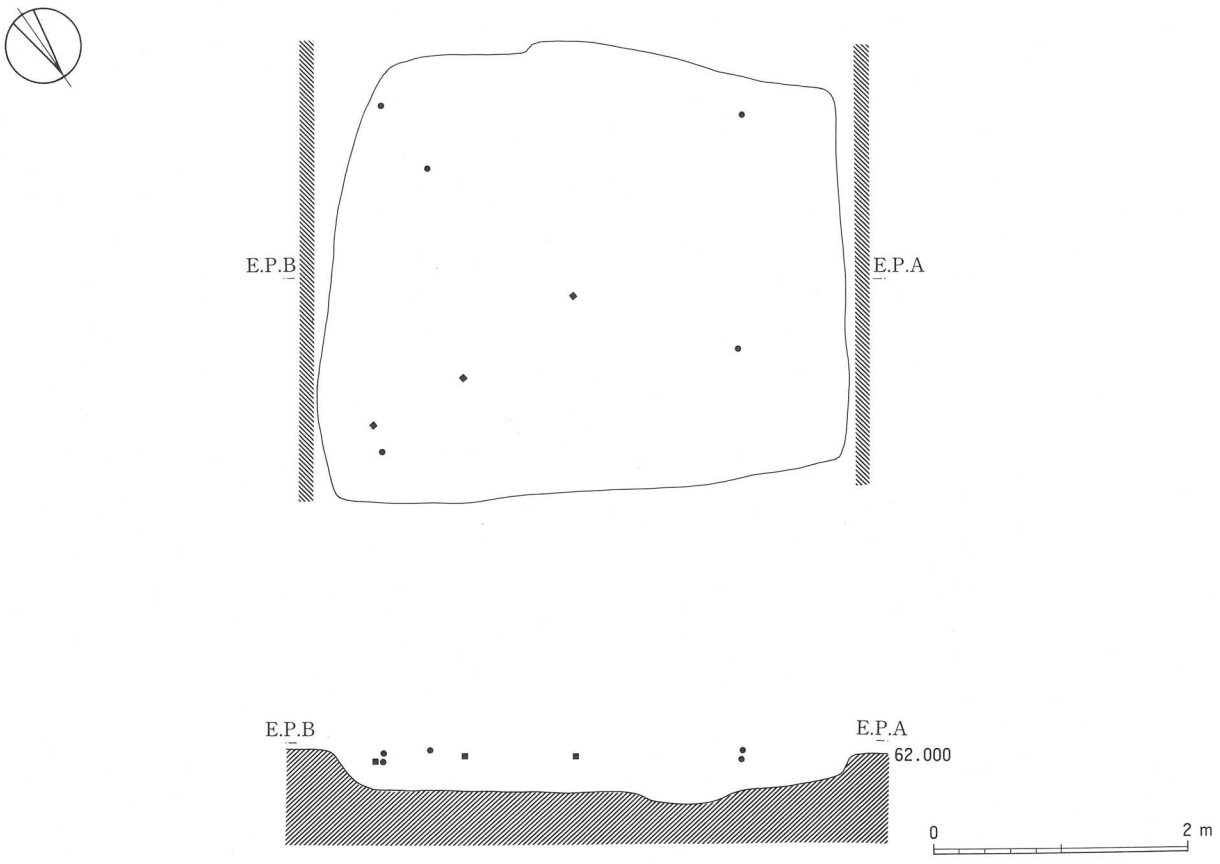
［遺物］（第170図・図版89）遺物は、土器45点が出土している。図示できる遺物は少なく、器形復元できるものはなかった。1・3は、RL縄文を施す。2・4は、LR縄文を施す。5～7は、櫛歯状工具による櫛状文を施文する。5は、壺形土器で、折返し状口縁をもつ。

［時期］覆土の堆積状況および、覆土上層より出土した遺物から判断して、弥生時代後期。

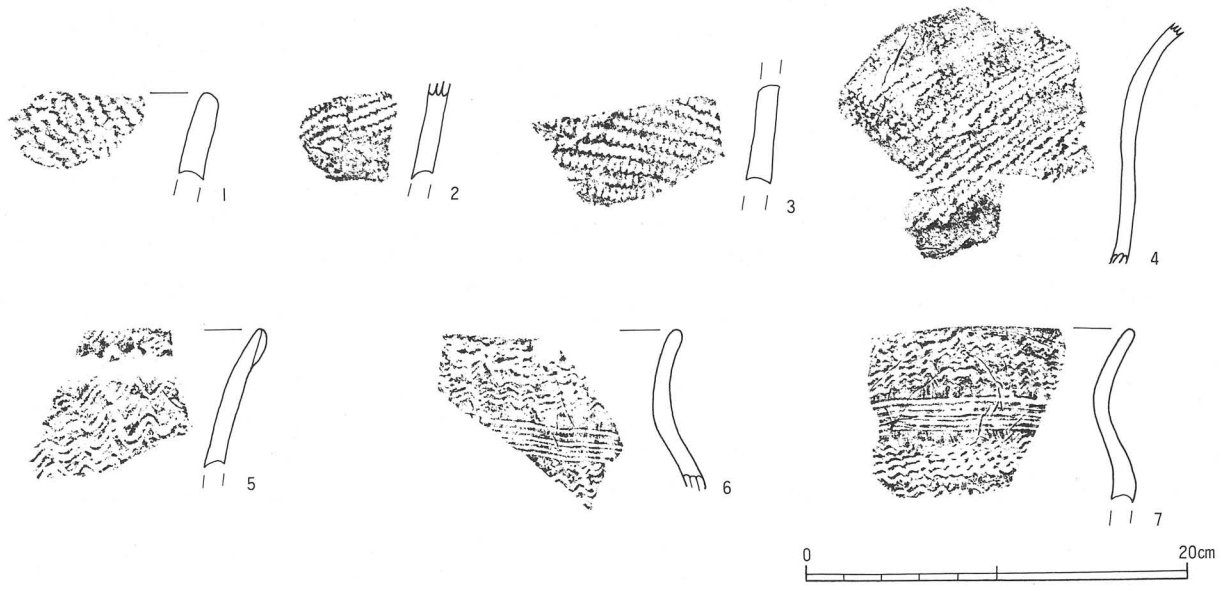


1．暗黒褐色土　しまり、粘性強、粒子粗
2．暗黒色土　しまり、粘性強、ローム粒少量含、粒子粗
3．暗黄黒色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック多含、粒子粗
4．暗黒茶色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒ロームブロック少量含、粒子粗
5．黄茶色土　しまり、粘性弱、ローム粒多量含、粒子粗
6．暗黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック多量含、粒子粗
7．撹乱
8．暗茶色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗
9．黄茶色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗
10．暗黄茶黒色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
11．暗黒茶色土　しまり、粘性やや強、ロームブロック、炭化土多含、粒子粗
12．黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗

第168図　富士山遺跡第29号住居跡平面図



第169図　富士山遺跡第29号住居跡遺物分布図



第170図　富士山遺跡第29号住居跡出土遺物

第64表　富士山遺跡第29号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕				WR	o	b	10%	
2	甕				WR	do	b	10%	
3	壺				WR	o	a	10%	
4	甕				SWR	dg	b	10%	
5	甕				WR	dg	b	10%	
6	甕				WB	o	a	10%	小形
7	甕				WB	do	b	10%	小形

第30号住居跡（第171・172図・図版81）

［位置］ＨＶ-ｆ11・ｆ12、ｇ11・ｇ12グリットに位置する。

［形状］長径3.8ｍ、短径2.95ｍの方形を呈する。

［覆土］８層に分層され、自然堆積を示す。

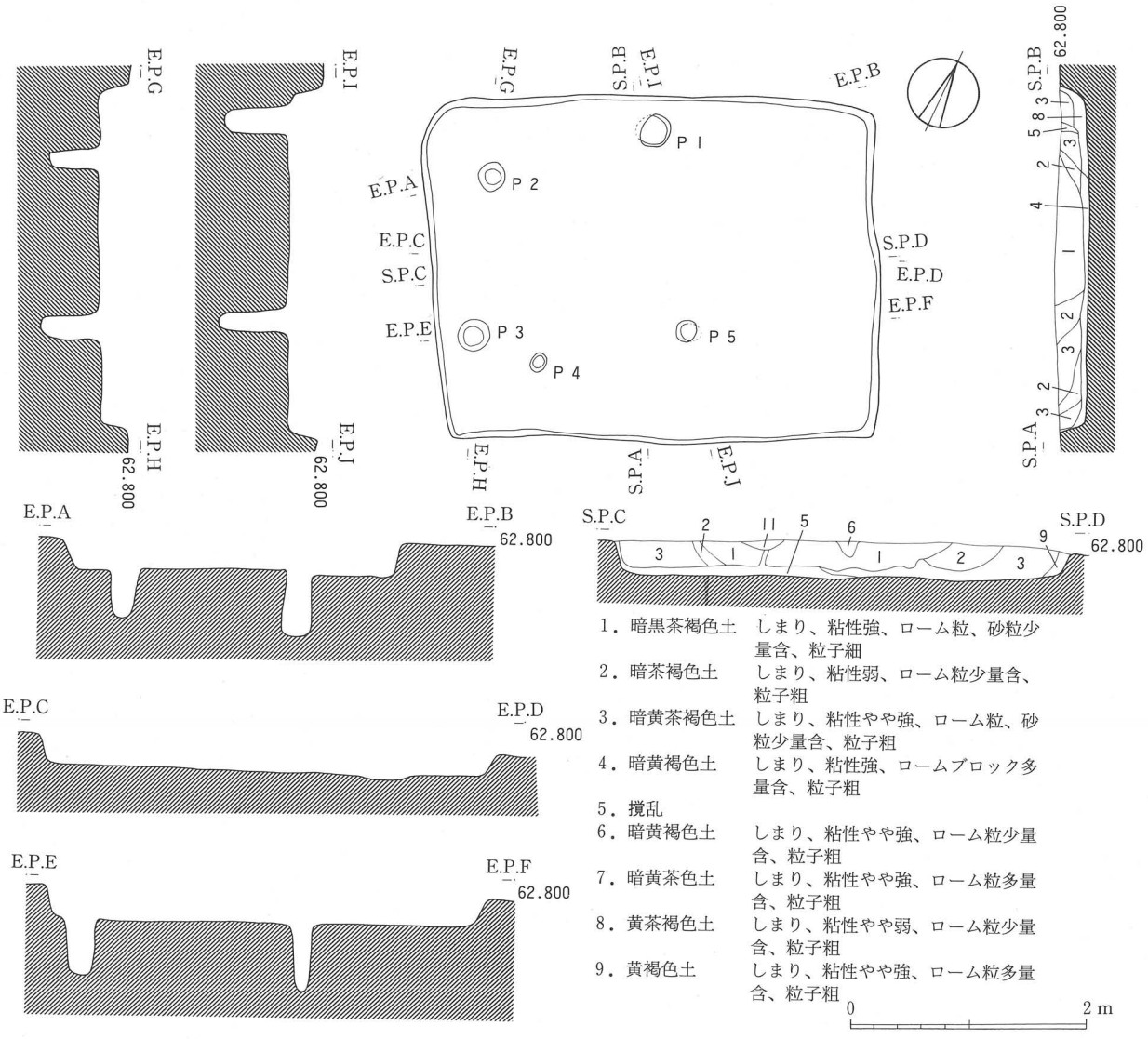
［柱穴］柱穴は、５口確認されている。Ｐ1-56㎝、Ｐ2-42.5㎝、Ｐ3-50.1㎝、Ｐ4-65.1㎝、Ｐ5-57.9㎝を測る。

［炉］確認されていない。

［遺物出土状態］床面に残された遺物は無く、覆土中より土器小片および磨石が出土している。

［遺物］（第173図・図版89）遺物は、土器３点、磨石１点が出土している。１は、砂岩製の磨石である。やや厚みのある偏平な礫を用いている。平坦な両面に擦痕をもつ。

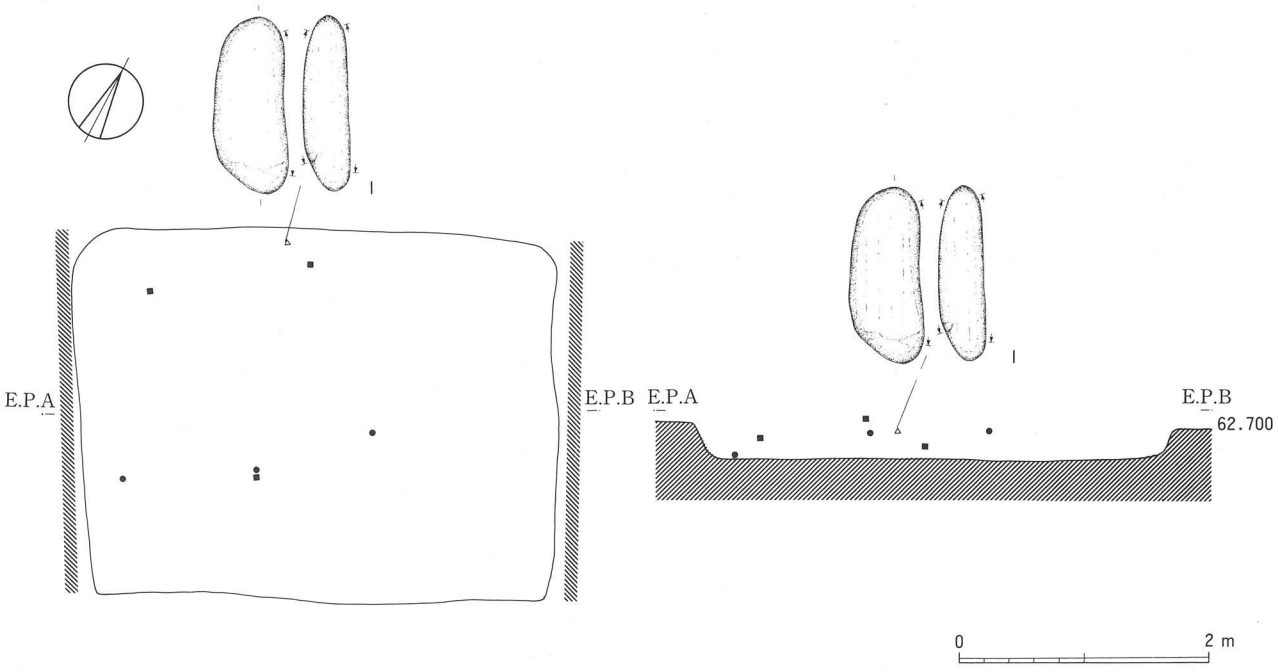
［時期］覆土の堆積状態および、覆土中の遺物より判断して、弥生時代後期。　（関口・森田）



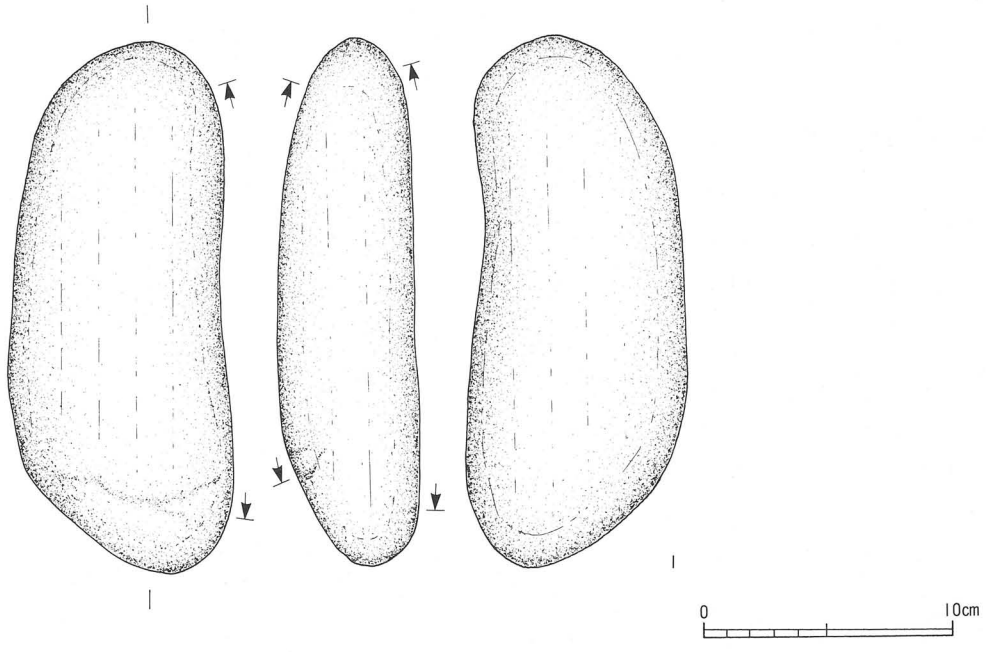
第171図　富士山遺跡第30号住居跡平面図

第65表　富士山遺跡第30号住居跡出土石器計測表

番号	出土地点	器　種	最大長	最大幅	最大厚	重　量	石　質	残　存	備　考
1	床上20cm	磨石3a	208	86	15	100	S	a	研磨3-4



第172図　富士山遺跡第30号住居跡遺物分布図



第173図　富士山遺跡第30号住居跡出土遺物

土坑（第174～178図）

本遺跡からは、386 基の土坑が確認されている。この内、弥生時代の集落跡が確認された第３調査区からは、17基の土坑が確認されている。明確に弥生時代に属すると判断される土坑は、第371号土坑と第384号土坑の２基だけである。この２基は不整円形を呈し共通するが、この他の土坑は、いずれも長方形を呈している。遺物はほとんど無く、僅かに認められる土器片も周囲よりの流れ込みと判断され、時期を決定する遺物の出土状態は示していない。長方形の土坑は、近世～近代に作られた畑の貯蔵穴とも推測されるが、住居跡の軸とあって重複すること無く並んでいることから、弥生時代の土坑の可能性も考えられ、時期不詳として報告する。

第370号土坑（第174図）

［位置］ＨＶ-b8･c8グリットに位置する。北東に第25号住居跡が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸150cm、短軸110cm、深さ20cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

第371号土坑（第174図）

［位置］ＨＶ-b10グリットに位置する。北側に第24号住居跡、東側に第26号住居跡が位置する。

［形状］II-Ａ　長軸208cm、短軸166cm、深さ32cmを測る。

［遺物］覆土中より土器片26点が出土しているが、いずれも小片のため図示するには至らなかった。

［時期］覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第372号土坑（第174図）

［位置］ＨＶ-d9・e9・e10グリットに位置する。南側に第26号住居跡が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸208cm、短軸82cm、深さ28cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

第373号土坑（第174図）

［位置］ＨＶ-e10グリットに位置する。西側に第26号住居跡、北側に第374号土坑が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸240cm、短軸170cm、深さ44cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

第374号土坑（第174図）

［位置］ＨＶ-e9・e10グリットに位置する。南側に第373号土坑、西側に第372号土坑が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸204cm、短軸90cm、深さ18cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

第375号土坑（第175図）

［位置］ＨＶ-f10･g10グリットに位置する。東側に第376号土坑が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸172cm、短軸84cm、深さ24cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

第376号土坑（第175図）

［位置］ＨＶ-f10グリットに位置する。東側に第377号土坑、西側に第375号土坑が位置する。

［形状］IV-Ａ　長軸236cm、短軸72cm、深さ28cmを測る。

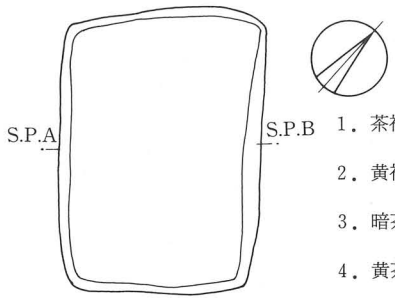
［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

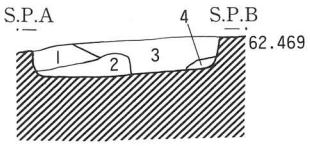
第377号土坑（第175図）

［位置］ＨＶ-f10グリットに位置する。東側に第378号土坑、西側に第376号土坑が位置する。

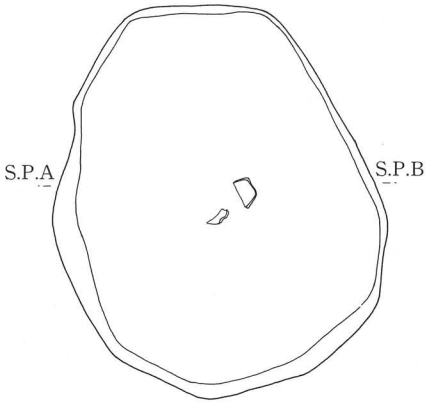
［形状］IV-Ａ　長軸326cm、短軸84cm、深さ25cmを

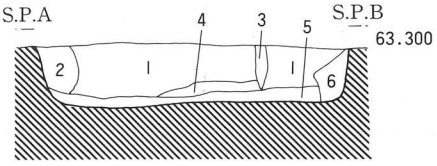


1．茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒微量含、粒子やや粗
2．黄褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子やや粗
3．暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、焼土粒、炭化粒微量含、粒子粗
4．黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗



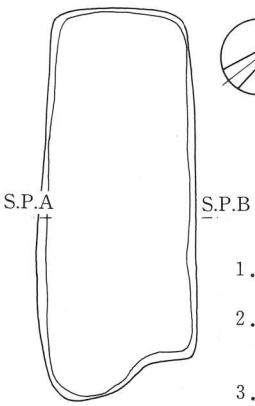
第370号土坑

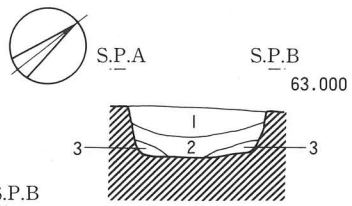




第371号土坑

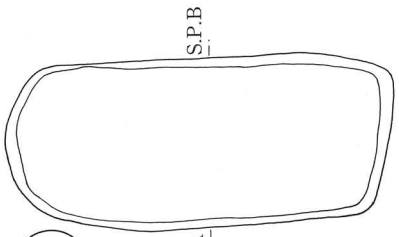
1．暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
2．黄茶色土　しまり、粘性弱、ローム粒多量含、粒子粗
3．撹乱
4．暗黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
5．黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒多含、粒子粗
6．黄茶色土　しまり、粘性弱、ローム粒多量含、粒子粗



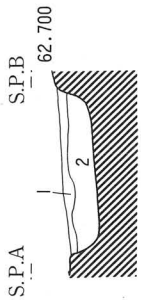


第372号土坑

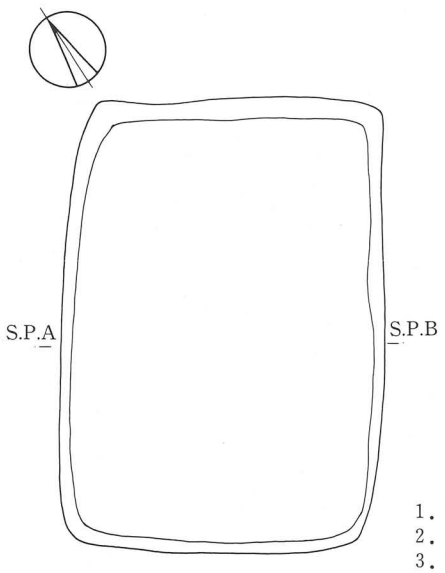
1．暗黒褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
2．暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック少量含、粒子粗
3．暗黄褐色土　しまり、粘性強、ローム強多含、粒子粗

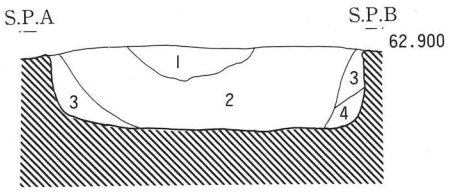


第374号土坑



1．暗茶褐色土　しまり、粘性、ローム粒少量含、粒子粗
2．黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗



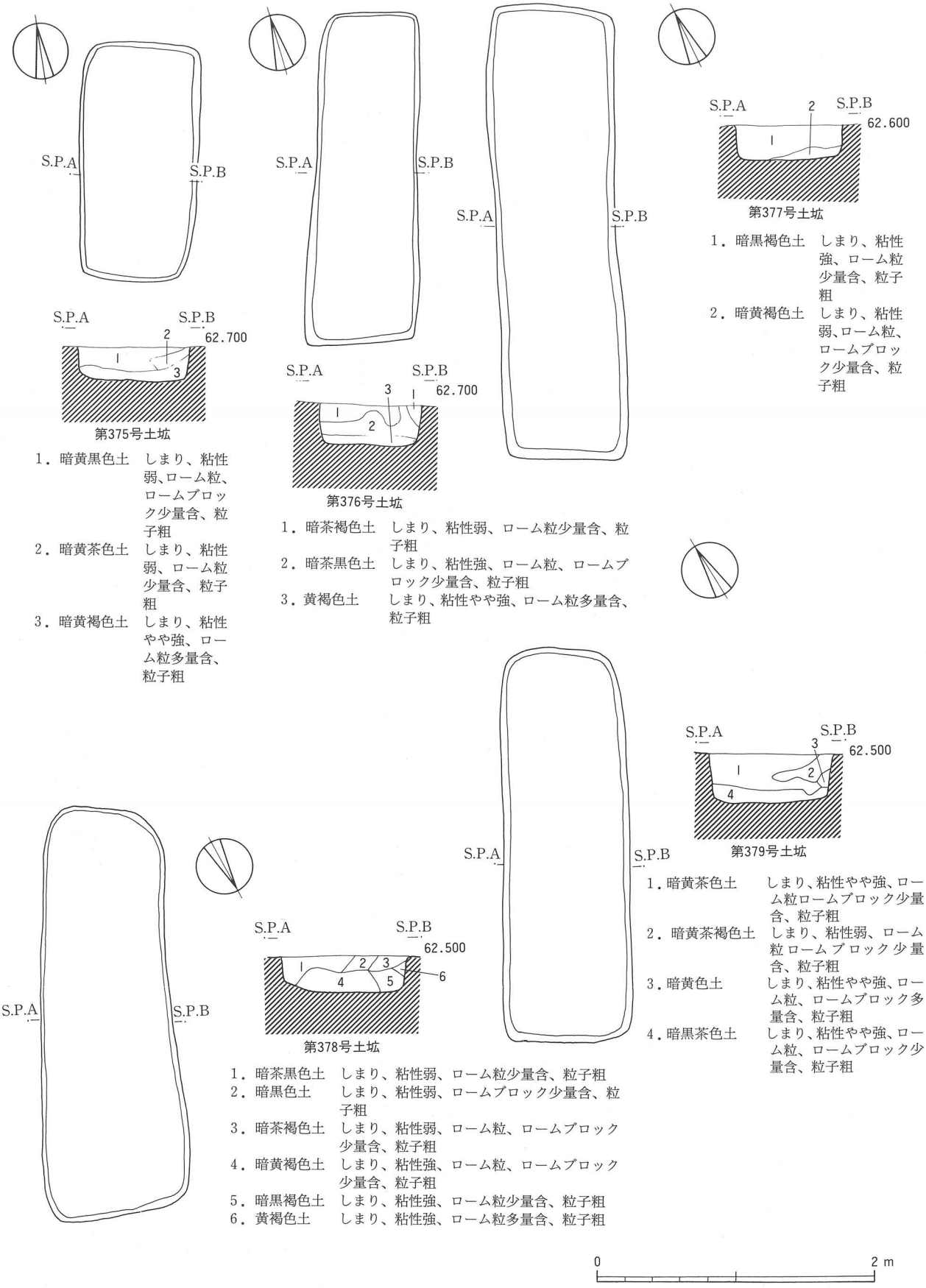


第373号土坑

1．暗黒褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒、砂粒少量含、粒子粗
2．暗茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
3．暗黄茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、ロームブロック、砂粒少量含、粒子粗
4．黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗



第174図　富士山遺跡土坑平面図(1)



第175図　富士山遺跡土坑平面図(2)

測る。
［遺物］無し。
［時期］時期不詳。

第378号土坑（第175図）
［位置］ＨＶ-g10グリットに位置する。東側に第379号土坑、西側に第377号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸296cm、短軸95cm、深さ27cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］時期不詳。

第379号土坑（第175図）
［位置］ＨＶ-g10グリットに位置する。東側に第380号土坑、西側に第378号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸283cm、短軸89cm、深さ35cmを測る。
［遺物］覆土中より、土器１点が出土している。
［時期］覆土中より、弥生時代後期に属する土器片が出土しているが、小片であり、周辺よりの流れ込みと考えられる。本土坑の帰属時期を決定する遺物は無く、時期不詳。

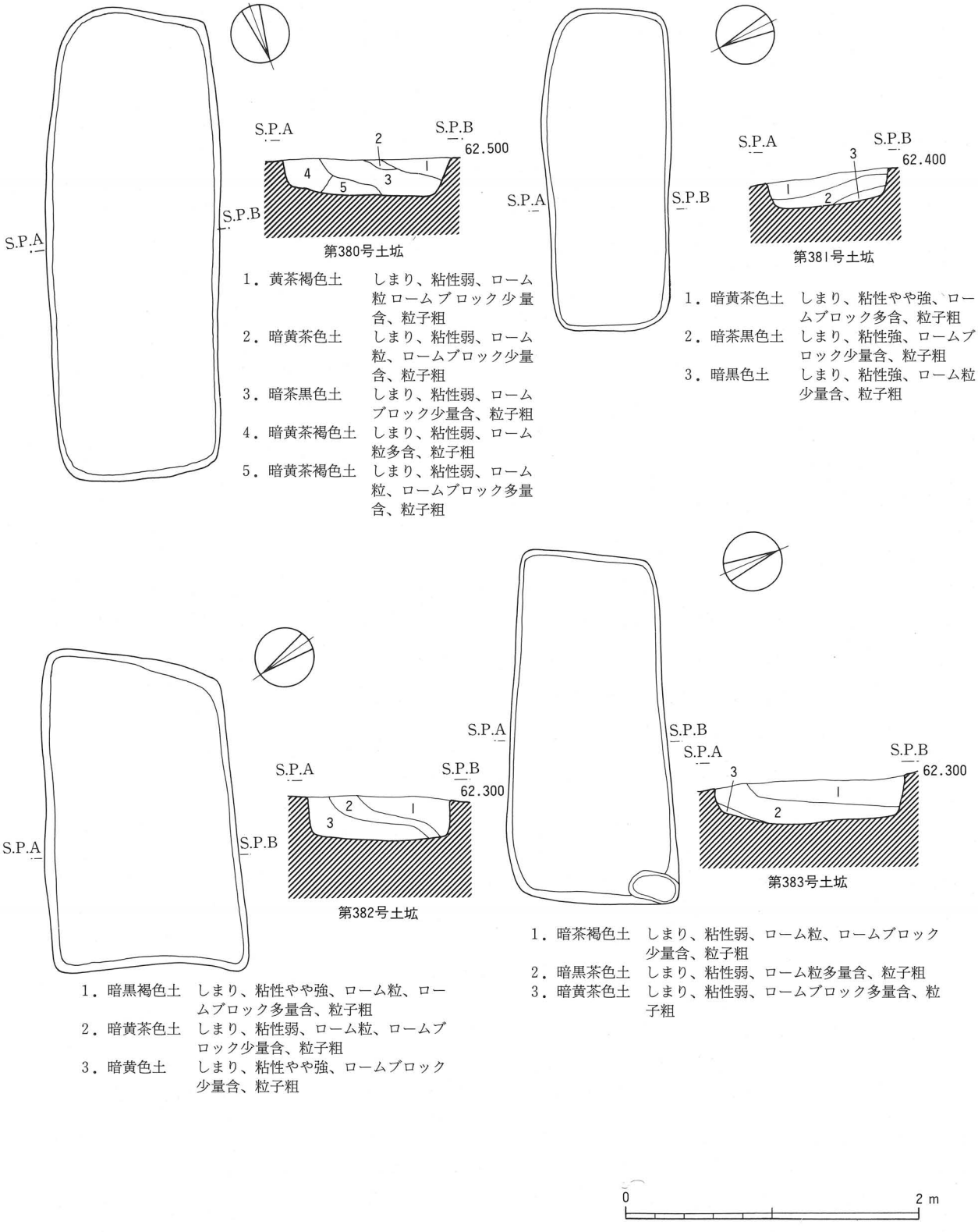
第380号土坑（第176図）
［位置］ＨＶ-g10・g11・h10グリットに位置する。東側に第27号住居跡が、西側に第379号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸318cm、短軸118cm、深さ24cmを測る。
［遺物］覆土中より、土器８点が出土している。
第178図５は、甕形土器の底部。ヘラ状工具による縦方向のケズリが施されている。底面には網代痕が残る。
［時期］覆土および覆土中より出土した遺物より判断して、弥生時代後期。

第381号土坑（第176図）
［位置］ＨＶ-g10・g11グリットに位置する。南側に第378号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸218cm、短軸88cm、深さ19cmを測る。
［遺物］覆土中より、土器小片４点が出土している。
［時期］覆土中より、弥生時代後期に属する土器片が出土しているが、小片であり、周辺よりの流れ込みと考えられる。本土坑の帰属時期を決定する遺物は無く、時期不詳。

第382号土坑（第176図）
［位置］ＨＶ-h10グリットに位置する。南側に第384号土坑、西側に第383号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸216cm、短軸132cm、深さ30cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］時期不詳。

第383号土坑（第176図）
［位置］ＨＶ-g10グリットに位置する。南側に第27号住居跡が、東側に第382号土坑、西側に第381号土坑が位置する。
［形状］Ⅳ-Ａ　長軸237cm、短軸105cm、深さ30cmを測る。
［遺物］無し。
［時期］時期不詳。

第384号土坑（第177図）
［位置］ＨＶ-i10・i11グリットに位置する。南側に第385号土坑、東側に第386号土坑、北側に第382号土坑が位置する。
［形状］Ⅰ-Ａ　直径166cm、深さ12cmを測る。
［遺物］覆土中より、土器42点が出土している。
第178図１は、甕形土器の口縁部である。RL縄文を施文している。２は、台付甕形土器の台部である。底部との接合部は、ハケ状工具による縦方向のケズリ、台部はハケ状工具による縦方向の調整が施されている。
［時期］覆土および覆土中の遺物より判断して、弥生時代後期。



第176図　富士山遺跡土坑平面図(3)

第385号土坑（第177図）

［位置］ＨＶ-h11グリットに位置する。西側に第27号住居跡が、北側に第384号土坑が位置する。

［形状］Ⅳ-Ａ　長軸176cm、短軸122cm、深さ34cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。

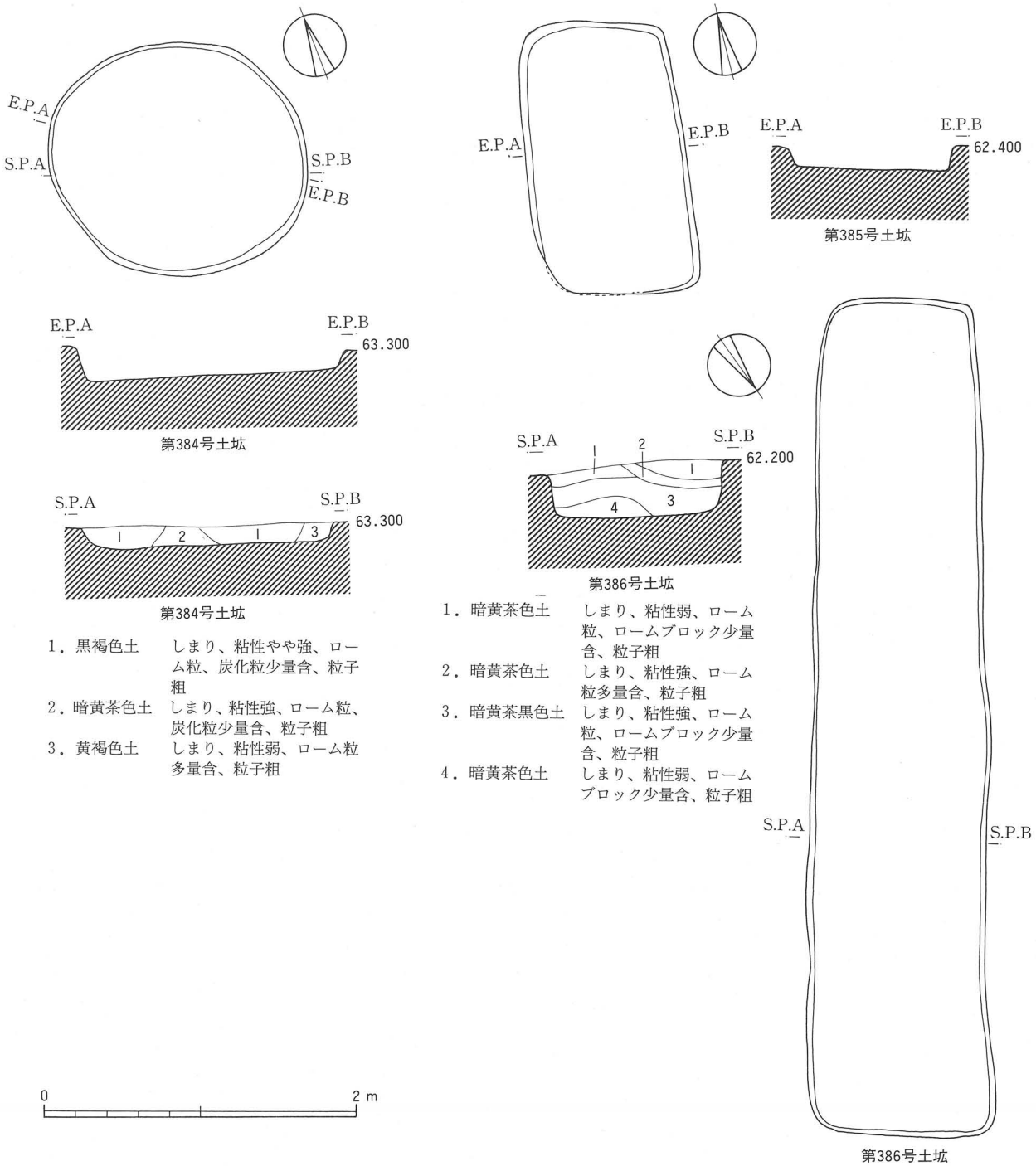
第386号土坑（第177図）

［位置］ＨＶ-i10・i11グリットに位置する。東側に第28号住居跡が、西側に第384号土坑が位置する。

［形状］Ⅳ-Ａ　長軸532cm、短軸130cm、深さ35cmを測る。

［遺物］無し。

［時期］時期不詳。



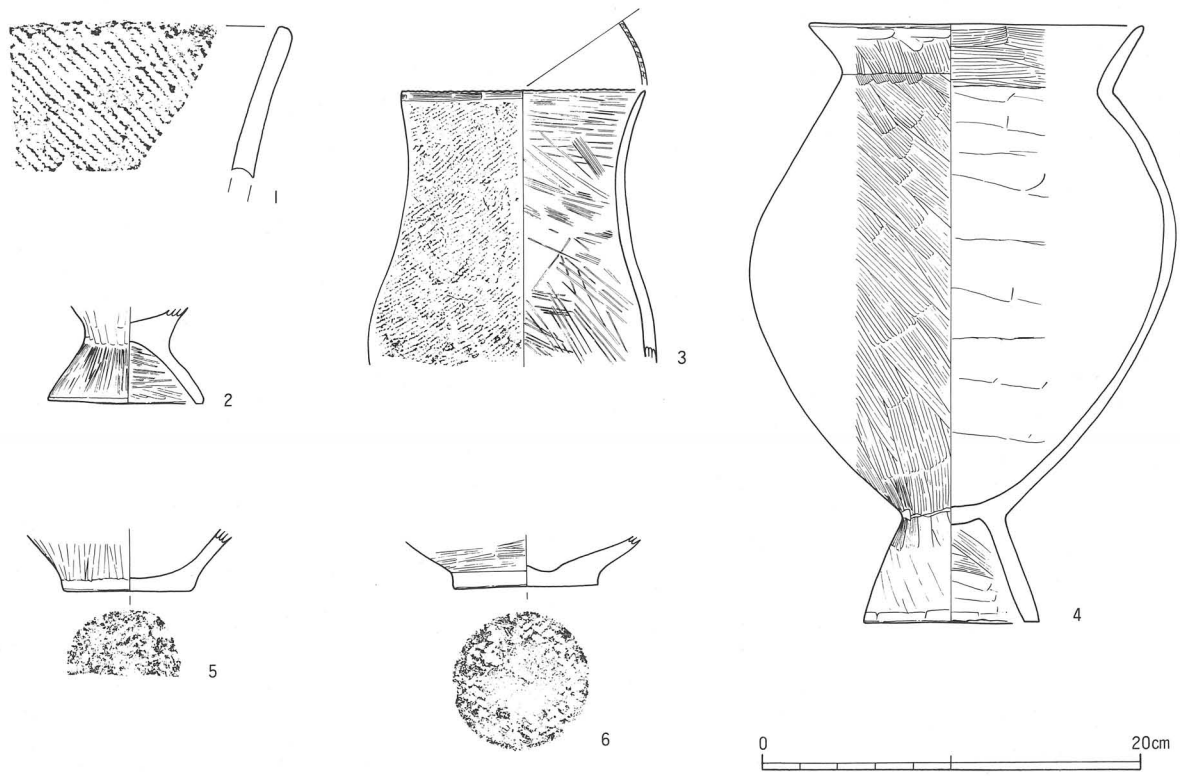
第177図　富士山遺跡土坑平面図(4)

(3) 包含層出土遺物（第178図）

3は、甕形土器である。口唇部に縄文施文による刻みをもつ。口唇下は横方向のナデ調整を受ける。口縁部から体部にLR縄文を施文する。4は、台付甕である。第2調査区東側に北方遺跡との境に小支谷が存在しているが、その小支谷に移行する黒色埋没土中より出土したもので、ほぼ完形品である。台部との接合部から上方に向かってハケ状工具によって斜方向に調整がなされた後、頸部から口縁部へ縦方向の調整が施される。さらに口唇下にヘラ状工具による横方向のケズリが加えられる。6は、甕形土器の底部。底面には網代痕が残る。　（関口・森田）

第66表　富士山遺跡土坑・包含層出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甕				BW	do	a	10%	
2	台付甕		5.0	8.0	SW	rb	b	90%	
3	甕	13.0	15.0		SWB	rb	b	90%	
4	台付甕	17.2	31.0	9.0	SW	do	b	90%	
5	甕		3.0	6.8	SWB	do	b	50%	底面網代痕
6	甕		2.3	7.8	WB	do	b	100%	底面網代痕



第178図　富士山遺跡出土遺物

第３節　権現坂埴輪窯跡群

調査地区	：	調査期間	：調査面積
第１調査地区（工事道路）	：	89年８月30日～10月１日	：　800㎡
第２調査地区（外周道路）	：	91年２月４日～３月21日	：　2,800㎡

第３節　権現坂埴輪窯跡群

(1)　遺跡概観

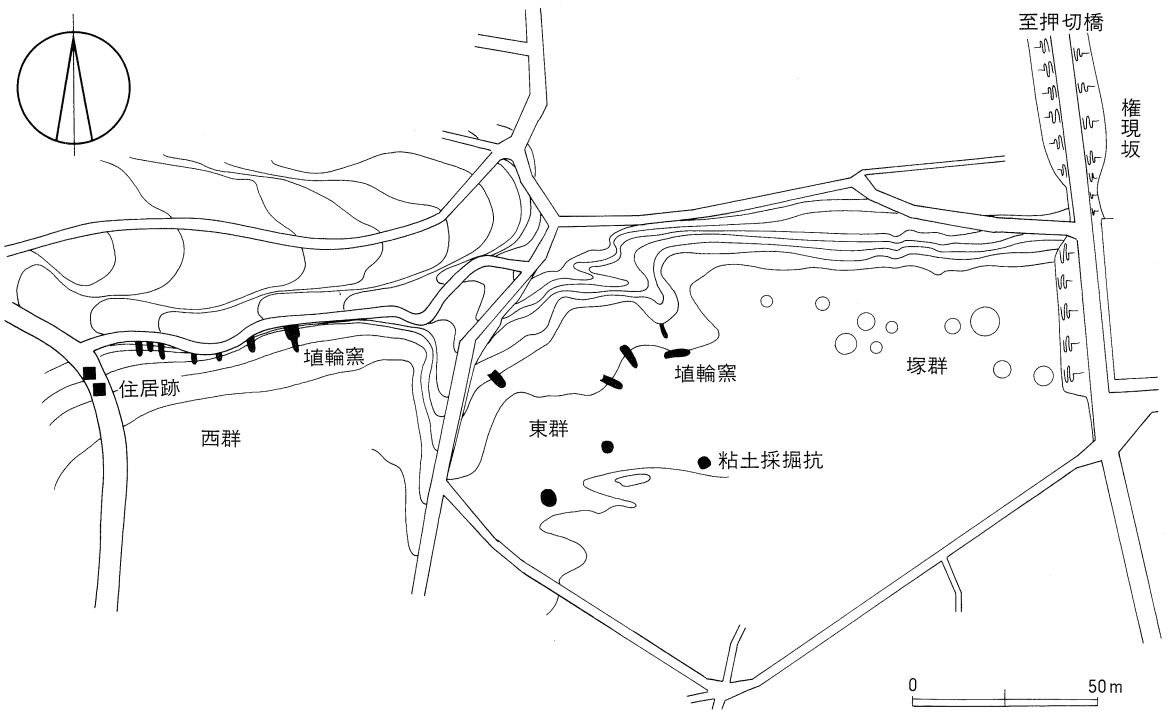
本窯跡群は、標高51m程の江南台地の縁辺北端に位置している。遺跡のほぼ中央には、南北方向に開析谷が侵入しており、地形的に東西２分されている。1962年に、埼玉県教育委員会と江南町教育員会により遺跡の一部が発掘調査されて、３基の埴輪窯跡（東群第１～３号窯）が確認されている。また、1964年には、大川清氏が、第２号窯跡と３号窯跡の間を調査し、４基の窯跡を検出している。

これら東群３基の窯跡から出土した遺物は、円筒埴輪と朝顔形埴輪が主体であるが、形象埴輪が少量出土している。また、窯体などから鬼高II式の土師器坏形土器や手捏ね土器が出土している。

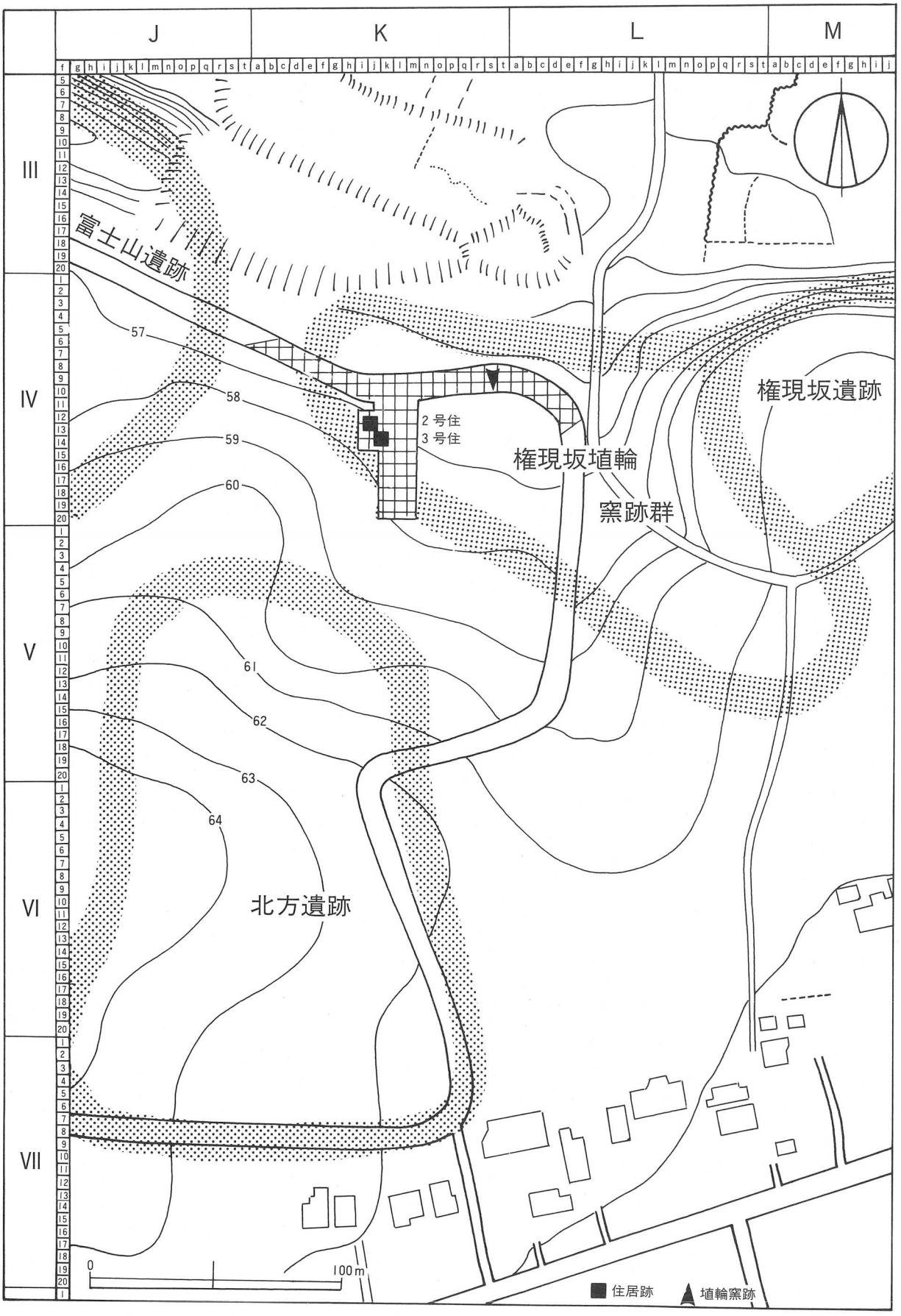
1989年から90年にかけて、台地上の平坦地において、採土工事に先立つ発掘調査と試掘調査が江南町教育委員会によって行われている。調査の結果、古墳時代の住居跡６軒、粘土採掘坑２基が確認されている。住居跡は、覆土に多量の埴輪片が含まれており、埴輪工房跡と推定される。

今回の調査は、ゴルフ場外周道路の建設に先立つもので、従来埴輪窯が確認されていなかった開析谷の西側で行われた。1991年に、試掘調査を行ったところ、台地崖線部において、埴輪窯跡が10数基確認された。このため、その重要性から事業者と協議し、急遽道路の設計変更を行い、現状保存の措置をとっている。設計変更した道路予定地からは、古墳時代鬼高式期の住居跡２軒が検出されている。この住居跡は竈を設置しておらず、埴輪片および粘土塊も検出されていることから、埴輪工房的な性格を持つ住居跡であると考えられる（第179・180図）。

この西群の埴輪窯は、台地縁辺部より侵入する開析谷に沿ってさらに分布している事が想定され、その数は増えるものと推定され、台地上の平坦部には、東群同様に埴輪製作に関わる工房跡や、粘土採掘坑が良好な状態で存在している事が想定される。



第179図　権現坂埴輪窯跡群全体図



第180図　権現坂埴輪窯跡群の地形と調査地区

尚、本窯跡群は、1969年に東群の埴輪窯跡群が埼玉県選定重要遺跡に、西群の埴輪窯群は1998年に江南町指定史跡に指定され保存措置が講じられている。　（森田安彦）

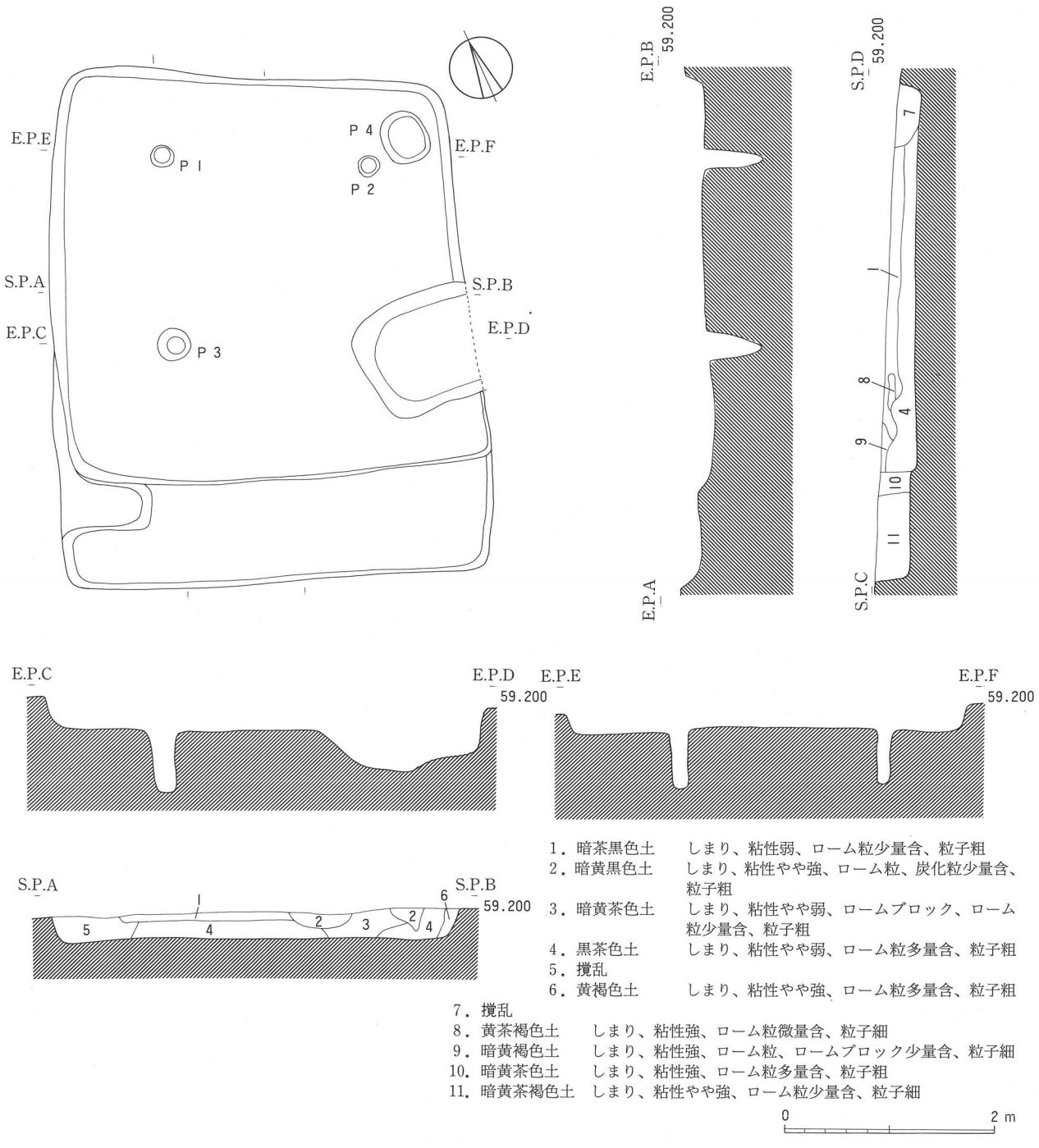
(2)　遺構とその出土遺物

「竪穴住居跡」

第２号住居跡（第181・182図・図版92）

［位置］KIV-j13・j14、k13・k14グリットに位置する。

［形状］北壁3.7m・南壁４m、長さ3.9mのやや台



1．暗茶黒色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
2．暗黄黒色土　しまり、粘性やや強、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
3．暗黄茶色土　しまり、粘性やや弱、ロームブロック、ローム粒少量含、粒子粗
4．黒茶色土　しまり、粘性やや弱、ローム粒多量含、粒子粗
5．撹乱
6．黄褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子粗
7．撹乱
8．黄茶褐色土　しまり、粘性強、ローム粒微量含、粒子細
9．暗黄褐色土　しまり、粘性強、ローム粒、ロームブロック少量含、粒子細
10．暗黄茶色土　しまり、粘性強、ローム粒多量含、粒子粗
11．暗黄茶褐色土　しまり、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子細

第181図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡平面図

形状を呈する。壁高は北壁で20cm、西壁で30cm、東壁で26cm、南壁で６cmを測る。南壁は重複する遺構のため、わずかに残存するのみである。

［覆土］覆土は７層に分層される。南側に遺構が重複するが、セクションで住居南壁の立上がりを確認している。

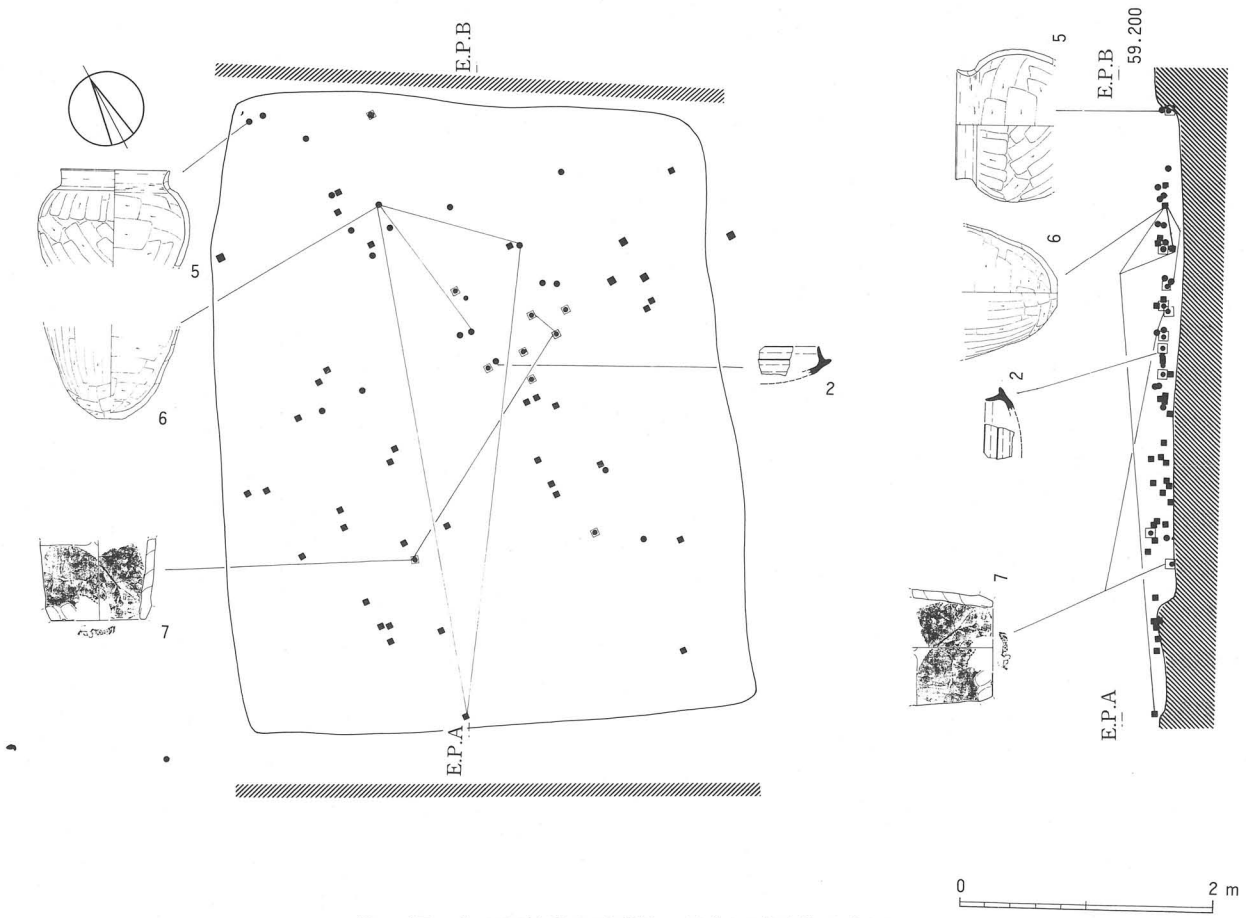
［柱穴］柱穴は４口確認されている。P1-58.2cm、P2-53.5cm、P3-59.0cm、P4-10.8cmを測る。P1・P2・P3と組む南東の柱穴は撹乱により消失したものと考えられる。

［炉及び竈］確認されていない。

［遺物出土状態］床面に遺棄された状態で出土した遺物は無い。いずれも、床面より10cm以上浮いた状態で出土しており、遺物の残存率も低い。

［遺物］（第183図）遺物は70点出土しており、土師器、須恵器・埴輪の小破片である。

１・３～６は土師器である。１は小破片から図化した坏で、やや大振りないわゆる「有段口縁模倣坏」である。外面は口唇部がヨコナデ、口縁部が木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリの後にヘラミガキである。内面は、口縁部・底部共にヨコナデである。３は、椀か鉢の口縁部破片で、外面は口唇部がヨコナデ、口縁部が木口状工具によるヨコナデ、底部（体部）はヘラケズリであり、内面はヨコナデである。４は小形の甕の底部破片で、外面は胴部下半が指オサエの後ヘラケズリ、底部がヘラケズリ、内面はヘラケズリの後ヨコナデである。５は甕として良いもので、外面は口唇部がヨコナデ、口縁部が木口状工具によるヨコナデ、胴部上半は縦位のヘラケズリの後上端のみ指頭によるヨコナデ、胴部は斜位のヘラケズリである。内面は口縁部が木口状工具によるヨコナデ、体部が弧状ヘラによるヨコナデである。６は、甕の体部下半から底部にかけて残存するもので、胴部が縦位のヘラケズリ、胴部下半は横位のヘラケズリ、内面は横位のヘラナデである。２は須恵器の坏身破片である。内外面共にロクロによるヨコナデで、口縁部は内傾し口唇部はシャープさを欠いている。



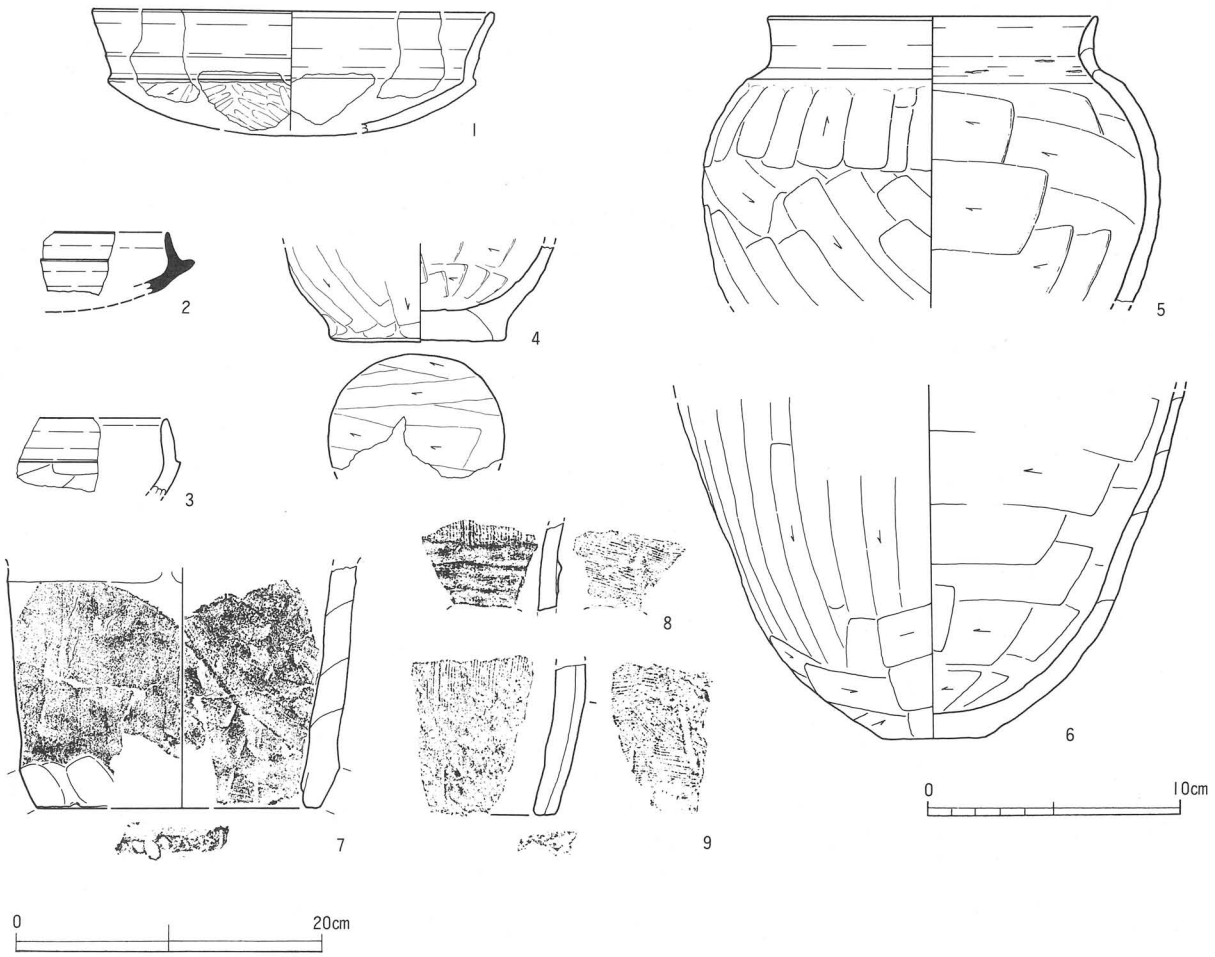
第182図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡遺物分布図

７～９は埴輪破片で、全て普通円筒埴輪であると思われる。７・９は底部破片で、共に外面からの板押圧による底部調整を伴っている。７の外面は、縦位のヘラナデの後に板押圧、内面は縦位のナデ。９の外面は縦位のハケ（15本/２cm）の後に板押圧、内面は横位のハケ（17本/２cm）である。８は胴部破片で、非常に偏平なＣ類の突帯とＣ類と思われる透孔をもつ。外面は縦位のハケ（14本/２cm）の後に突帯ナデ、内面は横位のハケ（17本/２cm）である。

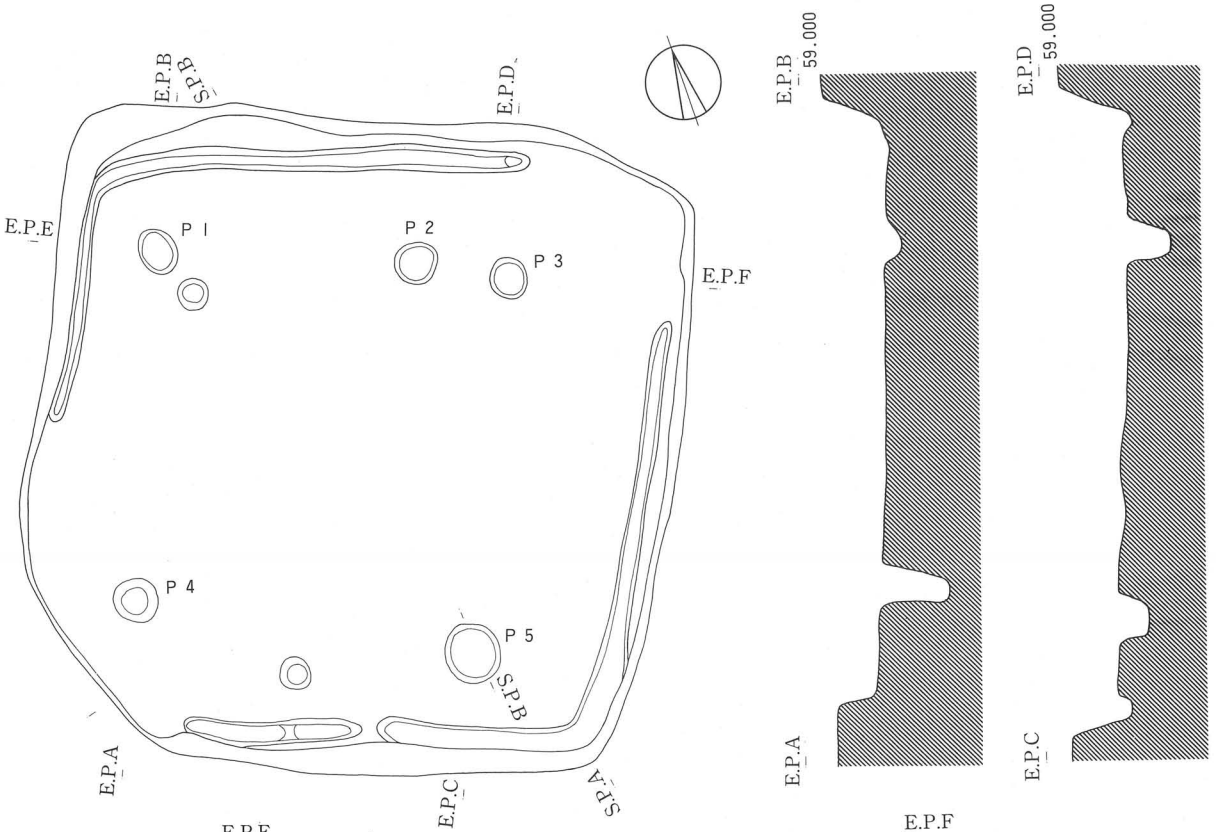
［時期］鬼高Ⅱ式期の土師器・TK43併行期と思われる須恵器・板押圧による底部調整を持つ普通円筒埴輪の諸特徴から６世紀後半代に属するものと思われる。

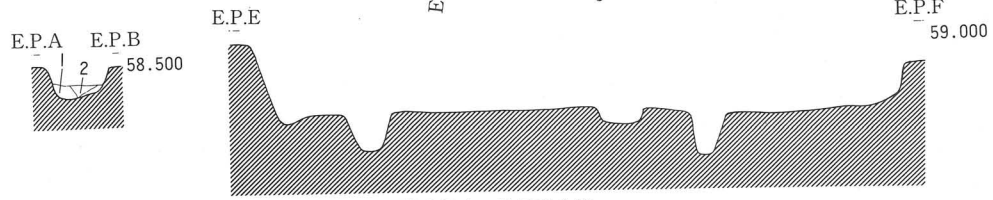
第67表　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	坏	(15.9)	(4.8)		SW	do	b	20%	
2	坏		2.4		W	lg	a	10%	
3	椀or鉢		3.0		WS	do	b	10%	
4	甕		4.2	6.9	SB	do	b	60%	
5	甕	(13.5)	11.7		SW	do	b	40%	
6	甕		14.1	4.2	SB	do	b	80%	

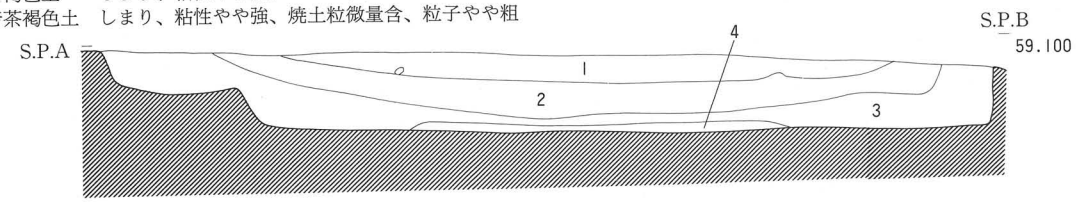


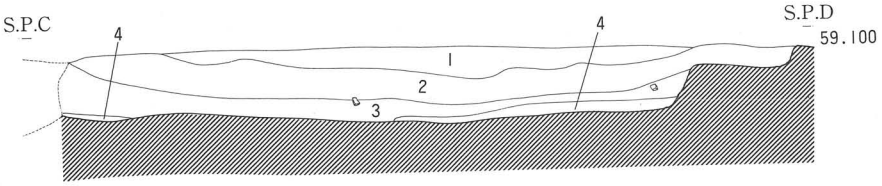
第183図　権現坂埴輪窯跡群第２号住居跡出土遺物





1．茶褐色土　　しまり、粘性やや強、ローム粒少量含、粒子やや粗
2．暗茶褐色土　しまり、粘性やや強、焼土粒微量含、粒子やや粗





1．黄茶色土　　しまり、粘性やや強、砂粒少量含、粒子粗
2．暗黒茶色土　しまり、粘性弱、ローム粒少量含、粒子粗
3．暗茶褐色土　しまり、粘性弱、ローム粒、炭化粒少量含、粒子粗
4．黄褐色土　　しまり、粘性やや強、ローム粒多量含、粒子細



第184図　権現坂埴輪窯跡群第3号住居跡平面図

第３号住居跡（第184・185図・図版91）

［位置］KIV-i12•i13、j12•j13グリットに位置する。

［形状］長径5.2m、短径5.0mの隅丸方形を呈する。南西隅・北東隅が極めて丸みを帯びている。南壁から南東隅を経て東壁の３分の２強及び北西隅を中心に北壁・西壁の３分の２程度の壁下に壁溝が確認されている。

［覆土］覆土は４層に分層され、自然堆積を示している。下層に少量の炭化粒子を含む。

［柱穴］柱穴は５口確認されている。P1-14.0cm、P2-12.0cm、P3-34.0cm、P4-54.0cm、P5-24.0cmを測る。

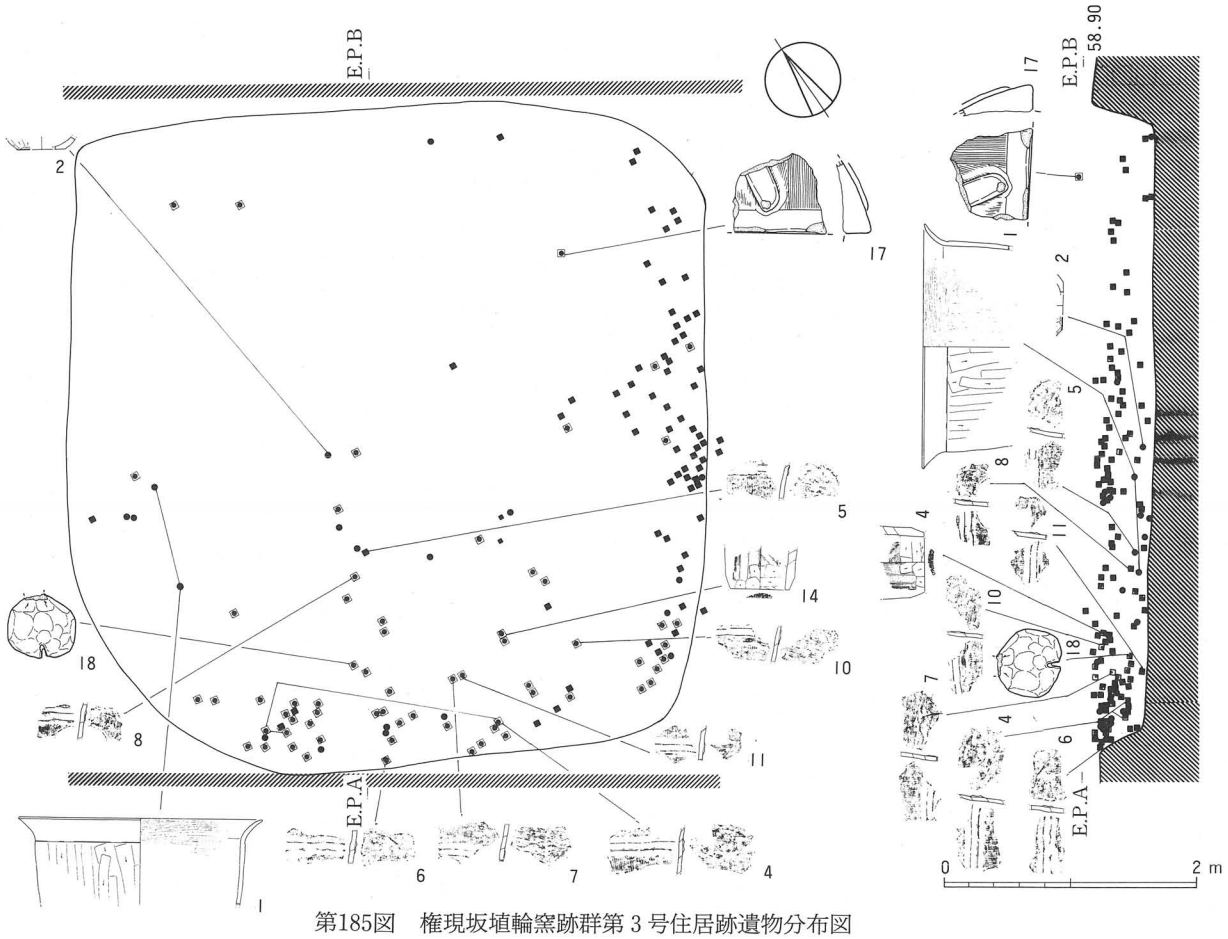
［炉及び竈］確認されていない。

［遺物出土状態］遺物は、住居の東・南壁側に偏って出土している。床面に遺棄された状態で出土した遺物は無く、ほとんどが覆土上層より小破片となって出土している。

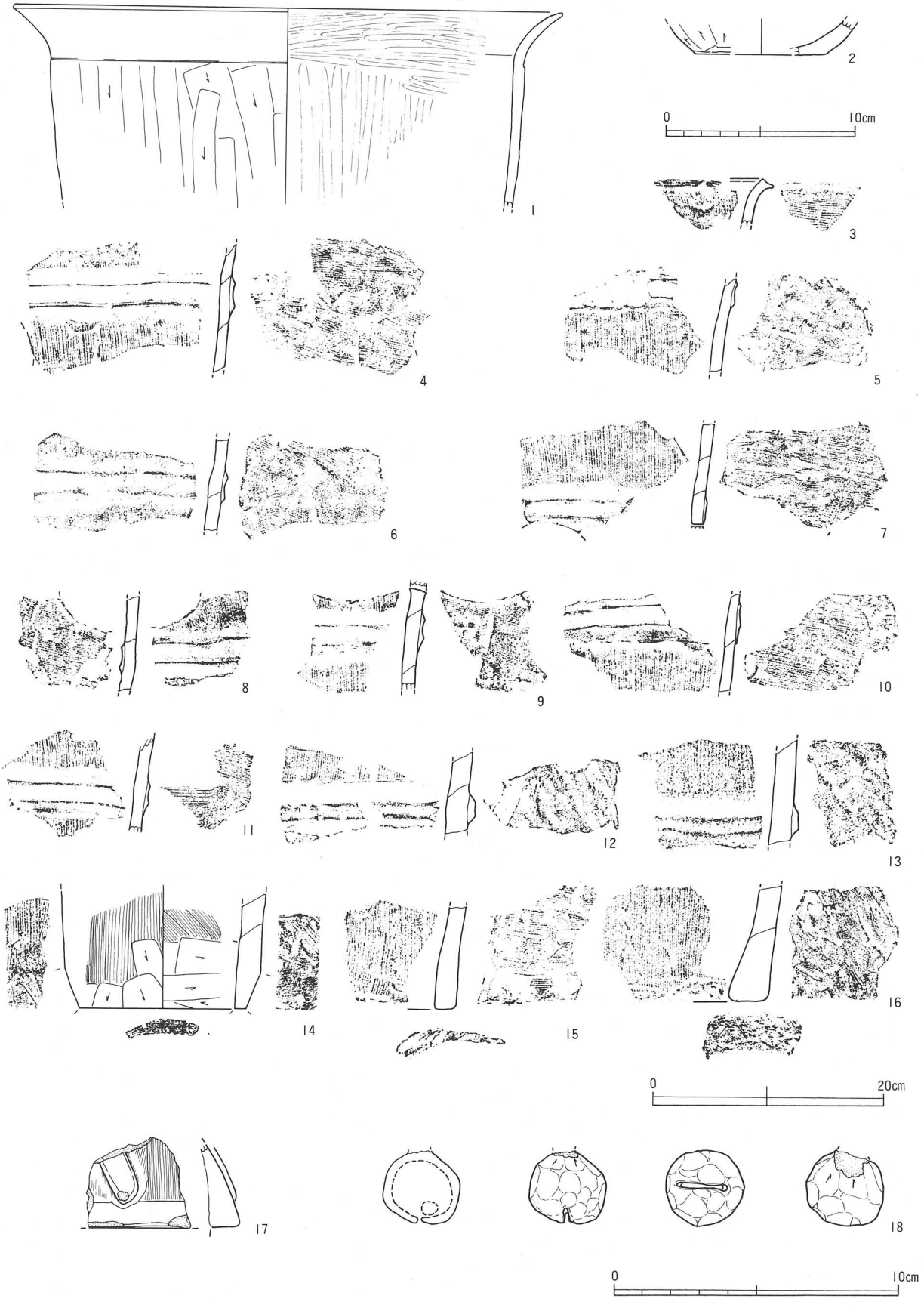
［遺物］（第186図）遺物は203点出土しており、比較的多くの埴輪破片と少量の土師器破片、１点のみであるが土製品（鈴）がある。

１・２は土師器である。１は大形の甕と思われる破片で、外面は口唇部がヨコナデ、胴部は縦位のヘラケズリである。内面は口縁部が横位のヘラミガキ、胴部は縦位のヘラミガキである。２は小形の甕の底部と思われる。外面は胴部下半が縦位のヘラケズリ、内面は指頭によるナデである。

３～17は埴輪破片である。３～16は普通円筒埴輪と思われ、17は形象埴輪である。１は普通円筒埴輪破片である。口唇部はヨコナデによるもので、端部外面は強く突出する。外面は縦位のハケの後に口唇部ヨコナデ、内面は横位のハケの後に口唇部ヨコナデである。４～13は円筒埴輪の胴部破片である。４～11は互いに類似したもので、同一個体のものを含んでいる可能性もあるので、以下に一括して述べていく。突帯は極めて低いＢ類であり、透孔は確認される物の全てがＡ類であると思われる。外面は縦位のハケの後に突帯ナデ、内面はヨコハケである。12•13はやや高めのＢ類の突帯をもち、外面は縦位のハ



第185図　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡遺物分布図



第186図　権現坂埴輪窯跡群第３号住居跡出土遺物

ケの後に突帯ナデ、内面は斜位の指頭によるナデである。14～16は円筒埴輪の底部破片で、14はヘラケズリによる底部調整を伴っている。14は外面が縦位のハケの後に縦位のヘラケズリ、内面は斜位のハケの後に横位のヘラケズリである。15は外面が縦位のハケ、内面が横位のハケである。16は外面が縦位のハケ、内面が斜位の指頭によるナデである。17は形象埴輪の破片で、人物埴輪の上衣裾部であると思われる。外面は縦位のハケの後に裾部の横ナデ、さらに粘土帯を貼付して周縁を指頭によってナデる。

内面は見かけのものであり、剝離面となっているが、縦位のハケがスタンプされている。18は土製の鈴である。直径2㎝程度の土玉を内包し、鈴の口はヘラ等で切開したものではない。外面はヘラケズリによって丁寧な調整を行っており、剝離痕が存在している点から、単体で用を為すものでは無いと思われる。

［時期］年代決定の積極的材料に恵まれていないため詳細は不明であるが、土師器やヘラケズリによる底部調整を伴う円筒埴輪から、一応6世紀の後半と考えておきたい。　（関口・永井）

第68表　権現坂埴輪窯跡群第3号住居跡出土土器観察表

番号	器　種	口　径	器　高	底　径	胎　土	色　調	焼　成	残　存	備　考
1	甑	(29.4)	10.5		SWB	do	a	20%	
2	甕		2.1	(7.2)	SWR	do	b	10%	

権現坂埴輪窯跡群の調査

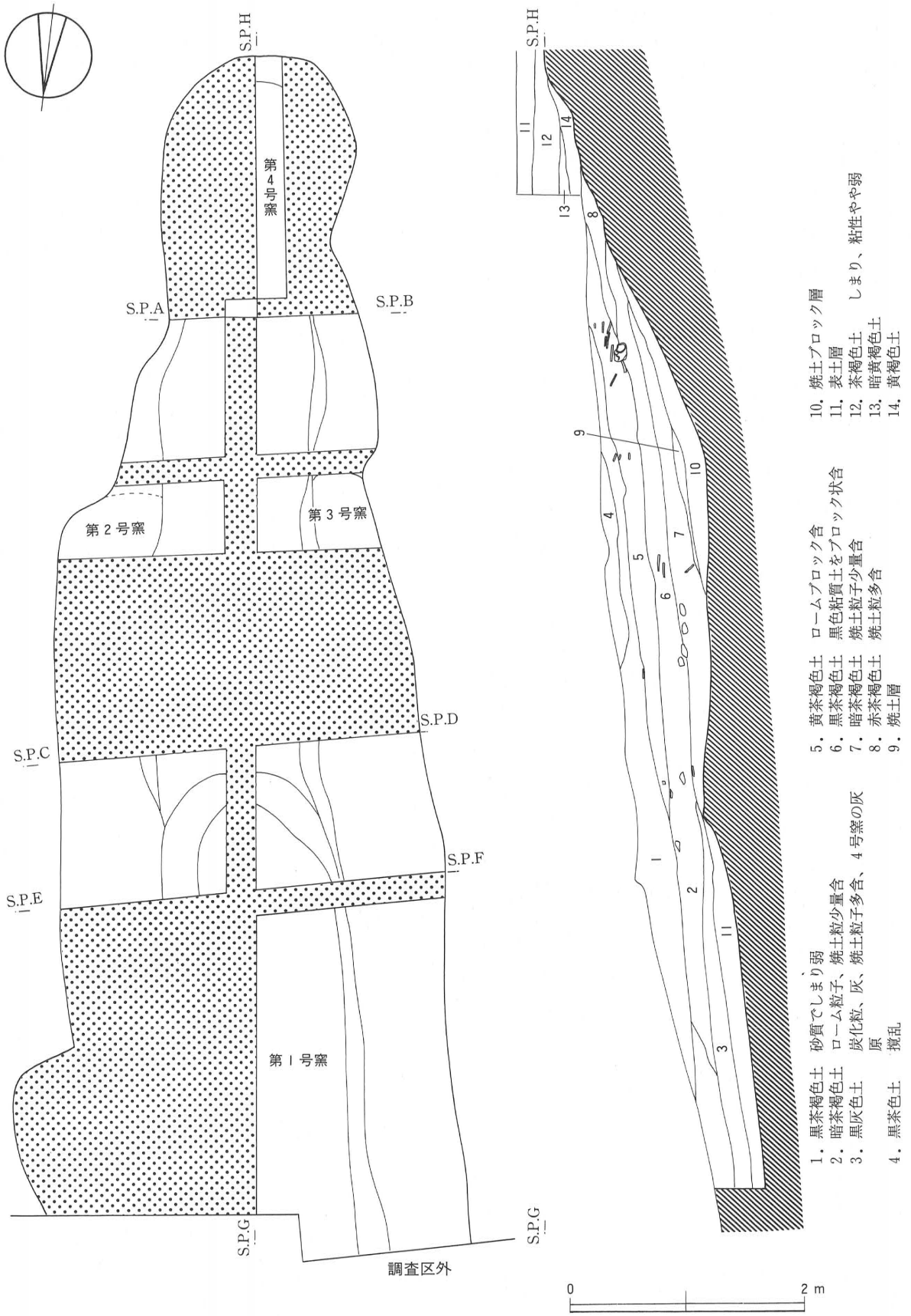
権現坂埴輪窯跡群の立地する江南台地の北縁は、複雑に浸食谷の入込む場所である。遺跡の中央に大きく入り込み南方に延びる谷により東群西群に区分され、台地平坦面には粘土採掘坑・工房建物跡が斜面部には窯体が築かれていた。東群は1962年以来数度の発掘調査がなされ埴輪窯・粘土採掘坑・工房建物跡などが確認されていたが、西群については今回新たに確認されたものである。今回の調査地点は大支谷から分岐して西方に侵入する支谷に面した谷斜面部と平坦地の一部である。窯体の確認された斜面部と現在の谷底部分の比高差は約4m程あり、焚き口・前庭以下灰原部分を流失または排水路のため削りとられている。また谷地形をなしていた北側の台地部分は後世に削りとられ窯体のある斜面部が現在の台地縁となっている。この斜面部にかかる約80mの範囲内に埴輪窯体と推定される遺構が12ヵ所あった。この遺構のなかで表土直下に確認された埴輪窯の一部を確認のため発掘調査を実施し、他は埋め戻し保存を図ることとした。確認調査を実施した埴輪窯は調査の結果4基の窯が造り変えられ重なりあっていることが解り、本報告では仮に1号窯から4号窯とした。1号窯から4号窯は互いの主軸を焚口方向北向きの方位と同じくし、灰原・前庭部を大きく逸脱しない範囲でその位置を少しずつずらして構築される。互いの窯体が重なることから操業の順は構築の順であり、斜面下位より上位方行に更新していく。窯体の掘削される土層は台地礫層の上部までである。

第1号窯跡（第187・188、図版90）

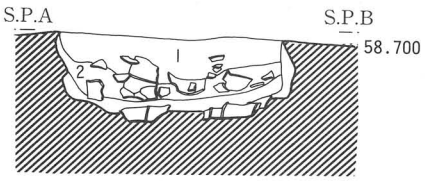
2、3、4号窯の前庭部の下位に位置し、窯体の一部と窯底が確認される。窯体の主軸方位はN-160°-Eを指す。窯体は現存長4.8mを測るが、焼成部の窯尻と側壁の一部を確認したに留め窯底まで掘り下げていない。そのため焼成部と燃焼部の境界は不明瞭であるが灰原以下は削りとられた崖面となってしまい遺存していない。現存する燃焼部の幅は1.3m程でしだいに幅を狭め煙道部に移行すると思われる。操業回数は確認していない。埴輪片が少量出土している。

第2号窯跡（第187・188図、図版90）

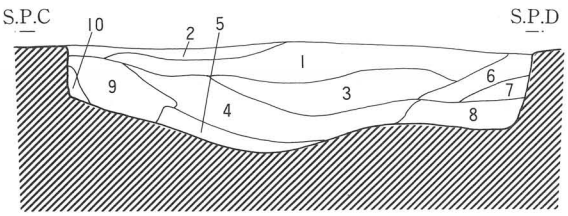
1号窯より一段上位の左側に構築されるが、窯体の西半分は4号窯に削りとられていため残りは良くない。主軸長約4.8mまで測るが窯体と推定される焼土化した部分は約3.8mを測る。小トレンチの観



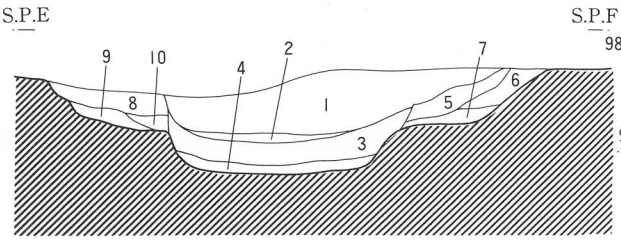
第187図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡平面図



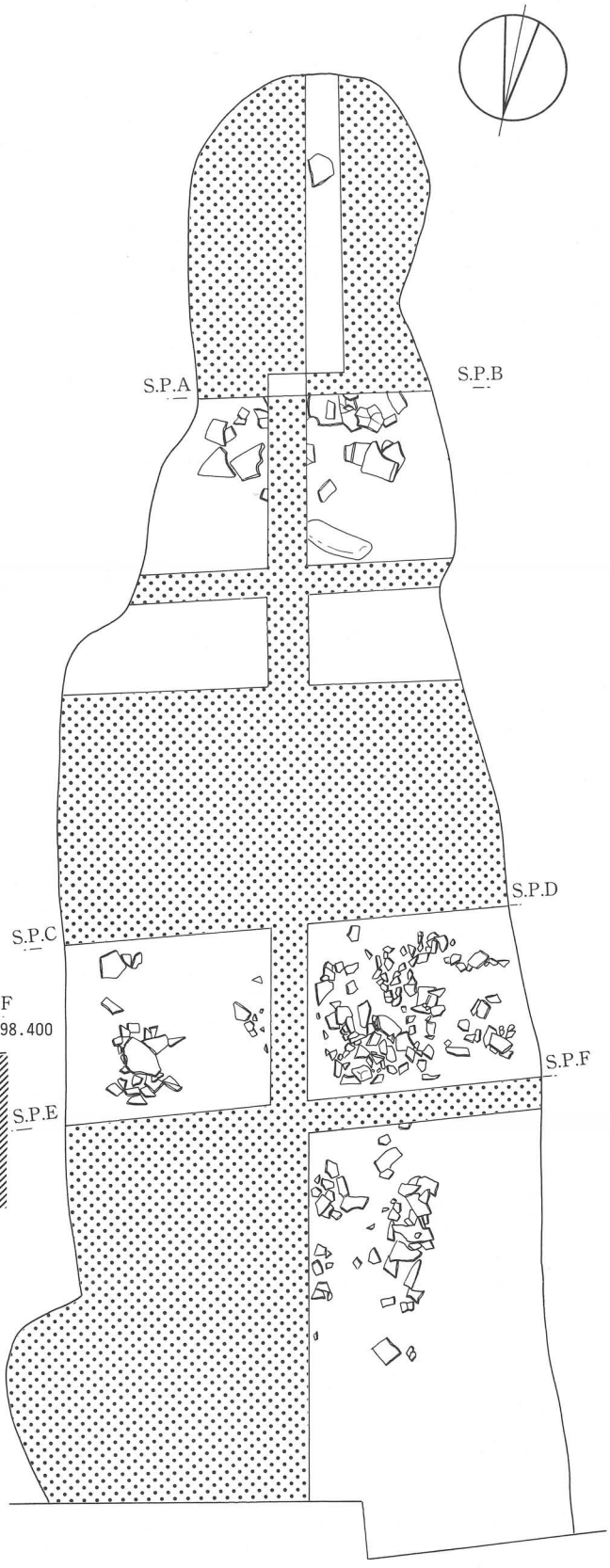
1．暗茶黒色土　焼土粒、炭化粒多含、しまり弱、粒子粗
2．赤褐色土　　しまり強、焼土多含



1．暗茶黒色土　しまり弱、炭化粒、ローム粒含、粒子粗
2．暗茶褐色土　しまり弱、ローム粒多含、粒子細
3．暗黄色土　　しまりやや強、ローム粒、焼土粒少量含、粒子粗
4．暗黄褐色土　しまりやや強、焼土粒、炭化粒多含、粒子粗
5．茶黒色土　　しまり弱、焼土粒、炭化粒多含、粒子やや粗
6．暗黄黒色土　しまり弱、焼土粒、炭化粒少量含、粒子粗
7．赤茶褐色土　しまり弱、焼土粒多含、粒子粗
8．茶黒色土　　しまり弱、焼土粒少量、炭化粒多含、粒子粗
9．赤褐色土　　焼土塊多含
10．暗黄茶色土　しまり弱、ローム粒、焼土粒少量含、粒子粗



1．黒茶褐色土　砂質でしまり弱
2．黄茶褐色土　ロームブロック
3．黒茶褐色土　黒色粘質土とブロック状含
4．暗茶褐色土　焼土粒少量含
5．黄茶褐色土
6．焼土層
7．暗橙色土層
8．黄茶褐色土層
9．焼土層
10．焼土粒子層





第188図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡遺物分布図

察では窯壁高は60㎝遺存している。操業回数は２回以上と推定される。埴輪片が少量出土している。

第３号窯跡（第187・188図、図版90）

１号窯より一段上位の右側に構築されるが、窯体の東半分は４号窯に削りとられていため残りは良くない。主軸長約7.8ｍを測るが窯体と推定される焼土化した部分は約４ｍを測る。小トレンチの観察では窯壁高は60㎝遺存している。操業回数は確認していない。埴輪片が少量出土している。

２号窯と窯尻部の位置、側壁の延びが平行しているがその幅が2.6ｍもあること、窯底のレベルに差があることなどから一基の窯とは考えていない。

第４号窯跡（第187・188図、図版90）

１号窯より二段上位の同一主軸上に構築される本地点で操業された最終窯である。窯体は煙道部を除く全形が残っており、焚き口・前底部は１、２、３号窯の一部を削りとって造られている。主軸長約8.0ｍを測るが窯体と推定される焼土化した部分は約４ｍを測る。燃焼部に相当する部分は掘り下げていないが焼成部の床面が23°～25°の急な傾斜角で移行している。焼成部の幅は1.0から1.2ｍを測る。燃焼部とは明瞭な変換点を持つ。地山面をそのまま床としているが良く焼土化していた。壁はほぼ垂直に0.31ｍ立ち上がる。焼成部の上段に焼台に使用したと思われる埴輪が３から４個体が残されていたが調査中に盗掘に遭ってしまった。この焼台に使用された埴輪は朝顔形円筒埴輪と普通円筒埴輪であった。窯体の埋没土は焼成部で９層確認されるが焼成回数は明らかでない。本窯からは先の埴輪片のほかに馬等の形象埴輪が出土している。（新井）

権現坂埴輪窯跡群出土遺物（第189～192図）

権現坂埴輪窯跡群において調査を実施した西群第１～４号窯からは、多数の円筒埴輪と少量の形象埴輪が出土している。本窯の調査は確認調査のため、第１～４号窯の一括出土遺物として扱う。

(1)　円筒埴輪（第189・190図）

第１～４号窯出土の円筒埴輪は、全て普通円筒埴輪であると考えられ、確実に朝顔形円筒埴輪であると考えられる資料は確認されなかった。

a　普通円筒埴輪

普通円筒埴輪で全体が把握される資料は、第189図２の一個体のみで、２条突帯３段構成品である。他にも２条突帯３段構成品と考えられる個体は多く、主体的な存在であると考えられる。しかし、８や23・24等は５条突帯以上の大形品である可能性が極めて高く、他に３条突帯等の中形品と思われる個体も混在している。段構成を考慮しても全体としての大振りな個体が目立っており、姥ヶ沢Ｂ地点の普通円筒埴輪とは異なる様相を示している。

突帯の大半は凡例に示した分類のＣ類に相当し、低くやや蛇行気味に添付される。突帯の調整は工具を用いた例が多く、その痕跡を明瞭に残している。口唇部は凡例のＥ類が最も多い。口唇部の調整も、突帯と同様に工具を用いる。

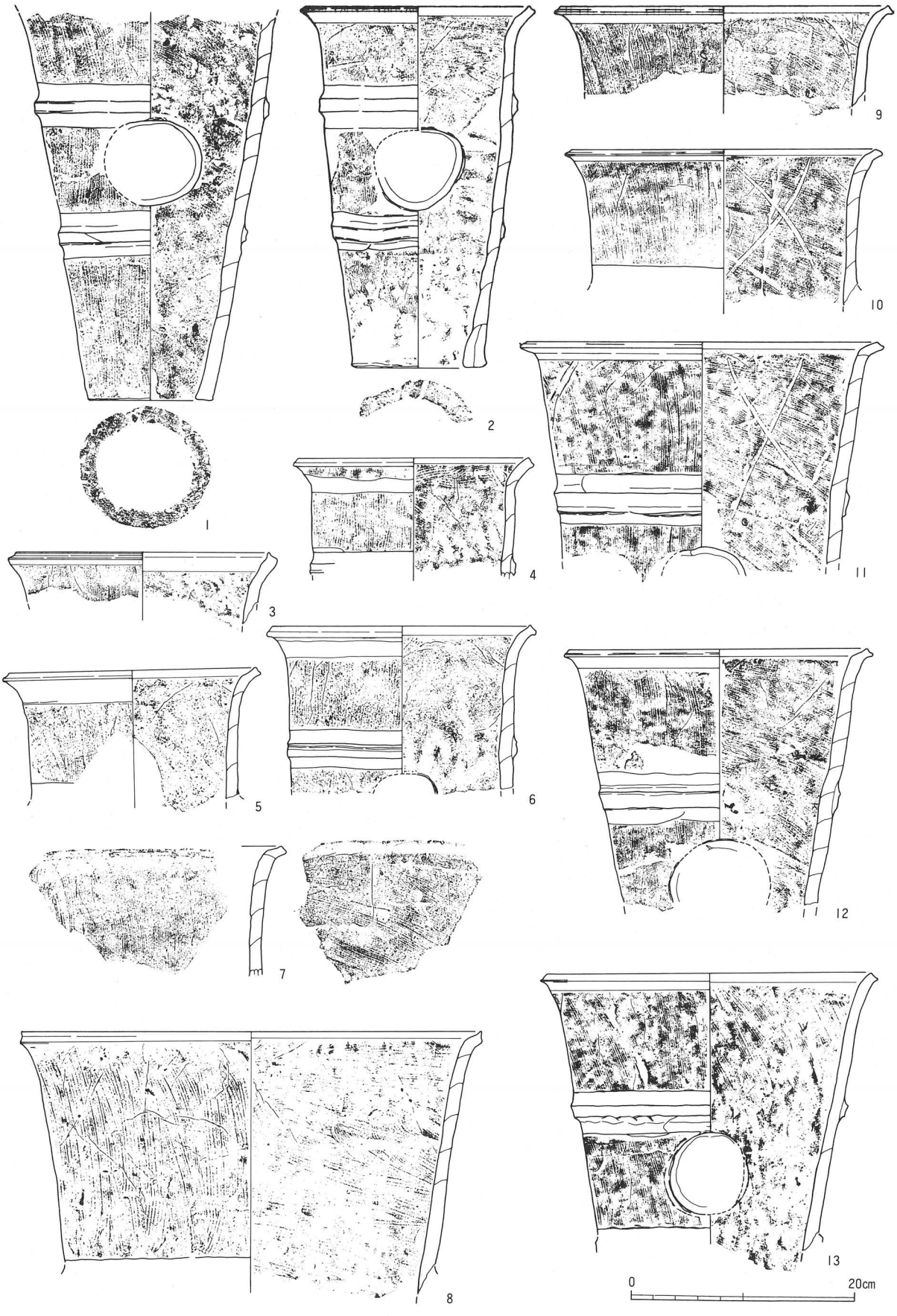
透孔は概ね円形に統一されており、著しい楕円形は少ない。

線刻を有する普通円筒埴輪は６個体確認され、全体の25％を占める。一本線と斜十字線の２種類が認められ、一本線は口縁部外面、斜十字線は口縁部内面に施文されている。

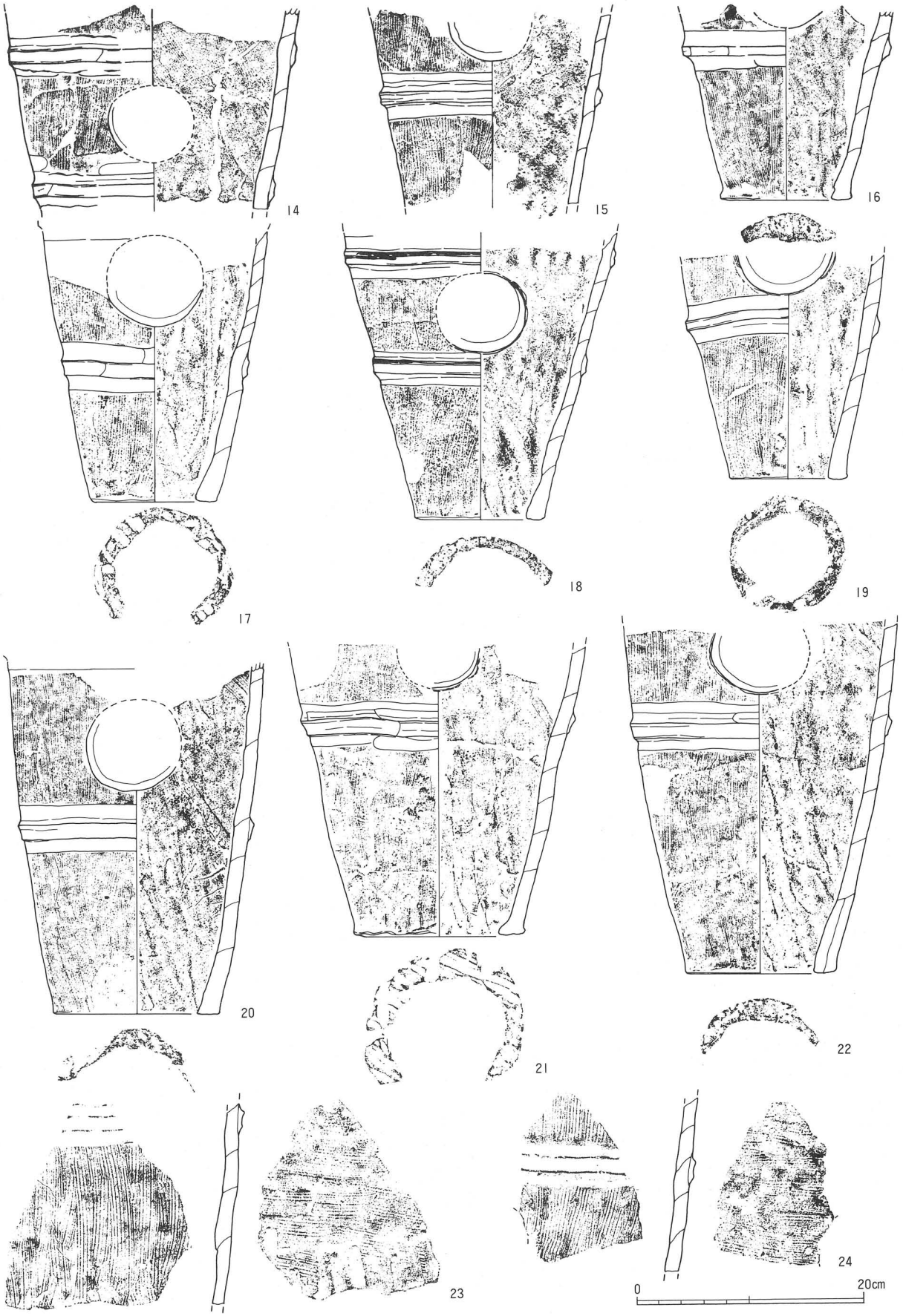
胎土は挟雑物のあまり無い良質なものから、小礫を含む粗いものまで複数種が認められる。

色調は燈色を中心に灰褐色～黄灰色までが認められるが、赤褐色の発色を示すものがやや目立つ。

焼成は大半が酸化焔によるものであるが、還元焔によるものも混在しており、両者共に硬質な焼き上がりを見せる場合が多い。



第189図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(1)



第190図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(2)

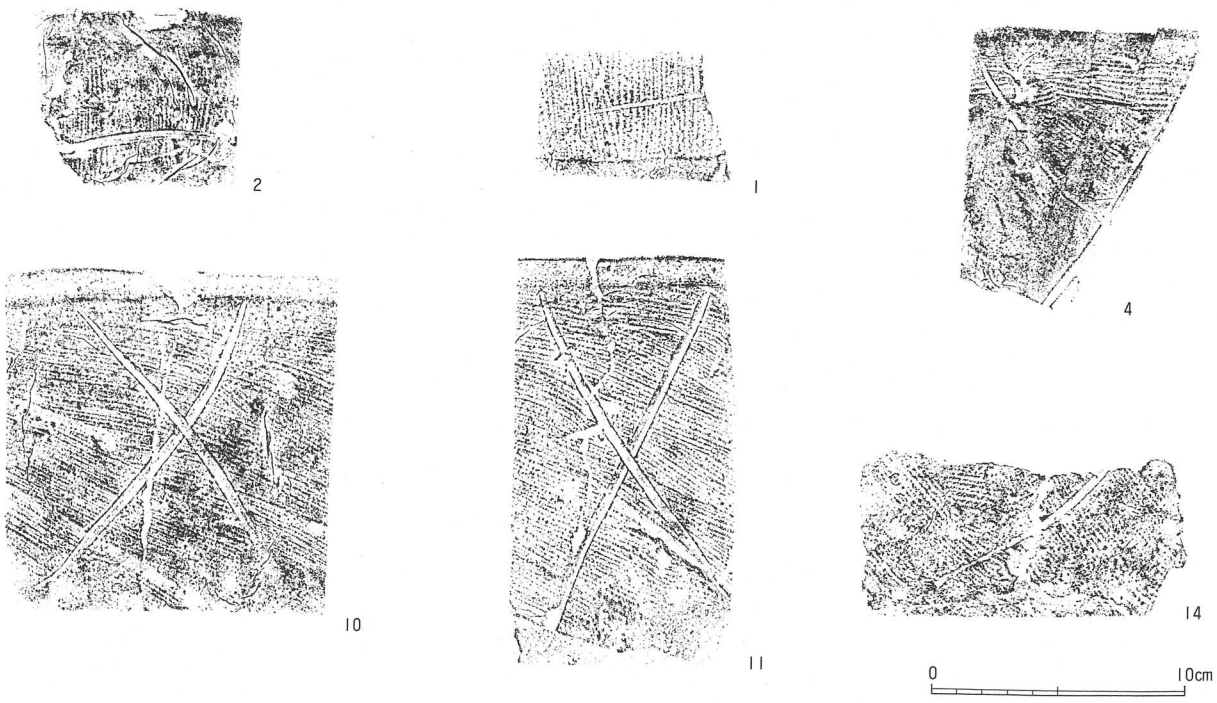
b　朝顔形円筒埴輪

権現坂埴輪窯跡群において、朝顔形円筒埴輪は確認されていない。

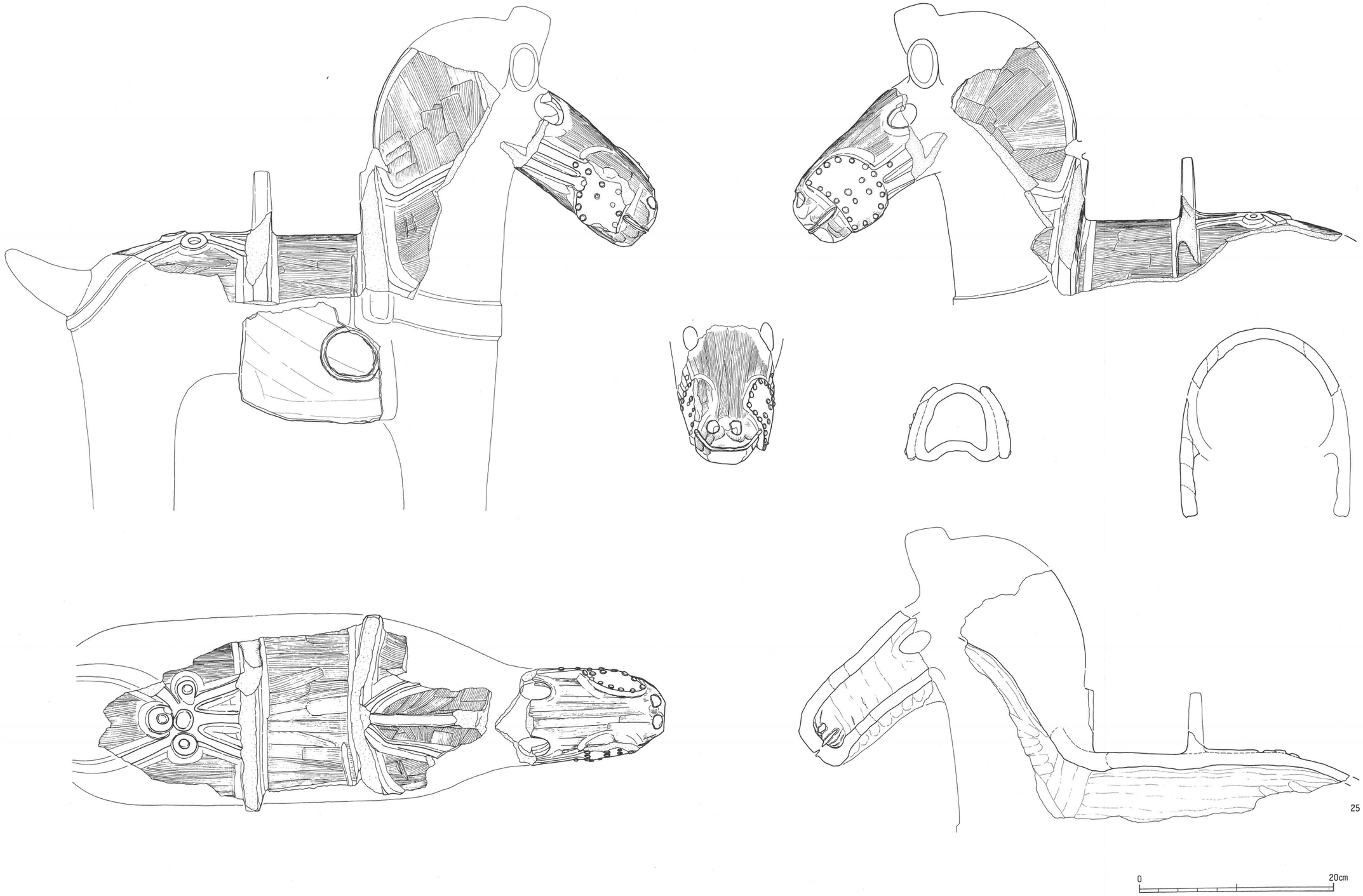
(2)　形象埴輪（第192図）

権現坂埴輪窯跡から出土した形象埴輪は、馬形埴輪の大形破片と、人物埴輪と思われる細片が数点出土したのみである。以下で図示可能であった馬形埴輪について述べる。

25は、胴部下半と脚部、頚部を欠損した馬形埴輪である。粘土紐の輪積みで成形しており、頭部先端は絞り込みによって完全に閉塞される。立髪・鞍は粘土板を添付するが、鞍はその大半を欠損する。障泥も粘土板を添付しており、片側のみが残存している。外面の全てにハケメ調整を加えているが、障泥部に限って後にナデ調整を加えている。内面にはナデによって調整され、ハケメ調整は見られない。頭部先端には三日月形の粘土板が対に貼付されており、鏡板を表現する。周縁部等には粘土玉を貼付しており、鋲留めの表現としている。面繋・引手は粘土紐を貼付して表現するが、両者の区別は明確にし得ない。頚部には粘土紐を貼付することによって手綱を表現しており、左右ほぼ対象である。背部には粘土紐を添付することによって環状の雲珠と帯紐状の尻繋を表現しており、雲珠から派生する帯紐間には環状の粘土紐が最終的に配されているが、何を象ったものかは不明である。障泥にはヘラ描きによる沈線で輪鐙が表現されており、直接的に接合しないが前輪付近の沈線に繋がる。口はヘラによる切り込みで表現され、貫通していない。鼻孔は棒状工具によって穿孔され、貫通する。目はヘラによってやや楕円形に切り取られており、ヘラ押さえによって周縁を盛り上げた後、ナデによって調整が加えられる。（永井）



第191図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土円筒埴輪線刻集成



第192図　権現坂埴輪窯跡群第１～４号窯跡出土遺物(3)

第69表　権現坂埴輪窯跡群出土遺物観察表(1)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯 2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部 ①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整 ①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
1234-1	A	—	—	11.7 10.9	A0.9 B1.0 C1.0	B (8.0)	①B②B③0.4④27.0 ①B②B③0.5④15.0	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	11	①C、1・2 ②硬・酸 硬・還 ③3・8・9 ④口縁部欠損	口縁部外面に線刻。「一」? 4号窯出土。
-2	A	32.3	(21.0)	(11.0)	A0.9 B1.0 C1.2	B (8.0)	①B②B③0.5④23.7 ①A②B③0.6④12.5	①E ②A ③ナデ強い	①観察不可能 ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメナデ→タテハケ→ヨコハケ	15	①B、1・2 ②硬・酸 ③6 ④底部・口縁部一部欠損	口縁部外面に線刻。「一」? 4号窯出土。
-3	A	—	(24.0)	—	A1.0	—	—	①B ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ	16	①C、1・2 ②硬・酸 ③7 ④破片	3・4号窯出土。
-4	A	—	(21.5)	—	A0.8 B	—	①B②B③0.4④—	①E ②B ③ナデ弱い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ→タテハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③7・8 ④破片	内面に線刻。「×」 4号窯出土。
-5	A	—	(23.0)	—	A0.9	—	①—②A③—④—	①E ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ→ヨコハケ	16	①C、1・2・3 ②硬・酸 ③8・9 ④破片	4号窯出土。
-6	A	—	(24.0)	—	A1.0 B0.9	(A) (6.0)	①A②B③0.4④—	①E ②B ③ナデやや強く端部外面突出	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテナデ	10	①C、1・2 ②硬・還 ③3・10 ④口縁部3/4残	突帯側面上部に沈線状の条痕。 4号窯出土。
-7	A	—	—	—	A1.2	—	—	①C ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③—	14	①B、1・2 ②硬・還 ③3 ④破片	大型品? 4号窯出土。
-8	A	—	(41.5)	—	A1.1	—	①—②A③—④—	①G ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ヨコハケ	9	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④大型破片	大型品。
-9	A	—	(30.0)	—	A0.9	—	—	①E ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→口唇部ナデ ③ナナメハケ	14	①B、1・2・3 ②硬・還 硬・酸 ③3・9・10 ④破片	4号窯出土。
-10	A	—	(28.5)	—	A0.9	—	①—②B③—④—	①F ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	13	①B、1・2 ②硬・酸 ③6 ④口縁部1/2周残	内面に線刻。 「×」 4号窯出土。
-11	(A)	—	(32.5)	—	A1.1 B1.1	(A) (7.0)	①c②B③0.3④—	①C ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ	14	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④口縁部1/2周残	口縁部内面に線刻。「×」 4号窯出土。
-12	A	—	(27.5)	—	A1.1 B1.1	(B) (7.5)	①c②B③0.3④—	①C ②B ③ナデ強い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	13	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・9 ④破片	4号窯出土。
-13	A	—	(30.0)	—	A1.0 B1.0	(B) (7.5)	①B②B③0.5④—	①A ②B ③ナデ弱い	①— ②タテハケ→突帯・口唇部ナデ ③ナナメハケ→タテナデ	12	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④破片	
-14	(A)	—	—	—	A1.0 B1.1 C—	(A) (7.5)	①B②B③0.4④— ①B②B③0.5④—	—	①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ→ナナメハケ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・9 ④破片	内面上部に線刻。 「×」? 4号窯出土。
-15	(A)	—	—	—	A0.8 B0.8	(A) (7.5)	①B②B③0.6④—	—	①— ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメハケ	9	①C、1・2 ②硬・還 硬・酸 ③3・4・10 ④破片	4号窯出土。
-16	(A)	—	—	(11.5)	A0.9 B1.2	(A) (6.5)	①A②B③0.7④14.0	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ	13	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④破片	4号窯出土。

第70表　権現坂埴輪窯跡群出土遺物観察表(2)

番号	形態	器高	口径	底径	器厚 A B C	透孔	突帯 2条①分類 1条②調整手法 ③突帯高 ④底部～高	口唇部 ①分類 ②調整手法 ③手法の特徴	成形調整 ①基底部 ②外面 ③内面	ハケ目 本/2cm	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	備考
-17	(A)	—	—	(11.5)	A1.0 B1.1	(A) (8.0)	①—②B③—④(25.0) ①B②B③0.5④13.0	—	①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→タテハケ	9	①B、1・2・3 ②硬・還 普・酸 ③1・8・9 ④底部3/4周残	4号窯出土。
-18	(A)	—	—	(11.5)	A— B1.0 C1.0	(A) (7.0)	①A②B③0.4④24.5	①B②B③0.4 ④14.5—	①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③ナナメナデ→ナナメハケ→タテナデ	10	①C、1・2 ②硬・還 ③3・10 ④底部1/2周残	№6と同一個体か？ 突帯部に沈線状の条線。 4号窯出土。
-19	(A)	—	—	10.5 10.0	A0.9 B1.1	(A) (8.5)	①A②B③0.4④14.3	—	①左 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③5・6 ④底部完存	4号窯出土。
-20	(A)	—	—	(14.5)	A1.0 B1.1	(A) (7.0)	①C②B③0.5④19.5	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	11	①B、1・2 ②硬・酸 ③8・9 ④底部3/4周残	4号窯出土。
-21	(A)	—	—	(15.0)	A1.1 B1.1	(A) (8.0)	①-②B③-④(32.0) ①C②B③0.5④17.5	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	12	①B、1・2・3 ②硬・酸 硬・還 ③3・8・9 ④大型破片	
-22	(A)	—	—	(13.5)	A1.1 B1.2	(B) (8.0)	①C②B③0.5④21.5	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③タテナデ→ナナメハケ	12	①B、1・2・3 ②普・酸 ③5・8・9 ④大型破片	4号窯出土。
-23	(A)	—	—	—	A— B1.2	—	①B②B③0.4④-	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ→タテナデ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③6 ④破片	4号窯出土。 №8と同一個体か？ 内面線「×」？
-24	(A)	—	—	—	A1.0 B1.2	(A) —	①B②B③0.5④-	—	①観察不可能 ②タテハケ→突帯ナデ ③ヨコハケ	8	①B、1・2 ②硬・酸 ③6 ④破片	4号窯出土。 №8と同一個体か？

第4章

考　　察

第４章　考　　察

第１節　江南台地における弥生時代の土器の様相

―富士山・姥ヶ沢遺跡出土土器を中心として―

江南台地における弥生時代の遺跡は、近年その調査例が増加してはいるものの、現在15遺跡が確認されているにすぎない。遺跡の分布は、台地東半の江南・川本町境に集中し、そのほとんどが弥生時代後期後半に属しており、実態は今だ不明な点が多い。中期に属する遺跡は、江南町鹿嶋遺跡において、円形土坑から有孔磨製石鏃が１点出土しているのみで、土器は確認されていない。江南台地に接する比企丘陵北端の江南町塩新田遺跡からは、いわゆる「中部高地型櫛描文土器」が採取されており、今後台地上でも検出される可能性はある。後期になると、縄文施文の吉ケ谷式土器に伴出して僅かに櫛描施文の樽式土器が出土しており、両者の関係を探る上で興味深い地域となっている。

各遺跡の内容を概観すると以下のとおりである（第193図）。

白草遺跡（磯崎1992）―川本町大字本田―江南台地の北縁部に位置し、荒川の支流である吉野川の右岸に位置し、現水田面との比高差２m前後を測る。円阿弥遺跡・焼谷遺跡とは同一小支谷に属し、円阿弥遺跡とは約210m程離れている。1989年に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っており、住居跡22軒・土坑22基が確認されている。本台地上で最大規模の集落跡である。遺構の帰属時期は、ほとんどが吉ケ谷II式期に属すると考えられ、甕形土器で３段階の変遷が把えられている。櫛描文土器が僅かに伴出している。

円阿弥遺跡（利根川1991）―川本町大字本田―江南台地の北縁部に位置し、荒川の支流である吉野川の右岸に位置する。上流の支谷頭には焼谷遺跡が、下流には白草遺跡が立地している。1987・1988年に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っており、住居跡５軒・土坑３基が確認されている。遺構の帰属時期は、ほとんどが吉ケ谷II式期に属すると考えられる。櫛描文土器は出土していない。

上本田遺跡―川本町大字本田―江南台地の北縁部に位置し、荒川の支流である吉野川の左岸に位置する。対岸には上本田前遺跡が立地している。縄文時代中期の集落跡で、遺構は確認されていないが、吉ケ谷式土器が出土している。

上本田前遺跡―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約500m程入った、吉野川の左岸に位置する。対岸には上本田遺跡が立地している。発掘調査は行われていないが、吉ケ谷式土器が表採されている。

焼谷遺跡（村松1991）―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約１km程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷の谷頭に位置する。下流には円阿弥遺跡・白草遺跡が立地している。1987年に川本町教育委員会により調査が行われており、住居跡７軒・土坑５基が検出されている。遺構の帰属時期は、ほとんどが吉ケ谷II～III式期に属すると考えられる。櫛描文土器は出土していない。

四反歩遺跡（金子1993）―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約800m程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷沿いに位置する。支谷の対岸には万願寺遺跡が立地している。1990年に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行っており、住居跡４軒、土坑15基が検出されている。遺構の帰属時期は、ほとんどが吉ケ谷II式期に属すると考えられる。櫛描文土器は出土していない。

万願寺遺跡（柿沼1989）―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約500m程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷が、分岐して舌状になった台地上に位置している。開析谷を挟んだ西側の対岸には四反歩遺跡が、東側の対岸には上ノ山遺跡が立地している。発掘調査は行われていないが、吉ケ谷II式土器が比較的まとまって出土しており、若干の櫛描



1．上本田遺跡　2．上本田前遺跡　3．焼谷遺跡　4．円阿弥遺跡　5．白草遺跡　6．四反歩遺跡　7．万願寺遺跡　8．荷鞍ケ谷戸遺跡　9．上ノ山遺跡　10．姥ケ沢遺跡　11．富士山遺跡　12．塩新田遺跡　13．鹿嶋遺跡　14．舟川遺跡　15．久保遺跡

第193図　周辺の弥生時代遺跡分布図

文土器が表採されている。

荷鞍ケ谷戸遺跡（村松1994）―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約400m程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷の右岸に位置している。同じ開析谷の上流には上ノ山遺跡が立地している。1992年に、川本町教育委員会により個人住宅建設に伴う発掘調査がおこなわれており、吉ケ谷式期の住居跡１軒が検出されている。櫛描文土器は出土していない。

上ノ山遺跡―川本町大字本田―江南台地の縁辺部より約900m程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷の右岸に位置している。同じ開析谷の下流には荷鞍ケ谷戸遺跡が立地している。発掘調査は行われていないが、吉ケ谷式土器が表採されている。

鹿嶋遺跡（松原1995）―江南町大字野原―江南台地の縁辺部より約1.2km程入った、荒川の支流である和田吉野川流域左岸の開析谷沿いに位置する。1990年に立正大学熊谷校地遺跡調査室によって調査が行われており、円形を呈する土坑下部より緑泥片岩製の有孔磨製石鏃が１点出土している。本地域周辺における磨製石鏃の出土例は、行田市小敷田遺跡から須和田式期の包含層より１点、東松山市代正寺遺跡からは、宮ノ台式期の住居跡より１点が出土している。本遺跡からは土器は出土しておらず、時期を断定することは難しいが、およそ弥生時代中期後半に属するものと推測される。

久保遺跡―江南町大字柴―江南台地の縁辺部より約600m程入った、柴沼下の谷左岸に位置する。発掘調査は行われていないが、ほぼ完形の吉ケ谷式土器の壺が採取されている。

塩新田遺跡―江南町大字塩―江南台地と境を接する比企丘陵北縁部に位置する。滑川の沖積地を臨む南向きの斜面裾部に立地し、標高53～60mを測る。表採資料であるが、町内で唯一中期に遡ると考えられる櫛描文土器が確認されている。

姥ヶ沢遺跡―江南町大字千代―江南台地の北縁に位置し、荒川の支流である吉野川に面している。遺跡の東西両側縁を開析谷によって画されている。1982年・1990年から1993年にかけて、江南町教育委員会・江南町千代遺跡群発掘調査会により調査が行われており、集落は西側の開析谷に沿って住居跡７軒、土坑25基、台地縁辺部に住居跡１軒が検出されている。遺構の帰属時期は、吉ケ谷II～III式期に属すると考えられる。櫛描文土器が少量伴出している。

富士山遺跡―江南町大字千代―江南台地縁辺部より約300m程入った、吉野川右岸の樹枝状に開析する支谷が、分岐して舌状になった台地上に位置している。1991年江南町千代遺跡群発掘調査会により調査が行われており、住居跡７軒が確認されている。遺構の帰属時期は、吉ケ谷II～III式期に属すると考えられる。櫛描文土器が伴出している。

伊勢原遺跡（石塚1996）―寄居町大字富田―荒川の支流である吉野川右岸の、舌状に開析された台地の東先端部に立地する。1993年に寄居町遺跡調査会により調査が行われており、吉ケ谷II式期に属する住居跡１軒が検出されている。江南台地西側の寄居町域では、該期の遺跡は本遺跡しか確認されていないが、今後検出例が増えるものと推測される。

江南台地における櫛描文土器について

江南台地における櫛描文土器の資料は貧弱なものが多く、江南町富士山遺跡で若干まとまって出土している以外、江南町姥ヶ沢遺跡・塩新田遺跡、川本町白草遺跡・万願寺遺跡で僅かに確認されているにすぎず、その実態は不明な点が多い。

江南町塩新田遺跡では、表採資料ではあるが中期後半に属すると考えられる櫛描文土器が確認されている（第194図１・２）。１は、甕形土器の頸部破片。頸部に、７本単位の先端の丸い櫛歯状工具による簾状文を、時計廻りに施文している。等間隔止めになると思われる。胴部には、頸部と同一工具によると思われる櫛描文が施文されている。羽状構成を採るものと推測される。２は、甕形土器の胴部上半部破片。頸部に、先端の丸い櫛歯状工具による簾状文を、時計廻りに施文している。等間隔止めになると思われる。胴部には、７本単位の先端の丸い櫛歯状工具による羽状文が施文されている。両者とも、頸部に時計廻りの等間隔止め簾状文を施文し、胴部に櫛歯

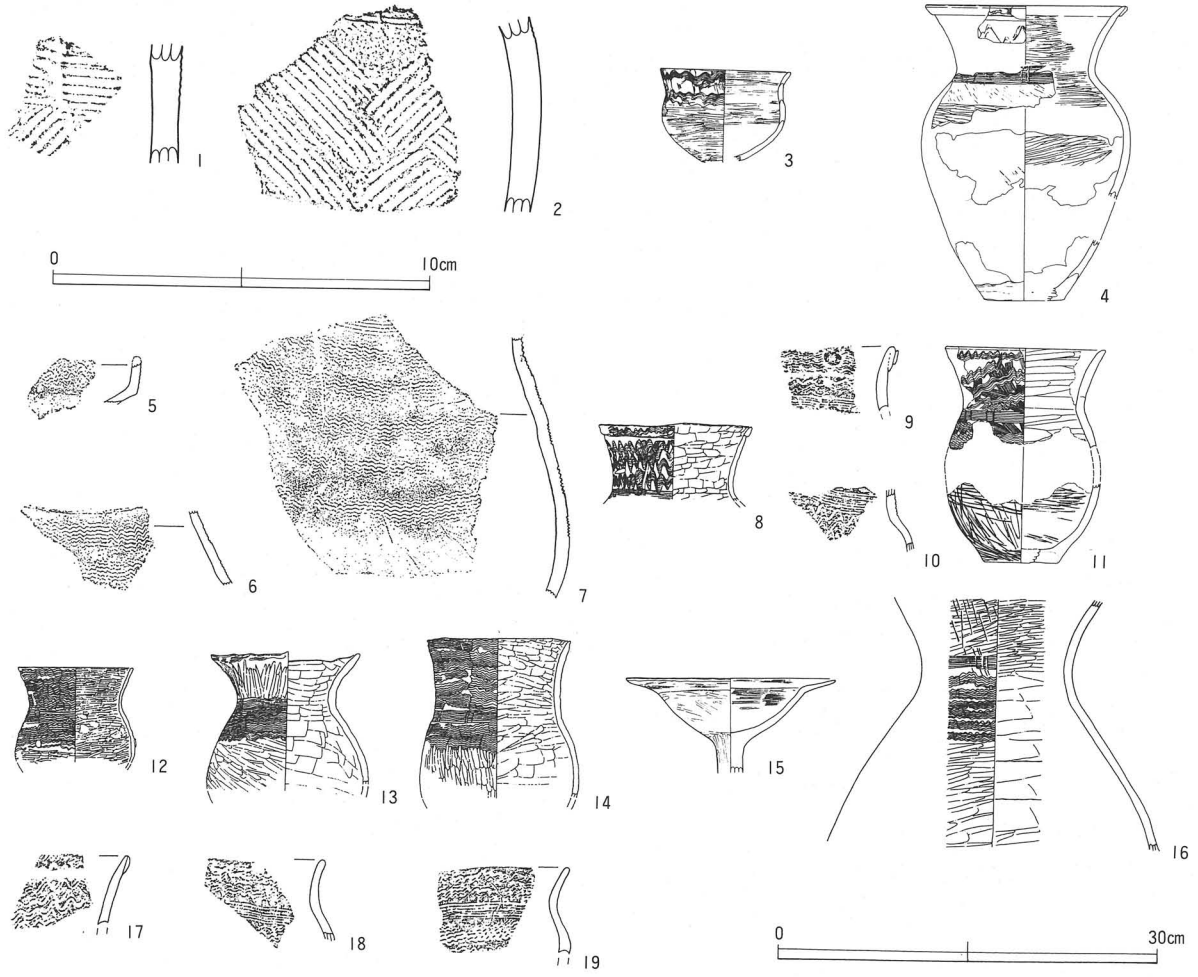
状工具による羽状文を施文していることから、「中部高地型櫛描文土器」と判断される。地理的に、寄居町用土・平遺跡と東松山市雉子山遺跡を結ぶ資料と考えられる。

川本町白草遺跡では、後期に属する櫛描文土器が吉ケ谷式土器に伴出して住居跡より少量確認されている。3は、第63号住居跡出土の台付甕土器。口縁部および頸部に櫛歯状工具による波状文が施文されている。吉ケ谷式土器の甕・壺・高坏形土器が伴出している。4は第77号住居跡出土の壺形土器。口唇部が有段口縁になっており、口唇部および口縁部には櫛歯状工具による波状文が、頸部には2連止め右回りの廉状文が施文されている。吉ケ谷式土器の甕形土器が伴出している。

川本町万願寺遺跡では、後期に属する櫛描文土器が表採資料ではあるが確認されている。5は壺形土器の口縁部。有段口縁を呈し、赤色塗彩されている。

6・7は甕形土器の胴部破片。頸部に廉状文が巡り、胴部上半に7本単位の波状文が5条施文されている。

江南町姥ヶ沢遺跡では、後期に属する櫛描文土器が吉ケ谷式土器に伴出して住居跡より少量確認されている。8は、第4号住居跡床面から出土した甕形土器。有段口縁および口縁部に櫛歯状工具による波状文、頸部に右回りの3連止め廉状文が施文されている。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、口縁部波状文を下から上へ順次施文している。吉ケ谷式土器の甕・壺・鉢形土器が伴出している。7は、第7号住居跡の覆土中より出土した小形の甕形土器の口縁部破片。有段口縁部に円形のボタン状貼付文を貼付している。有段部および口縁部に櫛歯状工具による波状文、頸部には右回りの2連止め廉状文が施文されている。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、口縁部波状文を施文している。吉ケ谷式



第194図　江南台地出土の櫛描文系土器

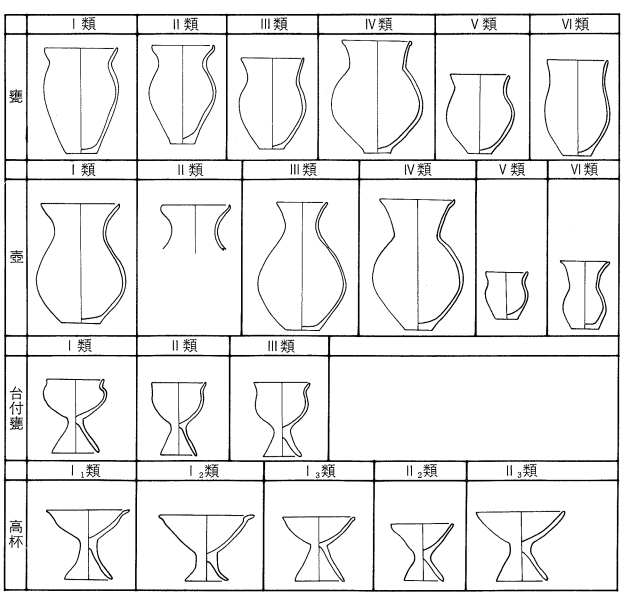
土器の甕・壺・高坏・ミニチュア形土器が伴出している。10は、第８号住居跡の覆土中より出土した小形甕形土器の胴部破片。頸部に櫛歯状工具による廉状文を施文した後、胴部に波状文を施文している。吉ケ谷式土器の甕形土器が伴出している。11は、1982年の第１次調査時に第３号古墳の周溝より出土した甕形土器。口縁はやや直線的に外反し、口唇部は内削ぎ状に成形され、胴部は球形に緩やかに膨らんでいる。口縁部および胴部上半には櫛歯状工具による波状文が、頸部には右回りの２連止め廉状文が施文されている。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、口縁部波状文を下から上へ、胴部波状文を上から下へ施文している。

江南町富士山遺跡では、後期に属する櫛描文土器が吉ケ谷式土器と伴出して住居跡より比較的まとまって確認されている。12～14は、第25号住居跡の床面より出土している。12は、小形の甕形土器。口縁部および胴部上半に櫛歯状工具による波状文、頸部に右回りの３連止め廉状文を施文している。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、口縁部波状文を下から上へ、胴部波状文を上から下へ順次施文している。櫛描文施文後、胴部中位に円形のボタン状貼付文を５単位貼付している。13は、小形の壺形土器。口唇下には櫛歯状工具による粗い波状文、胴部上半には波状文、頸部には右回りの３連止め廉状文を施文している。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、胴部波状文を上から下へ順次施文している。14は甕形土器。口縁部および胴部上半に櫛歯状工具による波状文を、頸部には右回りの３連止め廉状文を施文している。櫛描文の施文順序は、廉状文を施文した後、口縁部波状文を下から上へ、胴部波状文を不規則ではあるが上から下へ施文している。吉ケ谷式土器の甕・高坏・鉢形土器および特殊器台形土器が伴出している。15は、第26号住居跡覆土中より出土した高坏形土器。口縁部が外折しほぼ水平に開いている。脚部が中実となっているが、樽式土器に特徴的な器形と判断される。吉ケ谷式土器の壺・甕形土器が伴出している。16は、第28号住居跡のピットに設置されていた大形の壺形土器。口縁部および胴部下半を欠損している。胴部上半には櫛歯状工具による波状文が、頸部には右回り３連止めの廉状文が施文されている。17～19は、第29号住居跡の覆土中より出土した小形の甕形土器の破片。17は、有段口縁をもつ。18・19は、櫛歯状工具による右回りの廉状文を頸部に施文した後、口縁部波状文を下から上へ、胴部波状文を上から下へ施文している。吉ケ谷式土器の甕形土器が伴出している。

以上が江南台地で出土している櫛描文土器の概要である。資料的に未だ不十分ではあるが、文様には廉状文と波状文があり、ほとんどが同一工具によって施文されている。これらの土器群に施文される文様施文は、大きくは「中部高地型櫛描文」として把えられ、群馬県西部地方に分布している樽式土器の櫛描文施文技法の特徴と同一のものと判断される。

樽式土器は、近年群馬県内およびその周辺地域で急速に資料が増加しており、その型式内容およびその系列について、詳細な分析・検討が加えられてきている（飯島・若狭1985、若狭1990、佐藤1988、大木1995）。これらの中で、樽式土器について最初に型式学的に基本的な分析・検討を加えた飯島・若狭氏の編年案に準拠して、江南台地出土の櫛描文土器にていて検討を加えてみたい。

飯島・若狭編年においては、樽式土器の主要な器種について類型分類を行いその型式組列・共伴関係について検討し３期に型式細分している。器種は、



第195図　樽式土器の分類（飯島・若狭1985より）

壺形土器・甕形土器・台付甕形土器・高坏形土器・有孔鉢形土器・鉢形土器・片口形土器・蓋などで構成され、それぞれの器種は形態によりさらに分類されている（第195図）。

甕

Ⅰ類―口縁部が短く外反し、胴部上半に最大径を有するもの。

Ⅱ類―口縁部が短く内彎し、胴部上半に最大径を有するもの。

Ⅲ類―口縁部は長く、やや外傾する。頸部屈曲は弱く、胴部上位に最大径を有するもの。いわゆる寸胴形を呈するもの。

Ⅳ類―口縁部は直立気味に長く、胴部中位が強く張り、球形胴を成すもの。

Ⅴ類―口縁部は短く、胴部が強く球形化する。小形品が多い。

Ⅵ類―口縁部は長く、頸部の屈曲が非常に弱いもの。

壺

Ⅰ類―口縁部は大きく外反する。胴部中位に最大径を持つもの。

Ⅱ類―口縁部が内彎するもの。

Ⅲ類―口縁部は外反し、やや長い。口縁端部は複合口縁にほぼ限定される。胴部中位に最大径を有する。

Ⅳ類―口縁部は外傾あるいは直立気味で、やや長い。口縁端部は複合口縁にほぼ限定される。胴部中位が強く張り、球形を呈する。

Ⅴ類―小形広口で、赤彩されるもの。

Ⅵ類―いわゆる長頸壺で無文赤彩の一群。

台付甕

Ⅰ類―口縁部外反し、胴部偏球形で肩部に最大径をもつもの。台部は長く、大きく開く。

Ⅱ類―口縁部外反し、胴部球形で、口縁部径・胴部径は近接する。台部は長く、大きく開く。

Ⅲ類―口縁部やや長く、外傾する。胴部球形で最大径は口縁部にある。台部は長く、大きく開く。

高坏

Ⅰ類―口縁部が鍔状に外折するもの。

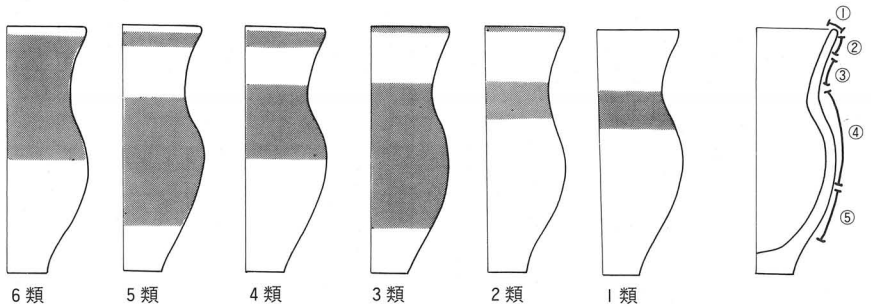
Ⅱ類―椀状のもの。

Ⅲ類―坏部が屈折して立ち上がった後外折するもの。

さらに脚部形態で、小形で裾の開きの強いもの(1)、大形で直線的に開くもの(2)、大形で裾の広がりが強いもの(3)が分類の補助項目となる。

以上が、樽式土器の各器種の形態分類である。また樽式土器の特徴として、形態の各類と文様の施文部位は、比較的限定的に組み合う傾向にある。各文様帯を第196図に示した。施文部位を①口唇部、②口縁端部、③口縁部、④頸部から胴部上半、⑤胴部中位から下位とし、各施文部位の組み合わせにより、1類―④のみ、2類―①+④、3類―①+④+⑤、4類―②+④、5類―②+④+⑤、6類―②+③+④となる。

姥ヶ沢遺跡第4号住居跡8の甕は、形態分類Ⅳ類に属し、②③④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類6類に属する。



第196図　櫛描文系土器文様帯分類（飯島・若狭1985より）

姥ヶ沢遺跡第７・８号住居跡の小形甕は、形態分類Ｖ類に属し、②③④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類６類に属する。

富士山遺跡第25号住居跡12の甕は、形態分類IV類に属し、②③④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類６類に属する。14の甕は、形態分類VI類に属し、②③④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類６類に属する。13の壺は、形態分類IV類に属する。口縁端部に痕跡的に波状文が施文されており、②④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類４類に属する。

富士山遺跡第26号住居跡15の高坏は、口縁部形態から中期末葉の栗林式系土器の系統上にあるものと考えられる。坏部と脚部の連結部が中実となっているものの、形態分類Ⅰ－２類に属する。

富士山遺跡第28号住居跡16の大形壺は、口縁部・胴部下半を欠損するが、形態分類III類に属し、④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類１または６類に属する。

富士山遺跡第29号住居跡17～19の小形甕は、形態分類Ｖ類に属し、②③④文様帯に波状文・廉状文を施文することから、文様分類６類に属する。

甕形土器のIV－６類・Ｖ－６類・VI－６類、壺形土器のIV－４類は樽３期の特徴であり、高坏形土器Ⅰ２類、壺形土器III－１・６類は樽２期の特徴である。したがって、富士山遺跡第26・28号住居跡は樽２式期、姥ヶ沢遺跡第４・７・８号住居跡、富士山遺跡第25・29号住居跡は樽３式期に比定されるものと考えられる。

江南台地における吉ケ谷式土器について

江南台地においては、1990年代に入り、発掘調査の増大に伴い吉ケ谷式期の集落跡の調査事例が増えつつある。しかし、集落跡をほぼ全体調査したと考えられるのは川本町白草遺跡だけであり、今回報告された姥ヶ沢・富士山遺跡は比較的規模の大きな集落跡と考えられるが、集落の一部を調査したにすぎない。該期の集落構造の解明には未だ事例の増加を待つ必要があると考えられる。ここでは、集落変遷の基礎的資料を得るために、姥ヶ沢・富士山遺跡および白草遺跡出土土器を形態分類し、その変化を検討することとする。

吉ケ谷式土器の器種は、主に甕形土器・壺形土器・高坏形土器・鉢形土器・甑形土器で構成される。各器種間のセット関係は、各遺構の遺物出土量が少なく明確ではないが、甕形土器が各遺構で比較的安定的に検出されており、編年の基準となるものと考えられる。甕形土器の変遷は、胴部の張り出しに伴って頸部の外反度の強化という変化の方向性で把えられることが既に指摘されている。しかし、その変遷は漸移的であり、その明確な細分画期は個々の資料では把えにくい面もある。ここでは、白草遺跡での器形分類を参考にその分類を試みてみた(第197図)。

甕

Ａ類―頸部の括れが弱く、胴の張りが弱い、いわゆる寸胴形を呈するもの。小形のものが多い。

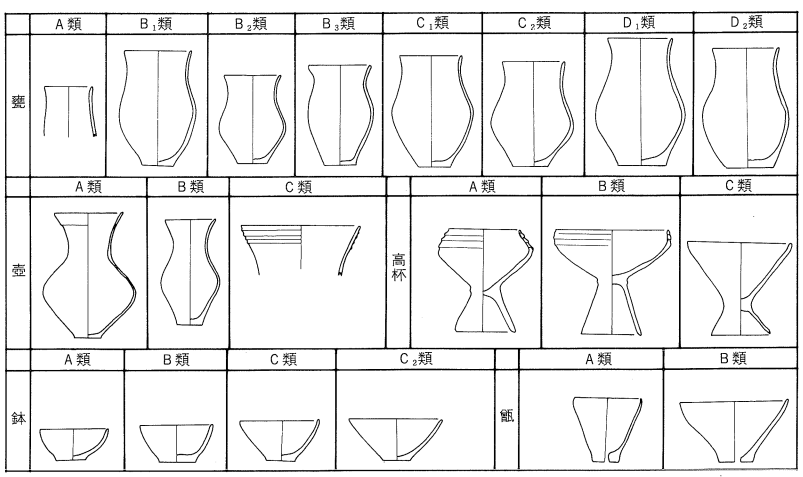
Ｂ類―胴部の張りが強く、頸部から口縁部にかけて外反するもの。

１　やや大形で頸部の外反度が小さいもの。

２　頸部の外反度が多きいもの。

３　頸部が上位で強く外反するもの。

Ｃ類―胴部の張りが強く頸部が直立気味に口縁部に移行するもの。口径が胴部最大径よりもか



第197図　吉ヶ谷式土器の分類

なり小さい。

1　やや大形のもの。

2　小形のもの。

D類―胴部の張りが強く頸部は直立気味または直線的に傾斜し口縁部が僅かに外反するもの。

1　大形のもの。

2　やや小形のもの。

壺

壺形土器は全体の器形が判るものが少なく、口縁部の形態と装飾帯によって分類しているが、各類は胴部の張り具合によりさらに細分される可能性がある。

A類―素口縁で痕跡的な輪積痕が残り、縄文施文されるもの。

1　幅広いもの

2　幅狭いもの

B類―複合口縁で縄文施文されるもの。

1　折り返しまたは貼付により口縁部を作出するもの。

2　輪積痕利用により複合口縁状にするもで、縄文施文されるもの。

C類―輪積痕利用の突帯状口縁のもの。

1　突帯上に刻みを持つもの。

2　無文のもの。

高坏

A類―突帯状口縁のもの。

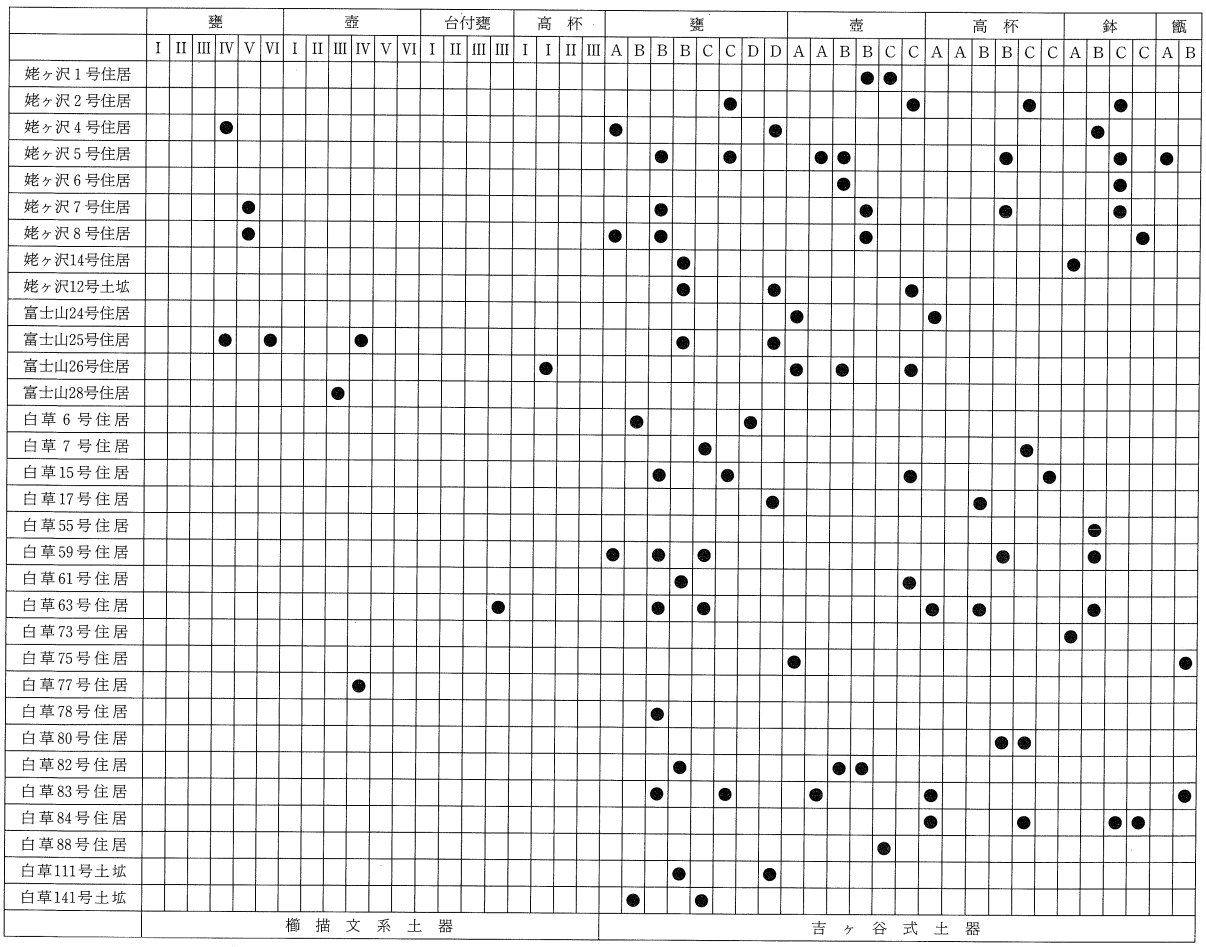
1　輪積痕利用によるもので口縁が内湾するもの。

2　粘土紐貼付によるもの。

B類―輪積痕利用による口縁をもつもので、体部は直立気味に立ち上がるもの。

1　大形のもの。

第71表　櫛描文系土器・吉ケ谷式土器遺構伴出関係表



２　小形のもの。

C類

１　素口縁で口唇部は直立するもの。

２　ミニチュア

鉢

A類―体部は内彎して立ち上がり、底部がやや突出するもの。内外面のミガキは顕著でない。

B類―体部は内彎気味に立ち上がり、内外面にミガキが施されるもの。

C類―体部が大きく開き底部が小形で、内外面ともミガキが施されるもの。

１　口唇部が直立するもの。

２　そのまま開くもの。

甑

A類―やや大形の底部で、体部の開くが大きく鉢形を呈するもの。

B類―小形の底部で、体部の開きが小さく縦長のもの。

以上が吉ケ谷式土器の分類基準である。甕形土器を基準として分類相互の関係について概観してみると、姥ヶ沢遺跡第４号住居跡でA類とD2類の甕が、第５号住居跡でB2類とC2類の甕が、第８号住居跡でA類とB2類の甕が、第12号土坑でB3類とD2類の甕が、富士山遺跡第25号住居跡でB3類とD2類の甕が伴出している。

B類の甕は、先の胴部の球胴化と口縁部の明確化の器形変化の方向性により、理論的にB１類→B２類→B３類と変化することが想定され、このことは、川本町白草遺跡（磯崎1992）においても確認されている。B2類は、姥ヶ沢遺跡第５号住居跡においてC２類と、姥ヶ沢遺跡第８号住居跡においてA類と伴出しており、B3類は、姥ヶ沢遺跡第12号土坑、富士山遺跡第25号住居跡においてD2類と伴出している。姥ヶ沢遺跡第７号住居跡では、B2類が、姥ヶ沢遺跡第２号住居跡ではC2類が単独で出土しており、姥ヶ沢遺跡第４号住居跡ではD2類がA類の甕と伴出している。B類の甕を基準に両遺跡をみると、（姥ヶ沢遺跡第２・５・７・８号住居跡）→（姥ヶ沢遺跡第４号住居跡・富士山遺跡第25号住居跡）の変遷が考えられる。

姥ヶ沢・富士山・白草遺跡出土の、櫛描文系土器・吉ケ谷式土器を、先の分類基準で住居跡ごとに纏めたのが第71表である。姥ヶ沢遺跡第５号住居跡と白草遺跡第15号住居跡の甕の構成がB2類とC2類であり同一段階に属しているものと考えられる。また、姥ヶ沢遺跡第４号住居跡と白草遺跡第111号土坑の甕の構成がB3類とD2類であり同一段階に属しているものと考えられる。

櫛描文系土器との関係は、姥ヶ沢遺跡においては、第７号住居跡においてB2類の甕と樽３式土器（甕Ⅴ―６類）が、第８号住居跡においてA・B2類の甕と樽３式土器（甕Ⅴ―６類）が、第４号住居跡においてA・D2類の甕と樽３式土器（甕Ⅳ―６類）が、富士山遺跡においては、第25号住居跡においてB3・D2類の甕と樽３式土器（甕Ⅳ―６類、甕Ⅵ―６類、壺Ⅳ―４類）が伴出している。富士山遺跡第26号住居跡からは、樽２式期と推定される高坏形土器が出土している。

以上の事を纏めると、｛白草遺跡第６号住居跡・第141号土坑、富士山遺跡第26・28号住居跡（甕B1・C1・D1類）（樽２式高坏Ⅰ―２類・壺Ⅲ―６類）｝→｛白草遺跡第15・59・63・83号住居跡、姥ヶ沢遺跡第２・５・７・８号住居跡（甕A・B2・C1・C2類）（樽３式甕Ⅴ―６類）｝→｛白草遺跡第82号住居跡・第111号土坑、姥ヶ沢遺跡第４号住居跡・第12号土坑、富士山遺跡第25号住居跡（甕A・B3・D2類）（樽３式甕Ⅳ―６類・甕Ⅵ―６類・壺Ⅳ―４類）｝の３段階の変遷が確認できることになる。また、姥ヶ沢遺跡第14号住居跡35の甕（第58図）は、器形が小形化しており、胴部は球胴化しており、縄文の施文も不規則で粗くなっており、台付甕等主体となる伴出している土器群の様相からも、既に五領式期に入っているものと判断される。いわゆる「吉ケ谷式系土器」（柿沼1996）と判断されるもので、吉ケ谷式土器の系譜を引く土器である。

甕形土器以外の器種の変遷については、当地域においては、未だ資料不足であり、具体的な変遷過程を把えることは難しい。

壺形土器は、各段階でA・B・C類が認められており、各類のなかで器形および成形技法により、今後さらに時期細分していく必要がある。変化の方向性としては、甕形土器と同様に胴部の張りと口縁部の外反度の強化として把えられる。富士山遺跡第26号住居跡の壺形土器は（第162図1・3）、胴部の張りが弱く口縁部の外反度も弱く、特に3の壺は、胴部の縄文施文下部にハケメを一部残しており、比較的古相を呈しているものと考えられる。また、姥ヶ沢遺跡第12号土坑の壺（第84図24）は、頚部が短く、屈曲度が強いことから新しい様相を呈しているものと考えられる。

高坏形土器は、甕形土器が小形化する傾向にあるのに対し、大形化する傾向がある事が指摘されている。具体的な基準はないが、本地域の高坏形土器は比較的大形品が多いことから、比較的新しい時期に属するものと判断される。また、C類が新しくなると増加する傾向が深谷市明戸東遺跡で確認されているが(磯崎1989)、本地域においては明確な増加は確認できていない。

鉢形土器は、具体的な変化を把えることはできなかった。姥ヶ沢遺跡においては、1類が主体を占めており、比較的安定した器種となっている。

甑形土器は、姥ヶ沢遺跡第5号住居跡と白草遺跡第75・83号住居跡において出土しているだけであり、具体的な変化を把えることはできなかった。器種構成のセットに安定的に存在していた可能性は低いものと考えられる。

最後にこれらの土器群の編年的位置付けについて若干検討してまとめとしたい。

本地域から比企丘陵にかけては、縄文施文の「吉ケ谷式土器」と、櫛描文施文の「岩鼻式土器」及び客体的存在としての「樽式土器」が存在し、その型式研究が進み、一定の変遷がとらえられる状態となっている。しかし、その祖型や終末期の土器群の扱い、「吉ケ谷式土器」と「岩鼻式土器」との間の時間的関係、「岩鼻式土器」と「樽式土器」との様式分離の問題等があり、未だ不明な点が多い状態である。これらの研究史については、大塚（大塚1982）・小出（小出1996）両氏の論考に詳しいのでここでは触れない事とする。

櫛描文土器については、先に検討したように江南台地においては全て「樽式土器」の範疇で把えられるものである。樽2式土器が、僅かに富士山遺跡で出土している他は全て樽3式期に属するものである。「岩鼻式土器」とされる特徴をもった土器は、現在のところ確認されていない。これは、「岩鼻式土器」が盛行する樽2式期における遺構の検出数が少ない事に起因する可能性も残るが、やはり本地域においては、「岩鼻式土器」は存在していない可能性のほうが高いものと考えられる。既に、児玉地方における櫛描文土器は全て樽式土器である事が確認されており、「岩鼻式土器」は、比企丘陵という非常に限られた地域に、短時期に成立していた様式となり、その諸特徴とともに、あえて一様式を設定する積極的な根拠を見出せ得ないのが現状である。

吉ケ谷式土器は、本地域においては3段階の変遷が確認されたが、従来の編年（柿沼1981）に照らし合わせるならば、第1段階(白草遺跡第6号住居跡・第141号土坑、富士山遺跡第26・28号住居跡）が吉ケ谷IIａ式に、第2段階（白草遺跡第15・59・63・83号住居跡、姥ヶ沢遺跡第2・5・7・8号住居跡）が吉ケ谷IIｂ式に、第3段階（白草遺跡第82号住居跡・第111号土坑、姥ヶ沢遺跡第4号住居跡、富士山遺跡第25号住居跡）が吉ケ谷III式に比定されよう。樽式土器との関係は、第1段階（吉ケ谷IIａ式）が樽2式、第2段階（吉ケ谷IIｂ式）・第3段階（吉ケ谷III式）が樽3式と併行関係にあることが窺える。

本地域においては、現在のところ弥生時代後期前葉（吉ケ谷Ⅰ式土器）に位置付けられるものが未発見である。これは、児玉地方においても同様の傾向が認められており(恋河内1990)、吉ケ谷式土器の出自の様相については不明である。比企・入間地方で吉ケ谷式土器の古い段階の資料が出土していることから、宮ノ台式土器から成立した吉ケ谷式土器の北上説も考えられているが、吉ケ谷式土器の出自は、現在では熊谷市池上遺跡（中島1984）で須和田式土器に伴って出土した縄文施文の甕4類に求められるようである（富田・中村1986、小出1996)。今後、池

上甕４類に後続する良好な資料が熊谷市を中心とした低地部分で出土すれば、その出自系統は解明されるものと思われる。

以上、江南台地出土の樽・吉ケ谷式土器を中心に若干の検討を加えてみたが、その出自・変遷、両様式および岩鼻式土器・赤井戸式土器との関係等、本地域出土土器の検討のみで解決できるものではない。今回は、筆者の力量不足により江南台地に限って検討を加えてみたが、今後、資料の増加を待ちつつ、先の課題についての検討を加えてみたいと考える。

（森田安彦）

第2節　姥ヶ沢埴輪窯跡出土遺物の基礎的検討

はじめに

姥ヶ沢埴輪窯跡では8基の埴輪窯が検出され、多量の埴輪破片と少量の土師器の出土をみた。本文はこれら姥ヶ沢埴輪窯跡B地点（以下B地点と略）出土遺物について若干の分析を試みたい。

(1)　円筒埴輪の検討

①　製作工程の検討

本節では円筒埴輪で観察された製作時の成整形痕を基に、円筒埴輪の製作工程の復元を行う。

検討にあたっては、遺存状態の良好な2条突帯3段構成の普通円筒埴輪を扱う。

まず粘土帯を円筒化し、底部の成形を行う。この粘土帯を暫定的に底部粘土帯と呼称するが、全周の確認される底部は全て1枚の底部粘土帯によって成形されている(荻野1984)。また、この底部粘土帯にはその幅から大きく2群が存在する。幅7㎝程度の幅広な底部粘土帯と、幅3㎝程度の幅狭な底部粘土帯である。そして幅広の底部粘土帯を用いた底部成形は大半の個体で確認される。また、幅広の底部粘土帯には、作業台密着痕（犬木努1995）の観察される例が散見される。

胴部以上の成形には幅3㎝程度の粘土帯(粘土紐)を用いており、適度な乾燥を行いつつも、短時間で行われている。

粘土紐による成形の際には、内外面に残される粘土紐の痕跡を解消すべく、調整が加えられる（成形時調整)。外面の成形時調整は、最終的に加えられる調整（以下最終調整と略）である縦位のハケ（以下縦ハケと略）によって消去されてしまい、一切を不明としている。しかし内面の場合、最終調整が不完全な場合や最終調整を欠落する場合も多く、成形時の調整を確認し易い。内面における成形時調整は、観察可能な資料の大半が縦・斜位のナデに限られており、確実にハケ調整と考えられる事例は少ない。ハケ調整の場合もナデ同様に縦・斜位の場合が多い。

円筒本体の外面における最終調整は、縦ハケによっており、B種横ハケ等の2次調整は認められない。外面の縦ハケ調整は、底部から口縁部まで工具が器面から離れず一回で行う場合と、胴部中位を境に二段階に分けて行う場合の2パターンが認められる。

内面の最終調整は、成形時調整を完全に消すこと無く加えられており、その種別や加えられる範囲によって複数のパターンが存在している。

代表的なパターンとしては、口縁部内面に斜位のハケ（以下斜めハケと略）による調整が加えられる場合や、口縁部内面に斜めハケによる調整を加えた後に底部内面から口縁部内面の下位まで縦ハケによる調整を加える場合、或いは底部内面から口縁部内面に至るまで全て斜位のナデによって調整される場合などである。これら内面調整の在り方は極めて多様性に富んでいる。

口唇部の最終調整は内外面最終調整に先行するものが皆無であり、両部分の最終調整の前後関係に例外はない。口唇部の調整手法には、布等を用いたものと思われるナデの場合（口唇部横ナデA手法）と、工具を併用したナデ調整の場合（口唇部横ナデB手法）の、大きく2類の存在を確認している。

口唇部横ナデA手法は、口唇部の端面と内外面を同時に調整しており、布・獣皮を用いるものと思われる。全体に不整形な断面形状を呈し、ナデに伴う条線は平行関係を保ち得ず不均一・不明瞭である。

口唇部横ナデB手法は、木口状工具を併用したもので、木口状工具と布ナデの組み合わせや順序から、細分の可能性をもつ。一般的には、口唇部外面に木口状工具、口唇部内面に布等を用いたナデ調整を同時に加えた後に、口唇部端面に木口状工具で調整を加えている。口唇部外面の調整は木口状工具を添える程度のものであるため、結果的に口唇部外面の調整は甘くなる。比較的入念な調整であり、口唇部横ナ

デＡ手法よりも古様を示す手法と考えられる。全体に整った断面形状を呈しており、ナデに伴う条線は均一・明瞭で平行関係を保っている（第198図参照）。

口唇部の調整に相前後して、突帯の貼付・調整が行われる。突帯は器壁に粘土紐を貼付し、横位の調整を加える事で成形しており、断面形状は粘土の分量と調整手法によって規定される（犬木努1995）。

姥ヶ沢Ｂ地点出土の円筒埴輪において、沈線や刺突等で突帯位置を限定する技法（赤塚1979）を認める個体はない。しかし突帯間長が酷似した値を示す個体が複数存在している点から、何らかのスケールを用いて突帯を割り付けていると考えられる。

粘土紐貼付方法の痕跡は、大半が後に加えられる調整によって不明となる。しかし、突帯下面の調整がやや甘い部分が波打つ例がみられることから、指頭による連続的な押圧によって、粘土紐を器壁にいわば圧着させていたことがうかがわれる（第198図参照）。

突帯の調整手法は口唇部の調整手法同様、Ａ・Ｂ二者に大別可能である。

突帯横ナデＡ手法は布・獣皮等によると思われる、横位のナデ調整のものを一括した。突帯の上・下・側面の各面を個別に調整しており、突帯の断面形状は不整形なものが多い。そして、調整に伴う条線は不均一・不均等なものである（第199図参照）。

突帯横ナデＢ手法は木口状工具を用いた横位のナデ調整のものを一括しており、多くは木口状工具による強い横ナデの後に、指頭・布等による弱い横ナデを部分的に加えたものである（第199図参照）。

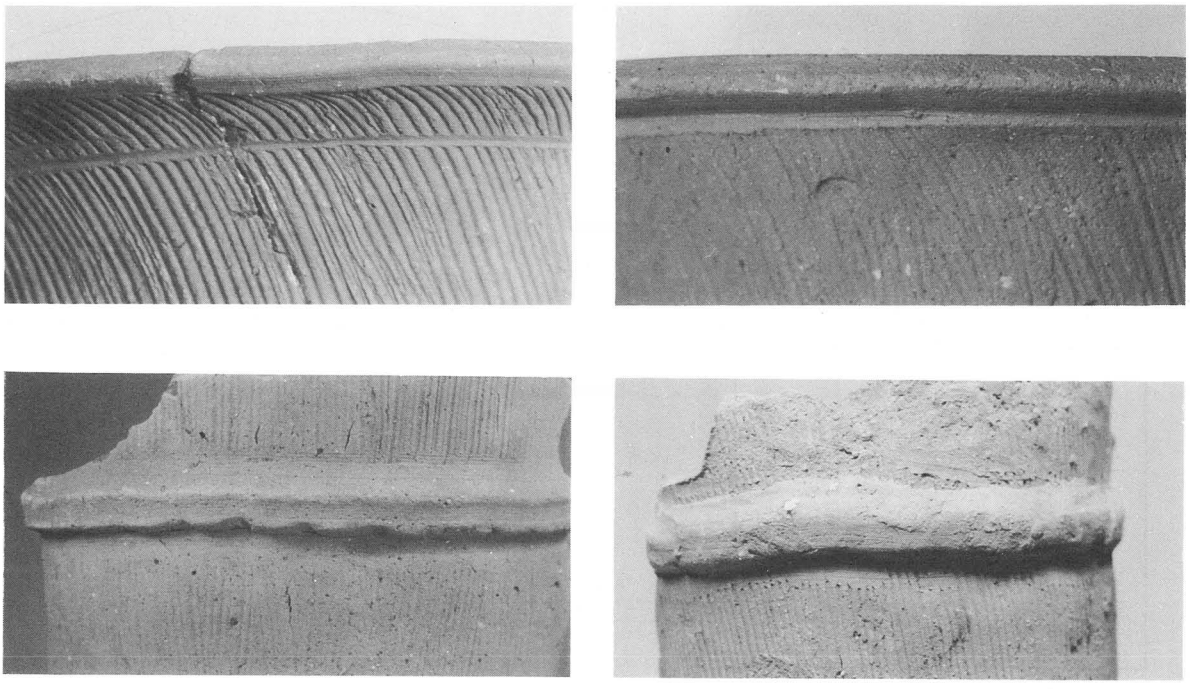
最後に透孔を刳り貫いている。胴部に概ね対向するように一対刳り貫かれており、その形状は大半が円形を呈する。しかし少量ではあるが、半円形やハート形も存在している。また透孔を刳り貫いた後に、調整を加えている例も僅かに認められた。

そして、口縁部中位に小さな円孔（小穿孔）を一カ所刳り貫く場合もあり、透孔とは概ね90°違える。線刻（ヘラ記号）が施文される個体も存在している。線刻は内外の両面に認められ、透孔との位置関係や文様意匠から分類が可能である。詳細な検討は次節において行う。

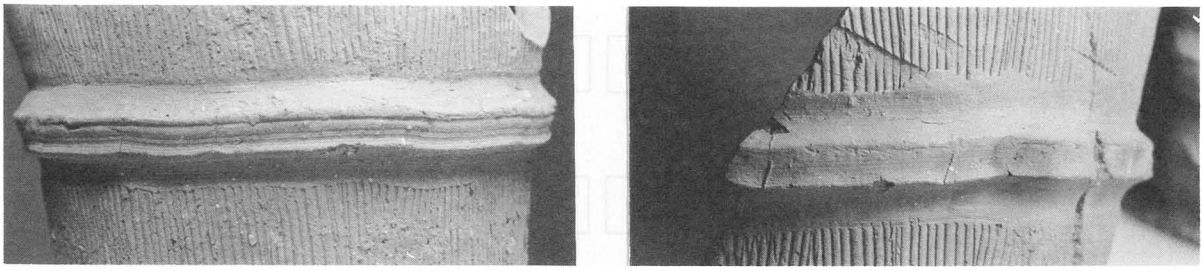
②　諸要素の分析

ａ　普通円筒埴輪に見られる線刻

Ｂ地点より出土した円筒埴輪で、線刻が確認されたものは普通円筒埴輪に限られる。普通円筒埴輪の出土総量と比較した場合、線刻をもつ埴輪の割合は少ない。また一つの窯に集中するような傾向もな



第198図　円筒埴輪に観察される各手法(1)



第199図　円筒埴輪に観察される各手法(2)

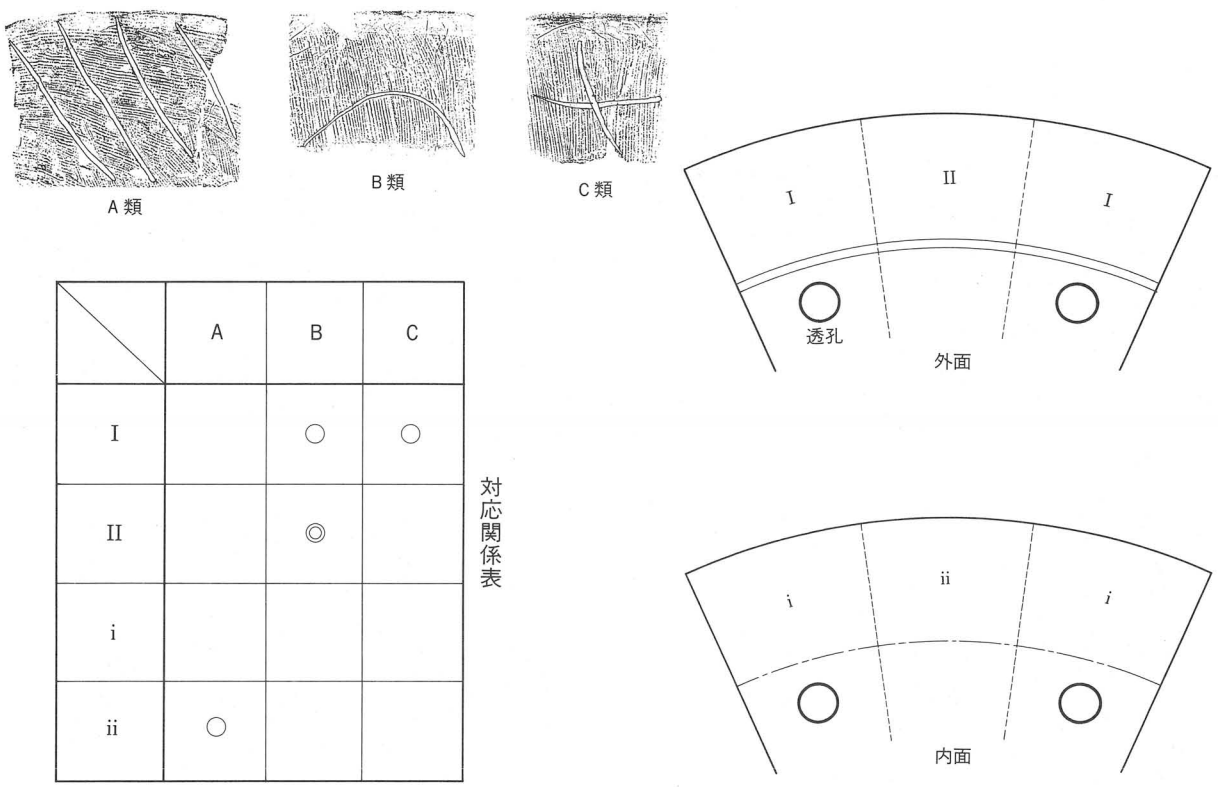
かった。

B地点において確認された線刻には、大きく分けてA～C類の3種類が確認される。A類が併行斜線、B類は弧線、C類は斜十字線である。各類は口縁部に施文しており、A類が内面に施文されるのに対してB・C類は外面に施文している。各類の位置関係は第200図に示した。

ここでは、線刻A・B類をもつ普通円筒埴輪を用い、線刻C類をもつ普通円筒埴輪については、良好な資料が得られなかったため割愛した。なお、共通意匠の線刻をもつ円筒埴輪を扱った先行研究としては、山崎武氏による生出塚埴輪窯跡の埴輪群を用いた研究（山崎武1994）があり、本節における分析の参考とさせていただいた。

1号窯で線刻A類の普通円筒埴輪には、№14・21・60・63・71の5個体がある（第201図参照）。これら5個体の線刻位置は、口縁部内面に限られる点で共通した属性（共通属性）を有する。線刻を施文する際に用いられる工具（以下施文具と呼称）も、線刻の沈線断面の形状等の類似性から、同一の施文具を使用する可能性がある。形態・手法においては、以下に示す4点の共通属性を掲げる。

1　内面調整手法が酷似する。
2　調整に用いられるハケ目状工具が、年輪パターンや断面形状から同一であると判断される。
3　均等な器厚を有し、薄手に仕上げられる。
4　口唇部の断面形状が互いに酷似し、全ての調整は口唇部横ナデB手法である。



	A	B	C
I		○	○
II		◎	
i			
ii	○		

対応関係表

第200図　線刻意匠、位置分類図

共通属性１は「製作者の癖」レベルにおいて、共通する可能性が高い。なお共通属性２・３も共通属性１同様、「製作者の癖」の許容範囲として良い。共通属性４については、１製作者１工具であるならば、製作者個人に帰する属性と考える。

以上の点をもって、線刻意匠・位置と形態・手法において認められた共通属性の相関性は、製作者個人に起因すると考えられ、１号窯から出土した線刻Ａ類をもつ普通円筒埴輪群は、同一製作者によって成整形が行われた可能性が高い。

１号窯において確認された線刻Ｂ類をもつ普通円筒埴輪は、№3・6・8・22・23・78の６個体である（第201図参照）。これら６個体の線刻位置は外面に限られているが、透孔との位置関係では№8がⅡゾーンに施文される一方で、他の５個体はややⅡゾーン寄りのⅠゾーンに施文されており、２グループの存在が確認される。

線刻の施文具は、№8が他の個体と異なる様で、２種類の形状を異にした施文具を用いている可能性は高い。

形態・手法については、№8を除いた５点において、Ａ類の線刻をもつ資料群と同様の共通属性である。共通属性のない№8は、Ａ類の共通属性１・２とした二点において相異している。つまり形態・手法においても、線刻位置と同様に２グループの存在が確認される。

線刻Ｂ類をもつ円筒埴輪群の線刻意匠・位置と形態・手法の各属性間に共通性がない。したがって、線刻Ｂ類をもつ円筒埴輪群は、複数の製作者によって成整形が行われたと考えられる。

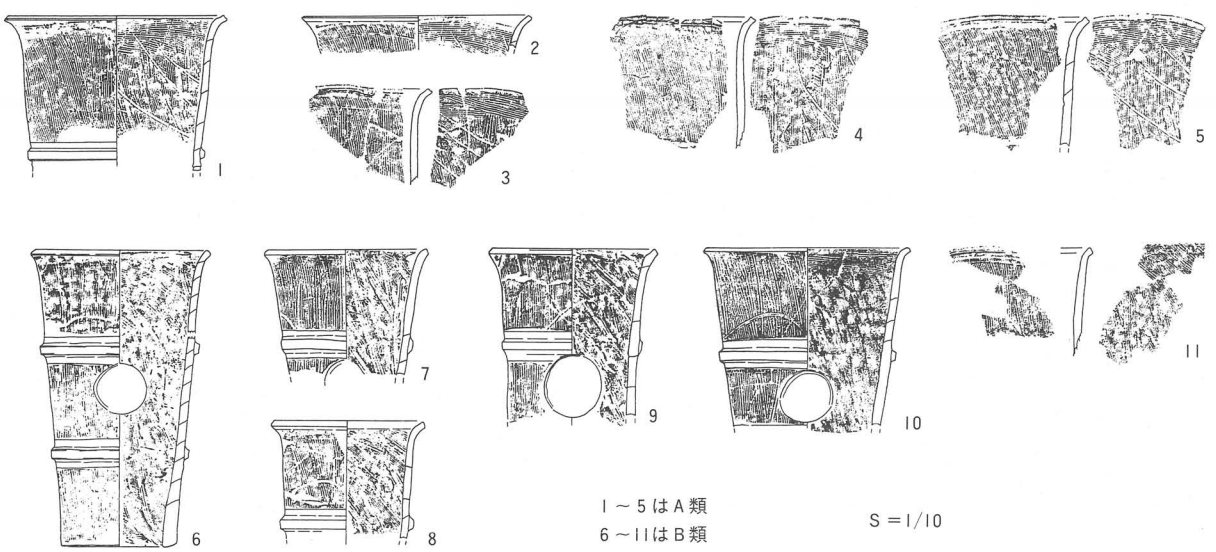
普通円筒埴輪の線刻には、同一製作者によって成整形が行われたものに限って同一意匠の線刻を施文する場合と、複数の製作者によって成整形が行われたものに共通意匠の線刻を施文する場合の、２通りの施文形態を想定できる。

同一製作者によって成整形が行われた円筒埴輪の線刻が内面に限られ、複数の製作者によって成整形が行われた円筒埴輪の線刻が外面に限られると言う現象は、おそらく線刻に付加された性格の本質的な相違に起因すると考えられる。

内面に線刻をもつ場合、古墳に樹立された際に線刻の存在を認知することは難しいであろう。内面の線刻については、必要に応じて見るものであり製作者のサインのような性格を有することが推定されている（山崎武1994など）。

一方で外面の線刻については、その存在は認知され易い。この事から少なくとも外面の線刻については、「見せる」意識が働いていた埴輪の線刻には除魔・辟邪の意識が反映されると言う指摘（辰巳和弘1992）によれば、「見せる」事を意識した外面の線刻は、呪術的な意味があった可能性がある（註１）。

以上、Ｂ地点出土円筒埴輪の線刻には先述した２



第201図　姥ヶ沢Ｂ地点第１号埴輪窯跡出土の線刻をもつ円筒埴輪

通りの施文形態が存在する。

b　口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪

B地点1号窯において出土した円筒埴輪の中には、口縁部に透孔とは異なった円形の小穿孔(註2)をもつ資料が確認された(第92図-No.1)。同様の事例について、1987年に南雲芳昭氏が群馬県の事例を中心に集成検討が加えられている。南雲氏の集成以降、発掘調査の増加と共に類例は増加の一途を辿り、1996年には田村孝氏によって追加がなされた（田村孝1996)。

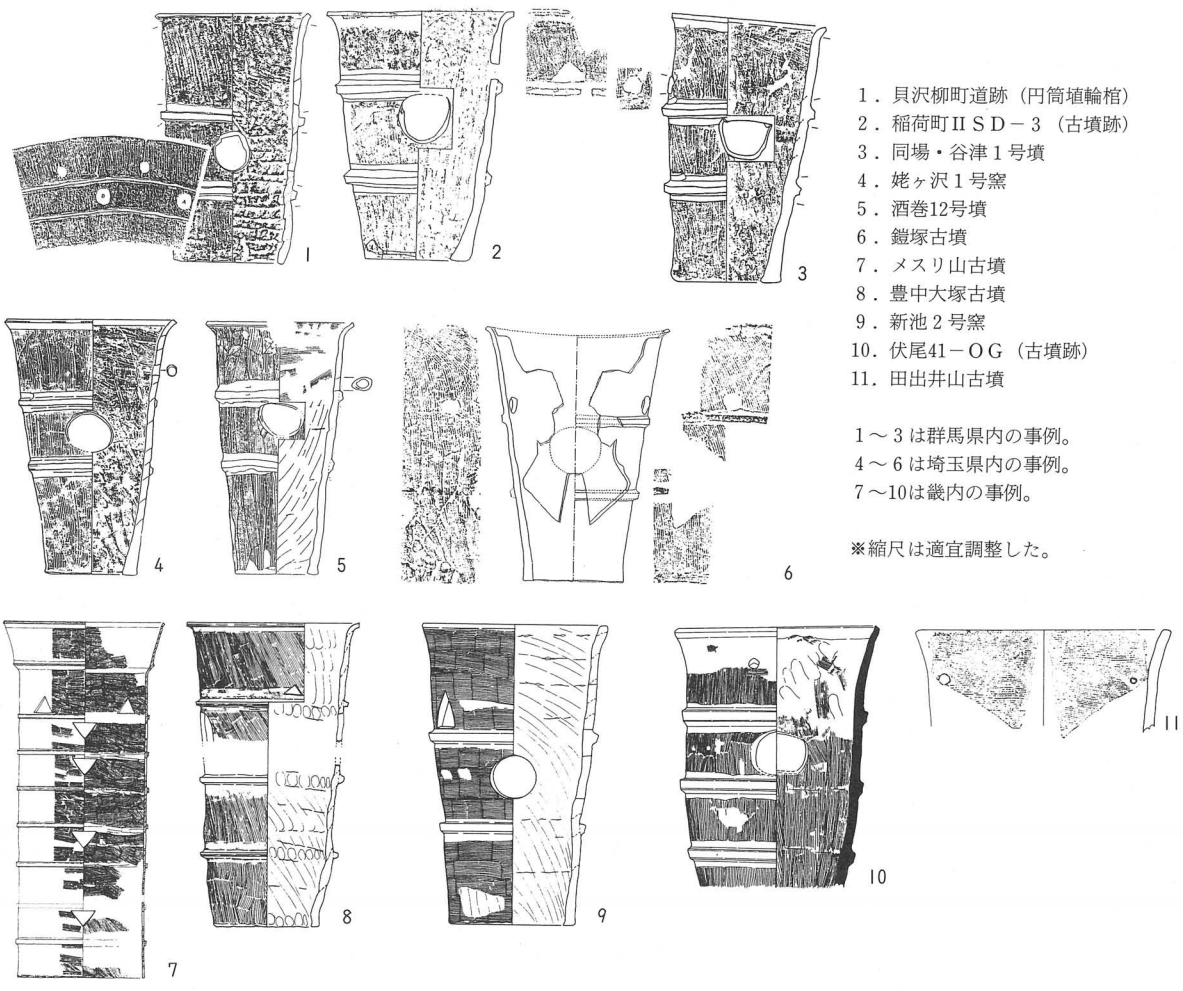
本節では以上の先学による集成に加え、関東地方で34遺跡の事例を集成するに至った。集成の対象とした資料は、口縁部に透孔よりも小さい孔[小穿孔]をもつ円筒埴輪に限り、胴部や底部の事例は対象外とした。集成の結果は第72表に示す通りである。

関東地方における、口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪の分布は、群馬県（上毛野）から埼玉県（北武蔵）にかけての利根川中流域に集中し、現状では下毛野・常陸等においては確認されていない。関東地方以外では、奈良県［大和盆地］で5例、大阪府［河内平野］で4例・三重県［伊勢湾西部］で1例確認され、畿内と周辺地域にその分布が限られる点は興味深い。

A類　透孔と直角に違えて2箇所1対で穿孔するものを一括する。形態には径3cm程度の円形、高さ5cm程度の縦長上半円形がある。

B類　透孔と直角に違え、1箇所のみ穿孔するものを一括した。形態には径1.5～3cmの円形、高さ3cm程度の三角形・上半円形がある。

C類　透孔の斜め上方等に1箇所のみ穿孔するものを一括した。形態は径 1.5cm程度の円形に限られる。



1．貝沢柳町道跡（円筒埴輪棺）
2．稲荷町IIＳＤ－3（古墳跡）
3．同場・谷津1号墳
4．姥ヶ沢1号窯
5．酒巻12号墳
6．鎧塚古墳
7．メスリ山古墳
8．豊中大塚古墳
9．新池2号窯
10．伏尾41－ＯＧ（古墳跡）
11．田出井山古墳

1～3は群馬県内の事例。
4～6は埼玉県内の事例。
7～10は畿内の事例。

※縮尺は適宜調整した。

第202図　口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪

第72表　口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪の集成

No.	遺跡名	所在地	遺跡の性格	穿孔分類	年代	備考	参考文献
1	貝沢柳町遺跡	群馬県高崎市	埴輪棺	A類	５C	川西II期？	久保泰博他1986
2	稲荷町II遺跡	群馬県高崎市	帆立貝形？	B類	５C後半	ＦＡ	田村孝1996
3	高崎情報団地遺跡	群馬県高崎市	古墳群		５C後半		志村哲氏御教示
4	長瀞西２号墳	群馬県高崎市	古墳群	B類	５C後半		田村孝・黒田晃氏御教示
5	少林山台３号墳	群馬県高崎市	小円墳	B類	５C後半		飯塚誠他1993
6	同場・谷津１号墳	群馬県高崎市	帆立貝形	B類	５C後半	ＦＡ	田村孝1989
7	同場・谷津２号墳	群馬県高崎市	帆立貝形？	B類	５C後半	ＦＡ	同上
8	行幸田山Ａ区３号墳	群馬県渋川市	小円墳	B類	５C後半	ＦＡ	大塚昌彦他1987
9	芳賀西部団地29号墳	群馬県前橋市	小円墳	C類	５C後半	ＦＡ	井野誠一1991
10	上縄引遺跡	群馬県前橋市	埴輪棺	A・B類	５C後半		飯塚誠他1981
11	舞台１号墳	群馬県前橋市	帆立貝形		５C後半	ＦＡ	志村哲氏御教示
12	今井神社古墳	群馬県前橋市	前方後円墳	B類	５C中葉	B種横ハケ	南雲芳昭氏御教示
13	白藤Ｐ－１号墳	群馬県粕川村	小円墳	C類	５C末	ＦＡ？	小島純一1989
14	白藤Ｖ－２号墳	群馬県粕川村	小円墳	B類	５C中葉	TK208FA	同上
15	白藤Ｖ－４号墳	群馬県粕川村	小円墳	B類	５C後半	ＦＡ	同上
16	白藤Ｙ１－５号墳	群馬県粕川村	小円墳	A類	５C中葉	FAB種横ハケ	同上
17	宮貝戸２号墳	群馬県伊勢崎市	小円墳	B類	５C中葉	B種横ハケ	須長泰一氏御教示
18	丸塚山古墳	群馬県伊勢崎市	帆立貝形	B類	５C中葉	B種横ハケ	永井智教1996
19	下淵名10号墳	群馬県境町	小円墳	B類	５C後半	ＦＡ	右島和夫他1991
20	石田川遺跡	群馬県太田市	古墳址？		５C？		松島栄治1968
21	長沖古墳群	埼玉県児玉町		A類	５C前半	川西II期	菅谷浩之他1980
22	東五十子10号墳	埼玉県本庄市	小円墳	B類	６C初頭		太田博之氏御教示
23	酒巻12号墳	埼玉県行田市	小円墳	B類	６C前半		塚田良道他1987
24	大稲荷１号墳	埼玉県行田市	円墳	C類？	５C末	ＴK47	栗原文蔵1974
25	埼玉５号墳	埼玉県行田市	小円墳	C類？	６C中葉		杉崎茂樹1988
26	新屋敷13号古墳	埼玉県鴻巣市	小円墳	C類？	６C前半		田中正夫1994
27	新屋敷58号墳	埼玉県鴻巣市	小円墳	B類	５C末		大谷轍氏御教示
28	新屋敷60号墳	埼玉県鴻巣市	帆立貝形	B類	５C末	ＴK47	同上
29	鎧塚古墳	埼玉県熊谷市	帆立貝形	B類	５C後半	ＴK23	寺社下博1981
30	姥ケ沢１号窯	埼玉県江南町	埴輪窯跡	B類	６C前半		本報告
31	下道添１号周掘	埼玉県東松山市	小円墳	B類	６C初頭		渡辺久生1981
32	権現塚古墳	埼玉県東松山市	帆立貝形？	B・C類	５C後半	TK208FA	江原昌俊氏御教示
33	側ヶ谷戸貝塚２号墳	埼玉県大宮市	小円墳	B類	６C前半		笹森紀己子他1997
34	登山古墳	神奈川県厚木市	円墳	C類	６C中		今津節生1992
35	メスリ山古墳	奈良県桜井市	前方後円墳	A類	４C後半	特殊円筒	伊達宗泰他1977
36	赤井谷横穴	奈良県奈良市	横穴棺床材	B類	５C初頭	川西II期	千賀久他1978
37	中曽司町出土品	奈良市橿原市		C類	６C前半		永井実見
38	大塚古墳	大阪府豊中市	円墳	B類	５C初頭	川西II期	柳本照男他1987
39	新池２号窯	大阪府高槻市	埴輪窯跡	B類	５C中葉	B種横ハケ	森田克行他1993
40	陶邑・伏尾41-OG	大阪府堺市	小方墳	C類	５C後半	TK23B種横ハケ	岸本道昭他1990
41	田出井山古墳	大阪府堺市	前方後円墳	C類？	５C後半	B種横ハケ	増田達彦1990
42	西岡古墳	三重県津市	円墳	C類？	５C後半	B種横ハケ	中村光司1995

なお集成資料を各類に対応させると、A類が4例B類が21例、C類が2例で帰属不明なものは7例あるが、うち3例はその穿孔の形態からC類である可能性が高いものである。

次に各類の前後関係の検討を通じて、変遷について触れておきたい。検討を行うにあたっては、先に分類したA～C類の全てが出土している白藤古墳群を取り上げた（小島純一1989）。

白藤古墳群は群馬県勢多郡粕川村に所在する古墳群で、中期後半から後期に至る円墳35基が主体をなしている事で知られている。小穿孔をもつ円筒埴輪が出土しているのはP－1号墳（C類）・V－2号墳（B類）・V－4号墳（B類）・Y1－5号墳（A類）で、各古墳からは年代の指標となる共伴土器の出土やテフラの堆積も見られる。共伴土器の検討の結果明らかになった古墳の前後関係は第204図に示す通りである。これらの古墳の実年代については、V－2号墳出土の須恵器がTK208型式とされることや（黒田1992）、Y1－5号墳出土の土師器がV－2号墳出土の土師器より若干古様を示す点、全古墳の周掘にHr－Sの堆積が認められる事から、今回取り上げた古墳の全てが5世紀後半に属すると考えられる。

以上の点から、白藤古墳群における円筒埴輪の口縁部小穿孔は、A～C類へ変遷する。しかし第205図に示した渋川市行幸田山A区3号墳例の様にB類とC類の共伴も確認されることから、B類からC類への変化は一様でないことが予測される。埴輪制作者の系譜等を考慮する必要があろう。

また、P－1号墳に後続するP－6号墳も多くの埴輪が出土しているが、口縁部に対しての穿孔は認められない。おそらく白藤古墳群の場合、円筒埴輪口縁部における小穿孔は、P－1号墳を最後に消滅するのであろう。また上毛野地域における他の事例を検討しても、6世紀まで下がる例はほとんど確認できない事から、白藤古墳群における小穿孔の消滅は上毛野地域共通の事象であることが予測される。

しかし武蔵地域における事例を見ると、熊谷市鎧塚古墳［B類］や鴻巣市新屋敷60号墳［B類］（註3）の様に5世紀後半代の事例の他に、行田市酒巻12号墳［B類］や本報告姥ヶ沢1号窯［B類］、鴻巣市新屋敷12号墳［C類？］等の6世紀前半代の例や、行田市埼玉5号古墳［C類？］の様に6世紀中葉に至る例も確認されることから、各類の変遷は上毛野地域と軌を一にするものの、その消滅という点では上毛野地域よりも半世紀近く遅れることが予想されよう。

関東地方における口縁部に小穿孔をもつ円筒埴輪は、上毛野から北武蔵にかけての比較的限られた地域を中心にして分布する。時期的には5世紀前半から6世紀中葉までのおよそ1世紀の時間幅を有するが、大半は5世紀後半代に属することから、盛行する時期をこの時期に求めることが可能である。

小穿孔はその穿孔位置からA～C類に3大別される。各類全てが確認された群馬県粕川村の白藤古墳群出土例の検討の結果等から、小穿孔が概ねA類からC類へと変遷する。そして渋川市行幸田山A区3号墳の事例から、B類からC類への移行が、埴輪製作者の系譜によって異なる可能性を考えたい。

小穿孔の消滅時期については、上毛野地域では概ね5世紀の末頃に求めれるのに対して、武蔵地域においては6世紀中葉頃の時期が想定され、上毛野と武蔵において半世紀近い時期差がある。

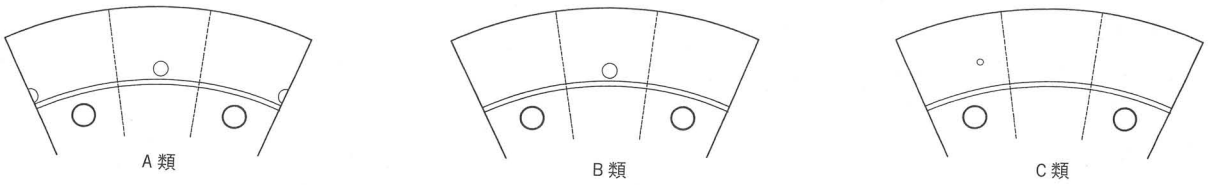
小穿孔の性格・系譜等については言及することができなかった。今後の課題としたい。

(2)　土師器

姥ヶ沢B地点の埴輪窯に伴う土器類は全て土師器で須恵器は確認されていない。土師器の大半は、窯跡群前面の埋没谷から埴輪片と混在した状態で出土している。

坩形土器　坩は体部がソロバン玉状のもので、5号窯内より出土している（第206図2）。外面の調整はハケの後にヘラケズリによる調整を施しており、使用されるハケ状工具は粗く、やや深めのハケである。胎土は砂粒等をやや多く含むが比較的良質、色調は燈褐色を呈しており、灰褐色に還元され、器面の荒れ剝落が著しく、風化が進んでいる。

甕形土器　甕は図示に耐えるものは2点のみで、他



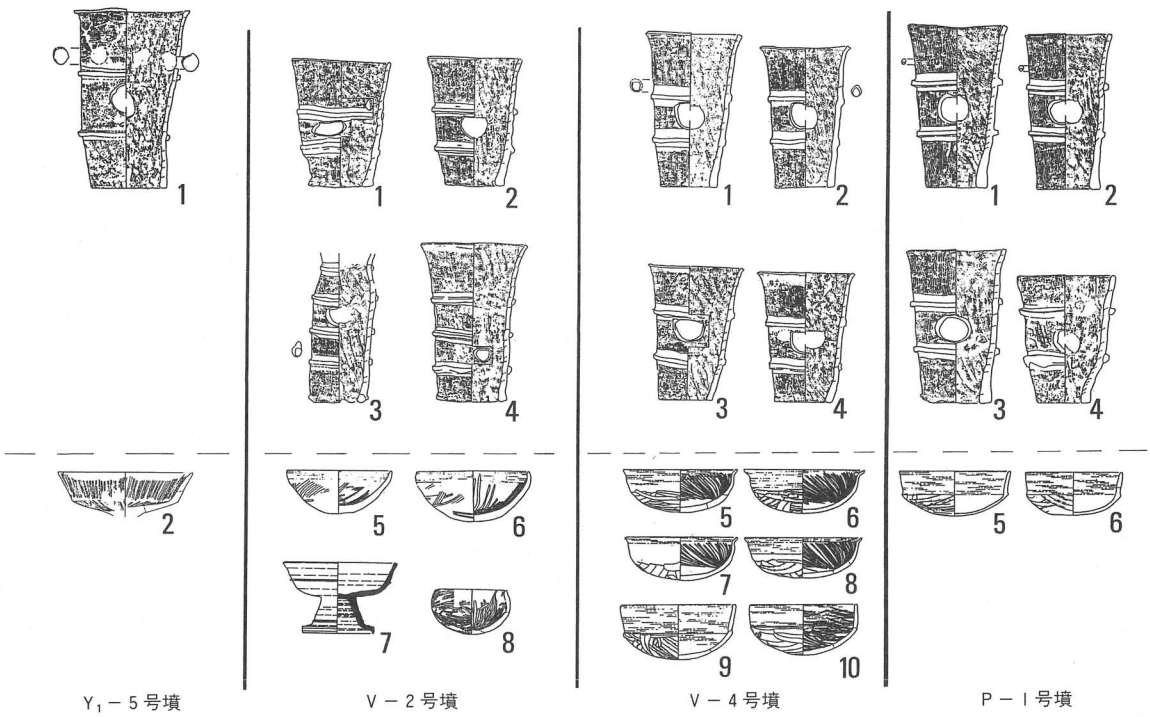
第203図　小穿孔分類図

に小片が多く出土している（第206図１・第206図３）。破片資料も含めた様相は、坏類等他の器種よりも個体数は多いようである。甕形土器の大半は坏類と同様、窯跡前面の埋没谷覆土中から埴輪片と混在した状態で出土している。確実に出土位置をおさえられるものとしては、１号窯の灰原から出土した第206図３や、図示はしていないが４号窯の火床面出土の破片がある。器面調整にはハケ目を用いているが、東北地方などの所謂ハケ甕とは異なり、埴輪の調整に用いられるハケ目に近似する。調整手法はハケ目を内外面に明瞭に残すもの（第206図３）、胴部外面にヘラケズリを加えてハケ目を消しているもの（第206図１）との二者がある。胎土は比較的良質、色調は第206図３が赤褐色、第206図１が黒褐色を呈し、共に酸化焔による焼成と思われる。

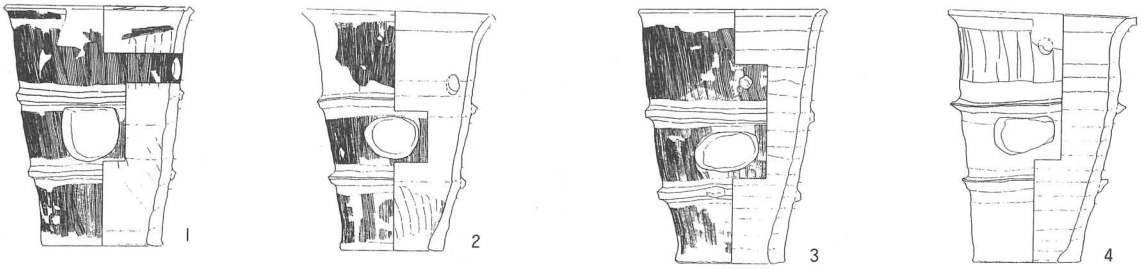
以上、ハケ目調整による土師器について器種別に見てきた。これらの土器群はその調整以外に、胎土・焼成の諸特徴において異色な様相を呈している。出土状態や焼成状態を考慮するならば、埴輪と共に窯体中で伴焼されたものがある。

これらの土器群の時期は、灰原より出土した土師器の坏・椀・高坏の諸特徴から、鬼高Ⅰ式の範疇で捉えられる。さらに模倣坏（第142図30）の特に口縁部の形態や、和泉期の面影を残す所謂内斜口縁の坏（第142図32）と内湾する口縁部の椀（第143図31）の存在を考慮するならば、鬼高Ⅰ式の中でもやや古い段階の一群として限定されよう（註３）。

周辺地域における類例としては、権現坂埴輪窯跡資料がある（第206図４・５）。その器形等は姥ヶ沢Ｂ地点例よりもやや新相を示していると考えられる。第206図４は長胴の甕と考えられ、外面はハケ目調整の後にヘラケズリを加え、内面はハケ目調整の後に弧状ヘラによる入念な横ナデが加えられる。第206図５は単孔の甑で、外面は指頭によるナデの後に胴部上半に縦位のハケ目調整を加え、内面は指頭によるナデの後に上半に斜位のハケ目調整を加えて更



第204図　白藤古墳群出土の円筒埴輪と共伴土器



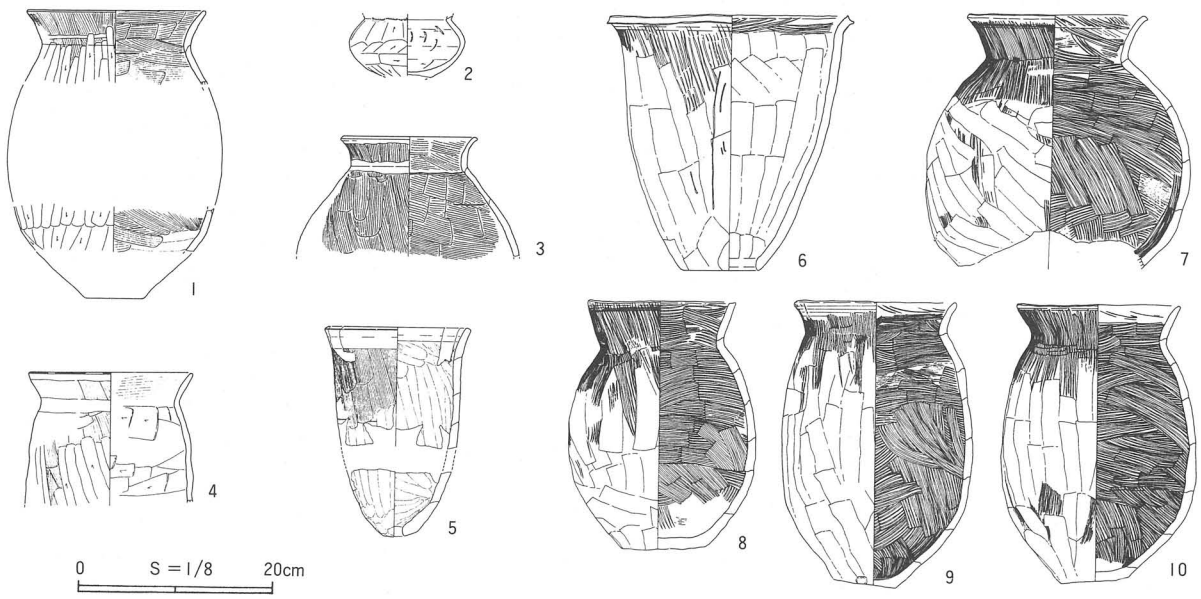
第205図　行幸田山A区3号古墳出土の円筒埴輪

に多少のナデを加える。以上の2点の土師器は、調整手法以外に胎土・焼成等も埴輪に類似しており、姥ヶ沢例と同様に埴輪との伴焼が考えられるものである。

次に隣接した川本町本田に所在する権現堂遺跡出土資料が挙げられる。権現堂遺跡は鬼高Ⅰ式の段階を中心にした集落跡であるが、本例に類似した甕類をはじめ異色な土器群が出土しており、報告者は「特異な集団によって営まれた集落」としての位置付けを考慮されている（村松篤1991）。第206図6は単孔の甑で、口唇部の形状が円筒埴輪の口唇部に酷似するものである。内外面共にハケ目調整の後にヘラによるケズリかナデを加えている。7は壺形で、内外面にハケ目調整の後に外面のみヘラケズリを加える。8～10は胴部の張る甕で、内外面にハケ目調整を加えた後、外面のみヘラケズリを加えている。

以上の5点の内、特に7～10の壺・甕はその調整手法において姥ヶ沢例（第206図1）に類似しており、器形を考慮するならば、姥ヶ沢例に接近した時期のものであると考えられる。

小結　姥ヶ沢B地点より出土した土師器の甕・坩については、その成形技法・調整手法から焼成に至るまで、埴輪との共通点が多い。その要因として現段階では一応、埴輪製作者の直接的な関与の下、土師器の坩・甕の製作が行われた為と考えておく。しかし、その出土量は埴輪と比較して遥かに少ないため、埴輪製作者よって成整形が行われ、埴輪と共に焼成されたと言い得ても、埴輪と共に生産されていたとは言えない。一方でこれらの土師器を、埴輪製作者が自らの需要を満たすために自給生産した土器（都出比呂志1989）として位置付ける考えもある。またこの事は、半ば専業的な土師器生産を行っていたであろう集団からの、土師器供給のシステムを検討する上で非常に重要な点である。共伴する他の土師器（坏類）が、一般集落跡出土の土師器と比較しても遜色の無い点は、この問題点を解決する上で何らか



第206図　周辺出土のハケ目調整土師器

の糸口となり得る可能性をはらんでいるものと考えられる。

権現堂遺跡の土師器群については、その調整に用いられるハケ状工具は姥ヶ沢例に酷似しており、両者の有機的な関係を想定することも決して不可能なことではないと思われる。しかし権現堂遺跡出土の土師器群は姥ヶ沢例と比べやや古様を示しており、有機的な関係を想定する際の障壁となる。この点については、権現堂遺跡が限られた面積での調査であった点に起因する可能性が高く、今後の調査に委ねられるべき点であろう。以上の点から、権現堂遺跡における集落跡は、姥ヶ沢において埴輪生産を行った人々と密接な関係をもって成立したと考えたい。

以上、姥ヶ沢埴輪窯跡B地点出土の遺物について、円筒埴輪の成形・線刻小穿孔、ハケ目調整土師器のについて個別に検討を加えてきたが、突帯の調整手法をはじめとして検討し残した所も多く、個別の事象については今後検討を重ねなければならない。また今回は筆者の力量不足や個別事象についての検討の不徹底から、事実誤認や咀しゃくしきれなかった点が多かったと思える。

最後に、日頃よりなにかとご指導いただき、本文執筆の構想・機会を与えて下さった本調査会の新井端氏、森田安彦氏には厚くお礼申しあげます。また、各地の資料調査や文献収集にお世話いただいた担当者の方々には深く感謝いたします。　（永井智教）

註

註1　複雑な意匠の場合や透孔との間に相関性をもつ場合は、その可能性が高いと思われる。

註2　透孔と差別化を図るために敢えて「小穿孔」の名称を用いた。適切な名称については、その系譜関係を踏まえた上で後日検討したい。
※「副次的穿孔」（赤塚1979）との関係等。

註3　分析の詳細については都合により割愛した。
なお、土師器については利根川章彦・鈴木徳雄の両氏を始め、中村倉司・田中広明・池田敏宏・大熊季広の各氏に御教示いただいた。

第3節　姥ヶ沢埴輪窯の構造と変遷と時代

埴輪窯の操業と変遷

姥ヶ沢埴輪窯跡の8基は地下式または半地下式の窖窯の構造をしている。上段の1～3号窯は半地式、下段の5～8号窯は地下式構造と推定される。4号窯はほぼ上段下段のなかほどに位置するが半地下式構造であったろう。煙道部を残す窯は一例もないので大まかになるが各窯の遺存部分から推定される本遺跡で採用された窯の構造は灰原・前庭部・焚き口部・燃焼部・焼成部・煙道部で、燃焼部と焼成部の境には明確な変換点をもつ。1号から3号窯は変換点での傾斜角度、やや長めの焼成部規模が近似しており、5号から8号窯でも変換点での傾斜角度や焼成部の規模が類似している。これら上位群と下位群は切り合い関係から当然時期差が認められ、下位群が先に操業され上位群が後になる。ではこの時間差がどれ程かは遺構の観察から長期間とは思われない。

前述のように姥ヶ沢窯は下位群より上位群へと推移しており、窯構築の順は下位群を1期、上位群を2期として2期4小期をに区分されると考えている。最初に築かれた窯は7.8号窯であり、この位置は小蛇行部の中央より奥に当たることから残された中央部分・手前の部分は次期以降の窯の構築を意図していたかもしれない。2基のいずれが先か明らかにしえないが、同時に操業されていた可能性がある。次に6．5号窯が先行窯と同じ高度に焚口部を設定して構築される。先行窯との間隔をやや開けているが、主軸方向のずれ、前庭部の切合いから時期差を認めるが操業は連続しているものと想定している。4基の窯が構築された時点で小蛇行部に築窯の余地がなくなり窯の構築は上位へと向かう。下位群との切合いはないが4.3号窯が築窯される。4号窯は明らかに下位の窯を避けており、下位の窯とは操業時期が重なるものと思われる。4号窯の焼台に転用された朝顔形円筒埴輪はこれを焼成していたと推定される7．8号窯よりもたらされたものだろう。小蛇行部（操業適地）をやや外れて作られた窯であり、性能が劣っていたためか他の理由によるのか以降の築窯は再び適地を意図して開削される。

3号窯の築窯に際して下位の窯を明確に廃止し、窯体の一部を削平しこれを埋めている。そして同窯の前庭・灰原となって埋没していく。ついで3号窯と同高度に前底部を有する1.2号窯が構築される。この構築に際し下位群の窯は完全に廃絶され埋没していく。このような築窯の変遷は操業時期の変遷ともほぼ重なるものと思われるが一窯での操業回数の差や出土埴輪の観察から一部操業の重なる窯もあると見ている。姥ヶ沢B地点では小蛇行部での築窯を執拗に繰り返しておりここを外れることはなかった。それはどのような理由によるものか推測でしかないが、制作集団の社会的事情や、埴輪制作にかかる技術のリスクに鑑み粘土・薪などの資材確保のエリア・立地条件等に関わるのだろう。なお下表に操業の時期区分を示しておいた。

第73表　姥ヶ沢窯跡群操業時期区分

		5C第4四半期	6C第1四半期	6C第2四半期	操業回数
I期	a小期	7　　8			7次
	b小期	6	5		6次
II期	a小期		4　　3		5次
	b小期		2	1	4次

出土埴輪の詳細については観察表・別稿の検討に譲り、ここでは時間的位置付けにについて考えたい。出土埴輪の九割方は器高37から40cm、口径18から22cmほどの二条突帯の中小型の普通円筒埴輪が占める。二条の突帯は各段を均等に区分するように配され、突帯は高く割としっかり作られている。全姿を窺うと、底部から胴部口縁部と直線的に移行し、口縁端部を外方に反らせ、内面端部を上方につまみ出す。口径は底径の二倍未満としていたようで安定感がある。外面は丁寧なよどみない縦ハケ調整を施され、内面も同様に調整される。

底部はほとんど調整を施されないが、口縁部は内外面を横ナデ調整して仕上げている。口縁部の形態を見ると内面に受け口状の凹面を作り出し、端部を外方につまみ出すものが多くみられる。この様な鶏のくちばし状の口縁部形態と調整手法は土師器製作の伝統のなかにはあまり見られず、須恵器の回転台を利用した製作技法からもたらされたのではないかと思われる。１号から４号窯の資料はこの感が強い。５号窯の焼台に使用された普通円筒埴輪は三条突帯以上の大型と思われ、斜めハケ気味であり、ハケ目も細かく丁寧である。時期を知る資料として、本窯からは和泉式土器の特徴をもつ坩形の鬼高式土器が出土している。また４号窯を主として須恵質になった埴輪が多く見られることも特筆される。

形象埴輪は1.3号窯、灰原から女子像、鹿、飾り馬等が確認されるが数量も少なく小型である。女子像については６世紀初頭以前とされる渋川市坂下古墳群隣接地出土の「双耳杯をささげもつ女」の埴輪に肩の張る肢体、腰紐や背紐の表現に合い似たところがあり、初期の人物埴輪と考えられる。飾り馬は部品のみ検討であるが小型であり、三環鈴の表現からも古相である（高崎1994）。

普通円筒埴輪については、供給先を限定できないが同様の特徴をもつ埴輪を同時期の埴輪からをもつ古墳に見い出だすことができる。その最も有力な候補は、鎧塚古墳を含む熊谷市中条古墳群と考えられる。熊谷市鎧塚古墳は本窯跡と同水系に連なる同時期の埴輪を樹立する前方後円墳である。二箇所の墓前祭祀跡から出土したTK216からTK203の須恵器と多量の円筒埴輪が出土している（寺社下1981）。二条突帯、三条突帯の普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪がある。東松山市下道添遺跡ST14号墳からは二条突帯の須恵質埴輪がTK23からTK47の須恵器とともに出土している。また時期的に近いものに滑川町屋田７号墳から二条突帯の円筒埴輪が出土している（今井1984）。１号墳からは埴輪の出土はないもののTK208の須恵器が出土している。また、須恵質埴輪を出土している古墳をみると５世紀第３四半期から６世紀初頭までの例が多い。東松山市諏訪山33号墳の円筒埴輪は５世紀の後葉とされＢ種横ハケを有していた（若松1987）。児玉町生野山９・14号墳・同町長沖14号墳は５世紀第２から第３四半期とされ須恵質Ｂ種横ハケ調整の円筒埴輪が出土している（坂本1985）。児玉地方の窖窯導入期はミカド遺跡の須恵器等の検討からTK216段階とされ、未発見ではあるが児玉地域の埴輪窯の築窯もほぼ同時期と思われる。群馬県保渡田薬師塚古墳では初期の形象埴輪群が出土しており須恵質になったものが多く、５世紀第４四半期と報告されている（若狭1991）。これら須恵質埴輪の出土している古墳には初期の群集墳がみられ、樹立される埴輪自体もＢ種横ハケ調整から縦ハケ調整の埴輪に推移していく。群馬県今井神社古墳・白藤V2号古墳は５世紀第３四半期とされ（黒田1992）、二条突帯の円筒埴輪がみられる。近隣では嵐山町古里古墳群、新屋敷Ｂ遺跡の古墳群等の群集墳がある。

５世紀第３四半期ころになるとＢ種横ハケが省略される傾向があり、先述の遺跡でも縦ハケ調整の円筒埴輪が主体となってくる。他に須恵質の埴輪の出土している遺跡に仁賢陵古墳の外堤に作られた羽曳野市野々上埴輪窯跡（笠井1981）、高槻市新池埴輪製作跡（森田1993）、名古屋市東山窯跡（三渡1979）、袋井市衛門坂古窯跡（永井1989）、小松市矢田野エジリ古墳（竪田1992）、仙台市富沢窯跡（渡辺1974）などが知られる。名古屋市東山111号窯跡、袋井市衛門坂窯跡、矢田野エジリ古墳では須恵質の埴輪に須恵器の技法である叩締めの工具痕が内面に残っている

ことから、須恵器工人の関与が推定されている。また磐田市堂山古墳出土の埴輪の検討から畿内を視野に置いた外来系の高度な技術により製作され埴輪と在地の劣る技術で製作された埴輪の2者があり、埴輪生産の二重構造が指摘されている(市原1995)。このころ関東では埴輪製作にかかる工人が未組織の状態であったらしいことは埴輪生産需要の増大・須恵器工人の関与などの検討に加え、窯跡群の発見が少ないことや、継続期間の短いこと、埴輪自体の検討からも想定されている。

窯体構造については先学の指摘のとおり須恵器窯との関連が想定される。高温に焼成し還元焔になりやすい窯体構造はまさにそれであろう。しかし須恵器窯は窯体部が膨らみ長大なのに対し、埴輪窯は寸の詰まった箱形を採ることが須恵器窯・埴輪窯の両窯の確認された東松山市桜山窯跡では見受けられる(水村1982)。もちろんこの差をすべての須恵器・埴輪窯に当てることはできないが、埼玉県内の姥ヶ沢・権現坂・生根塚・馬室・割山・和名の埴輪窯はほぼ同様の形態をしていると思える。そして多くの窯で燃焼部から焼成部にかかる変換点の傾斜角を20度前後としている。この様な窯の形態は炎のまわりを容易にし短時間で高温にするための工夫であろうか。

しかし築窯形態では各窯跡ではおおきな差異がある。姥ヶ沢窯の場合1基目、2基目と単体で築窯を繰り返していく。和名窯跡・馬室窯跡も同じである。各地の例では高槻市新池窯跡、木津町上人ヶ平窯跡、茨城町小幡北山窯跡、藤岡市本郷窯跡などがある。割山窯跡に代表される前庭部を共有し八手状に窯体を築窯していく場合、生根塚窯跡、桜山窯跡、権現坂窯跡、馬渡窯跡などがある。各窯ともに独自性と共通性があるが前者は大支谷の広い斜面地に立地しており、後者は小支谷の全面に展開する立地上の制約によるところが大と思われる。粘土採掘後の竪穴を利用して八つ手状に窯を築くやり方は権現坂窯跡・割山窯跡・生根塚窯跡は共通している。

姥ヶ沢窯で生産された埴輪の主体は二条突帯三段構成の普通円筒埴輪であった。この普通円筒埴輪を一基に窯詰したとすると4号窯に見られるように焼台から焼成部の変換点までに寝かせるように窯詰めしたとすると30から35本ほどが焼成されたと考えられる。二基の窯を一操業単位とすると他の一基は朝顔形円筒埴輪や形象埴輪も焼成していたろう。屋田5号墳は40から50本の埴輪が建てられていたと推定されている。この推定数は姥ヶ沢窯などの小規模窯の1回の操業実態に近いのではないだろうか。また、鍛塚古墳規模になると2m当たり7本の埴輪が建てられていたとされ直径31mの後円部だけで300本を超す埴輪が必要となり、姥ヶ沢窯クラスでは5次から6次の操業が必要となる。供給地の特定はともかくも、5世紀後半に盛行する群集墳にもたらされたことは確実と考えており、先の古墳群などから姥ヶ沢産の埴輪が確認されることを期したい。

やや冗長になったが以上の結果をまとめると、埴輪生産に窖窯の導入された時期は生野山古墳などの例から5世紀後半代と考えてよいこと、その製品には須恵質になった埴輪が含まれ、小・中規模の古墳に樹立されていること。姥ヶ沢B地点の埴輪窯はこの時期に操業されたものであること。生産された埴輪と類似するものが周辺の中小古墳群にみられること。などが掲げられる。

また、1号から4号窯跡の窯体・前庭部からは剣形・鏡形の石製模造品が出土している。破損しているがわりと丁寧な作りから6世紀前半までのものとしてよい。このような祭祀色の遺物は権現坂埴輪窯跡・馬室埴輪窯跡からも出土しており埴輪窯の操業にかかる祭祀に関連したものと考えられる。またこのような例は、導入期の窯とされ、西暦500年前後の操業とされる仙台市富沢窯跡でも鏡形の石製模造品が焚き口や前庭部から出土しており窯に対する祭祀的な意味を有するものと考えられている

姥ヶ沢窯からは指紋の残る円筒埴輪が出土している。生地が生乾きの時に指紋のつく状況を考えると、もっとも近くにいる埴輪製作に関わる工人のものとする可能性が高い。1Y（図版69）はもっとも明瞭に残る指紋で左手母指のものである。他にも掌文の残る埴輪片など指紋の観察される資料が散見される。

指紋は個人を識別する属性の一つであり、それが埴輪に残されることは同一工房・同一工人ににより製作された埴輪の抽出に有効であると杉山晋作氏によって指摘されている。もっとも、そのためには膨大な資料の再検討と新たなデータの蓄積が必要になる。将来、姥ヶ沢窯の工人指紋のもう一つが他の遺跡から見つかる幸運を願いたい。

姥ヶ沢窯の変遷は上述のように考えられ、5世紀の末から6世紀の初頭には操業を開始し、6世紀の半ば以前には停止した。その操業形態は1基または2基を単位として操業したものと思われる。操業停止後は権現坂埴輪窯跡群の生産グループに集約されるものと考えているが、開窯の事情も5号窯の焼き台に転用された円筒埴輪に残る横十字のヘラ記号を権現坂窯の生産グループのものとすると、権現坂群を中心として千代地区に分散して開窯された一つの支群との見方もできる。権現坂窯群は姥ヶ沢窯群を上回る空間的・時間的な広がりと内容を有すると予測され今後の両窯の調査によって千代地区の埴輪窯跡の評価が深まることを期したい。

埴輪は朱彩されるものも多く、本来赤く焼くべきものであったから須恵器色、つまり青色にできたものは失敗であった。そして青色の埴輪ができてしまったのは窖窯を制御しきれなかったためであり、須恵器を焼く技術を忠実に取り入れたと思われる初期の段階、この段階を導入期とすればこの時期にしか生産しえないものであったろう。窖窯導入の契機が中小古墳まで埴輪祭式の裾野が広がり、埴輪樹立の需要が一気に高まったことを背景としてよいなら、不良品とされるべき須恵質埴輪はその需要に応えるための緩やかな規制のうちに存在し得たと考えられる。初期の群集墳、小首長墓に多くみられるのはそのためであろう。須恵質埴輪の成因を考えると地方窯導入期の様相が浮かび上がる。それは須恵器の生産の陰に隠れながら編成されつつあったであろう埴輪工人の姿がみえるのである。　（新井　端）

第4節　江南町千代地区地下（粘土層）原土の陶土としての可能性

1　本研究の発端と動機

江南町は、土器・埴輪に関する出土品が多い地域である．それらは年代的に縄文土器に始まり弥生式土器、埴輪、須恵器と極めて長い期間に渡っているそうである。またそれらを焼成したと推定される窯の跡も町内権現坂付近に確認されている。これらのことから、使用した土もおそらくこの地域の土ではないかとされてきた。土がこの土地のものであるとすれば、質の良い、しかも大量の粘土を含む地層が、この地域のどこかにあるということになる。それがどこであるかはわからないが、必ずあるであろうとかねてより思い続けてきた。

平成元年度、本校の焼き窯設置に伴う申請理由の一つに、この土（粘土層）に関する探求のことを加えた。幸いにも教育委員会でこの理由を重要に扱っていただき、その年の年末急遽現地見学を中心に、地質説明を新井さんより受けることになった。この説明は、岩石と主に粘土層を中心に町内の各所を回り地学的考古学的な説明を受けるものであった．その際に野原の和田川沿いと、三本の江南台地北側の急崖の粘土層露出面より原土を採取してきた。以後さっそくこの原土を実験してみたが、当時設備もままならず、実験はごく基礎的な実験に留まり、十分な結果を得ることができなかった（実験結果の詳細については3の基礎実験の項を参照)。

その後、千代ゴルフ場建設地における発掘現場より､大量の粘土層が確認された。これはその時の4ヶ月前に、台地北側の急崖で採取した粘土と同じものである。場所的に窯跡を含む台地地下の地層であるため、過去この土地で使用した原土はこの土ではないか（新井さんからの説明）とのことであった。そして平成2年4月下旬現地を見学させてもらい、その膨大な粘土層を観察することになった。この地層は、ローム層直下におよそ3m近い厚さを持っており、江南台地全域にわたり最低でも2mの厚さをもって東西に17㎞も続いていると聞き､その量の膨大さに驚かされた。そこでこの土を使い、本格的に実験してみる希望を伝え、現場の方の好意で2トントラック一台分の原土を譲り受けることになった。新井さんの説明のとおり、この原土が過去使用された可能性は高いと思えたし、またそうであればこの土を陶土として再生できるかどうかを試してみたいと思ったからである。以来この土に附する実験を本校にある設備の範囲で行なってきた。以下にまとめることは、現在までの経過にそった実験の結果報告である。

2　実験初期の観察と考察

陶器づくりに適した土とそうでない土に関すること

(1)　地質的にみた千代土（採取した場所による仮称川本粘土層原土）の陶土としての適性について

a　現地での地層の状態

この地層は正式には川本粘土層とよばれ、江南台地全域によく発達した2～5mの層厚を測る灰白色の粘土層である。台地の地質概要は表層部に腐食土を乗せ、以下ローム層が堆積し、その下にこの粘土層、そしてその下が台地の基本となる砂礫層が発達している。(江南町文化財調査報告第9集より)観察では、この粘土層は視覚的に3層に分けられる。

最下部は青みがかった灰白色

中部は黄白色

上部は茶色がかった赤黄色

という色彩の具合である。この3層の境界は判然としない。また上部に関しては多分にローム層の浸透による色彩の変化がうかがわれるため、中部ないし下部のものが、この粘土層の本来の色であると予想される。またここで特記しておきたいことに、下部の層にみられる「青さ」があげられる。土を採取した付近は数多くの谷があり、そこを沢のように僅かな水が流れている。陶土の成立条件には、原土の時

にどれだけ雨水を浸透させ、また浸食堆積の作用によりどれだけ粘土物質の（または不要鉱物等の）浄化が行なわれたかが大きな要因となる。粘土層を透して流れでた水は、時に池のようになって溜まっていたが、白い粘土層の上に溜まった水の色が極めて青く美しく感じられた。この水の青みはこの土特有のものらしく、たとえば土を練り固め1ヶ月もするとかたまりの内部が青みががってくる。これは何らかの鉱物が関係しているらしい。この青みが粘土層下部と練り土の内部に見られることから、酸欠状態で青い発色をするということになる。これがどのような原因（鉱物）によるものなのか検査の結果が待たれるところである。また陶土への影響の有無を考える必要もある。

b　原土成立上の特徴からみた粘土の分類と千代土との関係

まず説明の上で必要な、土に関する様々な名称について記したい。大きくまとめて「粘土」といっているが、陶芸領域では、一連の作業工程の内で、その「粘土」に対する名称を2つに使い分けている。自然にある状態で山や畑から掘りだしてきた未加工のものを「原土」という。そしてそれを粉砕、水簸、練り、寝かしの工程を経て陶器制作が可能になったものを「杯土」と言っている。これらの総称が「粘土」であり、また「土」である。そのため作業工程を重要とする部分では、この二つの言葉を使い分けたいと思う。

またこれまでのところで、再三にわたって「陶土」という言葉を使ったがこれは、作陶するための土という広い意味で使ったものである。これに対し後に出てくる陶器を作るための土「陶土」とは、同じ語句でありながら、こちらの方は狭義で用いられている。現在のところ千代土が厳密に狭義の意味において陶器を作るための土「陶土」といえるかどうかは断定できない。千代土は、以下に記す炻器土の可能性が高いからである。

陶芸に使用する「土」としての粘土は、一般的に二つに大きく分けられる。それは「磁土」と「陶土」と呼ばれているが、実はこの両者とは別に比較的様々な成立形態を持つ「炻器土」といわれる土がある。したがって正しくは陶芸用粘土には三つの種類があることになる。しかし炻器土という言葉は普通ほとんど使われず、磁器土に対する土をまとめて「陶土」と言っているため、一般に二つに大別されているのである。

まず磁土についてであるが、磁土とは、磁器制作のための粘土のことである。主に流紋岩が熱水や温水、温泉水によって分解変質して土化したものを磁器粘土といっている。全国温泉があるところに陶石（磁土になる石）があるといわれるのはそのためである。

次に陶土について、陶土がうまれる条件として風化花崗岩と湿地帯という特徴がある。陶土と関係が深いものは黒雲母花崗岩である。太古に黒雲母花崗岩の山が連なっていて、低いところ一帯が湿地帯や大きな湖や沼があり、そこに風化した花崗岩の真砂土が流れこんで、永らくその窪地に浸って、熟成されることによって陶土がうまれる。磁土や陶石などは、岩石がその場で風化して土化したものであるが、陶土は水に流されて堆積した結果、粘土になるという成立上の特徴がある。陶土のなかでも早い速度で流されて未風化の石粒を残して堆積したものを蛙目粘土、その際に樹木を巻き込んで堆積したものを木節粘土といっている。

そして三つめの「炻器土」であるが、この炻器土が生まれる条件は、比較的千代土の成立状況にあてはまるところが多い。火山活動のときに噴き出た火山灰や火山礫が海中や陸上に積もって固まった岩石を凝灰岩という。この凝灰岩が再び風化分解して沈積した粘土のことを一般に炻器粘土といっている。また地表の岩石が風化分解して、風や水によって遠くへ運ばれ流されて堆積した土の上にまた土や砂が積もって、その圧力によって固まった岩石を粘板岩とか砂岩、あるいは頁岩とか泥板岩と言う。これは同じような二次的な岩石で堆積岩とよばれるが、この堆積岩のなかで古生代よりも古いものは粘板岩に属するので固く、それに対して地質的に新しい年代の頁岩が岩石といっても柔らかい。この頁岩が風化

して生まれた土を頁岩粘土といっている。例としては益子や常滑の土がそれにあたる。また頁岩粘土の他にも関東ローム層のように火山灰が風化して土化したものがある。これを火山灰土といっている。あるいは備前の土のように流紋岩が風化して海中に浸り生まれた赤色粘土もある。特徴である赤黒い色は、水酸化鉄と海中の微生物が腐食した有機物によるものである。炉器の土は磁土や陶土よりもさらに遠く風や水に流されて、細かく水漉しされて沈積し、他の粘土より鉄分のほか不純物を多く含んだ土といえる。(以上理工学社「陶芸の土と窯焼き」より要点抜粋)

このように千代土の成立の状況は、炻器土の成立条件に比較的似通っている。千代土が陶器制作に可能な土であれば、まちがいなく炻器粘土ということになる。またこの実験の最も初期に採取してきた野原の土も、白色であるが頁岩粘土として、炻器土の一種ということになるのではないだろうか。とすれば江南町には2種類の炻器粘土があるということになる。

次に作陶のための条件となる土そのものの成分に関する基本的な事柄であるが、古典的な陶磁器素地の主成分は、粒土質物、長石、石英であるとされている。それに種々の鉱物が副成分として混入しているわけである。山や畑から採取してきた原土がそのまま焼き物になるのは、粘土質物の他に石英や長石が適当な割合に混じり合っているからである。粘土質物だけを使うと、普通の方法では焼き物にすることは困難である。

学術上粘土質物と称しているものは、水で練ったときに粘りが強すぎて成形がうまくいかず、乾燥及び焼成収縮が非常に大きく、そのために切れがでて品物にならない。粘土質物だけで練り土を作ると、成形素地は非常に緻密になり、乾かすときに水が逃げにくくなる。そのために乾燥切れがでてくる。そこで切れ防止のために石英や長石を加えて水の逃げる孔をつくってやるわけである。

石英は、粘土に加えると収縮を少なくし、焼成した素地の強さを増し釉を密着させるために必要な鉱物である。もともと白色の鉱物であるためにきれいな石英を使うと白さを増す。

長石は、焼成によってガラスをつくり、素地を強くする。加える量が多くなるとそれだけガラスの量が多くなるため、加熱によって急激に溶けるのではなく徐々にガラスになっていくものである。特に生成されたガラスは粘性が非常に大きいため、へたる程度は少ない。乾燥収縮を押さえるかわりに、高温でガラスができるため、焼成時の収縮が増加する。添加量を正しく決めることが重要で、よく混合しないと収縮が不均等になる。

(建設総合資料社「陶芸のための化学」より)

千代土は土つくりの際にも、成形時にも極めて粘性が強く、また成形後の収縮率も比較的大きい。このことから粘土質物が多く、石英や長石が少ないのではないかということが実験初期に推測された。ちなみに千代土とほぼ同様であるとされる、塩西遺跡の粘土層の軽鉱物組成を資料により知ることができたので、その内容を次にあげてみる(第74表)。

第74表　塩西遺跡粘土層軽鉱物組成

資料番号	塩西遺跡B地点　軽鉱物組織					同定鉱物粒数	B地点断面 数字は資料番号
	火山ガラス		石英	長石	その他		
	A	B					
	無色	無色					
1			15	131	104	250	・1 ・2 明褐色 ・3 風化火山灰 ・4 (柔らかい))
3	1	1	11	119	118	250	・5 粘土 ・6 (かたい) ・7 ・8
5			17	124	109	250	
7		1	17	127	105	250	

数値は全て粒数。

この結果は、粘土層の深さによる各部分から採取した原土を不特定に250粒選び、測定したものである。この同定鉱物粒数の中で、長石がほぼ半数、そして1割以下の石英が含まれていることがわかる。そしてその他は粘りや乾燥切れの状態から、粘土質物を多く含んでいるものと推測できる。この土は、石英は少ないものの作陶の条件を辛うじて充たしているということになる。

ここまでに記してきたように、地質的な成立過程、また土の成分組成からみると、千代土は作陶に関する適性を基本的には備えていると判断できる。ただし、基本的な条件を考えるうえで、出土品からみた歴史的な背景を考察してみなければならないと思う。つまり条件を備えた土を過去の人間がどのように使用し、どうして使用を中断したかについてである。

⑵　歴史的（発掘品）にみた千代土の陶土としての適性について

一般的に焼き物は、長い期間縄文式土器の時代を経て、弥生式土器の形式に移行し、そして古墳時代に埴輪を焼くのとほぼ同時に須恵器の時代を向かえて一応古代を終えているということである。町内の出土品にもこれらの変遷がみてとれる。そして、それらは説明によれば、古墳時代のものまではこの土地の土である可能性は高いが須恵器の時代となると、果たしてこの土地の土を使ったかどうか疑問が多いのだそうである。推定によれば比企の大谷瓦窯周辺の窯で焼かれたものであるらしい。

古墳時代までの土器は比較的低い温度の酸化焼成であるが、須恵器となると1100℃からの高温、しかも還元焼成になる。還元焼成というのは酸素を十分に送らずに焼きあげる方法で、たとえ鉄分を多く含む土であっても赤く焼きあがらず、灰黒い焼成色となる。日本瓦等もその例にあたる。権現坂の窯跡は埴輪窯であるとのことである。ということは、この窯が稼働していた期間は遅くとも7世紀までとなる。一方須恵器の焼成は日本において5世紀頃からはじまり12世紀頃までとされている。そして関東に須恵器の焼成技術が伝播し、生産が増加したのは7世紀初期からといわれている。この地においても埴輪を焼くことを生業とする人間もいたであろうし、またそれらが組織的に職能集団として存在していた可能性も当然考えられる。であれば須恵器の普及に伴い、今までの土を使い、新しい技術に挑んだはずである。あるいは江南の地に埴輪焼成の技術が伝わったのが、古墳時代の最晩年であった場合、須恵器の焼成技術の伝播とあまり差がなかったとしたら、当時の人々は何故埴輪窯の築窯を選び、須恵器の築窯を選ばなかったのだろうか。

先に記したように須恵器は還元焼成のため焼成色が埴輪などと全く違うため、出土品の中にはこの土地の土を使ったものがあるのかもしれない。だが多くの出土品から推測する限り、実際には他の土地の土を使い、そして焼成も他の土地で行なわれたらしいということである。この点は最も重要な点であるため、埴輪の土とともに須恵器の土、そして千代土の組成分析が是非望まれる。

それにしても何故この地において須恵器の焼成の移行が行なわれなかったのだろうか。7世紀を境にして窯業が行なわれなくなったとみられるのは何故なのだろうか。推測のうえのまた推測であるから、考えられることは無数にある。社会の広域化に伴う流通と生産コストの問題も考えられるし、たまたま技術者を招聘できない社会的理由があったとも考えられる。しかし様々な推測のなかで、本研究にとって最も問題となるのは、土そのものに原因があったと考える場合である。つまりこの地の土は高温焼成に絶えられない粘土であった場合、当然須恵器の焼成を断念せざるをえない。全国的に須恵器の生産が増加し始めた時期に、この地では窯業が衰退したことを考え合わせると、この推測は他のものよりも説得力があるように思えてならなかった。もしそうだとすれば千代土の陶土としての可能性に対して、この推測は否定的、あるいはマイナスの要素になる。

このように出土品にみられる歴史的な背景を推測・考察してみると、千代土の作陶に関する適性を否定的に捉えなければならなくなる。適性に対する肯定的な地質条件と、否定的な歴史的背景の両方が

実験前に考察された。そして実験には、このどちらも尊重して望まなければならないと思った。

3　．実験の経過

平成元年11月　町教委の町内地質(岩石、粘土層)に関する説明を受ける。野原の和田川北岸の白色粒土、三本南の台地急崖の赤色粘土採取

2年1月　上記粘土の精土から成形の実験

4月　千代ゴルフ場建設地　川本粘土層現地見学　採取

5月・同原土　乾燥　水簸　　成形実験開始　精土①

・杯土「寝かし」実験開始　I

6月　焼成実験（七宝窯）1100°C　4時間

7月　～8月　半磁器粘土混合による成形、焼成実験

8月　練り土　寝かしの状態　3ヶ月目の観察II

10月　～3年2月　都幾川村舟の沢窯による信楽粘土焼成実験

11月　採り土　寝かしの状態　6ヶ月目の観察　III

3年1月　江南中学校　焼成窯設置　焼成室建設開始

4月　煙突設置　　焼成室完成

5月　千代原土　乾燥　水簸　練り　寝かし　精土②

（婦人教育学級のための杯土づくり）

・混合杯土　成形焼成実験

千代土：信楽土＝7：3に決定

・練り土　寝かしの状態　1年目の観察　　IV

6月・信楽土混合杯土づくり

・研究授業　「土つくり」をとりいれた焼き物の授業（一年生）

7月　～8月　町教委主催　婦人教育学級　陶芸教室

10月　千代原土　乾燥　水簸　練り　寝かし　　精土③

4年1月・備前田土混合実験

・野原白色粘土の精土および寝かし

3月　千代原土　乾燥　水簸　練り　寝かし　精土④

5月・備前田土混合の千代土　素焼き焼成実験

・練り土　寝かしの状態　2年目の観察　　V

6月・備前田土混合杯土づくり

千代土：備前土　＝7：3

・備前土、・信楽土混合杯土づくり

千代：備前：信楽＝6：2：2

（婦人教育学級のための杯土づくり）

7月・研究授業　踊るワインの容器を考案する焼き物の授業（2年生）

・～8月　町教委主催　婦人教育学級　陶芸教室

・千代土　乾燥　水簸　練り　寝かし精土⑤

8月　ゴルフ場建設地板井発掘現場付近の粘土層および原土見学

9月・千代原土焼成粉（シヤモット）の混合による杯土実験

・授業　湯呑みをつくる（2年生）

・板井発掘現場付近の原土を譲りうける

10月　～11月　原土焼成粉混合杯土　成形実験

12月　2年生作品　本焼

5年2月　原土焼成粉混合杯土の成形品の素焼き、本焼き

4　実験内容と結果

（精土から6ヶ月くらいまでの千代土の基礎実験を中心に）

(1)　精土の際の千代土の特徴

杯土を作る作業のことを、精土または「土つくり」というが、この土つくりは主に次のような工程で行なわれる。

A　①原土の乾燥　②原土の粉砕　③篩漉し　④加水　⑤練り　⑥寝かし

B　①原土の乾燥　②原土の粉砕　③篩漉し　④加水・泥しょう　⑤篩漉し

⑥脱水　　⑦練り　　⑧寝かし

A　B　二つの方法からの選択は土の質や製作者の意図によって決まる。おおよそAのような方法によって作られた土は、荒々しい男性的な印象を与える土になる。一方Bの方法だと土の持つ雰囲気は女性的になる。千代土の場合このどちらかの選択は、②を省いたかたちでBを選んだ。粉砕の工程が現在の設備では困難であったためと、原土が比較的肌理の細かいねっとりとした土であったためである。

千代土の乾燥と泥しょうづくりについて

千代土は乾燥すると、非常に硬くなり粉砕作業が極めて困難になる。土の保水性が高いためである。他の土と比較してわかったが、たとえば備前の田土などは乾燥すると角砂糖をつぶすような具合で簡単に粉砕できる。石臼のようなものがあれば別だが、千代土の場合は余程の労力を覚悟しなければ、この粉砕作業は困難であることがわかった。

そこでこの土は、粉砕作業を省略し、乾燥後すぐに泥しょうにすることにした。粘土槽に水を張り、乾燥した土を適度に入れ自然に水に溶けるのを待つのである。よく乾燥していれば水に入れてから1時間もすると、土が崩れるようにして水に馴染む。そしてまる1日程度で完全に溶ける。ただしこの作業中に土をかき回したり、手にとって練ったりすると溶け具合が極端に悪くなる。水に入れたら決して何もしないほうが良い。完全に水に溶けたら棒などでよく撹拌し、水をすみずみまで行き渡らせる。こうして泥しょうができあがる。この泥しょうは、そのまま放置し、篩で漉して、少なくなったら水を入れそして土を入れるという手順で補充してきた。ただし後から原土を補充したものは前記したように溶け具合が悪くなる。

水簸について

精土の過程で泥しょうづくりから、篩漉し、脱水までの作業工程のことを水簸という。千代原土の泥しょうを篩うために、始めは80番の篩を使った。80番の目の篩というのは、土を漉すものの中では細かいほうである．何故このような篩を使ったかについては、次のような理由による。

まず実験初期の考察で、「千代土は炻器粘土である」しかも「高温焼成に耐えられない土なのではないか」という推測があった。この推測に基づいて粘土槽の泥しょうをそのまま脱水し、練って乾燥させた結果、やはり歪みと乾燥切れが認められた。(平成2年6月実験）これは、おそらく粘土質物が多く、長石、石英が少ないためであろう。そこで千代土を陶土にするためには、これらを多く含む他の土を混合して、この欠点を補うのがより良い方法であると判断した。炻器は「赤い磁器」といわれるように、無柚でも高温焼成することによって透水性が無くなる。この点で水を透す陶器とは全く性質が異なり、磁器と同様炻器最大の特長でもある。であるから千代土が炻器土であるならば、この特長を尊重したいと思った。そして高温焼成に耐えられないこと、更に乾燥時の歪みや切れについては、長石、石英の混合で解決するはずである。これらの条件をみたす粘土として半磁器粘土を選んだ。半磁器とは陶器土と磁器土とを混合した人工的な土である。粒子が細かく磁土が多いため、千代土とは少し質が違うが、ねっとりとした触感をもっている。この土を混合する以上、肌理の細かさはできるだけこの土に合わせなければならないと思い、結果篩を80番にしたのである。80番の篩を使ったのは、この半磁器混合の時だけである。これ以後は必要以上に粒子の肌理を細かくする必要がなくなったため（平成2年8月以降）60番の篩を使ってきた。

このようにして篩で水漉しした後は、その泥しょうを石膏鉢に入れて水分を抜いていく。本来は石膏鉢ではなく素焼きの鉢を使った方が、土に石灰等が混じらず良い杯土が作れるが、この時点では石膏鉢を使わざるを得なかった。

土練りについて

脱水の終わった粘土は、次の段階として「練り」に入る。練ることで水分を均一にし、土の粒子を整え、そして不必要な空気を抜くのである。練りは初期のうちに土もみ（足で踏みつける)、それから「荒練り」、そして「菊練り」（練っている途中の形状が菊の花に似ていることによる）の段階を経て仕上げ

る。千代土もこの工程にしたがって土練りをおこなった。土練りの際の記録事項を以下に記す。

練り土が最も成形しやすい含水量のことを「可塑水量」というが、この可塑水量が適切であれば、土を練っても手や練り台に粘土が付かない。またその練り土に指を押し当てた場合、はっきりと指紋の跡が残る。ちなみに可塑水量と可塑性、収縮率等との関係を整理してみると

可塑性	可塑水量	室内乾侵時間	収縮率
小さい土	16%	120時間	18%
中程度の土	21%	140時間	22%
強い土	27%	180時間	26%

ということになっている。千台土の収縮率については、後の信楽土混合実験のところでまとめて記すのでここでは説明を省くが、表にした数値と照らし合わせてみると（信楽土混合実験の際のテストピース焼成結果20%強のデータによる)、中程度の可塑性を持つ土ということになる。であれば可塑水量は21%前後とみてよい。しかし数字の上での比較から分析できる結果と、実物に触れてみて感じる直感とは若干の違いがあるような気がする。

土練りをしていると、「このくらいが成形をするのにちょうど良い硬さと水分である」という時がくる。この時点で土練りを終了するのであるが、千代土の場合、練り続けてもなかなかそのような状態にならない。初めのうちは手や台に粘り付き、長く練り続けてもその状態がしばらく続く。そして、粘り付かなくなったと感じるときには、今度は土がひび割れてきてしまうのである。脱水の直後の土練りでは必ずこのような経験をした。しかしまれに手にも台にもあまり土が付かずに練れるときがある。それは脱水が進み、土がやや硬くなった場合であった。また長期間寝かせてやはり土が硬くなった場合も、この状態と同様大変よく練れることがわかった。ただしこうして練りあげた土は、やや硬いためロクロ成形をする際などに、新たな問題点を生み出すことになる。

とにかく、土練りの際に触感から判断すると、千代土は可塑水量が中程度というよりは、むしろ低い粘土ではないかということである。

・寝かしについて

精土した土は、次に「寝かし」という段階に入る。暗く湿気の多い環境のなかで乾かないように、水に濡らした麻袋などに入れて保存するのである。たとえ作りたての土が不良な杯土であっても、長期におよぶ寝かしによって成形可能な良い土に変化することがある。精土された時点で優良な土であればなおのこと、より良い土に成る。これは保存の最中に黴やバクテリアの繁殖によって土が熟れ、粘りが出てくるためである。寝かしの期間は長ければ長い程よく、中国の景徳鎮などでは、100年から寝かしてある土はざらであるという。千代土も変化を期待して、寝かしに入ってから1ヶ月、3ヶ月、6ヶ月、1年、2年と、観察とその際の焼成実験を続けてみた。

結果的には、この土も寝かしの期間が長くなると、確実に育ってきているということがいえる。精土したてのときは、その土でロクロ成形した場合、必ず乾燥切れをおこして使いものにならなかった。しかし3ヶ月を過ぎたあたりのものからは、同じものを作っても、切れを起こさないものがまれにみられるようになる。また他の土との混合実験の際にも効果が観察できた。寝かしの期間が長くあったものは、他の土の混合比率を1割程度落としても本来割れてしまったものが、割れずに焼け残る例が確認できたのである。

ただし現在までのところ、3ヶ月を経たものは、明らかにその変化を認めることができるが、では3ヶ月のものと2年のものとの比較で変化が認められるかというと、残念ながらさほどの変化が確認できない。千代土は寝かしの期間が3ヶ月しか必要ない土なのか、あるいは熟成するためにはもっと長い年月が必要な土なのか、ということになる。

また顕著な特徴として、この杯土は1ヶ月を過ぎるあたりから、蠟のような感触をもつ固まり方をしはじめ、それを練るときに、練り始めだけ異様な硬さを感じるようになる。練り込んでいくうちに、そ

の硬さは解れ、杯土にしたてのころのような柔らかさに戻るが、これは2年経った現在でも変わっていない特徴である。また1ヶ月程度経つと練り土の表面から1cmほど内部の土から全て青みを帯びた独特な色を持ち始める。これは前記したように土中に含まれる何か（鉱物）が、酸欠状態により発色するのではないかと思う。杯土の寝かしは主にビニール袋にいれて保存しているが、直接空気に触れないようにしていると、本来黄土色をした千代土が、必ず灰青色に変化する。このことが成形、また焼成時に何らかの影響を与えるのではないかと、各工程の際に注意して観察してきたが、現在のところそれは判然としていない。

千代土の成形について

千代土を精土して約1ヶ月経ってから、成形の実験に入った。寝かしのところで3ヶ月経った千代土の変化についてふれたが、土の性質によっては1ヶ月以上寝かせると、かえって劣化するものもあるとのことで、実験を1ヶ月目から始めたのである。

成形は手びねり、輪積みの器を作ることから始めた。ロクロ成形と違い、これらの方法は叩いて締めながら成形できるため、土どうしの結びつきが強くなり乾燥切れなどをかなり防止することができる。1ヶ月目の千代土も成形後乾燥切れは起こさなかった。しかしその後素焼き焼成で割れて形が粉々に崩れてしまった。1ヶ月目のものに限らず、その後成形したものは、崩れるかひびが入るかして、焼け残るものが無かった。6ヶ月目のものまで実験を行なったが、結果が同じであるため、以後手びねり輪積みの成形実験はおこなっていない。他の土を混合して杯土にしなければ、これらの成形は困難であろうと判断したからである。

次にロクロ成形であるが、本実験では成形方法は、このロクロ成形が主流であった。ロクロにより成形を始めると、粘りつくようなねっとりとした土であるにもかかわらず、使う水の量が増えるにしたがって極端に土どうしの結びつきが弱くなる。たとえばぐい呑み形のものをロクロで曳く場合、杯土をロクロに乗せ形を作り始めると、始めから三つ目位までは、普通に曳く事ができる。しかし前記したとおり、千代土は他の土よりもやや硬めに土を練らなければならないため、ロクロ曳きのときは当然「土ころし」の回数も増える。(土ころしとは曳やすい硬さにするため、また土を水に馴染ませるために、ロクロの上で回転させながら土を曳あげたり押し下げたりする作業である）したがってひとつひとつ成形が進んでいくと、土が含む水分量も次第に増えてくる。そして五つ目あたりのものから、土のこし（？）が極端に無くなってくるのである。ぐい呑みであればその胴の部分にひび割れのようなものができはじめ、またいったん広げた口は二度と窄めることができなくなる。この2点はロクロ成形において致命的な欠陥である。口の細い、胴の膨らんだ形が作れないということになる。ただし曳く厚さによってこの欠点を押さえることができる。作品の厚さを5㎜以上にするとひび割れが少なくなるのである。

様々な形で成形してみた結果、千代土をロクロ成形するためには、よほどの勘と経験が必要であろうと感じられた。他の土での成形の経験は、この土には通用しないほど、ある種の正確さを求められるからである。逆に言えばこの土が使いこなせれば市販の他の土は容易に扱えるようになるといえるほど難しい。ロクロ成形は土を曳き終わった後、すこし乾いてきてから「高台削り」をしなければならない。作品の厚さに合わせて、1㎜の厚さの時には、このくらいの高台、3㎜ぐらいのときにはこのくらい、そして5㎜以上のときにはこの程度と、勘を磨ぎ澄ませて行なわなければならない。「信楽土ならばこのくらいでできるのに」といった勘がこの土には通用しなかった。現在焼け残った作品は、全て偶然運よく残ったとしか言いようがない。今のところ厚さと高台との関係を系統的に整理することはできていない。技量の未熟さを恥じるばかりである。ともかく現在までのロクロによる成形実験で言えることは、千代土には、市販の土にはみられない、ある種の脆さを持っているということである。このもろさを越えてあえて作品にしようとするならば、余程の経験と、それに裏打ちされた勘が必要になるであろう。

この実験初期に感じたいわゆる「脆さ」は、寝かしの期間により緩和されることがわかったが、基本的なところでは、現在に至ってもなお消えてはいない。寝かしのところで記したように、作品化が困難であると判断するか、あるいはこれからの寝かしの期間によって希望を繋ぐか、の選択はいずれしなければならないのだろうと感じた。先の考察で須恵器焼成ができなかった場合の理由とは、ここまでのところで述べてきたことが理由なのではないかとも思えた。

千代土の焼成結果

焼成の結果は、他の土との混合実験の際、比較対象の基礎資料として、千代土のみのものを数回焼成しているので、その結果と試作資料を参考にしてもらいたい。ここで特に記しておきたいことは、焼成時のひび割れと破損のの特徴についてである。これは乾燥時の切れとは少し違う。千代土は高温の際に、熱に耐えられなくなって、しばしばひび割れたり亀裂が入ったりたりした。特に器物を作った時に割れた場合、毎回同じような割れ方をした。

高台の裏側にS字型の亀裂が入るのは、土練りや土ころしが不十分なためであり原因が明らかであるが、高台から胴にかけてT字を逆さにしたような亀裂と高台を中心に放射状に胴に向かってはしる亀裂が頻繁にみられた。

⑵　半磁器粘土との混合実験

平成2年7月10日から8月28日まで

千代土の陶土としての可能性は、千代土のみの基礎実験でもあきらかなように、この土を精土してそのまま使用するには困難な要素が多い、ということが明らかであった。となれば欠点を補い、陶土にする方法を考えなければならない。その方法でまず考えられるのは、他の土との混合である。

実は日本各地で、何々焼と称して製作される陶磁器も、その大半はこの他の土との混合によって陶土にしたものを使い作品にしているのである。それだけ土地の土だけをそのまま使用するのは難しいということである。

千代土の特徴をできるだけ生かすことを優先し、初めに手懸けた混合実験は半磁器粘土との混合であった。

半磁器粘土混合実験

A　千代土：半磁器粘土

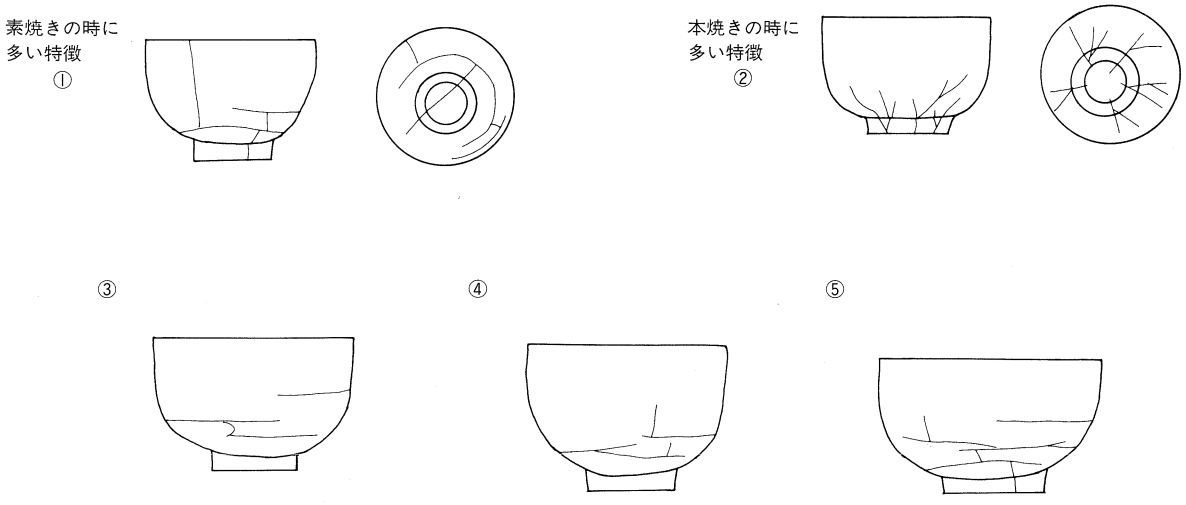
①6：4　②7：3　③8：2　④9：1　⑤10：0（基礎実験資料）

ロクロ成形での特記事項；成形時の含水量増加で、（こし）が急速に劣化する。

B　　素焼き焼成温度　700℃　焼成速度　100℃／30分　　3時間で680℃

半分磁器粘土2割以上混合のもの、亀裂なし。混合は2割以上が適当であろう。胴を袋形にすると弱くなる。亀裂が横に向かってのびるのは土の脆さに原因があるのであろう。

C　①の本焼き焼成結果　1100℃　4時間　七宝窯



第207図　ひび割れの特徴

生地の焼成色　濃赤色　釉の定着　良好（はじき　とび　流れ落ちなし）

千代土10割のものよりも、やや褐色が薄くなる。これは磁器土の石英のせいで、しかたがない。

D　テストピースによる焼成後の収縮率　混合比率

②　8：2の場合

素焼き　17　88　7.5

本焼き　15　82　7　1　5

本焼き収縮率はおおよそ18%

半磁器粘土2割混合により陶土として使用可能性大（良好）

＊A　B　Cまでの実験は8/28までに同様のことを3度繰り返し、3度ともほぼ同様の結果であった。

⑶　信楽粘土との混合実験

市販の信楽粘土は様々な用途に合わせ、種類も豊富で、また陶器土、半磁器土の両方の特性も合わせ持っているため、他の土を混合する場合に最もよく使われる優れた土である。この土を使い混合実験を行なうということは、千代土にとって、他の土との混合とその比率に関して、いわば基軸ともいえる基本的なデータとなり得る。

この実験を思い立った当時、まだ本校に焼成窯は設置されていなかったため都幾川村舟の沢窯の山田奏さんにお世話になり土をガス窯で高温焼成してもらった。以下はその結果である。

テストピースとして、半磁器土実験と同じに第208図のようなものが用意された。

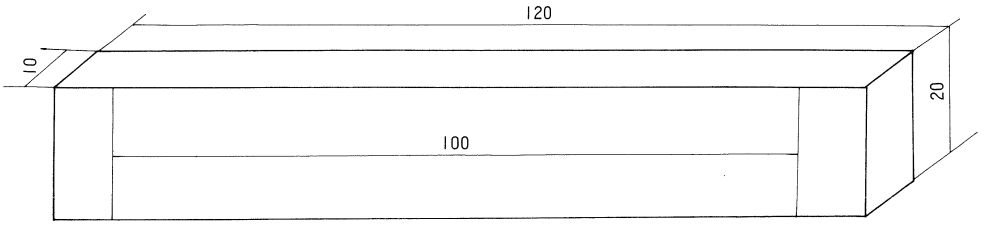
地層の3段階の色別に、上から順に　赤　白　青と区別しそれぞれに信楽土を混合し、素焼き、本焼きの焼成を行い、収縮と焼成色を観察した。数字は上段が素焼き後の測定値、下段が本焼きの測定値である。また左から、20　、100　、10　の焼成前寸法が、焼成後収縮した結果以下のような寸法に変化したことを示している。

	赤土	：	白土	：	青土
千代土のみ					
素焼		：15	86 6.5	：16.5	86　7
本焼	15　79　6	：14	80　6	：15	80　6.5
信薬1却	16　86　7	：16	85　7	：17	87　7.5
	14.5　80　6.5	：15	80　7	：16	81　7
信薬2却	16　86　7	：15.5	86　7	：17	88.5　8
	15.5　82　7	：15	80　6	：15.5	83　7
信薬3却	17　88　7	：16	88　7	：17	88　8
	16　82.5　7	：15	82　7	：15.5	82　7
信楽4却	16　88　7	：15	88　7	：17.5	89　7.5
	15　83　7	：15	82.5　7	：16	84

焼成温度　素焼　800℃　本焼1250℃

酸化焼成であったが、焼成色は還元焼成のような金属的な鈍（にび）色となった。備前焼を思わせるような焼成結果であった。炻器粘土であるという推測が正しかったことを判断する材料が、ここでまたひとつ増えたような気がした。

信楽土を混合した結果をみると、赤　白　青　つまり地層の段階での土の変化は無く、心配された青みも、焼土に及ぼす影響はほとんど無いとみてよいのではないかと思う。また収縮率では、千代土は確かに収縮率が高い粘土であるといえる。乾燥切れやひび、そして歪みが多いのも、この収縮率の高さに原因があるようである。信楽土を混合するとまず歪みの度合いが少なくなる。そして本焼焼成では千代土のみで焼いた場合2割がた縮むのに対して混合の後はたとえそれが1割であっても、2割強の収縮を以下に押さえられることがわかった。そして混合の割合を増やすほど収縮を押さえることができるとい



第208図　テストピース

うこともわかった。

焼成色については、信楽土は白色の鉄分を含まない土であるため、混合の比率が多くなれば、千代土のみのときの焼成が薄められるかたちになる。つまり金属的な鈍色が、混合比率の度合いにより徐々に赤みがさして、陶器らしい色になってくるのである。山田さんによれば2～3割のものが陶器としては適当なのではないか、という言葉をいただいた。

平成3年7月から8月にかけて行なった町教委主催の婦人教育学級陶芸教室で使用した粘土は、この実験データをもとに信楽急熱急冷耐性粘土（一般に荒土といわれる粘土）を使い、混合比7：3で作成したものである。千代土の特長を生かしつつ、欠点が補われ、良い結果を得ることができた。あの時に集まっていただいた方々は、初心者が多く、その意味では、この土の混合比であれば初心者でも十分に製作可能な土であるということを大勢の方々に証明していただいたことになる。

以上のように信楽粘土を混合した場合は、千代土の強度の面で、また収縮率を押さえる面でも、大変よい結果が得られた。混合は、焼成色、収縮のことを考慮すると2割が適当である。千代土は信楽土を2割まぜれば陶土として使用可能であると判断できる。ただし、陶器土を混ぜたことにより、透水性が問題となる。つまり水をもらす焼き物になるということである。また色の問題として、鈍色をひとつの長所ととらえるか否か、について考えなければならない。半磁器粘土の混合でも同じ事がいえるが、これらの土を加えると焼成色は赤みが現われて、陶器らしくなる。だが当初の考案のように千代土をあくまで焔器土として追求していくのであれば、陶器らしさを求めるよりも、炉器としての特長を助長したほうが、より望ましいのではないかということも当然検討しなければならないことである。

他の土を2割程度混合することにより、千代土は陶土としての可能性が確かなものとなる確信が持てた。ただし焼成色のことを優先させれば、半磁器土の混合では不十分である。であるならば一般に炻器粘土と言われているものを混合してみれば、透水性の問題も色の問題も解消できるのではないか。という考えに基づき、これ以後の実験では備前粘土田土を使用することにした。

⑷　備前（田土）粘土混合実験

動植物の各種類の中に属があるのと同じように、炻器土にはその成立の形態により性質が異なる土が数々ある。千代土は炻器土には違いないと判断したが、炻器土の中でも、火山灰土に属す可能性が高く、次に頁岩粘土である可能性も高い。これに対して備前の土は流紋岩が風化し海中に沈積した、いわば磁器系の赤色粘土である。すでに半磁器による実験を行なっていることから、もし炻器土を混合し実験するのであれば備前土がふさわしいのではないか、と考えた。

このことにより、まずテストピースをつくり収縮率の実験を行なってみた。

千代土：備前土　（Bは整理するための記号）

B1　9：1　　B2　8：2　　B3　7：3

この実験過程で備前土の感触から、この土は可塑水量の高い土であると思えた。千代土の含水量に合わせて杯土を作ると、備前土は可塑水量の限度を越えていることになる。そこで可塑水量の影響を調べるため、備前土の可塑水量に合わせた杯土も、念のため作って同時に焼いてみた。上記のテストピースB2、B3に対応するように含水量を増やしたものを二つ用意したのである。

1205℃による焼成結果収縮の状況　（数値の順は全テストピース共通）

BI	B2（1）	B3（1）
18　84.5　9	19　85　9	19.5　85.5　9
	B2（2）	B3（2）
	16　83　7	17　84　7.5

焼成色に関しては、混合比率が高くなると、焼成色は茶色が強くなり千代土とは異なる色になることがわかった。そしてまた、焼成後BI　B2（1）B3（1）はかなりのひび割れが認められた。このことで実験前に危惧した、可塑水量の問題が重大であることを確認した。B2（2）B3（2）は、ほとんどひび割れが認められなかった。つまり備前土の混

合は、粘土の含水量が大きく左右するということである。備前土の含水量に合わせて杯土を作ると、ロクロ成形はできるが、手びねりや輪積みが困難になる。授業や婦人学級で使用する必要から混合比率と可塑水量の関係を再び検討した。そしてロクロ成形の場合でも手びねりの場合でも、備前土混合率を30～50%にするとひび割れの確立が極端に少なくなることがわかった。

参考までに、授業のためと、婦人学級のために用意した混合杯土の比率を記しておく。

・千代土：備前土：信楽土＝6：2：2　7：2：1

・千代土：備前土　　＝　　7：3

この比率で含水量を、千代土の可塑水量よりもやや多めにすれば失敗の少ない杯土になるという結果を得た。また混合比5：5実験結果はかなり良い結果が得られたが、千代土が半分になるというのは、陶土としての可能性を探るという研究の趣旨から離れてしまうのではないかと思った。

（試作参考）

⑸　焼成原土粉（シヤモット）の混合実験

この実験は⑵～⑷までの、他の土との混合杯土実験とは異なる精土した千代土に、原土から作ったシヤモットを混合したら、これにも陶土としての可能性があるのではないだろうか。という推測をもとに手がけた実験であった。粘土が歪みやすく、焼成時のひび割れが認められる場合、素焼き焼成粉（シヤモット）を混合し、土を強くする方法がある。この方法を千代土にもとってみた。

テストピースによる焼成実験は、煉瓦型のもので行なった。その結果は、寝かし1年の千代土に2割の原土シヤモットを混合したものを1250℃で焼成して、平均23.07%の収縮。寝かし無しのものに3割の原土シヤモット混合で同温焼成だと、平均18.76%の収縮率、ただしこれは亀裂が入った。このことにより、やはり寝かしの期間が重要であることと、混合比率によりかなりの収縮の変化があるということが分かった。

成形の実験として、原土で作ったシヤモットを、千代土（寝かし1年間のもの）に50%混合したもの、30%混合したものを用意した。そしてそれを小物と壺づくりに使ってみた。

焼成後、予想外の結果が得られた。上記したように煉瓦型にしたものが、その厚さにもかかわらず焼成できた。そして小物類（一輪差し型のもの）は6個のうち5個が完全に焼成できた。また壺は3個のうち2個が、完全に焼成できた。焼け残る確率としては、今までの実験のうちでは群を抜いていると言える。（試作参考）　過去半磁器土の実験の時に、千代土：半磁器土を混合比率6：4で実験したことがあり、結果はほぼ100%焼成可能であった。この結果は、この時以来の良好な焼成結果であった。

⑹　野原原土について

千代土の実験をする過程で、採取しておいた野原の原土を成形・焼成してみる機会があったので、その結果を参考として記しておく。

結論からいうと、この土は大変優れた白色粘土であるといえる。精土してから全く寝かしなしの状態で、何の遜色もなくロクロ成形ができる。そして触感は、極めて磁器粘土に近く、それでいて磁器粘土のような「でろり」としたところがなく、かなり扱いやすい。欠点は、乾燥時の実質的な脆さかもしれない。しかし焼成後はこの欠点も消え、白色のまま柔らかでこまやかな印象を与える焼き上がりになる。陶土としての可能性は千代土よりも高い。

5　結果とまとめ

第75表は現在までの実験結果をまとめたものである。

表をみるときの留意事項

・含水量は成形時の触感に重点をおいて、可塑水量が適切であるものを「適」とし、それよりも水分の多いものを「多」、少ないものを「少」とした。

・テストピース収縮率は、実験を行なった全ての平均値とした。したがって少数第2位までの数値があるものは、データの数が多かった事を示している。

・色調は千代土のみの焼成色を基準として語句を考えた。

第75表　混合土焼成収縮率結果表

混合土		テストピース					成形品		
	混合比率	含水量多適少	窯形式	収縮率平均 素焼%	収縮率平均 本焼%	色調	品種	透水性	本焼成無亀裂確立%
千代土	純度	少	灯油	17	19.5	灰黒の赤	ぐいのみ	無し	16%(3／18)
		適	ガス	14	20.33	鈍色			
半磁器土混合	10%	適	七宝			濃赤	ぐいのみ	無し	40%(2／5)
	20%	適	七宝	12	18	赤	花瓶等	無し	62%(5／8)
	25%	適	灯油	12	17	白味赤茶	皿等	無し	71%(5／7)
	50%	適	灯油			明赤茶	茶碗	無し	100%(12／12)
信楽土混合	10%	適	ガス	14	19.66	鈍色	ぐいのみ	無し	37%(3／8)
	20%	適	ガス	13.16	17.66	灰赤	花瓶等	?	71%(5／7)
	30%	適	ガス	12	17.83	黒赤	茶碗	?	75%(6／8)
	40%	適	ガス	11.7	16.83	赤茶	皿等	?	100%(8／8)
備前土混合	10%	少	灯油		16	茶赤			
		多	灯油		17	茶味の赤	ぐいのみ	無し	20%(1／5)
	20%	少	灯油		15	茶赤			
		多	灯江		17	茶味の赤	茶碗	無し	37%(3／8)
	25%	適	灯油	12	18.5	濃赤茶	茶碗等	無し	75%(6／8)
	30%	少	灯油		14.5	赤茶	茶碗等	無し	
	50%	適	灯油	10	16	黄味赤茶	花瓶	無し	72%(8／11)
焼土粉	20%	多	灯江		24.7	鈍い暗赤	壺花瓶	有り	91%(11／12)
	30%	適	灯油		18.88	赤茶	壺花瓶	有り	

・テストピース焼成時と成形品の焼成時の窯形式は一致していないものがある。

・本焼成無亀裂確立の（ ）内の数値は本焼した数を分母とし、無傷(微妙なひび割れを除く)で焼あがったものの数を分子とした。

ここにあげた実験結果は断続的な実験をまとめたものであるだけに、条件の統一性に欠けている。例えば混合杯土の焼成実験で、千代土よりも低収縮の他土を混ぜる場合、その土の混合比をあげれば当然千代混合杯土の収縮率も低くなるはずである。表の各数値もおおむねそのような結果が現われているが、部分的にはそれが逆転している箇所がある。これは含水量の問題や寝かしの問題そして焼成温度、さらには季節等、条件が統一できなかったためにおこった結果だと思う。また全体的には実験量は多いが、混合杯土別にみると、データは決して量が多いとはいえない。したがってこの表にまとめた結果だけで可能性を判断することは危険であろう。正しく判断するためには、統一された条件のもとで、もっと大量のデータが必要であることは承知している。しかし本研究の実験とその結果はこれが全てであり、結果の信憑性を云々するよりは、これらをもとにできるだけ客観的に結果をまとめてみた。

ただし実験途中で経験的に感じ取った感覚というものがある。たとえば「この土の場合何割混ぜれば、10個のうち何個は焼けのこるはずだ」という経験による直観的な感覚である。実際にいままでこの土に触れ、形を作り、焼いてきたわけであるから、私個人の中にはこの直観的な感覚がかなりある。憶測や先入観はできるだけ排除しなければならないが、この感覚は結果の読取りのなかに加味したいと思う。

このことを念頭に、実験結果から千代土の陶土としての可能性について次のようにまとめてみた。

A　基本的に千代土は、高温焼成が充分可能な、焼成色の極めて美しい土である。

これがまず第一にあげられる。この土は1260℃で焼成しても溶解しないという長所を持っている。物質的に条件を備えていながら、その実焼いてみると溶解してしまい使いものにならない土は多い。特に火山灰土にはその傾向があるらしく、それらは1200℃前後で飴のように溶けてしまう。しかし千代土はこの傾向が全く見られず、これがこの土の最大の特長であるといえる。また焼成方法にもよるが、焼成色が美しい赤である事も長所のひとつとして考えたい。焼成色のこと考慮するならば焼成温度は1230℃前後が良いようである。

B　千代土は透水性が全くない、炻器粘土として使用できる。

焼けば水を透さない粘土であるということは、無釉で焼成できるということである。このことにより作品の利用範囲はかなり広がる。

C　千代土は、寝かしの期間にもよるが、この土のみの杯土でも、作陶が可能である。ただし作陶の可能性を拡大するためには、二つの方法をとる必要がある。

千代土を杯土にした場合、現在のところその焼成確立は極めて低い。しかし焼け残こる小品があることを考えると、可能性を否定することはできないと思う。今後の寝かしの期間により、起る変化に期待したい。

そして作陶の可能性拡大のための二つの方法であるが、その一つとして他の土との混合が考えられる。千代土の短所を補う土として、第一に半磁器粘土をあげたい。この土の混合は比較的小量でも千代土の強度を増すことができるからである。混合比率は25%前後が望ましいと思われる。ただし焼成色は千代土の特長を生かすことができない問題点を持っている。つぎに信楽土であるが、これもほぼ半磁器土と同様のことが言える。しかし透水性についての疑問が残されている。実験では確認できなかったが、陶器土であれば水を透すであろうし、千代土に混ぜた場合、特長を損なう心配がある。そして備前の土についてであるが、この土の混合は強度の増加、焼成色の維持ともに期待していた程の効果が得られない結果であった。収縮率は押さえられるが含水量の調整が難しいという問題点もある。あえて混合するのであれば、30%前後が望ましい。

方法のもう一つは、千代原土を粉砕して、漉した

ものを焼成して作った焼土粉（シヤモット）を混合する方法である。私個人的にはこの方法には今後大きな可能性があると思う。まず他の土を混合しないため本来の焼成色が得られるという利点がある。そして、しかも焼成確立は格段に高くなり、100％に近い。厚さにかかわらず焼成できるため煉瓦のようなものも焼成可能である。しかし実験の結果、シヤモットを混合すると透水性が現われるという問題点がわかった。今後この点の解決方法がわかれば、煉瓦や瓦、土管といった実用的なものの製作も可能になるであろう。

D　千代土は形状記憶の性質が、土の特性のために比較的少ない。

形状記憶性とは、成形時の圧力等を粘土が記憶していることである。これが強いと成形時指を強く押し当てたところが焼性後盛り上がったり、ロクロで長時間回転させて作った物が、焼性後ねじれ戻ろうとして切れたり、歪んだりする。そうなると大きな花瓶等のロクロ成形は難しくなるが、千代土はすでに「脆さ」について説明したように、この脆さによって形状記憶の性質が弱くなっているのである。

これまで記してきたように、千代土には欠点はあるものの、作陶の可能性を充分に持ちあわせた土であることが判断できると思う。そうなれば次の段階として考えなければならないことは、より正確な可能性を導きだすために、より詳細な実験と考察を重ねることである。これからも私なりに実験を続けていくつもりである。

また、確認し得た事柄については、この土を生かす方法を検討していくことも必要であろう。この点に関しては、すでに町の陶芸教室や本校生徒への授業でこの土を扱ってきた。また、昨年この土を使って、「おどるワイン」の容器を考案しよう、という授業を行なってみて、自らの土地の土を使用することの意義を再確認させられた。自分たちの足下の土というものに、住んでいる土地への思い入れを加え、他の題材にはない愛着のようなものが生徒の活動の中に感じられたのである。このような感覚は、その土地に住む者だけが共有できる「何か」を持っているのではないだろうか。そうであればこの感覚の共有を、町全体に広げたときに、この土が持つ本来の意義が再生されるような気がする。あえて再生と述べたのは、過去この土地でこの土を使い、そして生活を営んでいた人間が確かにいたという事実を踏まえてのことである。

土を焼き、自らの生活に生かすという行為が途絶えてから、すでに1世紀以上も経っている。こうして2年あまりこの土に関わってきた私としては、1000年を越える間眠っていたこの土に、何よりも「今の人間が生かす道」を与えてみてはどうかと思うのである。　　（杉田　功）

注　本稿は江南町教育委員会へ教育研究事業のレポート（平成元年度）として、提出されたものであるが、この成果を机内に納めたままとせずここに掲載させていただいた。杉田氏は平成8年に比企郡滑川町中学校へ転出されたが、江南中在籍時の功績であったことを感謝するとともに、今後のご活躍、研究の進展を祈念します。

また、掲載を快諾いただきお礼申し上げます。

『江南町千代地区地下（粘土層）原土の陶土としての可能性』読後感

陶芸を学ばれ、日常繁多な中作陶を続けられる努力によるのか、江南町域に埋蔵された粘土を陶土として利用できるのではないかととの予測をもたれた感性に先ず注目したい。次に、この仮定をみずから検証していくわけだが、その過程は、一つ一つの事実を丹念に積み上げて初めて得られる。しかもその一つ一つの手続きは幾度も繰り返しえされた実験の結果と統計に裏付けされている。ほとんどの研究時間はこの作業に費やされたのだろう、困難だが楽しい時間でもあったのだだろうか。こうした綿密なデータと真摯な研究態度には、得られた事実のほかにも学ぶべき点が多い。

研究レポートの要旨は、江南町域に埋蔵された粘土が陶土として利用できるのか否か。単純だが実証的な検証を経なければ研究といえず、まして他者を納得させることはできない。研究の端緒として、過去の歴史を振り返って町域より出土する土器や埴輪の焼き物等の遺物の検証を行なっていることは、研究の方向性を得るためのもくろみとして正しい方法といえる。遺物に触れることによって実験結果と対比できそのことによって得られる情報は、研究の精度を高めてくれるはずである。例えば生地土の混和材等の混合の比率などがそうである。第2は、粘土の性質を科学的・地質学的に考察することが必要であり、当然他の地域で現実に利用されている陶土との比較をおこなわれる。ここまでの検証は、段階的だが全く順調であった訳ではないであろう。何れも手作業を伴う神経質な工程である。土の選別・精選・練り・漬かしに必要な時間と工程、そして、粘土塊から「うつは」への成形の熟練さが前提にある。

やっと、窯入れにかかるわけだが焼きにかかる温度管理をきちんと経なければよい結果が得られない。さらに、これらの個別のデータを記録し、整理しなければならない。これらの実験は平衡するデータを得るまで何度でも繰り返される。実験だから当然ともいえるが多くの時間と労力を要したことは想像に難くない。実験データとその結果については、資料の取り扱い、実験結果の解析と矛盾はみられない。陶器の作成には、技術的な面でロクロ成形等の熟練の差が決定的に製品陶器の良否を左右するが、完成した製品を見るかぎり優れた技術がしっかりとみについていることがうかがわれ、結論の精度を高めているように思われる。

江南町域の地下に埋蔵された粘土（川本粘土層）が陶土として利用できること。これは、歴史上の遺物として推定されはいたが、学問的に実証的に証明されたのは初めてのことである。一派には驚きをもって向かえられる研究かもしれないがこの事実は間違いのない事実である。研究者の希望のとおり、この研究成果が町の文化創造に生かせる日がくることに期待したい。研究者には今後も教育現場でそのような地域に、文化に目を向けることのできる人造りをしていただきたいと思う。　　（新井　端）

註、本文は、平成2年、教育事業レポートに掲載したものである。

第５章

総　　括

第5章　総　　括

千代遺跡群の発掘調査が終了して今年で早5年の年月が経ってしまったが、ここに、千代遺跡群の発掘調査報告の第2集として、『弥生・古墳時代編』を刊行することができた。これも、現地での発掘調査や報告書の作成作業に携わった方々の地道な努力と、関係各位のご指導・助言の賜物であると衷心より感謝の意を表する。

今回の報告書は、町内初の弥生時代の集落跡の調査となった姥ヶ沢・富士山遺跡を始めとして、県内でも調査例の少ない姥ヶ沢・権現坂遺跡の埴輪窯跡の調査報告を収録している。

以下に、時代別に各遺跡の概略を記し総括としたい。

弥生時代

姥ヶ沢遺跡－第2調査地区において、弥生時代後期の住居跡7軒、土坑25基が検出されている。住居跡は全て焼失住居であった。床面に残された遺物は、完形品が少なく転用品が目立つ。住居跡に近接して検出されている円形の土坑は、住居跡に付帯する屋外施設と判断され、近隣の川本町焼谷遺跡・白草遺跡等においても同様の土坑が検出されており、本地域周辺に特徴的な該期の一般的な集落構成を示しているものと考えられる。弥生時代の集落は、1983年に調査の行われた第1調査地区においても1軒の住居跡が検出されており、今回の第2調査地区とは250m程の距離を測り、間には古墳時代の集落が介在している。集落の展開は、線的な調査のため推測ではあるが、遺跡の西側に南へと侵入する開析谷の谷頭を囲むように展開する第2調査地区の集落と、台地縁辺部の平坦地に展開する第1調査地区の集落に2分される可能性が考えられる。和田吉野川に望む谷津に沿って所在する弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落であり、和田・吉野川流域の平地で農耕生産を始めた頃の集落であったと考えられる。

富士山遺跡－第3調査地区において、弥生時代後期の住居跡7軒が検出されている。第25号住居跡出土遺物は、櫛描文土器（樽式土器）の比率が高い。頸部が屈曲し、胴部が球形に強く張出すことから、弥生時代後期でも終末期に属するものと考えられる。江南台地においては、櫛描文土器の出土例がほとんど無く、終末期段階での櫛描文土器の流入および、いわゆる岩鼻式土器との関係を考える上で貴重な資料を得ることが出来たといえる。

古墳時代

姥ヶ沢遺跡（集落）－第2・5・8調査地区において、古墳時代前期の住居跡14軒が検出されている。線的な調査のため推測の域を出ないが、集落は南北160m、東西120m程の規模で展開しているものと考えられ、比較的規模の大きな集落と判断される。第10号住居跡の南西隅からは、床面からやや浮いた状態でミニチュア土器が10点程まとまって出土している。周囲からは器台・坩・甕がほぼ完形に近い形で出土しており、遺物の廃棄の背景に何等かの意図があったものと推測される。

姥ヶ沢遺跡（埴輪窯跡）－台地奥の開析谷筋で、6世紀初頭の埴輪窯跡が8基集中して検出された。本窯跡群は1980年に段丘崖線部で埴輪窯が確認されており（A地点・新井1983）、従って今回報告した窯跡群はB地点と呼称した。遺物は多量の円筒埴輪と少量の形象埴輪破片・土師器破片が出土している。窯跡群は上下二段に重複しており、その堆積状況や埴輪の年代観から、短期間に集中して操業していたことが予想される。出土埴輪の器種構成や円筒埴輪の編年観から、埴輪窯跡としては現時点では県内最古段階のものと思われる。出土した円筒埴輪の大半は2条突帯3段構成品であり、大半は各段階の間隔がほぼ均等なものである。増田逸郎氏の見解（増田1987）によれば、2条突帯3段構成の小形円筒埴輪は小円墳に樹立される場合が多く、本窯が埴輪を供給した古墳は小形のものであったと考えられる。ま

た、出土した子鹿の頭部は、まだ角の生えない子供の鹿をやさしく表現した優作である。本埴輪窯跡は、生産体制や供給先の問題、周辺の埴輪生産遺跡との比較・検討など、今後解明すべき点の多い遺跡である。

権現坂埴輪窯跡群－従来知られていた東群とは開析谷を隔てた西側が調査対象となった。調査の結果、台地を浸食した開析谷の開口部付近で10基前後の埴輪窯を確認し、台地上において工房と思われる住居跡2軒を検出した。埴輪窯は一部確認調査を実施したのみで、縦位に重複する4基の窯跡が検出され、大形品を含む円筒埴輪と馬形埴輪の出土を見ている。工房と思われる住居跡はカマドを持たず、鬼高II式期に属する土師器と共に埴輪片が出土している。今回の調査によって本窯跡群は、県内でも最大級の埴輪生産遺跡である可能性をもった遺跡であることが判明した。その供給先は出土円筒埴輪の中に大形品を含んでいる点から、首長墓クラスの大形前方後円墳であったと思われ、埼玉古墳群への供給も多分に考慮される所である。

東群については、昭和37年に発掘調査が行われている(小沢1964年)。直径1m、高さ1.4m～1.5m 4本突帯の大形の円筒埴輪が確認されている。これと同型の埴輪が埼玉古墳群で出土しているのをみると、埼玉古墳群の造成時に埴輪生産が行われていたことは十分考えられる。製品はすぐ近くを流れる荒川を利用した舟運であったことも推測できる。当時の荒川は、埼玉古墳群付近を南流していたといわれることを考えると、その観を一層強くする。なお、この東群より出土している盾と戈を持った武人埴輪は珍しいものであり、作品としても優品といえる。顔の表情も切長の眼、眉など丁寧に仕上げてある。頭上の筒を横にしたような髷もよく目立つ。このような埴輪は大形古墳に樹立されている例が多い。古墳から出土したものでないので完成品とは思われないが、盾と戈を持った代表的な武人像といえる。盾の上縁にやや斜めに2本の条痕があることから、戈ではなく戟であったかもしれない。通常戟の上部は鉾状になっているのであるが、その鉾の部分が剝落したとも考えられるからである。

姥ヶ沢・権現坂両窯跡とも同じような環境に立地していることは注目される。両窯跡とも、北・北西に斜面を持つ谷津に沿っており、近くに沼・池等の水場がある。ローム台地の下部は粘土層となっており、原料の採掘が容易であり、近くの雑木林は格好の燃料となった。秋から冬更に春にかけて吹く北西の季節風は、北西斜面に築いた燃料を燃やし、火の回りを良くする窯であった。

以上、各遺跡の概略を記したが、今回確認された権現坂埴輪窯跡の西群は、本年度、町の指定史跡に指定されると聞いている。これも、造成工事途中にもかかわらず、道路の設計変更を承諾された株式会社埼玉地域開発公社および、地権者の方々のご理解によるものであり、本遺跡の保存のため調整を行った者としてはたいへん喜ばしいことである。今後の史跡としての活用に期待して総括とする。

（柳田敏司）

参考引用文献

赤塚次郎　1979「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号

赤塚次郎　1980『コナベ古墳前方部南外堤発掘調査報告書』奈良市埋蔵文化財調査報告書　奈良市教育委員会

新井　端　1983『姥ヶ沢遺跡Ⅰ』　江南村文化財調査報告第4集　江南村教育委員会

新井　端　1991「姥ヶ沢埴輪窯跡群」『歴史読本』第36巻3号　新人物往来社

新井　仁　1994『下高瀬上之原遺跡』　(財)群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団調査報告書第117集群馬県教育委員会他

飯島克己・若狭　徹　1985　「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号

飯塚武司　1984「北武蔵における埴輪生産の展開」『法政考古学』第9集　法政考古学会

飯塚誠他　1981『西大室遺跡群Ⅱ』　土地改良事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報　前橋市教育委員会

飯塚　誠　1993『少林山台遺跡』　群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団調査報告書第153集　(財)群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団

石岡憲雄　1982「吉ヶ谷式・岩鼻式土器について」『研究紀要第4号』　埼玉県立歴史資料館

石塚久則　1980『塚廻り古墳群』　群馬県教育委員会

石塚三夫　1996『伊勢原遺跡』　寄居町遺跡調査会報告第6集　寄居町遺跡調査会

礒崎　一　1992『白草遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

市原寿文他　1995『遠江堂山古墳』　磐田市教育委員会

井野誠一他　1991『芳賀西部団地遺跡』　芳賀団地遺跡群第4巻　群馬県前橋市教育委員会

井上義安　1989『小幡北山埴輪製作遺跡』　茨城県東茨城町教育委員会

犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』第1号

茨城町教育委員会　1989　『小幡北山埴輪製作遺跡』　茨城町教育委員会

今井　宏他　1984『屋田・寺ノ台』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第32集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

今泉泰之他　1980『埼玉・稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会

今泉泰之他　1981『割山遺跡』　深谷市埋蔵文化財調査報告書　埼玉県深谷市割山遺跡調査会

今津節生　1992『登山1号古墳出土遺物調査報告書』　厚木市教育委員会

江原昌俊　1993『岩鼻遺跡(第2次)』　東松山市文化財調査報告書第21集　埼玉県東松山市教育委員会

大木紳一郎　1995「弥生土器」『中高瀬観音山遺跡』　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告第194集　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　群馬県教育委員会

大里郡市文化財担当者会　1992　「大里地域の遺跡」『埼玉考古』第29号　埼玉考古学会

大塚初重　1976『茨城県馬渡における埴輪製作址』　明治大学文学部研究報告　考古学第6冊　明治大学

大屋　徹他　1996『新屋敷遺跡C区』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第175集　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団

岡本健一他　1989『日置荘遺跡(その5)』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

岡本健一　1997『将軍山古墳』　史跡埼玉古墳群整備事業報告書　埼玉県教育委員会

荻野繁春　1984「円筒埴輪製作技法の一断面—基部のつくり方について—」『福井考古学会会誌』第2号

小沢国平　1964「江南・権現山窯跡」『台地研究』第14号　台地研究会

柿沼幹夫　1981「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号　土曜考古学研究会

柿沼幹夫　1982「川本町万願寺出土の遺物」『埼玉考古』第25号　埼玉考古学会

柿沼幹夫　1987「埼玉県北西部地方の櫛描文土器」『埼玉考古』第28号　埼玉考古学会
柿沼幹夫　1996「方形周溝墓出土の土器」『関東の方形周溝墓』　同成社
笠井敏光　1981『野々上窯跡群』　古市遺跡群III　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書7　羽曳野市教育委員会
笠井敏光他　1984『古市遺跡群Ⅴ』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書9　大阪府羽曳野市教育委員会
笠井敏光　1992「埴輪の生産」『古墳時代の研究』9　古墳III　埴輪　雄山閣出版
堅田　誠　1992『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』　石川県小松市教育委員会他
金井塚良一他　1987『討論　群馬・埼玉の埴輪』　あさお社
金子直行　1993『四反歩遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
鐘方正樹他　1991「菅原東埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』　奈良市教育委員会加部二生　19　「IV　成果と問題点」『塩ノ久保遺跡』　一般県道磯部停車場線緊急地方道路整備A（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　安中市教育委員会
川西宏幸　1973「埴輪研究の課題」『史林第56巻第2号』
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』
川西宏幸　1988「円筒埴輪総論」『古墳時代政治史序説』　塙書房
岸本道昭他　1990『陶邑・伏尾遺跡』　大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第60輯
車崎正彦　1995「関東における埴輪製作者集団」『日本考古学協会1995年度大会研究発表要旨』　日本考古学協会
久保康博他　1986『貝沢柳町遺跡』　群馬県高崎市文化財調査報告書第74集　高崎市
栗原文蔵　1974「行田市須賀大稲荷古墳群について」『埼玉考古』第12号　埼玉考古学会
黒田　晃　1992「円筒埴輪から見た今井神社古墳の築造年代」『研究紀要9』　財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
黒田　晃　1995「4号墳の円筒埴輪について」『波志江今宮遺跡』　（財）群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団調査報告書第181集　群馬県教育委員会他
群馬県立歴史博物館　1994　『埴輪』第46回企画展示図録
恋河内昭彦　1990『塩谷下大塚遺跡』　児玉町文化財調査報告書第11集　埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
恋河内昭彦　1991『真鏡寺後遺跡』　児玉町文化財調査報告書第14集　埼玉県児玉郡児玉町教育委員会
小泉玲子　1994「関東出土埴輪の線刻について―記号と絵画の解釈をめぐって―」『史観』第128冊
小出輝雄　1996「吉ヶ谷式土器の系譜」『YAY！（やいっ！）』　弥生土器を語る会
江南町史編さん委員会　1995　『江南町史　資料編1　考古』　江南町
小久保　徹他　1983『三ヶ尻天王・林（Ⅰ）』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第23集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小島純一　1989『白藤古墳群』　粕川村文化財報告第十集　群馬県勢多郡粕川村教育委員会
古代を考える会　1993　『埴輪製作所遺跡の検討』　古代を考える54　古代を考える会
埼玉県立さきたま資料館　1988　『はにわ人の世界』図録
坂口　一他　1944『下高瀬上之原遺跡』　財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第177集
坂本和俊　1985「埼玉県下における円筒埴輪編年の諸問題」『第6回三県シンポジウム　埴輪の変遷―普遍性と地域性』
坂本和俊　1996「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳6』
佐藤明人　1988「樽式土器の様式推移と地域色」『群馬の考古学』　群馬県埋蔵文化財調査事業団

塩野　博他　1978　『馬室埴輪窯跡群』　埼玉県埋蔵文化財調査報告書　第7集　埼玉県教育委員会
寺社下　博　1981　『鎧塚古墳』　昭和55年度熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　熊谷市教育委員会
篠原祐一　1990　「石製模造品観察の一視点」『古代第89号』　早稲田大学考古学会
末木啓介　1994　「埼玉県におけるカマド導入期の様相―カマド、大形甑、　の形態を中心として―」『研究紀要』第11号　（財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団
菅谷浩之他　1980　『長沖古墳群』　児玉町文化財調査報告書　第1集　児玉町教育委員会
杉崎茂樹　1988　『丸墓山古墳・埼玉1～5号墳・将軍山古墳』　埼玉古墳群発掘調査報告書第6集　埼玉県教育委員会
高崎光司　1992　『新屋敷遺跡B区』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第123集　（財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団
高崎光司　1994　「環鈴研究の一視座」『日本と世界の考古学　岩崎卓也先生退官記念論文集』
田中広明　1992　「V考察―古墳時代後期の北武蔵と新屋敷東遺跡―」『新屋敷東・本郷前東』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第111集　（財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団
田中正夫　1994　『新屋敷遺跡D区』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第140集　（財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群』　平安学園考古学クラブ
田村　孝　1989　『同道遺跡群』　高崎市文化財調査報告書第96集　高崎市教育委員会
田村　孝　1996　『稲荷町II遺跡』　高崎市文化財調査報告書第142集　高崎市教育委員会
千賀　久他　1978　『大和考古資料目録』第6集　奈良県橿原考古学研究所
津金沢吉茂　1980　「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」『群馬県歴史博物館紀要第1号』　群馬県歴史博物館
寺沢知子　1990　「石製模造品の出現」『古代第90号』　早稲田大学考古学会
利根川章彦　1991　『竹之花・下大塚・円阿弥遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
永井智教　1996　「伊勢崎市丸塚山古墳採集の埴輪資料」『群馬考古学手帳』6　群馬土器観会
長井正欣　1993　『古海松塚古墳群』　大泉町教育委員会
永井義博　1989　『御門坂古窯』　袋井市教育委員会
中村倉司　1979　『宇佐久保遺跡』　埼玉県遺跡調査会報告書第38集　埼玉県遺跡調査会
中村倉司　1980　『甕神社前遺跡』　埼玉県遺跡調査会報告書第39集　埼玉県遺跡調査会
中村光司　1995　『西岡古墳発掘調査報告書』　三重県埋蔵文化財調査報告書115-5　三重県埋蔵文化財センター
中村　浩　1980　「須恵器窯の復元的考察」『陶邑I』　大阪府教育委員会
南雲芳昭　1994　「地田栗III遺跡M－1号墳・M－2号墳の円筒埴輪観察表のまとめ」『地田栗III遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
南雲芳昭　1995　「若宮八幡神社北古墳の埴輪」『高崎市史研究4』　高崎市
農林水産省農林水産技術会議事務局　1988　『新版　標準土色帳』
萩原恭一他　1994　「生産遺跡の研究4―埴輪」『千葉県埋蔵文化財センター紀要第15号』
橋本博文他　1980　『宥勝寺北裏遺跡』　宥勝寺北裏遺跡調査会
坂野和信　1987　『下道添遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第67集　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
広島県教育委員会　1983　『緑岩古墳』　広島県教育委員会
前原　豊他　1997　『小二子古墳』　大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報IV　前橋市教育委員会

増田逸郎他　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県史編さん室
増田逸郎　1987　「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』　柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
松島栄治他　1968　『石田川』　『石田川』刊行会
松原典明　1995　「立正大学熊谷校地遺跡の調査（7）」『遺跡調査室年報Ⅶ』　立正大学熊谷校地遺跡調査室
右島和夫他　1991　『下淵名塚越遺跡』　群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団調査報告第114集　群馬県教育委員会他
右島和夫　1992　『神保下條遺跡』　群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団調査報告第137集　群馬県教育委員会他
水村孝行他　1982　『桜山窯跡群』　埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第7集　（財）埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団
宮島秀夫他　1993　『岩鼻遺跡（第2次）』　東松山市文化財調査報告書　第21集　東松山市教育委員会
三渡俊一郎　1979　「愛知県内の須恵質円筒埴輪出土地」「東山古窯跡群内出土の須恵質円筒埴輪」『古代人』名古屋考古学会
村田健二　1984　『古凍根岸裏』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第37集　財団法人．埼玉県埋蔵文化財調査事業団
村松　篤　1991　『焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡』　川本町発掘調査報告書第5集　埼玉県大里郡川本町教育委員会
村松　篤　1994　『荷鞍ヶ谷戸遺跡発掘調査報告書』　川本町発掘調査報告書第8集　川本町教育委員会
森田克行他　1993　『新池』　高槻市文化財調査報告書第17冊　高槻市教育委員会
森田安彦他　1996　『千代遺跡群―縄文時代編―』　埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書1　江南町教育委員会　江南町千代遺跡群発掘調査会
安里　進　1985　「須恵器の断面色層と6世紀の焼成技術」『考古学研究第32号第3号』
山崎　武他　1981　『生出塚遺跡』　鴻巣市遺跡調査報告書第2集　鴻巣市遺跡調査会
山崎　武　1994　『鴻巣市遺跡群―本文・写真図版編―』　鴻巣市文化財調査報告書第3集　鴻巣市教育委員会
山本　靖　1991　「関東地方における埴輪祭式の受容」『研究紀要第8号』　財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
横山浩一　1978　「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』23
横山浩一　1985　「形式論」『岩波講座日本考古学Ⅰ　研究の方法』
横山浩一　1993　「刷毛目板の形状について」『論苑考古学』
吉田恵二　1973　「埴輪生産の復元」『考古学研究』第19巻第3号
若狭　徹　1990　「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳vol.1 』　群馬土器観会
若狭　徹　1990　『保渡田Ⅶ遺跡』群馬町教育委員会
若狭　徹　1991　「形象埴輪制作工人に関する一考察」『群馬考古学手帳』2　群馬土器観会
若松良一他　1987　『諏訪山33号墳の研究』
渡辺久生　1981　『野本東部遺跡群発掘調査報告書』　東松山市文化財調査報告書第16集　東松山市教育委員会
渡辺泰伸　1974　『富沢窯跡』　仙台市三神峯丘陵所在埴輪窯跡調査報告書　古窯跡研究会研究所報告第3冊

付　編

自然科学分析

1　姥ヶ沢遺跡・富士山遺跡出土炭化材の樹種分析

パリノサーヴェイ株式会社

はじめに

過去の住居構築材については、埼玉県内各地の遺跡で樹種が明らかにされつつある。その多くは、古墳時代の住居跡から出土した炭化材を調査の対象としており、コナラ属コナラ亜属クヌギ節やコナラ節が比較的多い。しかし、時代や立地環境による変化などについては、今のところ明らかではない。

本報告では、姥ヶ沢遺跡の弥生時代後期の住居跡から出土した炭化材の樹種を明らかにし、当該期の用材選択に関する資料を得る。また、古墳時代初頭（五領期）の富士山遺跡16号住居跡から出土した炭化材についても樹種を明らかにし、時代による用材の変異などを確認したい。

1．試料

試料は、姥ヶ沢遺跡の６軒の住居跡（２号住居跡、３号住居跡、４号住居跡、５号住居跡、７号住居跡、８号住居跡）から出土した炭化材65点と、富士山遺跡の16号住居跡から出土した炭化材10点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に第76・77表に記した。

2．方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結果

樹種同定結果を第76・77表に示す。姥ヶ沢遺跡８号住居跡No.2には２種類の木材が認められた。また、試料の中には保存状態が悪いために樹種の同定に至らないものもあった。それらの試料については、確認できた範囲での同定結果を記し、組織が全く観察できなかった試料については不明とした。炭化材はいずれも広葉樹で、４種類（クマシデ属・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・サクラ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・クマシデ属（Carpinus sp.）　カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に２～４（時に10以上）個が複合する。横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、１～３細胞幅、１～40細胞高のものと集合放射組織とがある。

以上の特徴から、クマシデ属の中でもイワシデ（Carpinus turzaninovii Hance）、イヌシデ（C.tschonoskii Maxim.）、アカシデ（C.laxiflora（Sieb.et Zucc.）Blume）のいずれかである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect .Cerris）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・サクラ属（Prunus）　バラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交

第76表　炭化材の樹種同定結果(1)

遺跡名	住居跡	時代・時期	試料名	用途	樹種
姥ヶ沢遺跡	2号住居跡	弥生時代後期	2号住	住居構築材	クマシデ属
	3号住居跡	弥生時代後期	No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			一括	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	4号住居跡	弥生時代後期	(SI 4)	住居構築材	サクラ属
	5号住居跡	弥生時代後期	No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No. 9	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.15	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.17	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.27	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.28	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.29	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.30	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.31	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.32	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.33	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.34	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.35	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.36	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.37	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.38	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.39	住居構築材	広葉樹
			No.40	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.41	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.42	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.43	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.44	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.45	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.46	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.47	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.48	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.49	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.50	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.51	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.52	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
	7号住居跡	弥生時代後期	一括	住居構築材	樹皮
	8号住居跡	弥生時代後期	No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
					コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No. 8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.12	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.14	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.21	住居構築材	不明
			No.26	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

第77表　炭化材の樹種同定結果(2)

遺跡名	住居跡	時代・時期	試料名	用途	樹種
			No.29	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.30	住居構築材	樹皮
			No.31	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.32	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.35	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.36	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.38	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.39	住居構築材	不明
			No.40	住居構築材	広葉樹
			No.41	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.43	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
富士山遺跡	16号住居跡	古墳時代初頭（五領期）	No.2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.18	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.24	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.27	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.36	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.41	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.43	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
			No.46	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			No.50	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。

以上の特徴から、少なくとも常緑のバクチノキ亜属や栽培種のウメ・モモ等は除外される。

4．考察

住居構築材と考えられる炭化材は、多くがクヌギ節とコナラ節で、他にクマシデ属とサクラ属が各1点認められた。住居別にみると、3号住居跡ではコナラ節、5号および8号住居跡ではクヌギ節が多い。また、2号住居跡ではクマシデ属、4号住居跡ではサクラ属が認められ、住居によって樹種構成が多少異なる。

関東地方では、これまでにも多くの遺跡で住居構築材の樹種同定が行われてきた。とくに資料数が多い古墳時代では、沿海地で暖温帯常緑広葉樹林の構成種が多く、北部の群馬県や栃木県で冷温帯落葉広葉樹林の構成種が目立つ傾向がある。また、東京都・埼玉県・神奈川県・茨城県など、内陸の台地上ではクヌギ節・コナラ節が多い。このことから、住居構築材の用材選択には遺跡周辺の植生が密接に関係していることが指摘されている（高橋・植木、1994）。弥生時代の構築材について樹種同定を行った例は少ないが、弥生時代後期では古墳時代と同じくクヌギ節・コナラ節が比較的多い。これらのことを考慮すれば、今回の結果は周辺地域における類例と調和的といえる。また、クヌギ節とコナラ節の割合の違いは、特に樹種を意識した結果ではない可能性がある。竪穴住居の構築材（特に垂木）として選択される主な条件は、屋根を支えるための強度と最低でも3～4mは真っ直ぐな材が得られることと考えられる。本地域では該当する種類としてクヌギ節やコナラ節が最も入手しやすい木材であったことが推定される。4号住居跡や7号住居跡ではクヌギ節・コナラ節以外の種類が確認されており、他の住居とは用材選択が異なった可能性もある。しかし、いずれも点数が1点のみであり、クヌギ節・コナラ節とともに使用されているので、基本的には5号住居跡や8号住居跡と同様に、周辺植生に密着した用材選択といえる。今後周辺地域で類例をさらに蓄積したい。

一方、富士山遺跡から出土した炭化材は、クヌギ節・コナラ節の2種で構成されており、基本的には姥ヶ沢遺跡と同様の用材選択がうかがえる。姥ヶ沢遺跡に比較すると、コナラ節の比率が若干多いようにも見える。このことから、基本的には周辺の植生

は弥生時代後期と同様であったが、採集地によってクヌギ節とコナラ節の比率が若干異なっていた可能性がある。しかし、焼失住居跡から出土する炭化材は、火災とその後の埋積過程を経て残存したものであり、当時の種類構成を正確に反映しているとはいえないので、この点は注意したい。

本地域周辺では、これまでに住居構築材の樹種を明らかにした例が少ない。そのため、用材選択の詳細や周辺植生との関係については不明な点が多い。しかし、その中でも東松山市上野本篭田遺跡や坂戸市中耕遺跡など荒川右岸に位置する遺跡では、アカガシ亜属やモミ属が比較的見られる傾向がある（高橋、1982；パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。この傾向は、東京都の台地上の遺跡ではほとんど見られないことから、周辺植生や用材選択が異なっていた可能性もある。今後さらに多くの遺跡で樹種同定を行い、その実態を明らかにしたい。

＜引用文献＞

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）中耕遺跡出土遺物の自然科学分析報告．埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集「坂戸市中耕遺跡　住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書―ヲ―本文編（第１分冊）」，p.320―365，財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

高橋利彦（1982）東松山市上野本篭田遺跡炭化材樹種鑑定報告．埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第20集「一般国道254号線東松山地内　埋蔵文化財発掘調査報告書―Ⅰ―篭田・鶴田」，p.84―86，財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住構築材の用材選択．PALYNO,2，p.5―18．

2　姥ヶ沢遺跡自然科学分析

パリノサーヴェイ株式会社

1．はじめに

江南町姥ヶ沢遺跡は、埼玉県北西部に広がる北武蔵台地の一部である江南台地北部に位置する。江南台地は、その北部に位置する櫛引台地とともに寄居を扇頂とする荒川が形成した扇状地が台地化したものである（堀口,1986)。1988年に報告された塩西遺跡の火山灰同定報告書では、江南台地は下末吉面に対比されると述べたが、その後の記載から次のように述べることができる。江南台地を構成するのは、荒川扇状地の礫層であり、その上位に御岳第一軽石（On—Pm1）を挟む火山灰質の粘土層が堆積し、さらに風成の褐色火山灰土（いわゆるローム層）が堆積する（堀口,1986)。これらの記載から、江南台地の形成年代は、武蔵野台地の成増面の形成年代にほぼ対比されると考えられる。なお、成増面の形成年代はおよそ８万年前ぐらいとされている（久保,1988)。

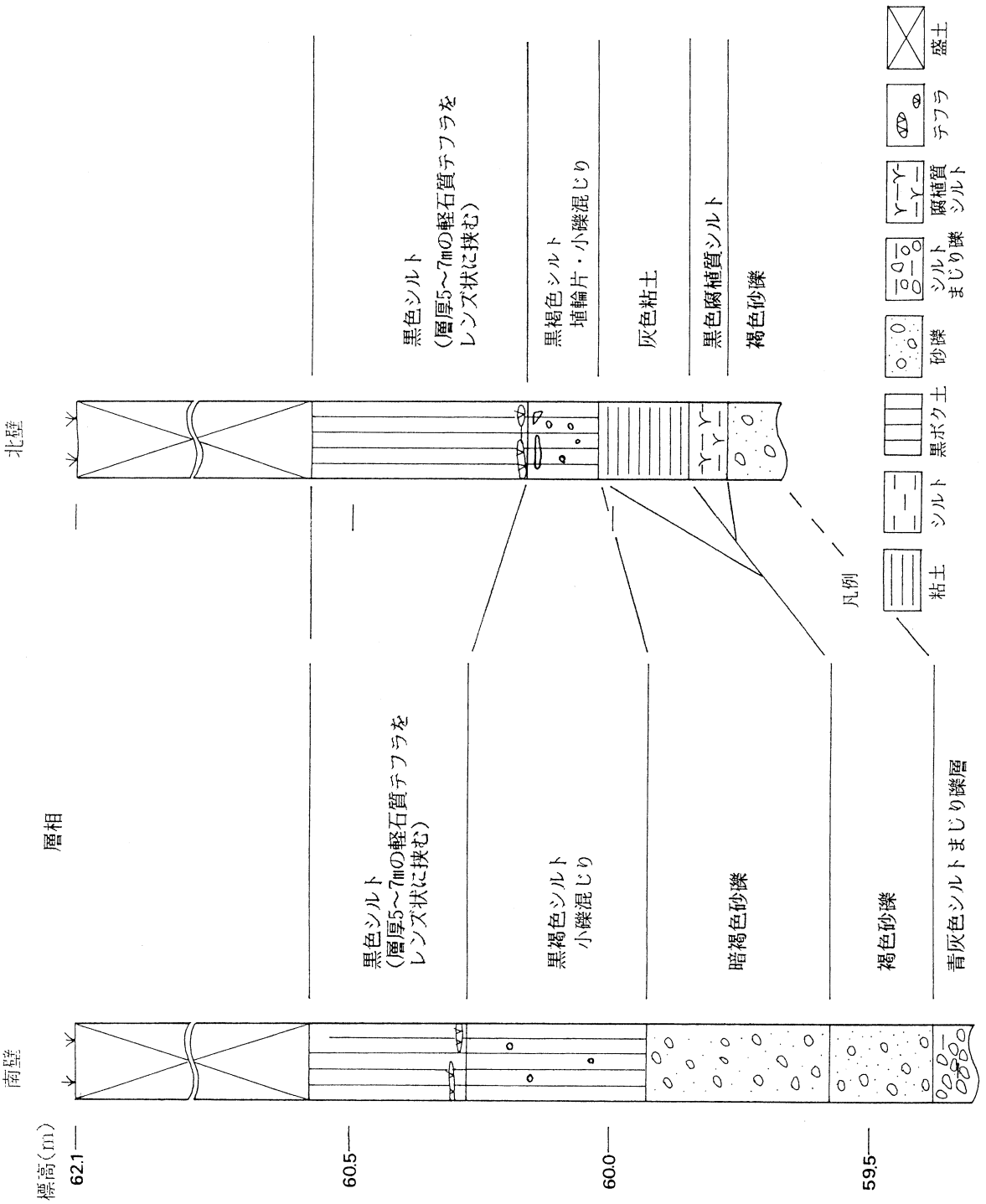
本遺跡では、台地の北部を南北方向に刻む谷の東側の台地上に埴輪窯が８基検出され、谷埋め堆積層からは埴輪片が出土している。谷埋め堆積層の下部は砂礫層であり、その上位に植物遺体混じりの黒～黒褐色シルト層が厚く堆積している。黒色シルト層は、泥炭土や氾濫土砂に由来する黒泥土か、あるいは火山灰土である黒ボク土と考えられるが、肉眼的特徴だけでは識別が困難である(松井、1988)。黒色シルト層の中部付近には軽石質テフラのレンズ状の薄層が認められ、その下位より埴輪片が出土している。また、黒色シルト層の下位には、局所的に灰色粘土層および腐植質粘土層の堆積が認められている。

本報告は、谷埋め堆積層の自然科学的手法による分析を行い、その堆積年代や堆積環境さらには堆積当時の周辺域の古植生などを調べることにより、埴輪窯が操業していた古墳時代当時の古環境に関する情報を提供するものである。まず、地層の堆積年代を推定するために、地層中より噴出年代の明らかにされている示標テフラを見出し、また、炭素含量の多いと考えられる腐植質粘土層については、放射性炭素年代を測定する。次に、地層の堆積した当時の水域環境を推定するために珪藻分析をおこない、さらに、地層の堆積した当時の植生を推定するために花粉分析を行う。

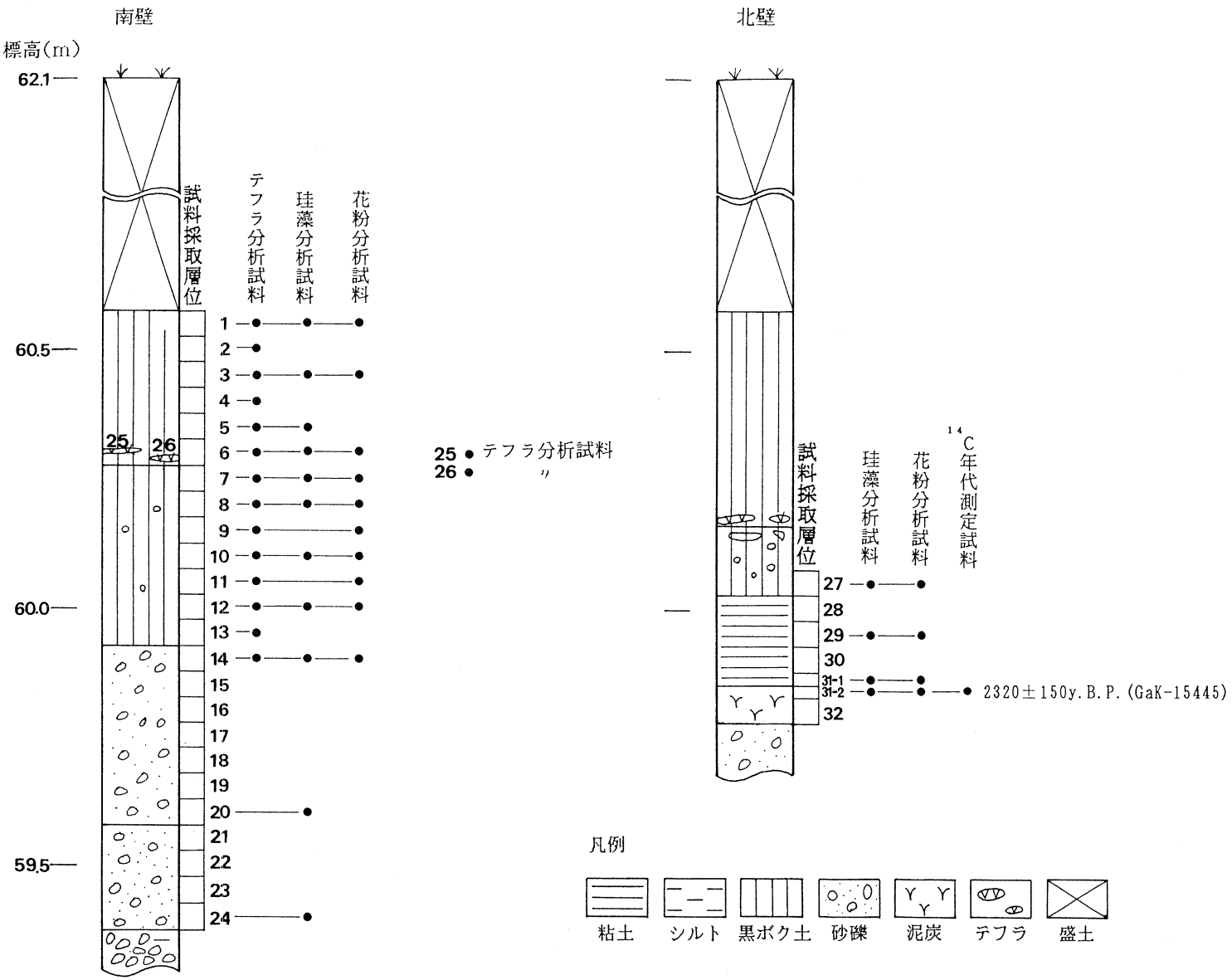
2．試料

調査区では、谷埋め堆積層の東西方向の断面が、南壁と北壁の２面作成された。南壁では、約1.5mの盛土層の下位に、上位より層厚30cmの黒色シルト層、層厚35cmの黒褐色火山灰土層、層厚35cmの暗褐色砂礫層、層厚20cmの褐色砂礫層が堆積し、谷の基底に至る。最上位の黒色シルト層の最下部には層厚５～７㎜の軽石質テフラのレンズ状薄層が認められ、その下位の黒褐色シルト層の最上部から埴輪片が出土している。分析用の試料は、黒色シルト層から褐色砂礫層まで層厚５cmで連続に採取した。また、南壁断面上の連続採取した位置より1.3mほど東側のところでは、２つの軽石質テフラの薄層のブッロクが、上下方向に重なって見えたので、そこよりそれぞれ１点ずつ試料を採取した。連続採取した試料は、上位より試料番号１とし試料番号24まで、テフラの薄層ブロックから採取された試料は、上位のものを試料番号25とし、下位を26とした。

北壁では、断面の東半部の堆積層は南壁とほぼ同様であるが、断面の西半部は次のような堆積状況を呈する。層厚約1.5mの盛土層の下位に、上位より層厚40cmの黒色シルト層、層厚約15cmの黒褐色シルト層、層厚17cmの灰色粘土層、層厚８cmの黒色腐植質粘土層が堆積し、最下部には褐色の砂礫層が堆積して谷の基底部となる。南壁でみられた軽石質テフラ



第209図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）模式土層柱状図



第210図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）分析試料採取位置

の薄層は、黒色シルト層の中下部に認められる。北壁では、分析用の試料は、黒色シルト層の最下部から黒色腐植質シルト層まで層厚5㎝連続で採取した。ただし、灰色粘土層と黒色腐植質粘土層の層界にかかった試料は、層界で切って分けた。採取された試料は、最上位の試料を試料番号27とし、下位に向かって試料番号32まで、ただし、層界にかかった試料番号31は、層毎に試料番号31－1、31－2とした。

なお、南壁および北壁断面の柱状図を第209図に示す。また、各分析では、その目的と手法上の問題から、上記試料より選択を行い供試した。選択した試料については、第210図に示すとともに各項で述べる。

3.示標テフラの検出

(1)　試料の選択

本分析では、まず地層断面中に認められたテフラの薄層ブロックの確認をするため試料番号25と26を分析し、次に、最も重要な層である黒色～黒褐色シルトの堆積年代推定のために、断面中に肉眼では認められなかったテフラの検出を目的として、南壁断面より連続採取された試料番号1から14までの14点を分析、合計16点の試料を分析した。

(2)　分析方法

試料は、適量を蒸発皿にとり、水を加えて小型超音波洗浄装置で洗浄、上澄みを流し去る。この作業を繰り返すことにより、試料中の泥分を除去する。砂分だけとなった試料を乾燥の後、実体顕微鏡下で観察を行い、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラス、遊離結晶と類質または異質物質である岩片の産状を調べ、地層中におけるテフラの降灰層準を推定する。

(3)　分析結果

・試料番号25および26（第78表）

どちらも多量の軽石と遊離結晶および中量の岩片からなり、それぞれの特徴も全く同じである。軽石は、最大径3㎜で粒径はよく揃っている。その色は淡灰褐色を呈し、発泡はやや不良であり、斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。遊離結晶は、斜長石が多く、次に斜方輝石、単斜輝石の順に多い。岩片は、黒色の安山岩である。

・試料番号1～14（第78表）

試料番号7以上の試料では、軽石が中～多量含まれるが、試料番号8以下の試料中には、軽石が全く含まれない。また、遊離結晶も前者の試料では、斜方輝石と単斜輝石が多く含まれるが、後者ではそれらが中～小量となり、さらに、岩片についても前者では安山岩が多く含まれるのに対し、後者ではチャートである。試料番号7以上に含まれる軽石は、どれも試料番号25、26の軽石と特徴は同じである。

第78表　姥ヶ沢遺跡谷部（北壁）テフラ分析結果

試料番号	軽　石	スコリア	火山ガラス	遊離結晶	鉱物組成岩片（岩石名）
1	＋＋＋	－	－	＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋ (cht・and)
2	＋＋＋	－	－	＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋ (cht・and)
3	＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋ (and)
4	＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cox)	＋＋＋ (and)
5	＋＋＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (and)
6	＋＋＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (and)
7	＋＋＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (and)
8	－	－	－	＋＋＋＋ (pl＞opx・cpx)	＋＋＋＋ (cht)
9	－	－	－	＋＋＋＋ (pl＞opx・cpx＞ho)	＋＋＋ (cht)
10	－	－	－	＋ (ho)	＋＋＋ (cht)
11	－	－	＋ (md・pm)	＋＋＋ (opx・cpx)	＋＋ (cht)
12	－	－	＋ (md・pm)	＋＋＋ (opx・cpx＞ho)	＋＋ (cht)
13	－	－	＋ (md・pm)	＋＋＋ (opx・cpx＞ho)	＋＋ (cht)
14	－	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (cht)
25	＋＋＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (and)
26	＋＋＋＋	－	－	＋＋＋＋ (pl・opx・cpx)	＋＋＋＋ (and)

※凡例　－：含まれない。　＋：微量。　＋＋：少量。　＋＋＋：中量。　＋＋＋＋：多量
md：中間型。　pm：軽石型。　pl：斜長石。　opx：斜方輝石。　cpx：単斜輝石。　cht：チャート。　and：安山岩。

スコリアは、どの試料中にも認められず、火山ガラスは、試料番号11、12、13に微量認められた程度である。なお、各試料の観察結果を第78表に示す。

(4)　テフラの同定

試料番号25、26のテフラおよび試料番号７以上に多く含まれる軽石の由来となるテフラは、その特徴と産出層位さらには遺跡の地理的位置から、浅間Bテフラ（As—B：荒牧、1968；新井、1979）に対比される。As—Bは、平安時代末期の天仁元年（A.D. 1108年）に浅間火山から噴出したテフラである（新井.1979)。断面中にレンズ状の薄層として認められている層準が、本遺跡におけるAs—Bの降灰層準になると考えられる。したがって、南壁では試料番号６採取層位がそれに相当する。

本遺跡においては、As—Bのほかには、示標テフラは認められない。

4．放射性炭素（^{14}C）年代測定

(1)　試料および測定

試料は、北壁断面に認められた黒色腐植質粘土層の上部の試料番号31—２を用いた。

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室へ依頼した。

(2)　測定結果

測定結果は次の通りである（学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書参照)。

GaK—15445　2320±150B.P.（370B.C.)

5．谷埋め堆積層の堆積年代について

本遺跡の谷の形成年代は不明であるが、そこには河川が流れ河床礫の堆積が進行している時期があった。その後^{14}C年代測定結果に従えば、約2500～2000年ほど前（縄文時代晩期相当）には、河川の流量の低下などにより、谷内には部分的に腐植質粘土層や灰色の粘土層などが堆積する。その後、年代は不明であるが、黒色シルト層の堆積が進んで今日に至っている。黒褐色シルト層の堆積は、埴輪を包含することから新しくとも古墳時代にはすでに進行していたと考えられ、As—Bの降灰した平安時代末期には、厚いところで40cmほどの堆積があったことになる。

6．珪藻分析

(1)　分析方法

珪藻化石の抽出は、以下に述べる方法で行った。試料を湿重で適当量秤量し、過酸化水素水（H_2O_2）と塩酸（HCL）で加熱処理し試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加え蒸留水で満たし、自然沈降法で上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。傾斜法で試料中に含まれる砂を除去する。検鏡し易い濃度に希釈した後、充分撹拌しマイクロピペットで適当量計り取りカバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリューラックスで封入しプレパラートを作成する。

検鏡は、光学顕微鏡（油浸1000倍）で任意の測線に沿って珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数を行う（珪藻化石の少ない試料はこの限りでない)。また、同定した分類群については、完形殻と非完形殻とを区別し、珪藻殻の保存度（完形殻数／総数×100）として示した。

珪藻の同定は、K.Krammer　&　Lange-Bertalot（1986・1988・1991）などの分類に従った。また、珪藻の生態性に関する解説を第79・80表に示した。

(2)　結果の表示法

第79表　珪藻の生態分類

塩分濃度に対する区分	塩分濃度に対する適応性		育成環境（例）
海水生種：強塩生種(Polyhalobous)	塩分濃度40.0%以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、海水湖
海水生種：真塩生種(Euhlobous)	海産生種、塩分濃度30.0～40.0%に出現するもの		一般海域(ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種：中塩生種(Mesohlobous)	汽水生種：塩分濃度0.5～30.0%に出現するもの	強中塩生種(α-Mesohalobous) 弱中塩生種(β-Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟
淡水生種：貧塩生種(Oligohalobous)	淡水生種：塩分濃度0.5%以下に出現するもの		一般陸水域(ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉)

第80表　淡水生種の各生態に対する適応性

塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性	生育環境（例）
塩分に対する適応性	貧塩-好塩生種(Halophilous)	小量の塩分がある方がよく育成するもの	高塩類域(塩水遡上域・温泉・耕作土壌)
	貧塩-不定性種(Indifferent)	小量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの	一般陸水域(湖沼・池・沼・河川・沼沢他 ets)
	貧塩性種(Halophobous)	小量の塩分にも耐えることができないもの	湿原・湿地・沼沢地
	広域塩生種(Euryhlinous)	低濃度から広濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現する種類	一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種(Acidobionitic)	pH7.0以下に出現、pH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・火口湖(酸性水域)
	好酸性種(Acidohpilous)	pH7.0付近に出現	湿原・湿地・沼沢地
	pH-不定性種(Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般陸水(ex 湖沼・池沼・河川)
	好アルカリ性種(Alkalihpilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上で最もよく生育するもの	
	真アルカリ性種(Alkalibonic)	pH8.5以上のアルカリ性水域にのみ出現するもの	アルカリ性水域(少ない)
流水に対する適応性	真止水性種(Limnobiontic)	止水にのみ出現するもの	流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種(Limnohpilous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種(Indifferent)	止水にも流水にも普通に出現するもの	河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種(Rheophilous)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの	河川・川・小川・上流域
	真流水性種(Rheobiontic)	流水域にみ出現するもの	河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸性珪藻	好気性種(Aerophilous)	好気的環境(Aerialhkbitats) 多少湿り気があれば土壌表層中やコケの表面に生育可能である。特に土壌中に生育するものについての環境を Soil habitats)という。	○土壌表層中、○樹幹や倒木上のコケに付着、○コケに付着、○木の倒木のコケに付着、○濡れた岩の表面に付着、○濡れたコケに付着、○水辺のコケに付着、○滝の飛沫で湿ったコケや岩上の壁に付着、○石灰岩上に生えたコケに付着などさまざまな生活形態がある。

※　区分、適応性は田中・吉田・中島（1997）奥利根地域学術調査報告書II　p114～135を基に一部削除、環境については加筆し作成した。

試料から検出された珪藻化石は、アルファベット順に並べ（第81・82表）、珪藻化石総数が100個体以上の試料を対象として出現率２％以上を示す分類群（Taxa）について、主要珪藻化石の層位分布図を作成した（第211図）。

(3)　結果

珪藻化石は、南壁の試料からは良好に産出したが、北壁の試料では化石数が極めて少なかった。

南壁の産出種の全ては淡水生種からなり、産出分類群数は23属、155分類群（128種・21変種・１品種・種不明５種類）である。各試料の珪藻化石の産状は、中～下位の３試料（試料番号14・20・24）が30個体以下で少なかった他は良好に産出した。

(4)　考察

南壁の完形殻の出現率は、50～75％前後と高かったことから当地点から産出する珪藻化石は現地性種と考えた。なお、北壁と南壁下部の砂礫層については、珪藻化石の産出が少なかったので現地性種は少ないと考えられる。

南壁は、珪藻化石群集の特徴からUBD（姥ヶ沢遺跡珪藻帯の意）―Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ帯に分帯される。

以下に各珪藻帯の特徴を述べる。

UBD―Ⅰ帯（試料番号12～10）

貧塩―嫌塩性種・好酸性種・流水不定性種が優占あるいは多産することが特徴である。なお、試料番号12は、試料番号10に比べて、好流水性種の割合が高い。

主要種は流水不定性で好酸性のEunotia pectinalis var. minor, E, incisaである。これらの種は、沼沢や湿地で優勢な種とされる沼沢湿地付着生種群である（安藤、1990）。また、陸生珪藻のなかでも耐乾性の強いA群（伊藤・堀内、1991）のHantzschia amphioxysを伴う。

以上の特徴から 帯は、弱酸性を呈した湿地（沼沢）のような水域環境が推定される。この頃に埴輪製作が行われていたと考えられるので、帯は当時の谷内の水域環境を示しているといえる。

第81表　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）珪藻分析結果(1)

Species Name	Ecology			南壁										北壁			
	H.R.	pH	C.R.	1	3	5	6	7	8	10	12	14	20	24	27	29	31-1	31-2
AChnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	18	12	6	1	—	—	4	1	—	—	—	—	—	—
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	6	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Achnanthes pseudohustedtii H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	1	—	—	2	—	6	—	—	—	—	—	—
・Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Anomoeoneis brachysira (Breb).Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Anomoeoneis gomphonemacea (Grun.)H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Aulacosira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Aulacosira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—
Aulacosira italica var. valida (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
・Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Caloneis bacillum (Grun.)Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	2	—	13	28	19	9	3	2	1	1	—	—	—	—	—
・Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	—	2	1	3	4	4	5	3	—	—	—	4	—	—	—
Caloneis molaris (Grun.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Caloneis tenuis (Greg.)Krammer	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	3	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Caloneis sp.-1	Ogh-unk	unk	unk	—	—	1	5	7	5	1	5	—	—	—	—	—	—	—
・Caloneis sp.-2	Ogh-unk	unk	unk	—	—	1	2	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
##Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	3	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Cymbella descipta (Hust.) Krammer & Kange-Betalot	Ogh-unk	unk	unk	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella gracilis (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	2	—	—	—	—	2	2	2	—	—	—	1	—	—	—
Cymbella mesiana Cholnoky	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
##Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	l-ph	4	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Cymbella perpusilla A.Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
##Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	4	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
##Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	—	—	—	14	4	—	—	—	—	1
Cymbella subaequalis Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Diploneis minuta Petersen	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	5	3	1	6	7	9	2	1	—	—	—	—	—	—
Dioloneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	unk	—	—	—	—	1	1	—	—	2	—	—	—	—	1	—
・Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	ind	—	1	2	—	1	3	1	2	2	—	—	—	—	—	1
Eunotia alpina (Naeg.)Hustedt	Ogh-hob	ac-bi	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	1	—	—	—	—	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia arcus var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	6	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	2	—	—	—	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia exigua (Breb.)Grunow	Ogh-hob	ac-bi	ind	6	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
・Eunotia fallax A.Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Eunotia flexuosa (Breb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	1	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	6	5	—	—	3	5	31	29	4	—	—	1	—	—	1
Eunotia intermedia (Krass.)Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia lunaris (Ehr.)Grunow	Ogh-hob	ac-ll	l-ph	4	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia lunaris var. subarcuata (Naeg.)Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	2	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia monodon var. tropica Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia monodon var. undulata Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia parallela Ehrenberg	Ogh-hob	ac-bi	ind	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia pectinalis (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	—	1	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	—	30	7	5	19	10	52	31	6	—	—	4	—	—	2
Eunotia pectinalis var. undulata (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	—	1	—	—	—	—	4	2	—	—	—	1	—	—	—
・Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Fragilaria capusina Desmazieres	Ogh-ind	at-il	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Fragilaria intermedia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
#Fragilaria pinnata Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Frustulia rhomboides var. saxonica (Rabh.)De toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	6	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—	2	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	1	11	11	11	10	9	9	12	2	—	1	1	—	1	2
Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	Ogh-ind	ac-il	unk	—	—	3	1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	4	1	—	—	—	2	1	2	—	—	—	—	—	—	—
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	15	8	5	1	1	4	1	4	1	1	—	2	—	—	—
Gyrosigma scalproides (Rabh.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
・Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	4	8	17	12	10	9	12	20	5	—	—	2	1	—	—
##Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	—	2	3	—	—	—	6	2	2	—	—	—	—	2	2
Navicula angusta Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	3	3	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula arvensis Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula bryophila Boye-Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	4	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・##Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	2	8	5	6	11	2	2	1	—	—	—	—	—	—
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	20	22	17	14	18	9	28	—	—	—	—	—	—	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula gibbula Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
・Navicula hambergii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1	1	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula ignota Krasske	Ogh-ind	ind	ind	1	3	4	3	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula ignota var. palustris (Hust.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula lapidosa Krasske	Ogh-ind	ind	r-ph	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula leptostriata Joergensen	Ogh-unk	unk	unk	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula mediocris Krasske	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula minima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	4	—	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第82表　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）珪藻分析結果(2)

Species　Name	Ecology			南壁											北壁			
	H.R.	pH	C.R.	1	3	5	6	7	8	10	12	14	20	24	27	29	31-1	31-2
・#Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	—	8	9	9	—	3	1	3	2	—	—	5	1	—	—
・Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
#Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	1	2	4	2	3	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—
Navicula pupula var. pseudopupula (Krass.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	2	7	8	15	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula schoenfeldii Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・#Navicula seminulum Grunow	Ogh-ind	ind	ind	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula subcostulata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula tantula Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Navicula tokyoensis H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	1	4	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Neidium affine var.longiceps (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	3	4	1	1	—	1	—	3	1	—	—	—	—	—	—
・Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	—	1	2	3	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-unk	unk	unk	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	3	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia palustris Hustedt	Ogh-ind	ind	unk	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
・Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	2	1	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Nitzschia terrestris (Pet.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia alpina W.Smith	Ogh-hob	ac-il	unk	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia appendiculata (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
・Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	2	2	3	1	1	4	2	2	—	—	—	3	—	—	1
Pinnularia brunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
#Pinnularia braunii var.amphicephala (A.Mayer)Hustedt	Ogh-hob	ac-bi	ind	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	1	1	—	1	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia gibba var. linearis Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia hemiptera (Kuetz.)Cleve	Ogh-hob	ind	l-ph	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia ignobilis (Krass.)Cleve-Euler	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia imperatrix Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
#Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	—	4	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia lagerstedtii(Cleve)Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia macilenta (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
#Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	—	1	2	12	1	5	—	1	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia microstauron var. brevissonii (Kuetz.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	1	1	—	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—
・#Pinnularia molaris Grunow	Ogh-ind	ind	ind	13	—	12	9	16	8	2	2	—	—	—	2	—	—	—
・Pinnularia obscura Krasske	Ogh-ind	ind	ind	—	—	3	7	8	7	—	2	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia schroederi (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia similis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	—	1	—	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	4	3	1	—	2	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia streptoraphe Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ind	ind	1	1	2	1	3	2	1	1	—	—	—	—	—	—	—
・Pinnularia subcapitata var. paucistriata (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	4	4	7	6	15	11	4	3	—	—	—	2	—	—	—
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-il	ind	1	1	1	1	2	5	11	11	6	—	—	—	—	1	1
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
・Stauroneis agrestris var.inflata H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	ind	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Stauroneis borrichii (Pet.)Lund	Ogh-ind	ind	ind	1	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—
Stauroneis lauenburgiana fo. angulata Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Stauroneis obtusa Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
・Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	5	—	1	1	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Surirella elegans Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-bi	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Surirella linearis W.Smith	Ogh-ind	ac-il	ind	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Surirella ovata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Synedra parasitica (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Synedra rostrata Pantocsek	Ogh-ind	al-il	ind	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Synedra rumpens Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
##Tabellaria fenestrata (Lyngb.)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	10	11	—	—	4	—	5	—	—	—	—	4	—	—	—
##Tabellaria floccuosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				211	212	207	212	203	168	202	207	60	7	1	38	2	6	18
Total Number of Diatoms				211	212	207	212	203	168	202	207	60	7	1	38	2	6	18

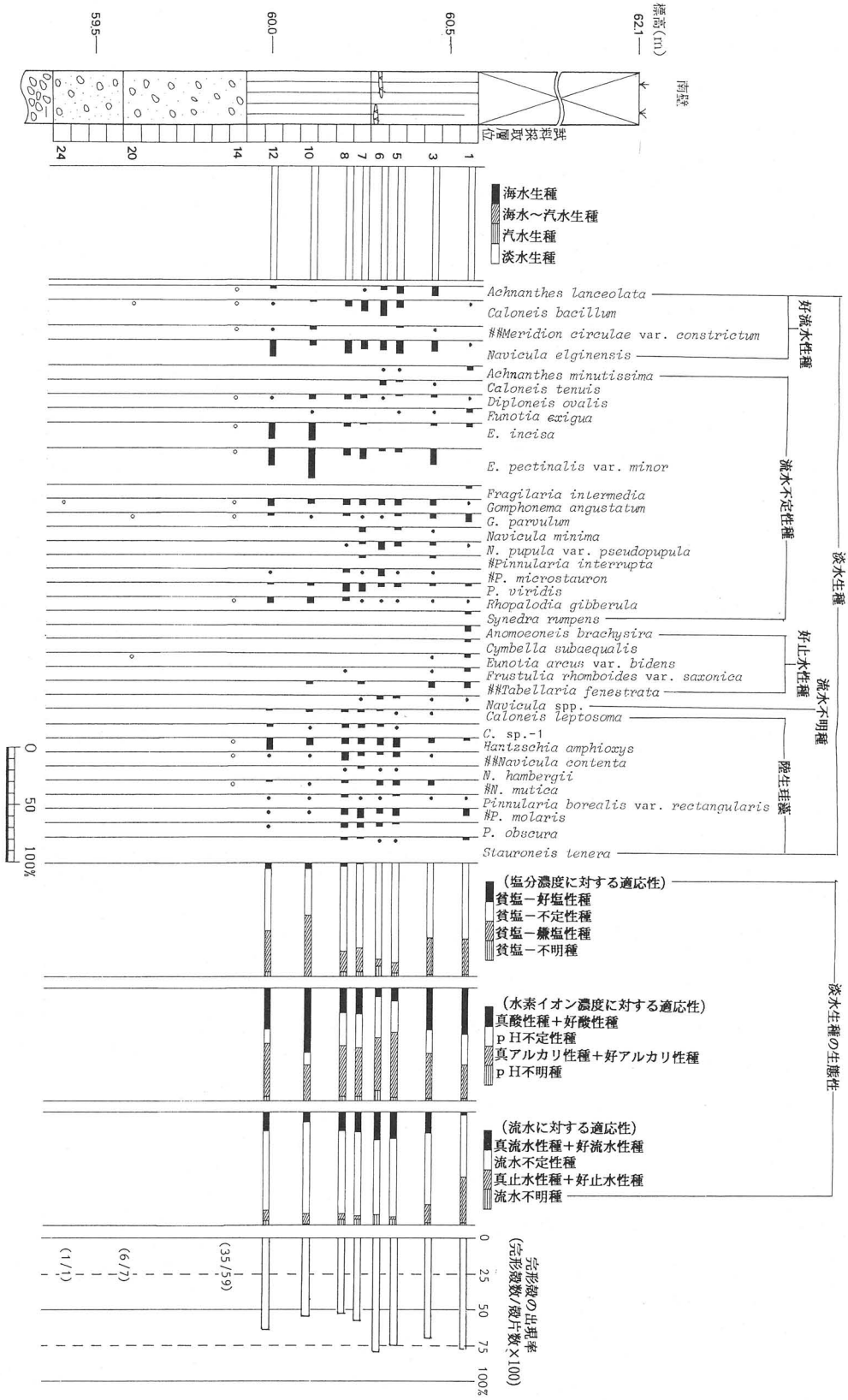
凡例

H.R：塩分濃度に対する適応性
- Euh　：海水生種
- Euh-Meh　：海水生種—汽水生種
- Meh　：汽水生種
- Ogh-hil　：貧塩好塩性種
- Ogh-ind　：貧塩不定性種
- Ogh-hob　：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk　：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi　：真アルカリ性種
- al-ph　：好アルカリ性種
- ind　：pH不定性種
- ac-il　：好酸性種
- ac-bi　：真酸性種
- unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-bi　：真止水性種
- l-ph　：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- r-ph　：好流水性種
- r-bi　：真流水性種
- unk　：流水不明種

・：陸生珪藻　#：好汚濁性種　##：好清水性種



(海水，汽水，淡水生種の比率・各種産出率・完形殻の出現率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として算出した。また●は１％未満の出現，○は産出個体数が100個体未満の試料における検出，＃は好汚濁性種，＃＃は好清水性種を示す。)

第211図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁）主要珪藻化石群集の層位分布

UBD—II帯（試料番号８～３）

貧塩—不定性種・好アルカリ性種・好流水性種が前帯と比較して増加することが特徴である。

主要種は、好流水性のAchnanthes lanceolata, Caloneis bacillum, Navicula elginensis,流水不定性のGomphonema angustatum, Pinnularia viridis, 陸生珪藻のHantzschia amphioxys, Navicula contenta, Pinnurlaria molaris である。このうち、Achnanthes lanceolata は中～下流性河川指標種群、Navicula elginensis, Pinnularia viridis は沼沢湿地付着生種群、Gomphonema angustatum は比較的水深の浅い水域に生育する種である（安藤, 1990、鹿島, 1986）。

このような産状から、流水の流れ込みのある沼沢～湿地のような水域の存在とともに陸生珪藻の繁茂する比較的乾いた状況も示唆されるのである。すなわち、沼沢～湿地となっている低地に後背地の台地上から黒ボク土が流れ込んだが低地の一時的な乾燥化にともなって陸生珪藻が生育したことなどが考えられるが、現時点でそのどちらかは判断することはできない。

UBD—III帯（試料番号１）

前帯と比較して好流水性種が急減し、好止水性種が多産することが特徴である。

主要種は、流水不定性のGomphonema parvulum, 好止水性のAnomoeoneis brachysira, Frustulia rhomboides var. saxonica, Tabellaria fenestrata である。このうち、好止水性種の全ては、沼沢湿地付着生種群とされる。また、僅かであるが高層湿原指標種群の１種とされるEunotia exiguaが検出された。

したがって、沼沢湿地のような水域であったことが推定される。

珪藻化石の産出の少なかった南壁下部の堆積環境については、珪藻分析からは良く分からなかった。このように珪藻化石の少ない原因としては、層相が砂礫であたことに原因があると考えられる。つまり、珪藻は死後シルト粒子以下の微細粒子と挙動を共にする（小杉, 1989）ことが知られており、砂礫層が堆積するような流速の早い環境では、珪藻化石は堆積せずに流下してしまった可能性が考えられる。一方、北壁断面では、層相が粘土であるにもかかわらず珪藻化石の産出が少なかった。現時点では、その原因については良く分からない。

７．花粉分析

(1)　試料

姥ヶ沢遺跡の谷部では、谷を埋積する砂礫層の上部に腐植質粘土が厚く堆積している（この腐植質粘土は、肉眼観察では泥炭が分解した黒泥、あるいは黒ボク土の再堆積物に相当するものである）。このような腐植質粘土には、堆積当時の環境を考える上で有効な花粉・植物珪酸体化石などの微化石が包含されている可能性がある。そこで、本分析では本堆積物について花粉分析を行うことにより、埴輪窯が構築された古墳時代およびその前後の時期の古植生について検討することを試みた。

分析の対象とした試料は、谷埋め堆積層の南壁・北壁の断面から５cm連続で採取した試料の中から選択した、それぞれ10点・４点の合計14点である。

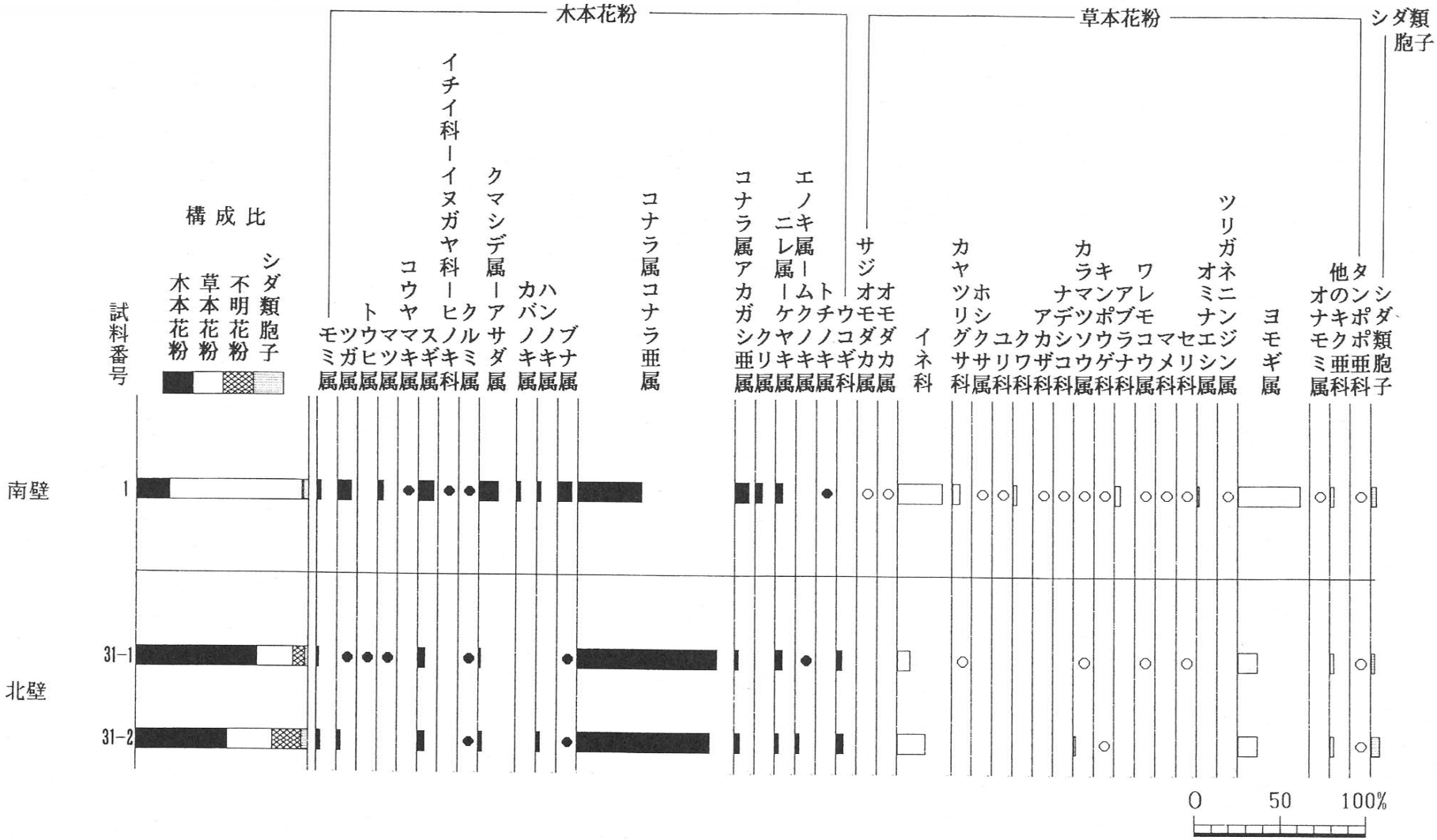
(2)　分析方法

湿重約15ｇの試料について、HF処理、重液分離（ZnBr2；比重2.2）、アセトリシス処理、KOH処理の順に物理化学処理を行い花粉化石を分離濃集する。得られた残渣をグリセリンで封入しプレパラートを作成した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら出現する種類（Taxa）の同定・計数を行った。

結果は、同定・計数結果の一覧表と、花粉化石が良好に産出した層準については花粉化石群集の層位分布図として示した。この際の図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・胞子が総花粉・胞子数から不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3)　花粉化石の産状

花粉分析の結果を第83表に示す。花粉化石は調査



出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満を示す。

第212図　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）花粉化石群集の層位分布

第83表　姥ヶ沢遺跡谷部（南壁・北壁）花粉分析結果

種　　類（Taxa）	南壁										北壁			
	1	3	6	7	8	9	10	11	12	14	27	29	31-1	31-2
木本花粉														
モミ属	2	2	—	—	—	1	—	2	2	2	—	—	3	2
ツガ属	9	—	1	—	—	2	—	—	—	—	1	—	2	2
トウヒ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—
マツ属	3	—	3	—	1	—	—	1	2	2	1	—	1	—
コウヤマキ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
スギ属	10	3	—	—	1	1	—	1	—	5	—	—	10	4
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クルミ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1
クマシデ属—アサダ属	12	1	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	4	2
カバノキ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2
ブナ属	9	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	1
コナラ属コナラ亜属	41	11	1	3	2	—	8	1	1	26	4	8	227	85
コナラ属アカガシ亜属	9	2	—	2	1	—	2	1	1	3	—	—	7	3
クリ属	4	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ニレ属—ケヤキ属	5	2	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	11	2
エノキ属—ムクノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2
アカメガシワ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
トチノキ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	4
草本花粉														
サジオモダカ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オモダカ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ科	152	35	—	—	—	—	4	1	—	14	4	1	26	27
カヤツリグサ科	21	4	—	—	—	—	—	—	—	4	—	—	2	—
ホシクサ属	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ユリ科	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クワ科	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サナエタデ節—ウナギツカミ節	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—
アカザ科	1	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ナデシコ科	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カラマツソウ科	2	—	1	—	—	—	2	—	—	—	—	—	3	2
キンポウゲ科	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
アブラナ科	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ワレモコウ属	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—
マメ科	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
セリ科	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	3	—
オミナエシ属	8	6	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—
ツリガネニンジン属	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	212	62	3	4	10	—	16	2	2	38	24	2	42	19
オナモミ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他のキク亜属	12	4	1	—	3	5	1	1	3	5	1	—	6	3
タンポポ亜属	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1
不明花粉	6	—	1	2	2	3	—	19	19	19	2	9	30	34
シダ類胞子														
シダ類胞子	20	7	2	10	1	—	28	85	24	33	1	2	7	9
合　　計														
木本花粉	112	23	5	5	6	4	10	7	8	44	7	8	281	110
草本花粉	454	110	6	4	14	5	23	5	5	64	32	4	85	53
不明花粉	6	0	1	2	2	3	0	19	19	19	2	9	30	34
シダ類胞子	20	7	2	10	1	0	28	85	24	33	1	2	7	9
総花粉・胞子	529	141	14	21	23	12	61	116	56	160	42	24	403	206

を行ったほとんどの試料で保存が悪く、南壁の試料番号1と北壁の試料番号31—1・31—2以外の試料では壊れた化石が僅かに産出しただけである。南壁の試料番号1と北壁の試料番号31—1・31—2では、保存の悪い花粉化石も認められるが種類の同定が困難なほどではなく、これらの試料に限って、得られた花粉化石群集を層位分布図として示した（第212図）。

南壁の試料番号1の花粉化石群集は、総花粉・胞子の中で草本花粉が占める割合が高く、その中ではイネ科・ヨモギ属が高率に産出する。このほかオモダカ属・サジオモダカ属といった水生植物の種類が認められる。木本花粉ではコナラ亜属の出現率が目立つ。

北壁の試料番号31—1と31—2の花粉化石群集は類似し、総花粉・胞子の中で木本花粉が占める割合が高く、その中ではコナラ亜属が優占する。このほかニレ属—ケヤキ属、ウコギ科などが産出する。草本花粉は低率であり、イネ科・ヨモギ属などが産出する。

(4)　古植生について

上記のように今回の調査対象とした谷埋め堆積層のうち、南壁の黒色シルト層と北壁の河床礫直上の黒色腐植質粘土層とその上位の灰色粘土層からは花粉化石が比較的良好に産出したが、その他の層準の試料からは花粉化石が検出されなかった。ここでは、花粉化石が良好に産出した層準の花粉化石群集の特徴から、当時の植生について若干の考察を試みる。なお、これらの層準の堆積物は流水の影響下で堆積したものとみられることから、各層準の花粉化石群集は広範囲の植生を反映していると考えるのが妥当であろう。

北壁の河床礫の上位の腐植質シルト層・灰色粘土層（試料番号31－１・31－２）の花粉化石群集は、腐植質粘土層の^{14}C年代測定結果に基づくと約2500～2000年前（縄文時代晩期）頃の植生を反映していることになる。本群集の特徴は、木本花粉が高率を占めること、その中で落葉広葉樹のコナラ亜属が優占することである。また随伴して産出する種類の多くも落葉広葉樹の種類であり、わずかであるが暖温帯林（照葉樹林）の主要構成種であるアカガシ亜属も産出する。これらのことから、約2500～2000年前の頃の遺跡周辺には、ナラ類などの落葉広葉樹を主とする暖温帯性の森林が成立していたことが示唆される。

南壁の黒色シルト層の最上位（試料番号１）の花粉化石群集は、試料番号１の採取層準がAs-Bより上位にあることから、平安時代以降のある時期の植生を反映していることになる。本群集の特徴は、草本花粉が高率を占めることであり、その中ではイネ科・ヨモギ属が高率を占める。また種類数も多く、オモダカ属・サジオモダカ属といった水生植物の種類や、人里植物のオナモミ属などが認められる。これらのことから、調査地点ないしその周辺にはヨモギ属などが分布する開けた場所が存在したことが示唆される。また谷内には水生植物が生育する水湿地も存在したことが示唆される。一方、周辺の森林植生は、基本的には落葉広葉樹を主とするものであったが、木本花粉が占める割合が低いことを考慮すると、その森林は貧弱なものであったことが伺われる。

(5)　花粉化石の保存状態について

今回の調査対象とした谷埋め堆積層のうち、黒色シルト層では、結果で述べたようにほとんどの層準で花粉化石の保存が悪かった。このような花粉化石の産状は、酸化や土壌微生物による分解といった、堆積中のさまざまな腐植作用の影響によるものと思われるが、ここでは直接の原因については不明である。花粉化石の腐植作用に対する抵抗性は種類によって異なっており、一般に落葉広葉樹花粉より針葉樹花粉・シダ類胞子の方が強いとされる。また徳永ほか（1979）によれば、落葉広葉樹花粉の半数以上に風化・腐敗の痕跡が認められる場合、その試料の花粉化石群集は偏った組成になっている可能性が強いと指摘している。このことから、今回の黒色シルト層試料の花粉化石は当時の植生を反映している可能性があるものの、その組成は偏ったものになっている可能性が強く、ここでは古植生について推定することを控える。

文献

＜はじめに＞

・堀口万吉

（1986）第３章第四系.3、３関東平野中央部の更新統（３）北武蔵台地．日本の地質関東地方編集委員会編「日本の地質３　関東地方」,p171—173,共立出版.

・久保純子

（1988）相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形—．地理学評論,61,p25—48.

・松井　健

（1988）「土壌地理学序説」,316p.,築地書館.

＜テフラ分析＞

・新井房夫

（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル,157,p41—52.

・荒牧重雄

（1968）浅間火山の地質．地団研専報,14,45p.

＜珪藻分析＞

・安藤一男

（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用，東北地理VOL.42,p.73-88.

・伊藤良永・堀内誠示

（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻学会誌,VOL.6,p.23—44.

・小杉正人

（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析，日本ベントス研究会　VOL.35／36　p.17—28.

・Krammer,K.,and H.Lange—Bertalot

（1986・1988・1991）Bacillariophyceae,Suesswasser flora von Mitteleuropa　2（1・2・3）：p.1—876,p.1-585,p.1—576.

・田中弘之・吉田武雄・中島啓治

（1977）奥利根地域の珪藻類，群馬県奥利根地域学術調査報告書「　p.114—135.

＜花粉分析＞

・徳永重元・山内輝子

（1979）1.4花粉・胞子，化石研究会編「化石の研究方法」

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1991年5月24日

パリノ・サーヴィイ㈱　殿

1990年11月20日受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの出減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また、付記した誤差はβ線の計数値の標準偏差δにもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代です。また試料のδ線計数率と自然計数率の差が2δ以下のときは、3δに相当する年代を下限の年代値（B.P.）として表示してあります。また試料のβ線計数率と現在の標準炭素（MODERN STANDARD CARBON）についての計数率との差が2δ以下のときは、Moderと表示し、δ^{14}C‰を付記してあります。

記

Code No.	試料	年代（1950年よりの年数）
Gak-15445	Soil from　埼玉県江南町姥ヶ沢遺跡	2320±150
	114C-1 姥ヶ沢遺跡	370 B.C.

以上

木越邦彦

第84表　珪藻化石の顕微鏡写真の図版説明

写真版号	珪藻化石種名	試料番号
1	Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	6
2	C. bacillum (Grun.) Mereschkowsky	6
3	Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	5
4	Cymbella amphioxys (Kutz.)Grunow	3
5	C. sinuata Gregory	14
6	E. lunaris (Ehr)Grunow	2
7	E. pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	3
8	E. incisa W. Smith ex Grecgory	10
9	E. exigua (Breb.) Grun.	1
10	Gomphonema angustum Agardh	3
11	G. angustatum var. linearis Hustedt	8
12	G. angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	8
13	Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	5
14	H. amphioxys (Ehr.)Grunow	6
15	H. amphioxys (Ehr.)Grunow	3
16	Meridion circulae var. constrictun (Ralfs)V. Heurck	5
17	M. circulae var. constrictum (Ralfs)V. Heurck	3
18	Navicula pupula Kuetzing	3
19	N. pupula var. pseudopupula (Krass.)Hustedt	5
20	N. pupula var. pseudopupula (Krass.)Hustedt	6
21	N. elginensis (Greg.)Ralfs	3
22	N. ignota Kasske	3
23	N. mutica Kuetzing	6
24	Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	1
25	Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	6
26	P. viridis (Nitz.)Ehrenberg	6
27	P. microstauron (Ehr.)Cleve	8
28	P. borealis var. rectangularis Carlson	3
29	P. subcapitata Gregory	3
30	P. subcapitata Gregory	6
31	P. obscura Krasske	6
32	Rhopalodia gibberula (Ehr.)O. Muller	3
33	Stauroneis tenera Hustedt	6
34	Synedra parasitica (W. Smith)Hustedt	3
35	Tabellaeia fenestrata (Lyngb.)Kuetzing	3
36	T. fenestrata (Lyngb.)Kuetzing	1

＊地点はすべて南壁である。

第85表　珪藻化石の顕微鏡写真のネガ説明

ネガ番号	珪藻化石種名	試料番号	倍率
0.1	Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	1	600
2	Eunotia lunaris (Ehr.) Grunow	2	〃
3	Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	1	〃
4	Eunotia exigua (Breb.) Grun.	1	〃
5	Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	3	〃
6	Cymbella amphioxys (Kutz.) Grunow	3	〃
7	Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	5	〃
8	Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	6	〃
9	Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	5	〃
10	Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	6	〃
11	Navicula pupula var. pseudopupula (Krass.) Hustedt	5	〃
12	Gomphonema angustatum var. linearis Hustedt	8	〃
13	Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	8	〃
14	Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	10	〃
15	Cymbella sinuata Gregory	14	〃
16	Navicula elginensis (Greg.) Ralfs	3	〃
17	N. ignota Krasske	3	〃
18	Pinnularia borealis var. rectangularis Carlson	3	〃
19	Gomphonema angustum Agardh	3	〃
20	Pinnularia subcapitata Gregory	3	〃
21	Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	3	〃
22	Meridion circulae var. constrictum (Ralfs) V. Heurck	3	〃
23	Navicula pupula Kuetzing	3	〃
24	Synedra parasitica (W. Smith) Hustedt	3	〃
25	Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	3	〃
26	Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	3	〃
27	Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	8	〃
28	pinnularia subcapitata Gregory	6	〃
29	Navicula pupula var. pseudopupula (Krass). Hustedt	6	〃
30	N. mutica Kuetzing	6	〃
31	Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	6	〃
32	Rhopalodia gibberula (Ehr.) O. Muller	3	〃
33	Caloneis bacillum (Grun.) Mereschkowsky	6	〃
34	Stauroneis tenera Hustedt	6	〃
35	Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	6	〃
36	Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	6	〃

※ 地点はすべて南壁である。

第86表　花粉化石の顕微鏡写真のネガ説明

ネガ番号	花粉化石名	地点	試料番号	ネガ倍率
0	ヨモギ属	南壁	1	×300
1	ヨモギ属	南壁	1	×300
2	クマシデ属—アサダ属	南壁	1	×300
3	クマシデ属—アサダ属	南壁	1	×300
4	カヤツリグサ科	南壁	1	×300
5	カヤツリグサ科	南壁	1	×300
6	クリ属	南壁	1	×300
7	クリ属	南壁	1	×300
8	クルミ属	北壁	31-2	×300
9	クルミ属	北壁	31-2	×300
10	ハンノキ属	北壁	31-2	×300
11	ハンノキ属	北壁	31-2	×300
12	コナラ亜属	北壁	31-2	×300
13	コナラ亜属	北壁	31-2	×300
14	オモダカ属	南壁	1	×300
15	オモダカ属	南壁	1	×300
16	アブラナ科	南壁	1	×300
17	アブラナ科	南壁	1	×300
18	状況写真	南壁	3	×100
19	状況写真	南壁	6	×100
20	状況写真	南壁	7	×100
21	状況写真	南壁	8	×100
22	状況写真	南壁	9	×100
23	状況写真	南壁	10	×100
24	状況写真	南壁	11	×100
25	状況写真	南壁	12	×100
26	状況写真	南壁	14	×100
27	状況写真	北壁	27	×100
28	状況写真	北壁	29	×100

第87表　テフラの顕微鏡写真のネガ説明

ネガ番号	写真名
14	As—Bの軽石（南壁試料番号６）
15	南壁試料番号８の砂粒
17	南壁試料番号10の砂粒
20	南壁試料番号14の砂粒

写真図版

図版 1



姥ヶ沢遺跡航空写真



姥ヶ沢遺跡航空写真



姥ヶ沢遺跡調査区全景モザイク写真



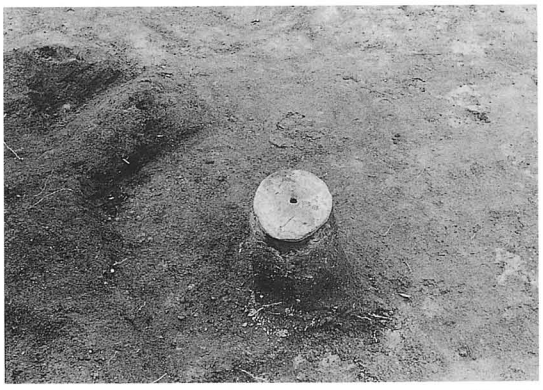
姥ヶ沢遺跡埴輪窯跡航空写真



第Ⅰ号住居跡完掘









第Ⅰ号住居跡遺物出土状態

図版 5

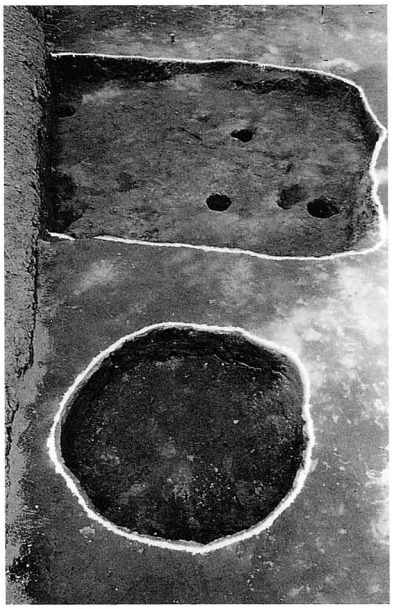


第 2 号住居跡完掘





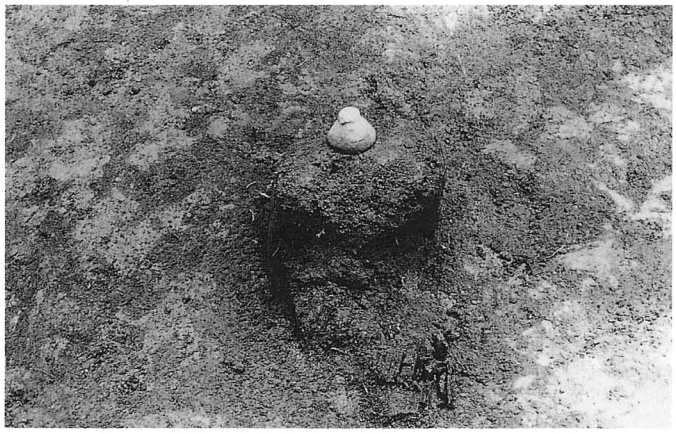
第 2 号住居跡遺物出土状態



第 2 号住居跡・第 2 号土坑完掘



第 3 号住居跡完掘



第 3 号住居跡遺物出土状態



調査風景



調査風景

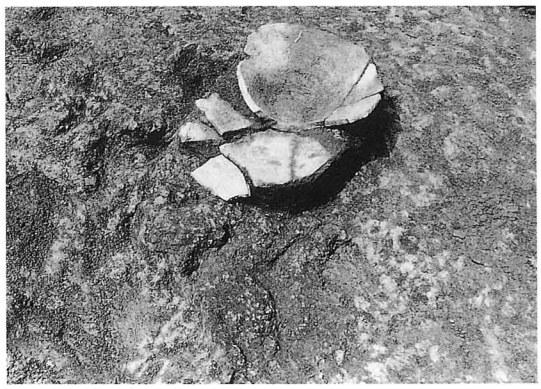


第 4 号住居跡完掘

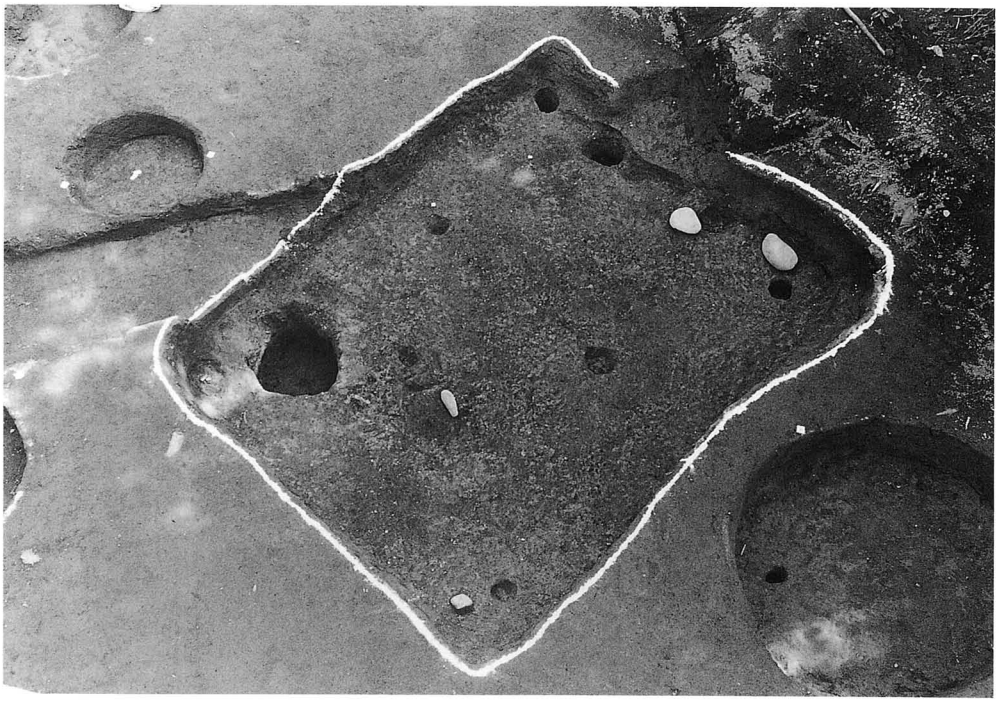




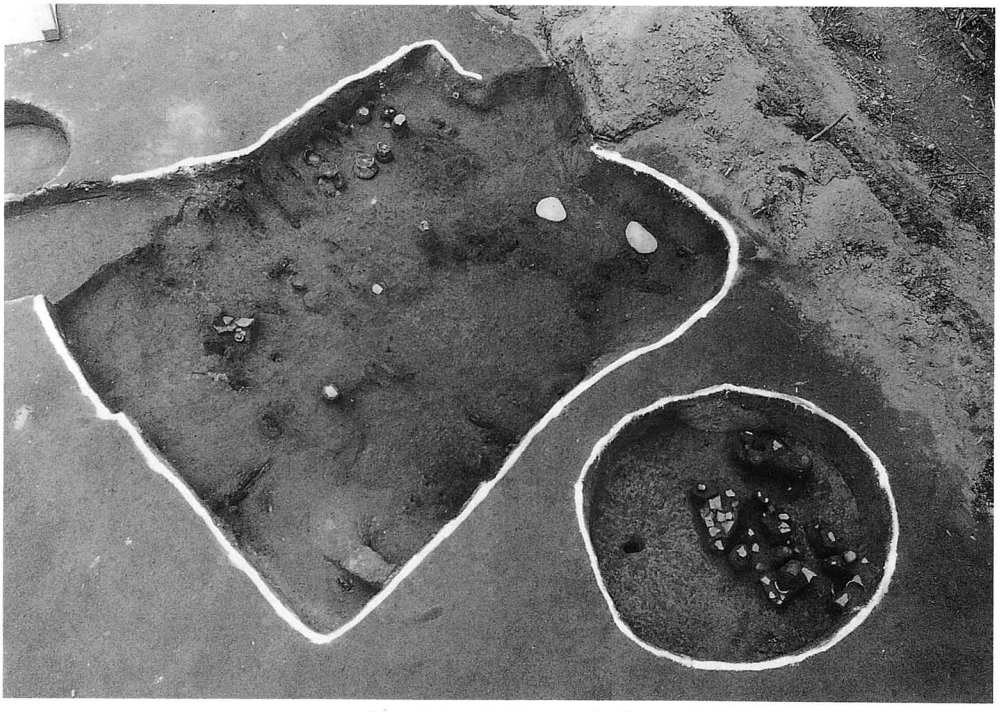




第 4 号住居跡遺物出土状態



第 5 号住居跡・第12・13号土坑完掘



第 5 号住居跡遺物出土状態

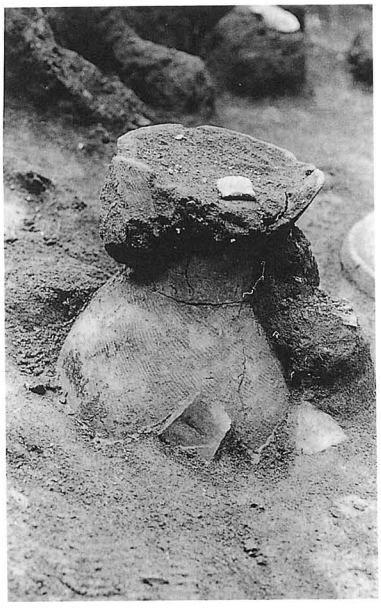
図版 9



第 5 号住居跡炭化材



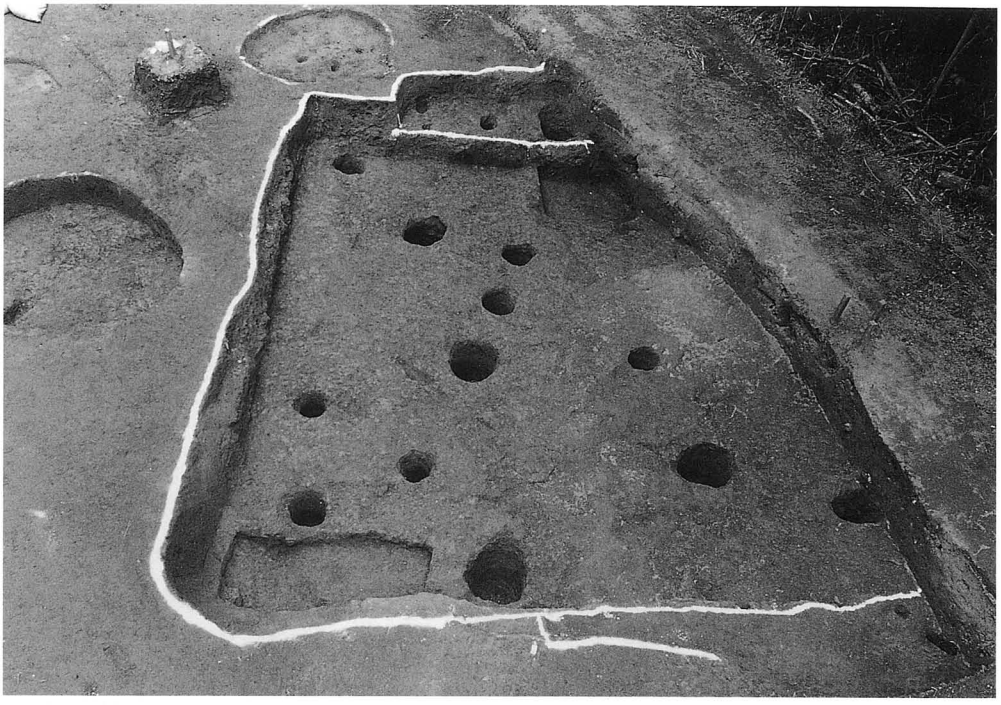
第 5 号住居跡遺物出土状態



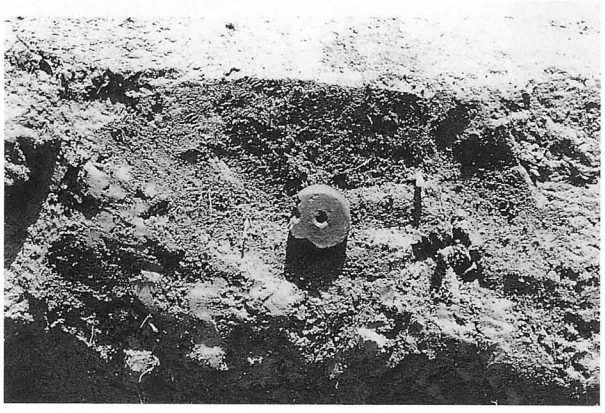
第 5 号住居跡遺物出土状態



第 5 号住居跡遺物出土状態



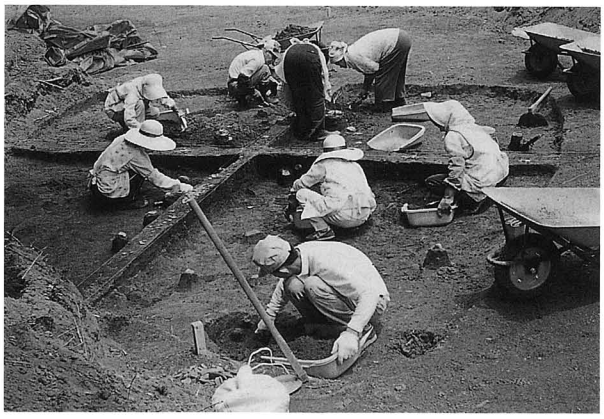
第 6 号住居跡完掘



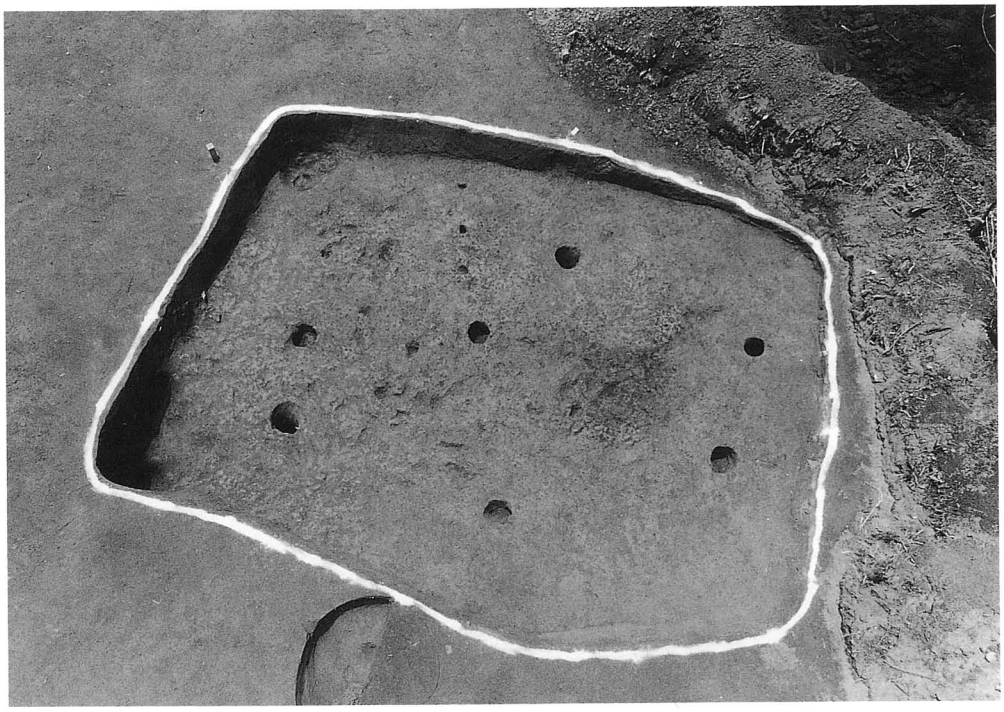
第 6 号住居跡遺物出土状態



第 1 号～ 7 号住居跡



調査風景



第 7 号住居跡完掘



第 7 号住居跡遺物出土状態













第７号住居跡遺物出土状態



第 8 号住居跡遺物出土状態



第 8 号住居跡炭化材出土状態



第 9 号住居跡完掘



第 9 号住居跡遺物出土状態



第 I 号～ 9 号住居跡



第 9 号住居跡遺物出土状態



調査風景



調査風景

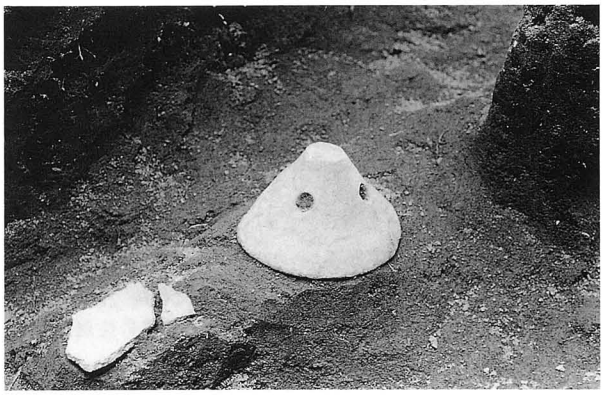


第10号住居跡完掘



第10号住居跡遺物出土状態

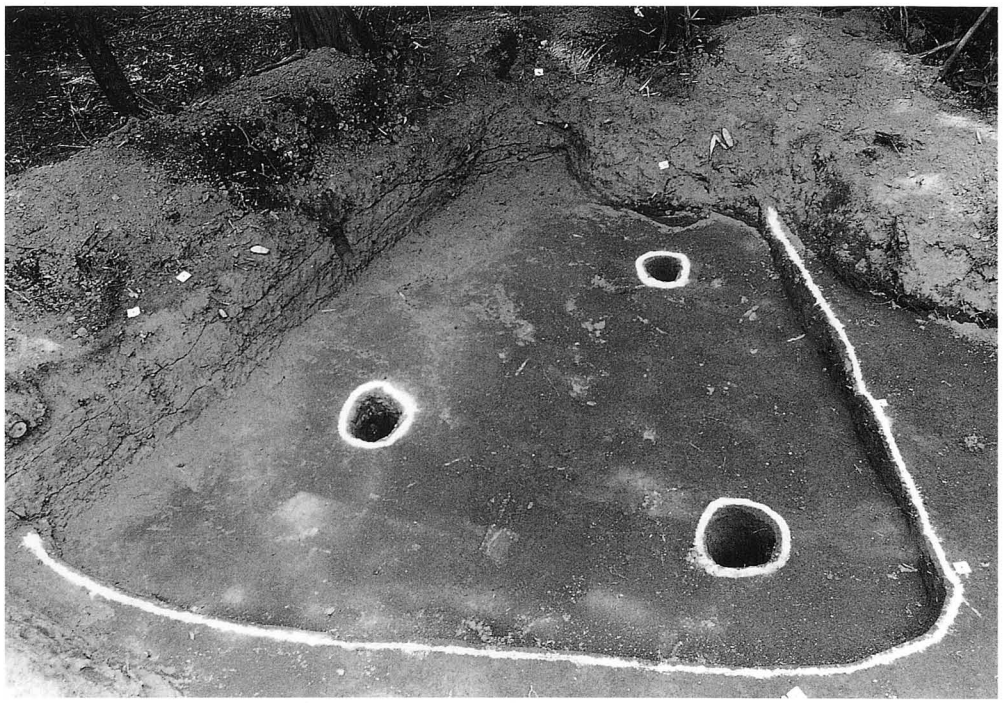








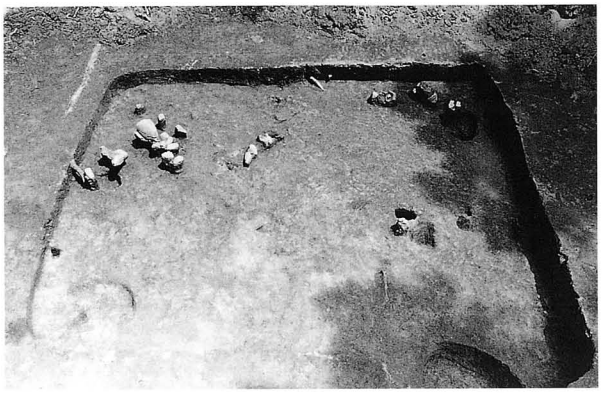
第10号住居跡遺物出土状態



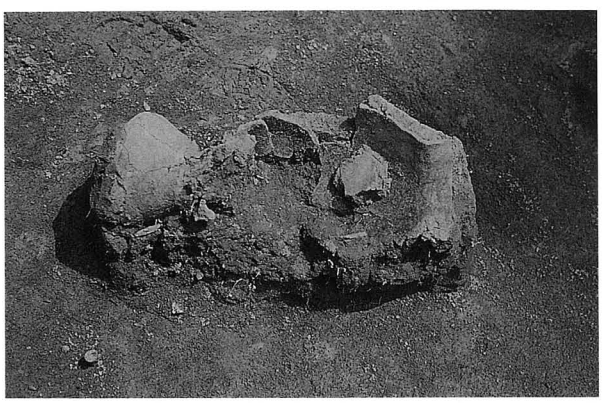
第12号住居跡完掘

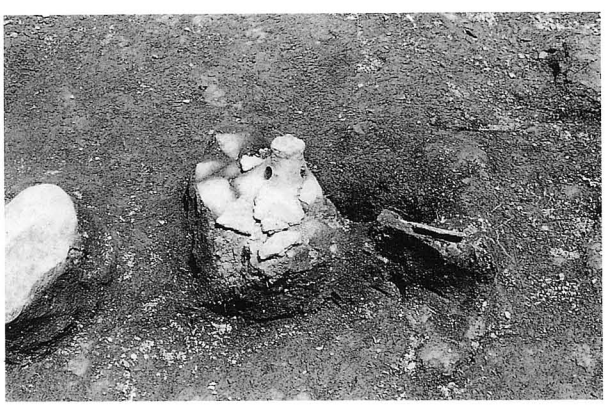


第13号住居跡完掘

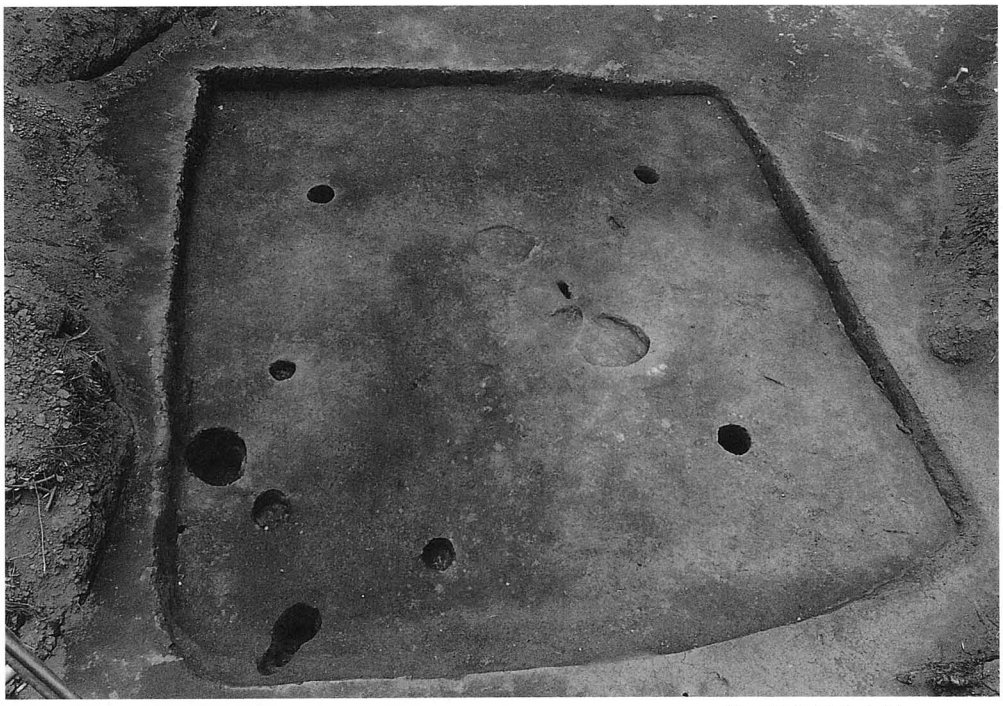




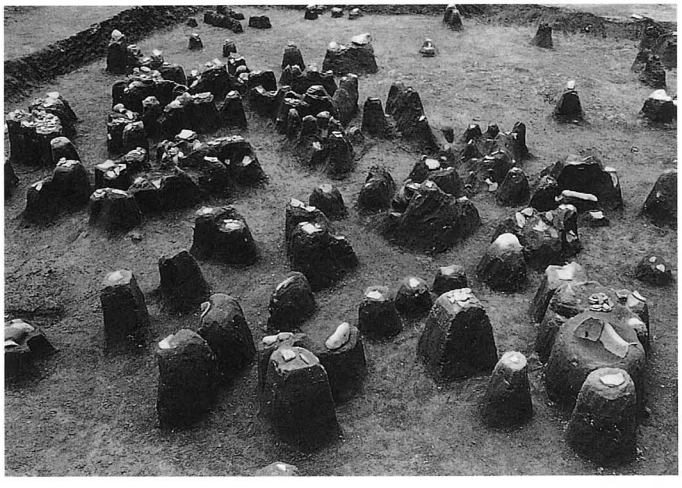




第13号住居跡遺物出土状態



第14号住居跡完掘





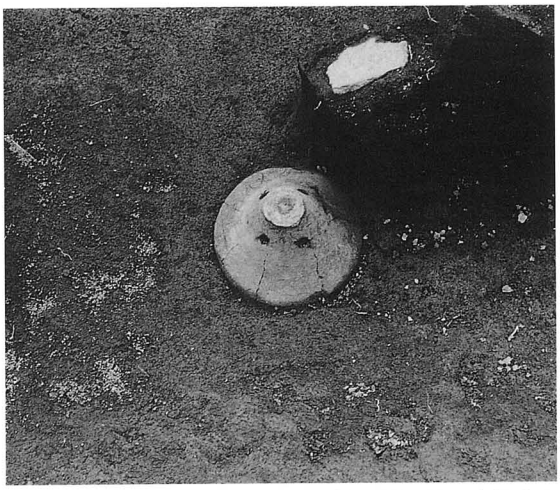
第14号住居跡遺物出土状態



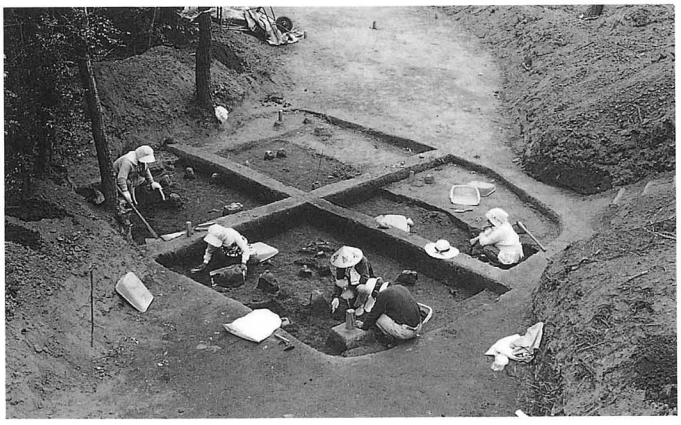
第13号・14号住居跡



第14号住居跡遺物出土状態



第14号住居跡遺物出土状態



調査風景



第15号住居跡完掘



第15号住居跡遺物出土状態

図版23



第16・18a号
住居跡



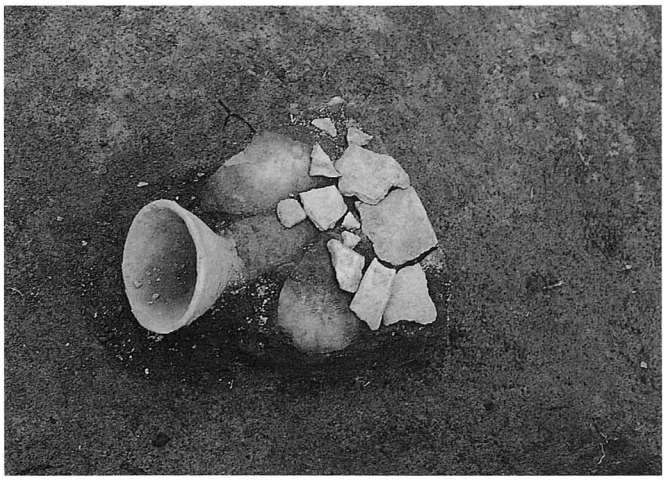
第16号住居跡完掘



第18号住居跡完掘

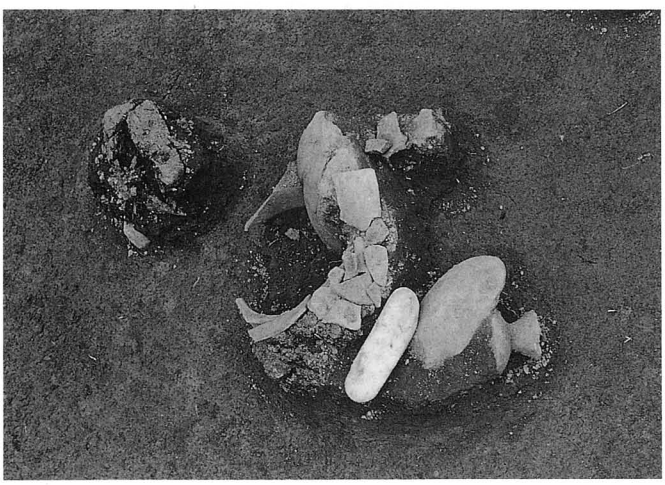


第18a号住居跡遺物出土状態

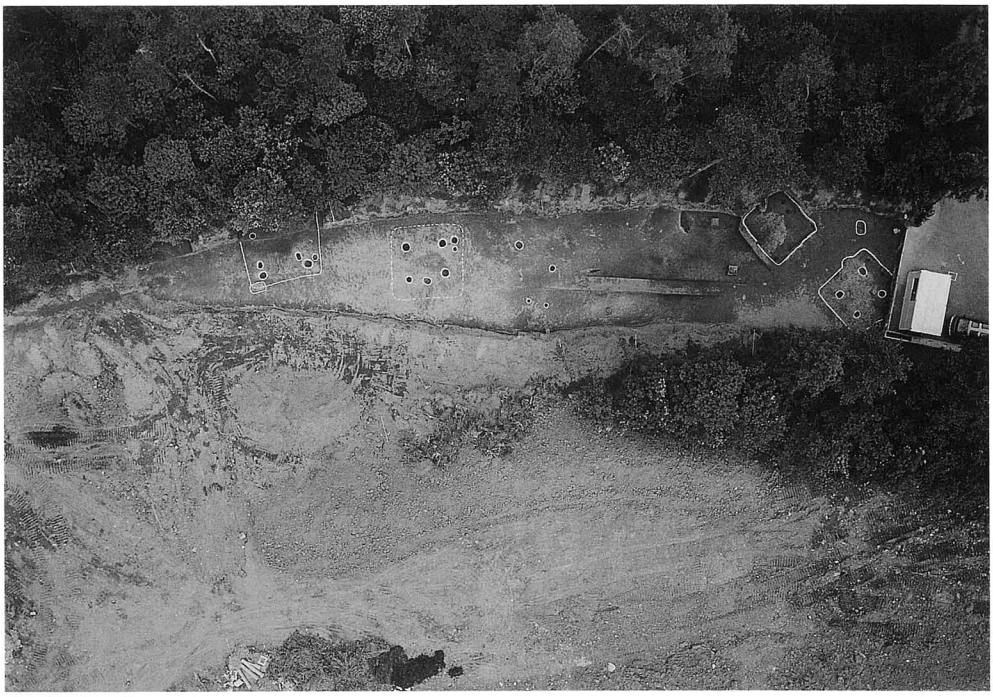




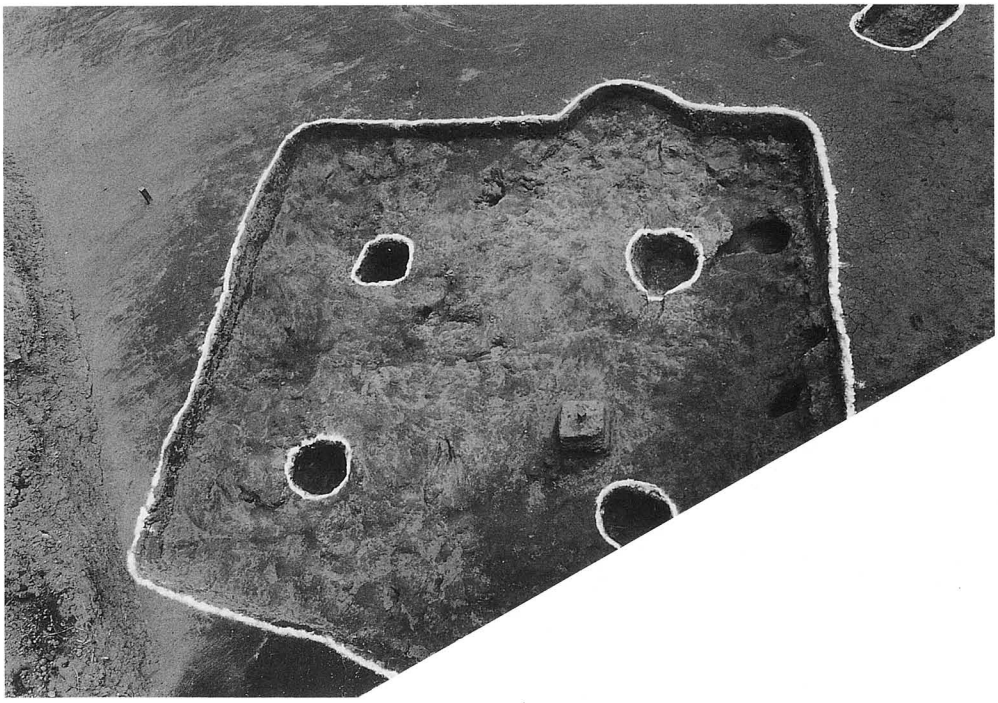




第18ａ号住居跡遺物出土状態



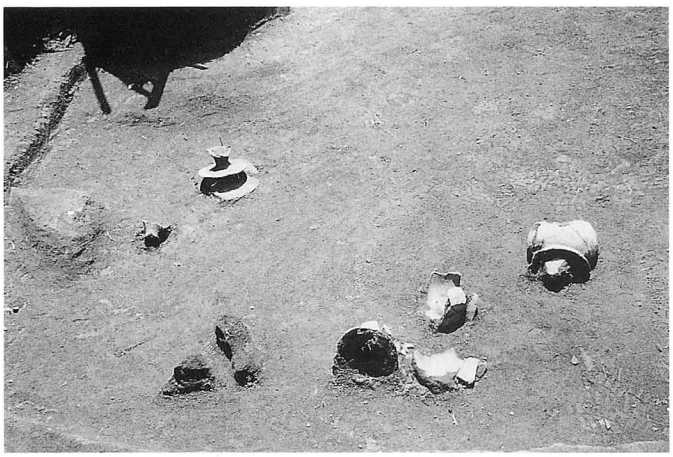
姥ケ沢遺跡第８調査地区航空写真



第18ｂ号住居跡

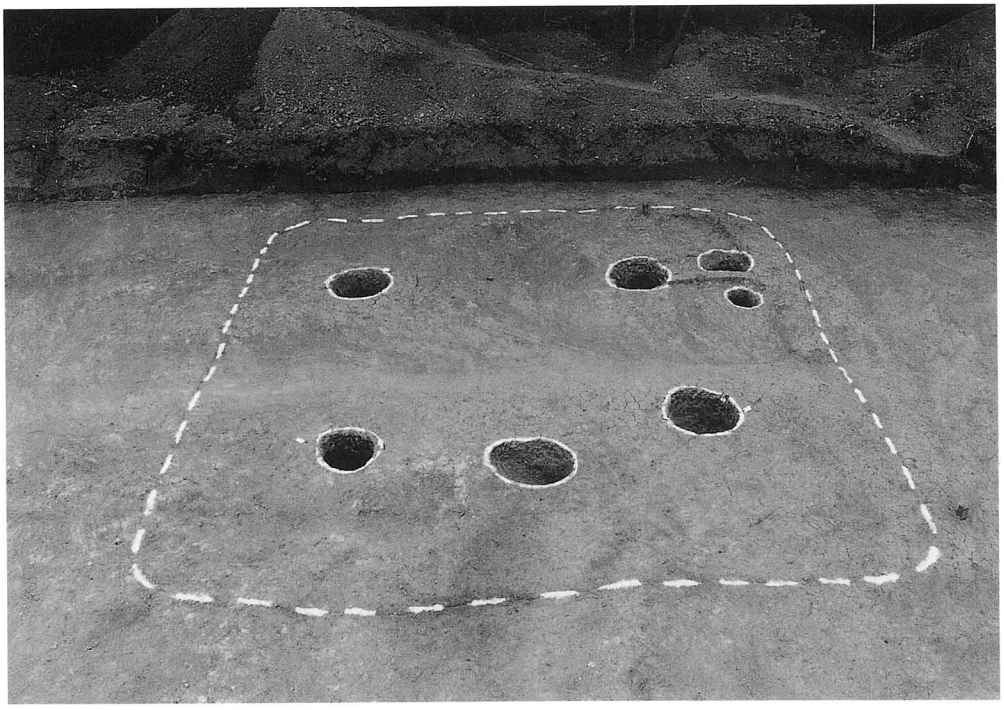


第18ｂ・19号住居跡



第19号住居跡遺物出土状態

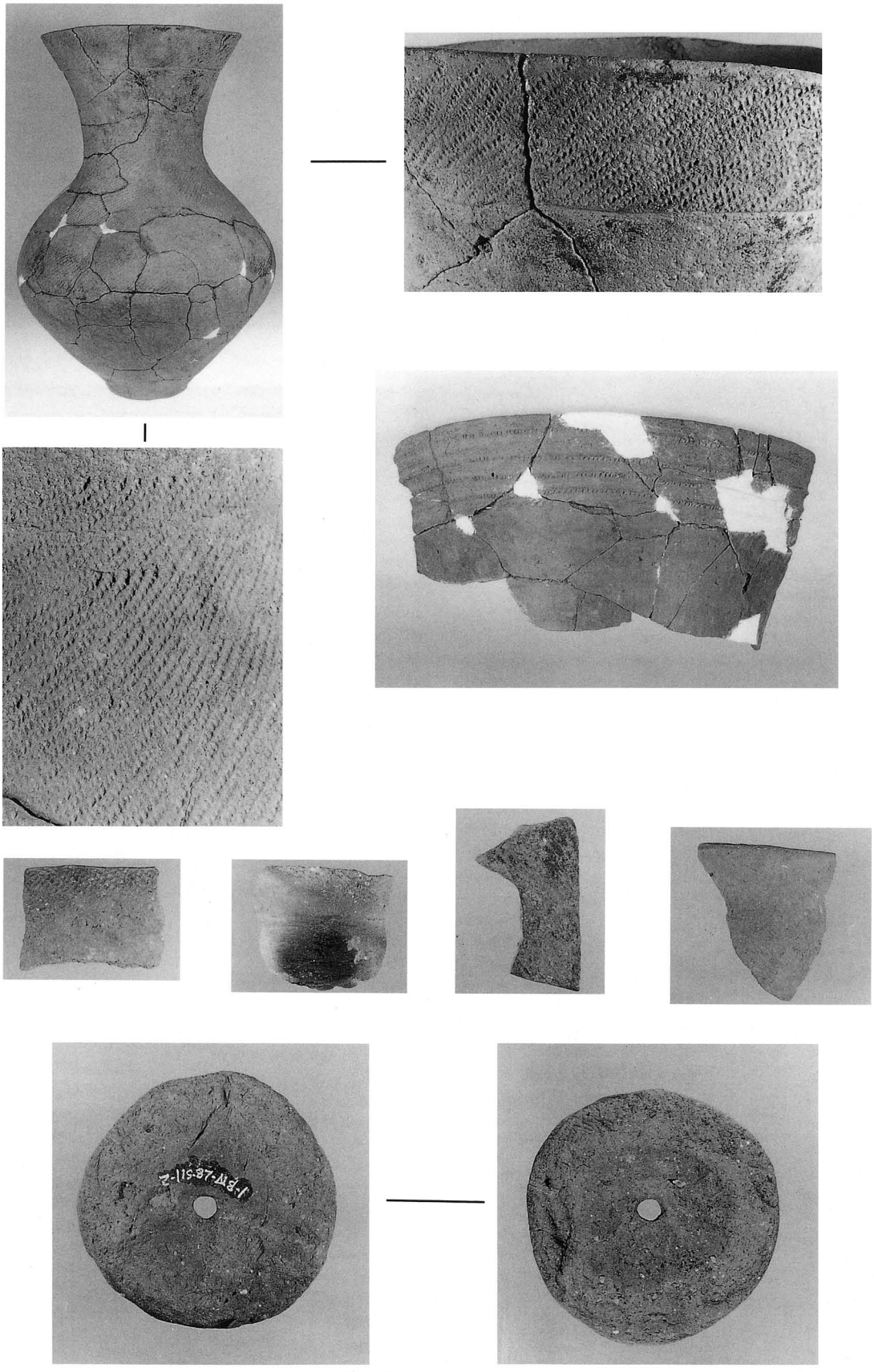




第20号住居跡



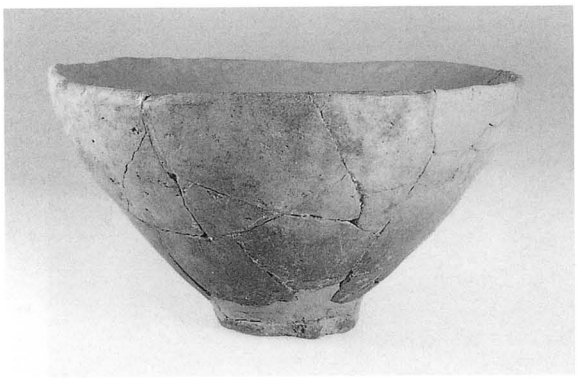
第21号住居跡

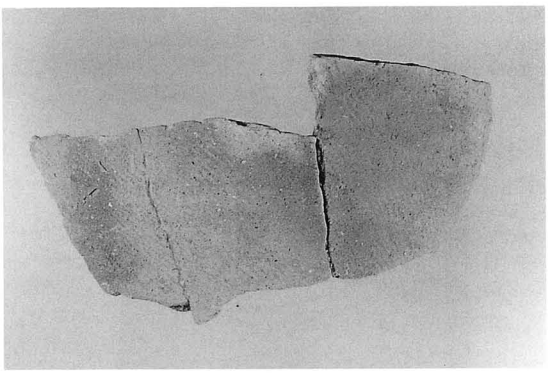


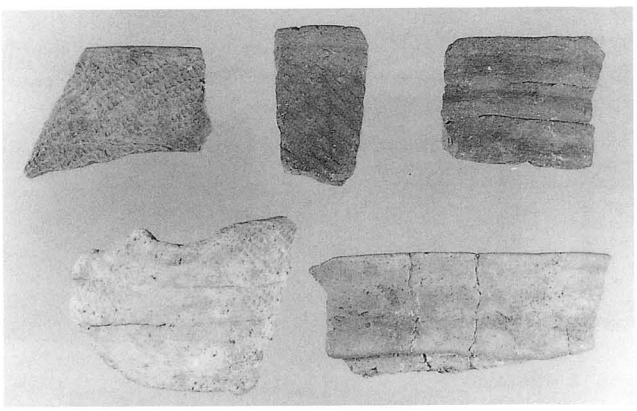
第Ⅰ号住居跡出土土器

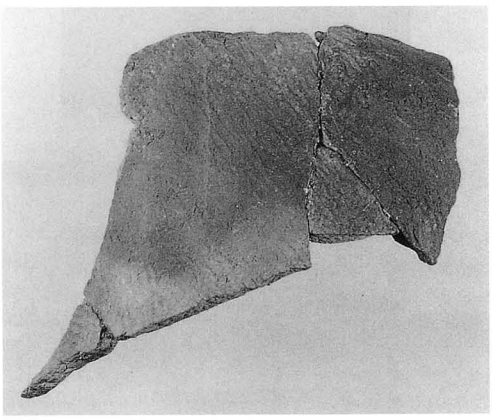






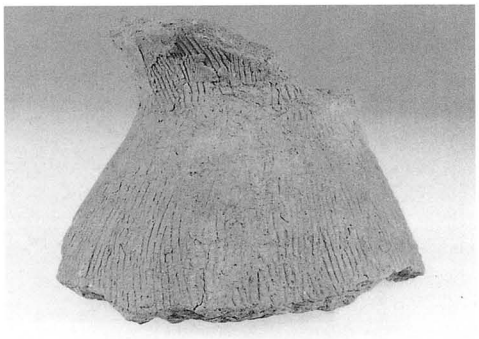






第 2 号住居跡出土土器



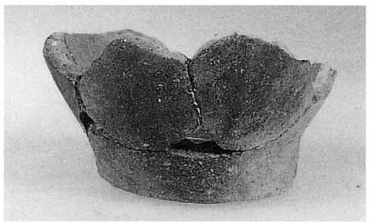


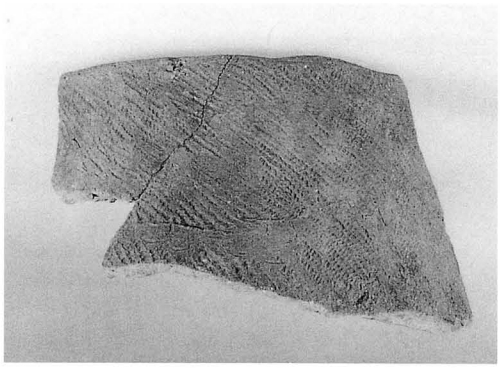
第 3 号住居跡出土土器

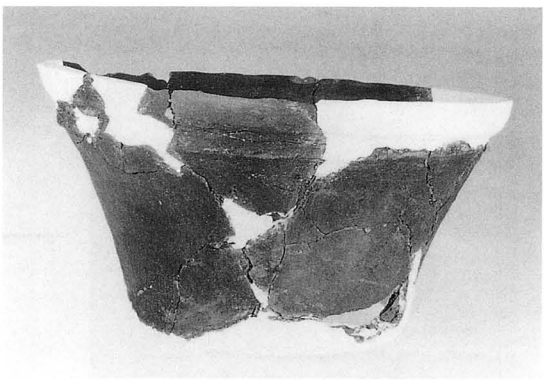


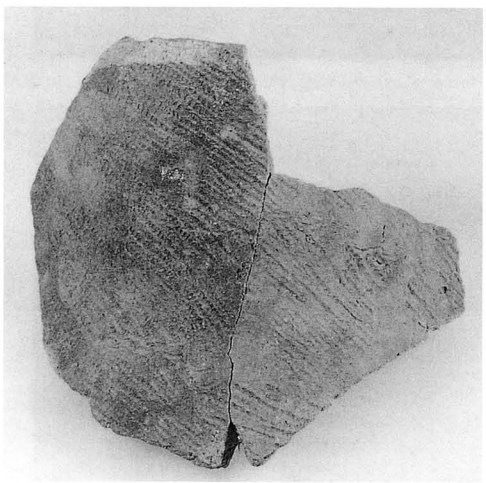


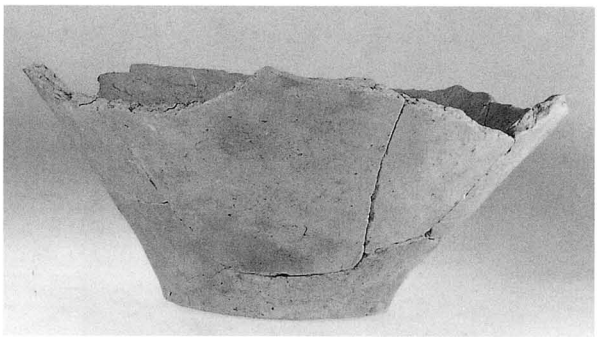




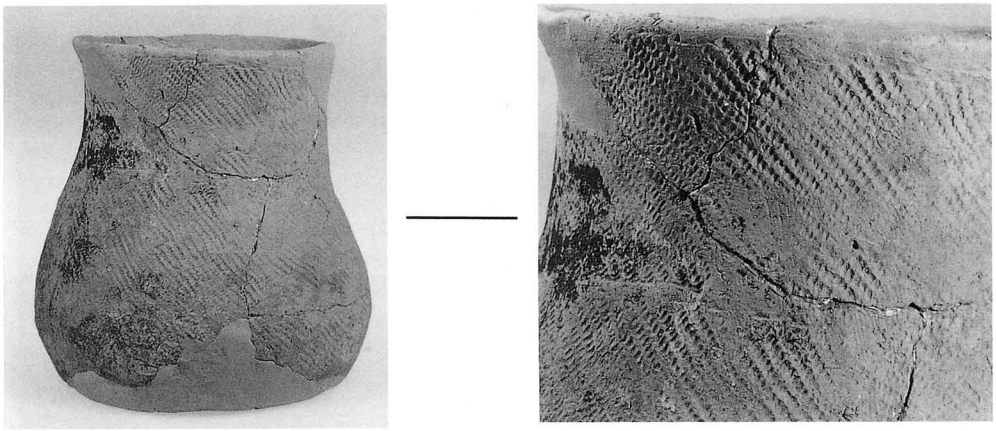


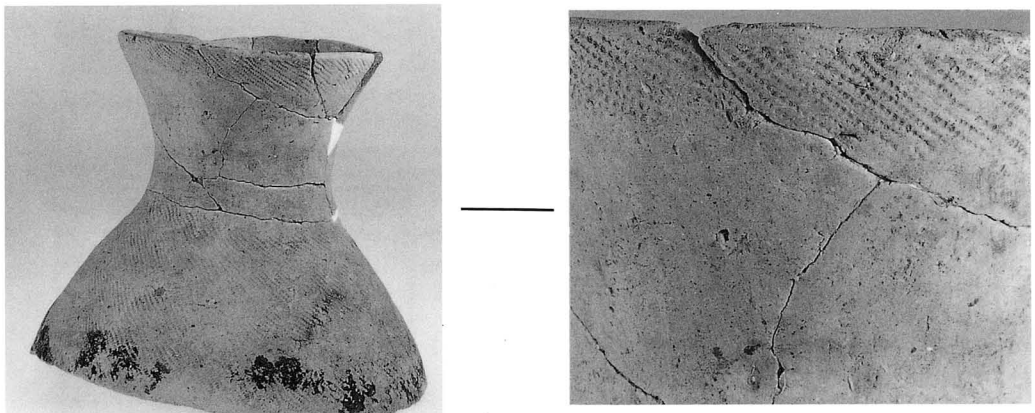


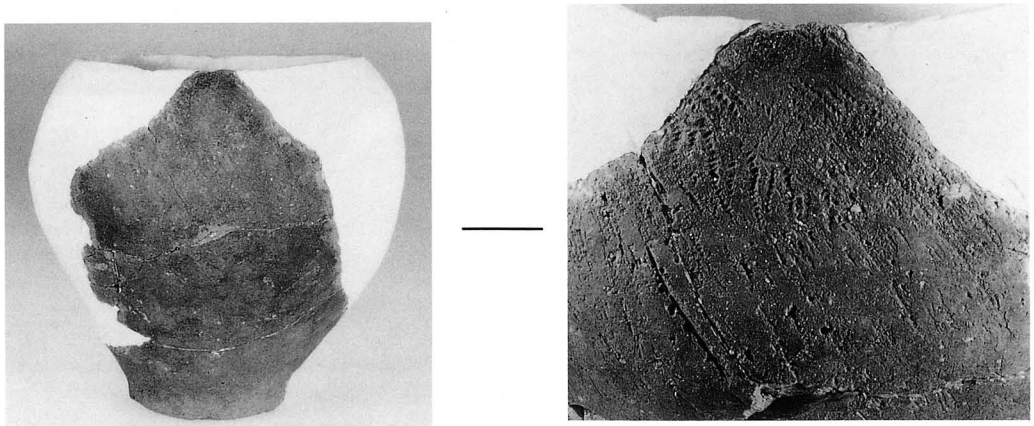


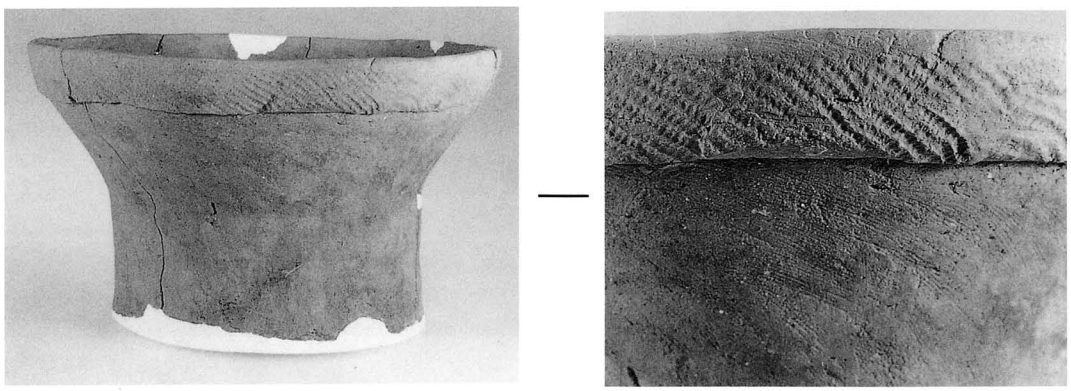


第 4 号住居跡出土土器



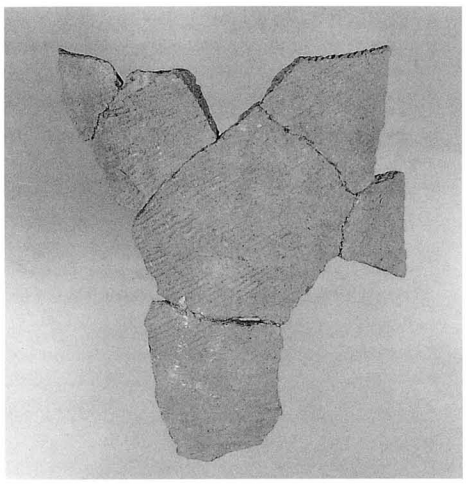


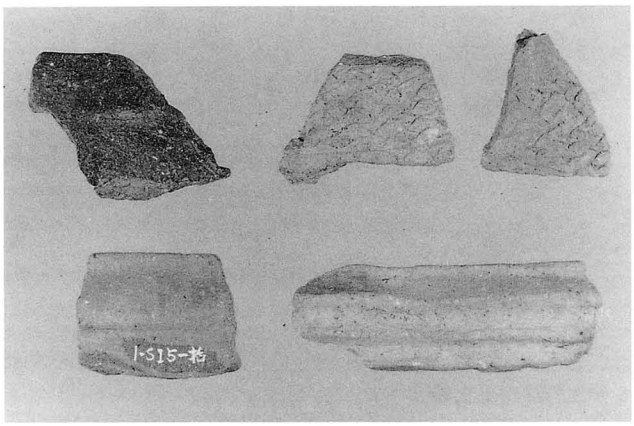




第5号住居跡出土土器(1)







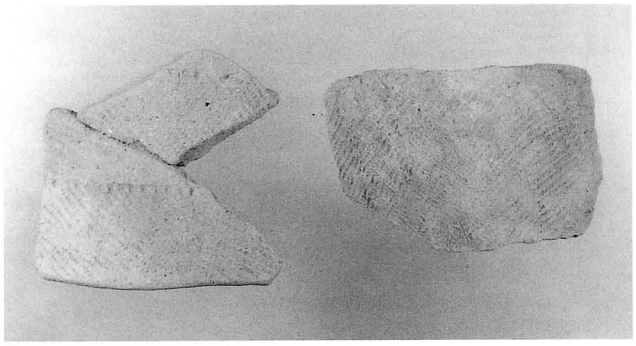




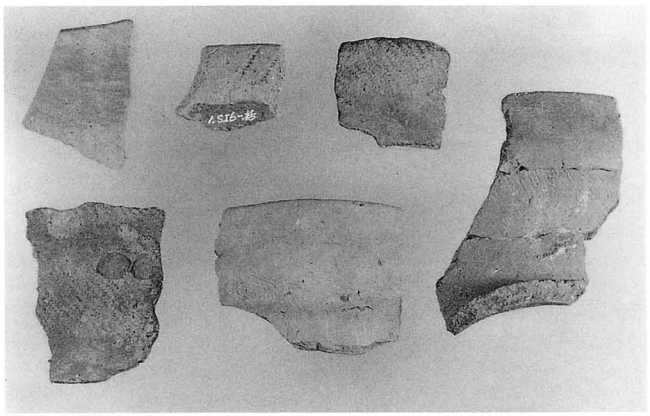




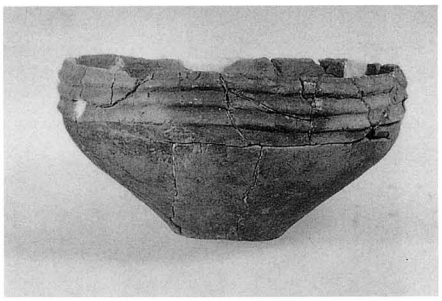
第 6 号住居跡出土土器(1)



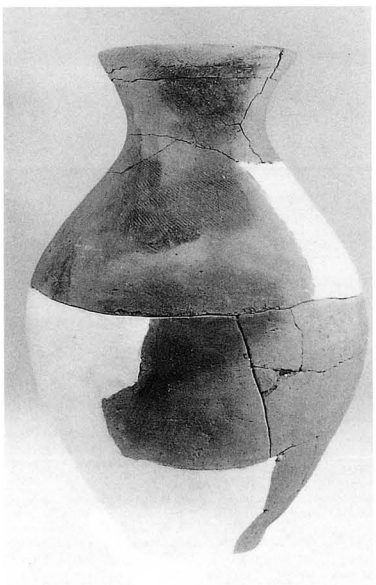


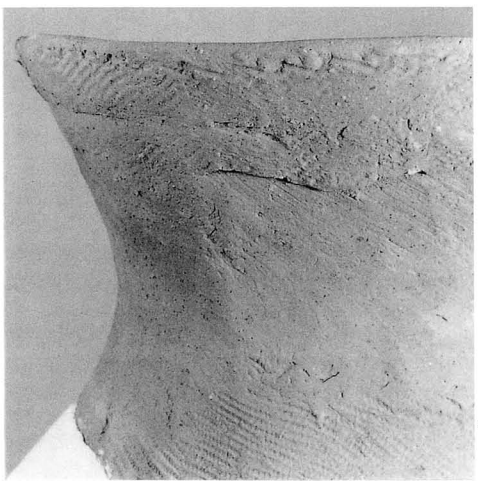


第 6 号住居跡出土土器(2)









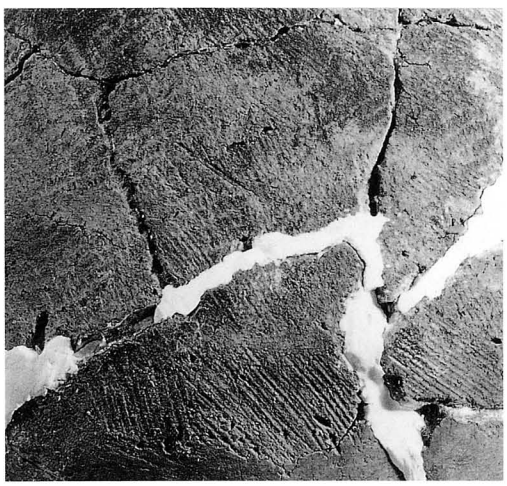
第 7 号住居跡出土土器(1)





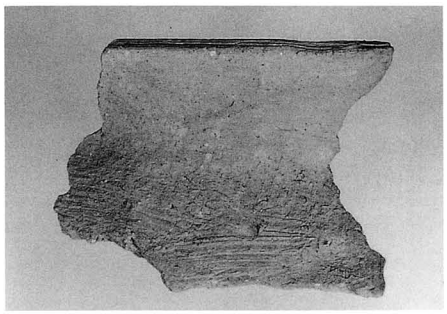
第 7 号住居跡
出土土器(2)





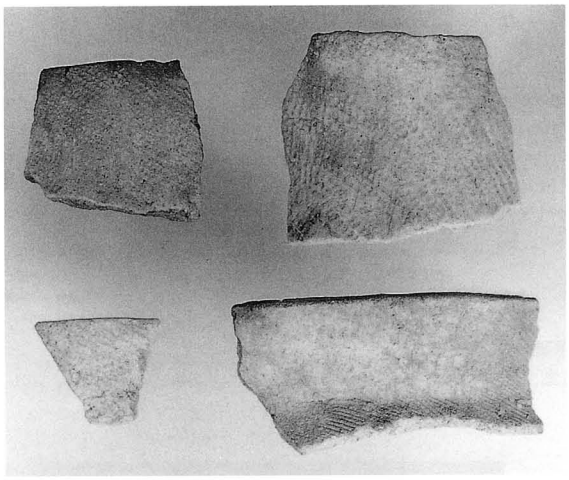


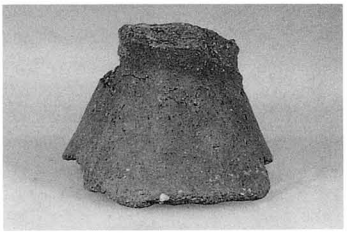


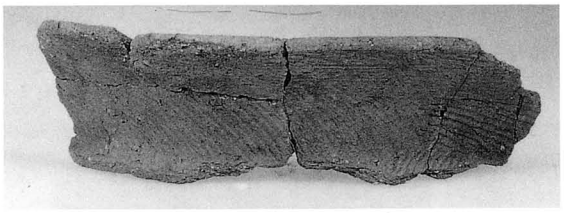




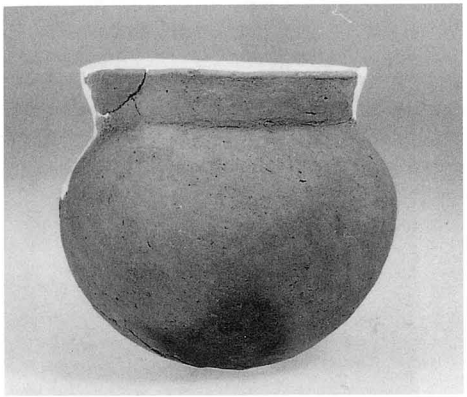
第 8 号住居跡出土土器(1)







第 8 号住居跡出土土器(2)



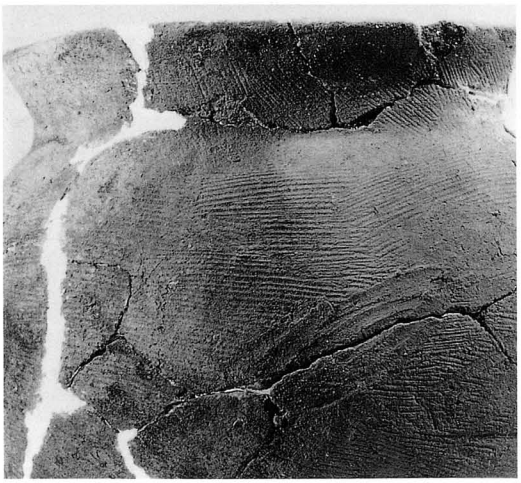






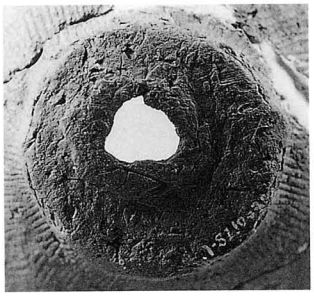


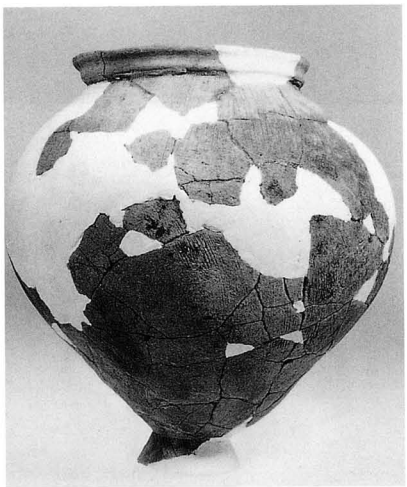


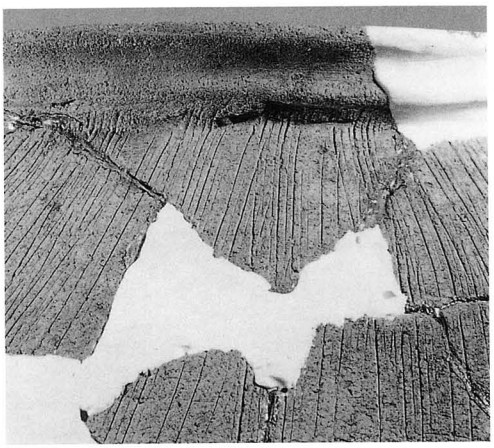


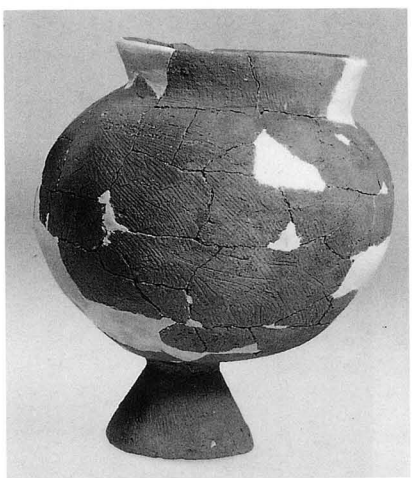
第 9 号住居跡出土土器

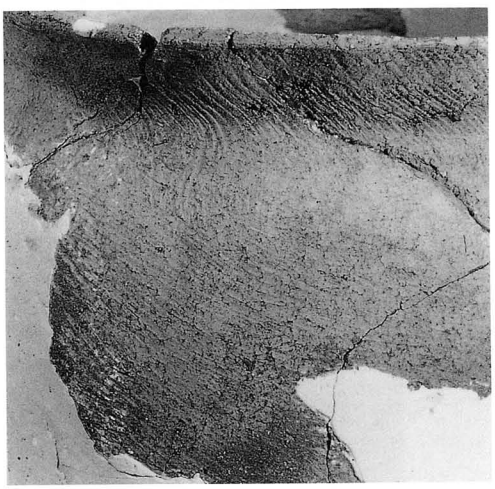




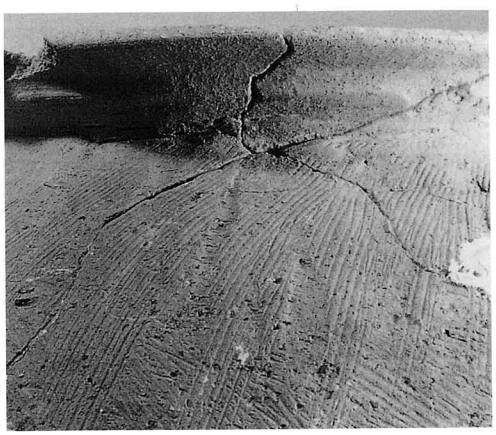






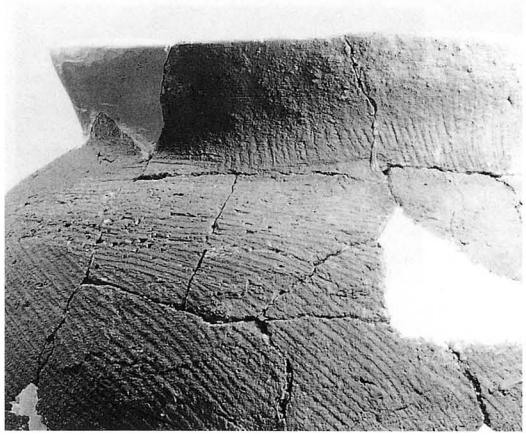


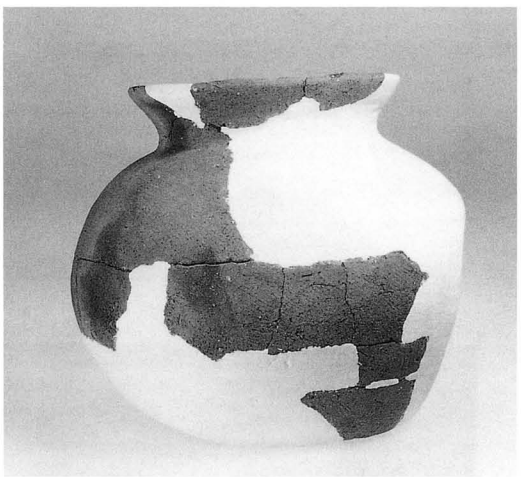


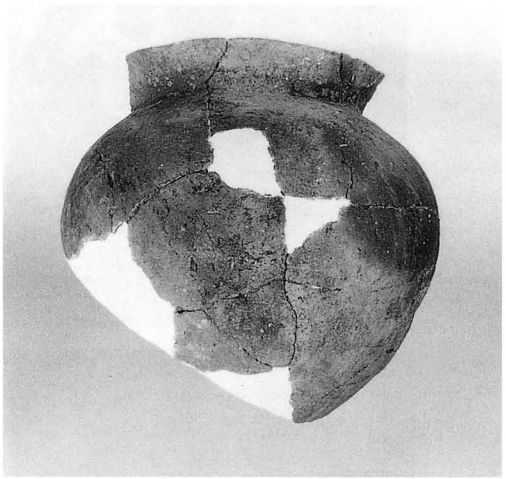


第10号住居跡出土土器(1)



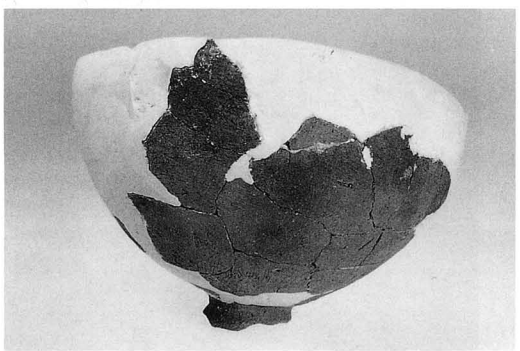


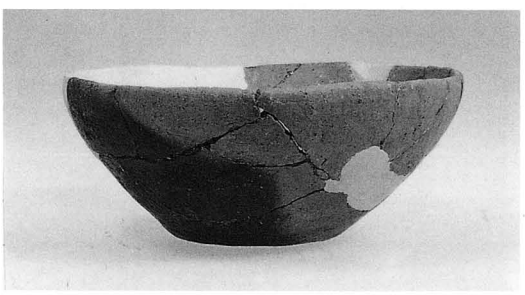








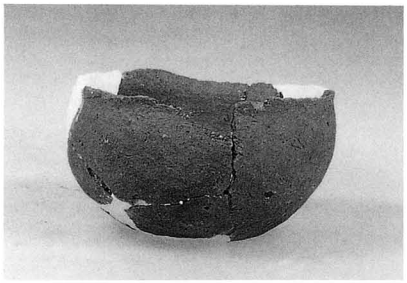




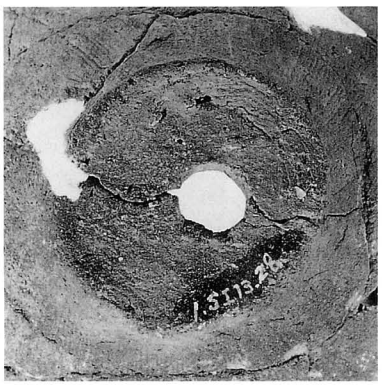
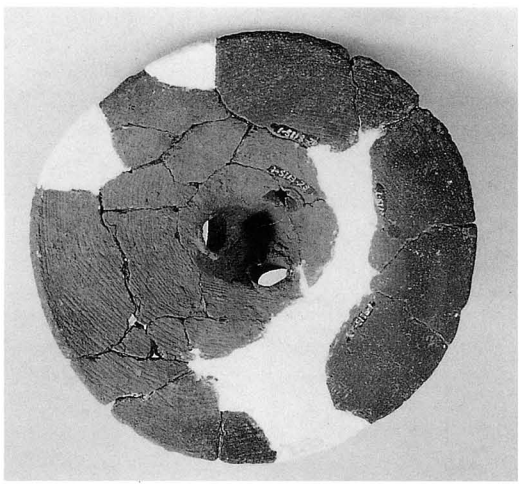
第10号住居跡出土土器(2)

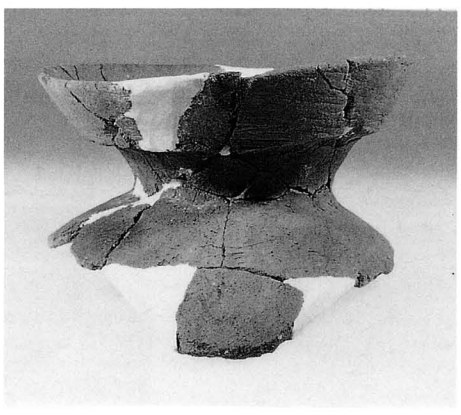


第10号住居跡出土土器(3)

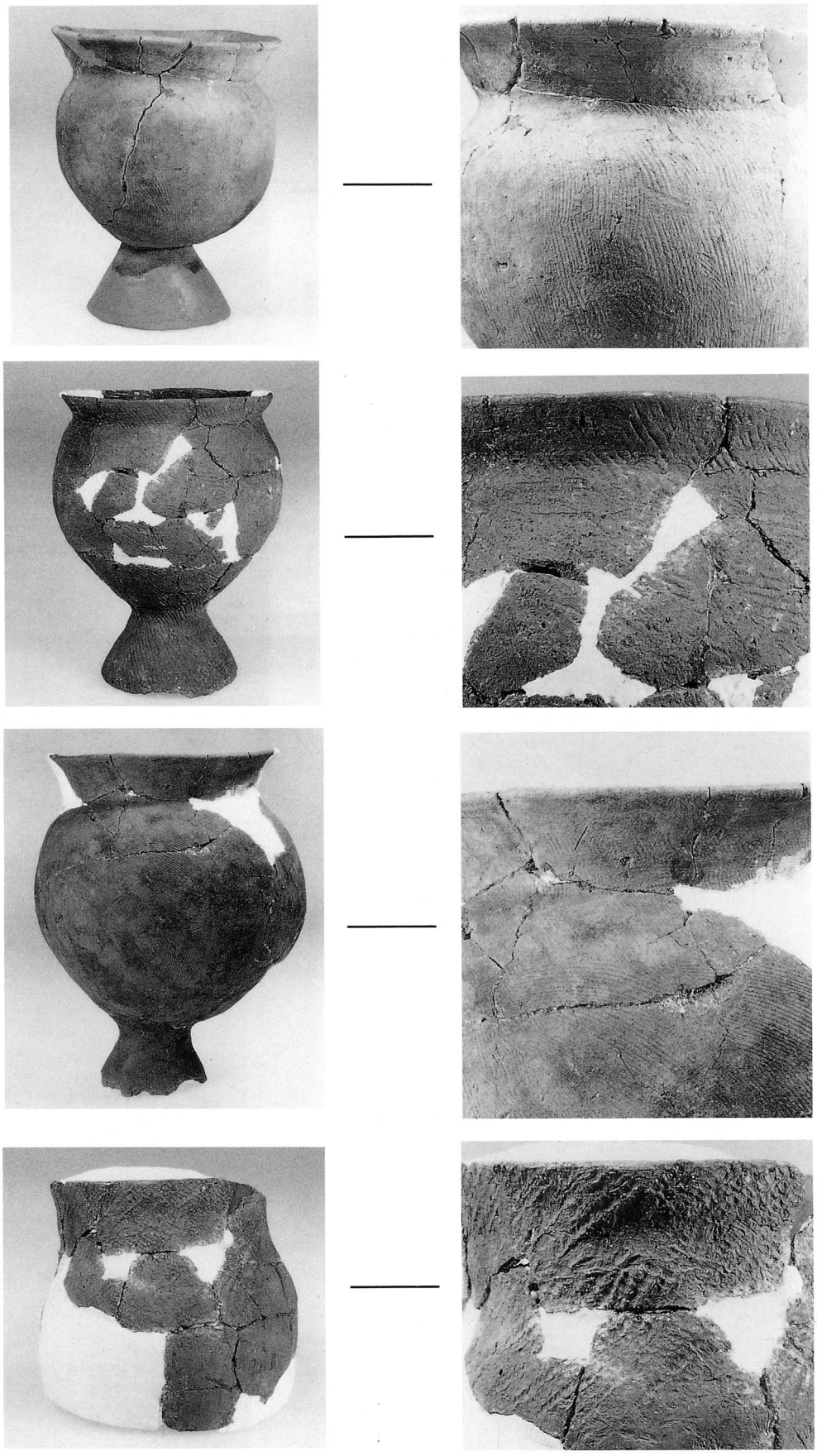




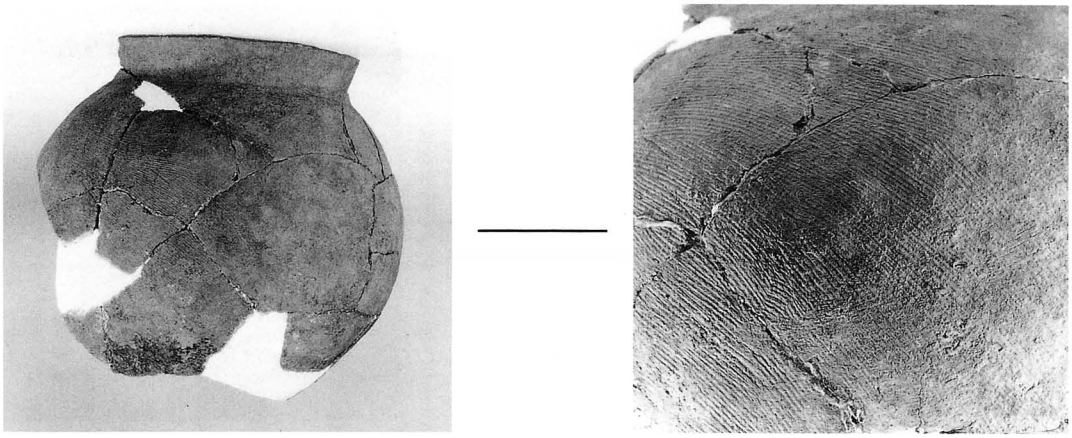



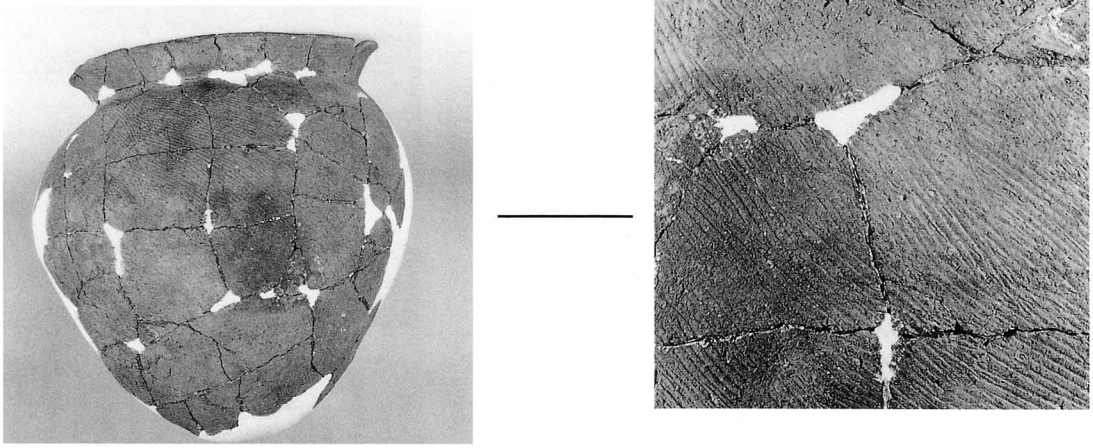



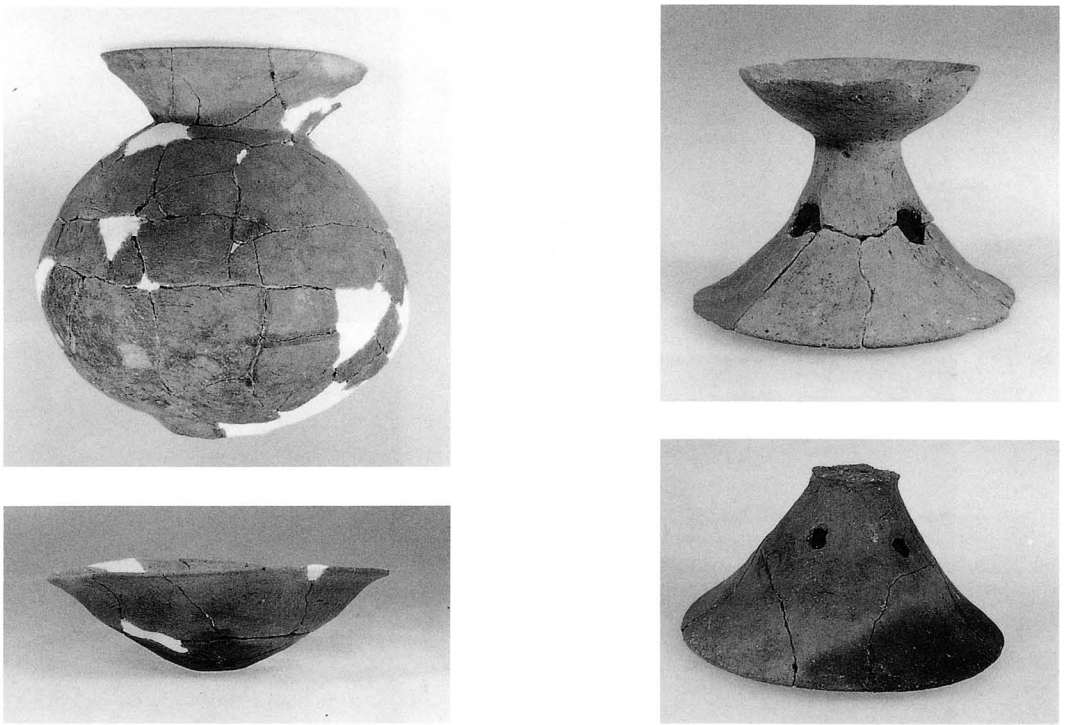
第13号住居跡出土土器



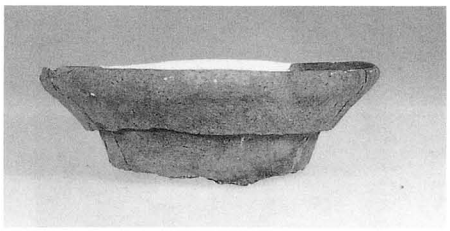
第14号住居跡出土土器(1)

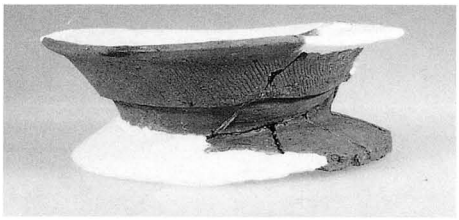






第14号住居跡出土土器(2)

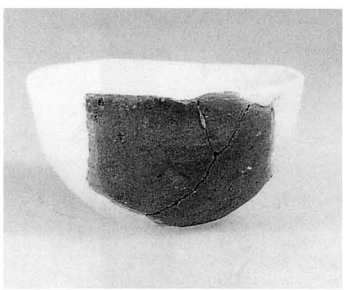










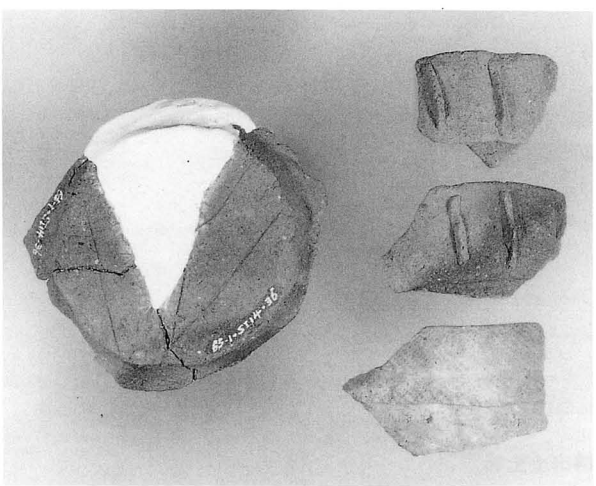


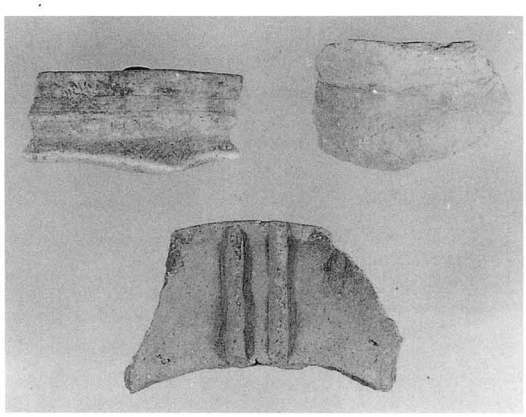






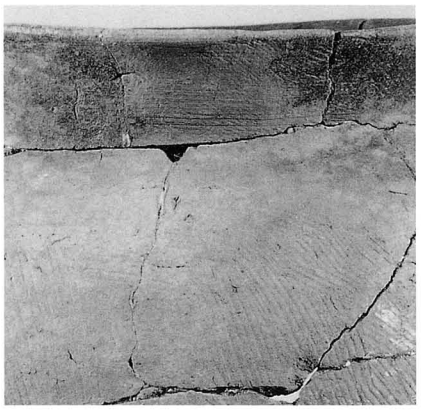


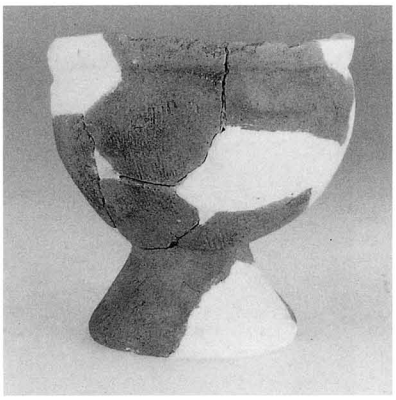




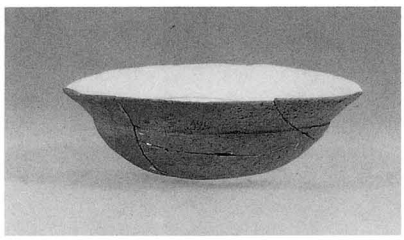
第14号住居跡出土土器(3)

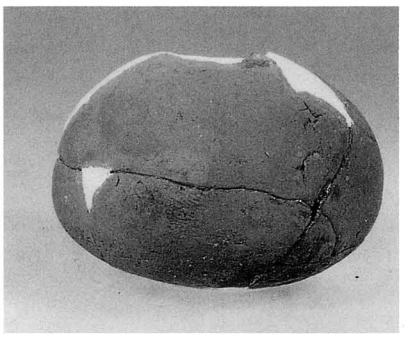


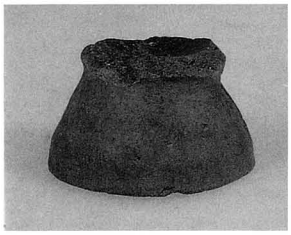








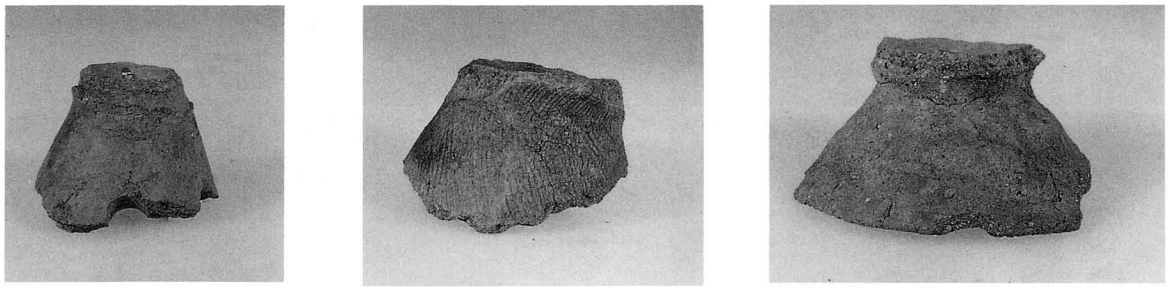




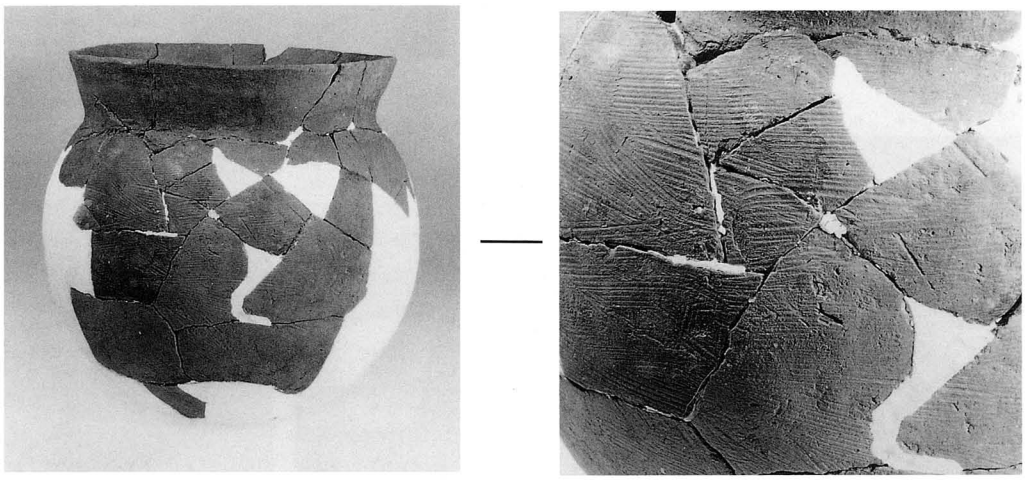




第15号住居跡出土土器



第16号住居跡出土土器

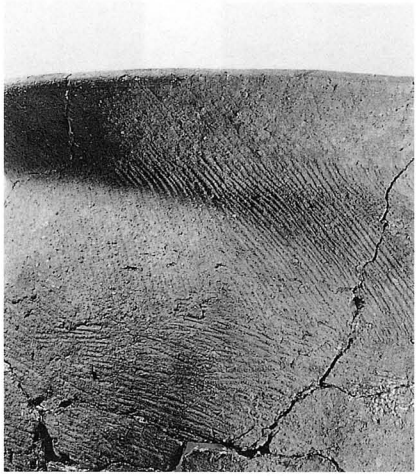




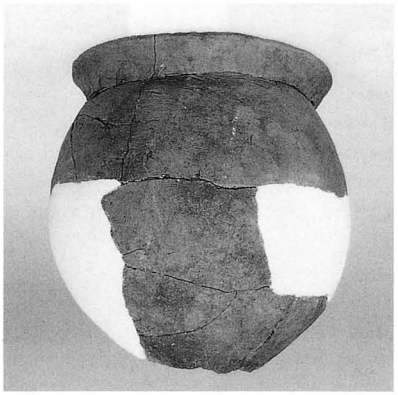


第18ｂ号住居跡出土土器





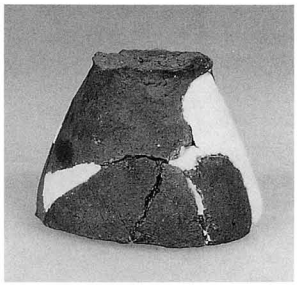








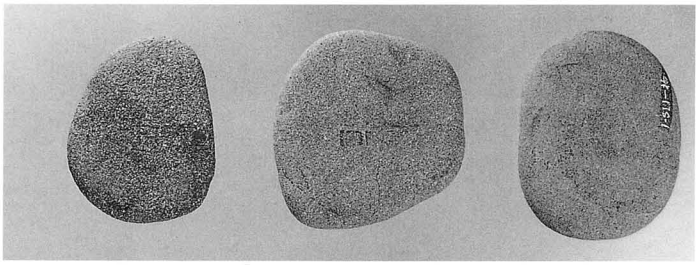


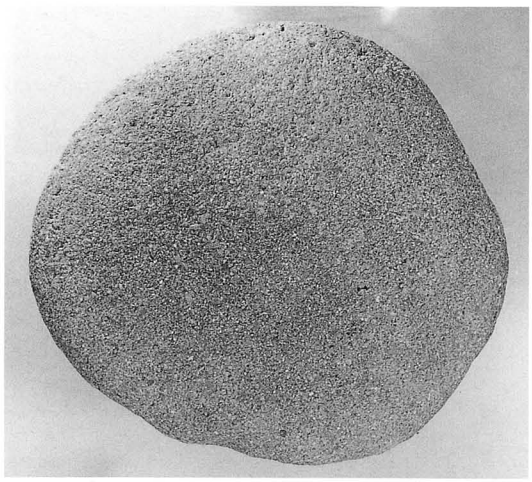


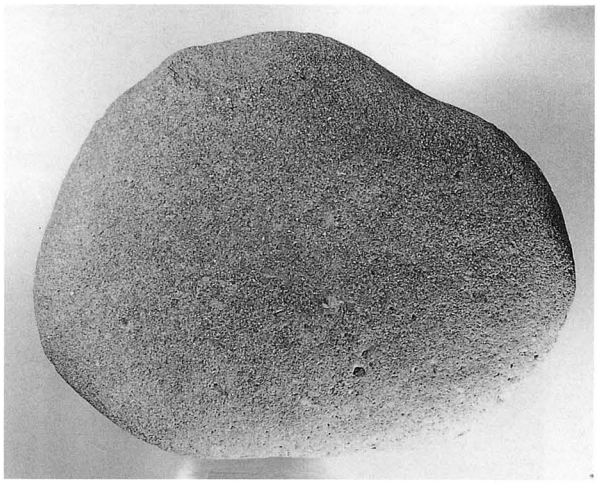
第19号住居跡出土土器



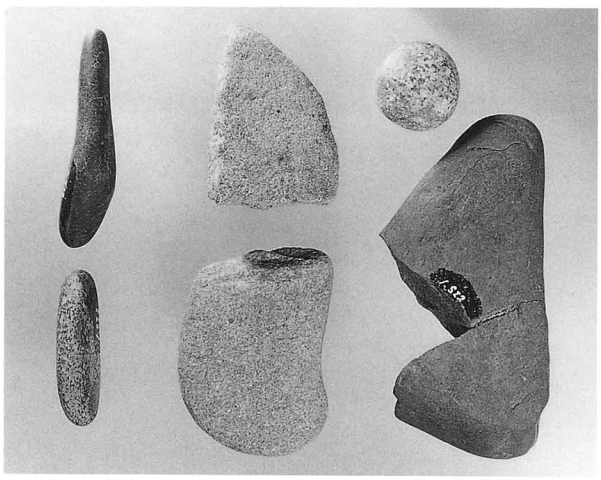
第20号住居跡出土土器





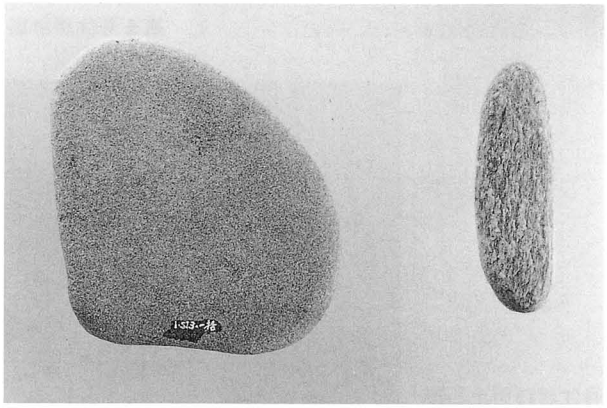


第Ⅰ号住居跡出土石器

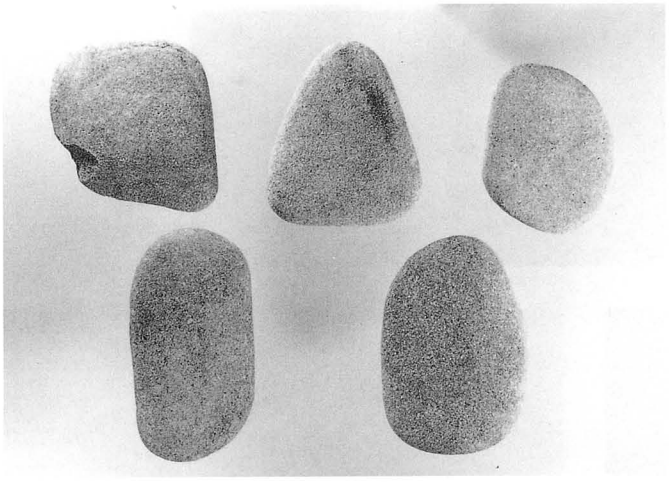




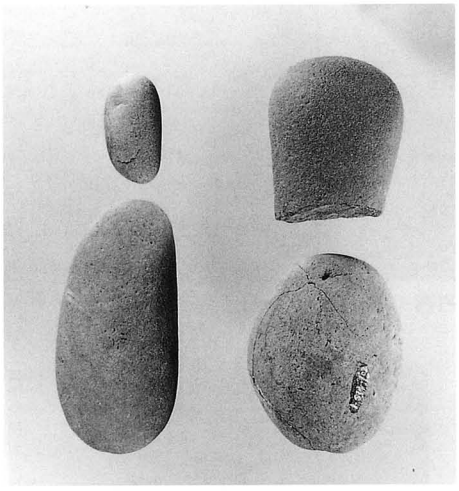
第２号住居跡出土石器

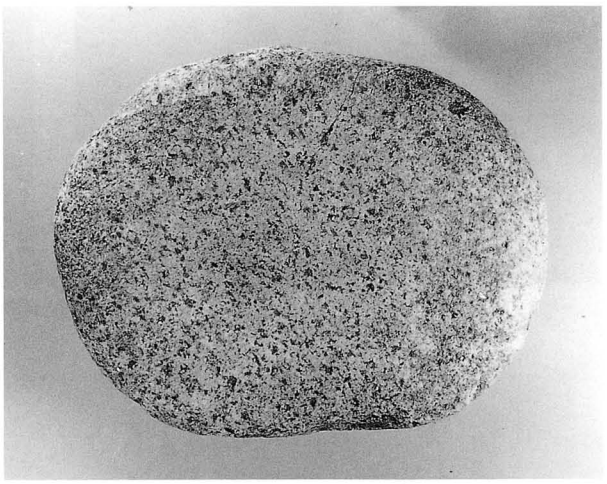


第３号住居跡出土石器

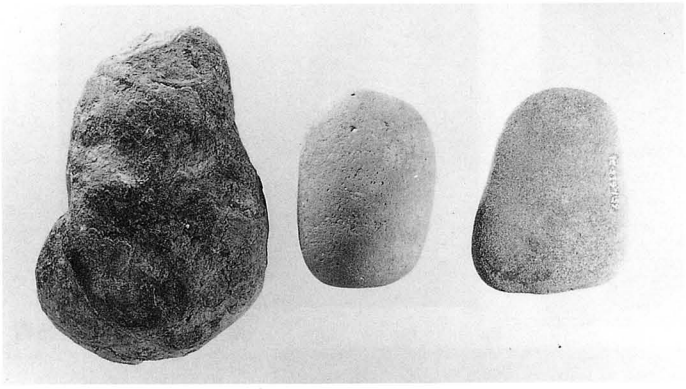




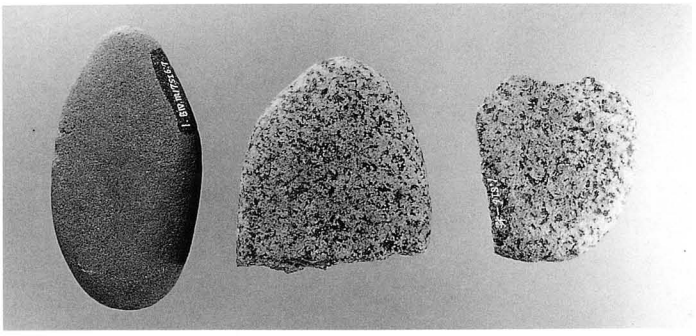




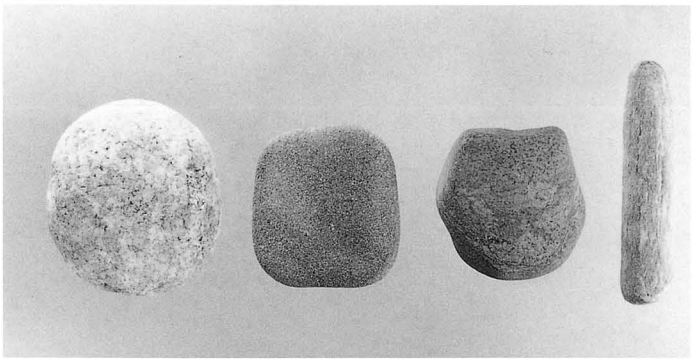
第 4 号住居跡出土石器



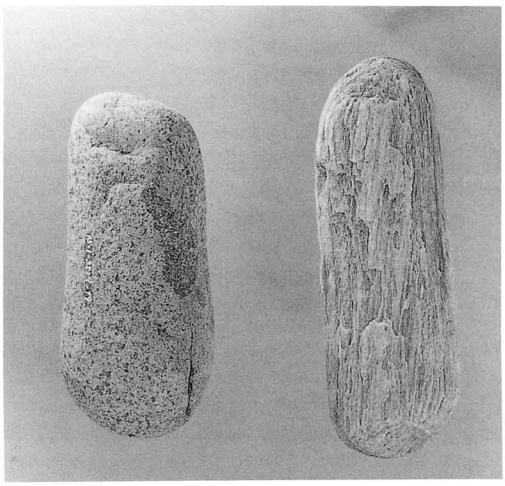
第 5 号住居跡出土石器

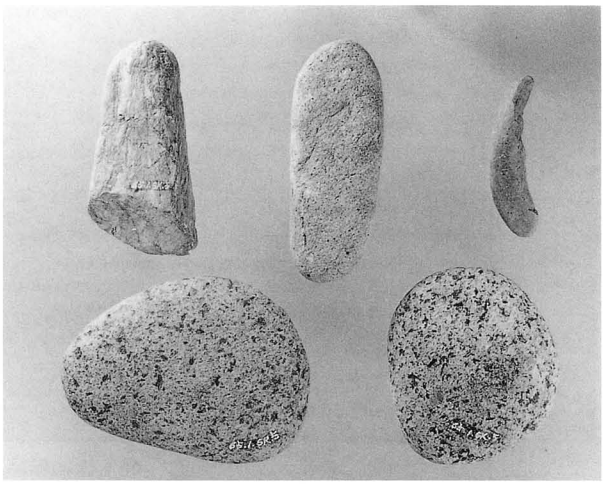


第 6 号住居跡出土石器

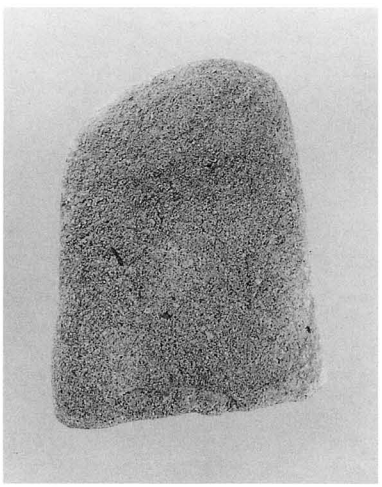


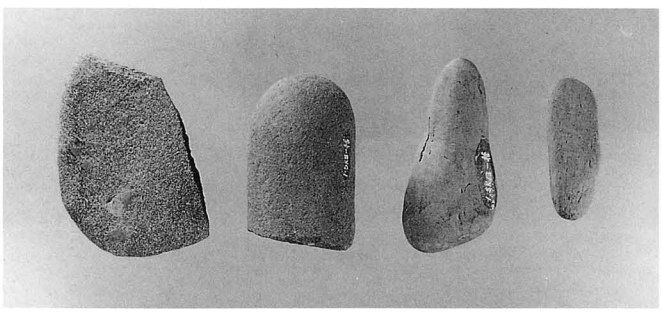
第７号住居跡出土石器











土坑出土石器

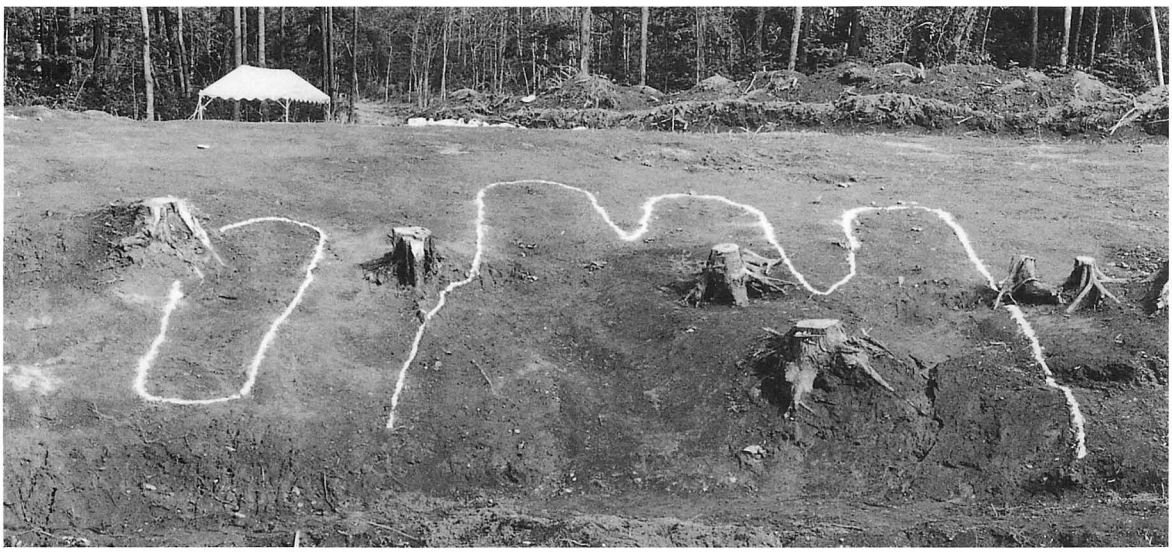


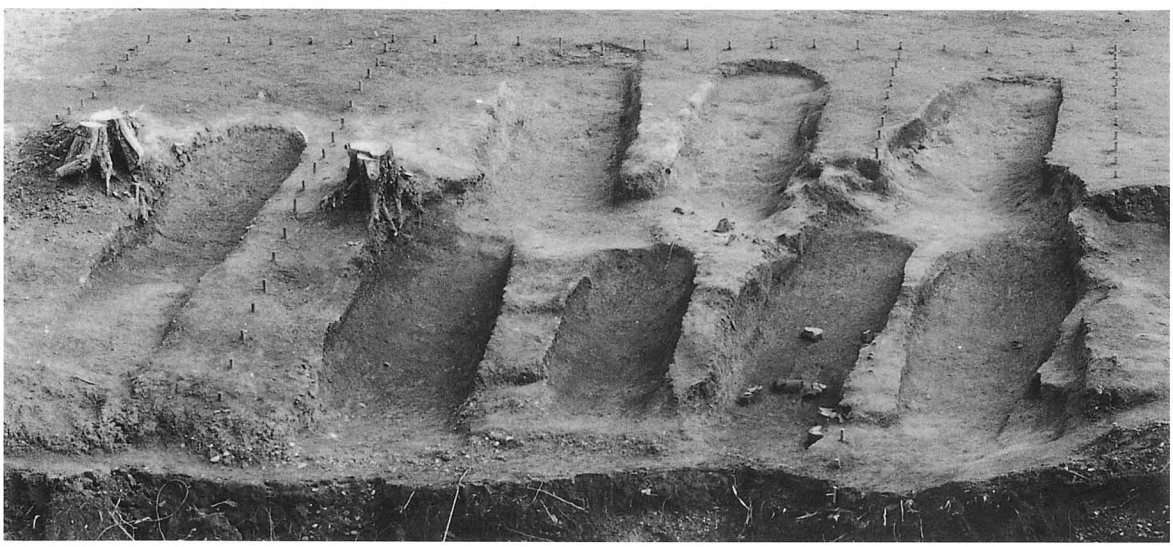
姥ヶ沢埴輪窯跡群、遠景



調査地点現況







上、中、窯跡確認状態　　下窯体完掘状態



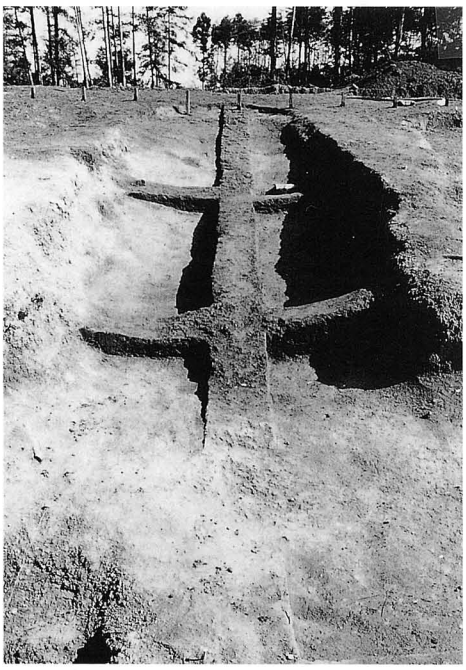
第Ⅰ号窯完掘状態



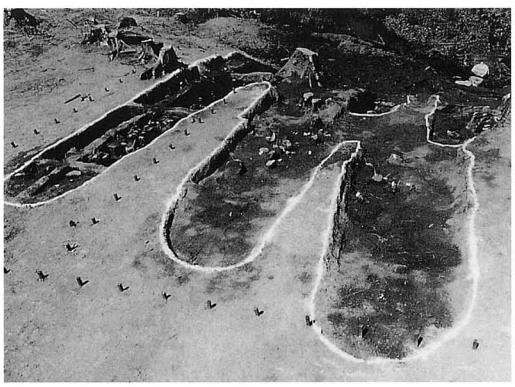
第２号窯Ⅰ次窯底



第３号窯遺物出土状態



第３号窯Ｉ次窯底



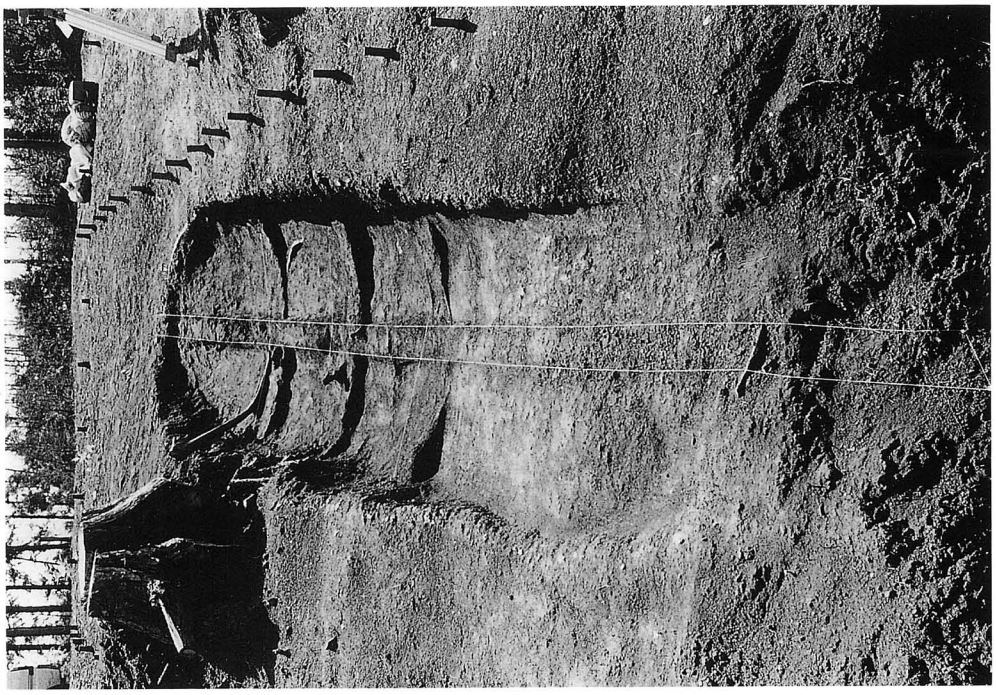
第Ｉ、２、３号窯調査状況





上、第 4 号窯焼台設置状態
中、　　同
下、　　同





第 4 号窯 I 次窯底



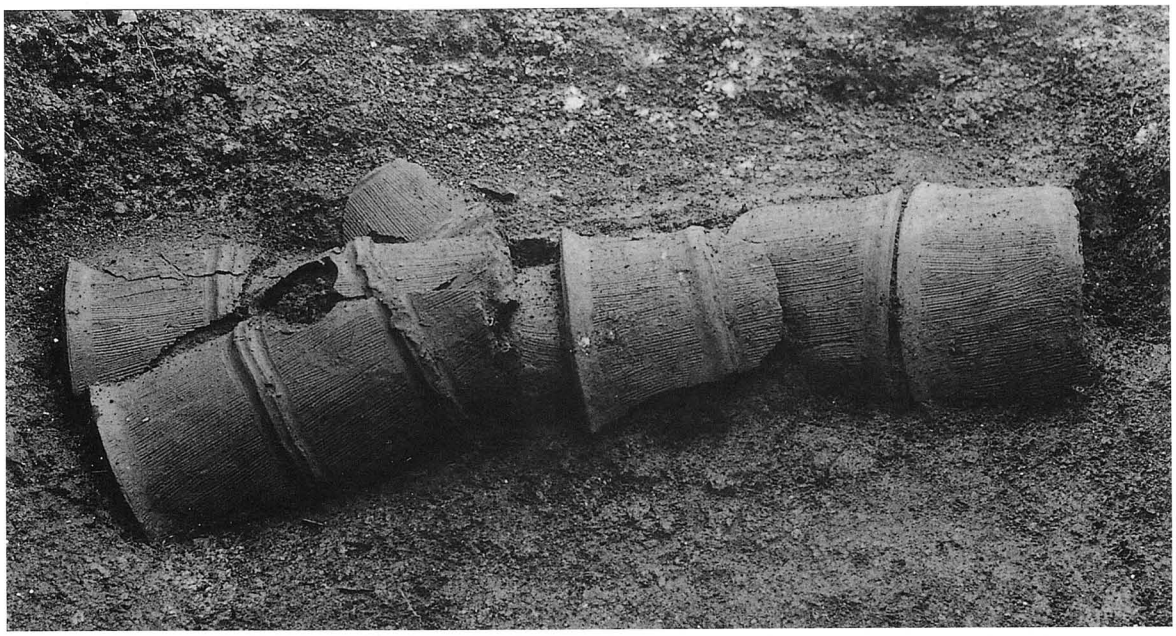
第 5 号窯最終窯底



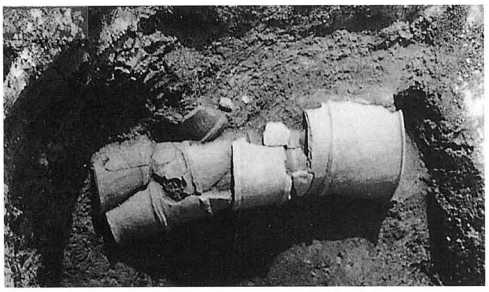
第５、６号窯最終窯底



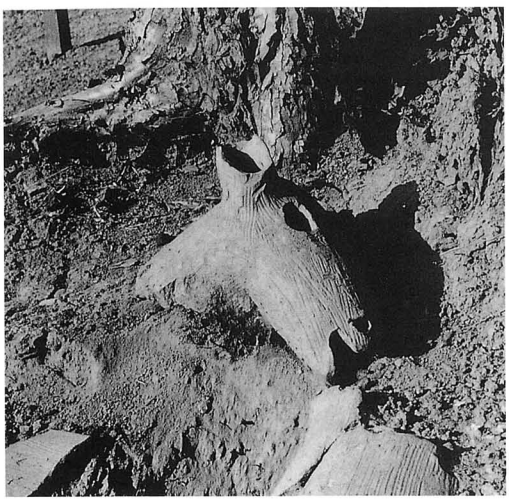
第５、６号窯Ⅰ次窯底



第 5 号窯焼台出土状態



第 5 号窯焼台



第 3 号窯灰原形象埴輪出土状態



第 6 号窯最終窯底



第７、８号窯最終窯底



第７、８号窯Ｉ次窯底



第Ⅰ号窯埴輪出土状態（Ⅰ—4）



第2号窯Ⅰ次窯底埴輪出土状態（2—Ⅰ）



第3号窯埴輪出土状態（2—5）



第Ⅰ号窯灰原埴輪出土状態



第Ⅰ号窯前庭



窯体前面谷底



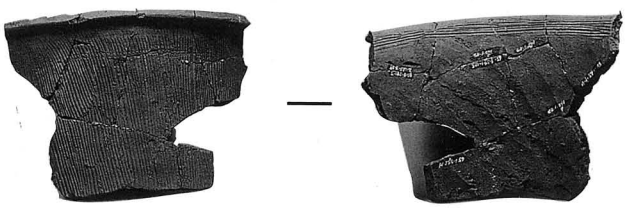
ⅠY—1



ⅠY—4

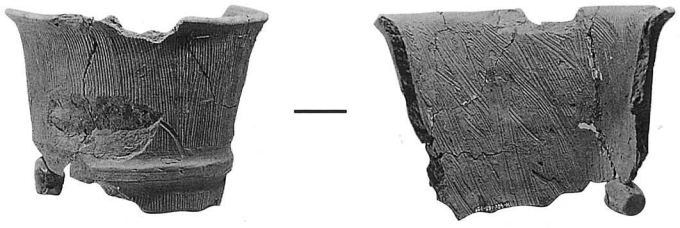


ⅠY—9



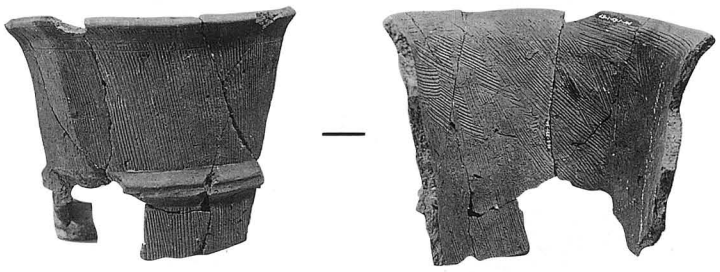
ⅠY—17



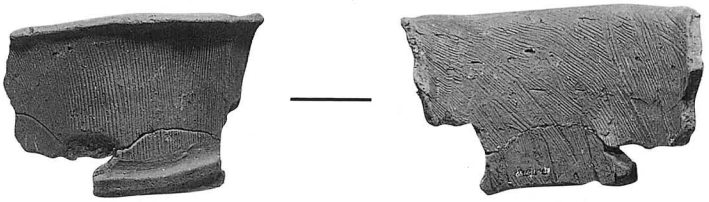


ⅠY—22





ⅠY—28

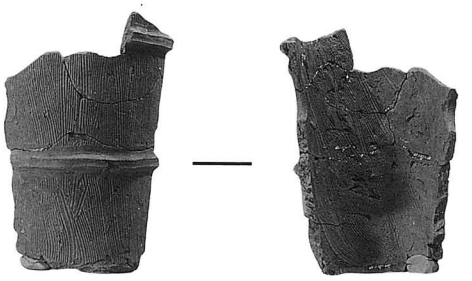


ⅠY—3





ⅠY—2



ⅠY—3



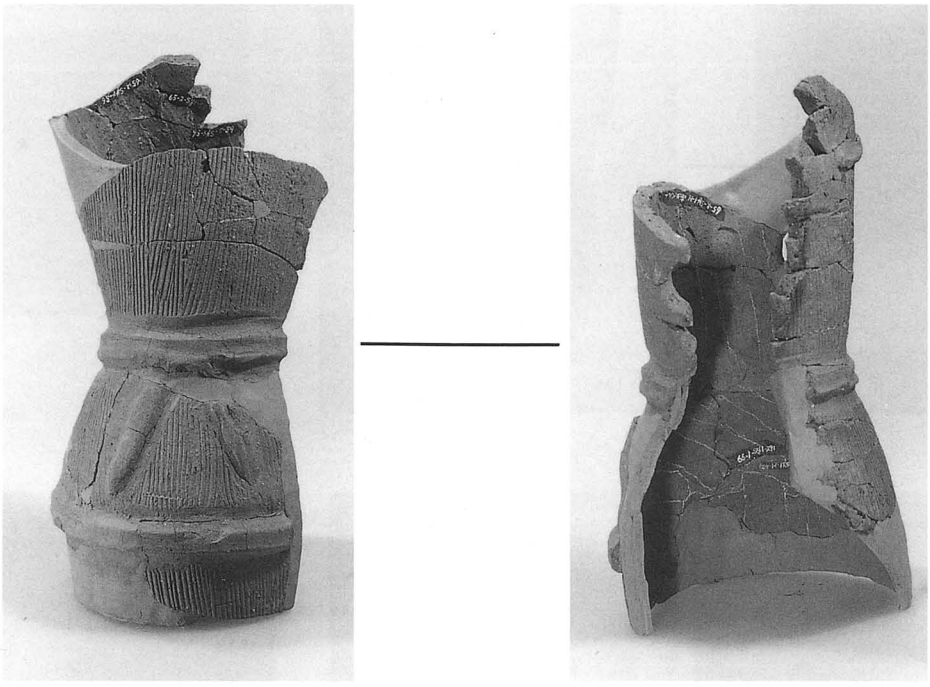


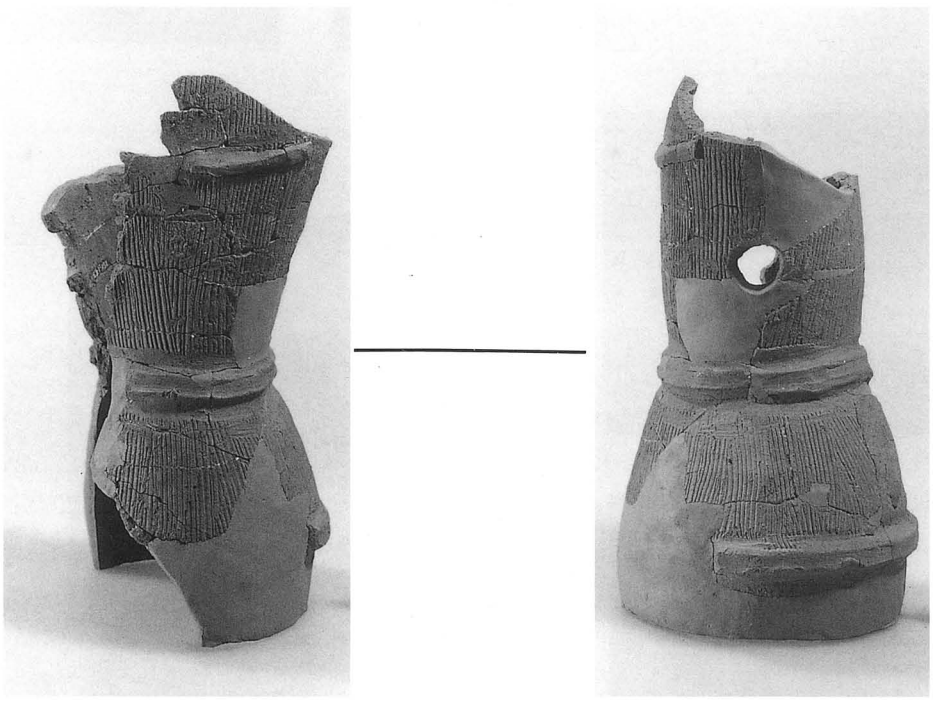


ⅠY—40



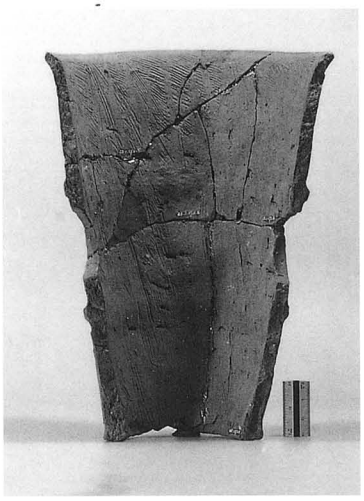
ⅠY—34





I Y—96





2Y—1

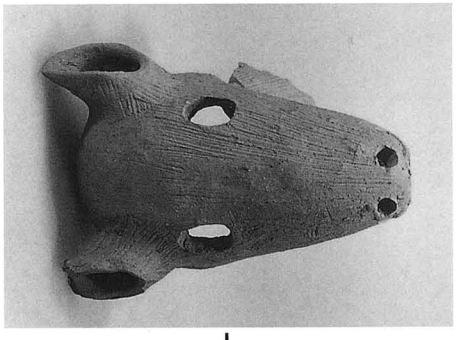


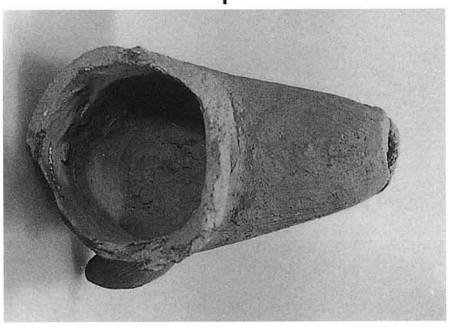
2Y—4





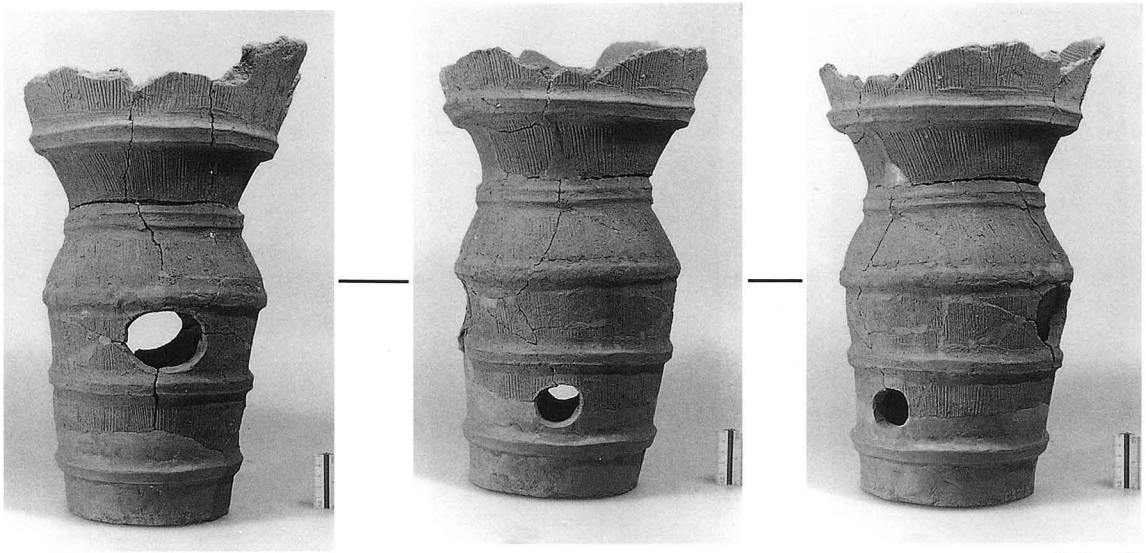




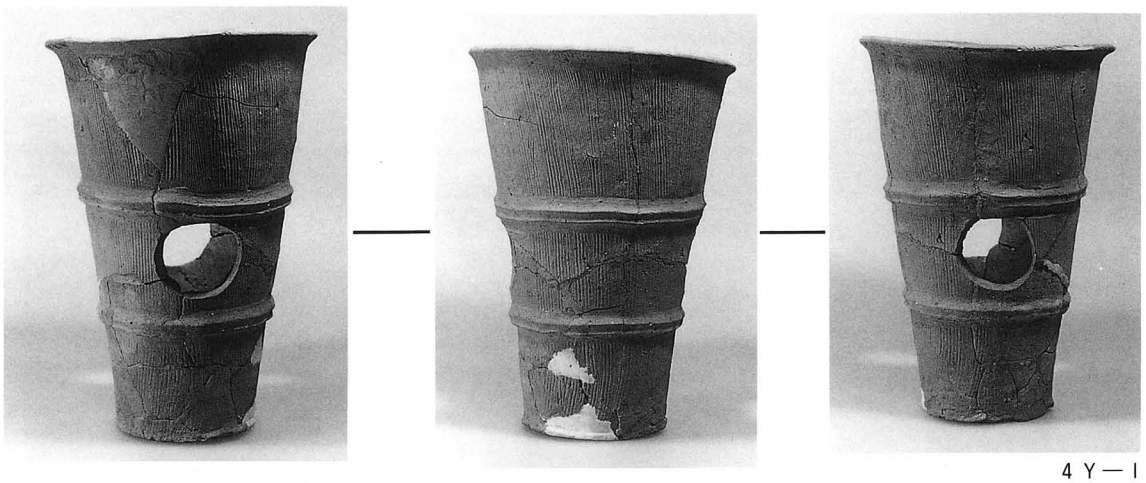




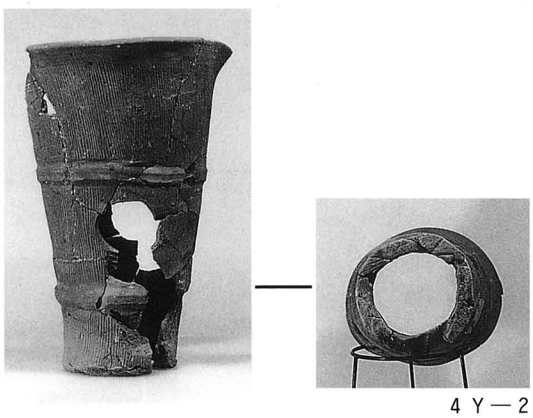
3Y—24



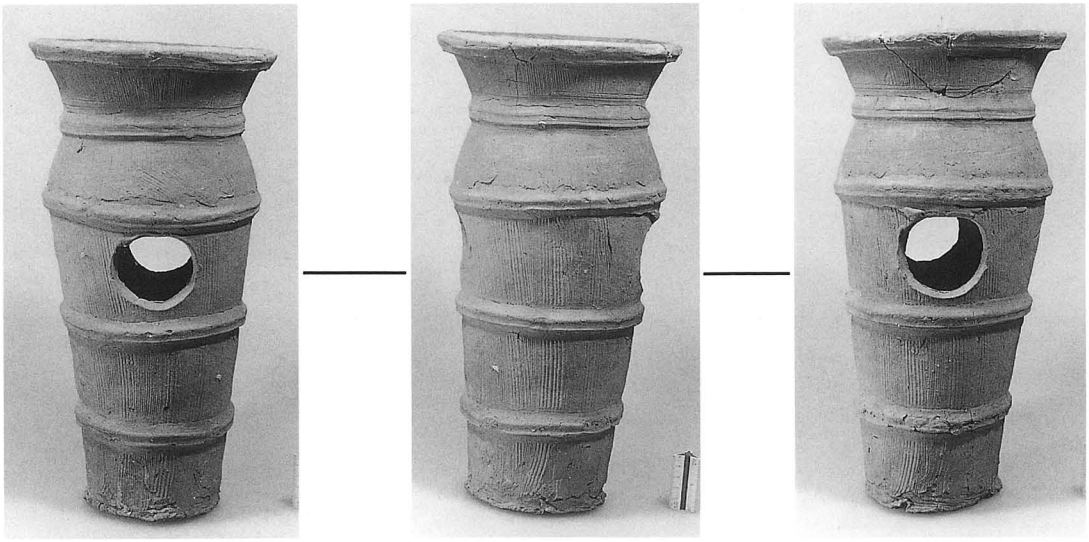
2 Y—20



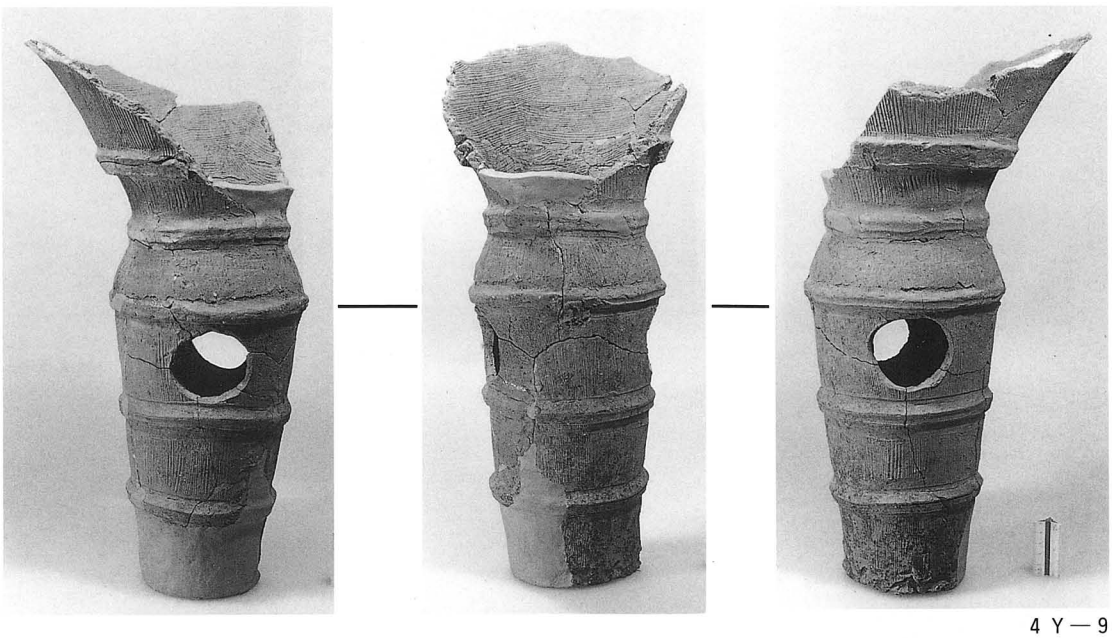
4 Y—1



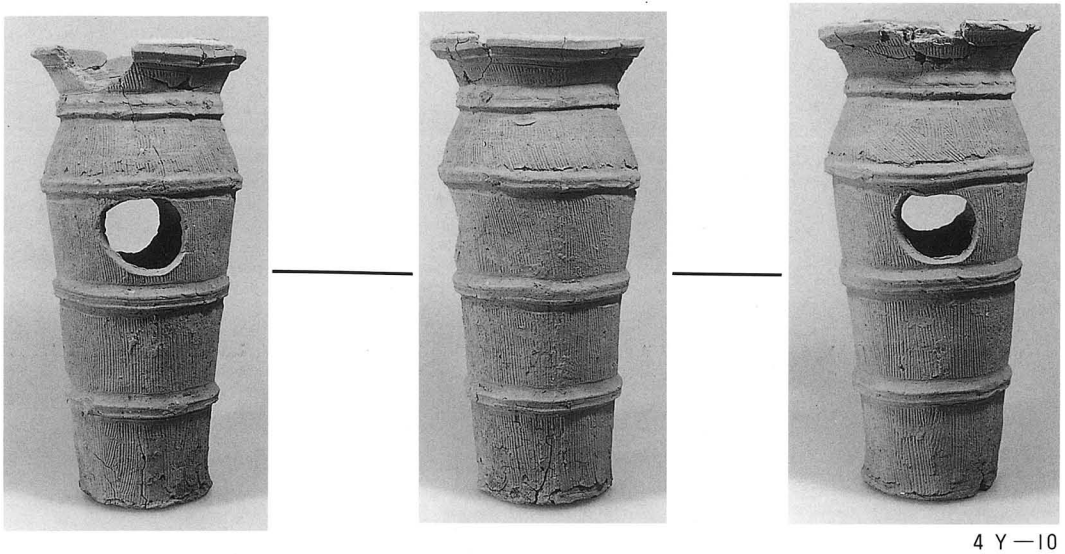
4 Y—2



4 Y — 8



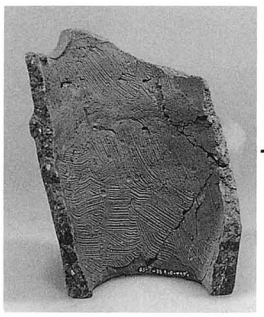
4 Y — 9



4 Y—10



5 Y—10

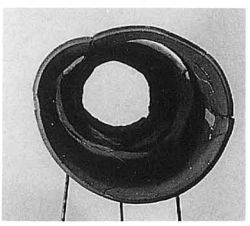




6 Y—1







7 Y—2

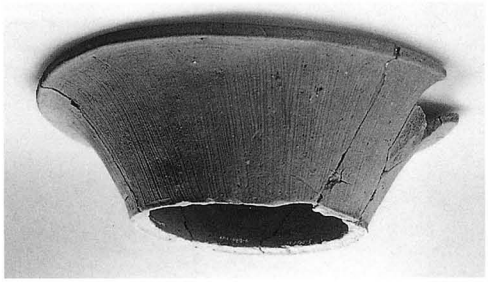




7 Y—11



8 Y—1



8 Y—10





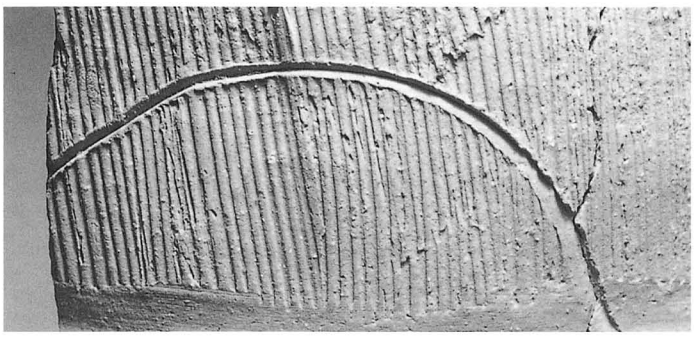
7 Y—13



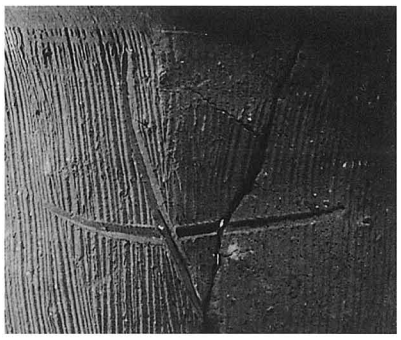




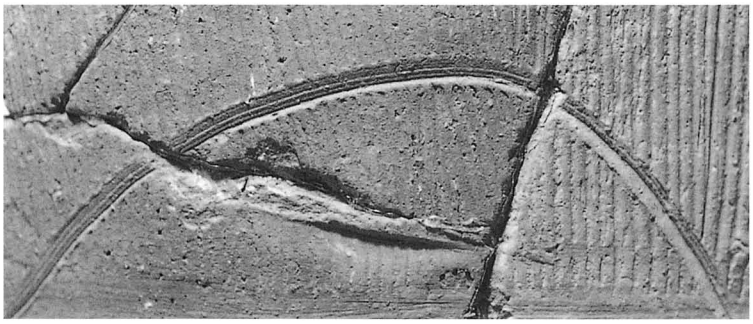
8 Y—14



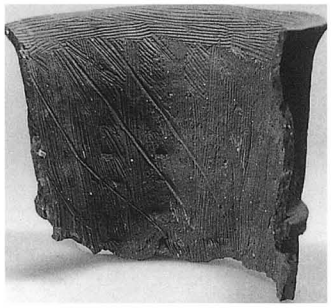
1 Y—23



5 Y — 2



1 Y—23



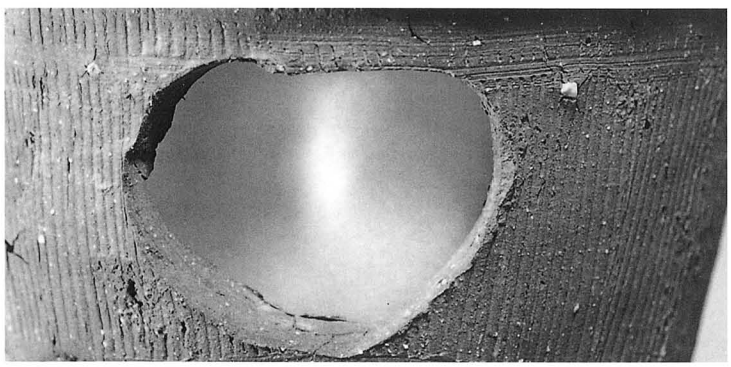
8 Y — 3



7 Y — 3



7 Y — 5



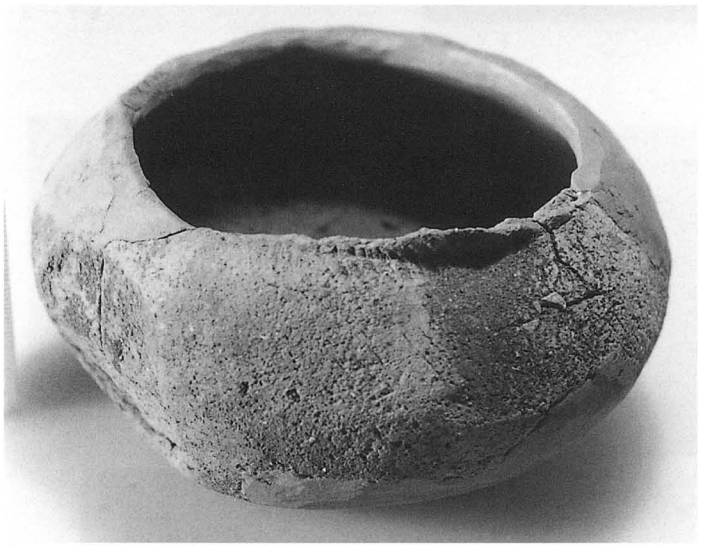
4 Y — 3

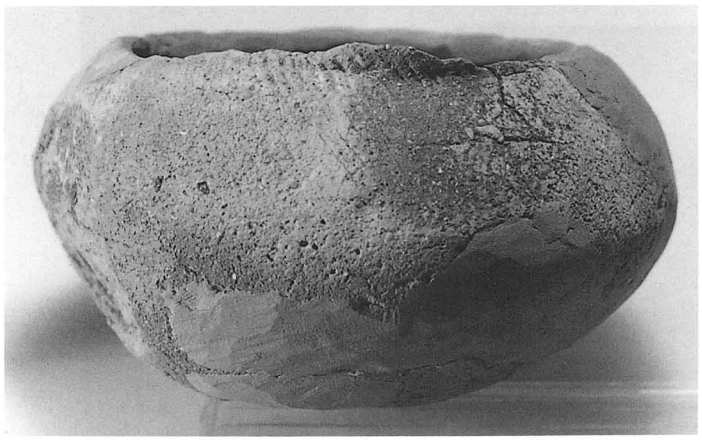


8 Y —14

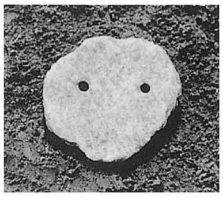


1Y—17





5Y



2Y



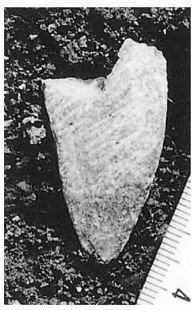
2Y



3Y



4Y



4Y



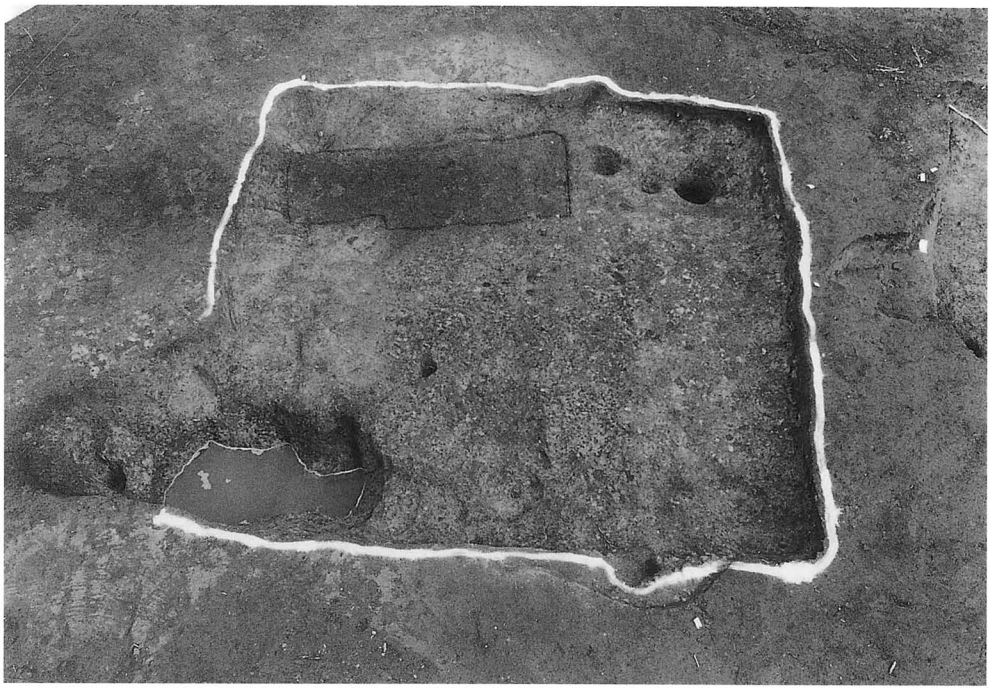
4Y



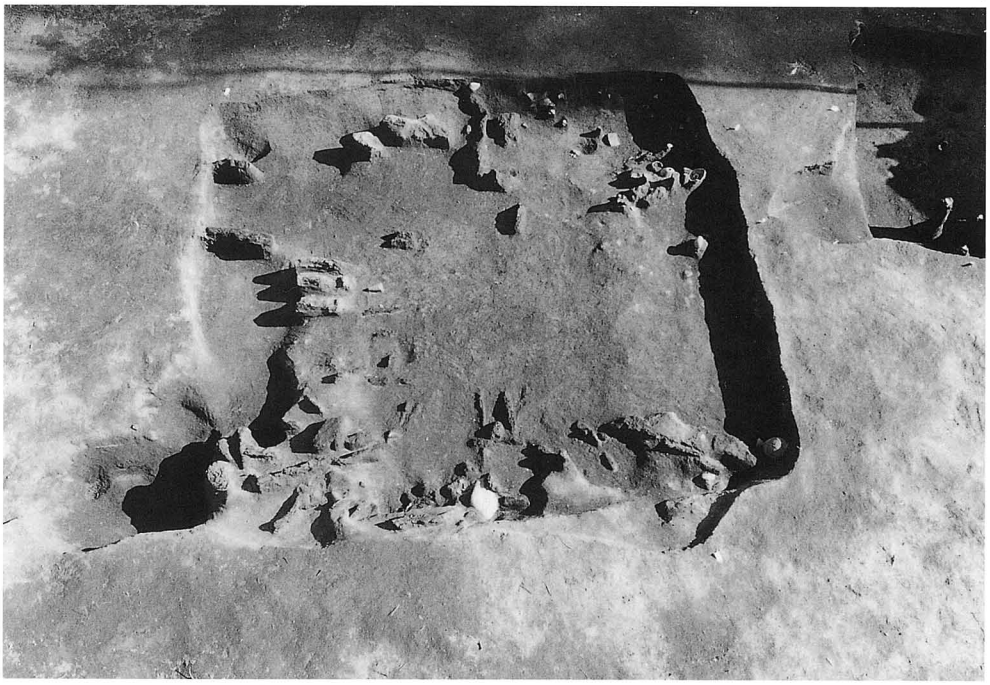
富士山遺跡航空写真



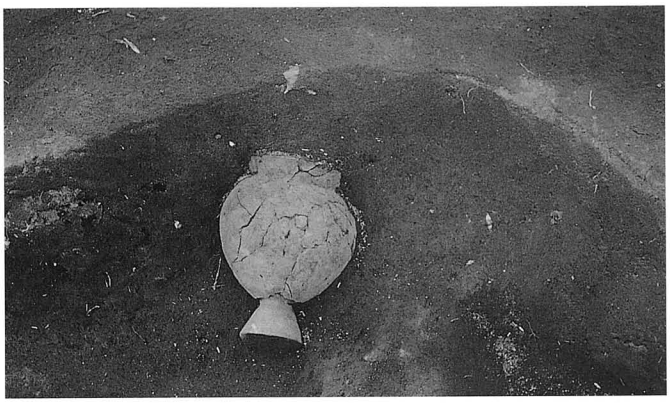
富士山遺跡第 3 調査地区



第16号住居跡



第16号住居跡遺物出土状態



第16号住居跡遺物出土状態

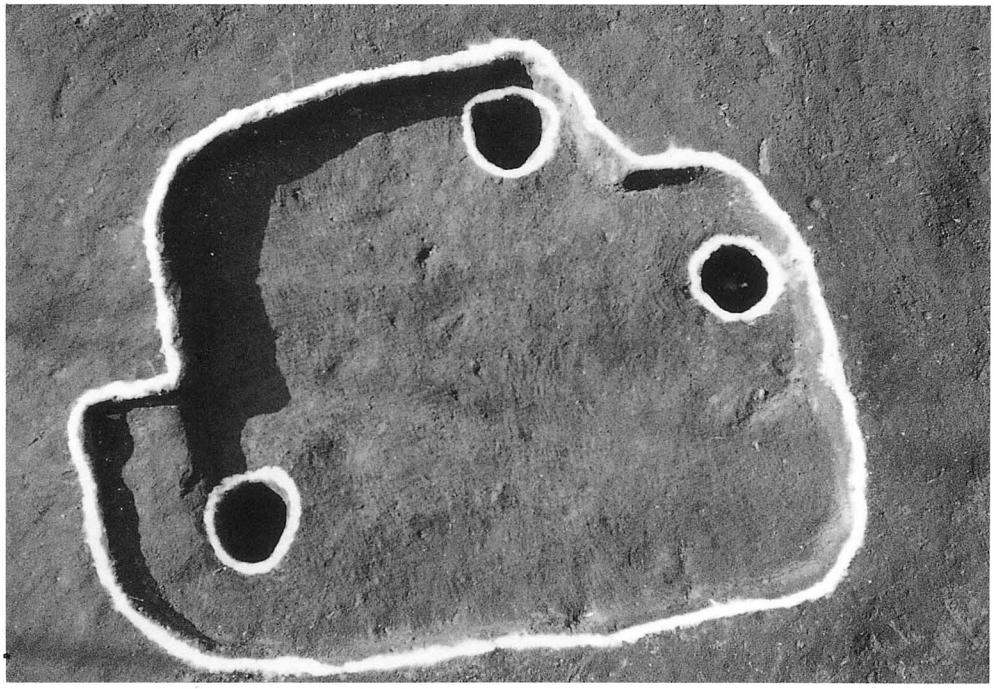


第16号住居跡遺物出土状態

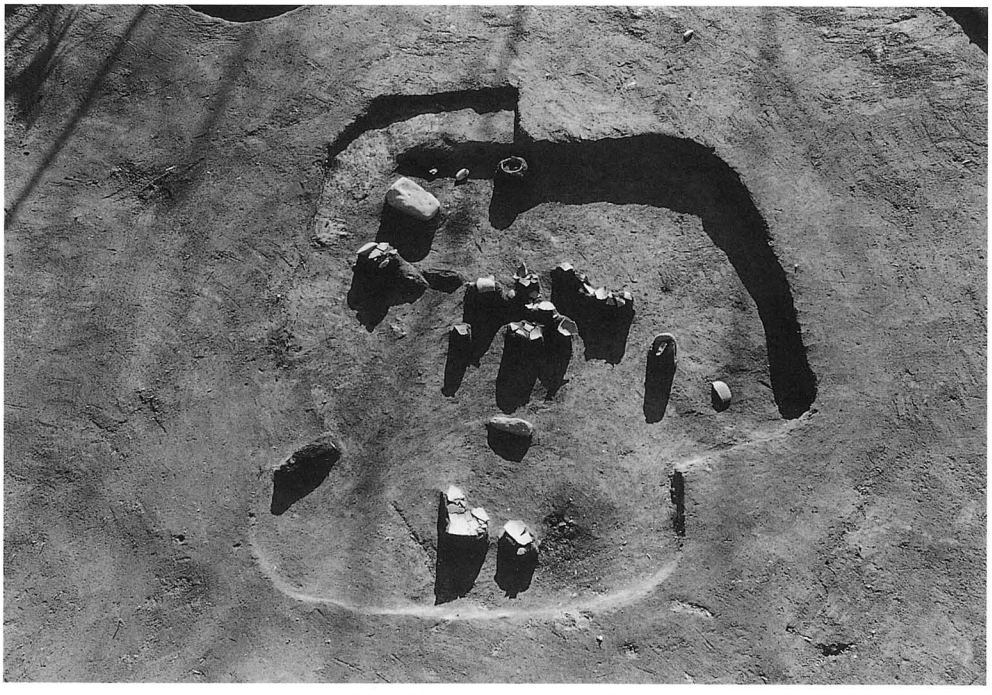




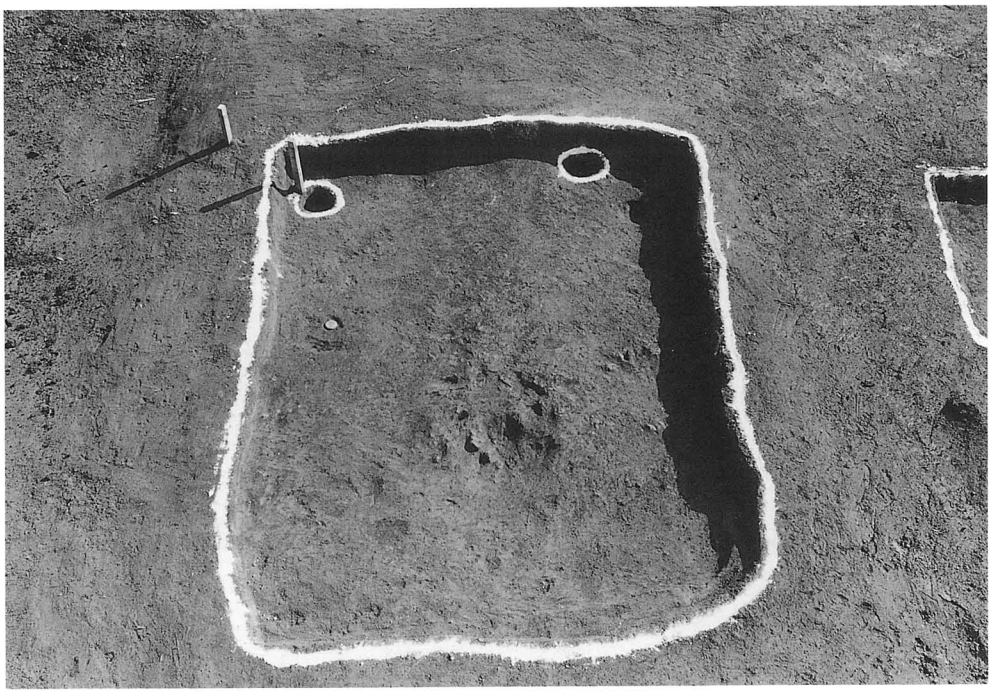
調査風景



第24号住居跡



第24号住居跡遺物出土状態



第25号住居跡



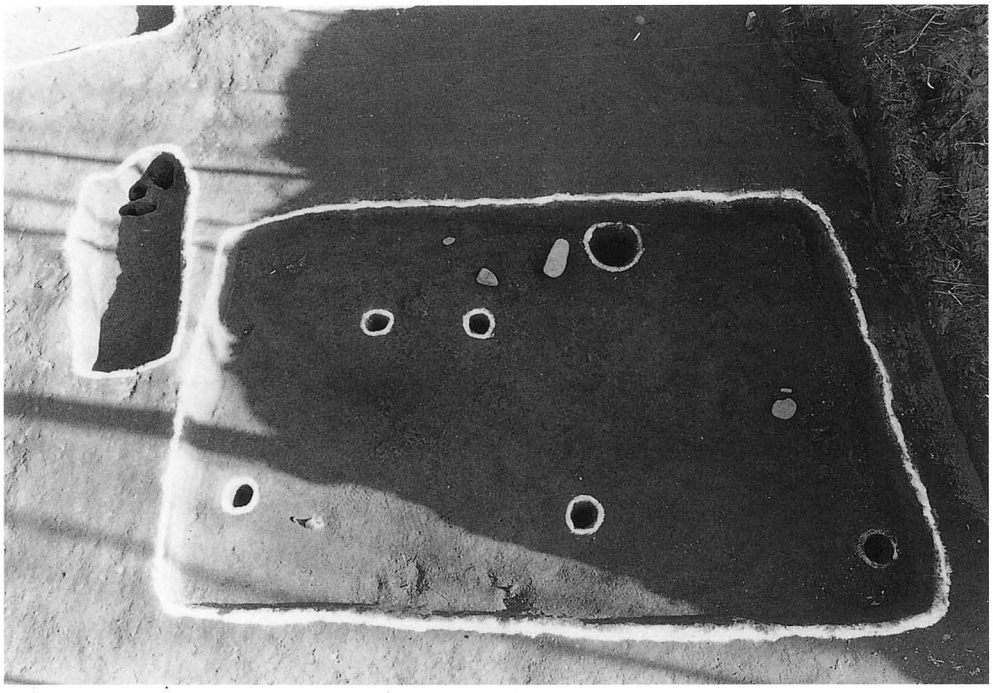
第25号住居跡遺物出土状態







第25号住居跡遺物出土状態



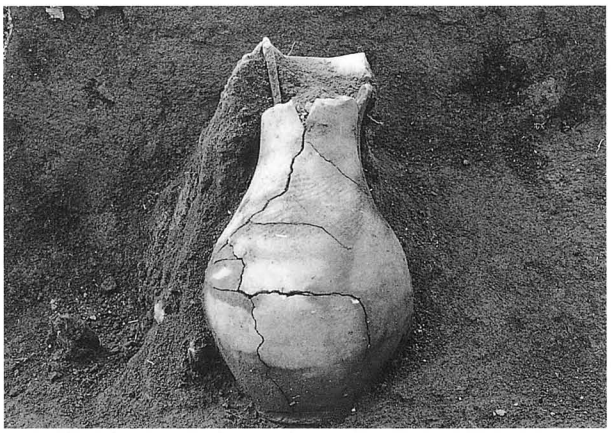
第26号住居跡



第26号住居跡遺物出土状態

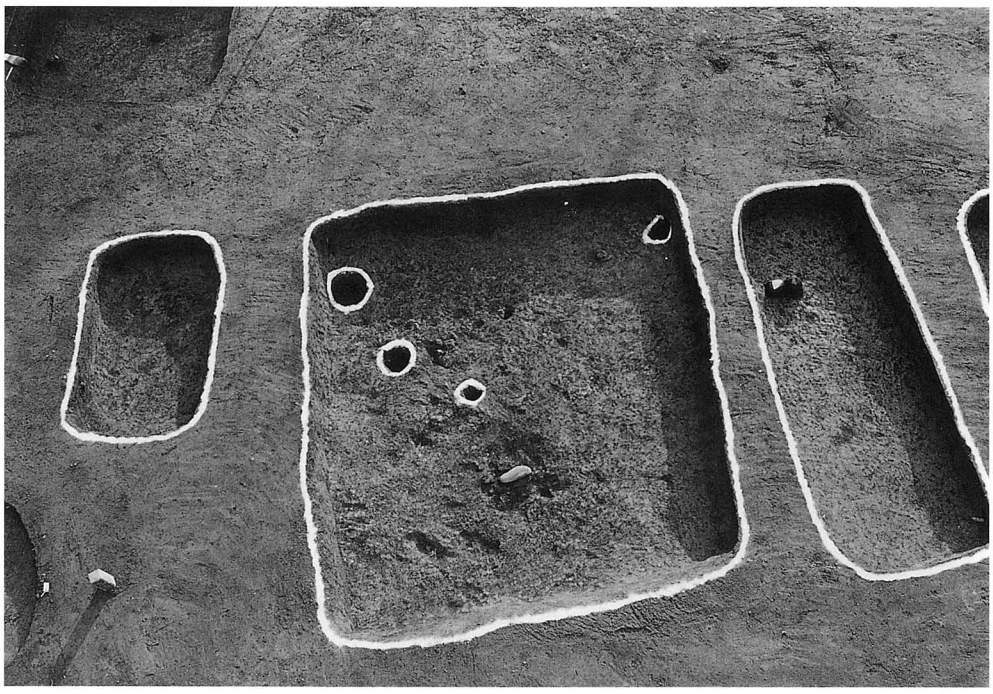




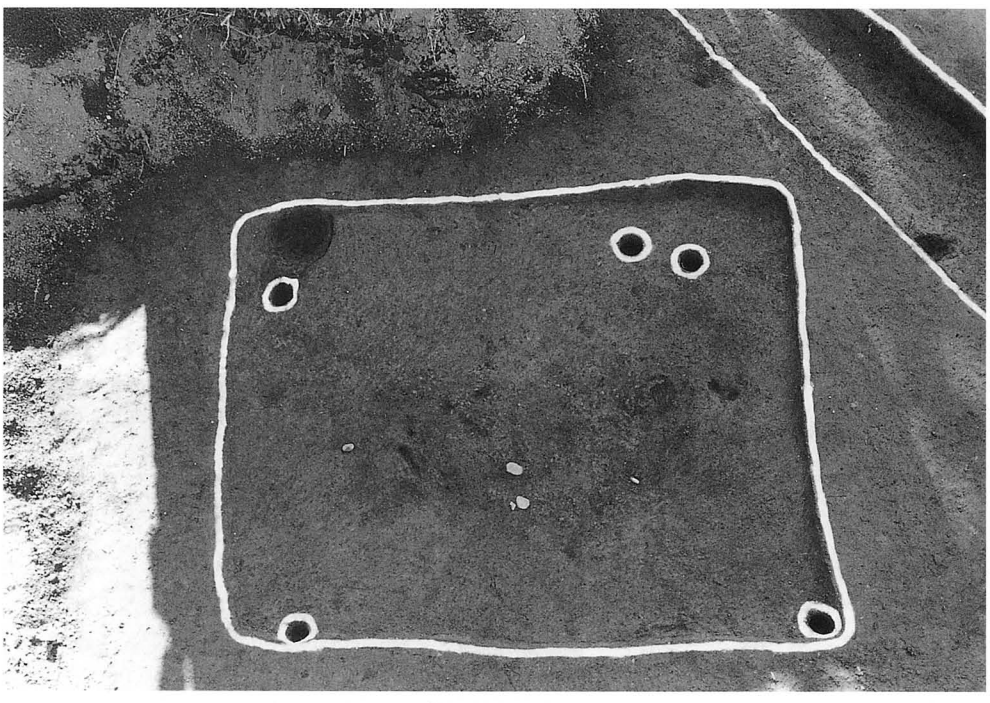




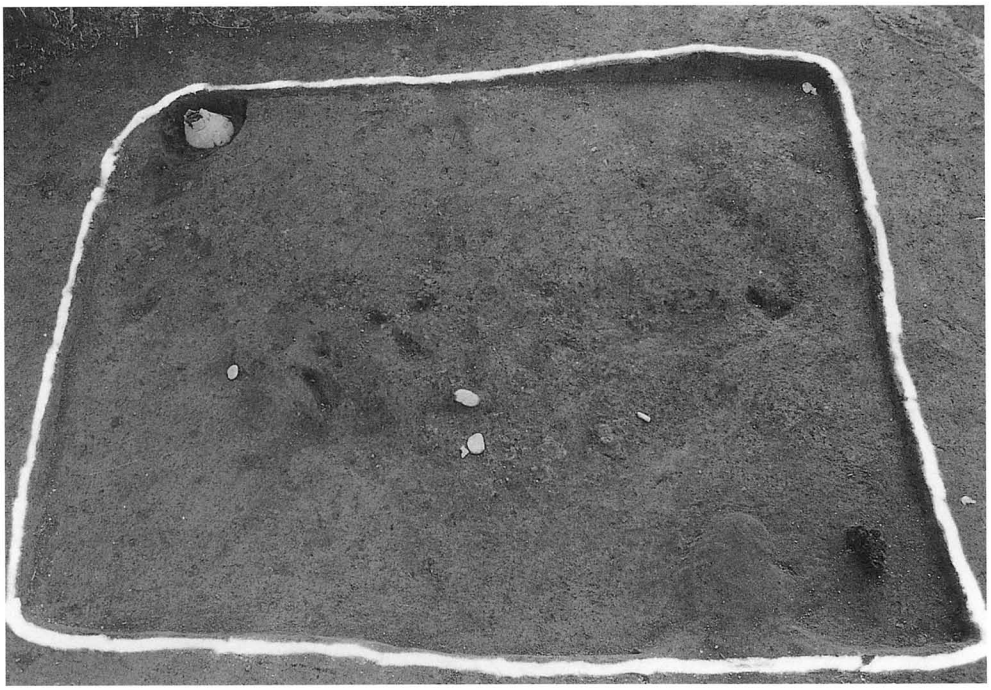
第26号住居跡遺物出土状態



第27号住居跡



第28号住居跡

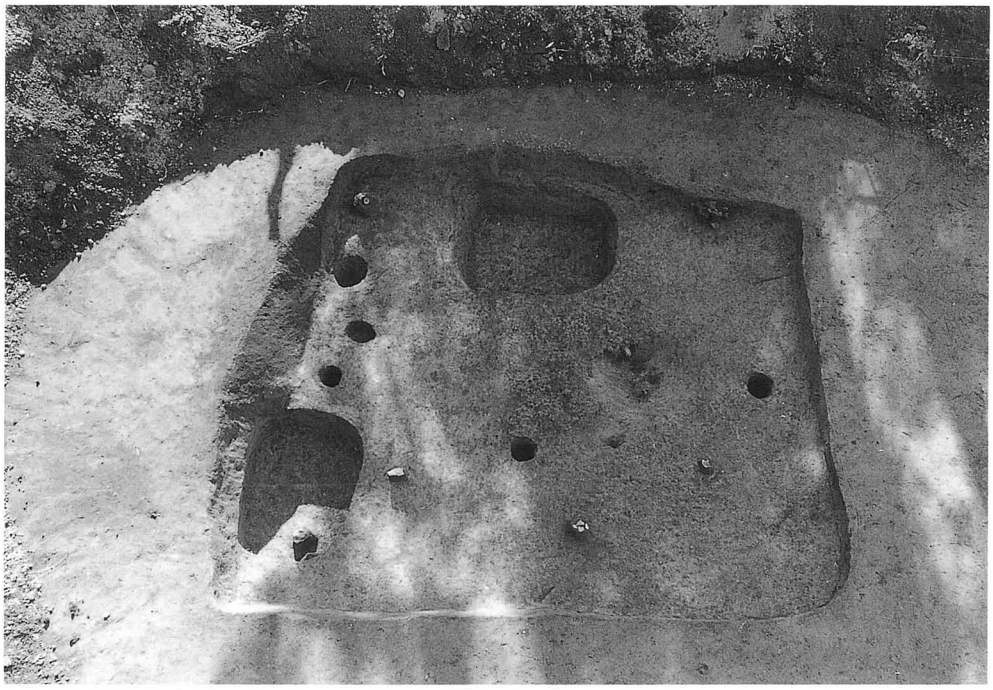


第28号住居跡遺物出土状態





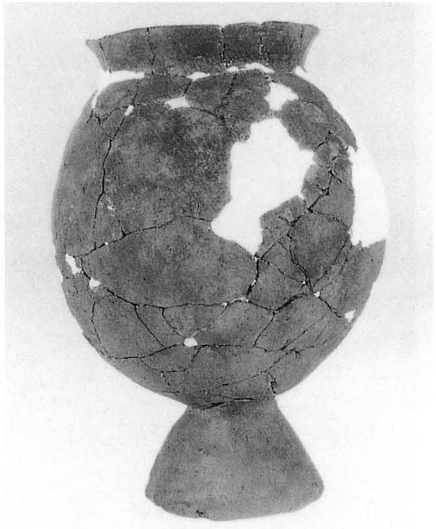
調査風景



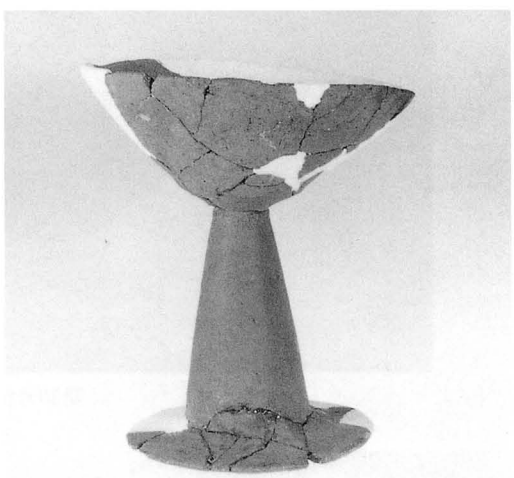
第29号住居跡



第30号住居跡遺物出土状態

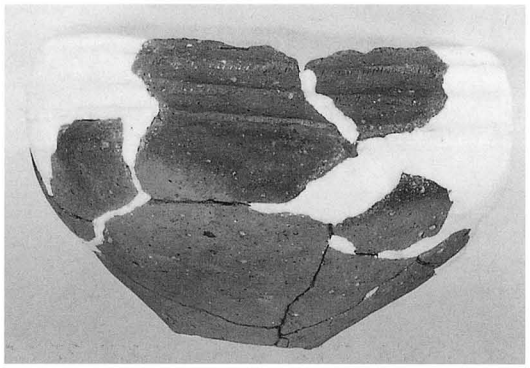



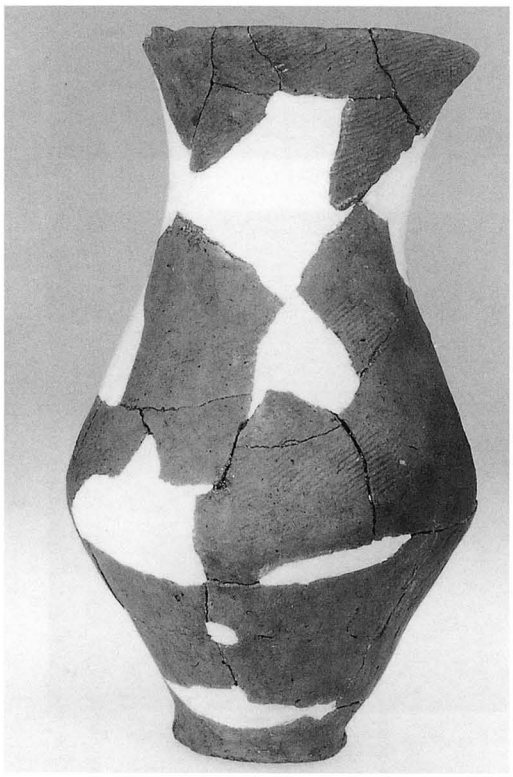


第16号住居跡出土土器







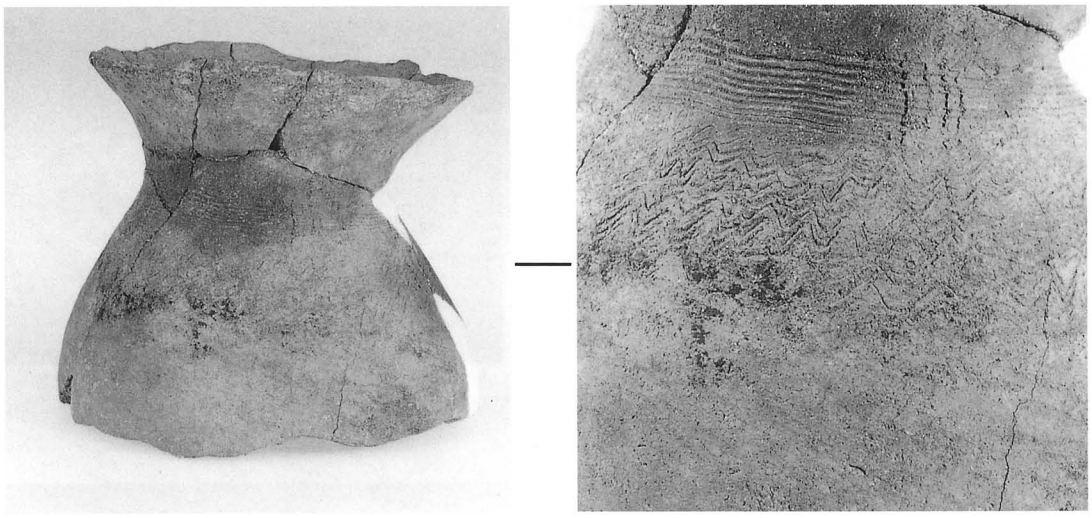


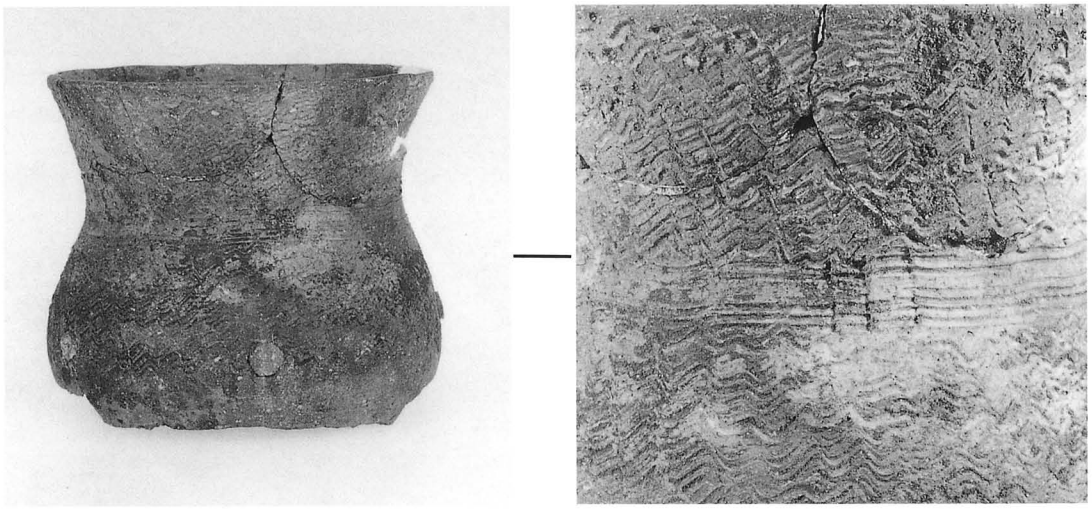
第24号住居跡出土土器

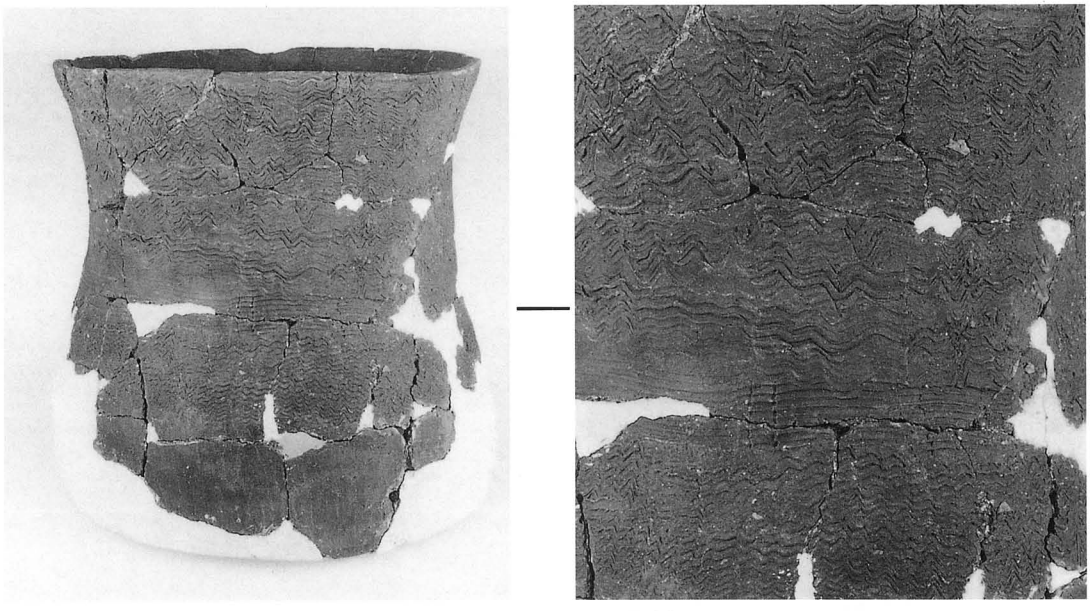




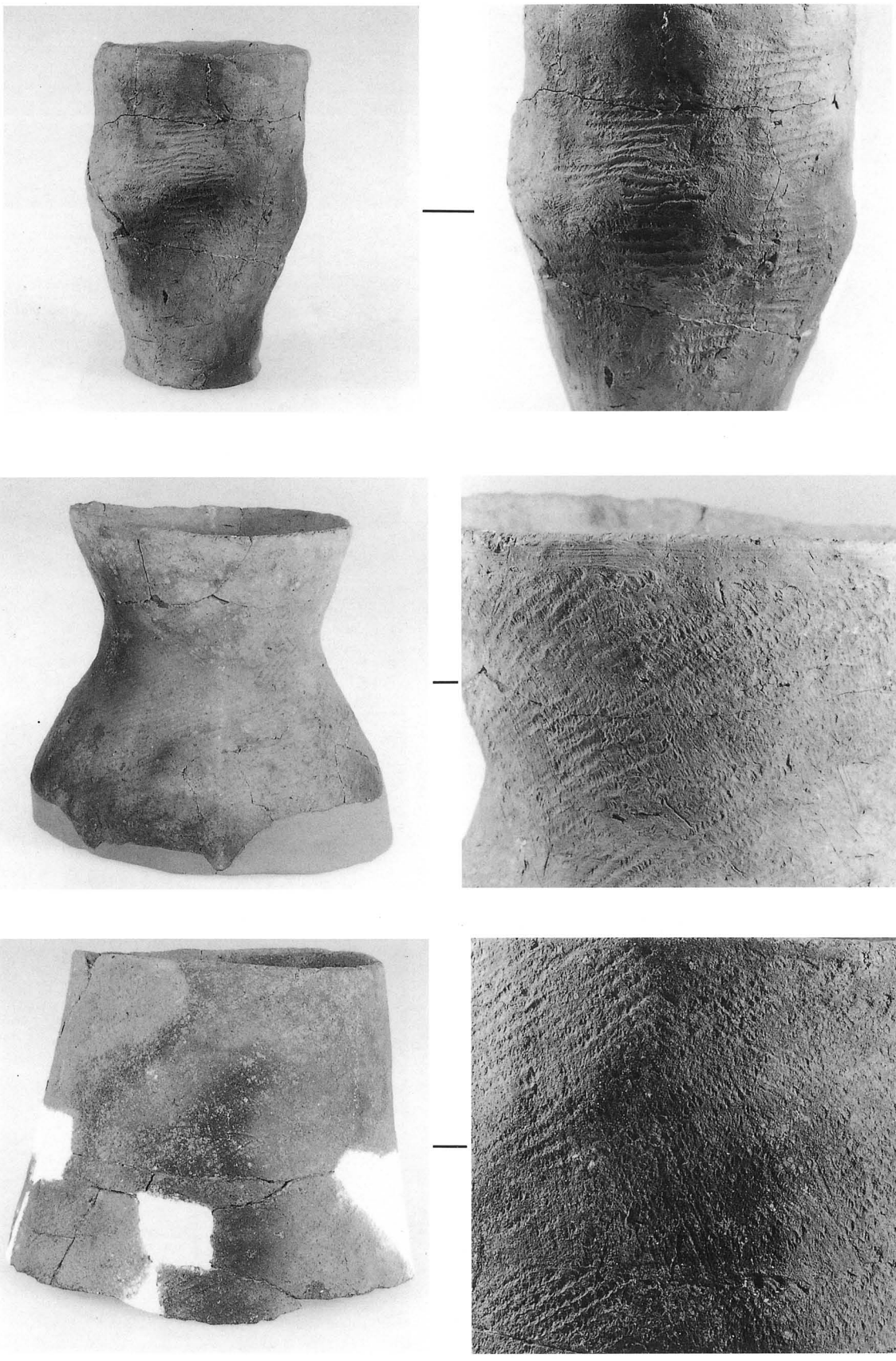
第28号住居跡出土土器



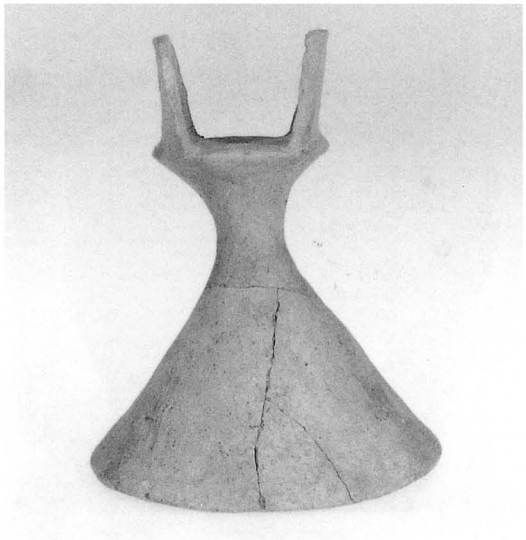


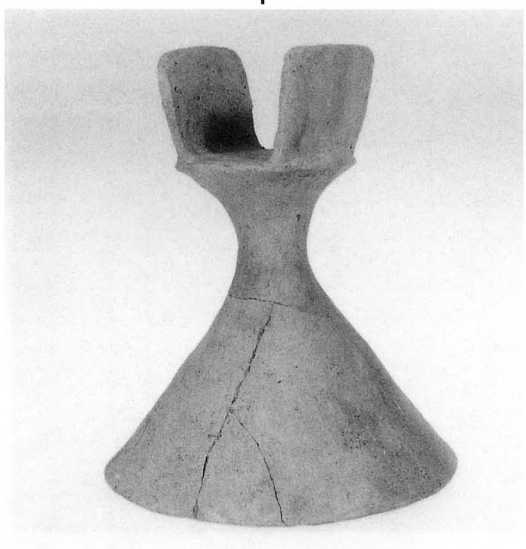


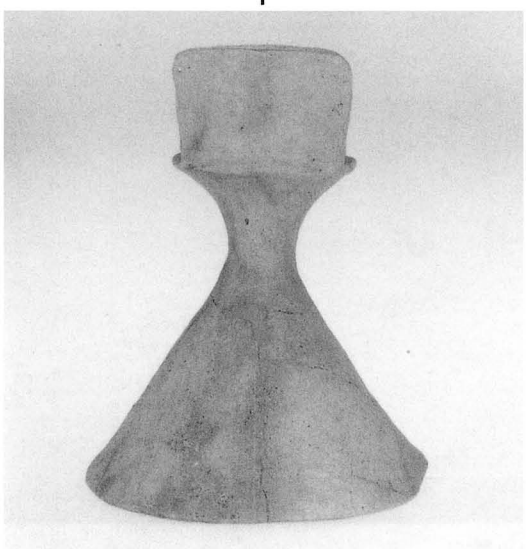
第25号住居跡出土土器(1)



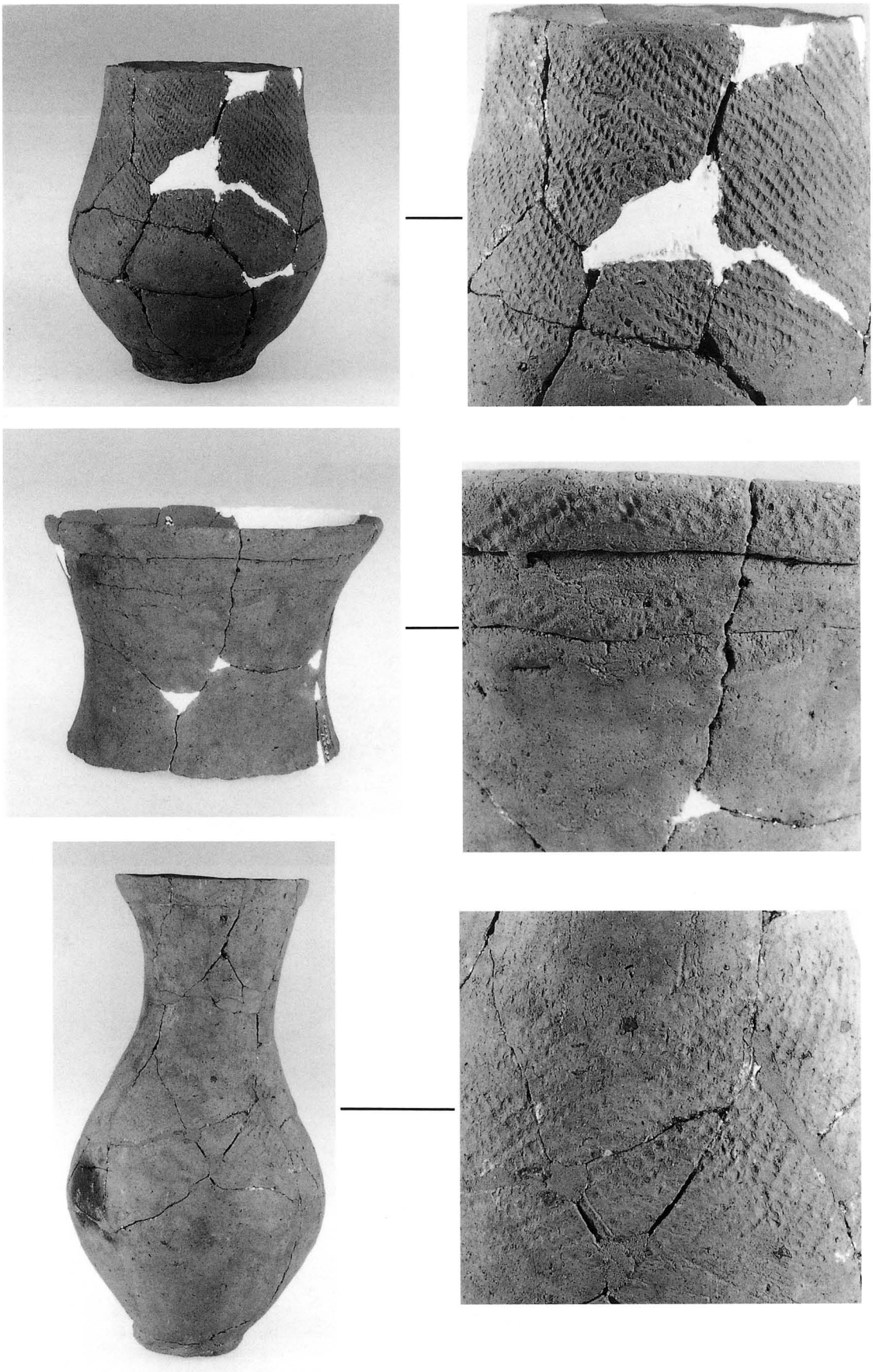
第25号住居跡出土土器(2)



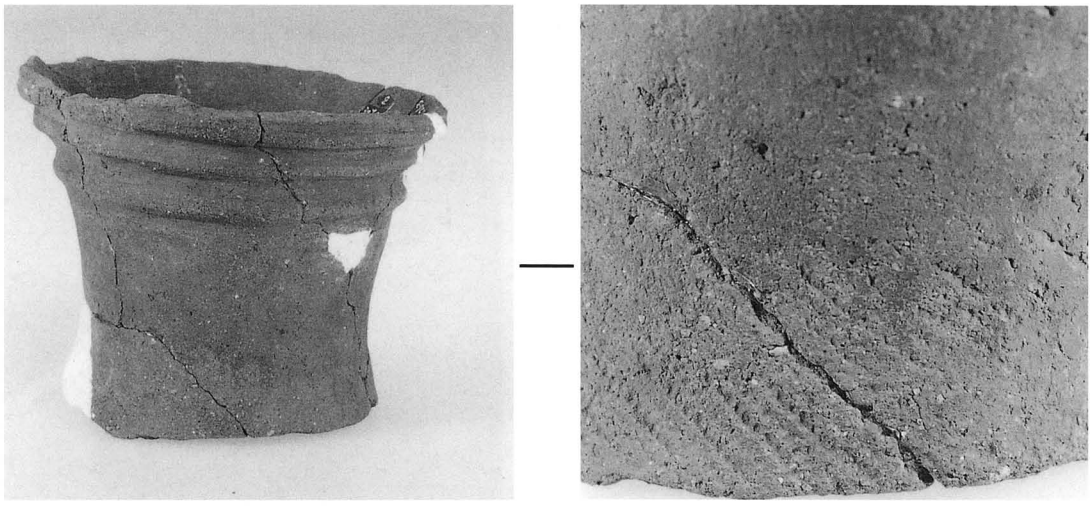



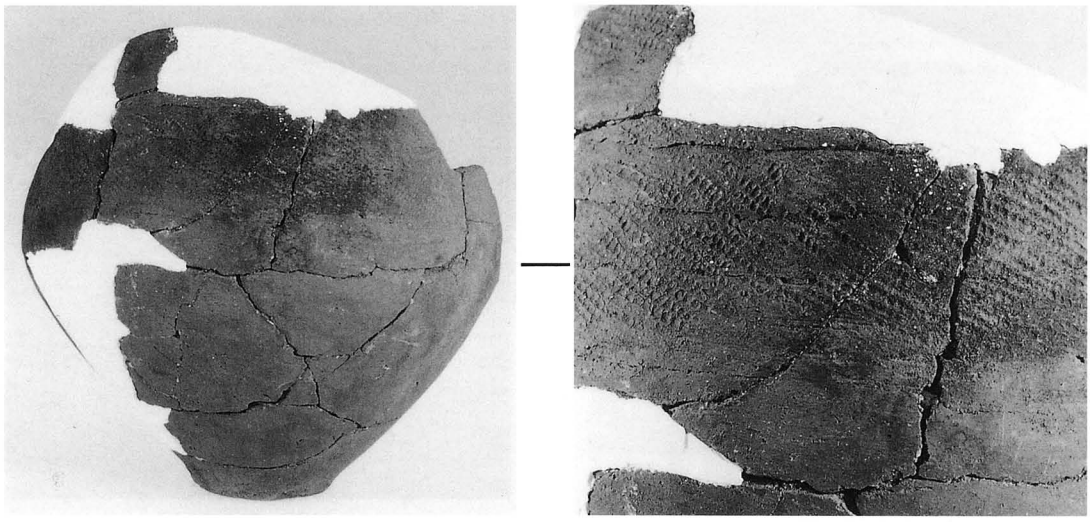


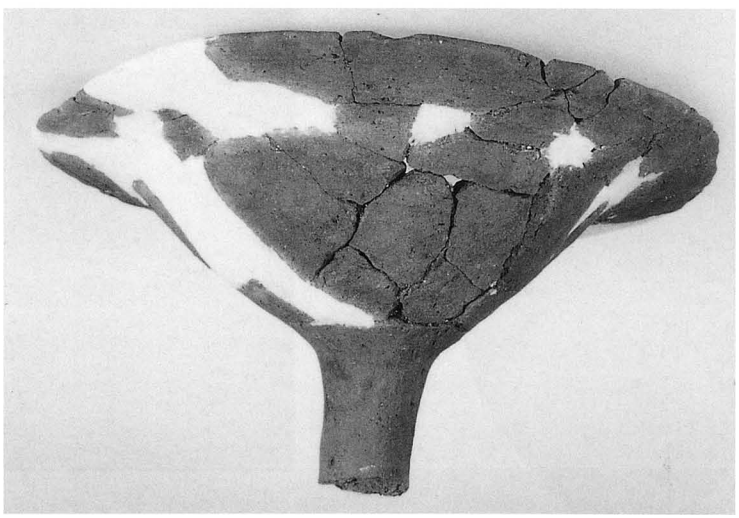

第25号住居跡出土土器(3)



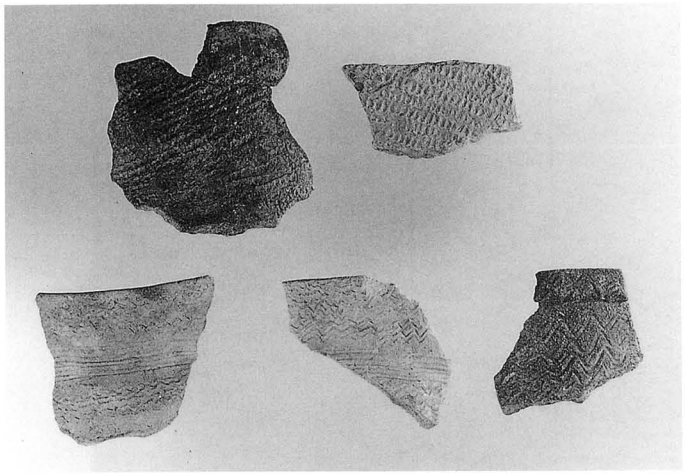
第26号住居跡出土土器(1)



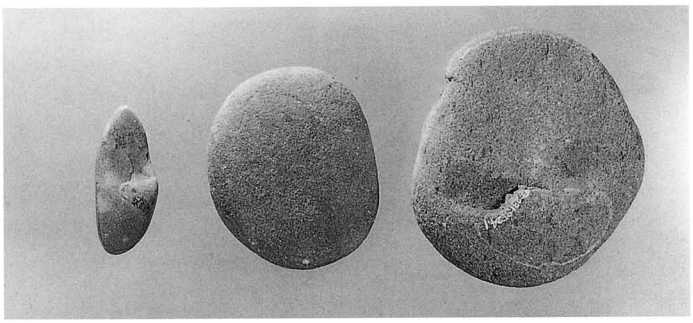




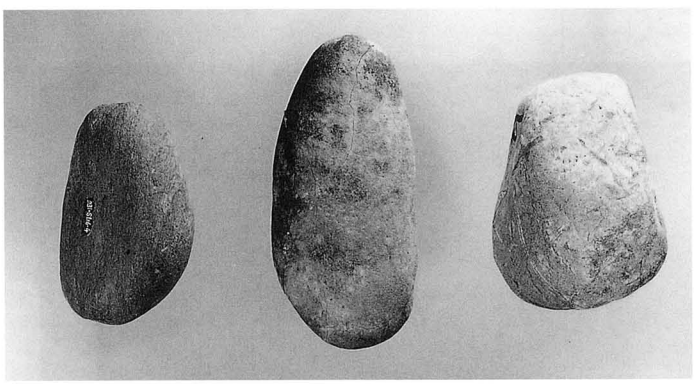
第26号住居跡出土土器(2)



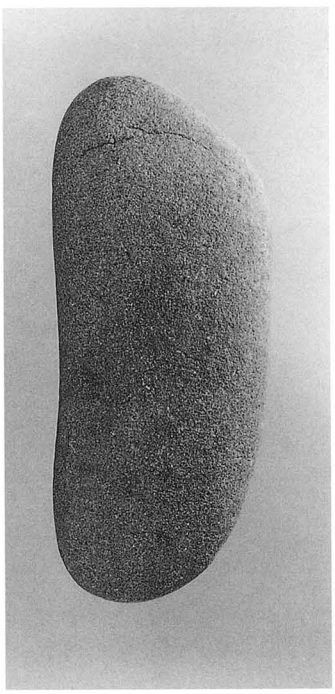
第29号住居跡出土土器



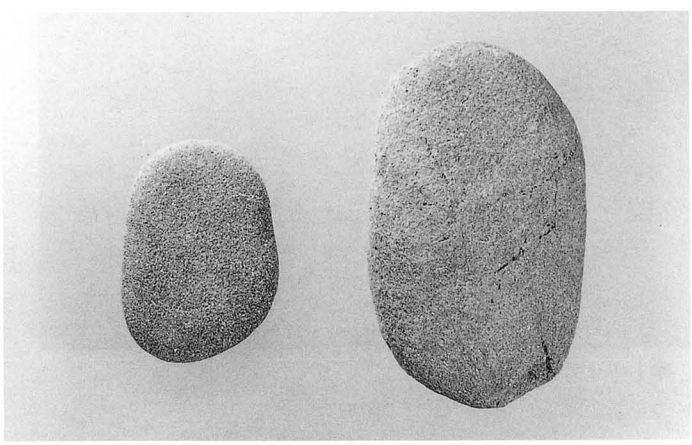
第24号住居跡出土石器



第26号住居跡出土石器



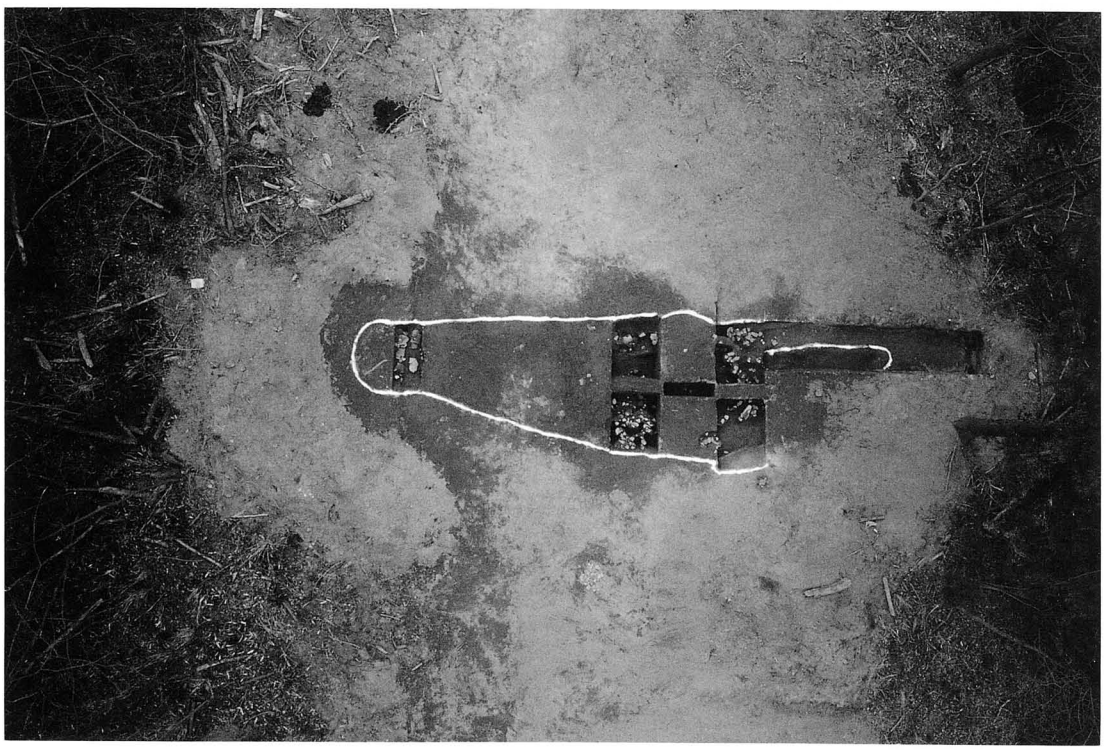
第30号住居跡出土石器



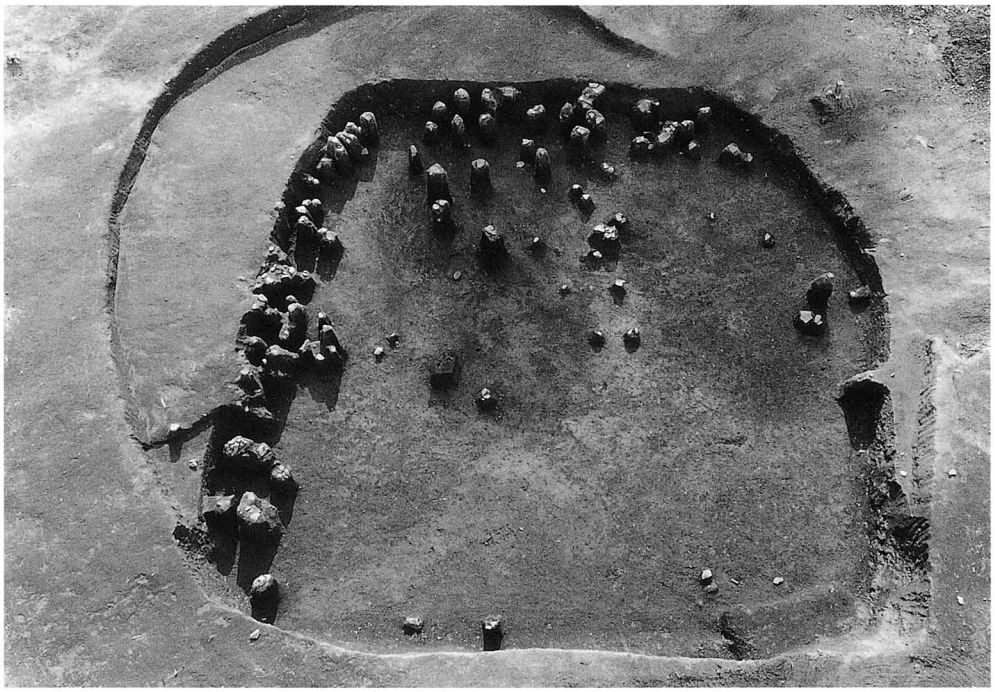
第28号住居跡出土石器



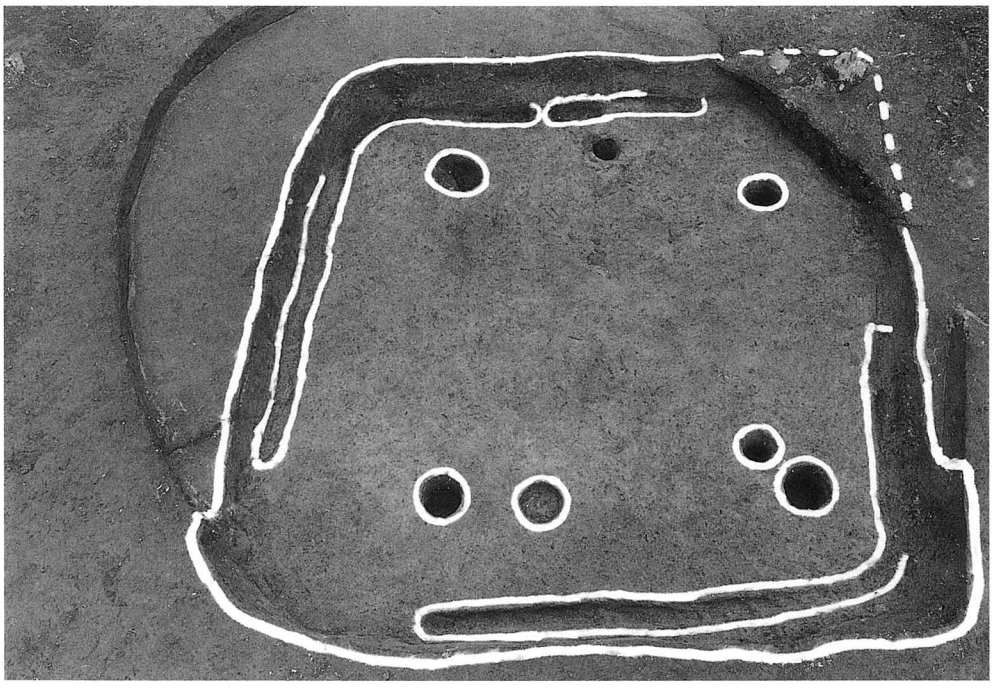
権現坂埴輪窯跡群（西群）調査区全景



第Ⅰ～4号窯跡



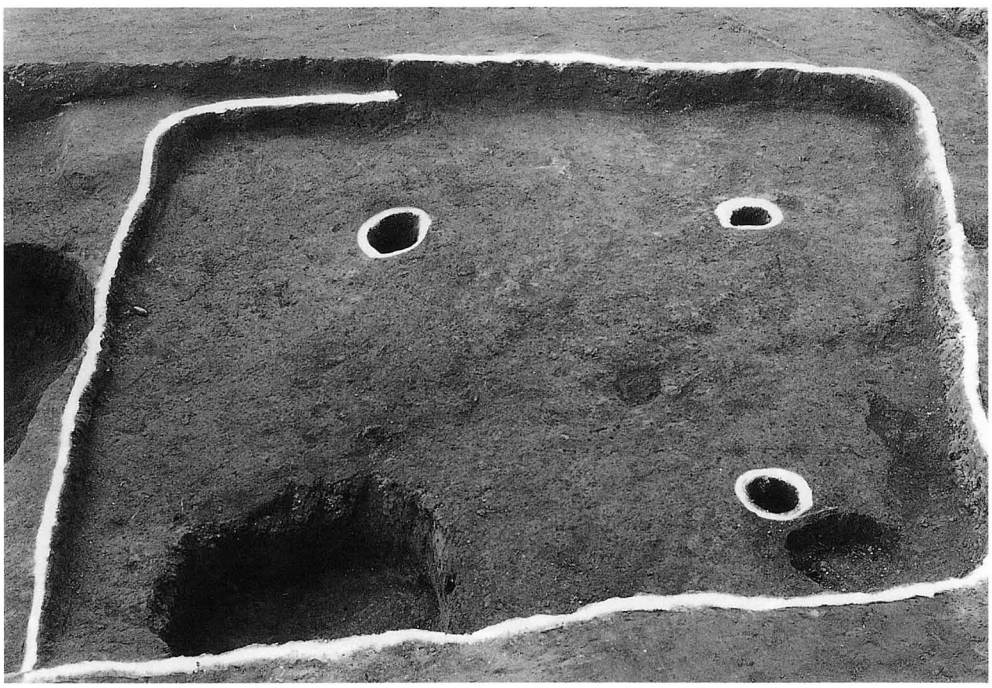
第 2 号住居跡遺物出土状態



第 2 号住居跡完掘状態

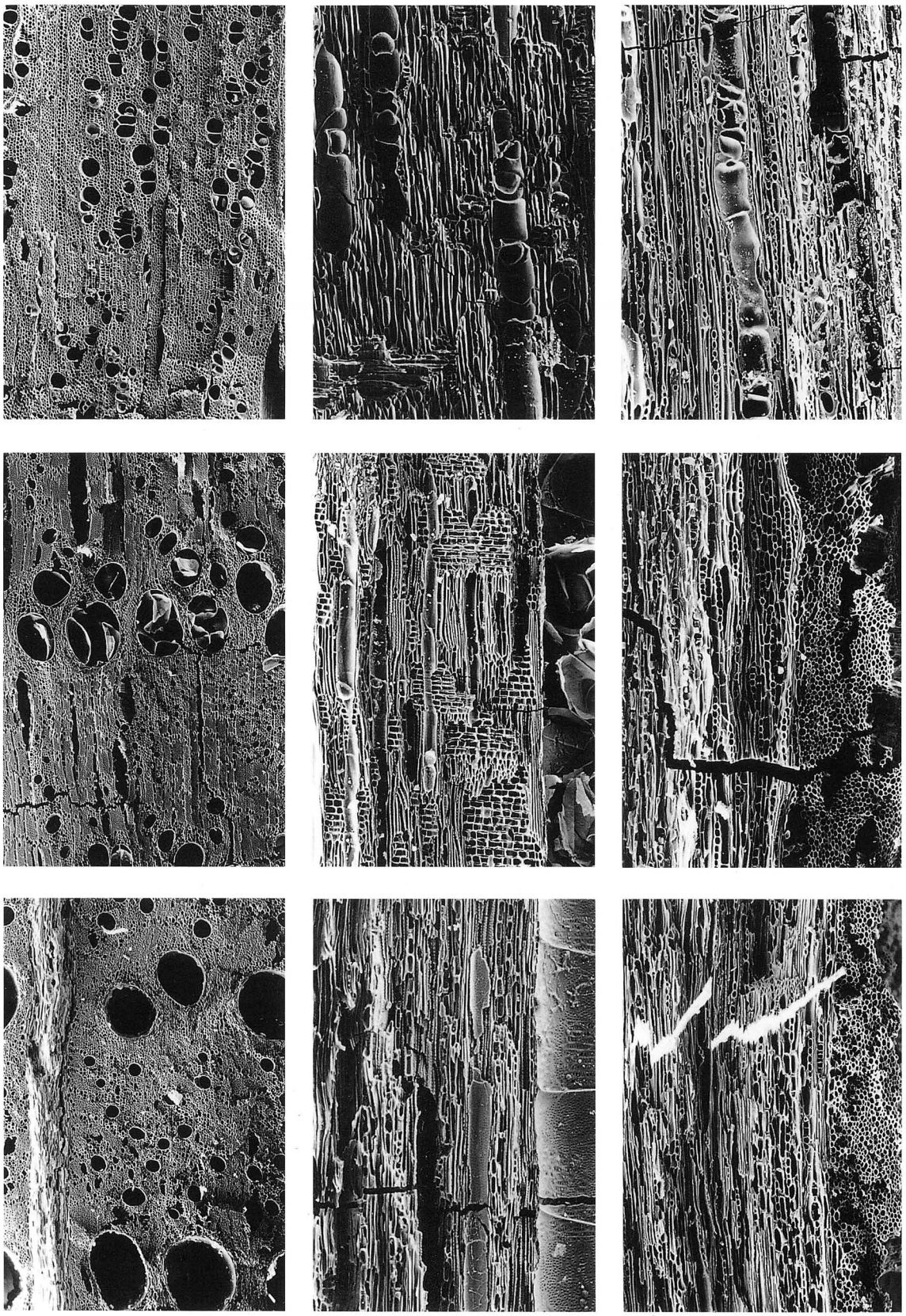


第 3 号住居跡遺物出土状態



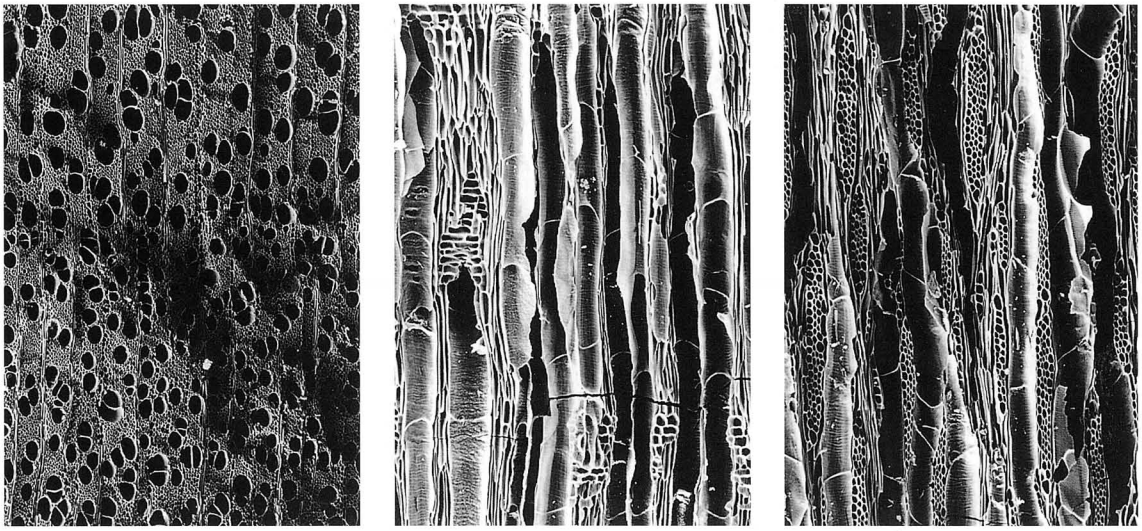
第 3 号住居跡完掘状態

図版93



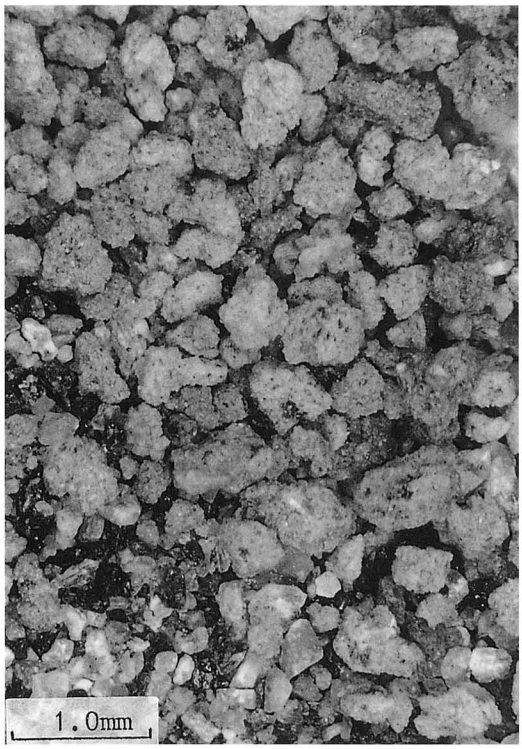
1．クマシデ属（2号住）
2．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（8号住No.31）
3．コナラ属コナラ亜属コナラ節（3号住No.4）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

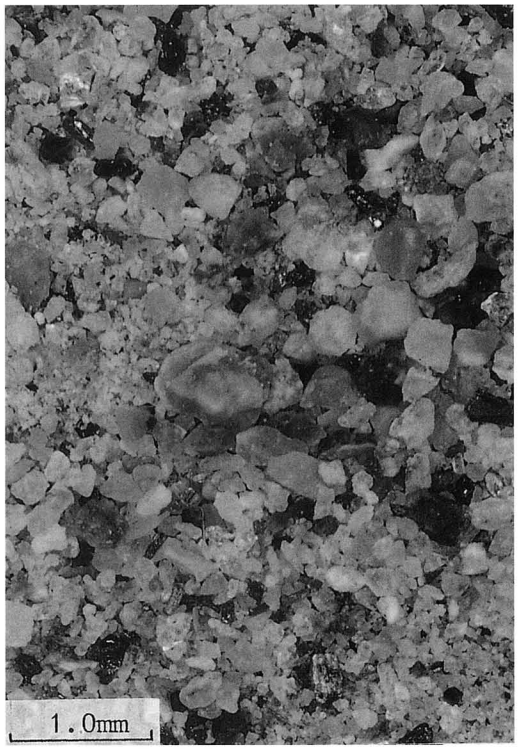


4．サクラ属（4号住）
a：木口，b：柾目，c：板目

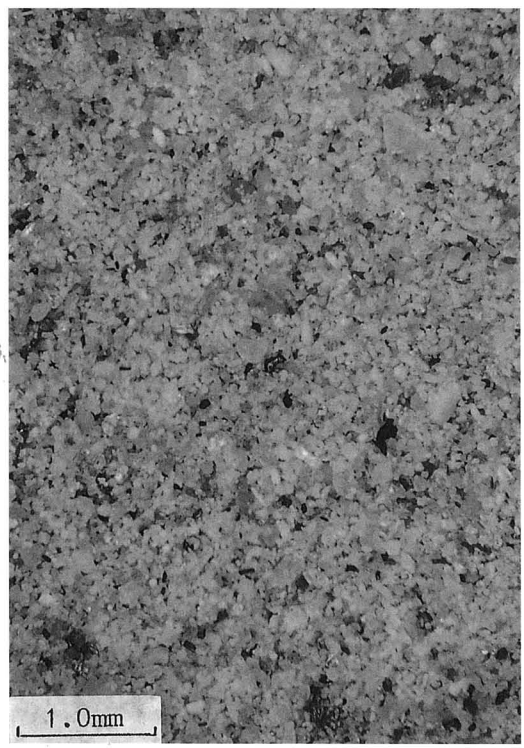
200μm：a
200μm：b，c



As—Bの軽石（南壁試料番号6）



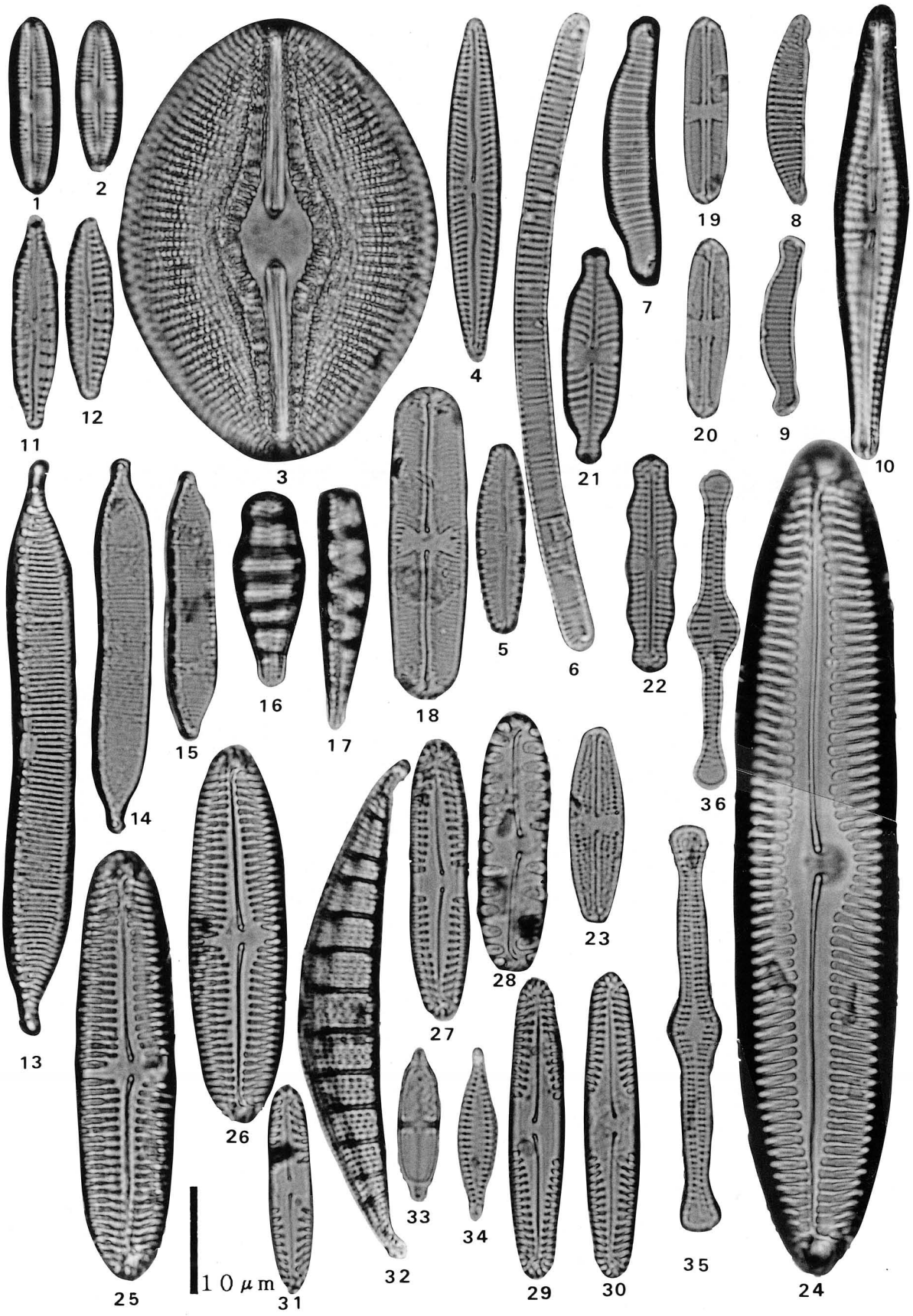
南壁試料番号8の砂粒

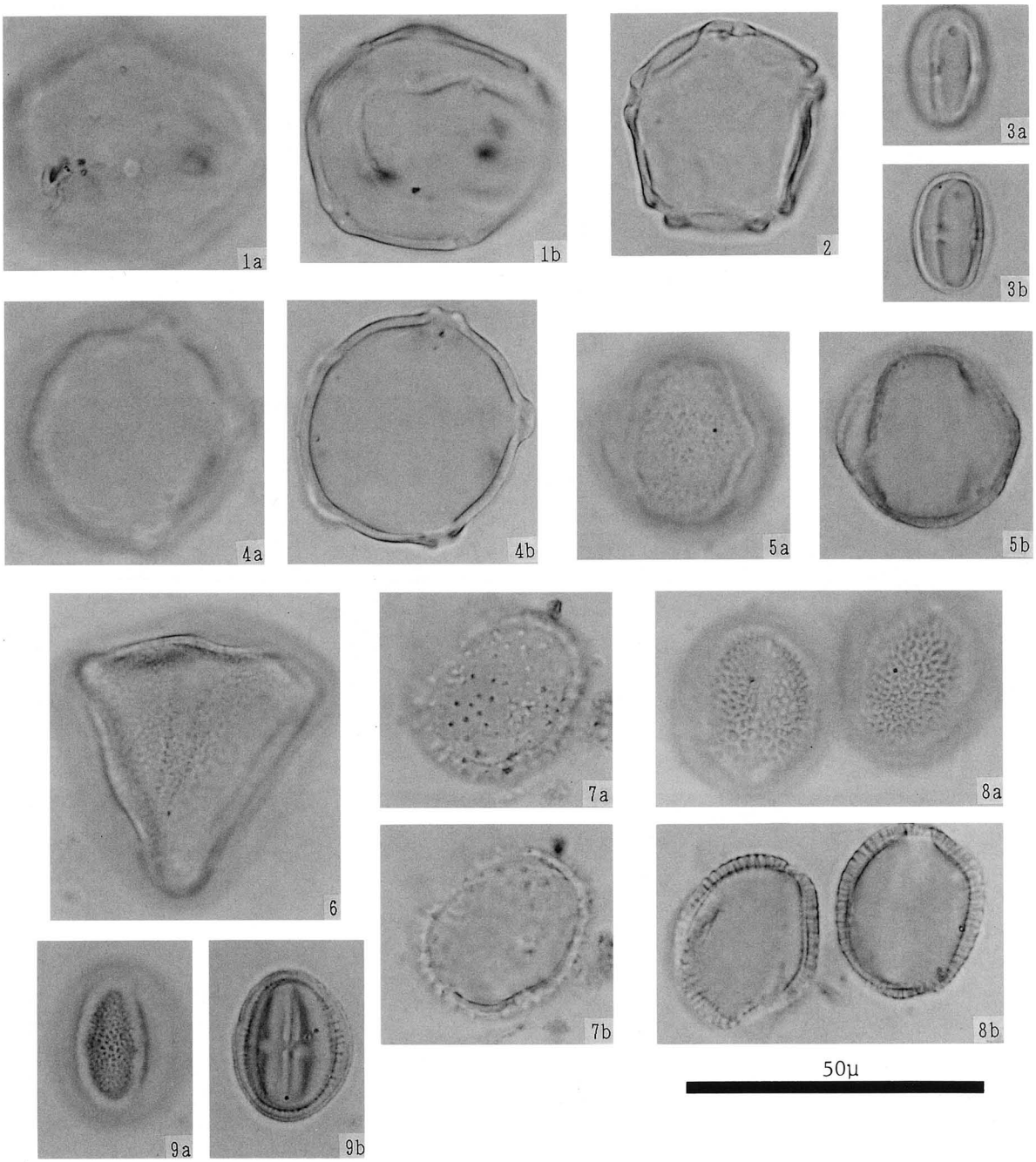


南壁試料番号10の砂粒

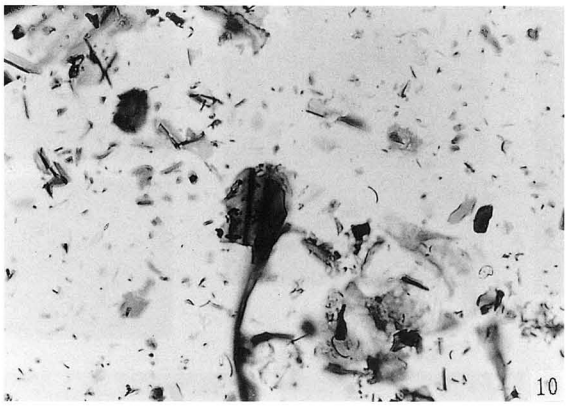


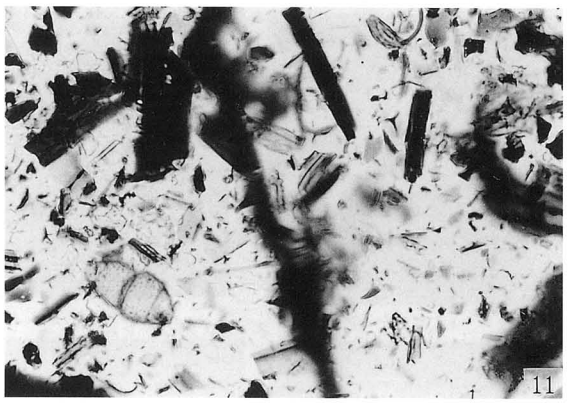
南壁試料番号14の砂粒

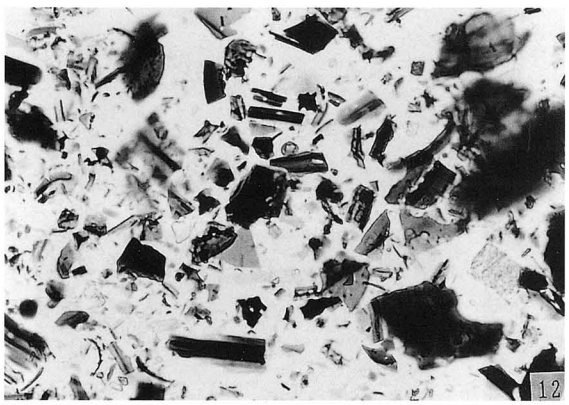

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
10 μm

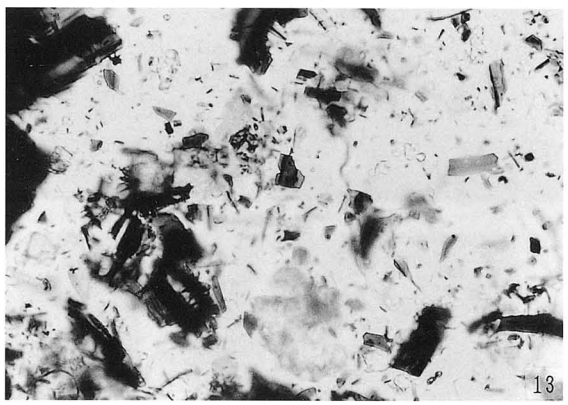


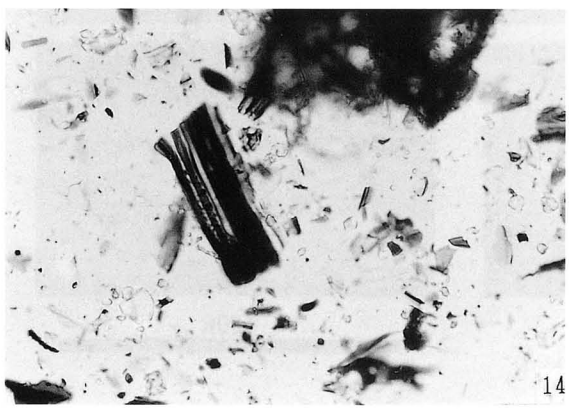
1．クルミ属（北壁；試料番号3I－2）
2．ハンノキ属（北壁；試料番号3I－2）
3．クリ属（南壁；試料番号Ⅰ）
4．クマシデ属―アサダ属（南壁；試料番号Ⅰ）
5．コナラ亜属（北壁；試料番号3I－2）
6．カヤツリグサ科（南壁；試料番号Ⅰ）
7．オモダカ属（南壁；試料番号Ⅰ）
8．アブラナ科（南壁；試料番号Ⅰ）
9．ヨモギ属（南壁；試料番号Ⅰ）

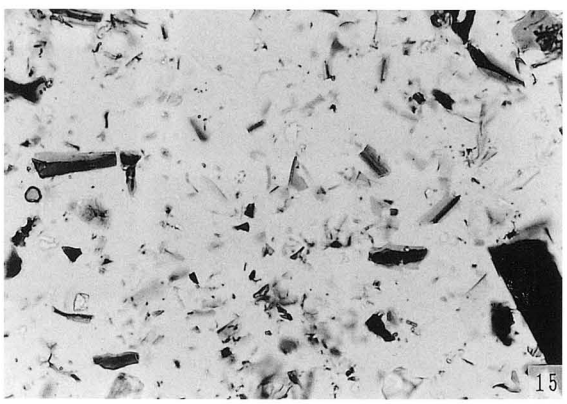






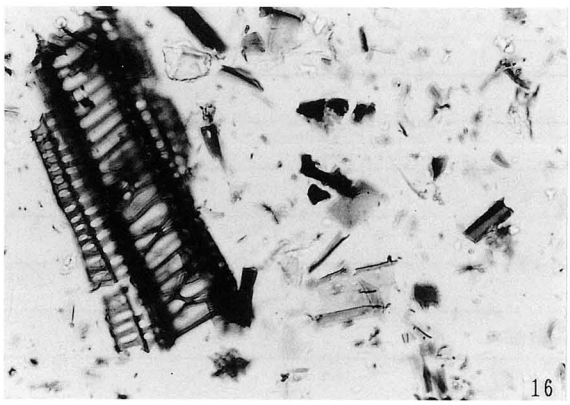


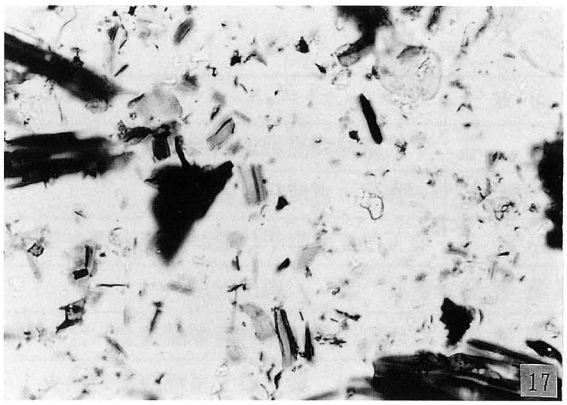


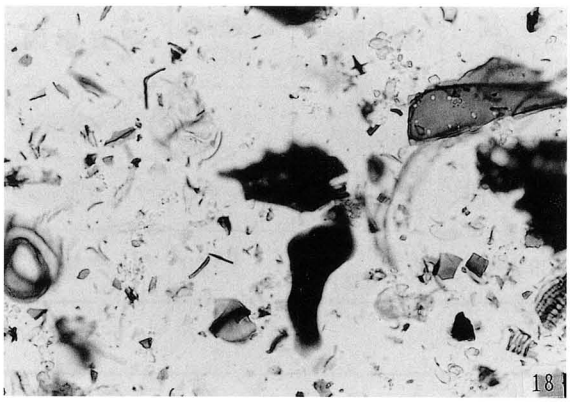


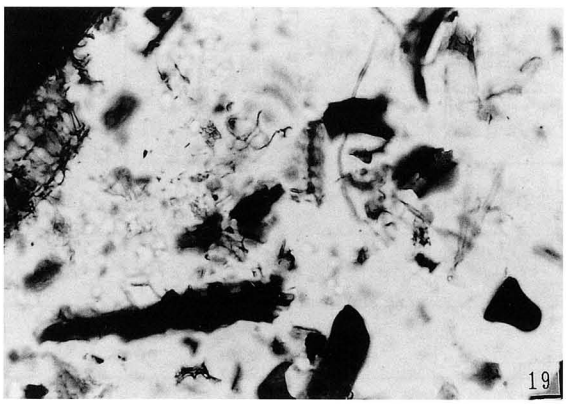
100μ

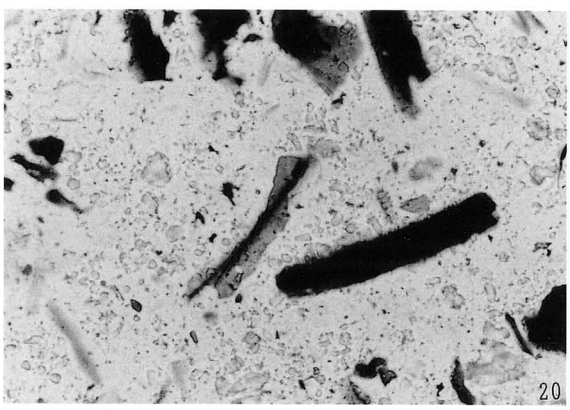
10. 南壁；試料番号3　11. 南壁；試料番号6
12. 南壁；試料番号7　13. 南壁；試料番号8
14. 南壁；試料番号9　15. 南壁；試料番号10











100μ

16. 南壁；試料番号11　17. 南壁；試料番号12
18. 南壁；試料番号14　19. 北壁；試料番号27
20. 南壁；試料番号29

報告書抄録

フリガナ	センダイイセキグンハックツチョウサホウコクショ		
書名	千代遺跡群発掘調査報告書		
副書名	—弥生・古墳時代編—		
シリーズ	埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書	巻次	2
編著者名	新井　端　　森田安彦		
編集機関	江南町千代遺跡群発掘調査会・江南町教育委員会		
所在地	〒360-01　埼玉県大里郡江南町中央１—１		
発行日	1998（平成10）年３月20日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ウバガサワ 姥ヶ沢遺跡	コウナンマチセンダイ 江南町千代	11065	01	36°7′30″	139°18′50″	19900604～ 19930610	23,800	ゴルフ場造成
フジヤマ 富士山遺跡	コウナンマチセンダイ 江南町千代	11065	03	36°7′26″	139°19′15″	19891018～ 19900205	56,100	ゴルフ場造成
ゴンゲンザカ 権現坂埴輪窯跡群	コウナンマチセンダイ 江南町千代	11065	08	36°7′20″	139°19′15″	19890830～ 19910321	3,600	ゴルフ場造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姥ヶ沢遺跡	集落跡 埴輪窯	弥生　後期 古墳 古墳	住居跡７　土坑25 住居跡15 窯跡８	土器・石器 土器・石器 埴輪・石製模造品	 県内最古
富士山遺跡	集落跡	弥生　後期 古墳	住居跡７　土坑17 住居跡２	土器・石器 土器・石器	
権現坂埴輪窯跡群	集落跡 埴輪窯	古墳 古墳	住居跡２ 窯跡	土器・石器・埴輪 埴輪	工房跡 保存

埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書２

千代遺跡群発掘調査報告書

―弥生・古墳時代編―

平成10年３月25日　発行

発行　江南町千代遺跡群発掘調査会
江南町教育委員会
〒360-0192　埼玉県大里郡江南町中央１－１
印刷　朝日印刷工業株式会社